

目次

第二十回記念号に寄せて……………	古田島洋介	1
三字句・四字句への返り点——〈附説〉『論語』陽貨「三年之愛」文の訓読について……………	古田島洋介	3
僧侶の恋歌（3）勅撰集編（下・1）題詠のもたらししたもの（二）——顕密僧と野僧（歌僧）の詠作から……………	前田 雅之	15
藤井懶斎年譜稿（五）——元禄十一から宝永六年まで……………	勝又 基	41
伊東颯々宛城戸千楯書簡三十八通——翻刻と解題……………	青山 英正	57
撰関期の立后関係記事——『小右記』を中心とする古記録部類作成へ向けて……………	三橋 正	99
翻訳哲学研究のための資料——日本の哲学者による翻訳論……………	上原麻有子	159
能〈千手 重衣之舞〉の演出・再構成……………	田村 良平	171
歌川国芳における瞳の白点表現——『東西海陸紀行』摂取以前を考える……………	山本 陽子	179
第十回〜第十九回 目次……………		195
ペーター・ハントケは何処に向かって帰郷するのか？ ——ハントケ文学の転換点としての『ゆるやかな帰郷』に関する考察……………	服部 裕	296（15）
レヴィナスにおけるポスト・ヘーゲル的思考——コジエーヴとの対照を手がかりに……………	木元 麻里	282（29）
カミュー——若きクロード・モネを支えた女性……………	丸山 正義	270（41）
タラウド語のアスペクト体系と結果相・継続相を表す接頭辞 <i>U-</i> が付加した動詞……………	内海 敦子	250（61）
ノルウェー語 Sandnes（サンネス）方言のアクセント——アクセント抽出の理論と実践……………	三村 竜之	234（77）
研究成果及び活動一覧（平成二十三年一月〜十二月）		

第二十回記念号に寄せて

古田島洋介

本誌も節目の第二十号を迎へるに至つた。第一〇十八号は「青梅校」日本文化学部言語文化学科として、第十九、二十号は「日野校」人文学部日本文化学科としての発刊である。平成五年（一九九三）三月刊行の第一号より足かけ二十年、謂はば成人の域に達したわけだ。毎年度末一回の刊行を順調にこなしてきたことを、まづは関係各位とともに喜びたい。

第一号から健筆を揮つた佐佐木茂美先生・島田良二先生・田中敏先生・和田正美先生はすでに定年を迎へ、常に自ら範となつて学術研究にいそしむ雰囲気学科に醸成した井上英明先生・小堀桂一郎先生も勇退した。本誌への寄稿こそかなはなかつたものの、第一線の翻訳家として学科の趣旨を体現してゐた観のある矢野浩三郎先生の姿も今はない。

その間、新たに柴田雅生・田村良平、次いで服部裕・三橋正が加はり、近年は上原麻有子・勝又基をはじめとして、前田雅之・青山英正・内海敦子といふ新たな面々も学科教員に名を列ね、旧に変はらず充実した誌面を提供できてゐることは慶賀に勝へぬ。最年少の教員として第一号から数年にわたり編集委員を務めた私が今や学科で最古参の身になつてしまつたのだから、二十年の時の流れは悔りがたいものである。

もつとも、井上・小堀両先生が率先して築いた「自らの研究を基盤として授業を行ふ」雰囲気は今なほ不変、将来にわたつても堅持すべき方

針と思ふ。昨今は大学教員も何かにつけて多忙を極め、教育の美名に隠れて研究に手を抜く向きが、あるいは手を抜かざるを得ない向きが少なくないと思ふ。しかし、研究に力を注ぐことなく行ふ大学教育とは、そもそも何ぞや。他者の研究成果を小器用に切り貼りした collage ならぬ「ごつた煮」もどきが、果たして大学において授業と称するに値するだらうか。しかも、茲に謂ふ切り貼りとは、決して比喻にとどまらず、事実そのものである虞すら無しとしない。すなはち、他人の手に成る研究書やら注釈書やらを得たり賢しとばかりに複写し、摘み食ひよろしく必要箇所を缺と糊で台紙に貼り付けて、「本日の教材、一丁上がり」。かうした教材の横行こそ、現今の大学における授業の実情ではないのか。その種の教材作成を常とする教員が学生たちの所謂「コピー」レポートを嘆いてゐるとすれば、笑ふに笑へぬ滑稽譚であらう。大学に身を置く研究者の集団が志の低い学科に成り下がつてはならない。他無し、本誌は研究を教育の基盤とする教員のための前進基地なのである。

創刊当初から、近接分野の〈一般教育〉担当教員、すなはち現在に謂ふところの〈全学共通教育〉担当教員も本誌の執筆に加はつてきた。第一号以来の目次を気ままに見渡すだけでも、日本の絵巻物の表現手法あり、フランス文学と音楽との関係あり、中国語の文法の英語化問題あり、チベット族の宗教社会事情あり、はたまた「東京裁判」問題もあれば、オーストラリアの戦争文学もあり、広く社会経済学にわたつての文明論まであるといふ具合。雑多と言へば雑多でこそあれ、本誌が種々の話柄にわたる内容を提供し得てきた理由の一は、文字どほり執筆者たちの多彩な顔ぶれにあらう。非常勤講師にも誌面が開放されてゐる紀要は、なかなか珍しい存在ではないか。

今後とも、研究成果を存分に発表できる場として本誌が継続すること

を願つて已まない。本誌への執筆を足がかりに、各教員が充実した著書を陸続と世に問はんことを希ふ。それこそが密室の営為たる授業の品質を保証せんがための紛ふ方なき説明責任なのである。

三字句・四字句への返り点

― 〈附説〉『論語』陽貨「三年之愛」文の訓読について

古田島洋介*

現行の返り点法は、レ点の用法を嚴格に規定しておきさえすれば、訓読者によるば、つきをほとんど防ぐことができる。その嚴格な規定とは、次のような内容だ。

レ点 連続した二字の上下を転倒させる。

〔付帯事項〕

i 連続した二字の上下を転倒させる場合は、必ずレ点を用い、他の返り点を用いてはならない。

ii 連続した二字の上下を転倒させる以外の場合に、レ点を用いてはならない。

一二点その他の用法がぶれる可能性は皆無と言ってよい。返り点に差異が生じる場面は、大半がレ点がらみのため、右の規定を遵守している

かぎり、だれが付けても同じ返り点になるはずだ。現行の返り点法は、ほぼ機械的な処理が可能なのである。

ただし、例の連続符号が現れると、返り点がふらつくおそれ無しとしない。連続符号は返り点の補助符号とはいえ、下から上に返る機能を持つ返り点に、上から下へとつなげる機能を持つ連続符号がからむと、つい返り点を付ける手もとが狂いやすいからだ。右に「ほぼ機械的な」と及び腰に記したのは、そのためである。

連続符号がらみとなれば、二字句への返り点でも面倒が起こりうる。

・輕「蔑臣下」(臣下を輕蔑す)

「下」から「輕」に返るのだから、一二点の位置は動かない。もっとも、一二点を打っただけでは、「輕」と「蔑」が分断されてしまうので、「輕蔑」を熟語として読むとなると、右のように連続符号を付けるしかないわけだ。単に二字句に返すだけであれば、原則そのままで解決が利く。

問題が起こるのは、連続符号を付けた二字句から、さらに上に返る場合である。

・患「所以立」(立つ所以を患ふ)

一点「立」から二点「所」に返り、連続符号で「以」に下りて「所以」と読む。そして、さらに「以」から上方の「患」に返るのであるから、「患」と「以」が連続した二字でない以上、「患」には三点で進むことになる。原則どおり事に運べば、右のような返り点になるはず

だ。

ところが、殊に歴史学・古文学の方面では、現に左のような返り点も行われている。

・患^ッ所^ッ以^ッ立^ッ（同右）

連読符号で結んだ「所以」を一字のごとく見なし、レ点で「患」に返っている。こうした返り点は、レ点の用法に例外を生じることになるため、甚だ好ましく印象だ。レ点の用法を「連続した二字の上下を転倒させる」と規定するかぎり、右のレ点では「所」から「患」に返すことになり、「所以」の「以」から「患」には返れないはずだからである。なぜレ点の用法くらい統一できないのか。遺憾としか言いようがないが、訓点中の訓点たる返り点の不統一すら問題視されぬほど漢文教育が衰退しているのが実情なのだろう。

もっとも、この種の問題とて、元はと言えば、返り点に連読符号がからまることから生じる現象にはかならない。そこで、本稿では、さらに字数が増えた場合、すなわち三字句・四字句に返して連読符号を付ける場面について考察を試みることにする。もし三字句・四字句に返り、さらに上に返すさいの合理的な措置が確定できれば、右のような二字句から上に返る場合についても、改めて何らかの統一方針が見出だせるだろうとの算段だ。理屈のうえでは五字句・六字句……もあり得るはずだが、未だ実例を目にしていない。

一 三字句への返り読み

手始めとして、単に三字句に返すだけの場合について返り点を確認しておこう。

・今臣生十二歳於茲一矣（今臣生まれて茲に十二歳なり）

＊『戦国策』秦五

・蓋三百一十年于此一矣（蓋し此に三百年なり）

＊『宋』蘇軾「潮州韓文公廟碑」

いずれも数詞の三字句に返る例である。「茲」から「十」へ、また「此」から「三」へ返る以上、それぞれ一二点の位置は不動だ。連読符号を二つ連用するのも、三字から成る数詞を読むには最も穏当な措置だろう。厳密には二つの数詞とも「十二+歳」「三百+年」すなわち「〇〇+〇」の語構成であるから、その切れめを重んじれば、次のような返り点も打てなくはないが。

・今臣生十二歳於茲一矣

・蓋三百一十年于此一矣

どちらの三点とも、間が抜けたような空振りの印象を否めまい。好んで付ける類の返り点でないことはたしかであろう。さらに例を挙げれば――

・奴^ニ虜^ニ使之^ニ（之を奴虜使す） ＊『史記』項羽本紀

やはり一二点の位置は変えようがない。ただし、これは、名詞「奴

「虜」が副詞に転用されて動詞「使」に載り、全体として動詞になった三字句であるため、「奴虜」に送り仮名「トシテ」または「ノゴトク」を付け、左のように訓読することも可能である。

・奴虜使^レ之^{（奴虜として之を使ふ／奴虜のごとく之を使ふ）}

こうした訓読が許される以上、「奴虜使」が「奴虜＋使」の構成であることは明白であるから、そのまま切らずに三字句として扱うさい、次のような返り点を打つ可能性もあり得るだろう。前掲二例と同じく、三点が何やら間の抜けた印象を与えることに変わりはないけれども。

・奴^三虜使^三之^{（之を奴虜使す）}

まったく同じ事情が「奴僕視之」や「児童視之」にも当てはまる。いずれも副詞に転用された名詞「奴僕」「児童」が、動詞「視」に冠せられているからだ。単なる確認にすぎないが、右と同一の操作を加えてみれば――

・奴^三僕視^三之^{（之を奴僕視す）}

*〔江戸〕頼山陽『日本外史』卷一「源氏前記」平氏

↓奴僕視^レ之^{（奴僕として之を視る／奴僕のごとく之を視る）}

↓奴^三僕視^三之^{（之を奴僕視す）}

・児^三童視^三之^{（之を児童視す）}

*〔江戸〕頼山陽『日本外史』卷二十二「徳川氏正記」徳川氏五

↓児童視^レ之^{（児童として之を視る／児童のごとく之を視る）}

↓児^三童視^三之^{（之を児童視す）}

同様に、「白眼視人」（人を白眼視す）についても、「白眼視人」（白眼にして人を視る／白眼もて人を視る）あるいは「白眼視三人」（人を白眼視す）と変奏が利きそうだが、未だ漢籍中に「白眼視」の用例を見ない。現代中国語ならば「白眼看人」と言うところだが、さすがに「白眼看」を音読みして「人を白眼看す」とサ変動詞扱いする気にはなれないだろう。日本語として、いかにも不自然な響きだからである。右によって確認できるように、単に三字句に返るだけであれば、連続符号^{ハイフン}を連用して当該三字を音読みしておくのが最も自然である。語構成を重んじて三点まで用いる方法を支持する向きは皆無であろう。では、三字句に返った後、さらに上に返る場合はどうか。

・越雖^三蛮夷、其先豈嘗有^三大功^三徳於民哉、何其久也。

*『史記』東夷列伝

（越は蛮夷と雖も、其の先豈に嘗て民に大功徳有りしか、何ぞ其れ久しきや）

「豈」が感嘆を表す一文である。「民」から「大」への一二点は動かない。そして、単に三字句へ返った場合と同じく、連続符号^{ハイフン}を連用して「大功徳」三字をつなぎ、そこから三点で「有」に返している。これはこれで穏当な返り点だろう。

もっとも、「大功徳」は、だれが見ても「大＋功徳」（大いなる功徳）すなわち「〇＋〇〇」という語構成だ。それは、類似した表現を持つ「有^三功^三徳於民^三者、加^レ地進^レ律」（民に功徳有る者は、地を加へ律を進

む／『礼記』王制）を一瞥しても明らかだろう。となれば、次のような
返り点も打てるはずである。

・其先豈嘗有^四大^二功^三徳於民^一哉、何其久也。

単に三字句に返す場合は、三点がいかにも虚しく映ったが、ここでの
三点は、返しどころの四点が上方にあるだけ虚しさが減じるだろう。似
た事情が次の例にも当てはまる。

・有^三楚^二大夫於此^一（此に楚の大夫有り） *『孟子』滕文公下
・有^四楚^二大夫於此^一（同右）

だれの目にも、連読符号を連用した前者のほうが読みやすいだろう。

けれども、「楚+大夫」（楚の大夫）すなわち「○+○」という語構成
を素直に反映させたと考えれば、後者の返り点にもそれなりの合理性が
あるわけだ。後者の三点も、落着き先の四点があるだけに、空振りの
印象は与えないはずだ。

何やら屁理屈をこねているように見えるかもしれないが、決して徒ら
に事を複雑にしているわけではない。現に、次のような例になると、四
点まで用いる方式もなかなか悔りがたいからである。

・夫庸知^四其年之先^三後^二生於吾^一乎 *〔唐〕韓愈「師説」
（夫れ庸ぞ其の年の吾より先後生なるを知らんや）

たしかに、取り敢えずは、こうした連読符号の連用方式こそが穏当だ

ろう。けれども、この訓読が意味の表出において優れているかとなると、
甚だ眉唾物ではなからうか。なぜなら、だれが読んでも「其の年の吾よ
り先後生なる」が日本語として意味不明だからである。そもそも「先後
生」などという三字熟語は存在しない。もし一見して理解できたとすれ
ば、それは、まさにこの有名な例文によって、どこぞで解釈を学んだこ
とがあるからだろう。「先後生」とは、「先生」と「後生」を合成かつ縮
約した表現で、「或先生或後生」（或いは先に生まれ或いは後に生まるる
を）と言うに等しい。要するに（自分よりも）年上なのか年下なのか
との意味である。これを枉がりなりにも反映させれば、実際、次のよう
に訓読することも可能だろう。

・夫庸知^四其年之先^三後生^二於吾^一乎
（夫れ庸ぞ其の年の吾に先後して生まるることを知らんや）

これは往時の訓読で、返り点も右のようになっている。⁽³⁾「先後生」を
「先後して生まる」すなわち「先後+生」と切り、「先後」を音読み、
「生」を訓読みした以上、「先後+生」とつなげて読む気になれなかった
のだろう。これはこれで一つの訓読である。そして、こうした訓読をも
許容するためには、三字句を切って三四点を用いる方式をも認めるしか
あるまい。「とにかく三字句は連読符号を連用して機械的につないでし
まえばよい」では事がすまないわけだ。

以上、三字句に返るさいの方針は、暫く左のごとくまとめられるだろ
う。

①三字句に返るだけの場合は、単に連読符号を連用して三字をつな

げればよい。

②三字句に返り、さらに上へと返す場合は、連読符号^{ハイフン}を連用して三字をつなげてよく、「○○+○」または「○+○○」の語構成に従って切り、「○○」および「○」それぞれに返り点を付けてもよい。

二 四字句への返り読み

四字句に返すのは、かえって三字句よりも例が多いかと思える。まずは語構成を重んじた方式の返り点を以て用例を挙げてみよう。三字句とは異なり、四字句の場合は、四字を語構成に従って二字ずつに切り、それぞれに返り点を打つのが一般的かと思われる。五つだけ例を挙げておく。

・三^{これ}令五^{さんれいご}申^{しん}之^し *『史記』孫子呉起列伝⁽⁴⁾
(之に三令五申す)

・其畏^そ惡^{しん}敵^み尊^を秦^{げんそん}一也明矣 *『戦国策』魏二
(其の秦を畏惡敵尊するや明らかなり)

・重^{これ}賞^{ぢゆうしやう}尊^{そん}爵^{しやく}之^し *『六韜』文韜「上賢」
(之を重賞尊爵す)

・或掣^{これ}掣^{しやく}洩^{しやく}洩^{しやく}於^に裸^{はだか}人^{じん}之^の国^{こく}、或汎^{ある}汎^{せいせい}愁^{えいし}愁^{えいし}於^に黑^{くろ}齒^し之^の邦^{はう}

*〔晋〕木華「海賦」

(或いは裸人の国に掣掣洩洩し、或いは黒齒の邦に汎汎愁愁す)

・鱷^{ある}魚^{ぎょ}之^の涵^{かん}洩^{えんしやく}育^{いく}於^に此^{こゝ}、亦固^{また}其^{その}所^{ところ} *〔唐〕韓愈「鰐魚文」

(鱷魚の此に涵洩卵育するも、亦た固より其の所なり)

もっとも、前述のごとく、時として異なった返り点法を用いる歴史学・古文書学の方面では、やはり異なる方式が一般のようだ。左のごとき返り点のほうが目につくのである。

・收^{これ}藏^{しゆうざう}愛^{あい}惜^{せき}之^し (之を收藏愛惜す)
・区^わ処^{じん}分^く置^し倭^わ人^{じん} (倭人を区処分置す)⁽⁵⁾

この方式に則れば、右掲の五例も次のように返り点を打つことになる。いずれも訓読に変更は生じず、書き下し文も完全に一致するが。

・三^{これ}令^{さん}五^ご申^{しん}之^し一
・其畏^そ惡^{しん}敵^み尊^を秦^{げんそん}一也明矣
・重^{これ}賞^{ぢゆうしやう}尊^{そん}爵^{しやく}之^し一
・或掣^{これ}掣^{しやく}洩^{しやく}洩^{しやく}於^に裸^{はだか}人^{じん}之^の国^{こく}、或汎^{ある}汎^{せいせい}愁^{えいし}愁^{えいし}於^に黑^{くろ}齒^し之^の邦^{はう}一
・鱷^{ある}魚^{ぎょ}之^の涵^{かん}洩^{えんしやく}育^{いく}於^に此^{こゝ}、亦固^{また}其^{その}所^{ところ}一

四字句の返り点は、たとえ二字ずつに切っても、二字ゆえに音読みしてしまうのが通例であり、訓読みを交えることはない。したがって、語構成を重んじて二字ずつに切り、それぞれに返り点を付けるか、または連読符号を三つ連用して四字すべてをつなげてしまうかのいずれかである。二種の方式があることだけを確認しておけば十分だろう。

とはいえ、こうした了解がぐらつき、現に珍妙な返り点が飛び出す場面もあるので、ここで指摘しておこう。決して珍本と称すべき書籍に見られる現象ではない。何と『論語』の一節において、まったく常識を踏

みにじるような返り点が出回っているのだ。それは左の一文である。

・有三年之愛於其父母乎 *『論語』陽貨

(其の父母に三年の愛有るか)

これも四字句に返る例の一たるを失わない。「其父母」から四字句「三年之愛」に返り、さらに上の「有」へと返す例である。字を逐えば、「母」に一点、「三」に二点を打ち、三つの連続符号で「三年之愛」四字を連結、最後に三点で「有」に返すことに疑問の余地はないはずだ。

・有三年之愛於其父母乎

もしぶれが生じるとすれば、「三年之愛」に連続符号を付ける場面だけに違いない。四字ゆえ二字ずつに切りたいところだが、下二字「之愛」が熟語と言いたいので、「三年之愛」と返り点を付けてみて、さすがに不自然な印象である。けれども、「三年＋之＋愛」と切ると、語構成にこそ忠実なもの、ますます返り点が複雑化して「三年之愛」となってしまう、これまた甚だしい違和感を拭えない。そこで、やはり連続符号を連用し、結局「三年之愛」で妥協しておくのが穏当な態度だろう。

ところが、である。巷間の『論語』をのぞいてみると、まったく基本をわきまえない返り点が横行しているのだ。たとえば、次のような返り点である(例文の右肩に付けた*は、現行の返り点法に鑑みて、誤った返り点を意味する)。

・*有三年之愛於其父母乎⁽⁶⁾

(其の父母に三年の愛有るか)

「母」に一点を付けておきながら、次に読んでいる「三」に二点を打たず、なんと連続符号で連結した「三年之愛」の「愛」に二点を添えている。この伝でゆけば、例の「吾日に吾が身を三省す」(『論語』学而)の返り点も「*吾日三省吾身」となりそうだが、これについては正しく「吾日三省吾身」と付けているのだから、腑に落ちぬ話だ。注解者が自身で連続符号を連用した四字句「三年之愛」に自ら驚き、混乱を来した結果、つい二点を打つときに手もとが狂ったと思えない。

また、他の一書も「その父母に三年の愛有るか?」と書き下しながら、なぜか左のように返り点を打っている。

・*有三年之愛於其父母乎⁽⁷⁾

この返り点に従って「その父母に三年の愛有るか?」と訓読できるとすれば、神業ならぬ離れ業であろう。憶測するに、当初は「三年の愛をその父母に有するか?」とでも書き下し、それに符合する返り点を付けておきながら、後日、書き下し文を「その父母に三年の愛有るか?」に変更、ただし返り点は改めるのを失念した、という仕儀なのであろう。

もっとも、右の二書は、誤りがわかりやすいという点で、まだしもである。なにしろ、少し時をさかのぼると、書き下し文も通釈もないまま、単に次のような返り点を示しただけの書物さえあるのだから。

・*有^{四三}三年之愛^三於其父母^一乎⁽⁸⁾

正直なところ、どのように訓読しているのか、私には理解できない。律儀に返り点を逐えば、「之^{これ}其の父母を愛すること三年有りや」とでも読むしかないだろう。一瞬もっともらしく響くかもしれないが、文法上は無理としか言いようのない読み方だ。たぶん、二点と三点が誤植ゆえに入れ替わっており、本来は「有^{四三}三年之^一愛^三於其父母^一乎」すなわち「其^その父母^{ふぼ}に三年^{さんねん}の愛^{あい}有^あるか」と訓読していいのではないかと想像するが、この想像が正鵠を射ているとすれば、吟味すべきは「愛」に三点を付ける必要があるのかという問題だけとなる。もちろん、現行の返り点法によれば、「愛」の三点は不要との結論に達するのであるが。

いずれにせよ、こうした返り点の誤謬が漢籍の代表中の代表とも称すべき『論語』に見られるのだから、まことに暗澹たる心持ちである。せめて各種の文庫版『論語』が正しい返り点を提供してくれればと思うのだが、文庫版は文庫ゆえの紙面の制約があるためか、訓点すなわち返り点や送り仮名を省略しているのが常態だ。もし当該の一文について返り点に関する疑問が生じたとしても、ただちに何らかの書物で解決できるかどうか。まさに現今の漢文学習の衰弱を象徴するようなお寒い話である。

三 まとめ

現行の返り点法は、おそらく漢文の教員でさえ大半が目にしたことのない明治四十五年（一九一二）三月二十九日付『官報』第八六三〇号所載の文部省「漢文教教授ニ関スル調査報告⁽⁹⁾」に基づき、あとは適宜に訓読

者が工夫することになっている。今を去ること一百年となれば、連読符号^{ハイフン}など初心者^{ヘイフン}のたしなみと言わんばかりに省略、当該報告書の〔返点法〕第三が提供する返り点計十例のうち、例文（七）（九）（十）は三字句・四字句への返り点を次のように示している。

- ・奴^二僕^一視^レ之^一
- ・欲^四取^三捨^二斟^一酌^三之^二
- ・未^五嘗^四不^三四^二嘆^一息^二痛^一恨^レ於^二桓^一靈^二也

第一例は、すでに三字句の例として採り上げた。それぞれ連読符号^{ハイフン}を付けて書き下し文を添えれば、左のごとくになる。

- ・奴^二僕^一視^レ之^一（之^{これ}を奴僕視^{どほくし}す）
- ・欲^四取^三捨^二斟^一酌^三之^二（之^{これ}を取捨斟酌^{しめしやんしやく}せんと欲^{ほつ}す）
- ・未^五嘗^四不^三四^二嘆^一息^二痛^一恨^レ於^二桓^一靈^二也
- （未^{いま}だ嘗^{かつ}て桓^{くわん}靈^{れい}に歎息痛恨^{たんそくつうこん}せずんばあらざるなり）

要するに、三字句については「単に連読符号^{ハイフン}を連用して三字をつなげ、四字句については「二字ずつ熟語に分ち、それぞれに連読符号^{ハイフン}を付けよ」との指示である。いわゆる『諸橋大漢和』すなわち『大漢和辞典』（大修館書店）や『広漢和辞典』（同）をはじめ、諸々の辞典・書籍が原則としてこれに従っている。けれども、改めて考えてみれば、右の二種の指示は互いに異なった原理に基づいているのだ。

三字句に関する指示の原理は、いわば便宜主義と呼べるだろう。とにかく三字句を読み下ることさえできれば事足れり、片や（○○＋○）の

語構成による「奴僕＋視」あるいは「十二＋歳」「三百＋年」「奴虜＋使」「兒童＋視」「先後＋生」にせよ、片や〈○＋○〉の語構成による「大＋功德」「楚＋大夫」にせよ、すべて連読符号でつなげてしまえばよい、というわけである。

それに対して、四字句に関する指示の原理は、いわば語構成主義と呼べるだろう。繰り返すまでもなく、四字句を二つの熟語に分けて〈○○＋○○〉の語構成とし、「取捨＋斟酌」「嘆息＋痛恨」または「三令＋五申」「畏惡＋嚴尊」「掣掣＋洩洩」「重賞＋尊爵」「涵淹＋卵育」のように解するわけだ。

そして、三字句・四字句にまつわる問題は、すべて右の二つの原理間の矛盾が引き起こしていると考えてよいだろう。

「有_三楚_二大_一夫_三於_二此_一」(此に楚の大夫有り)は便宜主義による返り点、
 「有_四楚_二大_一夫_三於_二此_一」(同)は語構成主義による返り点だ。「…先後_二生_一於_二吾_一乎」(吾より先後生なるを…)と「…先後_二生_一於_二吾_一乎」(…吾に先後して生まるることを)についても事の本質に違いはなく、前者は便宜主義、後者は語構成主義に基づく返り点である。

また、歴史学・古文書学などが採用している「収_二蔵_一愛_二惜_一之_二」(之を収蔵愛惜す)「区_二処_一分_二置_一倭人_二」(倭人を区処分置す)などは、三字句についての便宜主義を四字句にも適用しただけの方式にすぎない。

『論語』陽貨「有_三三_二年_一之_二愛_一於_二其_一父母_三乎」(其の父母に三年の愛有るか)で諸書の返り点がよろけたのも、熟語を頼みとする語構成主義が「三年之愛」には今一つ通じぬためだろう。とりわけ興味深いのは、前掲の服部宇之吉氏の手に成る「有_四三_二年_一之_二愛_一於_二其_一父母_三乎」という返り点だ。何を隠そう、服部氏は「漢文教習ニ関スル調査報告」における調査員の代表者なのである。二つの熟語に分かつ語構成主義が「三年之

愛」に通用しなかったことを自ら告白しているようなものだろう。こうした『論語』の例すら念頭に置かぬまま報告に及んだとしか言いようがあるまい。

もっとも、ここで服部氏を難じるつもりは毫もない。難ずべきは、それを百年にもわたって何も考えることなく放置してきた漢文教育関係者の怠慢である。むしろ、私もその例外ではない。それどころか、最重要指名手配犯の汚名すら免れないだろう。「〈○○○○〉」と付けるのがふつうですが、〈○○○○〉とつなげてしまう人もいます」だの、「最終的には返り点も慣習に従って打つしかないのです」だのと、よくまあ、曖昧模糊たる説明を臆面もなく繰り返してきたものだ。あの世での刑罰に備えての危機管理、みごと血の池地獄を渡り切れるよう、水泳の練習でもしているほうがましかもしれない。

では、どうするか。ここまでの諸例からわかるように、三字句は便宜主義でも語構成主義でも返り点が打てる。ところが、四字句については、便宜主義ならば問題は生じないものの、語構成主義では通用しづらい場合(『論語』陽貨「三年之愛」)もある。そもそも、二点の下に三点が位置するという例外措置も、避けられるならば避けておくに若くは莫し。となれば、すべてについて通用するのが便宜主義であることは明らかだ。三字句についても、語構成主義による返り点に比べ、便宜主義に基づく返り点のほうが簡明で読みやすいのは、だれしも首肯するところだろう。万一、五字句・六字句……に返って連読符号を付ける必要が生じても、語構成に影響されることなく、簡便に処理できるのである。

もっとも、便宜主義と称すると、いかにも安直な印象に響き、どうせ読みの順序さえわかればよいのだろうともなりかねまい。これは返り点にとって甚だ危険である。極端な場合、次のような返り点を排斥できな

い事態すら招きかねないからだ。

- ・夫庸知^五其年之先^二後^三生^四於吾^一乎
- ・夫庸知^下其年之先^二後^三生^四於吾^一乎

＊〔唐〕韓愈「師説」

これでも「夫れ庸ぞ其の年の吾より先後生なるを知らんや」と読めるではないか、と聞き直る向きが出てこぬとも限るまい。

したがって、露骨に便宜主義と称することは慎み、語弊を抑えるべく、仮に語順主義とでも呼んでおくのが穏当だろう。返り点を教える現場では、三字句・四字句に返って連読符号を付ける場合に限り、この語順主義という語を用いることとし、語構成主義に対峙する方式として位置付ければよい。その結果、『大漢和辞典』（大修館書店）や『広漢和辞典』（同）など、日本を代表する漢和辞典の返り点にも修正を迫ることになるが、さしたる問題にはならぬ。教室で「かつて唱えられた語構成主義による返り点も行われている」と説明し、いくつか具体例を示せばすむことである。むろん、きれいに二字ずつ熟語に分かてるときにだけ語構成主義に従う方法もある得るが、それこそ便宜主義ならぬ御都合主義に陥ってしまうだろう。

想えば、返り点が訓読の順序を示す符号である以上、たとえ補助符号たる連読符号がからまったとしても、語順主義こそが返り点の本来の機能に副^そったものだ。語構成の問題は解釈の場面に譲ることとし、訓読の段階においては、簡潔な返り点および連読符号を以て読み順を明確に指示することこそ肝要かと愚考する。

〈附説〉『論語』陽貨「三年之愛」文の訓読について

本論に記した『論語』陽貨「有三年之愛於其父母乎」の訓読に関して補足を加えておく。この一文の訓読は、訓読者によって種々の揺れが生じ、返り点の問題のみならず、訓読そのものの問題としても、甚だ興味深い現象だからである。私見による「複数訓読共存原理」⁽¹⁰⁾にとって、文字どおり恰好の実例たるを失わない。

当該の字句は、『論語』陽貨も篇末に近く、孔子が弟子の宰予の「不仁」を難じた一節のなかに見える。宰予が「服喪の期間は三年が通例だが、一年で十分ではないか。自分は、一年も過ぎれば、贅沢な衣食をたしなんでも痛痒を感じない」と唱えたのに対し、あくまで三年の服喪を主張する孔子が「子は生まれてから三年して、やっと父母の懐^{ふところ}を離れるではないか。それをも踏まえて、服喪は三年と決まっているのだ」と言い、そして問題の一句を口にするのである。正確には、呼びかけの「予也」二字を冠した「予也有三年之愛於其父母乎」の全十二字。実のところ、この一句には校訂上の問題があり、『史記』仲尼弟子列伝（宰予）条は当該十二字を記さず、『漢石經』では句末の「乎」字がない。ただし、ここでは訓読の問題だけに焦点を絞るべく、本文校訂にはかかずらわねこととしよう。古来の注釈を並べ立てることも放棄する。

まずは現代の英訳によって二種の解釈を確認しておく。

- ・ Was Yü not given three years' love by his parents?⁽¹¹⁾
- ・ Does Yu have three years' love for his parents?⁽¹²⁾

一見して理解できるように、「三年之愛」three years' loveに接続する前置詞がbyとなるかtoとなるかで解釈が分かれている。要するに、〈宰予も両親から「三年之愛」を受けたのではないか〉との解釈と、〈宰予は両親に対して「三年之愛」を抱いているのか〉との解釈だ。「愛」の主体と客体が入れ替わるわけである。

こうした解釈の相違があることを踏まえて、いくつか注解を参照してみよう。本文に既出の訓読も重複を厭わずに掲げる。今、本文に同じく冒頭の「予也」二字は省略、返り点は必要に応じて語順主義による連読符号^{フン}連用方式に改め、また、要らざる目移りを防ぐべく、書き下し文の字遣いも恣意に統一してしまう。問題の一句の訓読は二つの型に分けられるようだ。

第一は、語順のままに「三年之愛」↓「父母」と読み下る型である。

・有^三三年之愛^三於其父母^二乎

(三年の愛を其の父母に有するか)⁽¹³⁾

(三年の愛を其の父母に有らんか)⁽¹⁴⁾

訓読者によっては、「愛」を動詞に訓じて「父母」から返り読みすることもある。

・有^三三年之愛^三於其父母^二乎 (三年の其の父母に愛むこと有るか)⁽¹⁵⁾

数種の現代中国語訳「對於他的父母、可也有三年的恩愛去報答嗎？」
「是不是也有三年的愛心對於他死後的父母呢？」⁽¹⁷⁾
「難道就沒有從他父母那裏得到有三年的撫愛嗎？」⁽¹⁸⁾などを見るかぎり、「愛」を動詞として理解

するのは少しく無理ではないかとの印象を拭いたいけれども。

第二は、語順を転倒して「父母」↓「三年之愛」と読みもどす型である。こちらのほうが数としては優勢のようだ。

・有^三三年^一之愛^三於其父母^二乎

(其の父母に三年の愛有るか)⁽¹⁹⁾

(其の父母に三年の愛有らんか)⁽²⁰⁾

(其の父母に三年の愛有りしか)⁽²¹⁾

「於」を置き字扱いせず、ともに訓じている訓読もある。

・有^四三^三年^一之愛^三於其父母^二乎 (其の父母に於いて三年の愛有るか)⁽²²⁾

以上、まさに「複数訓読共存原理」を立証するようなありさまだろう。「これこそ訓読という営みの持つ自由で豊かな多様性だ」と感じるか、「これだから訓読は当てにならず、徒らに煩わしいだけだ」と思うか、一つの試金石にもなりそうな景色である。

第一の型は、本文でも挙げた一句と似たような感覚の訓読であろう。ここに再掲してみれば――

・夫庸知^三其年^一之先^二後^二生^二於吾^一乎 * [唐] 韓愈「師説」

(夫れ庸ぞ其の年の吾より先後生なるを知らんや)

特に「愛」を動詞に扱って「愛む」と読む訓読は、右を「…吾に先後して生まるるを…」と訓読した感覚に近いかと思う。

第二の型は、「有_{N1}於_{N2}」構文（Nは名詞）の定石に従った訓読である。この構文は、「於」を置き字として扱い、「有_{N1}於_{N2}」の順序で訓読するのが一般だ。決して頻度の低い構文ではない。

・有_レ寵_二於_レ僖公_一（僖公に寵有り） *『左伝』莊公八年

・夫子固有_三惑_一志_二於_レ公伯寮_一（夫子固より公伯寮に惑志有り）

*『論語』憲問

・凡有_三四_二端_一於_レ我_一者（凡そ我に四端有る者） *『孟子』公孫丑上

・彌子瑕有_レ寵_二於_レ衛君_一（彌子瑕衛の君に寵有り）

*『韓非子』說難

・我有_三積_二怨_一深_一怒_二於_レ齊_一（我齊に積怨深怒有り）

*『戰国策』燕二

この構文は存在表現の一種であるため、「有」が「無」となる場合もある。

・自然無_レ心_二於_レ稟受_一（自然是稟受到心無し） *『世說新語』文学

・与_三其有_二樂_一於_レ身_一、孰_二若_レ無_レ憂_二於_レ其心_一

（其の身に樂しみ有らんよりは、其の心に憂へ無きに孰若れぞ）
*『唐』韓愈「送李愿歸盤谷序」（『唐宋八大家文読本』所収本文）

句末の「N₂」に「斯」や「此」が入るのも、この構文に目立つ例だ。

・有_三美_二玉_一於_レ斯_一（斯に美玉有り）

*『論語』子罕

・今有_三璞_二玉_一於_レ此_一（今此に璞玉有り） *『孟子』梁惠王下
・有_三楚_二大_一夫_二於_レ此_一（此に楚の大夫有り） *『孟子』滕文公下

按ずるに、問題の『論語』陽貨「有三年之愛於其父母乎」は、この「有_{N1}於_{N2}」構文の一種と見なし、第二の型のように、「父母」↓「三年之愛」と返って読んでおくのが妥当であろう。第一の型のごとく、語順のままに「三年之愛」↓「父母」と読み下すのは、訓読の慣習と齟齬を来す読み方かと考える。

注

- (1) 拙共著『漢文訓読入門』（共著者：湯城吉信、明治書院、平成二十三年）四七頁。
- (2) 以上、同右書／五〇・五二・五四頁。
- (3) 林羅山「諺解」鶴飼石斎「大成」『古文真宝後集諺解大成』（早稲田大学出版部『漢籍国字解全書』第十二巻、昭和二年）一〇六頁下。今、連続符号を補った。
- (4) 水沢利忠『史記』八／列伝一（明治書院『新釈漢文大系』88、平成二年）八七頁は「*三令五申之」（之に三令五申す）と返り点を打つが、これは現行の返り点法では認められまい。「之」に一点を付けた以上、次に読む「三」に二点を打つのは自明のことである。
- (5) 村井章介「校注」宋希環『老松堂日本行録』（岩波文庫、昭和六十二年）二二九頁「老松宋先生日本行録序」／二五九頁『世宗実録』抄・6月13日条。
- (6) 吉田賢抗『論語』（明治書院『新釈漢文大系』1、昭和三十五年／昭和六十一年「改訂」二十二年版）三九五頁。古くは、簡野道明「閩」国語漢文研究会「編」『論語新解』（明治書院、昭和十年）二八〇頁も同じ。
- (7) 藤堂明保『論語』学習研究社『中国の古典』1、昭和五十六年）書き下し文／三四二頁／（別冊）返り点付き原文／五三頁。
- (8) 服部宇之吉「校訂」『論語集説』（富山房『漢文大系』第一巻、明治四十二年／昭和四十七年（増補版））陽貨／一九頁。今、連続符号を補った。
- (9) 当該「漢文教養ニ関スル調査報告」は、簡便には漢詩・漢文教材研究会「編」『訓読百科』（昌平社『漢詩・漢文解釈講座』別巻、平成七年）四五六～四六三頁で目にすることができる。

- (10) 注(1) 所掲書／九五頁。
- (11) D. C. Lau, *Confucius The Analects*, Book XVII-21, p. 179, The Chinese University Press, 1983, Hongkong.
- (12) Chichung Huang, *The Analects of Confucius*, 17, 20, p. 171, Oxford University Press, 1997, New York, Oxford.
- (13) 渡邊末吾『標註 論語集註』(武蔵野書院 昭和四十一年) 一七二頁。
- (14) 加地伸行・宇佐美一博・湯浅邦弘『論語』(角川書店《鑑賞 中国の古典》2、昭和六十二年) 四三四頁。この一書の訓読については、注(1) に芳名が見える湯城吉信氏から御教示を辱くした。ここに記して謝意を表す。
- (15) 吉川幸次郎『論語』下(朝日新聞社《中国古典選》5、昭和五十三年) 六三頁。もと返り点ナシ。今、返り点を付け、原書のルビ「愛む」を歴史的仮名遣いに改めた。
- (16) 陳振史「註」『四書読本』(大成出版社、一九八四年、台南) 二二三頁。
- (17) 錢穆『論語新解』(巴蜀書社、一九八五年、成都) 四三四頁。
- (18) 関永礼「主編」『白話十三經』(済南出版社、一九九四年、済南) 一九三六頁。
- (19) 注(6) および(7) 所掲の三書が示す訓読である。
- (20) 金谷治「訳注」『論語』(岩波書店《岩波文庫》、昭和三十八年) 二四七頁。もと返り点ナシ。
- (21) 加地伸行「全訳注」『論語』(講談社《講談社学術文庫》、平成十六年) 四〇七頁。もと返り点ナシ。
- (22) 宮崎市定『論語の新研究』(岩波書店、昭和四十九年) 三五九頁。もと返り点ナシ。

僧侶の恋歌 (3) 勅撰集編 (下・1)

題詠のもたらしたものの(二)——顕密僧と野僧(歌僧)の詠作から——

前田雅之*

はじめに

前稿で予告したように⁽¹⁾、本稿は、僧侶の恋歌が「題詠」に限定されるようになった『新古今集』と『新統古今集』(＝十四代集)までを考察対象として、恋歌の表現分析を目的とする。だが、そこに踏み込む前に、十四代集の恋歌を詠んだ僧侶たちの問題を勅撰集のありようから改めて確認しつつ考察しなくてはいけないことを痛感している。というのも、これから種々論じていくように、十四代集というポリウムが極度に大きく、なおかつ、集ごとにも場合によっては大きな差異も見られるからである。言ってみれば、和歌表現の核をなす歌ことばに限定して、表現に特化して、それがある意味で個別具体化あるいは性急化して論じていくのは乱暴な議論になってしまいかねない危惧が強くあるということだ。よって、議論の立て方、方法としては、幾分迂遠な道程と映るけれども、

これまた僧侶の恋歌総体を明らかにするためにはやむをえない措置であること以上に、こうした七面倒な慎重な論の進め方を進めざるをえないのは、それが僧侶の恋歌を越えた大きな問題、即ち、和歌とは何か、勅撰集とは何か、さらに、僧侶が和歌を詠むこととは何か、といった「大問題」と不断に連結していると確信するからである。むろん、本稿においても、四・五章で対象とする僧侶の恋歌の表現分析を行うのであるから、一〇三章の作業と議論も、当初の目的をそれほど逸脱するものではない。

最初に、問題とするのは、中世和歌の代表とされる『新古今集』なるもののありようである。というのは他でもない、十四代集と言うか、鎌倉時代以降の勅撰集の初発は『新古今集』であり、『新古今集』がその後の勅撰集のありようを深淺両レベルで確実に規定していると考えられるからである。

一、『新古今集』における古と今——

『後拾遺集』以降、勅撰集は大きく二つの傾向をもつようになった。一つは、『後拾遺集』に顕著な当代性、あるいは『古今集』的世界と言いうる三代集にまで時代を遡らせない和歌で撰集されたタイプである。もう一つは、これから論ずる、『新古今集』のごとき、和歌の始原ともいべき古歌から当代和歌までを歴史的に俯瞰するタイプである。ここでは、後者の『新古今集』を見る。

たとえば、『新古今集』巻十一「恋歌一」の巻頭十首(九九〇～一〇〇〇)を列記してみたい。

題しらず

読人しらず

九九〇

よそにのみ見てややみなんかづらきやたかまの山の嶺のしら雲

九九一

おとにのみありとききこしみよしのの滝はけふこそ袖におちけれ

人麿

九九二

あしびきの山田もるいほにおくか火のしたこがれつつわがこふらくは

九九三

いその神ふるののわさ田のほにはいはず心のうちにこひやわたらむ

女につかはしける

在原業平朝臣

九九四

かすがののわかむらさきのすり衣しのぶのみだれかぎりしられず

中将更衣につかはしける

延喜御歌

九九五

むらさきの色に心はあらねどもふかくぞ人をおもひそめつる

題しらず

中納言兼輔

九九六

みかのはらわきてながるるいづみ河いつみきとてかこひしかるらむ

平定文家歌合

坂上是則

九九七

そのはらやふせ屋におふるははきぎのありとはみえてあはぬきみかな

人のふみつかはして侍りける返事にそへて、女につかはしける

藤原高光

九九八

としをへておもふ心のしるしにぞそらもたよりのかぜはふきける

九条右大臣のむすめにはじめてつかはしける

西宮前左大臣

九九九

とし月はわが身にそへて過ぎぬれどおもふ心のゆかずもあるかな

返し

大納言俊賢母

一〇〇〇

もろともにあはれといはずは人しれぬとはずがたりをわれのみやせん

これらの歌群は、「読人しらず（九九〇・九九二）↓歌聖「人麿（九

九二・九九三）」↓六歌仙「業平（九九四）」（『前』『古今集』）↓『古今

集』「醍醐・兼輔・是則（九九五・九九六・九九七）」↓後『古今集』

「高光・高明・大納言俊賢母（九九八・九九九・一〇〇〇）」となってい

るように、ほぼ時代順に歌人と和歌が排列されている。

だが、その後の排列を見ると、時代順排列は消えているのである。一

〇〇一〜一〇二六番歌を挙げておく。

中納言朝忠・一〇〇一、太宰大貳高遠・一〇〇二、謙徳公・一〇〇

三、前大納言公任・一〇〇四、謙徳公・一〇〇五、本院侍従・一〇

〇六、忠義公・一〇〇七、貫之・一〇〇八、深養父・一〇〇九、藤

原惟成・一〇一〇、藤原義孝・一〇一一、和泉式部・一〇一二、源

重之・一〇一三、大中臣能宣・一〇一四、大江匡衡・一〇一五、清

原元輔・一〇一六、能宣・一〇一七、躬恒・一〇一八、亭子院（宇

多院）・一〇一九、謙徳公・一〇二〇・一〇二一、曾禰好忠・一〇

二二、和泉式部・一〇二三、興風・一〇二四、家持・一〇二五、高

これから端的に示されるのは、前『古今』・『古今』・後『古今』（＝三代集＋後拾遺集の世界）が時代順を無視して綱い交ぜあるいはアトランダムもしくは混沌そのものの様相だろう。こうなってしまったのは、排列の基準・方法が、時系列から、和歌と和歌の間にある歌ことば・表現上の連想や歌の主題の連想に移動した結果だろうとは推測されるが、ここでは、新古今時代の和歌が上記歌群に入っていないことに留意しておきたい。

そして、新古今時代に最も近いと判断できる、白河院政期の歌人たる花園左大臣（源有仁）・一〇二七を経て、一〇二八―一〇三七に新古今歌人（撰政太政大臣＝良経、太上天皇＝後鳥羽、慈円・良経・寂蓮・後鳥羽・式子・兼実）が登場してくるのである。時代順（古↓『後拾遺集』時代）・アトランダム（三代集＋『後拾遺集』時代）・時代順（『後拾遺集』時代↓当代）という結構である。

だが、これで安定するわけではない。一〇三八番歌以降（＝一〇八〇）、再び、世界は、一〇〇一―一〇二六のような綱い交ぜ＝アトランダム＝混沌世界に戻っていくからである。それでも、この混沌世界には前のそれとは異なり、一工夫が施されており、前にあった混沌の単ある復活・反復にはなっていない。というのも歌人の範囲が新古今歌人まで拡大しているからである。師時＝一〇七二という有仁の先行歌人を受けて、一〇七二―一〇七七（良経・式子・長方・師俊・良経・俊成）を占める新古今歌群がそれに相当する。

こうしてみると、『新古今集』巻十一恋歌一の排列は、実に周到に準備されていたことが諒解されてくる。言うまでもなく、新古今時代歌人の恋歌が前新古今時代の恋歌群に挟まれて、一体化しているように作ら

れているからだ。つまり、こうすると、新古今時代の恋歌群は和歌伝統の中で溶かし込まれてしまうということである。さらに、後半一〇七二―一〇七七に置かれた新古今時代の歌群は、一見、前の一〇二八―一〇三七の単純な反復のように見えるものの、実のところ、貫之・是則・好忠（一〇六七―一〇七二）と相模・業平（一〇七九・八〇）という『古今集』歌人歌群に挟まれているという結構からして、それは、新古今歌人が和歌伝統と完璧なまでに一体化している事態を自然に何気なく示していると見てよいだろう。歌群を二つに分けて、嵌入したのは意図的だったに違いない。⁽²⁾

本稿は、『新古今集』の排列の問題を主題とはしないので、これ以上、この議論を深めないけれども、ここで改めて強調しておきたいことは、『古今集』の名を承けて『新古今集』として『古今集』を新たに再現＝創造するためには、一旦和歌の始原・黄金時代に立ち帰って、そこから当代和歌に至るまでの和歌を排列すること以外術はなく、和歌伝統と一体化するためには、排列も時系列に拠るばかりではなく、混沌的＝連想あるいは主題に基づく排列が不可欠である、とする方法原理が『新古今集』には貫徹されていたということである。

そこで、上記と連動して立てられる、次なる問題は、『新古今集』によって展開された、和歌伝統を重視した撰歌・排列意識をもった勅撰集は、それ以降の十三代集ではどのようなものであったのか、ということになる。これは結論から言ってしまうと、前述で言う『後拾遺集』的な当代、あるいは、せいぜい新古今時代前後くらいまでしか遡らない歌人だけを集めて編まれているのは『新後撰集』しかない（これとて、『古今集』所収歌人はいないけれども、『後拾遺集』所収歌人である俊頼・基俊詠は収めている⁽³⁾）。

残りの十二代集（『新勅撰集』、『続後撰集』・『続古今集』・『続拾遺集』・『玉葉集』・『続千載集』・『続後拾遺集』・『風雅集』・『新千載集』・『新拾遺集』・『新後拾遺集』・『新続古今集』）は、やや当代に傾いている傾向が強い集（『続千載集』など）や、『新古今集』に匹敵するくらい和歌伝統との一体化を企図した集（『玉葉集』など）というように、個別的程度差はかなりあるとはいえ、大なり小なり『新古今集』的和歌伝統を踏まえながら、撰歌・排列を行っているのであった。

ここで『新古今集』の規範的意味を見出してみると、それは、昔と今が一体化されてこそその和歌であり、和歌伝統だというものであろう。どこまで意識的だったかは、集によるけれども、錦仁氏が指摘するように、古と今が繋ぐものが和歌であるという観念は、『新古今集』以降、ほぼ定着していったのである。⁽⁴⁾これを逆に言えば、古と今を繋ぐ伝統意識なるものは、『新古今集』によって創造されたということである。

そこから、本稿の主題である僧侶の恋歌に入っていくが、この問題を考える上でも、『新古今集』以降が一大転機となっていることを最初に述べておかねばならない。既に、前稿でも指摘したように、僧侶の恋歌は、『新古今集』以降、

- 1、実情歌が廃され、題詠のみの恋歌になること
- 2、その結果、恋の形態は異性愛だけとなり、同性愛は排除されること

という分かりやすい形態に固定化されていく。⁽⁵⁾これまた和歌伝統のある意味の定着と言ってもよからう。

とすれば、問題は、それでは一体そこから僧侶の恋歌の和歌表現にお

いて何かが生まれたか、あるいは生まれなかったか、になってくると思われる。それらに対する本稿の具体的アプローチとしては、第一に、僧侶を顕密僧と野僧（歌僧）に分類し、そのありよう（分布、一過性と反復性等）を詳細に分析した後、第二に、代表的な顕密僧と野僧（歌僧）の和歌表現の差異を検討するという次第になるだろう。

二、十四代集における顕密僧と野僧（歌僧）の分布

黒田俊雄の『日本中世の国家と宗教』（岩波書店、一九七五年）、『神社勢力』（岩波新書、一九八〇年）以降、中世の寺院社会の研究は著しく進展し、⁽⁶⁾現在、井上光貞が提唱した浄土教中心史観（『日本浄土教成立史の研究』、山川出版社、一九五六年）はほぼ完全に克服され、顕密仏教こそが中世の支配的な宗教であることに事実上確定した。⁽⁷⁾こうした新たな研究パラダイムの下で、黒田俊雄の言う「権門体制」、権門体制に文化的意味合いを加味して私の命名になる「公」秩序⁽⁸⁾を構成する（院・天皇―武家・公家・寺家）の一翼をなす寺家は、院・天皇・公家・武家に対して祈禱・修法・法会といった宗教儀礼・儀式によって密接・不可分な関係を作っていたばかりでなく、全権門を繋ぐ文化装置たる和歌によっても、同様の濃密な関係を構築し、勅撰集歌人を寺家は多く輩出していたのである。

だが、その一方で、僧侶とは、世間を出た存在、即ち、「出世間」の存在であり、寺院にしても、平泉澄や網野善彦が指摘するように、世俗権力が容易に介入できない独立領域Ⅱアジュールでもあったのだが、⁽⁹⁾それらの性格と並んで、僧侶の世界、寺院世界が徹底的な身分制社会であったという厳然たる事実も忘れてはならないだろう。僧侶と言っても、高

い出自の慈円のごとき僧綱を帯びた顕密僧・門跡と西行・頼阿のような野僧（歌僧）とでは、まったく立ち位置、待遇、扱われ方が異なっていたのである。簡単に言えば、別種・別世界の人たちであるということだ。よって、はじめに、僧侶の恋歌に関して、『新古今集』と『新統古今集』までの顕密僧と野僧（歌僧）を整理分類しておきたい。

なお、（ ）内は入集歌数、排列は登場順、*は前代歌人、二集以上に入集歌をもつ僧はゴチック太字で表記した。

顕密僧

野僧（歌僧）

『新古今集』

法眼宗円(1)

法橋行遍(1)

前大僧正慈円(5)

寂蓮法師(6)

『統古今集』

*慈鎮大僧正(2)

*僧正行意(2)

*権律師隆昭(1)

権少僧都公朝(1)

権大僧都定円(1)

*法橋顯昭(1)

*素性法師(1)

真昭法師(2)

*寂蓮法師(1)

道円法師(1)

*俊恵法師(1)

*西行法師(2)

素暹法師(1)

『新勅撰集』

法印幸清(2)

前大僧正慈円(1)

*法橋顯昭⁽¹⁰⁾(1)

*寂蓮法師(4)

如願法師(1)

*勝命法師(1)

*寂延法師(1)

*西行法師(1)

*俊恵法師(3)

*道因法師(1)

淨意法師(1)

『統拾遺集』

権僧正実伊(1)

法橋行濟(2)

権律師玄覚(1)

法印憲実(2)

法眼慶融(1)

*権律師円範(1)

*如願法師(1)

*西行法師(1)

*真昭法師(2)

道洪法師(1)

道生法師(1)

『統後撰集』

*前大僧正慈鎮⁽¹⁾(4)

*俊恵法師(1)

素暹法師(1)

*蓮生法師(1)

如願法師(1)

*道因法師(1)

*寂延法師(1)

*西行法師(1)

真昭法師(1)

寂縁法師(2)

*寂蓮法師(1)

権少僧都円勇(1)

『新後撰集』

澄覚法親王(1)

* 法橋顯昭(1)

静仁法親王(2)

法印長舜(1)

法印雲雅(1)

法印定円(1)

法眼源承(3)

* 前僧正道性(1)

法印定為(1)

法眼兼誉(1)

前僧正道瑜(1)

法印円伊(1)

前僧正源恵(1)

前僧正聖兼(1)

* 前僧正慈鎮(2)

僧正実瑜(1)

法眼行済(1)

法印聖勝(1)

* 権大僧都珍覚(1)

権少僧都澄舜(1)

前大僧正良覚(1)

前大僧正守誉(1)

権少僧都房厳(1)

『玉葉集』

* 前大僧正慈鎮(2)

前大僧正道昭(1)

* 素性法師(1)

* 真昭法師(1)

* 西行法師(7)

* 登蓮法師(1)

* 僧正行意(1)

法印頼舜(1)

権律師円世(2)

権少僧都澄守(1)

権大僧都公順(1)

法印公恵(2)

法印定為(3)

法印長舜(2)

権少僧都浄道(1)

法眼宰承(1)

法眼兼誉(1)

承覚法親王(1)

* 前大僧正道玄(2)

二品法親王覚助(3)

権少僧都能信(1)

* 法眼源承(1)

前大僧正実超(2)

前大僧正仁澄(1)

『統千載集』

能誉法師(1)

尊親法師(1)

道洪法師(1)

* 素性法師(1)

道義法師(1)

是法法師(1)

観意法師(1)

唯教法師(1)

禅心法師(1)

義円法師(1)

法印良兼 (1)

前僧正道性 (1)

* 法印円勇 (1)

権僧正慈仙 (1)

前権僧正雲雅 (1)

前権僧正定顯 (1)

僧正覚円 (1)

* 法眼行済 (2)

* 法印定円 (1)

法印長舜 (2)

* 法印定為 (2)

二品法親王覚助 (2)

* 法眼行済 (1)

* 仁和寺二品法親王守覚 (1)

法印禪隆 (1)

* 僧正行意 (1)

前僧正道性 (1)

法眼行胤 (1)

* 観意法師 (1)

頓阿法師 (1)

* 西行法師 (1)

* 素性法師 (1)

* 道洪法師 (1)

* 西音法師 (1)

* 登蓮法師 (1)

* 如願法師 (1)

* 蓮生法師 (1)

『新千載集』

二品法親王尊胤 (2)

前僧正道性 (1)

* 法印定為 (4)

前権僧正玄円 (1)

二品法親王尊道 (2)

権僧正慈伝 (1)

法印淨弁 (1)

二品法親王覚助 (2)

* 入道二品親王道助 (1)

* 法橋顯昭 (2)

* 法印長舜 (1)

権律師経賢 (1)

法印実顕 (1)

法眼澄基 (1)

* 法印隆淵 (1)

権僧正深守 (1)

* 前大僧正良信 (1)

* 前大僧正道意 (1)

* 法印良兼 (1)

* 前権僧正雲雅 (1)

権律師則祐 (1)

権大僧都経深 (1)

玄勝法師 (1)

* 隆源法師 (1)

* 如願法師 (1)

* 素運法師 (2)

性嚴法師 (1)

* 西行法師 (1)

* 道洪法師 (1)

寂昌法師 (1)

* 寂蓮法師 (2)

* 行念法師 (1)

* 登蓮法師 (1)

雄舜法師 (1)

聖統法師 (1)

道政法師 (1)

元可法師 (1)

能誉法師 (2)

蓮智法師 (1)

照覚法師 (1)

* 俊恵法師 (1)

* 行乘法師 (1)

祖月法師 (1)

頓阿法師 (1)

覺誉法親王 (1)

法印実性 (1)

* 法印長舜 (1)

二品法親王尊胤 (1)

『新拾遺集』

* 聖尊法親王 (1)

* 前大僧正慈鎮 (1)

兼好法師 (1)

頓阿法師 (2)

『新後拾遺集』

法印覺為(1)	*素運法師(1)
*法眼源承(1)	道曉法師(1)
入道二品親王尊円(1)	祖月法師(1)
權律師則祐(2)	行乘法師(1)
法眼行經(1)	善源法師(1)
*入道二品親王道助(1)	*俊惠法師(2)
*法印定為(2)	宗惠法師(1)
*法印長舜(1)	*寂蓮法師(1)
法印良憲(1)	如雄法師(1)
法印定熙(1)	*是法法師(1)
權大僧都信聡(1)	昌義法師(1)
法印村基(1)	*能譽法師(1)
*法印淨弁(1)	*真昭法師(1)
*法印隆淵(1)	性威法師(1)
法印顯詮(1)	*行蓮法師(1)
深守法親王(1)	*寿曉法師(1)
法眼聖承(1)	昭覚法師(1)
前大僧正賢俊(1)	空曉法師(1)
權僧正杲守(1)	道智法師(1)
	覺空上人(1)
深守法親王(3)	唯円法師(1)
權律師義宝(1)	信慶法師(1)
權律師桓輪(1)	基運法師(1)
*二品法親王覺助(1)	道喜法師(1)

『新統古今集』

法印善算(1)	善源法師(1)
前僧正弘賢(1)	*道因法師(1)
入道贈一品親王尊円(1)	寂真法師(2)
法印実算(1)	*素性法師(2)
權律師秀雅(1)	善為法師(1)
權律師寛宗(1)	真覚法師(1)
法眼能賢(1)	*寿曉法師(1)
前僧正采海(1)	*蓮生法師(1)
*法印淨弁(2)	*頓阿法師(2)
權律師隆覚(1)	道勝法師(1)
法印覺為(1)	*素運法師(1)
*法印長舜(1)	宗仲法師(1)
權律師実蔵(1)	曉勝法師(1)
法印守遍(1)	*能譽法師(1)
	定顕法師(1)
	秀胤法師(1)
	宗祐法師(1)
	宗覚法師(1)
	示空上人(1)
*前權僧正雲雅(2)	*能因法師(1)
法印繼尊(1)	*寂照法師(1)
前大僧正義運(2)	*蓮生法師(1)
前大僧正滿意(1)	*俊惠法師(4)
*權僧正永縁(1)	*如願法師(2)

- | | |
|-------------------------------|--------------------------|
| * 法印実甚(1) | * 兼好法師(3) |
| * 前律師永観(1) | * 善節法師(1) |
| * 法印実性(1) | * 境空上人(1) |
| * 法印経賢(2) | * 寂縁法師(1) |
| * 法印定為(3) | * 浄意法師(1) |
| * 前大僧正道玄(1) | * 頓阿法師(5) |
| 権大僧都良春(1) | * 宗久法師(1) |
| * 入道贈一品親王尊円(1) | 明魏法師 ⁽¹⁵⁾ (1) |
| * 入道二品親王道助(1) | * 定顕法師(2) |
| * 法印村基 ⁽¹⁾ | * 寂真法師(1) |
| * 法印慶運 ⁽¹⁶⁾ (5) | * 寂念法師(1) |
| * 澄覚法親王(1) | * 素性法師(1) |
| * 二品法親王覚誉 ⁽¹⁷⁾ (1) | * 蓮生法師(1) |
| 権大僧都堯孝(1) | * 清空上人(1) |
| * 深守法親王(2) | * 信空法師(1) |
| * 法印浄弁(2) | * 頓宗法師(1) |
| 権大僧都賢雅(1) | * 宝城法師(1) |
| 前大僧正禪守(1) | * 惟賢上人(1) |
| * 静仁法親王(1) | * 寂身法師(1) |
| * 二品法親王尊胤(1) | * 寂蓮法師(1) |
| * 入道一品親王尊道(1) | 素明法師(1) |
| * 二品法親王覚助(1) | * 素暹法師(1) |
| * 前大僧正杲守(2) | |
| * 前大僧正賢俊(1) | |
| * 性助法親王(1) | |

* 法印守遍(1)
 * 法印定円(1)
 権大僧都堯尋(2)
 * 権僧正道我(1)
 * 前大僧正慈鎮(1)
 法印慶源(1)

以上、今日においては無名と言ってよい僧侶が多く収められた感のある一覧表を提示した。ここから読みとれることは存外多い。以下、章を改めて、順次考察を進めたい。

三、『新古今集』の伝統の断絶と継承

まず、以上の一覧表から一目で判然とするところから議論を開始したい。それは、『古今集』前後の古歌と当代歌とが混在するという形態が『新後撰集』以外ほぼ維持されていること、次いで、『新古今集』と『新古今集』からなる十四代の勅撰集のなかで、僧侶の恋歌の転機は『続古今集』であるとしてよさそうだ、ということである。

その理由は見えての通りだが、詳しく説明しておく、このようになる。『新古今集』から『続後撰集』までは、事実上の顕密僧は慈円(慈鎮)だけである。それに対して、野僧(歌僧)は、『新古今集』で十八首も恋歌を詠んだ西行、六首入集の寂蓮の他、俊恵、素性、道因は『続後撰集』までいずれも登場する(なお、寂蓮・道因・素性は、武家執奏の室町期勅撰集に至るまで入集し続ける)ことなどから判明するように、『新古今集』と『続後撰集』までの僧侶の恋歌は、野僧(歌僧)を中心に

なっていたのである。

加えて、『新古今集』で最大入集者が西行（九十四首）、二位が慈円（九十二首）であったというあまりに明白な事実から、そこを起点にしてやや飛躍に過ぎた物言いをすれば、『新古今集』とは、顕密僧と野僧の代表的歌人に最大入集の榮譽を与えた勅撰集である、ということだ。その目的・狙い・意味するところは、さらなる追究が不可欠であり、今は事実の指摘だけに止める他はないけれども、ともかくも、『新古今集』の僧侶の恋歌が『統後撰集』まで継承される事実は認められてよからう。

だが、後嵯峨院⁽¹⁸⁾にとって二度目というよりも、佐藤恒雄氏や今井明氏が指摘するように、後鳥羽院―白河院―醍醐天皇の流れを自己意識化して撰集させた『統古今集』以降、状況は一変する。即ち、顕密僧では、おなじみの慈円（慈鎮）と歌僧ながら顕密僧となった顕昭、他方、野僧（歌僧）では、素性・寂蓮・俊恵・西行といったメンバー、さらに、その後もたびたび登場する真昭・素暹といったいつもの僧侶群に加えて、顕密僧の人数が『新古今集』的世界とは打って変わって増大していくのである。僧正行意・権律師隆昭・権少僧都公朝・権大僧都定円といった顔触れは、『新古今集』〜『統古今集』に馴染んだ人たちには相当違和感を覚えるものなかったろうか。⁽¹⁹⁾

そして、この傾向は、前々稿で指摘したように、⁽²⁰⁾『新古今集』的世界を再現したとしか言いようのない『玉葉集』と当代の顕密僧を中心にしたかもたった四首しか僧侶の恋歌を撰ばなかった『風雅集』という二つの京極派撰集の勅撰集以外は、強化されることはあれ、一貫して守られていたという事実をここで改めて強調しておきたい。

逆に言えば、『玉葉集』・『風雅集』の撰集理念は、『統後撰集』以降の撰集理念、とりわけ、当代性の傾向が甚だしい『新後撰集』、明確に反

『玉葉集』的歌人選拔を行った『統千載集』を撰述した二条為世の撰集理念、および為世の理念を受け継いだその後の二条為藤・為定・為明（頼阿）・為遠・為重、さらに、二条家断絶の後、『新統古今集』の撰者となった飛鳥井雅世に継承された理念と、僧侶の恋歌だけでも大きく異なっていたということである。

冒頭の「立春」歌に

はるたつ日よめる

紀貫之

一 けふにあけて昨日ににぬはみな人の心に春のたちにけらしも
（『新編国歌大観』、以下も同じ）

と、『古今集』を彷彿させながら、「人の心」といった京極派好みことばを詠んだ貫之詠を置き、次いで、俊頼詠、第三に定家詠と置く排列からして、『玉葉集』を撰述した為兼の理念と方法は既に明らかである。冒頭三首によって『古今集』↓俊頼（中世和歌の祖）↓『新古今集』という伝統を踏まえつつ、当代の実兼詠を経て、我らが伏見院の御製に至るという結構は、『古今集』↓『新古今集』↓『玉葉集』は一直線に並ぶことを意図したものであったろう。為兼にしてみれば、これこそ和歌の伝統に他ならないのである。

他方、反『玉葉集』に撤した（もっとも、当代性の強い『新後撰集』のアンチテーゼが『玉葉集』でもあったのだが）⁽²¹⁾二条為世撰述の『統千載集』の冒頭歌が、

春たつところをよみ侍りける

前中納言定家

一 いづる日のおなじ光にわたつ海の波にもけふや春はたつらん

であることから簡単に気づかされるが、なんとこともあろうに、為世は定家詠を一首目にもってきているのである。これは『玉葉集』一首目の貫之詠に対する明確な挑戦以外の何物でもない。さらに、二首目は『玉葉集』四首目の実兼詠で繋ぎ、三首目に後宇多院詠、以下、為家詠、実氏詠、土御門院詠、順徳院詠と排列していくという結構は、二条家こそ、定家・為家の直系であるのみならず、土御門・順徳↓(後鳥羽院)・(後嵯峨院)↓大覚寺統(後宇多院)という皇統、実氏・実兼という当代の実力者である西園寺家によって守られ、引き立てられる家であることをかなり露骨に物語っているものではなからうか。

以前、深津睦夫氏は、『新千載集』が『千載集』を受けて命名され、その理由として、『千載集』に「崇徳院」鎮魂の狙いがあったように、『新千載集』には後醍醐鎮魂のそれがあったとされた。⁽²²⁾魅力的な見解ではあるけれども、『千載集』と『新千載集』の間にもう一つ『続千載集』を置いてみると、鎮魂以外の可能性も見えてくるのではなからうか。

最初に、『千載集』から説明したい。『後拾遺集』によってようやく勅撰集の形態が定まったにも拘わらず、これに続いたのは、十巻仕立ての小ぶりなと言うか変則的な勅撰集たる『金葉集』・『詞花集』であった。⁽²³⁾そうした変則状況を、前述したように、和歌の伝統を意識しつつ改め、元に戻し新たに編まれたのが、他ならぬ俊成撰述の『千載集』であろう。すると、この図式を『続千載集』に応用してみれば、『玉葉集』をある意味で『金葉集』・『詞花集』に見立てて、改めて本道に戻すという目的で編まれたのが『続千載集』ということになるだろう。永遠を意味する「千載」は、言うまでもなく、「千世に八千代」の君が代を言祝ぐ意味があり、勅撰集に相応しい名称であるが、それだけではない。敢えて

「千載」と命名するからには、改めて和歌伝統を確認し、その上で本道に戻るという意図があった故であったと今は考えたい。そして、武家執奏の嚆矢となった『新千載集』にもこの図式は適応される。『新千載集』はたしかに後醍醐鎮魂の側面もあったろうけれども、ここでは京極派かつ北朝に繋がる花園院の『風雅集』を十二分に意識して、北朝を新たに支える(実際は創設したのが)足利家が、二条派に立ち帰ることで、改めて和歌の本道に戻りつつ、同時に、偏頗さを克服した正統的な歌風をも樹立するという意識が後醍醐鎮魂以上にあったことになるだろう。但し、『続千載集』のような異常とも言える京極派に対する対抗意識は、『新千載集』には見られない。それは、北朝を立てた武家(足利家)による執奏であり、ともかくも、歌集内では幻想であれ、夢想であれ、「平和」を実現したいという意図もあったかと思われる。⁽²⁵⁾そして、こうした理解は後醍醐鎮魂とも矛盾しない。

以上、やや長きに亘った議論となってしまったが、改めて総括すれば、僧侶の恋歌を見た限りにおいては、『新古今集』の歌人構成は、『続後撰集』で切れ、『続古今集』以降は、『玉葉集』・『風雅集』を除いて、顕密僧+野僧(歌僧)の対構成で展開されるようになるということである。これが、鎌倉的、あるいは、「公」的秩序的、再度、私の造語を用いると、古典的公共圏的とも言える変容であったことは間違ない。なにしろ、和歌の担い手としての「僧侶」の出自が明確に寺家(顕密僧)と野僧(歌僧)とほぼ固定されて認定された結果であるからだ。とはいえ、そうした過程を見えにくくしたのは、前述したように、ずれていながらも共に掲げる伝統Ⅱ正統意識も加わった、二条為世対京極為兼の覇権闘争といった別の文脈が介在したからに他なるまい。二条派對京極派だけではなく、大覚寺統対持明院統、さらに、北朝内の後光厳対崇光の皇統

争い、足利幕府対鎌倉府といった対立関係が設定されると、往々にしてその時の利益のみを考えて行動しがちなので、全体が見えにくくなるのである。それは後代の観察者も当代の当事者も同様である。

そうしたなかで、勅撰集の問題に戻れば、和歌のよしあし、出来不出来はさておき、二条派と京極派のどちらが当時の実態を伝えているかなれば、これは二条派の撰述した勅撰集だと断言してよからう。なぜなら、為世の『新後撰集』・『続千載集』から一気に顕密僧が増加していること以上に、その傾向がそのまま武家執奏の『新千載集』・『新拾遺集』・『新後拾遺集』・『新統古今集』に流れ込み、さらに継続強化されていったからである。それは、二条派が『新千載集』を編纂したからだけではないだろう。武家（足利家）・寺家・公家といった権門全体Ⅱ「公」秩序の利益に適っていることの方が公武一体体制（北朝+武家）の正統性をより高らかに宣言できるはずだからでもある。

とすれば、近代において頗る評価の高かった京極為兼との対比の上で、月並み・凡庸といった形容句で済まされがちであった二条為世を、そのように単純化して見るのは実はまずいのであって、第一に、和歌によって「やすらかな居場所を提供」した「伝統的かつ正統的和歌思想」を有した重厚な歌人であると捉えると共に、他方、時代の状況・現実を踏まえ、その上で入集希望者の切なる願いをきちんと聞きおき、伝統を継承していった、ある意味で相当にしたたかな歌の家の継承者であったと把握すべきではあるだろう。なにしろ為世が行った『新後撰集』における僧侶の恋歌の歌人構成・排列は、為兼が『玉葉集』で一切無視したくなるほど、強烈だったのであるから。

四、僧侶歌人における一過性と反復性

第二に、上記の一覧表から、僧侶の恋歌を詠む歌人たちの一過性（マインナー性）と反復性（メジャー性）についてだいたい傾向が窺えるので、この問題を取り上げたい。つまり、一度で消えていく歌人がいれば、何度も登場するスター的歌人もいるということである。それが顕密僧と野僧（歌僧）とでどのように分布しているかを捜ることで僧侶歌人のありようが分ってくるだろう。以下、『新古今集』と『新統古今集』恋部の三回以上入集回数（漢数字）および入集歌数（算用数字）を顕密僧・野僧（歌僧）に分けて上げてみた。

顕密僧		野僧（歌僧）	
慈円（慈鎮）	八・17	西行八	32
長舜七	9	寂蓮八	17
定為六	15	俊恵八	14
覚助五	9	素性七	8
顕昭四	5	如願七	8
雲雅四	5	素暹七	9
浄弁四	6	真昭五	7
深守四	7	蓮生五	5
定円四	4	道洪五	5
行済四	6	頓阿五	11
行意三	4	道因四	4
源承三	5	能誉四	5

尊円三・三
道助三・三

登蓮三・三

ここからも、慈円（慈鎮）と西行が顕密僧・野僧（歌僧）の代表的存在であることが改めて諒解されよう。共に八つの勅撰集に入集し、歌集は、慈円が一七首、西行に至ると、『新古今集』（18）と『玉葉集』（7）の功績が大きいものの、三二首を数えるのである。入集歌集と歌数を上げおくと、

慈円（慈鎮）

新古今集（5）
新勅撰集（1）
続後撰集（4）
続古今集（2）
新後撰集（2）
玉葉集（2）
新拾遺集（1）
新統古今集（1）

西行

新古今集（18）
新勅撰集（1）
続後撰集（1）
続古今集（2）
続拾遺集（1）
玉葉集（7）
続後拾遺集（1）
新千載集（1）

となる。『新古今集』と『続古今集』・『玉葉集』では、共に入集しているものの、慈円（慈鎮）の『新後撰集』・『新拾遺集』・『新統後撰集』と西行の『続拾遺集』・『続後拾遺集』・『新千載集』とは重ならない。その理由は撰者にとって求める和歌があったかなかったかになるが、重複したものとうでないものを『玉葉集』と『新後撰集』（慈鎮）・『続拾遺集』（西行）によって見ておきたい。

『玉葉集』において、慈鎮は二首、西行となると七首も入集している。それぞれあげてみたい。

慈鎮

（恋一・一三四〇） 寄煙恋の心を
もしほやく浦のけぶりを風にみてなびかぬ人の心をぞおもふ
（恋二・一四七二） 寄雨恋を
雲とづるやどの軒ばのゆふながめ恋よりあまる雨のおとかな

西行

（恋二・一四八四） 月前恋を
あはれともみる人もあらばおもはなん月のおもてにやどす心を
（恋三・一五〇〇） 恋歌の中に
身のうさのおもひしらるることわりにおさへられぬは涙なりけり
（恋三・一五〇一） 恋歌の中に
いく程もながらふまじき世の中に物をおもはでふるよしもがな
（恋三・一五三二） 恋歌の中に
恨みてもなぐさめてまし中につらくて人のあはぬとおもはば
（恋四・一六八〇） 題しらず
うちたえて君にあふ人いかなれば我が身もおなじ世にこそはふれ
（恋四・一七〇〇） 題しらず
今よりはあはで物をばおもふとも後うき人に身をばまかせじ
（恋五・一七八二） 題しらず
とにかくにいとまほしき世なれども君がすむにもひかれぬるかな

慈円（慈鎮）の恋歌には、「題しらず」とされるものもままあるけれども、概ね題が明示されている。これは、勅撰集入集恋歌中、「月前恋」という題（『玉葉集』上掲歌と著名な『千載集』入集歌（恋五・九二九・「なげけとて月やは物をおもはするかこちがほなるわが涙かな」）以外、「題しらず」「恋歌の中に」とあるように、題を明示しない西行との大きな違いである。

この中で慈円（慈鎮）の一四七一番歌を取り上げると、これは、もともと『六百番歌合』に「寄雨恋」という題で後鳥羽院と番わされたものである。原文をそのまま引用する。

廿四番 左勝

女房（後鳥羽院）

九四七

ふかき夜ののきのしづくをかぞへてもなほあまりぬるそでの雨かな

右

信定（慈円）

九四八

雲とづるやどののきばのゆふながめこひよりあまる雨のおとかは

右申云、左無難、左申云、心ゆかず。

判云、左歌、「ふかき夜の」とおけるより、実にききどころありて侍るべし。右歌も、「雲とづる」といひ、「雨のおとかは」といへるもをかしくも侍れど、心もありめづらしくもきこゆる歌は、すべて「心ゆかず」「耳にたつ」などのみいふことに侍るめれば、しひてとかく申すもよしなくですぐることおほく侍れば、この番も右すべて心ゆかず、左無難云云、仍以左為勝（但し「」句読点、レ点は補った）。

ここでは、慈円詠は、左方から「心ゆかず」とされ、それを受けた俊成は「雲とづる」「雨のおとかは」を「をかしく」と肯定的に捉えるものの、「心ゆかず」と評価されたからには私から何も言うことはないということで、負けになっている。もっとも、左が女房（後鳥羽院）であるから、通常、勝つことはない。それでも、「心ゆかず」とされたのは、「ゆふながめ」と「こひよりあまる」の繋がりがしっくりこないからではないか。加えて、「のきば（軒端）」と「あまる」を縁語として用いた初例はおそらくこの慈円詠であると思われるが、その後の例である、『正治初度百首』二二三・信広詠・夏「草ふかきみをばのきばにつつめどもあまるおもひにもゆる夏虫」や『実材母集』六三九・物うたがひせし人に「かれはてし人はのきばのしのぶ草しのぶにあまるそでの露かな」等と較べてみても、慈円詠の「のきば」と「あまる」はお互いの距離が遠く、両者を連関づけて捉えることがなかなか難しい。このあたりを左方が見て取って「心ゆかず」となったのだろう。

とはいえ、為兼がこの歌を採用したのは、「軒ばのゆふながめ」という視覚的イメージと「雨のおとかは」という聴覚的イメージが「あまる」で繋げられて、慈円にしては珍しい、通常の意味連関を越えた幻想的とも言える世界が構築されているからではあるまいか。

これに対して、西行詠について、前もって一言付しておく、西行の和歌が今日もとりわけ愛される理由の一つには、「おさへられぬは涙なりけり」（二五〇〇）、「いとまほしき世なれども君がすむにもひかれぬるかな」（二七八二）といった熱情的かつ直情的な表現が読者をして真情を詠んでいると認知させる故ではないだろうか。たとえば、ここで用いられている「おさへられぬ」「君がすむにも」なる詠歌表現・言い回しはこれら二首以外には見出せない、西行の独自語彙である。故に時

に強烈な印象を与える。これも「こと葉にて心をよまむとすると、心のまゝに詞のほひゆくとは、かはれる所あるにこそ」(『為兼卿和歌抄』、小川剛生校注『歌論歌学集成 第十卷』、三弥井書店、一九九九年)とする為兼の主張に西行詠は叶っているのではないか。

それでは、入集が重ならない和歌ではどうなのだろうか。例として慈円(慈鎮)の『新後撰集』入集歌、西行の『統拾遺集』入集歌に検討を加えたい。

慈円(慈鎮)

新後撰・恋三・題しらず・一〇一二

うれしさをこよひつつまんためとてや袖は涙にくち残りけむ

恋三・題しらず・一〇二九

うつこそ今朝は中かなしけれかへるうらみは夢にみざりき

西行

統拾遺・恋一・恋のうたとて・八二一

みさなる涙なりせばから衣かけても人にしられざらまし

最初に断っておくと、為世は西行を嫌っていたわけではない。『新後撰集』では十一首、『統千載集』では四首入集させている。しかし、『玉葉集』の五七首とは比べべくもない。嫌ってはいないものの、重んじてもないということだろう。逆に言えば、為兼が異常なまでに高く評価した⁽²⁷⁾ということだ。

そこで、慈円(慈鎮)詠から分析に入る。「うれしさを」詠は、「題しらず」ではあるが、強いて付けければ「初逢恋」くらいであろうか。「袖は涙にくち残りけむ」という表現がこの歌の味噌だ。長年、辛い思いを

して、流した涙は袖を朽ちさせたが、まだ朽ち切れずに残っていた。それは今夜の「うれしさ」を「つつまんだめ」だったのだろうか、という歌の内容だからである。ちなみに、「くち残(る)」という歌ことばは、同時代には、『壬二集』(住吉三十首)・一九八四「くちのこるしもの下なることのはも哀と思へすみ吉の神」しかない。涙・袖と結びつけたのは、慈円であろう。この歌で面白いことは、これを本歌としたかと思われない為世詠があることである。

『藤葉和歌集』

龜山殿五首歌に、忍久恋

前大納言為世

三九八

せきかへすなみだにたへていくとせか袖はつれなくくち残るらん

この歌の他に、為世は、「くちのこるふるき軒ばの梅がえも又とはるべき春をまつらし」(『風雅集』・雑歌上・一四二三)とも詠んでいるが、「せきかへて」詠は、「忍久恋」という題に合わせて、より深刻な「くち残る」状態となっている。つまり、為世は、慈円(慈鎮)詠が気に入ったのである。よって採用したということだろう。

次の「うつつ」詠は、小町詠(『統古今集』・恋歌三・一一八九)「ゆめならばまたみよひもありなましになかなかのうつつなるらん」を本歌としたものだろう。女のもとから朝帰る恨みを小町詠の夢を響かして詠んだものである。これもそれなりに凝ったかつ無難な歌である。入集してもおかしくないだろう。

そして、西行の「みさをなる」詠に移る。まず「みさをなる」という歌ことばは、西行以外にはない、やはり西行語彙である。他には、『山

家集』・恋・六八九に

などかわれことのほかなるなげきせでみさをなる身にむまれざりけんがある。この歌の腰句「から衣かけても」は、『後撰集』・恋三・七四六の

人のをとこにて侍る人をあひしりてつかはしける

右近

唐衣かけてたのまぬ時ぞなき人のつまとは思ふものから

を受けているので、この歌は、変わらない思いによる涙だったら、心にかけても、あの人には私の思いは知れないだろうに、と反実仮想で言っているのだから、そのような涙ではない、移ろいやすい涙なので、あの人に私の思いが知られてしまったという内容となる。「から衣かけても」を本歌取りの用いているところと典型的な反実仮想的な構成がよかったのだろうか。忍恋の一群に入りながら「みさをなる涙」を用いて一ひねりを加えた歌である。

入集理由の実際のところは分からないと言うしかないけれども、西行詠について言えば、『続拾遺集』には九首入集しているから、それほど重視されていないとはいえず、忍恋歌群に相応しい秀歌として撰ばれたということは言えるのではないか。⁽²⁸⁾

以上から、慈円（慈鎮）詠と西行詠の違いを総括してみると、詠風はむろん異なる。しかし、詠風や独自の歌ことば以上に、題詠を掲げて詠む慈円（慈鎮）詠の方が、より形式性に偏っていることは指摘できるだろう。また、だからといって、西行詠が、為兼にとって理想的な歌であ

る「心のまゝに詞のほひゆく」ように、常に詠まれているわけでもないだろう。それでも、慈円（慈鎮）に比較すれば、自由奔放さはあるのであり、そうした程度の度合に應じて、為世・為氏・為兼によって入集されたり、拒絶されたりしているということなのではないか。西行は、慈円（慈鎮）と共に、『新古今集』の代表的歌人である。よって、対立する歌風などといった次元やレベルの存在ではない。だからこそ、程度の問題が入集条件になるかとは思われる。

最後に、西行の恋歌も真情ではなく、「題しらず」ばかりだが、正真正銘の題詠に違いない。但し、一読、題詠とは思わせないところ、これが西行という歌人としてのうまさであり、芸なのではないかと今は言っておきたい。

五、顕密僧と野僧（歌僧）の恋歌の対比―覚助と頼阿を通して

十四代集後半、顕密僧と野僧（歌僧）で目立った活躍をした二人の僧がいる。顕密僧では、覚助（建長二・一二五〇）建武三・一三三六）であり、野僧（歌僧）では、『新拾遺集』の実質の編者にして、和歌史上最大の名人とも言われる頼阿（正応二年・一二八九）応安五年・一三七二）である。

顕密僧には、その他、長舜や定為という入集歌数が多い僧がいることにはいるが、長舜は『続古今集』・『続拾遺集』の開闔を勤めた源兼氏の子で、比叡山の法印であるものの、『新後撰集』・『続千載集』の開闔を務めた法体歌人でもあり（井上宗雄『中世歌壇史の研究 南北朝期「改訂新版」』、明治書院、一九八六年）、定為も、醍醐法印と作者部類に記されるが、為氏の子で、為世一門の長老であったから（前掲書）、こ

こでは外したい。

その点、覚助は、後嵯峨院の皇子、聖護院門跡・園城寺長吏・天王寺別当といった華麗な経歴を有する典型的な顕密僧である。他方、頼阿ときては、二つの出自説があったが、現在は道長の孫師実子孫説は退けられ、二階堂光貞子息説で落ち着いているように（稲田利徳『和歌四天王の研究』笠間書院、一九九九年）、公事奉行人二階堂家の出であり、一族には、二階堂行忠の子行円と二階堂貞綱の子行朝といった歌僧いるくらい（前掲書）であるから、こちららはれっきとした野僧である。即ち、好対照な二人ということになる。早速、入集歌を列記してみたい。

覚助

（統千載・恋二・一二五二）家に五十首歌よみ侍りし時、不逢恋
いかがせむうきみなかみの涙河あふせもしらでしづみはてなば

（統千載・恋三・一三七八）百首歌奉りし時

いまはとておのがきぬぎぬ立ちわかれ鳥の音おくるしののめのみち
（統千載・恋四・一四二九）家に五十首歌よみ侍りし時、絶恋
分けなれしをのあさぢふ霜がれてかよひし道のいつたえにけん

（統後拾遺・恋一・六九九）題しらず

しらせばやよるべを波の荒磯に年月かけて身をくたくとも

（統後拾遺・恋四・九一〇）文保百首歌（恋）奉りける時
色かはるころ木葉に跡たえてかよひし庭ぞ霜に成行く

（新千載・恋二・一一八五）文保三年百首歌に

おもふ事跡なき波にこぐ舟のうきしづみても恋ひわたるかな
（新千載・恋四・一四八六）正中二年百首歌たてまつりける時
たえずこそ心にかかれ玉かづらはふきあまたの人のつらさは

（新後拾遺・恋一・一〇〇一）弘安百首歌に

ふかき江にながれもやらぬみだれあしのうきふしながらさてや朽ちなん
（新統古今・恋四・一四一二）嘉元百首歌たてまつりける時、お
なじ心（遇不逢恋）を

ちかひてし人の命のかなしさはたのむ心やなほ残るらむ

頼阿

（統後拾遺・恋一・六四九）入道前太政大臣家にて人人題をさぐ
りて歌よみ侍りけるに、寄菅恋

数ならぬみむろの山の岩小菅いはねば下になほ乱れつつ

（新千載・恋五・一五七九）題しらず

今は世になしともきかば思ひしれこれをかぎり恨みけりとは

（新拾遺・恋一・九八六）関白前左大臣家に題をさぐりて歌よみ
侍りけるに、寄煙恋を

こと浦になびかぬ程ぞ夕煙わがしたもえのたのみなりける

（新拾遺・恋三・一一四三）前大納言為世家に十首歌よみ侍りし
に、深夜待恋

深けぬるをうらみんとだに思ふまにこぬよしらるる鳥のこゑかな

（新後拾遺・恋二・一〇四五）題しらず

かぎりともいはいかがが恋ひしなれたがをしむべきうき身ならねど

（新後拾遺・恋五・一二四九）絶恨恋

あまのすむ里のけふりは絶えにしをつらきしるべの何残るらん

（新統古今・恋二・一一六三）新玉津島三十首歌に、不逢恋を
恋ひしん身こそをしけれくやしともつれなき人の思ひしらずは

（新統古今・恋三・一二六一）新玉津島三十首歌に、待恋

いつよりかあふ人からとかこたまし待つほとにだに明けやすき夜を

（新続古今・恋三・一三二六）前大納言為世家にて、隔遠路恋といふ事を

独ぬる遠山鳥のちぎりだにかさなる峰をへだてやはする

（新続古今・恋五・一四四九）後福光園摂政家（良基）歌合に、寄萩戸恋といふ事を

物を思ふした葉色づく萩の戸のあくるいく夜もいねがてにして

このうち、本稿では紙幅の都合もあり、両歌人とも題が明示されている歌三首のみ分析を行い、そこから両歌人の詠作の特質を明らかにしていきたい。

順序は、「不逢恋」（いかがせむうきみなかみの涙河あふせもしらでしづみはてなば）・「絶恋」（分けなれしをのあさぢふ霜がれてかよひし道のいつたえにけん）・「遇不逢恋」（ちかひてし人の命のかなしさはたのむ心やなほ残るらむ）の題で詠まれた覚助からである。

まず、「いかがせむ」詠の本歌としては、『古今集』・恋歌一・読み人しらず・五一

涙河何みなかみを尋ねけむ物思ふ時のわが身なりけり

を指摘できよう。また、「いかがせむ」という歌ことばは、『古今集』・恋歌五・素性法師・七九九に

思ふともかれなむ人をいかがせむあかずちりぬる花とこそ見めもある。さらに、「涙河」と「あふせ」では、『後撰集』・恋五・「左大臣

河原にいであひて侍りければ 内侍たひらけい子」・九四九

たえぬとも何思ひけん涙河流れあふせも有りけるものを

や、『山家集』・恋・六六三

ものおもへばそでにながるなみだがはいかなるみにあふせなりなん
『拾玉集』巻二・寄河恋・一六七三

涙河あふせもしらぬ身をつくしたけこす程に成りにけるかな

などがあり、参考に供された可能性がある。「涙河」・「みなかみ」と「あふせ」を結びつけ、その縁で「しづみはてなば」と歌を閉じたところがこの歌の眼目だろう。

ところで、元応二（一三二〇）年に返納（完成）した『続千載集』に入集した覚助「いかがせむ」詠には極めて近い和歌を覚助交友圈の中から見出すことができる。覚助のもとに正和四（一三一五）年に召された公順の『拾藻鈔』（二八二）に「聖護院二品親王家五首歌合、忍不逢恋 正中元二月」という詞書をもつ、

したにせくなみだの川の身をつくしあふせもしらでくちやはてなむという和歌である。これは、正中元（一三二四）年の詠作だから、当然のごとく、覚助詠の後に詠まれたものである。「なみだの川」・「あふせもしらで」が覚助詠とほぼ重なる。そして、この「聖護院二品親王」こそ覚助に他ならない（大日本史料によれば、覚助が二品になったのは、正安二・一三〇〇年である）。

ということは、公順は、覚助主催の五首歌合で覚助の「いかがせむ」詠をある意味で「本歌取り」することによって、現代風に言えば、「よししょ」したということだろう。末句「くちはてなむ」も覚助詠「しづみはてなば」の言い換えに近い。公順とて、藤原秀能の曾孫、九条金頂寺別当禅観の子、三井寺法印、権大僧都であるが（『和歌大辞典』、半田公平執筆）、覚助の出自・身分と較べると、顕密僧の端くれに過ぎない。しかも同じ寺門派である。これは法親王といった高位の顕密僧の周辺にいたる低位の顕密僧（法体歌人）のありようを示したエピソードとも

言えるのではないか。

次に、「分けなれし」詠はどうだろうか。これは、「分けなれ」た「小野の浅茅生」が霜枯れて道を覆ってしまい、「かよひし道」は「いつたえ」てしまったのだろうか、という内容だが、歌の眼目は「分けなれ」だろう。それは、浅茅生を踏み分けることになれていた、つまり、通い慣れていたという本来の意味合いが、「霜がれ」を挟むことによって、結局、道が絶えてしまうという末句の伏線の役割を果たしてしまうからである。「分け」には当初から暗雲が垂れ籠めていたということだ。本歌に相当する和歌は見出せなかったが、「小野」「浅茅生」を有する恋歌としては、『古今集』恋一・読人しらず・五〇五

あさぢふのをのしの原しのぶとも人しるらめやいふ人なしにや、『後撰集』・恋一・ひとにつかはしける・源等朝臣・五七七〔百人一首〕にも

あさぢふのをのしの原忍ぶれどあまりてなどか人のこひしきがある。いずれの歌も、「そのしの原」から「しのぶ」を連想させ、忍恋を詠んでいくという結構である。だが、「分けなれし」詠とは趣向が全く重ならない。

「小野」「浅茅生」を用いながら、趣向が近いものとして、『拾遺愚草』・雪・一四四九

夢かとも里の名のみやのこるらん雪も跡なき小野のあさぢふ『内裏百番歌合』・八十五番 冬夜月・知家卿・一六三

おく霜はそれとわくべき色もなし月ぞさえ行く小野のあさぢふ『夫木和歌抄』・春霜・建長八年毎日一首中 民部卿為家卿 同三年毎日一首中 同・六三六

下萌の青葉もみえず朝な朝な霜にこほれる小野の浅茅生

を上げることができる。ここでは、『古今集』・『後撰集』のことばの排列を反転して、「小野の浅茅生」となる。そして、知家詠が、霜と「あさぢふ」が区別することができなくなっていると詠んでいるように、「小野の浅茅生」は、雪・霜によって凍る（白くなる）、あるいは見えなくなるという、主として冬の風景の意味合いをもつものものとして捉えられるようになる。覚助詠も、その伝統に倣っているが、『古今集』・『後撰集』のように、本来の恋歌に変換していること、さらに、恋歌でも「絶恋」にしている技量は正しく評価してよいのでなからうか。

最後に、「ちかひてし」詠である。「遇不逢恋」題は『堀河百首』の際、作られたものであり、以後、通常は逢っていたのに、その後、それが途切れるという内容を詠むものとなる。『嘉元百首』（一三〇三年）では「忘恋」で詠まれ『新統古今集』入集時に「遇不逢恋」題となった「ちかひてし」詠もそれであり、既に関係が絶たれてしまったにも拘わらず、「人の命のかなしさ」は、再び逢えるかもしれないという「たのむ心」が「なほ残」っている故だろうか、というのである。「忘恋」とありながら、「忘」という文字を採用せず、忘れたくても忘れられない未練がましい歌にしたのである。飛鳥井雅世は、故にわざわざ「遇不逢恋」題に変えたのだろう。

この歌の本歌は、言うまでもなく、『百人一首』にも入っている、『拾遺集』恋四・右近・八七〇

わすらるる身をばおもはずちかひてし人のいのちのをしくもあるかなである。右近詠に影響を受けた歌はそれなりにあるけれども、「命のかなしさ」とするのは、覚助詠だけとなる。「たのむ心」という未練を「命のかなしさ」、言い換えれば、宿命とした点にこの歌の新しさがあろうか。⁽³⁰⁾ちなみに、「命のかなしさ」という表現は、本歌のみであり、覚

助語彙ということになる。覚助は、和歌の基礎学習をしっかり積み、なおかつ、公順・頼阿・長舜等と親しく交際して、題詠による恋歌を着実に詠んでいったのだと思われる。それが、覚助歌壇（『覚助法親王家五十首』など）を催し、弘安百首以下の百首歌にも積極的に参加し、結果的に勅撰集入集八九首という結果をもたらしたのである。強いて喩えれば、鎌倉末期の守覚と言ってもよい、和歌をこよなく愛した顕密僧であった。

他方、覚助に召された頼阿の恋歌はどうだろうか。頼阿詠のうち、分析をおこなうのは、「寄菅恋」（数ならぬみむろの山の岩小菅いはねば下になほ乱れつつ）、「深夜待恋」（深けぬるをうらみんとだに思ふまにこぬよしらるる鳥のこゑかな）、「寄萩戸恋」（物を思ふした葉色づく萩の戸のあくるいく夜もいねがてにして）のあまり詠まれない題をもった三首を選んだ。むろん、和歌の達人頼阿故である。

まず、「寄菅恋」題をもつ「数ならぬ」詠はこの題の初例である。『続後拾遺集』では、「入道前太政大臣家（三条実重か）」となっているのに、『草庵集』では「中西入道彈正親王（忠房親王）家」となっているという違いがあるが、これはそれほど問題にはならない。「数ならぬ身」が「みむろ（三室）の山」と繋がり、それが、「の」によって「岩小菅」を導き出す。そして、「岩小菅」の「岩（いは）」から「いはねば」が引き出され、「下になほ乱れ」とするのである。発想のみならず、ことば同士の連想・連関を存分に駆使した秀歌だろう。

本歌は、『万葉集』巻十一 寄物陳思・二四七二「見渡 三室山 石穂菅 側隠吾 片念為へ一云、三諸山之 石小菅」に「みわたしの みむろのやまの いはほすげ ねもころわれは かたもひぞするへ一云、みもろのやまの いはこすげ」⁽³⁾だろう。「かたもひ」＝「片思い」と「い

はねば」に典型的な忍恋に近い関係にある。だが、「下になほ乱れ」ということばの出所は『万葉集』では分らない。こちらは、『続千載集』・恋一・弘安百首歌奉りける時・前僧正実伊・一〇六六

おく山のいはもとこすげねをふかみながくや下におもひみだれんが媒介したのではないか。「いはもとこすげ」を「みむろの山の岩小菅」に変え、「こすげ」＝「ね（根）をふかみ」故に「下に」がでてくるのを「ねをふかみながく」を「岩小菅」から「いは」にして、「下に……みだれん」は活かしたという結構である。

次に、あまり用いられない「深夜待恋」題をもつ「深けぬるを」詠に入りたいが、その前に、この題の先行例から見ておきたい。「深けぬるを」詠以前の勅撰集では、『続拾遺集』・恋歌三・文永五年九月十三夜白川殿歌合に、深夜待恋・権大納言経任・九〇〇

ためめてもむなくふくるほどみえてよそなる月の影さへぞうきがあり、私家集では、『明日香井集』・深夜待恋・一四五七

ちぎりきやさてもはかなきよひのまにおけらん露のきえはてねとはもあるけれども、頼阿詠とは何ら関係をもたない。「深けぬるを」詠では、月でも露でもなく、夜が更けていくのに、まだ来ないと恨むことだけを思っていると、来ないことを知らせる鳥の声が聞こえた（朝になった）という内容である。歌の眼目は「しらるる声」にあるだろう。ほぼ同時代の歌人としては、『続千載集』・恋歌三・後二条院位におまじける時、人人にめされし三十首歌の中に待夜深恋と云ふ事を・一三〇七に

おのづからおもひもいでばとふばかり深けぬる夜半といかでしらせしという同題の「しらせ」を伴った歌があるが、これとて頼阿詠の世界にはなかなか近づかせてくれない。

そうした時に、『六百番歌合』・恋下・寄虫恋の定家（一〇七九）・寂蓮（一〇八〇）の歌が見出される。

卅番

左持

わすれじのちぎりうらむるふるさとのころもしらぬまつむしのこゑ

右

こぬひとのあきのけしきやふけぬらんうらみによわるまつむしの声

定家

寂蓮

「寄虫恋」であるから、両歌共に「まつむしの声」を末句をしている。

定家詠では、「こころもしらぬ」とあり、寂蓮詠では「こぬ」・「ふけむらん」・「うらみ」とある。おそらく頓阿は、この両歌を念頭に置いて、「まつむしの声」を「鳥の声」に変換したのではないか。これによって、全く類歌のない、「深夜待恋」歌を創出し得たのだ。いやはや畏るべき歌人ではないか。

そして、最後の「寄萩戸恋」題の「物を思ふ」詠にいく。この題は、本歌以外には今のところ見出せない、極めて特異な題である。但し、貞治五年（一一三六）一二月に二条良基が主催した『年中行事歌合』に初出があるので、歌と良基による判詞を引いておく。

卅九番 左 寄萩戸恋

七七 物ぞおもふ下葉色づく萩の戸のあくる幾夜かいねがてにして

右 寄桐壺恋

七八 花鳥の色ねにつけておもふにもたぐひなかりし人の面影

頓阿⁽³³⁾

兼熙

左、古今の、「ひとりある人のいねがてにする」とある歌の心、

面白くとりよせて侍り。右、花鳥の色にも音にもと云へる桐つばの更衣の事にや、是はなき人を忍びたるにやと申し出だす人侍りしうへ、歌がらも「萩の下ばは色まさる」よし定め申し侍るにや。萩の戸と申すは、萩をうゑられたればかやうに名付けられたるにや。清涼殿の北の方二間の前の程にて侍るなり。大内には、前に透垣の様なる物あるにやとおぼえ侍る。桐壺と申すは淑景舎なり。桐を庭に植ゑられたる故に桐壺と申すなり。舎を壺と申すにや。たとへば雑舎など申す様に、大内のうちにはちひさき殿なり。
(句読点、「」は補った)

議論するのは、頓阿詠だけであるが、敢えて全文引いておいた。兼熙詠との比較と題のことを考えたいからである。

まず、判詞を記した良基は、本歌を告げてくれている。即ち、『古今集』・秋上・題しらず・よみ人しらず・二二〇の

あきはぎのしたば色づく今よりやひとりある人のいねがてにするである。秋の歌だが、「ひとりある人」が「いねがて」なのだから、独り寝の憂愁を簡単に汲み取ることが可能であり、恋の歌として捉えることも可能である。『古今集』には、もう一つ「いねがてにする」をもつ歌がある。恋一・読み人しらず・四九九の

あしひきの山郭公わがごとや君にこひつついねがてにする

である。こちらは恋歌である。『古今集』「あきはぎの」詠は、その後、家隆（『壬二集』二五・一三）、寂蓮（『寂蓮集』二九）、雅経（『明日香井集』四八二）、後新古今時代に至ると、為家（『為家集』四九三・四九六）、光俊（『閑放集』三六）、宗尊（『柳葉集』五〇一）、融覚（『弘長百

首』(二四二)、雲雅(『文保百首』二八四五)、為兼の父為教(『影供歌合』五八番・一一五)、雅有(『隣女集』四七三・二〇四九・二一三九)、公順(『拾藻鈔』一四五)とあるように、多くの歌人によって本歌取りをされていくが、基本的に、秋、そのなかでも、朝草花・虫・擣衣で詠まれるようである。恋歌は、頓阿詠があるに過ぎない。

次いで、歌ことばとして気になって仕方がないのは「萩の戸」だろう。良基も、わざわざ「萩をうゑられたればかやうに名付けられたるにや。清涼殿の北の方二間の前の程にて侍るなり。大内には、前に透垣の様なる物あるにやとおぼえ侍る。」と注記している。既になくなってしまった宮中・清涼殿の一室なのだろうが、ここで、やや唐突ながら、『増鏡』卷十三「秋のみ山」を引くと、このような記述を見ておきたい。

院(後宇多)にも内(後醍醐)にも、朝政のひま／＼には、御歌合のみしげうきこえし中に、元亨元年八月十五日かとよ、常よりことに月おもしろかりしに、うへ、萩の戸に出でさせ給て、ことなる御遊びなどもあらまほしげなる夜なれど、春日の御櫓、うつし殿におはしますころにて、絲竹の調べは折あしければ、例のたゞうち／＼御歌合あるべしとて、侍従の中納言為藤召されて、にはかに題たてまつる。殿上にさぶらうかぎり、左右おなじ程の歌詠みをえらせ給左、内の上・春宮大夫公賢・(左衛門佐公敏・侍従中納言為藤・中宮権大夫師賢・)宰相維繼・昭訓門院の春日為世女、右に、藤大納言為世・富小路大納言実教・同中納言季雄・公修・宰相実任・少将内侍為信女・忠定朝臣・為冬、忠守などいふ医師も、この道の好き物なりとて、(召し加へらる。(後略)) (旧大系本)

元亨元(一三二一)年の八月十五日、後醍醐は萩の戸に出て、歌合以外遊びをしようと思ったものの、春日の神木を掲げて興福寺大衆・春日社神人たちが宮中に強訴に及んでいた時なので、いつものように歌合をすることとなり。俄に同程度の歌人を招集したところには記されている。その時、頓阿の師為世や四辻善成の師丹波忠守も招集されている。

なお、このエピソードは元亨三年の記事として天正本系『太平記』卷四(応永本『増鏡』に基づく)に引用される。また『弁内侍日記』にも「萩の戸」はまま登場する。

別段、この話と頓阿詠が直接的に結びつくわけではないが、南北朝直前の、ある意味で最後のいい時代に、師為世も出ていた歌合と、今、頓阿が参加している『年中行事歌合』とは、どこかで繋がるかは考えられないだろう。良基は『増鏡』の故事は引いていないけれども、推測に過ぎるものの、頓阿はどこかでこれを意識して、『年中行事歌合』に相応しい「萩の戸」を組み込んだ和歌を詠じたのではないか。

ここで、和歌の内容に踏み込むと、『古今集』の「あきはぎのしたば色づく」を恋歌とすべく「物を思ふ」を初句において、そのまま「した葉色づく」と繋げている。ここでの「した葉」の「した」は前述の「下になは乱れつつ」の「下」と同じ意味合いに違いない。恋が目には見えない心の底から始まったという状況である。歌題という「初恋」状態だろうか。そうした恋のイメージを湛えたまま、『古今集』の「あきはぎ」がここで「萩の戸」と変えられて、今度は「した葉色づく」の直後に排されるのである。となると、歌の内容は、下葉が色づく萩、その萩ではないし、宮中の萩の戸が開けるでもないが、独り萩の戸で過ごしていると、明けていく幾夜も悶々として寝られない、ああ独り寝は辛い、といったものになるだろう。『古今集』的な世界をベースにおきな

がら、「あきはぎ」を「萩の戸」という宮中の一室に読み換え、「した葉色づく萩↓萩の戸」+「開ける↓明ける」+「幾夜がことばの連想で繋がりながら、意味的には別のところにずらされていき、最後は、「いねがてにする」が再度呼び出されて、独り寝を歎く恋歌となっているのだ。まさしく技巧の窮極を地でゆくような歌ではあるまいか。

一方、番われた兼熙詠には同じく宮中にある「桐壺」を読み込んでもない。良基が「歌がらも「萩の下ばは色まさる」よし定め申し侍るにや」と判断したのも当然と言えよう。⁽³⁵⁾

以上、頓阿詠三首を分析してきた。覚助と比較して何が言えるか。和歌自体は題詠の恋歌であり、技量は頓阿の方が上であるから、そこから言えることは和歌の巧拙といったレベルではありえない。ならば何か。それは恋歌という和歌を通して、和歌が僧侶世界において、ここまで定着し、自在に花開いているという事実こそ最大の問題とすべきではなからうか。もはや、在俗歌人たちと較べて、まったく遜色のない和歌世界を僧侶たちは自らの物にしたのである。そうと押さえた上で、今後の課題としては、僧侶の和歌世界を構成する顕密僧と野僧（歌僧）の関係と展開をさらに押さえる必要があるだろう。たとえば、頓阿の曾孫亮孝は権大僧都法印になっている。つまり、もう野僧ではない。その一方で、『古今集』の注釈を東常縁に伝授しているのだ。

とまれ、今回は、僧侶歌人の恋歌レベルを測定したという点で留まりたい。

おわりに

あまりに冗長に論じてきたので、改めてまとめることはしない。今回

の成果を踏まえて、次号では、『新古今集』と『新続古今集』における僧侶の恋歌のありようを題と定型句に焦点を当てて、歌ことば、表現手法を洗い出したい。その時、在俗歌人と比較を行うことは言うまでもない。勅撰集編は次号を以て終わりとなる。

注

- (1) 拙稿「僧侶の恋歌(2)」勅撰集編(中)―八代集《後拾遺集》と《詞花集》所収歌の表現分析―(『明星大学研究紀要―人文学部―日本文学』19、二〇一一年三月)
- (2) 松野陽一『千載和歌集』(新大系)「解説」によれば、『千載集』は「次の『新古今集』に見られるような各主題毎の古代歌人群、近代歌人群の反復の配列ほどの密度の濃さはないが、その先蹤となった」という。とすれば、『新古今集』は『千載集』の方法をより時代を拡大して始原―現在の地平で展開したということになるだろう。『千載集』には古代歌人は登場しない。もっとも、『後拾遺集』と『千載集』まで貫之、業平、伊勢といった古今集歌人は登場しない。いずれも『新古今集』で復活する。
- (3) 深津睦夫「歌人構成」(『中世勅撰和歌集史の構想』「第一編 十三代集の指摘把握」笠間書院、二〇〇五年)は、「新後撰集は、『自天仁』元年至正安三年」を撰歌範囲としており、歌集で言うならば、後拾遺集を初出の上限としている」とし、「実質的には新古今歌人以後を撰歌範囲とし、その中では、当代に近い歌人ほど重視している歌集である」と捉える。この捉え方でよいが、深津が表化(七二頁、七七頁)したように、『後拾遺集』以前の歌人を一切排除した『新後撰集』のありようは十三代集の中でも異様な感じを受けることは否めない。さらに、推測を行えば、その後の京極為兼撰になり、『万葉集』から当代まで選歌している『玉葉集』はまさしく『新後撰集』のアナチテーゼだったのではないか。
- (4) 錦仁「古歌を本歌とする詠法―〈本歌取り〉再考・序論」(『日本文芸の潮流』、一九九四年、「院政期歌合の構造と方法―〈藝〉から〈晴〉への和歌史観の批判」(『日本文学』、一九九四年二月)、『古今集』仮名序と院政期の和歌観念(『日本文学』、一九九五年七月)等と同様の指摘がある。
- (5) 拙稿「僧侶の恋歌(2)」勅撰集編(中)―八代集《後拾遺集》と《詞花集》所収歌の表現分析―(『明星大学研究紀要―人文学部―日本文学』19、二〇一一年)参照。
- (6) 黒田の仏教史関係の業績は『黒田俊雄著作集第二巻 顕密体制論』『黒田俊雄著作

集第三巻 顕密仏教と寺社勢力」(法蔵館、一九九四・九五)に収められている。

- (7) 黒田以降では、代表的な論考を上げておくと、黒田も執筆している中世寺院史研究会編『中世寺院史の研究』(上下、法蔵館、一九八六年、永村真『中世東大寺の組織と経営』(塙書房、一九八九年、平雅行『日本中世の社会と仏教』(塙書房、一九九二年)、佐藤弘夫『神・仏・王権の中世』(法蔵館、一九九八年)、久野修義『日本中世の寺院と社会』(塙書房、一九九九年)、土谷恵『中世寺院の社会と芸能』(吉川弘文館、二〇〇一年)、下坂守『中世寺院史の出版』(思文閣出版、二〇〇一年)、山岸常人『中世寺院の僧団・法会・文書』(東大出版会、二〇〇四年、河音能平・福田榮次郎編『延暦寺と中世社会』(法蔵館、二〇〇四年、末本文美士編『新アジア仏教史12 日本Ⅱ 躍動する中世仏教』(佼成出版社、二〇一〇年)、上島孝『日本中世社会の形成と王権』(名古屋大学出版会、二〇一〇年)となるだろうか。

- (8) 拙稿「院政期の政治神学」(同「記憶の帝国【終わった時代】の古典論」、右文書院、二〇〇四年)参照。

- (9) 平泉澄『中世における社会と社寺の関係』(至文堂、一九二六年)、網野善彦『無縁・苦界・楽』(平凡社、一九七八年)

- (10) 顕昭は、『新古今集』では、「顕昭法師」だが、『新勅撰集』の段階では、極位である法橋であるので、ここに置いた。定家『明月記』(大日本史料による)承元元(一二〇七)年五月二十日条によれば、「顕昭家長を付して日本紀歌注を進ずと云々。法橋を望み申すと云々。その由を知らず。日本紀は我朝の国史、尤も重んずべし。若しその沙汰有るべくは、大臣公卿官外記尤も奉行すべきか。法師は撰進の仁に非ざるか」(原記録文)として、僧侶の身にも拘わらず、日本紀和歌を撰進したこと、しかも、その功によって法橋を要求したことを強く非難している。二十三日条では、「顕昭綱所に昇ると云々」(同上)とあるから、この時、法橋に序せられたことが分かる。『新古今集』では法師だったこともここから諒解される。但し、顕昭は、野僧が出世しただけであるから、厳密な意味では、顕密僧ではない。

- (11) 『統後撰集』以降、慈円はいずれも慈鎮という表記になる。

- (12) 源承は、為家の二男。母は宇都宮頼綱(連生)女。叔山僧。寛元元年(一二四三)に法眼に叙せられた『和歌大辞典』、佐藤恒雄執筆)

- (13) 定為は、為氏男、為世の同母弟であり、醍醐寺の僧として、嘉元元年(一一三〇)までに法印に至ったという『和歌大辞典』、佐藤恒雄執筆。顕密僧ではあったが、二条派の歌僧としても活躍した。

- (14) 淨弁は、生没年・出自・家系不明であるが『和歌大辞典』「淨弁」項、荒木尚執筆、稲田利徳『和歌四天王の研究』、笠間書院、一九九九年、「確かに、先の『統千載集』の淨弁の署名も「権律師」と僧綱を付しており、いわゆる特定の寺院に所属しない野

僧ではなかったよう」(稲田前掲書)である。また、僧官僧位も、「元弘元年頃までは「権律師」にあり、その後建武四年二月までにの間に「権少僧都」になり、最晩年(康永三年以前)に「法印」に序せられたであろう」(稲田前掲書)とあるから、心敬「老のくりごと」に「淨弁法師」とされるけれども、顕密僧として押さえておくのが適当だろう。

- (15) 明魏は耕雲の道号、法諱は子晋。耕雲は俗名花山院長親。妙光寺内大臣花山院家賢の男、南朝の内大臣という家系から言って、本来は僧綱になるはずだが、南朝という存在、かつまた、南北朝合一以前に放浪し、京都で出家をしている関係から禅僧かつ野僧となったのであろう。なお、將軍足利義持に近侍し、心の友となり、南朝の源氏学を義持に伝授した(拙稿「南」「北」の邂逅―足利義持と耕雲、小林保治編『中世文学の回廊』(勉誠出版、二〇〇八年参照)。

- (16) 慶雲は淨弁の子であり、生没年は未詳ながら、生年は永仁年間(一二九三―一二九八)の頃とされ、「七十余歳から八十歳近くの長寿」であった(稲田利徳前掲書)。また、稲田前掲書によれば、「文和四年(一二三五)の頃には「目代増長坊大進法印慶雲」あるので、これ以前に「法印」の僧位を得ていた」とある。また、それ以前に権律師になっているのは、父淨弁の死に際して得たのではないかと推測している。ということ、本来ならば、法親王、摂関家子弟、さらに足利義満弟である満詮の男義連(園城寺長吏)のような僧が顕密僧であり、父淨弁同様、顕密僧になる家系ではないが、ここでは顕密僧として扱う。

- (17) 堯孝は頼阿の曾孫。堯尋の子。権大僧都法印に昇った。常光院と通称された(『和歌大辞典』、稲田浩子執筆)。井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町前期「改訂新版」』(風間書房、一九八四年)によれば、「堯孝は法印権大僧都という僧位僧官を持ち、殿上人と同じ列にある身分であり、しかも和歌所旧老法印・和歌所老拙法印なる称を頻りに用いて(古今集・愚問賢注を文安二、四年に書写した奥書、文安五年義政に進めた桂明抄の奥書など)頼阿嫡流の権威を示し」とあるように、僧位僧官をかなり効果的に利用していたようである。

- (18) 佐藤恒雄「後嵯峨院の時代とその歌壇」(『藤原為家研究』、笠間書院、二〇〇八年)、今井明「後嵯峨院の志向―その大井河行幸 再興発想歌を中心に―」(『中古文学論叢』二、一九八一年)。

- (19) このうち、行意は、勅撰集入集は『新勅撰集』(4)、『統後撰集』(5)、『統古今集』(7)とあるように、前代から入集している。松殿基房の子であり、園城寺長史になつてゐるから、典型的な顕密僧だが、それでも、恋歌は、『統古今集』まで入集しなかったことをここでは指摘しておきたい。他の顕密僧は、いずれも『統古今集』から入集している。

- (20) 拙稿「僧侶の恋歌(1)」勅撰集編(上)「(明星大学研究紀要『日本文化学部・言語文化学科』18、二〇一〇年)
- (21) 二条派對京極派の闘争と勅撰集の展開に関しては、田村柳菫「和歌の消長」(『岩波講座日本文学史 第五巻』一九九五年) 参照。
- (22) 「新千載和歌集の撰集意図」(『深津前掲書』) なお、先駆的な仕事として福田秀一「中世勅撰和歌集の撰集意識―序・題号・部立構成から見た―」(『成城文芸』47、一九六七、中世和歌史の研究統編『二〇〇七年に再収』) がある。
- (23) 源俊賴は、『拾遺抄』に做って十巻立てにしたというが、どうして『拾遺抄』に做わねばならないのか、これも今後の課題である。
- (24) 『千載集』の撰者俊成の和歌の道統に対する強い意識については、藤平春男「歌論の研究」(ベリカン社、一九八八年、『藤平春男著作集 第3巻 歌論研究1』) 参照。また、松野前掲論文(新大系本『千載集』解説)は、「この道長時代の栄光を後白河院の経緯によって回復するという願望の図式が、雑部にとどまらず、『千載集』全体にこめられた撰者の編纂意図であったと見てよからう」とする。首肯される見解と言ってよい。
- (25) 『新千載集』には、敵対した人たち(光厳院対後醍醐院、足利尊氏対直義、足利家対北条氏、二条為世対京極為兼)が登場する。中には
おなじこころ(花)をよめる
八九 みよしのの高ねの桜さきしより雲さへ花のかにほひつつ
左近中将義詮
百首歌たてまつりし時
等持院贈左大臣(尊氏)
九〇 こもりえの初瀬の桜さきしよりあらはにかかる花のしら雲
正中二年七月廿七日うへのをのこども題をさぐりて百首歌つかう
まつりける時、初花といへる事をよませ給うける 後醍醐院御製
九一 おしなべてこのめも春とみえしより花になり行く三芳野の山
とあるように、敵対する足利尊氏・義詮父子と後醍醐院が唱和しているかに幻想させるような排列さえもある。これについては、拙稿「日本意識の表象―日本・我国の風俗・公」秩序」(『和歌をひらく 第1巻 和歌の力』、渡部泰明編、岩波書店、二〇〇五年) 参照のこと。
- (26) 渡部泰明「身の表現としての和歌」(渡部編前掲書)。
- (27) 『玉葉集』の入集数の多い歌人を列挙すると、伏見院九三首、定家六九首、為子六〇首、俊成五九首、西行五七首、為家五一首、永福門院四九首、為兼三六首、和泉式部三四首、実氏三一首、親子三〇首、慈円(慈鎮)二八首、貫之二六首、人麻呂二四首(『和歌大辞典』)であり、当代の伏見院・実兼・為子・永福門院・為子と新古今時代の定家・首肯に・西行・慈円がとりわけ重視されていることが分かる。西行も新古

- 今時代では三番目である。慈円(慈鎮)の約二倍入集していることも参考にならうか。ちなみに慈円(慈鎮)は、『新後撰集』では九首、『続千載集』では六首である。
- (28) 西行詠の前後を上げておく。「恋のうたとて 典侍親子朝臣 八二〇 人しれずおもひしものをいかにして見えぬ心の色にいづらん」千五百番歌合に 後京極摂政前太政大臣 八二二 あら磯の浪よせかくるいはね松いはねどねにはあらはれぬべし」とあるように、忍恋が露顕したという歌を集めている。
- (29) 井上宗雄「中世歌壇史の研究 南北朝期」(第一編 鎌倉末期の歌壇)「第三章 延慶・正和期の歌壇」に指摘がある。なお、頼阿は同書に拠れば、元亨頃(一二二一―二四)に覚助のもとに召されたことである。
- (30) 『とはすがたり』における性助法親王と目される「有明の月」の二条に対する妄念に近い感情だろうか。題詠とはいえ、覚助はこのような感情を理解することも仏道と想っていたのかもしれない。
- (31) 『夫木和歌抄』はこの歌を「人丸」とする。
- (32) 『年中行事歌合』については、現在、小川剛生「有職字と古典学―年中行事歌合」『二条良基研究』笠間書院、二〇〇五年所収)が研究の現段階を示して余りある。
- (33) 『歌合』では、「あくる幾夜か」となっている。解釈は、『新統古今集』の「幾夜も」で行いたい。
- (34) 忠守の事蹟については、小川剛生「医道と歌道のあいだ―丹波忠守の事蹟を考証し、徒然草第一〇三段に及ぶ」『藝文研究』一〇〇、二〇一一年六月) 参照。
- (35) 頼阿については、渡部泰明「頼阿論―題詠のボエジ」『文学』第7巻・第3号、二〇〇六年 五一―六六)が頼阿研究の最先端である。渡部氏は「頼阿の和歌は、個性を表す詩ではない。個性を消してゆく過程を表現する詩である。消失する個性の代替として、古く受け継がれてきたものを、他者たちに手渡そうとする詩である」と捉える。全面的に賛意を表したい。

藤井懶齋年譜稿（五）

——元禄十一から宝永六年まで

勝又基*

元禄十一年（一六九八）戊寅 八十二歳

△この頃、増田立軒、懶齋を鳴滝に訪れる。

増田立軒『仲子語録』掲載。文章は元禄八年（一六九五）【居所（四）鳴滝隠棲】の項に引用した。懶齋が自ら鳴滝隠棲の理由を語っている。記事に訪問の年次は明記されていないが、柴田稿九十八頁はこれを元禄十一年頃のこととする。前後の記事との関係からの推定であろうと思われる、本稿もこれに従った。

【増田立軒】

阿波藩儒増田氏の祖・立軒については竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』（平成元年八月 風間書房）に詳しい。これによれば立軒は延宝元年（一六七三）に阿波藩医・増田策庵玄胡の次男として徳島に生まれた。

名は謙之、字は益夫、通称は初め文内、後に平内と改めた。立軒は号である。元禄四年（一六九一）、十九歳で京都に遊学し、当時伏見に在住した中村惕斎に勧められて儒学を学んだ。惕斎からは四十四歳の年下である。以後惕斎のもとで学び、元禄十五年（一七〇二）七月二十六日に惕斎が没して後は惕斎の学塾を相続する。

宝永五年（一七〇八）九月、三十三歳で阿波藩に呼び戻され、六代藩主綱矩および世子吉武の侍講を務めることとなった。寛保三年（一七四三）八月十四日没、七十一歳。

立軒は師・惕斎の晩年に未脱稿の著書の完成を託されている。そのこともあってか、惕斎の著書を校点刊行した『詩経示蒙句解』等や、『惕斎先生文集』『惕斎先生行状』『仲子語録』など師に関わる編著が多い。いきおい懶齋とのつながりも浅からぬものであったことが想像される。

【淡路の懶齋連】

阿波藩儒・増田立軒に触れた流れで、阿波藩の領地である淡路島における注目すべき動きを紹介したい。じつは近世中期の淡路には、藤井懶齋を奉ずる学者の一群があった。その中心人物の一人が仲野安雄である。

仲野安雄は元禄七年（一六九四）、伊加利村の庄屋・孫左衛門の長男として生まれた。懶齋よりは八十年遅く生まれたことになる。安永七年（一七七八）没、八十五歳。淡路郷土史『淡路常磐草』の著者としてよく知られている。彼の伝は菊川兼男「仲野安雄と著述目録」（『三原文化』十八号 昭和三十六年二月 兵庫県立三原高等学校文化部）、同「享保・宝暦期の淡路の学者とその思想」（『兵庫史学』二十九・三十合併号 昭和三十七年七月 兵庫史学会）、同「三原文化」第四章第四節「享保・宝暦期の文化」（昭和五十四年三月 三原郡町村会事務所）に詳しい。現在その資料は淡路歴史文化史料館（兵庫県洲本市）に一括して

管理されており、『淡路文化史料館収蔵史料目録 第十二集 仲野安雄家／立木兼善／関係文書』（平成七年十二月 洲本市立淡路文化史料館）が備わる。

安雄は安永期まで生きたため、主に近世中々後期の視点から把握されてきた。たとえば菊川稿は安雄の国学者としての側面、古文辞学者としての側面を強調している。しかし本稿にとって安雄が興味深いのは、藤井懶斎著書の注釈を行っている点である。仲野安雄文庫には『孝子伝萱葉抄』（自筆写本三冊）、『諫諍録栢葉抄』（自筆写本二冊）、『睡余録附纂』（自筆写本二冊）が残されている。それぞれ懶斎の漢文著書『本朝孝子伝』『国朝諫諍録』『睡余録』の注釈書である。これらの成立年次は明記されていないが、およそ延享元年前後の成立と考えている。『諫諍録栢葉抄』の草稿本たる『諫諍録 解』（請求記号16/12）裏見返には「（扇形印）延享元年十月妻木翁為諸生講述諫諍録、至二年六月終講。其講本有標注。今乞仮其本、以補愚抄之遺漏」と、延享元年（一七四四）に妻木翁がおこなった『国朝諫諍録』についての講義をもとに注を補ったことが記されている。これが成立年次測定のひとつの基準となる。

『国朝諫諍録』の講義を行っていたという「妻木翁」とは、阿波藩士・妻木氏のことである。妻木氏の家系は未詳であるが、宮本武史編『徳島藩士譜』（昭和四十七年十月 同刊行会）によれば、その一人貞彦は洲本諸奉行および洲本御船預り奉行を務めた人物である。寛延年間から宝暦四年の分限帳にその名が記されており、百石二人扶持であったという。

彼らが行った議論の記録に『清議会稿』がある。これは妻木貞彦が策問し、妻木恒道、中野安雄ら十数名が答えるという知的鍛錬である。これは延享二年（一七四五）九月から宝暦二年（一七五二）十二月までの

約七年間行われた。

この論題にも、藤井懶斎の『本朝孝子伝』や『睡余録』の文がしばしば用いられている。たとえば延享二年（一七四五）十月二十五日の会では、妻木貞彦の出題で、『本朝孝子伝』が本問資忠を孝子の一人に採っていることは是非を問うている。また該書の別箇所にも、

敬ふ所の故人、懶斎子等を以て尊と為す。

（延享三年（一七四六）正月九日、上田春清）

嘗て懶斎先生と云ふ者有り。識高く、学博く、行厚く、論明かなり。実に才徳兼備の君子と謂ふべし。老後書を著し、『睡余録』と号す。学者尤も読まざるべからざるの書なり。

（同年正月二十五日、妻木貞彦）

などと、懶斎の学問を仰ぐべきものとして扱っている言辭が見える。これほど懶斎に心酔している一群を、筆者は他のどの地域、どの時代においても知らない。

では、このような懶斎連とも言うべき一群はどのようにして発生したのであろうか。『兵庫県史』第三編近世（Ⅱ）（昭和五十五年三月 兵庫県）第七章「学問・文化の隆替」は妻木繁彦について「儒学は洲本の美馬聖兵衛義方に手ほどきを受け、さらに京都に遊学して山崎闇斎の門下藤井懶斎に学びこれに傾倒した」と記している。ただし今のところ懶斎に学んだというこの記述の根拠を追跡できていない。

現段階で指摘できるのは、淡路が属した阿波藩の学問傾向である。阿波藩には増田立軒がいた。元禄十一年（一六九八）【増田立軒】の項に述べた通り、阿波藩儒・増田立軒は懶斎の朋友・中村惕斎に従い、学んでいた。そして先に見た『清議会稿』には、米本立的、多田正弼ら、増田立軒の門人も参加している。淡路島の懶斎びいきは、中村惕斎を奉ず

る阿波藩学の一支流としてひとまず理解することが可能であろう。

○三月、大和国の孝女伊麻の伝記『今市物語』を著す。

【『今市物語』】

伊麻は大和国今市村（現奈良県葛城市）の孝女である。伊麻については『当麻町史続編』（昭和五十一年四月 当麻町教育委員会）が諸文献を集めて適切にまとめている。

伊麻と弟の長兵衛は、父・長右衛門によく仕えていた。寛文十一年（一六七一）夏、流行の疫病で父が危篤となり、医者は鰻を煮て食べれば病が癒えると診断した。その夜、家の水瓶から音がするので見てみると、大きな鰻が中にいたのでこれを食べさせ、父の病は癒えた。遠近の人は孝の徳が天に通じたのだと二人を賞し、郡山侯（本多内記政勝）はこれを褒めて錢穀を伊麻に与えた、という逸話がよく知られている。

そののち貞享五年（一六八八）四月十二日には松尾芭蕉が訪れた。そのことを京都で芭蕉から聞いた友人の雲竹は、画工友竹とともに伊麻を訪れて画賛を描いている。伊麻は元禄十七年（一七〇四）二月二十七日に八十一歳にて没している。

さてこの伊麻について記した伝記でよく知られているものに、『今市物語』がある。すでに岡本勝「石水博物館蔵『今市物語』（翻刻と解題）」（『愛知教育大学国語国文学報』六十（平成十四年三月 愛知教育大学国語国文学研究室）や中田武編『田中大秀 第五冊「随筆・冊子」（二）』（平成十七年二月 勉誠社）に翻字されている。

該書の末尾には「かくいふは元禄十一年の春の末つかたなり。いまはことし七十五、長は七十一なり」とあるので、伊麻の生前に書かれた作

品だということが分かる。ただし著者については書物を見る限り明記されておらず、従来明らかになっていなかった。

該書が懶斎の著書だと分かったのは、『三輪執斎の発言に気づいたからである。『執斎雑著』（『日本倫理彙編』卷之二（明治三十四年八月 育成会）所載）卷之二「孝子於以麻碑」に次のような記載がある。

元禄十一年藤井懶斎翁其事を記せり。其時いま七十五長七十一にて恙なし。今年辛亥に皆烏有となる。郷人其家に碑せむとして、遠く言を予以徴す。よりて藤井子の伝をつみて、其概をのぶといふ。

実際に懶斎とも面会している三輪執斎の言であることを考えると、信憑性は高いと言えよう。こうして新たな懶斎作の孝子伝が判明して、改めて天和・元禄期の孝子伝に懶斎が果たした役割の大きさに思い知らされる。池田光政や松平忠房など、地方で閉じた動きはあったものの、全国を見渡して孝子説話や孝子伝を探り、自らも伝記を記す、という営為は、この時期には懶斎の独壇場であったと言っても過言ではないのである。

元禄十二年（一六九九）己卯 八十三歳

○元旦、歳旦歌あり。

関田駒吉「藤井懶斎の没年」（元和三年（一六一七）【生没年】の項参照）によれば、森繁夫所蔵の小点もの自筆として、「八十二にいたりける春のはじめに／こゝのそちこちかの浦路のすて小船朽せで年をこゆるつれなさ」とあるという。

元禄十三年（一七〇〇）庚辰 八十四歳

○この年、多久聖廟の孔夫子像成る。中村惕斎と懶斎が共同で設計する。

『重要文化財多久聖廟』第三版（昭和五十八年三月 多久市教育委員会）に載る。

多久聖廟は肥前国小城郡多久邑（現佐賀県多久市）に存する聖廟である。のちに佐賀藩家老となった多久茂文によって起案され、元禄五年（一六九二）から着工、およそ十六年の歳月を経て宝永五年（一七〇八）に落成を見た。この間聖像は元禄十三（一七〇〇）年に京都において鑄造され、翌年東原庵内に仮小屋を設立して祭られたという。

『重要文化財多久聖廟』口絵には孔夫子像の写真が掲載されている。

このキャプションによれば「元禄十三年製作・高さ二尺七寸／中村惕斎作／唐金製・銘は南効中欽監工とある」という。この製作に藤井懶斎が関わっていたことは、武富英亮「鶴山書院遷座記」に次の通り記されている（原漢文）。

欽や深く聖学の蘊を極め、制度文為の学を以て一家を為す。当時洛の藤臧老儒と雁行を為す。仲欽甚だ藤公の志願を喜び、藤臧と相謀り、古今の聖蹟を考へ、……

「欽」「仲欽」は中村惕斎。「藤臧老儒」は藤井懶斎。「藤公」は多久茂文。つまり中村惕斎が多久茂文から聖像製作の依頼を受けた際、惕斎は懶斎と謀って考証を行い、像を設計したというのである。

元禄十五年（一七〇二）壬午 八十六歳

○元旦、歳旦歌あり。

宮川忍斎『槎行記』に、「又其よはひは八十餘り六のことぶきを受たりしゆへに、此春筆を試る哥に、／八十あまりむつかのよどの古柳なをこの春もくちや残らん／とよみ侍りぬ」とある。また『石原家記』巻上「延宝六戊午年」の項にも「八十六歳歳旦」として同じ歌が掲載されている。

□三月、都の錦『元禄大平記』刊。「京都儒者親四天王」に数えられる。

『元禄大平記』（京都升屋為兵衛刊）は文壇評的な側面のある浮世草子である。その巻七の四「今の学者を指折てみる」に懶斎の名が出る。「京都儒者親四天王」として、一人武者の北村伊兵衛に続いて、伊藤源助（仁斎）・中村七左衛門（惕斎）・浅見十次郎（綱斎）と並んで挙げられているのである。「藤井玄著 六十三歳号懶斎」と題されたそれは、「三番に藤井蘭斎これ又隠儒にして道をたのしむ。老荘の学問においては此人につゞくものなし。陸象山と首引きしてもまけぬほどの男」と評されている（本文は中嶋隆編『都の錦集』（叢書江戸文庫 国書刊行会）に拠った）。

【金蘭斎との混同】

右の記述で目を引くのは、懶斎を老荘の学問の第一人者と評していることである。

述べてきた通り、藤井懶齋は医を岡本玄治に学び、久留米藩に儒医として仕えた。儒学では山崎闇斎と意見を交わし、中村惕斎らと交わった朱子学者である。老荘の学に親しんだ形跡は見ることができない。それほどばかりか著書中には次のような老荘批判の言辞も見えて取る事ができる。

夢多くは是れ妄、故に真人は之無し。惟愚者妄を認て真と為す。

故に曰く「癡人の前へ夢説くべからず」と。武州人の夢の如き真妄如何。曰く「真人夢無し。是れ乃ち莊周が説話にして聖經の言ふ所に非ず（下略）」

（『本朝孝子伝』士庶部十九「武州孝子」）

此段又莊周がよだれをねぶれり。（『徒然草摘義』）

つまり藤井懶齋が老荘の第一人者だという評は全くの見間違いである。では都の錦はどうして誤ったのか。結論から言えば、この一文は藤井懶齋と同時代の老荘学者・金蘭齋とを混同している。

金蘭齋は、当時としては珍しい老荘学者であった。その伝については、伴蒿溪『近世畸人伝』に載る他、近代では安藤和風「金蘭齋」（『俳諧研究』〈明治四十一年五月 春陽堂〉）、中村幸彦「老荘の実践者 金蘭齋」（『中村幸彦著述集』所収）等に論考があり、今ここで新たに付け加えるべき資料を持たない。諸先学の業績に依り、金蘭齋伝の要点をかいつまんでおこう。

金蘭齋は童名江長、後、三允と改める。諱徳隣、字忠祐。号蘭齋、洛山逸民、臥雲叟等。秋田藩医小鴨三室の子。十七歳にして上京し、西山李斎、伊藤仁斎に学んだ。夙に通世の志があり、岡崎村、神楽岡に隠れ住んだ。延宝九年より五年間秋田藩に仕官した後、上京三年再び京都に戻るに当たって、姓を父の本姓である金氏に戻し、享保十六年に京都で没した。

金蘭齋の伝記として現在知られている最もまとまったものは、平元梅

隣が記した「退隠草序」である。『退隠草』は現存を知らないが、この序文のみ、安藤和風の筆写によると思われるものが秋田県立図書館に所蔵されている（『退隠草序 梅隣先生事状』AH919/155）。ここで注目すべきは次の部分である。

延宝九年、牧野善左衛門到自本庄誘掖先生帰秋田。先生年二十八。

臨発先生有詩云「終焉必取洛山」。明年三忠病死。先生改名玄固業医留。五年而上京與仲弼同居洛東岩下先生学舎。

すなわち、都の錦が『元禄太平記』を執筆した元禄末年前後には、藤井懶齋も金蘭齋も共に京都に住していた事になるのである。そして、「ランサイ」という名前の一致が何より混同の要因であっただろう。所見の範囲では、藤井懶齋が自称として「蘭齋」の用字を用いたものはないが、他人が「蘭齋」と表記する同時代の事例は、「国朝諫諍録 藤井蘭齋述」（元禄五年刊書籍目録）、「藤蘭齋ハ有馬殿の扶持人也、今ハ京師北山ニアリ」（中村雑記）など、いくつかを見出すことができた。このように、藤井懶齋と金蘭齋は、同時代・同地域に共に儒者を業としていたのみならず、同音の号を用いていた事により、『元禄大平記』の記事のような両者を混同した記事が生まれたのである。

さらに言えば、藤井懶齋・金蘭齋の両者は共に隠逸者として名高かった。鍋島直條『楓園家塵』巻百八十「塵袋」上巻には、「京洛之隠逸」として白幽、蘭齋、兵九郎の三名を挙げる。隠者としての側面が両者の素性を分かりにくくし、混同を助長したのではなかっただろうか。

□七月二十六日、中村惕斎没、七十四歳。

遺体は同二十九日未明、洛北一乗寺村円光寺の三町ほど北に埋葬され

る。『仲子語録』によれば、懶斎は葬礼に参列していない。（柴田稿）

○八月、「多久邑字説」を著す。

末尾に「元禄壬午壮月穀日／維敬西人藤季廉完筆于伊蕎軒下年八十六」とある。『重要文化財多久聖廟』第三版（昭和五十八年三月 多久市教育委員会）に載る。

多久聖廟については元禄十三年（一七〇〇）の項参照。聖廟の建設を発案した多久邑主・多久茂文に請われて書いたものであることが文中に明記されている。

○九月、『扶桑千家詩』刊。懶斎詩「春雪」が収められる。

該書は筑前の儒者・古野鏡山の編。江戸時代前期の儒者・詩人による漢詩を集めた叢集である。刊記「元禄十五壬午載九月吉祥日／平安城書肆 上原半兵衛梓」。二巻から成り、上巻には七言絶句百七十九首、下巻には七言律詩九十一首を、それぞれ四季の順に集めている。その巻上に次の詩が収められている（原漢文）。

春雪 藤井懶斎京師

春來飛雪更に多きことを加ふ 瘦竹病梅汝を如何せん
山亦た余が白髪に同きに似て 峰頭歳を蹠て転幡々

○十月二十五日、千本の自宅に福岡藩の御伽衆宮川忍斎を迎える。

久保田啓一「福岡藩臨時御伽衆宮川忍斎」（『雅俗』第二号（平成七年一月 雅俗の会））の紹介に基づく。宮川忍斎は正保四年（一六四七）生、享保元年（一七一六）没、七十歳。写本で広く流布した『関ヶ原軍記大成』の著者として知られる人物である。元禄十五年（一七〇二）年十月、忍斎は福岡藩四代藩主・黒田綱政の扈從として京都まで付き従った。その際の紀行『榎行記』に懶斎を訪問した記事が見える。「千本のほとり」を訪れた忍斎を出迎えたのは懶斎とその次男・象水である。以下、その問答部分を引用してみる（底本は九州大学音無文庫本）。

時うつりて後あるじのいはく、「今年の春身まかり給ひし筑前の国老重種は誰人の道を聞給ひしにや」と有けるにより、「土岐重元のつたへなり」と答へ侍りしに、「止翁の学術おほやうたしく聞へにたり。」此故に国老の学びにつるえなかりしにや。其なくなり給はんとする頃、桜の花を見て、

花も花見る人もひとの世中にうごかぬ山のやまさくらかな
とよめる歌もいみ有てきこえ侍る」
など語聞えしつるでに予がいはく、

「今又わが国に致仕の宰臣立花増弘と号する有り。下官邦君に随ひて旅だつ時、その老人のいへらく、『われ若かりし時より久しく君につかへて江戸長崎の旅行にいく度か随ひ侍りしが、旅に出ては君臣なれ近付て、うやまひ頓てゆるみやすくおぼへし。いふにはたらず事ながら、其心せよかし』といへり。常に持敬チケイの工夫有て心にぬしある人はいかにもあれ、我つらの放心のみなるつたなき身には、

いみじき御いましめならずや」

と語り侍りしに、あるじ其宰臣の姓名を問ひかへして、

「われつくしに住たりし時より令名を聞し人なり。事上の敬を思^{ジヤウ}

はれたる心づかひ、いと奥ゆかし。さればひたすら敬に居て心にぬしある人をその随ひがほなるに付て思ひ出ぬ。昨ふ人の入来て、

『はからずも二百五十戒をたもつ僧にあひしが、いはゆる他道の趣したるに似て、そしきも忍びかたし』といひしに、とりあへず絶句をつくりたり」

とて、語りいでたりし三四の句、

何知二百十余戒 唯在聖門一敬中 懶齋

これかれ物語する内に、予が師として僅に道を聞習ひし長沼澹齋伏見に有し比、折ふしに語りあひし事などいひ出で、其身まかりしをあるじのふかくおしめるも、いとかなし。

それより年比の物語いとはてしなきつるでに、又予がいはいく、

「此度君に随ひたる人々の中に福富大休軒と号するあり。その子に又百と名付たるは、今年はつかに十一なれど、四五のふみとくよみおはり、そのざえ常の子にかはりたるを、父の大休、憐の余りにいざなひのぼりしか、伊藤維楨にたいめを乞ひ、同じくは貴翁にもまみへさせて国に帰らまほしといひつれど、いなみ玉はん事をしりて、うかひかざりし」

と語り侍るに、翁のいはく、

「少年の時よりざえあるは、おひさきこもりて心にくし。されどつたなき老が身はいふもたらず。たとひ名になるはかせにもせよ、しばしが程のためさせて我が子のほまれとなさんよりはしかじ。貝原老儒にあつらへつて、たゞしきまなびをわづかにも聞得させ

てんこそ、いか斗親のめぐみならめ」

とて、すべて學術にえらびある事を語りこえしが、みじかき冬の日もたけて、餉をもていでしかば、あるじと共にくひて盃をとりかはし、いとまこひてまかりなるとする折しも、から歌、大和歌を思ひつゞけて、

芳声満耳已多時 情意只憑鴻雁馳

忽見德輝又何幸 令人喜色溢双眉

船出せし八重の塩路の旅ごろも

きてしもうれし九重の空

春にまた来てこそとはめ色も香も

ふかき千もとの花の木陰を

といひ出たりしに、あるじ筆を染て、

多季相憶一逢時 詩趣文論豈背馳

未至哀齡才最老 為君我甚憶麗眉

たちよるはうれしかりしをたびごろも

きてとくかえるうらみやはなき

千本さく春にあらねど老らくの

花よりもろき身をいかにせむ

と書ひ付しも例のいちはやきみやびなるべし。（下略）

福岡藩家老を務めた立花重種、忍齋の師である長沼澹齋らを上げて、その人となりや學問について論じている。その論は要するに文中でも言う通り「學術にえらびある事」、すなわち適切な學問と師を選ぶべきだということである。それは居敬を中心とした學びであり、より具体的に言えば土岐重元、長沼澹齋、貝原益軒のような人々に學べ、ということであった。

元禄十六年（一七〇三） 癸未 八十七歳

□正月二十日、室鳩巢より稻生若水へ手紙。約一ヶ月前に起きた赤穂浪士討入りに触れ、懶斎の評価を想像する。

近藤磐雄『加賀松雲公』中巻挿箋二十九に写真とともに紹介されている南郷貴族院議員所蔵の稻生若水あて室鳩巢書翰。当時鳩巢は金沢に、若水は京都にいた。この中に次のような文面がある（『加賀松雲公』翻字による）。

江戸旧臘十四日、浅野氏旧臣共、君仇吉良上野介殿を討取申儀、前代未聞、忠義之氣凛々。名教之助益と奉存候。赤穂士風の厚も是にて相知れ、偏に内匠頭殿養育人材之巧も著れ申候。当地なども此儀のみ沙汰仕候。其御地輿論いかゞ候哉。長民、象水等の豪士、いかゞ評し被申候哉と奉存候。四十八人之内、兼而御存知之者も有之候哉。誠以田横五百人の英氣と奉存候。伊蒿老人さぞ大慶之体推察、見申様に奉存候。

鳩巢は浪士の行動を讃えた上で、この事件に対する京都における輿論と、懶斎の次男・象水（元禄元年（一六八八）五月、【家族（四）】次男・象水】の項参照）の反応について尋ねている。そして伊蒿老人すなわち懶斎はさぞ喜んでいるだろうと推察している。元禄三年（一六九〇）五月の項で見た通り、稻生若水は懶斎に『いなご草』の序文を請うた人物。加賀藩とのつながりも深く、鳩巢が懶斎の反応を質すのに格好の人物であった。

△この年、『読書余吟』を著すか。

『読書余吟』

懶斎の道歌活動は、見てきた『蔵笥百首』『竹馬歌』に加えて、『読書余吟』がある。所見本である岩瀬文庫本は、室鳩巢『大学詠歌』と合冊された写本で、内題下に「季廉」と署名がある。

該書は五常、小学、大学、論語、孟子、中庸、近思録、易、詩経、書経、春秋、礼記の内容を百一首の和歌にしたものである。たとえば五常のうち「仁」と題された和歌は、

草も木もうるほふ春の雨なれや恵あまねき人のこゝろは
というものである。初学者にも分かりやすいよう儒学の本質を説こうとした書物である。

岩瀬文庫本に成立年次は明記されていない。ただし立石好人「筑後の歌人（一）」（『筑後』第五号（昭和八年四月））に、元禄十五年の歳旦歌を挙げたあと、「翌年には五常の和歌とて」として、仁義礼智信の和歌五首を挙げている。当面これに従って元禄十六年（一七〇三）の成立と考えておく。

なお没後百二十九年を経た天保九年（一八三八）十二月に大坂加賀谷善藏他二肆より『初学伊呂波歌教鑑』が刊行される。該書は見返に「藤井懶斎先生著」と明記し、青蓼館主人による序にも、「藤井懶斎先生が婆心こゝに謁されしは、竹馬歌、蔵笥百首など、其余著述ありし数書に明なり。今此以呂波歌も即其一つにして、仁義礼智信の道を論し、身を修め、家を斉ふの至要を示すや専ら簡約にして（下略）」と、懶斎作であることを謳っている。しかし『江戸時代女性文庫』三（平成六年五月 大空社）解題（小泉吉永執筆）が指摘する通りこれは仮託であり、

実際には懶斎の作ではない。

【四書解説】

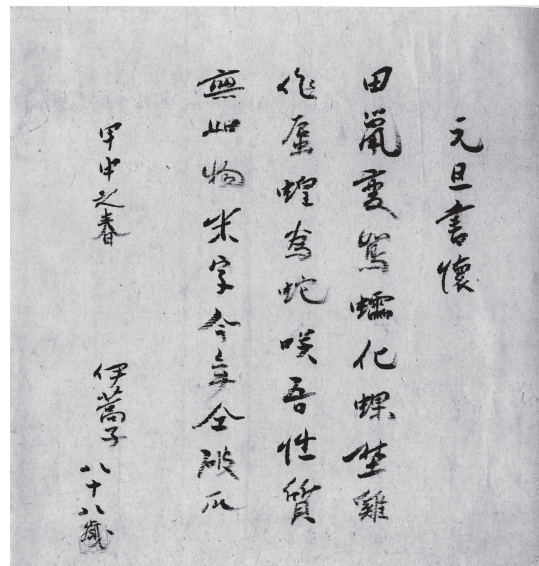
併せて懶斎の著書として指摘されながら現存が確かめられない書物に ついても言及しておく。関儀一郎『近世漢文学者^{伝記}大事典』（昭和十八年）に著述の一として『四書解説』を挙げる。題名からして懶斎の著作にふさわしいように思うが、最終的な判断には現物の出現を待つしかない。

○五月、中村惕斎著『孝経示蒙句解』に序す。

該書は中村惕斎編の漢籍国字解。所見本都立中央図書館諸橋文庫本（123/MW/242）は刊記「華洛二條／書肆武村新兵衛刊行」。懶斎序は「孝経示蒙句解序」として、「元禄癸未五月穀日／伊蒿子膝臧季廉序」。これによれば小原大丈軒（季忠）が出版を企図し、彼から序の執筆を求められたという。

○六月中旬、『惕斎先生行状』に跋を寄す。

該書は仲村惕斎の没後に編まれ、延享三年（一七四六）に刊行されたもの。所見本内閣文庫本は刊記「延享丙寅秋九月／書林／阿州徳島／神子田所平／大阪淡路町心斎橋筋角／安井嘉兵衛／板行」。大本一卷一冊。冒頭に惕斎が自らの像に施した賛の自筆を左版で刻し、惕斎七十余歳時の肖像画も掲載する。増田立件による行状（「元禄十五年歳次壬午冬十月日／門人阿陽増謙益夫謹状」）のあと、懶斎跋「書仲敬甫行状之後」がある。末尾には「元禄癸未季夏中渾伊蒿子膝臧」とある。このあと市



邨元感、藤成子修、河村誠之、伴正貞、露木篤慎伯の跋が続く。

宝永元年（一七〇四） 甲申 八十八歳

○初春、歳旦詩を詠む。

架蔵色紙に懶斎八十八歳の歳旦詩「元旦所懷」あり（左図参照）。「甲申之春 伊蒿子 八十八歳〔印〕」とある。印記は不鮮明で判読しがた い。

この色紙が貴重なのは懶斎の筆跡が分かるところである。元禄三年【居所（三）千本】の項に挙げた書翰と並び、現時点では数少ない自筆

と目される資料である。

宝永二年（一七〇五） 乙酉 八十九歳

○十一月中旬、自身の旧作『再往日記』に跋する。

正保二年（一六四五）『再往日記』参照。跋文に「宝永乙酉（引用者注：宝永二（一七〇五）年）仲冬中澣伊蒿子年八十九」とある。

○この年、「真鍋氏説」を記す。

『竹原志料』所載。漢文。末尾に「洛陽老儒生藤原姓真邊氏伊蒿子臧季廉染筆於懶斎下時年八十九」とある。歴史上の真鍋氏を列挙したもの。

【真鍋弥介（祐重）との関係】

久留米藩に仕えた時期、懶斎は真鍋仲庵と名乗った。懶斎と真鍋氏との具体的なつながりを示唆するものに、随筆『睡余録』（宝永三年（一七〇六）の項参照）の記事がある。これによれば、真鍋（真邊とも）弥介は諱・祐重。讃岐国香西郡の人で、郡主・香西伊賀守好清の家族である。十六歳の時、暴虐の家宰・香西大隅を斬って名を国中に知られた。

天正九年（一五八一）二月、土州の長曾我部元親との闘いでは三士を斬った。また同年七月には、夜に独りで敵壘に迫って神取彦兵衛を撃ち取り、香西好清から賞された。同十年（一五八二）八月に香西の城が土州から攻められた際には城中に攻め入った武將たちを追い払い、その功で再び好清から賞された。豊臣が興って香西が減び、讃州が生駒氏に与えられると、これに従って朝鮮出兵に赴き、多くの功を挙げた。そのある

一日、弥介が崖下にいると、たまたま通りかかった芸州の福島正則が知らずに崖上から唾を吐いた。祐重は怒って崖に登り、正則に謝罪させたという。

この章段の末尾には「余、幸ひに族人の後に従へるを以て、家録を閱、老者に問ひ、其の梗概を聞くことを得たる者、右の如し。仍て此に筆して異日史氏の採るに系ぐ」（原漢文）とある。懶斎と戦国武将・真鍋祐重とのつながりを明記した文章である。ただしこの資料でも、その血縁が具体的にどのようなものであったかは明らかでない。

この問題を明らかにするためには、『讃州府真行寺先住世系 附外戚系図』（前出）が参考になる。このうち外戚系図に相当する箇所には「真鍋又左衛門藤原某」を筆頭とする系図が付されている。ここには又左衛門の子として「祐重」、その祐重に一女二男があり、その一女に「女子八世了休室」とある。また同系図の「讃州府真行寺先住世系」に相当する箇所によれば、八世了休は懶斎の祖父にあたる。つまり真鍋祐重の娘が懶斎の祖母なのであり、真鍋祐重は藤井懶斎から見れば曾祖父にあたるのである。

宝永三年（一七〇六） 丙戌 九十歳

○一月、懶斎著『睡余録』この頃までに成る。

【『睡余録』】

該書は藤井懶斎の写本漢文随筆。内容は主に読書や身の回りの出来事から学問的な問題につなげて考察を行うものが多い。

諸本により巻数・話数が異なるようであるが未考。ただし狩野文庫本

に付された立軒の序文には次のようにある。この記事からこの頃までには成立していたということが判る。

先生姓藤井名藏号懶斎。隠居于洛之西巷。予与先生相去遠矣。而幸私淑於人而得視此書。不堪歛躍、自忘卑陋、謾述所思以序於卷端云爾。

該書は懶斎没後の正徳五年（一七一五）五月、抄出本が『閑際筆記』と題して大坂柏原屋清右衛門、同与市、同敦賀屋九兵衛より刊行された。内題下に「門人稲葉氏校訂」と署名するのは閑斎学者・稲葉迂斎か。また該書は半年後に大幅な修訂が行われたが、この詳細に関しては市古夏生『閑際筆記』をめぐって——出版規制の問題』（平成二年三月初出。『近世初期文学と出版文化』（平成十年六月 若草書房）所収）に詳しい。天明三年（一七八三）には『和漢太平広記』と改題されている。

【懶斎の仏教批判】

懶斎の仏教批判の姿勢は『本朝孝子伝』『徒然草摘義』など、多くの著書において窺う事ができる。また辻善之助『日本仏教史』近世編（岩波書店）にも採り上げられ、よく知られるところである。

しかし『睡余録』の一章では、そうした彼の言説と実生活との齟齬についてただした問答がある。懶斎はある人から「翁、浮屠と交を絶たず、反て相愛する者有るは何ぞや」、すなわち、あれだけ僧を嫌っていたが、なぜ交流があるのか、と質問を受けた。これに対して懶斎は、次の三つを挙げて回答している。（一）今の世では十人中八九人が仏教を宗旨としている。これを完全に拒んだら、ほとんど人事を廃さねばならなくなる。（二）韓文公・欧陽公・朱子といった、中国で仏教に敵しかつた儒学者たちも、仏者との交流はある。（三）毘尼（律）や禪定は儒教

と通じる所があり、方向は異なるとしても益無しとしない。

たしかに懶斎には僧との交流があった。久留米藩儒時代に高良山主・寂源と共に高良山十景を選んだことは寛文九年（一六六九）【寂源との交流】に示した。また『睡余録』に徴すれば、「僧魯合は余が方外の交なり」（第一七一話）、「天圭和尚余に謂て曰く」（第二八九話）と、僧との交流が交流を見せている。さらに元禄八年（一六九五）【居所（四）鳴滝隠棲】の項に記した通り、晩年には寺院の空庵に住んでいる。近世前期における儒者のあり方として、僧との交わりを完全に絶つことは、現実問題として難しかっただろう。

宝永四年（一七〇七）丁亥 九十一歳

○このころ、はじめて室鳩巢と面会するか。また鳩巢から『赤城義人録』を送られる。

『鳩巢文集』卷十一「与稲宣義書」。年次は「去年冬、婢生男乳育無他」とあるところから推定した。鳩巢の男児は七十郎といい、宝永三（一七〇六）年十一月二十三日生（『日本の思想家 室鳩巢』所載年譜に拠る）という。また文中に「僕年五十」ともある。万治元年（一六五八）生の鳩巢五十歳は宝永四年であるので、年次が一致する。

この書簡は「前日藤井徴君に面諭す」（原漢文）とあるので、懶斎と鳩巢とが実際に面会したことが分かる。鳩巢が元禄十年（一六九七）ごろから噂や書物でのみ知る懶斎に興味を持っていたことは、【鳩巢・木斎往復書簡】の項で述べた。そのうち実際に面識を得た事を示す資料では、これが現時点で知る限り最も早いものである。

この書翰には赤穂事件についても言及がある。先に見た元禄十六年正月二十九日付書簡では、鳩巢は赤穂浪士討ち入りについて懶斎がどのような評価を下しているのかに興味を持っていた。本書翰では「徴君深く赤穂義士の事を感じ」と、懶斎が義士を評価していたことが記されている。また懶斎が鳩巢の『赤城義人録』を読みたがったために、写本を呈したという事実も記されている。

△このころ、林鳳岡と書簡のやりとりを始める。

『鳳岡林先生全集』巻六十四（十四丁ウ～十五丁オ）に「寄藤井懶斎并序」あり。

寄藤井懶斎并序

藤井懶斎、久しく洛陽に住む。単に儒林を思ひ、経を講じ、理を説く。頃年閑居し、頤養謝務す。今茲に九十一歳。精神猶ほ未だ衰耗せざるがごとし、馮唐の齡、以て祝ふべし。伏生之寿、以て期すべし。曾て其の志を聞き、未だ其の面を覩ず。或人一語を寄せんことを請ふ。是に於て一絶を贅す。

身老心閑避世塵 有余不足任天真 白頭晚喜太玄易 羞見成都売卜人

この文章から得られる尤も重要な情報は、懶斎がこの時期まで林鳳岡と交流が無かったことが分かる点であろう。『本朝孝子伝』『今世』部で懶斎は、林鷺峰など林家の儒者が書いた孝子伝をそのまま引用しているが、実際に面識があった訳ではないのである。

宝永五年（一七〇八）戊子 九十二歳

△このころ、林鳳岡と書簡のやりとりを行う。

『鳳岡林先生全集』巻六十五（一丁ウ～二丁オ）に「寄藤井懶斎并序」あり。内容から、前年懶斎へ贈った詩に対する、返礼の返礼であると分かる。

宝永六年（一七〇九）己丑 九十三歳

○七月十四日、懶斎没、九十三歳。鳴滝西寿寺に葬られる。

元和三年（一六一七）【生没年】の項参照。

【藤井懶斎の果たした役割】

九十三歳と長きに及んだ懶斎の一生とその文事とを顧みて来た。彼は近世文芸にどのような役割を果たしたのだろうか。筆者は三つのことから挙げることができるかと思う。

まず第一点は、京都の朱子学者としての独特な地位を築いたことである。中村惕斎らと共に京都市中で儒書講釈を行いながら、伊藤仁斎らとは相反する、居敬を学の中心に据えた朱子学者として、確固たる地位を確立した。彼らの一群は現在あまり評価されていないが、加賀藩や阿波藩、福岡藩などに同調者を生むなど、その評価は当時において決して低いものではなかった。

二つめは、孝子伝の世界における先駆者的存在だったことである。

『本朝孝子伝』までは、孝子の表彰はなされても、それについて伝記を書くということはほとんどなされなかった。そうした中『本朝孝子伝』は当代の孝子を積極的に文章化（すなわち孝子伝化）していった。『本朝孝子伝』の流行は、その後の孝子伝執筆の風潮を作り上げたと言つて良い。また西鶴『本朝二十不孝』に影響を与えたほか、その後の日本の代表的孝子の人選にも大きく影響を与えたのである。

三つめは、儒者として仮名教訓書の出版に積極的であったことである。その多くは匿名であったが、儒者でありながら『藏笥百首』『仮名本朝孝子伝』『和漢為善録』など、多くの平仮名教訓書を積極的に刊行した人物は、この時期そう多くはない。その意味で江戸時代前期の仮名教訓書界においては貝原益軒とならび、さらに一味違う面を持った存在であると言つて良い。後代には関係ない仮名教訓書までもが懶斎作と仮託されるに至った。

要するに彼は、延宝・宝永という時期の文学が持つ教訓的な側面を體現した人物であったと言えるだろう。彼の存在が、従来の近世前期文学の総体を考える上で何らかの手がかりとなれば幸いである。

前号までの補足

◆正保二年（一六四五）の「○八月九日、京を発ち二度目の江戸行。二十四日の到着までを和文紀行『再往日記』に記す」條の左に

【『再往日記』】

の小見出しを追加。

◆元禄十年（一六九七）の項に追加

○このころ、三輪執斎の訪問を受ける。

三輪執斎『格物弁疑』自序（元禄十年（一六九七）十一月）に次のような記載がある。本文は高瀬武次郎編『三輪執斎』（大正十三年十月 三輪繁蔵）によった。

……独り西山の隠士藤井懶斎先生、行年八旬余にして、此道（引用者注：格物）を懐にして出さず。居敬を以て自修め玉ひぬるを求て、往て教示を受ける事を願ひしに、痛くも拒み玉はずして、教るにかの居敬を以せり。其言に曰、「今時の学者、格物致知を最初の地とせざるはなし。居敬窮理、偏廃すべからざる事を知ぬ人もなし。されども大方窮理に能力を用て、居敬には疎し。是学者の通病也。居敬に疎くて窮理を務るは、油なき燈をかゝぐるが如し。いかに務むとも、知は明かならん本なければ也。本とは如何に。周子は曰、『静虚なる時は明かなり』。程子は曰、『定る時は明なり』。朱子『直ちに理を窮るは、虚心静慮を以て本とす』と説玉へる、是也。是皆居敬の事。今此本とする処なくて、膠々棲々の中に於て只管に理を究めんとするほどに、其得る所、真の明睿にはあらで、只姦知のみ増して、邪思妄念は旧に依て盛也。是身を以て知所なく、人皆然んと思ふにもあらず。其質美にて初より居敬窮理能兼進む人は論ずべきなし。然る事あたはずんば、只居敬に重くして可ならんか。能敬して心存せば、事々理に当る事を不得とも、過ちは寡かるべし。況や窮理も本を斯に得なば、終に進みゆくべきを以、孟子の求放心の章の朱子の註にも、『如是は則志気清明、義理昭著、而可以上達』と云へり。是も亦併せ案ずべし」と。誠に殊勝にありがたく覺て、吾日頃疑ひし事も、早く明めたる様に侍りて、さて退て思ふに、年頃

聞きし格物説は、大に程朱の意に非ずして、孔孟教誨の旨とは遙にへだたりぬ。凡諸子の道に悖り、其行俗人より劣たるも、皆此道の誤りより起りて、門に入りて已に違ふ、豈誠意正心の学ならんや。故に年頃聞きし所を挙て其誤を正し、今得る所を述て此説を著し、別に或人の問を設て、予め人の疑ふべき事を弁じ、合せ名付て『格物弁議或問』と云り。

これによれば、三輪執斎は自ら西山の懶斎のもとを訪れ、教示を求めたという。そして懶斎はいまの学者が居敬窮理のうち窮理にばかり力を用いて、居敬を軽んじていることを歎いている。また該書には懶斎の序も寄せられている。

【懶斎と執斎】

三輪執斎と晩年の藤井懶斎とに交流があったことは、江戸時代の孝子伝を考える上で一つの示唆を与えてくれる。元禄十一年（一六九八）『今市物語』の項にも述べた通り、藤井懶斎は天和と元禄にかけて、孝子伝を一手に引き受けた感がある。その没後、宝永と享保期にかけて孝子伝の執筆に力を注いだ一人が三輪執斎だった。たとえば『十二孝子』序（『執斎先生雑著』巻之一所収）には、

藤井翁のしるせる本朝孝子伝よりとり出し、其詞をつぐめ、菅相公をくはへ、屏風一双に絵と詞書とを押べしとて書つきたる也。詞書は押小路亜相公御なをしありて、中院前内府通茂公にもみせ奉りぬとある。こうした孝子重視根底にあるのが懶斎から受け継いだ「居敬」の重視であったことは間違いないだろう。

そして執斎の「孝」重視は享保期の懷徳堂へと受け継がれて行く。懷徳堂が中井覺庵『五孝子伝』（元文四年（一七三九）成）、中井竹山『子華行状』（明和二年（一七六五）刊）、『かはしまものがたり』（明和八年

（一七七二）など、孝子伝の執筆に積極的であったことはよく知られている。この懷徳堂の創建に関わった一人が、三輪執斎であったことも既に知られている。

つまり懶斎の孝子伝へのこだわりは、三輪執斎を通じて大坂の懷徳堂へともたらされたのである。

◆貞享二年十月【懶斎著作と署名】の項の末尾に左の記事を加える。

また右に見た通り、懶斎は「膝臧」などと姓を一字に縮めて署名することが多い。この慣習は近世中期に柳里恭（柳沢淇園）、物茂卿（荻生徂徠）などと好んで行われたものだが、その先駆者に懶斎を位置づける説が存する。内藤子興による儒学時評書とも言うべき著『俵ふるひ』（安政三年（一八五六）自序、写本）が幸田成友によって紹介・翻刻されている（『三田学会雑誌』四十一巻一・二合併号（昭和二十三年二月）初出。『幸田成友著作集』第二巻（昭和四十七年一月 中央公論社）所収）。その中に次のような言及が見える。

藤井懶斎ガ苗字ノ井ヲ省キテ藤ノ草冠ヲ除テ、勝懶斎ト名ノリシヨリ、漢風病ノ逆上仲間ニ伝染シテヨキコトシ、夫ヨリ苗字ノ本体ヲ失ハセタル無分別モノ、是等ノ輩迄一々批判ヲ加ヘンモ、紙筆ノ費ナレハ略之。

◆元禄三年【居所〈三〉千本】に次の記事を加える。

また早稲田大学所蔵藤井懶斎書翰（井狩善五郎宛）に次のような書翰がある。

当地火災之儀、御聞及候
付、為御見舞稻若水丈
方迄委細願御伝書、殊ニ
見事之鯉節二筒被
贈下、御芳志之至忝存候。
真邊敬節居所、幸ニ
火災相遁、大慶仕事ニ候。
猶御上京之時分懸御目、
委曲可申謝候。恐惶
謹言

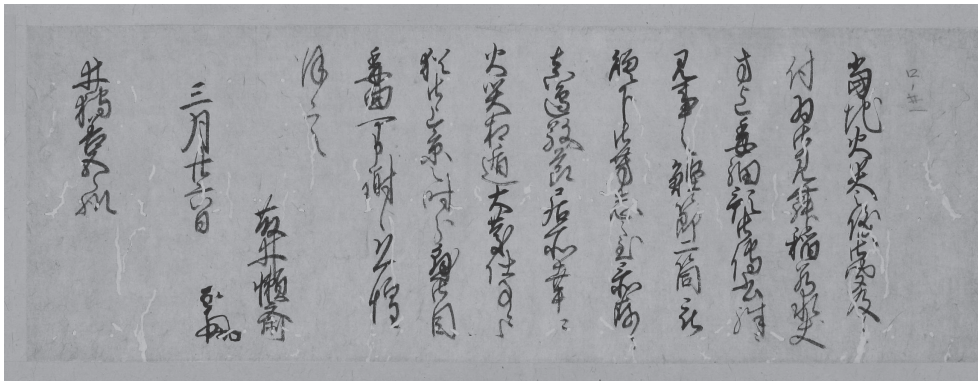
藤井懶齋（花押）

三月廿六日

井狩善五郎様

これによれば、この近所が火事に
遭ったが、被災は免れたらしい。
井狩善五郎については詳しく知ら
ないが、稲若水（元禄三年（一六
九〇）五月の項参照）に安否を尋
ねているところから加賀藩の人物
であろうと推測しておく。

（完）



*この論文は、科学研究費補助金（若手研究（B）『本朝孝子伝』研究——「孝」から見た近世前期文学の再検討』課題番号二〇七二〇〇〇六三 研究代表者・勝又基）の助成を受けたものである。

伊東颯々宛城戸千楯書簡三十八通

——翻刻と解題——

青山英正*

《解題》

一 書簡の概要および意義

本稿は、架蔵の伊東颯々宛城戸千楯書簡三十八通の翻刻およびその解題である。颯々（天明二年〈一七八二〉十月〜安政五年〈一八五八〉二月十六日）は、近江大津に住む鹿都部真顔門の狂歌作者である。千楯（安永七年〈一七七八〉〜弘化二年〈一八四五〉九月二十一日）は、寛政九年に二十歳で本居宣長に入門して以来、京都の錦小路室町西入ルで家業の書肆恵比須屋市右衛門を経営するかたわら、京都鈴屋門の拠点である鐸舎を主宰したことで知られる人物である。

書簡は、筆者が一括して入手した際、二八・五厘×二〇・六厘×四・二厘のかぶせ蓋を持つ漆塗りの文箱に収められていた。箱の内容は計三十九点であったが、そのうちの一点は、千楯の詠草の裏に「かぢや源兵

衛様」という宛名を書き、書簡を包む形に折りたたんであり、おそらく詠草の反古を包紙として用いたものと思われる。よって書簡は計三十八通、包紙一枚ということになる。これらは一切表装されておらず、書簡によっては少しばかりの破れがあったものの虫損は皆無であった。概して保存状態は非常に良く、丁重に扱われてきたことがうかがえる。そして、筆跡は紛れもなく城戸千楯のものである。

いずれの書簡にも年次が記されていないが、書かれている内容などからして天保期のものであることは間違いない。判明した限りでは、上限は天保三年、下限は同十四年である。書簡には、千楯自身の隠居や妻の病氣といった私的な近況のみならず、鐸舎社中の雅事に関する内容、たとえば毎月十七日におこなわれていた月次会や、下鴨・上賀茂を始めとする諸社奉納歌への出詠の依頼、そうした情報の近江各地への伝達の依頼、大橋長広への鐸舎の名義譲渡（書簡二十二）などが記されており、ここから天保期における京・近江の鈴屋門流の活動や交流の様子を具体的に知ることができる。

とりわけ注目されるのは、千楯と上方真顔門人との交流である。そもそも千楯と颯々とが知り合ったのは、後述するように城戸家の本家に当たる島田八郎左衛門すなわち京の真顔門人菊廻舎真恵美を介してであったと思われるし、書簡中にはその真恵美（書簡一、二十六、二十九、三十四）のほか、林鮎主（書簡二）や蘆辺田鶴丸（橘庵）（書簡一、五）、桂有彰（玉兔園）（書簡七、十二）や長谷川数照（白菊亭）（書簡七）といった名も見える。このうちの真恵美、有彰、数照、そして颯々は、鐸舎社中によって天保六年頃からおこなわれた諸社奉納歌に出詠した面々にほかならず、さらに書簡七によれば、有彰と数照は『諸社奉納歌集』下鴨社之部（天保七年跋刊）刊行の中心的な役割さえ果たしていた。

従来、宣長没後の鈴門についての研究は、「四大入」の一人である平田篤胤を中心に据えて進められてきた感がある。それに引き替え、篤胤の上京を妨害したことで知られる千楯と鐸舎に関する評価は、たとえば藤井（山崎）芙紗子が、「文政期後半以降の鐸舎は、鈴屋派全体の、京都における学問所という公的性格を失い、或は村田春門の、或は城戸千楯の、個人的な私塾と化してしまっただと考えられる。そして、鐸舎の文学活動は、幅を一層せばめられて、歌会中心の平凡なものになってしまったのである⁽¹⁾」と述べたように、村岡典嗣によって歌文派という烙印を押されて以来、決して芳しくない。

しかし、千楯が本居大平に、篤胤排斥の理由として、「文雅の無之人故何も聞べき事なく」（文政六年九月十日書簡）と書き送ったのは、宣長の学問が歌文（文雅）と古道との両方によって成り立っているという前提に立ち、その一方の柱である文雅を捨てて省みないように見える篤胤を非難したのであって、決して自らが古道を捨て去ろうとしたのではない。千楯には、『万那備能広道』（文化十四年刊）ほか、千楯なりに宣長古道学を継承しようとした著作があり、そこには篤胤に類似する点さえ見出せるのである（青山「化政期の歌文派和学者における教化意識の高まり——宣長学の継承と変容」日本近世文学会第一一五回大会口頭発表、二〇〇八年九月）。よって、千楯や藤井高尚のようなこれまで歌文派と称されてきた和学者も、改めてその文芸活動と古道学との両面に目配りした上で評価し直すべきだと思われる。たとえば、『諸社奉納歌集』下鴨社之部（天保七年跋刊）・上賀茂社之部（同八年跋刊）・松尾社之部（同九年跋刊）・梅宮社之部（同年跋刊）といった歌集と、古道の基本としての敬神を説いた『民家敬神録』（天保十一年刊）といった古道論的著作とは、ほぼ同時期に鐸舎の蔵版として出版されている以上、表裏一

体の営みとして考えるべきであろう。

また、学問の享受層が急速に拡大した化政期以降の国学史を理解するためには、思想的著作をものした一握りの人物に焦点を当てるだけでは不十分であるように思われる。ある思想がいかなる人間関係の中で育まれたのか、その思想をいかなる人々が支持したのかといったことも、思想家を取り巻く人間関係のみならず、資金協力や出版活動などを含めて具体的に明らかにしなければ、その思想が当時の社会においていかなる意味を持っていたのかが見えてこないだろう。

こうした意味で、歌文と古道との両面にわたる著作をものし、かつ恵比須屋市右衛門という書肆経営者としてまた鐸舎という学問所の主宰者として、若狭小浜の義門や備中の藤井高尚といった地方在住の学者や上方の狂歌壇の人々との人脈を築いた城戸千楯は、決して容易に看過できる人物ではない。むしろ、宣長後の国学史は、篤胤を相対化する意味でも、これまで歌文派とされ軽視されてきた千楯のような人物も視野に入れた形でこそ、再考すべきだと思われるのである。本稿で紹介する書簡は、そのための一つの足がかりとなるはずである。

二 城戸千楯・伊東颯々・菊廻舎真恵美の交流

ここであらかじめ、千楯と颯々との関係について、そして兩人を引き合わせたと考えられる菊廻舎真恵美について、やや詳細に述べておこう。伊東颯々は、先述の通り鹿都部真顔門人である。本名、臣規⁽²⁾。通称、源兵衛。号、秋廻屋（舎）・颯々・松風颯々。近江国大津の船頭町に住み、家業は鍛冶職人であった。牧野悟資によれば、四方側の月並集における颯々の名の初出は、文政七年頃の成立と推測される『俳諧歌双見百

首』であり、四方側の春興帖『四方廻波流』文政十一年版に、狂歌判者として名を連ねているとい⁽³⁾う。彼に関する資料としては、滋賀県教育会編『近江人物志』（文泉堂、一九一七年）や吉田克継『鳩のうみ』（吉田虎之助、一九二八年）などのほか、管宗次が颯々の二十五年祭の追悼集『まつかぜ集』（明治十六年序刊）から颯々の遺詠・遺稿七十三首を紹介⁽⁴⁾し、中澤伸弘が、近江の歌人である西村鈴雄の颯々宛書簡、および颯々が自らの七十の賀に縁ある歌人たちに「和歌狂歌連誹発句」の短冊を求めた際の刷り物を紹介している。また、大妻女子大学図書館には颯々宛書簡が三通所蔵され、そのうちの愉快斎石鋼・年麗舎春則によるものを、やはり牧野が紹介している⁽⁶⁾。

さて、千楯と颯々との交流は、本稿で紹介する書簡一により、天保三年からさほど遡らない時期と推定される。千楯と上方の真顔門人との交流そのものは古く、高松亮太によれば千楯と林鮎主との関係が遅くとも寛政九年には始まり、鮎主の弟である秋告（安五郎）と千楯（恵比須屋市右衛門）とが奥付に名を連ねる和学書が十点ばかり見出せる。狂歌本においても、文化六年に城戸市右衛門・林安五郎・銭屋長兵衛が奥付に名を連ねた仙掌亭不崑藏版『狂歌筒井管』（カリフォルニア大学バークレー校蔵）が刊行されている。そして、千楯と颯々を引き合わせたと考えられる菊廻舎真恵美は、鮎主と同様京在住の有力な真顔門人であった。

真恵美は、『平安人物志』文政十三年版文雅の部に、「嶋真衛美^{号菊廻舎} 兩替町三條北 嶋田八郎右衛門」とあり、また天保三年版文雅の部に、「嶋真美^{号菊廻舎} 兩替町三條北 嶋田八郎左衛門」とある人物である。牧野の指摘によれば、文政二年の四方側月並集『俳諧歌貴賤百首』が初出で、それ以前は延年と称していたらしい。文政六年成立とおぼしい『俳諧歌鮮衣集』

では判者となり、同十一年版『四方廻波留』では四方側の有力判者とともに「四方同盟判者」に名を連ねている⁽⁸⁾。この真恵美と颯々との間に文政年間以来の親交があったことは、これもすでに牧野が指摘したように、四方側の地方判者たちによる真顔追善集『俳諧歌玉比古集』の題「秋夕」で両者が合評をしていること、真顔の『斧の響』天理図書館本が、真恵美による転写をさらに颯々が転写したものであることなどから明らかである⁽⁹⁾。

そして、真恵美は、三井組や小野組と並んで島田組と称される、京の両替商・呉服商恵比須屋を営んでいた八代目島田八郎左衛門その人であった。まず、真恵美の屋号が恵比須屋であったことは、『村田春門日記』文政十年二月八日条に、春門が千楯と、「夕方夷屋真恵美方へ被招⁽¹⁰⁾」て同道したという記述から確かめられる。また、衣棚姉小路上ルに店があった八郎左衛門の居宅が、『平安人物志』に記される両替町三條北にあったことは、文政五年九月の両替町宗門人別改帳（三井文庫蔵、続六四三三―一）によって裏付けられ、千楯の門人である日扇（長松清風）も、安政四年一月に「千切屋八品堂浅七の宅」で本門仏立講を開講し、「町内とし寄中村半兵衛」の「宿坊興福寺と法論ニ及び大ニ折伏をして、終ニ又此町内旧宅をおひ出され」た際に、「三條兩替町の角、嶋田八郎左衛門の隠居処ニ住するやうにな」ったと記している⁽¹²⁾。恵比須屋の研究をした宮本又次も、同様に次のように報告をしている。

島田武彦家（島田要家）に「島田雅喬日記」なる相当大部のものが保存されている。嘉永六年より明治七年に至るものであるが、その多くは冠婚葬祭に関することが多く、また来訪者の姓名を記した事項が多い。それによると⁽¹³⁾兩替町に八郎左衛門家があり、新町に隠居所があったようである。（傍線、青山）

なお、宮本は島田氏の系譜についても調査しており、それによれば、この八代目の八郎左衛門は「周忠」という名を持っていた。⁽¹⁴⁾すなわち、『諸社奉納歌集』下鴨社之部（天保七年跋刊）などに「嶋田八郎左衛門源周忠」などとあるのは、真恵美その人であったことになる。

そして、天保十三年九月二十八日および十月二日付で竹川彦三郎等宛に提出された（島田八郎左衛門御用名前護替ニ付通達書）（島田八郎左衛門御用方譲渡一件通知書）（三井文庫蔵、続二四二七―一四一七・八）によれば、この時に周忠は宗二と名を改め、正房と改名した弟与三郎に八郎左衛門を譲った。京都黒谷の浄土宗金戒光明寺にある島田家の塋域に、「菊翁宗二居士」と刻まれた一基があるが、『平安人物志短冊集影』（思文閣、一九七三年）が記すように、菊廼舎の「菊」を用いたこれが真恵美の法諱であり、碑文によれば、彼が没したのは嘉永三年七月二十六日であった。

千楯と真恵美との交流がうかがえる資料は、管見の限りでは先述の『村田春門日記』文政十年二月八日条が最初で、続いて同十二年十一月に、真恵美編『狂歌百鬼夜興』に千楯が序文を寄せているのが見受けられる。同十三年に真恵美が本居大平に入門（本居大平『秋草』東京大学国文学研究室本居文庫蔵、国文研マイクロフィルムによる）したのは、おそらく千楯の紹介によるのだろう。その後天保年間には、四年十二月の大平の追慕会（『天保四年十二月十三日秋哀傷亡父追慕会』東大本居文庫蔵、国文研マイクロによる）や六年九月の大平の三回忌（『三回忌の歌』（同右））にも出詠し、鐸舎社中による『諸社奉納歌集』への真恵美の出詠へと続く。

ただ、文政十年以前に交流がなかったかと言えば、決してそうは思われない。かつて藤井（山崎）美紗子は、「千楯が、高尚や長谷川菅緒と

鐸屋を興し、これを後援し維持していくだけの財力を有したのも、ただ書肆蛭子屋の主人というだけではなく、実は島田組一統に属していたからであったと知られるのである」⁽¹⁵⁾と、千楯と島田組との関係を示唆したが、千楯を含む城戸家の人々の法諱が、金戒光明寺の塔頭である西住院過去帳『ゑびす屋嶋田一統霊名簿』に記されている事実（西住院主戸川隆博氏のご教示による）は、千楯が島田一統に属する人物であったことを決定的に裏付ける。

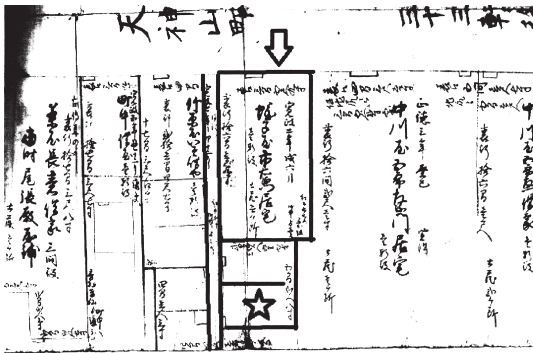
同過去帳によれば、城戸家は千楯の先代の市右衛門（寛政十二年八月二十六日没）に始まる。そして、天神山町文書の『天神山町変遷図』・『天神山町町中画図』・（天神山地籍図）（文化五年五月）などによれば、寛政二年九月、すなわち千楯が十三歳の時に錦小路通室町西入北側中程の表間口三間五尺九寸、裏行十六間一尺九寸の家に入居している。⁽¹⁶⁾この城戸家独立に、島田八郎左衛門家の資金的援助が皆無であったとは考えにくく、また、千楯の文事に關しても、その背後に島田家の財力存在をうかがわせる事例がある。管宗次が紹介するところによると、天保十二年三月に千楯を筆頭とする鐸舎執事十五名の連名で、鐸舎社中の人々に『鐸舎類題集』への投稿を呼び掛ける書状刷り物が配付されたことがあったが、その刷り物には、当時流行していた類題集の通例と異なり、「板に彫たる價もすべてのつひえもいさゝかも乞ひ侍らねば」と、入花料を一切取らずに板木代をまかなうことが宣言されていた。⁽¹⁷⁾集歌の時期が、先述した天保十三年の八代目島田八郎左衛門周忠の隠退にちょうど符合すること、投稿を呼びかけた執事の中に、八代目と並んで、それ以前の鐸舎社中にはその名を見出せない九代目正房が名を連ねていることを考え合わせると、あくまでも推測ながら九代目襲名に合わせた企画として島田家が出資し、千楯にその取りまとめを依頼したものであったか

とも考えられる。少なくとも、採算を度外視したこうした類題集を出版するほどの資金を鐸舎に供与できたのは、千楯との縁から言っても財力から言っても島田家以外にあるまい。千楯にとって、書簡一に記されていたように真恵美は「主人」にほかならず、自身の出処進退についてもその目を気にせずにはいられない存在だったのである。

本書簡三十八通の中には、この真恵美のほか、鮎主、田鶴丸、玉兔園、長谷川数照といった真顔門人や、大津松本の正徳寺の僧良昭、大津の商人で歌も詠んだ矢西図中、西村弥兵衛、山中義信、上京していた鳥取の千楯門人畑中重稔・重生父子、それに義門の名も見える。鐸舎には、「学びや」(『諸社奉納歌集』下鴨社之部、長谷川清秋跋)という側面と、「へだてなき友がき」(『諸社奉納歌集』上賀茂社之部、島田周忠(真恵美)序)という側面とがあったようだが、颯々宛の一連の書簡からは、『諸社奉納歌集』や『鐸舎類題集』の集歌や出版といった鐸舎の活動だけでなく、千楯と鐸舎を軸とする縦横の人脈の広がりも知ることができ、天保期の京都における文雅の交流について考える上でも、この書簡を紹介する意義は小さくないと思われる。

注

- (1) 藤井(山崎)美紗子「藤井高尚と鐸屋——後期国学の一断面」、『国語国文』第四六卷十二号、一九七七年十二月。
- (2) 滋賀県教育会編『近江人物志』(文泉堂、一九一七年)や吉田克継『鳩のうみ』(吉田虎之助、一九二八年)では「巨規」としているが、東京大学本居文庫蔵『天保四年十二月十三日秋哀傷亡父追慕会』や、鐸舎社中蔵版『諸社奉納歌集』のうちの現存する四冊、下鴨社之部(天保七年跋刊)・上賀茂社之部(同八年跋刊)・松尾社之部(同九年跋刊)・梅宮社之部(同年跋刊)といった、颯々生前に筆写ないし刊行された諸本、さらには本稿で紹介する千楯書簡いずれも「巨規」としている。
- (3) 牧野悟資「斧の響」考——石川雅持と鹿部部真顔の対立」、『日本文学』二〇〇七



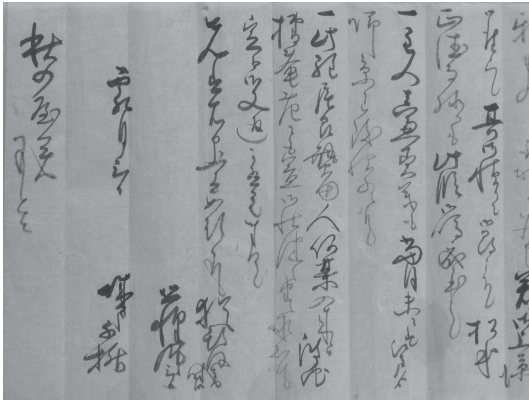
〔天神山地籍図〕

- (4) 管宗次「和歌誹諧体の宗匠 伊東颯々」(『京大坂の文人 続』和泉書院、二〇〇〇年)。
- (5) 中澤伸弘「近世後期近江歌人伊東巨規」(『東洋文化』通卷三三二号、二〇〇六年九月)。
- (6) 牧野悟資「雑体詠格略鈔」考——和歌雑体と天保調」(『国語と国文学』二〇一一年五月)。
- (7) 高松亮太「林鮎主の和学活動と交流」(『国語国文』二〇一一年十一月)。
- (8) 牧野、前掲注3論文。
- (9) 同右。
- (10) 『村田春門日記』(『渡辺刀水集』三、青雲堂書店、一九八七年、二三八頁)。
- (11) 『商人買物独案内』(嘉永三年刊、『都商職街風聞』(文久四年刊)等)。
- (12) 『清風一代記略図』(明治十年頃成立、『日扇聖人全集』第五卷(日扇聖人全集刊行会、一九六〇年)一九八頁。ただし句読点および濁点は私に付した)。
- (13) 宮本又次『史的研究 金融機構と商業経営』(清文堂出版、一九六七年)一八八頁。
- (14) 宮本、同右書、一四九頁。
- (15) 藤井(山崎)美紗子「藤井高尚の伝記資料『備忘録』」、『混沌』第五号、一九七八年九月。
- (16) 天神山町文書(京都市歴史資料館マイクロフィルムによる)。これらの史料にはいずれも、恵比須屋の表間口が三間五尺九寸・裏行十六間一尺九寸で、一軒役・土蔵一ヶ所(寛政二年戊戌六月 紅屋市右衛門家出跡 町中より売)と記されている。本稿書簡中で千楯自身が述べているところによると、居宅の北、すなわち居宅東側に設けられた路地の行き当たりが千楯の隠宅であった。文政十一年九月に村田春門から経営を返されて以降の鐸舎も、ここか、またはその隠宅と居宅との間にあった

と考えられる。高橋広道（笠亭仙果）は、「へだてぬ中の日記」において、「このぬでの屋、ちかき頃まではむかへの家なりしを、このごろ東隣のろじの内へうつして、やがてちたてが家のうしろ也」（『森銃三著作集』第十卷〈中央公論社、一九七一年〉三六四頁より重引）と述べている。なお、西隣は服部敏夏（中川屋五郎左衛門）居宅。前頁に、（天神山地籍図）の一部を掲げた。図中の矢印が千楯（蛭子屋市右衛門）居宅、星印が千楯の隠宅の位置である。

- （17） 管宗次「京の鐸舎の書状刷り物」（『京大坂の文人 続』和泉書院、二〇〇〇年、二六～二九頁）。『鐸舎類題集』の現存については未詳。

＊本稿は、二〇一一年度科学研究費補助金・若手研究（B）「幕末国学者の出版と文学活動——城戸千楯（京都書林恵比須屋市右衛門）の研究」による研究成果の一部である。



書簡一末尾

《翻刻》

凡例

- 一、底本は、架蔵の伊東颯々宛城戸千楯書簡三十八通と包紙一枚である。
- 一、書簡に年次は記されておらず、年次の推定は青山による。ただし、閏月や干支の表記により確実にその年次と推定できるものと、書簡の内容から推定したものとがある。後者は「○○年カ」とした。
- 一、配列は、推定年月日順とした。ただし、年次を特定できないものは最後に一括して日付順に配列した。
- 一、年次未詳書簡のうち、文脈からある程度時期を絞り込めるものについては、「年次未詳。○○以前カ」等と、推定時期を併記した。
- 一、便宜上、私に句読点・濁点を補った。
- 一、漢字は、原則として通行の字体に改めた。
- 一、改行は原文に従い、字下げなどでもできるかぎり原文の体裁を生かした。
- 一、踊り字は原文に従った。
- 一、合字は仮名に開いた。
- 一、助詞として使われている而（て）・者（は）・江（へ）などは、漢字の小文字で表した。
- 一、「〔 〕」内は、すべて青山による注記である。
- 一、誤字や誤記は原文のままとし、その右脇に「ママ」と注記した。
- 一、人名や難読の当て字などには、適宜その右脇の「〔 〕」内に注記した。

- 一、欠損は□で示し、文脈から文字を推定できる場合は、その右脇の「〔 〕」内に注記した。
- 一、適宜、各書簡の後に人名・地名に関する注、年次推定の根拠などを記した。

目次

一（天保三年）十一月三日	十七（天保十二年カ）六月十四日
二（天保四年）四月十九日	十八（天保十二年カ）七月十一日
三（天保四年カ）五月二十二日	十九（天保十二年カ）十二月十六日
四（天保四年十または十一月カ）十八日	二十（天保十三年）三月二十九日
五（天保五年カ）九月二十七日	二十一 日付無し（天保十三年十月）
六（天保七年カ）三月五日	二十二（天保十四年カ）九月二十七日
七（天保七年カ）三月十六日	二十三（天保十四年）閏九月二十五日
八（天保七年カ）六月廿中	二十四（年次未詳）一月七日
九（天保七年カ）八月八日	二十五（年次未詳。天保八または十三年カ）一月九日
十（天保七年）十二月二十二日	二十六（年次未詳。天保九年以前カ）一月十四日
十一（天保九年）四月八日	二十七（年次未詳）一月十四日
十二（天保九年カ）五月二十一日	二十八（年次未詳）一月二十四日
十三（天保九年）十二月十二日	
十四（天保十年）十二月七日	
十五（天保十一年）十二月二十五日	
十六（天保十二年カ）五月十八日	

二十九〔年次未詳〕	一月二十五日	三十五〔年次未詳〕	九月二十五日
三十〔年次未詳。天保八年以降〕		三十六〔年次未詳〕	九月二十六日
二月十三日		三十七〔年次未詳。天保十、十二 年頃カ〕	十月十七日
三十一〔年次未詳〕	三月十八日	三十八〔年次未詳〕	十月十八日
三十二〔年次未詳。天保四年カ〕		三十九【包紙】〔年次未詳〕	二月十八日
三月十八日			
三十三〔年次未詳〕	四月二十四日		
三十四〔年次未詳〕	九月十四日		

一〔天保三年〕十一月三日

一筆啓上仕候。寒氣之節ニ御座候処、
其御家内様御揃、弥御清栄被成
御座、奉珍賀候。然者当九月
鈴屋大人霊祀会兼当
早速入御覧可申候処、彼是当座
相揃兼、延引仕候。漸出来仕候ニ付、
相写し御覧ニ入申候。将又当月
兼題ハ、寒夜埋火
閏十一月ハ 水鳥近馴
極月ハ 海辺歳暮
右追々御出詠被下候。来已正月
始会三大人東マ^{真淵}影供十七日ニ相勤
申候。兼題も遠国へ申遣し候ニ付、此節より
兼而相定置申候。雪中若菜ニ

御座候。左様御承知置被下候。松本
正徳寺様へも御尊被成置被下候。
^{〔良昭〕*1}

一、野生義、先達而拝顔節御尊申上

置候歟、店ハ寺町蛸薬師下ル町ニ而、

蛸子屋市右衛門ト申。即悴専ら業体

相勤罷在候。野生義ハ、錦小路室町西江入

北側中程ろうじの奥行当リニ而、城戸与
^{〔路地〕}

表札出シ御座候。即隠居同様ニ罷在候。
^{〔表札〕}

乍去、本家表ハ未野生名前ニ而、隠居
^{〔表札〕}

とハ内分之義ニ御座候。此段御承知置被下候。
^{〔表札〕}

右ニ付平日ハ過半ハ寺町へ罷越居

申候故、錦小路方ハ留守勝ニ而錠おろし置

申候。御文通ハ是迄之通、寺町へ御出し被下候。

毎月二日、七日、十二日、十七日、廿二日、廿七日、此

六ヶ日ハ在宿日と相定メ、学事雅事一向ニ

相かゝり、早天より夜四ツ時迄ハ雅友待受、

雅用のミニ取かゝり居申候。若御上京も

御座候ハミ、其御積リニ御尋被下候。松本

正徳寺様へも此段御尊被成置候。

一、主人真恵美義も、当月末ニ者江戸より

帰京被致様子ニ御座候。

一、此程尾州熱田人何某入来候。彼地
^{〔蘆辺田鶴丸〕*3}

橘庵老ニも益御壮健之由ニ承知仕候。

定而御文通可有之奉存候。

先者右申上度如斯御座候。猶期後音時候。

霜月三日

恐惶謹言
城戸千楯

秋の屋君

御もとニ

【裏】

ころ／＼と

ひ／＼いびきの

音丸く

ころがり

ありく

門のみち道

*1 正徳寺……大津松本の真宗大谷派寺院。『諸社奉納歌集』松尾社の部（天保九年跋刊）に、「近江大津人 正徳寺 良昭」とある。

*2 千楯の隠居……『京都書林行事 上組重板類板出入済帳』文久三年三月八日条に、「恵美須屋市右衛門と申者、天保三年二月悴江名跡相譲り、歌道指南いたし、城戸千楯相名乗罷在」とあり、千楯が養子の千屯に家督を譲って隠居したのは、天保三年二月であった。事実、「天保三年壬辰夏四月新刻」の年記を持つ藤井高尚『松屋文後集』奥付の居住地表記も、それ以前の「錦小路通室町西江入」ではなく、「寺町通蛸薬師下ル町」とされている。

*3 橘庵……狂歌作者。姓、岩田。名、靈寿。通称、次郎兵衛。字、可蘭。号、田鶴麿・橘庵。名古屋の人。尾張醉竹側判者。『平安人物

志』文政十三年版（文雅）に出る。天保六年十月六日、長崎からの帰途、明石沖で遭難死。判者を務めた文政九年十月『俳諧歌五日角觥立』に、颯々や真恵美が出詠しており、彼らとの交流が知られる。なお、颯々の追悼集『まつかぜ集』（明治十六年序刊）に、「橘廣田鶴麿長崎より天艸にわたりて其かへるさ明石の沖に溺死せられけるをいたみて／＼としひの明石に名をまか／＼けしはいたましなから死ひかりなり」という颯々の歌が収められている（管宗次『京大坂の文人 続』和泉書院、二〇〇〇年、四〇頁）。田鶴丸の在所は、文政末から天保二年までは京、天保三、四年は尾張熱田である（牧野悟資氏ご教示による）。

■ 閏月から推定。「野生義、先達而拝顔節御尊申上置候歟」以下、自己紹介していることから、千楯と颯々とが出会ったのはこの書簡から遡ることほど遠くない時期であると推定される。また、真恵美を「主人」と呼んでいる点も注目される（解題参照）。

二（天保四年）四月十九日

貴書忝拝見仕候。薄暑之節、弥御清榮奉賀候。然者月次兼題且御頼申上候。影供之御詠御認御差登、忝奉存候。即御詠草返上仕候。御序ニ御清書被下候。

一、正徳（良昭）和尚御小兒御死去之由、扱々御きのどくと奉存候。御出会

之節宜敷御悔被仰上被下候。外ニ

此節伯母御御不快之由、重々

御心配奉察上候。

一、高嶋僧^{*1}御出会之由、此人^{〔義門〕*2}妙玄寺之

知己之由、定而仰之通てにをは家と

奉察候。妙玄寺ハてにをは坊と異名

付候位之人にて、此道ニは天晴之

人ニ御座候。兼而高嶋辺ニ者、

妙玄大徳之知る御人御座候趣も

承知仕候。追々御出会候ハゞ様子

御きかせ被下候。京地へも御上りも候ハゞ、

拙宅へも少し御立より被成候様、

御噂置被下候。

右御報如斯ニ御座候。尚期後音時候。

恐惶謹言

四月十九日

城戸千楯

秋の屋君

御もとニ

二白 此節摂津国中山寺之

開帳ニ参詣処々相通り、丹州

へ野勢妙見山越にて罷出申候。

山中ニ而時鳥数声聞申候。

出立之日宿元にても嘯之聞申候。

又当十七日、会席ニ而二声

聞申候。社中入興、哥沢山ニ

出来申候得共、皆安物ニ御座候。

野子兼題詠

更衣

風にちる鳥の上毛のかるき身に

かふるもかるき麻のさごろも

鮎主^{〔林〕*3}の三年の追悼に兼題

雨中時鳥

ぬれてなく山ほとゝぎすことならば

雨にまされる袖もとはなん

又当座ニ茄子といふ

ことを

むかしおもふゆかりのいろのなすびすら

夢にもみつはよしときくもの

御笑覧被下候。なすびハ

本哥にてハ無理なら題にて

こまり入候事ニ御座候

*1 高嶋僧……近江国高嶋の真宗大谷派寺院今津法慶寺の観津か。義門

著『なましな』（天保六年成立、同十三年刊）跋にその名が挙げられて

*2 妙玄寺……義門。天明六年七月七日〜天保十四年八月十五日。若狭

國小浜の真宗大谷派寺院妙玄寺の住職。恵比須屋市右衛門を板元と

して、『てにをは友鏡』（鐸舎蔵版・文政六年刊）、『山口栞』（天保

七年刊）、『なましな』（同十三年刊）、『活語指南』（同十五年刊）、

『指出の磯 磯のすさき』（同十四年刊）、『活語雑話』（初編＝天保

十年刊・千楯序、二編Ⅱ同十一年刊、三編Ⅱ同十三年刊）を刊行しており、千楯とは深い親交があった。

＊3 鮎主……明和元年（天保二年四月二十日。和学者・狂歌作者。姓、明田。通称、惣兵衛。字、波臣。号、宰相花。『平安人物志』文化十年版（歌）・文政五年版（文雅））に出る。千楯との交流が遅くとも寛政九年に始まっていることなど、鮎主と鐸舎関係者たちとの交流については、高松亮太「林鮎主の和学活動と交流」（『国語国文』二〇一一年十一月）を参照。なお、高松氏が紹介した本居宣長記念館蔵『住吉物語』の識語「寛文四年辰正月中旬書之畢／一校合畢／右者嶋田何某所藏古本於鐸舎／文化十三年子八月十三日一校合畢／城戸千楯／大橋長広／林鮎主（後略）」（傍点は青山）に見える「嶋田何某」は、本稿で千楯との関係が具体的に明らかにになった八代目島田八郎左衛門すなわち菊廼屋真恵美の可能性がある。

■天保二年に世を去った鮎主の三回忌の記事があり、同四年四月の書簡であることがわかる。鐸舎社中で鮎主追悼の歌を詠んだのである。

三（天保四年カ）五月二十二日

貴書忝拝見、弥御清栄奉賀候。

五月々次御詠草御差登ニ拝見仕候。

相印置候分御清書被下、御脚へ御こし被下候。

来月の御ついでにてもよろしく御座候。

御噂之

高崎御僧之義、御叮嚀被仰聞承候。

〔良昭〕
良正大徳へ書状遣し申候と存候処へ、

御紙面ニ付何卒御達被下候。彼

御町所を存不申候。御次手ニ被仰遣候様

御申上置被下候。当方神事ニも相成申候。

ちと／＼御上京被遅候者、

右御報如此御座候期御音時候

恐々謹言

五月廿二日

城戸千楯

伊東源兵衛様

二白 御状御表書不分明ニ而届き

間違可申哉と奉存候。野生隠宅方へ

御差出しニ御座候ハヽ

京錦小路室町西江入北がわろうじ

城戸範次

右之通御認被下候。若又忤方へ御差出しニ

御座候ハヽ

京寺町蛸薬師下ル

城戸市右衛門ニ而

同 範次

又ハ千楯ニ而も

右之通被成下候得者、早速下拙隠宅

方へ相達し申候。十六日十七日之間ニ

候ハヽ隠宅方へ直ニ御届被下候方

会席二間ニ合申候

右□様之内何れニ而もくるしからず候

当時ハ大抵隠宅方ニも罷在候故也

■隠居後ゆえ天保三年以降であり、かつ自己紹介をしていた書簡一よりは後のものと思われる。一方、自身宛の書簡宛先を指定していることからして、文通を始めて間もない時期であろう。また、「高嶋僧」のことを聞かせて欲しいと頼み、また良昭の身内の不幸を伝え聞いた書簡二と一続きと考えられることから、天保四年と推定した。

四〔天保四年十または十一月力〕十八日

忝拝見仕候。一兩日者殊之外

寒気ニ相成申候。弥御清栄奉

賀候。月次兼題御詠、当日

間ニ合、席中披露仕候。

衆議判ニ而ハ、はじめの御哥

多哉ニ御座候故、先日御預り申置候

御短冊、以代筆清書いたさせ申候。

仍而御清書御差登ニ者及不申候。

野生ハ中の御詠勝れて覚え

申候也。

一、先日秋哀傷御詠三枚之内

壹枚相とゞめ残候、二枚御戻し

可申上様、先便申上候得共、哀傷之

御詠故、御地ニ而も余り外へうれ申

まじく、所謂だちんごけニ相成候

もいかゞと、当方へ申受置候間、

左様思召被下候。外ニ白短冊壹枚

御預り申置候。来月々次御詠御差

出し候節、代筆の間ニ合せ可申候。

是又左様思召被下候。

一、秋津主ハ

紀州若山広瀬中之町

本居弥四郎内遠

号ハ大平翁ハ藤垣内也

右之通御座候。早々以上

十八日 千楯

臣規君

御もとニ

■天保四年九月十一日に本居大平が亡くなり、同年十二月十三日に開かれた大平追慕会に、颯々は千楯や真恵美とともに「秋哀傷」という題で歌を出詠している（『天保四年十二月十三日秋哀傷亡父追慕会』写本、東京大学国文学研究室本居文庫蔵、国文研マイクロによる）。颯々はその出詠のため短冊に歌を三首書き送り、千楯に選歌を乞うたのであろう。なお、颯々の出詠歌は、「千世をふるためしもよそにきく月のそらたのめなるけふに有かな」。

五〔天保五年力〕九月二十七日

御細書被下、忝拝見仕候。追日

秋寒相増候処、弥御清栄奉賀候。小生

無異罷在候。御休意被下候。然者、

御詠草拝見仕候ニ付、御返進申上候。

御入手被下、何卒御清書被下、御序ニ

御差登被下候。当廿九日御詠ハ御料紙ニ

代筆ニ而相手向可申候。左様思召被下候。

如命久々御無音、当方よりも毎々

申出し居候事ニ御座候。御同苗様

御死去、御悔も不申上段、御免被下候。

御町内御故障等、嘸々御繁多奉察候。

小子も七月十一日より痼病ニ而

漸八月末之比床を上ゲ申候。

御地へも月見比ニは可罷出心得も

御座候処、右之仕合残念ニ奉存候。

猶其内ニ御訪ひ可申上候。

一、田鶴鷹翁久々御上京ニ御座候。^(蓋)

即今廿七日帰国ニ御座候。来春

三月比上京之由ニ御座候。かけ違

京師御滞留御文通も無之由、小生

方へハ三五度も入来ニ而相咄申候。

旅宿ハ存不申、彼家より毎々御入来

御座候。

一、為御菓子料沓封御惠投被下、

毎々御芳志忝落手仕候。奉厚謝候。

一、月次三月より以後之方御認被下

忝入手仕候。将又短冊愚詠

相認候様、承知仕候。即此度

相認候而、さし上候。御入手被下候。

最早明後日会ニ而甚来客多く

細答ニ不能候段、御高免被下候。

ちと／＼紅葉之比ハ御氣延ニも

御上京被成候。通天嵐山等

思召次第御供可仕候。右御報

早々如斯御座候。恐惶謹言

九月廿七日夜認 千楯

臣規君

*九月二十九日……本居宣長の祥月命日。

■田鶴丸の在所は、書簡一注3で触れたように、文政末から天保二年までは京、天保三、四年は尾張熱田である。また、田鶴丸は同六年十月六日、長崎からの帰途に明石沖で遭難死しており、そこに至るまでの時間的経過を考えれば、本書簡は天保五年九月と推定できる。

六〔天保七年力〕三月五日

以手紙申上候。追日春暖相催候処、

弥御清榮奉賀候。然者

諸社奉納之内、日吉社出題

仕候。又々御苦勞御出詠被下候。

即別紙之題書差上申候。御入手被下候。

誠ニ先日者、梅宮奉納短冊

御登、又勢田之義ニ付、御心配

被下、御厚志忝奉存候。其二付

貴翁御詠拝見、奉感心候。

御報可申上処、彼は延引仕候。

当年ハ嵐山の花も盛り之節ハ、

雨ニ而散々之事ニ御座候。東山辺も

同様ニ御座候。乍去此節おくれ

ながら追々咲申候。嵐山ハ少々

早く候得共、廿九日参り申候而安心仕候。

春雨にあはれ過さぬ心とハ

ひとへにしれよ山桜ばな

御笑覧被下候。○八幡行も

段々延引、四月十日過ニ相成申候。

何とぞそれ迄ニ御地へも一度ハ

遊行仕度奉存候。京地も開帳

彼は賑々敷ちとく御登被成候。

右申上度、如此御座候。猶期後音時候。

恐惶謹言

三月五日

伊東源兵衛様

*梅宮奉納……天保七年三月四日奉納、同年春畑中重稔序、同九年二月一日早川真学跋『諸社奉納歌集』梅宮社之部。

■『諸社奉納歌集』下鴨社之部の、天保七年四月一日付長谷川清秋（数照）跋に、「去年の春よりかも下上のミヤしろをはじめとして、平野・松尾・稲荷・梅宮・日吉の大御神たちの大まへに手向をへ給ひぬ」とあり、天保六年春以降同七年四月一日までに梅宮社と日吉社への奉納は終えていた。また、注の通り、梅宮社への奉納は同七年三月四日であった。それにあわせて颯々が歌を書き送ったと考えられることから、同年の書簡と推定した。なお、同年のものと推定される三月十六日付鷺見安歎宛千楯書簡（東洋大学稲葉文庫蔵、国文研マイクロによる）によれば、大坂に滞在していた藤井高尙が三月五日に上京し、十三日に下坂するまでの間に、東山へ「うつろひ方なる花を見ニ同道」している。

七〔天保七年力〕三月十六日

以寸猪呈上仕候。追日春暖之節

弥御清榮被成御座、奉賀候。野翁無異

罷在候。御休意被下候。然者諸社奉納、

長谷川数照主、桂澄鷹主玉兎園之事

御世話ニ而、先下鴨社之分より急々

彫立之御積り相成、此節板下ニ

相かゝり申候。右ニ付相しらべ見候処、

貴翁御詠相見え不申、定而其節

御出詠無之候事と奉存候。此外ニモ

平野社分も相見え不申、其外ハ是迄

奉納分相見え候得共、右両社ハ御出詠

無之義と存申候。追々彫斉之御積リニ

御座候ニ付、ねがはくは追奉納ニ御詠出

被下候ハミ、重畳之義と奉存候。先ハ

下鴨火急ニ彫立ニ御座候ニ付、此段

御噂申上候。乍去御進メ申上候義ニモ

無之、強而申上候事ニハ無御座候。外ニハ

うちやりニ致置申候事ニ御座候。速ニ

御出詠之事故、此段御噂申上候事ニ御座候。

御出詠候ハミ、急々御頼申上候。先者

右申上度如此御座候。猶期後音時候。

恐惶謹言

三月十六日

城戸千楯

追啓 此節花も追々落花仕候。

兎角天氣おもしろからぬ当年之花ニ

御座候。定而処々御遊行と奉存候。

此節閑暇を見合、湖辺之遊覧も仕度

存居候事ニ御座候。其砌ニ者、拝顔と相たのしみ申候。

下拙壺人ニ候ハミ、何とぞ一夜ハ御無心申上度奉存候。

*1長谷川数照……狂歌作者。名、清秋。通称、和泉屋仙助・徳兵衛。

号、白菊亭・佳友楼。京都の人。天保二年刊の『狂歌蘭亭帖』(一名

曲水集)の編者で、同書の選者には、臥竜園榊麻呂・万榮亭亀麻呂・玉兔園澄麿(桂有彰)・蘆辺田鶴丸が名を連ねる。『平安人物志』文政十三版(文雅)・天保九年版(同上)に出る。菊廼舎真恵美編・城戸千楯序『狂歌百鬼夜興』や『諸社奉納歌集』諸集に出詠。『諸社奉納歌集』下鴨社之部では跋文も執筆する。

*2桂澄麿……文雅家(画・狂歌)。天明七年(万延元年)三月十八日。

姓、藤原。名、有彰。通称、藤右衛門(藤左衛門とも)。号、玉兔

園・澄丸・寸美丸・青洋・含水園・含翠園。京都の人。『平安人物

志』文政十三版(文人画および文雅)・天保九年版(同上)・嘉永五

年版(同上)に出る。前述の『狂歌百鬼夜興』や『諸社奉納歌集』

諸集にも出詠。『諸社奉納歌集』上賀茂社之部では跋文も執筆。管

宗次「和歌・狂歌・画の才人 桂有彰」(『京大坂の文人』和泉書院、

一九九一年、七四〇頁)に経歴が詳しい。

*3下鴨社之分……『諸社奉納歌集』下鴨社之部。天保六年二月千楯序、

同年閏七月二十三日奉納、同七年四月一日長谷川清秋跋。

■下鴨社への奉納は、注3に記した通り天保六年閏七月に終えている。

しかし、本書簡によれば、颯々はその際に出詠しなかったようで、

千楯は颯々に追奉納という形で出詠を促している。本書簡を天保

七年のものと推定した根拠は、以下の二点である。まず、『諸社奉

納歌集』下鴨社之部の跋が天保七年四月一日に書かれており、その

時期に出版の準備が始められ、出詠歌の確認がおこなわれたと考え

られる点である。次に、同書跋において、天保六年から七年春にか

けて下鴨・上賀茂・平野・松尾・稲荷・梅宮・日吉社への奉納を済

ませたとする記述が、三月五日付書簡六において颯々が梅宮社への

奉納歌を提出していることや、本書簡中において、颯々の歌が下

鴨・平野以外は「是迄奉納分相見え候」と千楯が述べていることと
時期的に符合する点である。仮に、本書簡が天保八年以降であると
するならば、下鴨・平野社奉納歌の確認が一年以上も延引すること
の説明が付けられなければならないまい。そして、本書簡を天保七年と
考えると、書簡八・九とも矛盾が生じない。

八〔天保七年カ〕六月廿中

廿二日貴書忝致拝見候。立秋と
相成候得共、兎角不順之時氣、
弥御清栄奉賀候。随而野翁無異
罷在候。御休意被下候。然者
先頃より疝麻痔等御いたづき、
曾而不存、御見廻も不申上候。最早
御快氣之趣承、安心仕候。乍併
時氣あしく御座候。御養生被成候。
一、平野奉納御差登被下、忝奉存候。
早速加入可仕候。

一、会式料・奉納料御差登被下候。
夫より御叮嚀之義、慥ニ受取申候。
奉納料ハ、先達而間違ニ而少々過上
御座候得共、是迄之都合致候得者、
御算用相済、御預り残も無之候間、
此段御承知置被下候。為念

申上置候。

一、御詠草拝見仕候ニ付、御返進
申候。御入手被下候。御序ニ御認登被下候。
おもしろき御事ニ御座候。

先者右御報如斯仕候。猶期
後音時候。

六月廿中 千楯

臣規吾兄

御もとに

二白 先年御地ニ而故人ニ御成被成候
*大虚庵晃延宗匠之墓所
定而御地ニ可有之義と存候。

此節社中之人、少々様子御座候而
被相尋候。もし御近辺ニ而御存之
御人も御座候ハミ、右墓所
寺等御示しニ預り度候。乍
御面倒御頼申上候。若相分り
候ハミ、一寸一筆御差登被下候。
賃京払ニ而御申し被下候。

一、当八月中旬十日十一日頃より
御地へ月見ニ罷出、正徳寺御同苗之
鹿飛辺遊行、又湖向ひ山田へも
廻り可申哉と存候。彼鹿飛辺
御同道申度候。御繰合せも出来候ハミ、
兼而御心得置、御繰合被下度候。

京地社中ハ、迎も数日かかり候事は同道人も

有間敷候。身輕ニ老人出立申

積りニ御座候。十五夜ハ晴雨之義当テニ

相成不申、十七日当地月次会故、

いづれ十六日より在宿致候事故、十五日ハ

帰京之積りニ而、十一日夜より十四日夜迄

四夜之間も湖辺之晴光を何方にて

成とも見申つゝも^{其地ニ}御座候。其内ニ

兩日ハ^{其地ニ}滞留と相定申候。御多用之中

左様ニ日数御費しも被成がたく候ハ、

鹿飛辺ハ何とぞ一日か二日御くり合、

正徳寺大徳も^{是非}同伴御案内御頼申候

つもりに御座候。以上。

千楯

秋のや君

*大虚庵晃延……晃演とも。歌人。文政三年没。京都の人。因幡堂大虚庵に住した。『平安人物志』文化十年版（和学）に出る。

■本書簡は六月二十二日付書簡への返書であるから、「廿中」とは二十日ではありえず、一の位の書き落としと考えられる。諸社への奉納を始めた天保六年以降で六月中に立秋を迎えるのは、七年（二十四日）、九年（十八日）、十年（二十八日）、十二年（二十一日）、弘化元年（二十四日）である。本書簡中に、「平野奉納御差登被下」とあり、それは書簡七における出詠の慇懃に応じたものと考えられ

るから、同年中のものとするのが妥当であろう。また、八月の近江行きも、書簡九に符合する。

九「天保七年力」八月八日

今日者御状被下、忝致拝見候。

如来意、秋冷之節、弥御清栄

被成御座、奉大悦候。随而野翁

無異罷在候。乍憚御休意被下候。

当家よりも彼は御無音ニ罷過候段、

御高恕被下候。然者十一日比より罷下り候

様御懇意ニ被仰下、忝奉存候。何卒

其比より罷下り候様、兼而存候処、水之^{*}

噂を承り如何とためらひ罷在候処、

御紙面之趣ニ而、先安心仕候。明九日

十日ハ年忌法事、悴方ニ而相勤候ニ付、

十一日ニ者、用向も無之、弥御地へ向ケ、

罷出可申候。乍去、晴雨之義も難斗、

若十一日雨天ならば十二日ニ可仕候。

御存之通十七日月次会日故、十六日ハ

社中追々詠草添削も御座候事故、

何れ十六日ニ者在宿いた^三ねバ、工面も

よろしからず、仍之、十一日より十五日

迄之間遊行、晴雨之模様ニ可仕候。

何分罷出可申、其節ハ又々御世話様ニ

相預り可申、宜敷御頼申上候。近比

御世話様ニ御座候得共、此段一寸正徳寺君へ

御噂被成置被下候。御頼申上候。山田ハ

如何可仕哉。何れ八幡へも罷出、其節ニ

可致哉とも存候。是も其時のもやうニ

可仕候。御地御連中古今講釈之義

承知仕候。何れ罷出候而相談可申上候。

先者右御報如斯御座候。明日ハ上件

申上候。仏事故今夕手紙相認置

申候。定而明日飛脚へ差出し可申候。

尚拝眉万々可申上候。恐惶謹言

八月八日

城戸千楯

伊藤臣規君

御もとニ

猶々平野奉納之短冊いまだ

御認無之様子ニ被存候。此節

追奉納仕候。御認置被下候。以上。

＊水之噂……天保七年七月の豪雨により引き起こされた琵琶湖の大洪水のことと思われる。「天保七年七月九日大津下坂本の家々、田地に浸水した。(中略)八月になっても水がついたまゝの所が多くあった」(『新大津市史』下巻、一九六二年)。

■大津にも被害を及ぼした琵琶湖の洪水の年から推定した。本書簡の追伸箇所で、「平野」の字が線で消されているのは、平野社への奉

納歌をすでに提出したという書簡八の文面と符合する。また、末行の「追奉納」も、書簡七で予告されていたことがいよいよ実施されたと考えることができる。

十「天保七年」十二月二十二日

貴書被下忝致拝見候。如来意嚴寒

之節ニ御座候処、弥御清栄ニ被成

御座、奉珍重候。随而野翁無異ニ罷在候。

乍憚御休意被下候。然者寒氣御訪

としてむき繁肉貝沢山御恵投

被下、御芳志忝奉存候。不打置賞味

可仕候。拟当年ハ万端諸色高直ニ而、

御同前鬱々敷心ニ相暮し申候。種々

右ニ付御役用も御繁多之趣、御尤も存候。

信楽谷よりかし之実を出し候ニ付、

御玉詠御もらし被下、奉感心之吹聴ニ仕候。

実ニ野翁町内辺ニも日々諸方へかしの実を

拾ひニ参り、相漬候貧家も一軒御座候。

めづらしき御事ニ御座候。何卒年改り

候ハハ、時節も直り可申哉と夫のミを

待くらし候事ニ御座候。月並兼題も

御よミ置も御座候得共、来陽一緒ニ御こし

之趣承知仕候。来酉年月次も出来

仕候ニ付、此度一枚差上候。不相替御出詠

可被下候。何卒正月会始ハ前広之出詠
御頼上候。先者右御礼御報旁

如斯御座候。如命当年ハ余りも無之、
来陽目出度可申承候。 恐惶謹言

十二月廿二日 城戸千楯

伊東源兵衛様

二白 乍憚御家内様へも宜敷被仰上被下候。

扱野翁も先達而御相談申上候、御地へ

毎月一宿かけて罷出候事も、時節

段々に寒く相成候上、当年の時節がら

と申、彼是致候由、暮ニも及申候。

何れ医師申進候事故、歩行を存立候

事故、春ハ思ひおこし可申候と存候。

当月三日より例之持病寒氣ニ触候而

差起り、此節迄ふとりをかふり、火燵ニ

身をよせ候のミにて、一寸も他出不申候

故、弥歩行むつかしく相成申候、困入候

御事ニ御座候。

当月兼題
年欲暮

おこたりの心おそきハおもほえず

くるゝをとしとなげくけふ哉

此頃おもひ

つゞける

とるとしのしるしときけばふりしわが
かしらの雪もたのむ冬哉

此哥ハ先頃申上候哉覚不申候。

■翌年の干支から推定。天保七年は天候不順のため凶作で、まさに「万端諸色高直」であった。藤井高尚も、同年九月七日付清水宣昭宛で、『松屋文後々集』は先般加筆、城戸迄差遣し置候。(中略)彫刻之義、今少し遅々相成申候。其訳は、近年之米穀高価ニ而、書林共至而窮迫(飯田正一「藤井高尚書簡集四」、『国文学研究(早稲田大学)』一九七六年二月)と伝えている。

十一「天保九年」四月八日

以手紙弥御清榮奉賀候。誠ニ

此間ハ参上、乍毎々御世話ニ相預り

忝奉謝候。其節御頼申置候

コンロ、何卒無御失念御頼

申上候。ねがはくハ何もかもキビシヨ

までも一シヨニ相願申度候。外筒ニハ

野翁哥かき候つもりニ御座候。

新樹のえもかてニほしきものと

奉存候。何分いづれとも御待申上候間、

御こしらへ奉希上候。右之義

もし御失念もやと為念申上候。

乍憚矢西公^{*1}へ宜敷御礼被仰上

被下候。正徳寺へ御出会候ハミ、是又

よろしく被仰上被下候。早々以上

四月八日

閏四月也

尚々野翁来月ハ十七日会後

より八幡へ下向仕候。参りがけ御宅

御無心申上一宿、帰路一宿と相願候

つもりニ御座候。畑中重稔之子息重生を^{*2}^{*3}

同道之つもりニ御座候。よろしく奉希上候。

扱先日御宅ニ而御見受申候老女

の哥よミ改メ申候

逢見ずて杉ハいくとせふる川の

ふたもとながら神さびにけり

御一笑被下候

*1矢西公……矢西^{なりなか}因中。文政七〇明治四二年。大津の人。大津の富商

菱屋甚兵衛の分家。長尾名鳥、服部春樹等と交わる（吉田虎之助編

『鳩のうみ』私家版、一九二八年、十九丁）。

*2畑中重稔……『諸社奉納歌集』下鴨社の部に、「因幡鳥取人 畑中

良助 藤原重稔」とある。前掲の「天保七年」三月十六日付の鳥取

藩士鷺見安歆宛城戸千楯書簡（東洋大学稲葉文庫蔵）も、「御地重

稔と申仁上京之義ニ付御尋被下、昨秋之頃より京地へ御留被致、

追々学事も出精被致候事ニ仕候」と伝える。

*3畑中重生……畑中文仲。鐸舎社中による『奉納熱田社歌』（天保九

年十二月奉納、熱田神宮蔵）に、「畑中文仲 藤原重生」とある

（熊谷武至『近世和歌書誌刪補』へ私家版、一九七六年）八一頁）。

■閏四月から推定。鍛冶職人であった颯々に、焔炉の製作を依頼した

のであろう。

十二〔天保九年カ〕五月二十一日

弥御清栄奉賀候。兎角此節者

鬱々敷天氣困入候御事ニ

御座候。然者玉兔園吾兄より

長包御達ニ申上候。御入手被下候。

一、此間御噂被下候懐中こんろ之

愚詠漸よミ出申候。但シ是ハ

煎茶のミの事ニ相成、牀間

暖房之方ニは間ニ合まじくや

と存候得共、野翁之所持ニはケ様

ニ而すませ可申候。

千楯

月花に

わが

あくがるゝ

ことの葉も

あかぬいろ

香に

にるよし

もがな

右之通ニ御座候。よろしく御頼申上候。

早々如斯御座候。頓首

五月廿一日 千たて

臣規君

まゐらす

■書簡十一において、焜炉の外筒に書くつもりだと述べた歌を、本書簡で書き送ったものと考えられる。

十三〔天保九年〕十二月十二日

以手紙奉啓上候。嚴寒之節

弥御清栄奉賀候。然者来年

亥月次兼題出来ニ付、差上申候。

不相替御出詠被下候。尤正月会始之

御詠ハ、何卒当日披露ニ相成候様

御出詠御頼申上候。乍憚矢西君へも

御差上宜敷被仰上被下候。此節ハ

大繁用略書御免、猶期後音時候。

恐惶謹言

十二月十二日 千たて

秋の屋君

御もとニ

年の内に梅の

咲きけれバ

春またぬ老の心を

いそがせて

としのこなたに

かをる梅哉

御笑覧被下候

■翌年の干支から推定。

十四〔天保十年〕十二月七日

五日御状相達、忝致拝見候。如

来意嚴寒之節、弥御清栄

被成御座、奉賀候。随而当方無異

御休意被下候。誠ニ先頃ハ御上京

御懇情ニ御訪被下、忝奉大悦候。

御風情も無之所、御念被入候之御文面

奉庫入候。扱見事成はぜ

沢山送被下、別而御地名産、

不打置賞味可仕候。乍憚御家内様へも

呉々宜敷被仰上被下候。

一、来子年月次兼題出来

仕候ニ付、兼而差上置候。何卒

当十七日ニハ納会御出詠被下候。

来正月会始ハ、必々御出詠之義、

奉希上候。乍憚矢西君

* 山中君へも兼題書御達し

被下候。来陽迄ニ御出会之節ニ而

よろしく御座候。尊君迄さし上置候。

御頼上候。先者右御報御礼

御見廻等相兼如此御座候。猶

期後音時候。 穴賢

十二月七日 千たて

秋の屋翁

御もとニ

尚々追々寒氣相増可申

御自愛專一奉祈候

* 山中君……山中義信。通称、新兵衛。大津坂本町の両替商・米商。

屋号は塩屋（『大津市志』中巻、一九一一年、一〇二二頁）。なお、

「文政年間大津長者番附」の東前頭十四枚目に「坂本 塩新」とあ

り、富商だったことが知られる（『大津市史』下巻、一九七三年、

四七八頁）。書・狂歌をよくした。安政六年没（『角川日本地名大辞

典』滋賀県、一九七九年、大津市坂本町の項）

■翌年の干支から推定。

十五〔天保十一年〕十二月二十五日

貴翰忝拝見候。如来意

嚴寒之節ニ御座候処、御全家様

弥御清栄被成御座奉賀候。随而野方

無異儀罷在候。乍憚御休意被下候。

然者寒中為御見廻、むきしゞミ

壱籠御恵投被下、毎々御厚志之段

千万忝、不打置賞味可仕候。定而

此節月廻、御繁多之様奉察上候。右

御礼御報旁如斯御座候。乍憚

御内室様何れも様へ宜敷被仰上被下候。

当家内も先同様ニ罷在候。是又宜敷

申上候様申聞候段、御承知被下候。

如命年内余日も無之、折角御取御廻

被成、猶来陽緩々可申承候。

恐惶謹言

十二月廿五日

城戸千たて

伊東源兵衛様

二白 来年丑年中、月次兼題

出来仕候ニ付、乍序差上申候。

外御両人様へ春にても御序ニ

御さし上被下候。何卒^{正月}会始之

懷紙ハ不相替御差出し被下候様、御頼申上候。

矢西君山中君へも御出会之節

此段被仰上被下候。

故院の御庭の紅梅を

ある人の一枝つたへおくり

けるを瓶ニさして

千たて

立つかひもあらぬはこやの山かげを
あこがれいでし玉の枝やこれ

御笑覧被下候。

■翌年の干支から推定。

十六〔天保十二年九〕五月十八日

貴書忝致拝見候。兎角霖雨

晴兼候時節、弥御清栄奉賀候。

随而野翁無異ニ罷在候。乍憚御休意

被下候。扱先達而三月廿一日御上京

御訪被下候御帰路より打続御不快之由、

乍去此節に而ハ御本快之御様子ニ

被察、奉大悦候。追々暑之趣之時節

御自愛專一と奉存候。何分御手おくれ

御繁用奉察入候。御尊之御一件、

如何御座候哉。野翁ニも乍蔭

御案じ申候事ニ御座候。兎角心配ハ

身之毒ニ候得共、相かゝり候事ハ無役物ニハ

御座候。愚妻義も兎角むつかしく

先十人之目にも逆も本復無

覚束様子ニ御座候。医者等も同様

申居られ候。右ニ付先月十八日より

木屋町三条上ル辺へ座敷かり仕、

出養生いたさせ申候。幸ひと実之

両親七十余ニ而、健ニ隠居致居られ候。

右隠居所を取片付、其方へ被参

介抱致被呉候ニ付、野翁ハ先安心ニ

御座候得共、隠宅野翁老人ニ而

漸小女老人飯焚呉候故、何方へも

出がたき上、何事も愚妻のミ込居候を、

諸事用向きかせ不申様いたし、

甚不自由迷惑仕候。御察し被下候。

しかし此節ハ存之外宜しき様子ニ

傍よりも見受申候。実之事ニ候ハミ、重畳之義と

存居候事ニ御座候。当方もケ様之事ニ而

雅事も大ニ疎畧ニ相成居申候。御察し被下候。

御詠草一覽御清書被下御こし被下候。

*鐸舎類題集御出詠も大低当年中ニ而

よろしく御座候。是又左様思召被下候。

右御報如斯御座候。猶期後音時候。

恐惶謹言

五月十八日認

臣規吾兄

尚々御家内様へ宜敷被仰上被下候。

矢西君へも何れも御社中様方へ

よろしく被仰上被下候。

＊鐸舎類題集……現存するか未詳。天保十二年三月に、千楯を筆頭とする鐸舎社中十五名が、社中の秀歌を集め出版しようと出詠呼びかけの書状刷り物を上梓している（管宗次「京の鐸舎の書状刷り物」、『京大坂の文人続』和泉書院、二〇〇〇年、二六～二九頁）。

■『鐸舎類題集』の記事および千楯の妻の病状から推定。千楯の妻は、天保十四年に死去している（書簡二二二）。

十七〔天保十二年力〕六月十四日

十三日御日附ニ而被下貴書、忝致拝見候。如来意大暑之節ニ御座候処、先以御地御全家様御揃弥御清栄被成御座、珍重御儀ニ奉存候。随而野翁家内無異ニ罷在候。乍憚御休意被下候。然者、暑中為御訪、しゞミ忝籠御恵投被下、折節神事ニ相用賞味奉多謝候。

御家内様へも宜敷御礼被仰上被下候。

一、御短冊八葉御差登被下、御地

*1 西村弥兵衛様御隠居七十賀、

〔大橋*2〕長広主其外社中詠相認、

進上ニ仕候様被仰下、承知仕候。

尤愚詠懷紙ニ認可申様、致

承知候。此節神事中ニ候へ者、

訪ひ不申、神事過候ハミ、早々よらせ可申候。先御預り申置候。

一、先達而奉納品差上候処、此度

尊君矢西君御助勢し、忝封

二朱被送下、忝猶世話社中へ

相達し可申候。即野翁より入手書

此度差上申候。乍憚矢西君へも

宜敷被仰上被下候。

先者右御礼御請迄、御見廻

旁如此仕候。猶期後音時候。

恐惶謹言

六月十四日

城戸

認置

千たて

伊東源兵衛様

*1 西村弥兵衛……錢屋弥兵衛。大津上京町の両替商（『大津市志』中巻、一〇一三頁）。名、春道。香川景樹門。鈴雄の先代（『鳩のうみ』、十五丁ウ）。

*2 長広……大橋長広。歌人・和学者。天明八年～嘉永四年三月五日。京都の人。通称、九右衛門・泰蔵。号、水月庵・柿庭・柿園。本居大平門。『平安人物志』文政五年版（和学）・文政十三年版（和歌および和学）・天保九年版（同上）・嘉永五年版（同上）に出る。鐸舎の中心人物の一人で、後に鐸舎筆頭となる。

■「御改革」とともに「御地七十賀」について触れた書簡十八と一続きと考えられる。なお、天保十二年の大暑は六月五日である。

十八〔天保十二年力〕七月十一日

尚々素麵十五把此節沢山到来

合申候ニ付、奉呈上候。御家内様へも

よろしく被仰上被下候。家内よりも

よろしく申上候

申聞候。

九日貴書昨日相達候。忝致

拝見候。如来意残暑嚴敷

御座候処、先以御家内様御揃

御清栄被成御座、珍重御儀ニ

奉存候。随而野翁無異御休意

被下候。然者先頃被仰聞候

御地七十賀、御落掌御達シ被下候由

御叮嚀ニ被仰下、逐一承知候。社中へ

出会之節、仰之趣吹聴可仕候。

扱右ニ付、為御挨拶二朱御差登

御叮嚀之至、早速長広主江

相達候。御伝聞之趣、申遣候処、

此度別紙書状受取書不日申候。

乍憚御先方様へ御差上被下候。

且野翁受取書も差上申候。

御先方様へ宜敷御礼被仰上被下候。

如来命未残暑御自愛被成候。

右御報御礼如此御座候。猶期後音時候。

穴賢

七月十一日

千楯

秋のや翁

御もとニ

猶々時分柄嚙々御繁用

奉察候。追々御改革ニ而

何分当分処諸方如何候哉

今偕々相定り申候間、

種々勝手差惡も御座候趣

承候。御地ニ而も御同様と

奉存候。しかし御業体

などにハ格別御替りも無之哉と

奉存候。御風雅之方も平生ハ

夏向不景氣と御互ひに

奉存候。秋ニも相成候ハミ、少々

京地兼題も不相替御出詠

被下候。

以上

■追伸に「御改革」とあり、いわゆる天保の改革が始まった十二年のことと推定できる。書簡十七から、西村弥兵衛の七十賀の社中詠を依頼されたことがわかるが、本書簡は、社中の賀歌が天津へ届いたことへの、颯々の礼状に対する返書と考えられる。なお、十二年の

立秋は六月二十一日である。

十九〔天保十二年カ〕十二月十六日

貴書忝拝見仕候。如命

嚴寒之節ニ御座候処、弥

御清栄被成御座、奉賀候。随而野方

無異罷在候。乍憚御休意被下候。

然者氷魚一籠、時節

為御訪御恵贈被下、忝奉

謝候。不打置賞味仕候。且又

納会ニ付御詠草御見セ被下、即

一覽仕候ニ付、御返進申上候。最早

明日之義ニ付御認之間ニ合申まじく

存候ニ付、当方ニ而代筆ニ而披露

仕候。此段御承知置被下候。

諸社奉納之義も、今宮ハ此間

相収メ申候。藤森社来正月

伏見梅谷盛り之比、治定奉納仕候。

夫迄ニ御出詠被下候。沓岐国社

是も当年中ニ者御座候得共、

来春二三月頃後藤氏^{彼国人}帰国

之節持帰りニ御座候。夫迄ニ而

よろしく御閑暇も御座候ハ、御出詠

被下候。

一、短冊一枚御社中より被御頼候由、

愚詠相認候様、承知仕候。此節ハ

寒氣ニ而大ニ疝氣も困り居申候。

相見合、近々相認さし上可申候。

先者右御礼御報旁如斯

御座候。追々月廻定而御繁用

乍憚御家内様へ宜敷被仰上被下候。

猶期後音時候。恐惶謹言

十二月十六日 城戸千楯

伊東源兵衛様

■本書簡で予定されている藤森社と沓岐国社への奉納は、天保十三年のものであることが確実な書簡二十に、前者が三月に実施され、後者は予定通り歌が集まらなかったと記されていることから、その前年の十二年の書簡であると推定できる。

二十〔天保十三年〕三月二十九日

尚々山中氏へ題書

御序ニ御遣し被下候

昨廿八日御日附之貴書相達候。忝

致拝見候。如来命漸春暖

相催候処、弥御清栄奉賀候。

随而野翁昨年より御案内之通之

持病、漸此節可成ニ本復仕候。

御安心被下候。乍去元来持病之義、色々服藥等も仕候得共、一生病と相見え、兎角歩行腰痛は

例之通ニ御座候。先例之通之義ニ候得者、よろしといたし置申さねバ、外ニ致方も無之事ニ御座候。下拙腰痛歩行のミの義ニ而、全体ハ健に氣分等も食事も相勸ミ候。段々御安心被下候。

一、昨年より御頼之短冊、先達而差上候処、御念入御挨拶被下、千万忝受納仕候。乍憚先方様へ宜敷御礼被仰上被下候。甚以御叮嚀之御取斗、呉々奉祈入候。

一、貴君ニも御疝病之由、格別之義も無御座候趣ニ候得共、随分御自愛被成候。次第ニ老体ニ相成候得者、兎角持病所を得候様子ニ御座候。狂哥御社中追々御増御勢ひ相附候由、重畳之御事ニ奉悦候。

一、壹岐奉納いまだ片付不申、当晦日限ニ諸方催促致申候。御出来も御座候ハ、何卒御差出し被下候。此間雷鳴之日藤森奉納之社中参詣、藤森ハ相済申候。是より右壹岐国を待明ケ申候

積りニ御座候。

一、右壹岐奉納相済候得者、引続て摂津国住吉社奉納仕候。最早此節諸国へ題書相遣し申候。仍而御地へも披露仕候。是ハ彼和哥三神之義、格別ニ大寄仕候積りニ御座候。何卒矢西君へも皆様へも御勸メ被下候。此度題書差上候。何卒御出詠御頼上候。

一、当年ハ御還曆ニ而、去ル廿五日ニ

^{*1}高観音下定光房^坊ニ而、御賑々敷

御賀出来候由、御噂被下目出度奉存候。定而御摺物等出来可仕と奉察上候。何分御数寄之通ニ及

御厄年御繁昌ハ一生の徳ニ御座候。乍蔭御悦申上候事ニ御座候。野翁も御悦旁罷出候筈之処、上件之仕合、其上兎角愚妻も今一際をかしからず打臥居、困り居候ニ付、当春ハ近辺花ニも出不申、持病旁以おもしろからぬ事ニ御座候。当春も御不沙汰ニ及可申候。乍憚御家内様へもよろしく被仰上被下候。一、認^{*2}ふり之義被仰下、御安キ事ニ御座候。任命四部差上申候。代料御念被入金式朱御差登、即左之通

覚

一 四匁八歩 認ぶり四部

但し壹部ニ付

壹匁二歩づゝ

爾（しかる）ニ金貳朱受取

代八十分

さし引三匁貳歩此度返上

右上銀御返進申候。御落手被下候。

先者右御報如此御座候。少々御閑暇

御上京奉待上候。猶期後音時候。

穴賢

三月廿九日

城戸千たて

秋屋翁

御許御報

*1 高観音……近松寺。大津にある天台宗寺院。三井寺五別所の一つ。

定光坊はその坊舎（『大津市志』下巻、一六二～一六三頁）。

*2 認ぶり……城戸千楯の著『詠歌したためぶり』（天保八年刊）。

■颯々の還暦記事から、天保十三年と特定できる。本書簡に言う、「昨年より御案内之通之持病」も、前年末と推定される書簡十九の内容と符合する。

二十一 日付無し〔天保十三年十二月〕

追啓

任貴命御有籠御詠草

飛脚へさし出し申候。御入手被下候。

且又来卯年月次兼題

出来ニ付、御地之分さし上申候。

何卒矢西君、塩新様御さし上

被下候。其余も御座候得共、夫々

当方より便宜御座候ニ付、直様

さし出し申候。何卒正月

会始不相替御出詠奉希上候。

懐紙例之如く御座候。

千たて

秋のや君

*塩新……塩屋新兵衛。すなわち山中新兵衛のこと。書簡十四に既出。

■翌年の干支から推定。

二十二〔天保十四年力〕九月二十七日

以手紙奉啓候。追々秋冷之節、

弥御清栄被成御座、奉珍賀候。

随而野翁無異罷在候。乍憚御休意

被下候。然者、来ル廿九日先師例祭
相勤申候。先比御地へ廻文差出し申候。
定而相廻り候義と奉存候。何卒御見合
御都合被下、当日御上京奉待人候。尤
兼題ハ御出詠奉頼上候。

一、野翁義、以御蔭蛸薬師寺内寓居も
追々繁昌仕、此節ハ実ニ寸暇も

無之、大ニ弱り居申事ニ御座候。ぬてのやハ
当六月大橋長広方へ名前相譲り候得共、
是ハ畢竟名前斗りにて、いそがハしさハ
同様、殊更当年ハ文通其外等も

相増候上、愚妻も無之、少々ニ而も手伝
呉候者も無御座、相困り罷在候。御察し被下候。

右ニ付、暫時気ぬきに御地へ一ヶ月斗り
逃行候而心静ニ養生がてら遊び

申候積りを此節存付申候ニ付、内々
御相談申上候。御地御近辺ニ而ひそかなる

小屋敷月がりニかし呉候家などハ
無御座哉。尤野翁了簡ニハ私宅方

余り日々人多く、或ハ留主居屋敷之
主人など六ヶ敷人物尋来り、長談ニも及

など、其中へ又田舎人など来加り候而
終日の相對ニ相困り、持病ニも差構ひ

大ニ勞れ申候故、存付之事ニ候得者、御地ニ而も
余り人よせいたし候義ハ好ミ不申、裏家

ニ而も露路ニ而も六畳一ト間か六畳ト

四畳半ト二タ間斗り之處ニ而只隠れ居候而
氣儘ニ出あるき候積之處、よろしく御座候。

野翁と平生召使候小女を壱人つれ候而、兩人
滞留仕候積りニ御座候。「知る人の家之離れ座敷

などニ而食事万端世話ニ相預り候様なる
所ハ心配多くいやニ御座候。只召使之小女と

二人、食事ハ土鍋を火鉢ニかけ候而
朝夕相しのぎ候と兩人のふとんとあんど一ツさへ

かし物やなどにて御掛料ニ而かり被下候義、御世話にて
よろしく御座候。人の座敷などハ決して

好ミ不申候。御地岩城などより此節度々
催促ニ参り、御地別荘尾花河辺も御座候由

ニ而、それニ何日なりとも滞留いたし候様
など申参候得共、一二夜之義ニ候ハハ兎も角も

候得共、先一ヶ月斗隠れ居申つもり
故、左様之六ツヶ敷ハ大嫌ひニ而御座候。

矢張◎印を出し候而、我儘ニ養生
いたし候事を相願ひ候義ニ御座候。尤

尊君ハ御別懇之義ニ御座候得者、無腹蔵申上、
御世話御頼申上候事ニ御座候。乍併、此義ハ

京地ニ而も人ニ知らセ不申候。逃込候
積りニ御座候間、御地御知る人ニも先

御噂ハ内分ニ而御取斗ひ被下度候。
当廿九日会過候ハハ、来月五日頃

込之内ニ参り申度候ニ付、此義乍内々
余り寒く相成候てハ出歩行兼申候也
御尋申上候。おもわしき方無之候ハミ、
又々相考可申候。右御相談申上度
如此御座候。乍筆末御家内様へよろしく
被仰上被下候。猶期後音時候。

恐々謹言

九月廿七日出

城戸千楯

かぢや源兵衛様

貴下

尚々余り御地ニ而も外社中
などへ下拙参り候事ばつと致候而ハ
あしく、自然相知れ候事ハ致方も
無之候得共、御地親類共、松本辺ニ御座候も
其外も御座候。是等へハ先沙汰ハいたし
不申候つもりニ御座候。
持病之
当年早春大わづらひより殊更
歩行むつかしく、三五丁之処さへいたし兼、
仍而いづれ駕なしでハ参り兼申候。

御察し被下候。

■大橋長広に鐸舎の名義を譲ったことの報告がなされる。「愚妻も無
之」とあるが、千楯の妻が亡くなったのは、天保十四年四月八日で
あった。法諱、深誉智広恵照禅定尼。享年四十七（西住院過去帳）。
したがって、本書簡は、妻の没後から千楯の死去までの間、すなわ

ち天保十四年か翌弘化元年のいずれかであるが、千楯が本書簡中で
希望していた「一ヶ月斗り逃行」という計画と、十四年であること
が確実な書簡二十三における、「御地ニ而心静ニ十分英気を養ひ申
候」という文言とが符合すると考えられることから、両者が一連の
ものであると推定した。

二十三〔天保十四年〕閏九月二十五日

以手紙奉啓上候。追日秋冷
相増候処、弥御清栄奉賀候。随而野翁
無異罷在候。御休意被下候。
然者先比中ハ御地へ罷越、
段々預御世話、御厚情之段、千万
忝奉存候。即廿三日夕方ニ
無事ニ帰宅仕候。乍憚御安心
被下候。帰宅仕候処、又々留主中之
用向差つどひ居申候。乍去
御地ニ而心静ニ十分英気を
養ひ申候ニ付、用向も荒方ハ
弁じ申候而、埒明申し悦入候。
乍憚御家内様方へ宜敷御礼
被仰上被下候。矢西君へ別段
御礼書状差上申度候得共、此節
例之用向ニ而寸暇無之、いづれ
御礼書状も差上可申候得共、御出会ニ

呉々宜敷御礼被仰上被下候。先者
右御礼申上度如此御座候。猶期
後音時候。恐惶謹言

城戸千たて

閏九月廿五日

伊東源兵衛様

二白 此漬物沢山なる品々
御座候得共、折ふしるす中ニ但馬
津山より到来仕候。ふつゝか成
品ニ候得共、手元ニ有合せ申候。
さし上申候。御笑味被下候。以上

■ 大津にしばらく滞在し、「英気を養」ったことが述べられる。書簡
二十二の計画がすぐに実行に移され、その期間中颯々に世話になっ
たことに対する礼状と考えられる。

二十四〔年次未詳〕一月七日

尚々試筆愚詠并二月次

兼題書呈上仕候。不相替御出詠
被下候。以上

改年之御吉慶重畳目出度
申納候。先以御家内様御揃弥
御清栄ニ被成御重歳、弥珍重之
御儀奉存候。随而野翁無異儀、

嘉年仕候。乍憚御休意可被下候。
右年始御祝詞申述度如茲
御座候。猶期永日時候。恐惶謹言

正月七日

城戸範次

千楯

伊東源兵衛様

参人々御中

二白 来ル十七日例年之通
三大人祭祀会始仕候。不相替
御出詠被下候。

兼題 懷紙認

雪消春水来

右乍序御案内申入候。以上

千楯

伊東君

二十五〔年次未詳。天保八または十三年カ〕一月九日

改年之御慶目出度申納候。

先以其御表後家内様御揃

弥御清栄ニ被成、御重歳珍重之

御儀奉存候。随而野方無異嘉寿仕候。

乍憚御休意被下候。右年始御祝詞

申述度、如此御座候。猶期永陽時候

恐惶謹言

城戸範次

正月九日

千楯

伊東源兵衛様

追啓 野翁義、旧蠟(マツ)より例之持病疝

ニ而引籠罷在、爾今平臥仕候。乍去

此節追々本復之方へ向申候。御安意被下候。

一、来ル十六七日両日、例年之通

三大人祭祀哥会始仕候。何卒

不相替御出詠被下候。乍憚此段

矢西君へも被仰上被下候。

兼題 鶯入新年語 懷紙

右之通ニ御座候。当日何卒御上京

奉待入候。

一、坂本町山中真兵衛様方へ、別紙

乍御面倒御達し被下候。岩城一統ハ

京地より別ニ案内仕候。山中氏へ

会之義相知らせ申候。夫迄ニ達シ候者

よろしく御座候。御頼申上候。

右之義十一日御案内旁如此御座候。

千たて

秋のや君

■持病を訴えた天保七年十二月と推定される書簡十か、あるいは十二

年十二月と推定される書簡十九と一連のものである可能性が考えられる。

二十六〔年次未詳。天保九年以前力〕一月十四日

尚々菊廻屋方へ御伝聞之趣奉承候

早々相達し可申上候。乍憚り御家内様へも

宜敷被仰上被下候。

年始貴翰忝致拝見候。御同前

目出度申納候。先以御家内様御揃

弥御勇健ニ被成御座、珍重之御儀ニ

奉存候。随而野方皆々無異罷在候。

乍憚御休意被下候。右御答紙如茲

御座候。猶期永陽時。恐惶謹言

正月十四日 城戸範次

千楯

伊東源兵衛様

追啓 目出度申納候。為御菓子料

壺封送被下、忝幾久受納仕候。

将又図中子(矢西)よりも御叮嚀ニ壺封

送被下、忝受納仕候。猶其内罷出、

御挨拶可申上候得共、乍憚貴君より

宜敷被仰上置被下候。当春より月次も

御出詠被下候段、賑々敷悦入候御事ニ御座候。

会初ニは昨年も御上京之義、何卒

御光来奉待入候。即御詠草

御兩人分一覽仕候間、早々御認置

被下候。尤端作ハ京地之分ハ

春日侍三大人影前

詠霞遠山衣歌

右之通ニ御座候得共、遠方普通ハ。

詠霞遠山衣歌

右之通ニ御座候。京地ハ影前へ出席

御座候故之義ニ御座候。他方ハ何れニ而も

宜敷色々ニ相認上申候。左様思召

被下候。

此間正徳寺君御上京御面会申

御噂申度候。当月か来月より少々

春氣催候ハミ、兼而昨年御噂申上候出歩行

存立申候。其節ハ御世話ニ相預り希候。

図中子へも御噂被成置被下候。

春詠試筆御笑覽被下候。

千楯

秋廼屋吾兄

■「当春より月次も御出詠」とあり、矢西図中が鐸舎の歌会に参加するようになった時期のものと思われる。本稿の書簡のうち、図中の名の初出は書簡十一（天保九年四月八日）であるから、それ以前か。

二十七〔年次未詳〕一月十四日

貴翰忝拝見仕候。年始御祝義

御同慶奉存候。如命余寒之節、

御清栄奉賀候。抑当方会始

兼題御詠草御差登拝見仕候。

最初之御詠申受度奉存候。何卒

当日間ニ合候様、御差登御取斗被下候。

且又、為御菓子料老封御惠贈

被下、幾久受納仕候。奉厚謝候。

右御報御礼込如斯御座候。尚

期後音時候。恐惶謹言

正月十四日 千楯

臣規君

二白 塩藤様御届状忝奉存候。

正徳寺大徳御上京之由、未御高来

無之候。

*塩藤……山中新兵衛すなわち塩屋新兵衛（塩新）の同族と思われるが未詳。

二十八〔年次未詳〕一月二十四日

当月十四日御日附之貴書忝致

拝見候。余寒之節弥御清栄被成

御座、奉賀候。然者御懷紙早速会始

御差登被下、殊ニ矢西君又々

御登被下、御兩人様共当日間ニ合

相手向披露仕候。如命当座差上候

画賛ニ御座候。即二枚差上候。

矢西君と御兩所御取分御出詠被下候。

外ニ賛いたし御座候。例之通御互ニ

福引ニ仕候。御兩人分御当り之画之

御座候。是又矢西君へもいづれとも

御差上被下候。扱右御賛被下候画も

最早外へ福引ニ相当御座候ニ付、

御短冊ニも一葉づゝ画賛哥御認こし

被下候。是ハ当社へ相残し候事ニ

御座候。無御捨置御頼申上候。先者

右御礼旁如此御座候。猶期後音時候。

恐惶謹言

正月廿四日

ちたて

おみのり君

尚々乍憚矢西君へもよろしく

御礼被仰上被下候。兼当之写ハ

近々差上入御覧可申候。

二十九〔年次未詳〕一月二十五日

尚々御家内様へも宜敷御伝声

被下候。其内相見合、野子も罷出
可申奉存候。

当月十七日御芳状相達シ、忝

致拝見候。未余寒之節、弥御地

御家内様御勇健被成御座、珍重

奉存候。然者、会始兼題之

御懷紙送被下、不相替忝

奉存候。尤御念被入数枚御認、

何れも奉感心候得共、右之中

彼は評談仕、白雪之ふる郷

人もうちいでゝ、と申を披露

仕候。余も折角御差登、御返進

申上候も残念と申受置候。何卒

不殘御恵ミ被下候。御上京も可

有之思召之处、雨天ニ而無其義、

殘心ニ奉存候。何卒近々御上京奉

待入候。例年之御摺物御恵被下、

是又不相替忝奉存候。めづら

しき御趣向取て奉感吟候。

真恵美主方御伝声之義承候。

尚又可申通候。右御答御礼

旁如斯御座候。猶期後音時候。

恐惶謹言

正月廿五日

千楯

伊東源兵衛様

二白 野子兼題詠左ニ申上候。

春生人意中 千楯

まづにはふ心の花に鶯の
初音おそしとおもふ春哉

当座
朝梅

終夜ねやにも嗅て朝廷の

うめやいくらの薫りなるらむ

御笑覧被下候

三十〔年次未詳。天保八年以降〕二月十三日

此度六部の外ニ老部御預り置被下候。

罷下り候節、外方へ遣し申度候。乍御面倒

御頼申上候。都合七部ニ相成申候。

弥御勇健奉賀候。一昨日ニハ御状被下、

忝矢西御氏、正徳寺御届物御世話、

是又忝奉存候。被仰越候振^{（マツ）}ぶり

六部差上申候。又々御入用ニ

候ハ、暇時にてもさし上可申候。

今朝右持参ニ而、御地へ可罷出

こしらへ致候処、雨ふりかけ候ニ付、

相やめ申候ニ付、飛脚へ出し申候。

何れ不遠罷出、拝顔と相たのしみ

居申候。当十七日兼題並ニ

北野奉納当廿五日納申候。何卒

御出詠被下候。何れ不遠其内罷出

可申候。もし正徳寺様御出会も御座候ハ、

左様被仰上被下候。尤当月ハ十七日

会之外廿一日ニ本式会相催候ニ付、

迎も罷出候而も御地ニ一宿之外ハ

出来申間敷、淀村正田君、瀬田

等ハそれ過ニ而参り候つもりニ御座候。

早々以上

二月十三日 千楯

秋のや君

■『詠歌したためぶり』の刊年である天保八年以降の書簡である。

三十一〔年次未詳〕三月十八日

昨日之御手紙今日忝拝見仕候。追日

春暖弥御清栄奉賀候。当方無異

御休意被下候。然者御報被下候趣

逐一承り申候。再答相畧申候。御免被下候。

一、当月会御詠出忝一覽仕候。御序ニ

御認登被下候。即御詠草御返進仕候者、

乍失礼存寄を傍書仕候。

一、為御菓子料老封御恵投被下、忝

受納仕候。即別紙入手書差上申候。

一、奉納哥之義、御出詠被下候段、御厚志

忝奉存候。即題書別紙ニ差上申候。

御入手被下候。

右御報如斯御座候。猶期後音時候。

恐惶謹言

三月十八日夜認置 千楯

伊東臣規君

尚々当月愚詠

朝落花

千楯

春の夜の夢のあらしハまさしくて

あさ庭しろくかれる花哉

^{当座}
薄暮雉子

いづかたにいなさゝ原やどりせん

くれぬと告てきゝすたつ也

狩くれしかた野の冬のあはれさへ

霞にこむる雉子の夕ごろゑ

右御笑覧被下候

三十二〔年次未詳。天保四年力〕三月十八日

暮春

あやなしや何のいとまもながき日を 花

をしむまに春ハくれけり 千楯

忝拝見仕候御詠草、十七会

衆議判ニ而相定申候。点多きを

御認被下候。

冷泉為村卿御自作之人丸神像を

不斗去方より譲り賜り候ニ付、

即当日会当座へ寄花懷旧トカ題

詠出皆々供し申候。何卒御出詠

可被下候。正徳寺大徳へも此段

御序ニ御噂被下候。御大病人御座候由、

嚙々御心配奉察上候。乍憚宜敷

被仰上被下候。此度ハ御取込中と存

罷有、御詠草尊君迄差上申候。

御ついでによりしく被仰上候。

穴賢

三月十八日 千楯

秋のや君

■「御大病人」が、天保四年四月十九日付書簡ニで死去が記された正徳寺良昭の子であれば、本書簡は天保四年のものと考えることができる。

三十三〔年次未詳〕四月二十四日

一筆啓上仕候。追日薄暑之節

弥御清栄奉賀候。然者野翁義、廿日

無事ニ帰着仕候。御安意被下候。誠ニ

此間者、八幡往返御座敷止宿仕、御懇

情之段忝殊ニ大勢之義、色々御馳

走ニ預り、忝奉存候。家内悴よりもよろしく
御礼申上候様、申聞候。扱此^{桶カ}耐ずし^{桶カ}也□

昨日八幡より社中ニ御座候。沢山被登申候

ニ付、御地ニ而ハ不珍敷品とハ存候得共、

乍狹少御分配奉呈候。御酒之肴ニ

被召上被下候ハ、忝可奉存候。先者、

右御礼旁如此御座候。御内君御娘君等

宜敷被仰上被下候。猶期後音時候。

四月廿四日 千楯

伊東源兵衛様

尚々八幡へ御差下し被下候

大封物、無滞帰着仕候

御安心被下候

三十四〔年次未詳〕 九月十四日

此間ハ参上久々ニ而得貴意相乗候、忝奉存候。

昨日ニ而万葉取かへ、筆等さし上候。

御紙面被下、折ふし大取込中

御報不仕、失礼御免被下候。

正徳寺君より被惠候耐ずし、

尊家様ニ而御用ひ被下様申上

置候処、御さし登被下、甚恐入候。

いか様先様御志之義、受申候者

実意忝仰随ひ申候。折ふし

飛脚参り候節ハ、真恵美其外

二三輩、月見を宅ニ而いたし居候。

不取敢肴ニいたしもてなし申候。

飛脚初夜時分ニ参り甚いそがし

申し上、右来客中御返事

不仕候義ニ御座候。筆ハ御噂申上候通

之筆ニ而、即取合申置候。一本づゝ

本の間ニ入置候。定而御入手と奉存候。

是ハ進上ニ可仕候。左様思召被下候。

先御つかひ試も被成候。乍延引

右御報如此御座候。早々以上

九月十四日 千たて

秋のや君

尚々御家内様へよろしく

被仰上被下候。殊ニ御来客中

御邪魔仕候。恐入候。且矢西氏へも

御いとまも不申上、是又よろしく

御断被仰上被下候。

夜分よミ候

十三夜のうた

白ぎくの花のもなかの

月影ハ

ミたぬ光りもミちてにほへり

まがくし心つくしの

琴のをの

数にあふ夜の月のさやけさ
秋も今ハうつりくゝて

しらつゆの

霜とも見ゆるけふの月哉

入御笑覧候

三十五〔年次未詳〕九月二十五日

一筆啓上仕候。追日秋冷相増候処、
弥御清栄被成御座奉賀候。野翁
無異ニ罷在候。乍憚御休意被下候。
然者愚庵義、当廿三日帰宅仕候。
帰路御立寄可申上御噂致候処、先方
社中ニ追々被留、長滞留ニ相成候上、
会前ニ而心急ぎ候ニ付、右仕合ニ御座候。
正徳寺様へハ返りがけ立寄、尊君へも
御伝聞御頼申置候。定而相達ニ可申奉存候。
誠ニ参りがけニ者、両夜之御無心例之
御懇意ニ而、無遠慮ニ御世話かけ、忝
殊ニ同道人も御座候而、旁御面倒奉恐候。
是又宜敷御礼申上候様、可申聞候。
御家内様へ宜敷厚く御礼被仰上被下候。
又々来春二月頃、彼地へ罷越候約束
仕置候。其節ニハ又々事により一宿之義

御ねだりも難斗、宜敷御頼申上候。

一、永源寺紅葉、誠ニ絶景ニ御座候。

八幡より同道人四人上下とも八人ニ而参り

彼寺ニ而一宿仕、ゆるく一覽仕候。

伊崎寺と申所へも、船にて案内被致候。

是も絶景也。長浜祭り、長命寺へハ

参り申候いとま無之、重而と申候而

やめニ仕候。福堂村之報然大徳も

伊崎へ舟にて参り候節、舟より

見受ながらえ参り不申、折角

御聞糺被下、残念之仕合ニ奉存候。

又々重ねて参り可申候。

一、来ル廿九日十三夜之御詠、何卒

御頼申上候。直様御清書ニ而もよろしく

御座候。往返之間取も御座候ハ、

当方ニ而代筆いたさせ可申候。

一、傘二本御預ケ申置候。差急ぎかへり候而

思ひ出し申候。右ハ賃京払と被成、

飛脚へ乍御面倒御さし出し被下候。

御頼申上候。

先者右御礼旁如斯御座候。半月斗

留主中とかく用向差支乱筆

御高免被下候。乍憚御家内様へよろしく

被仰上被下候。尚期後音時候。

恐惶謹言

九月廿五日

城戸千楯

伊東源兵衛様

二白 此品鹿抹ながら例之

到来合せもの奉呈候。御笑納被下候。

三十六〔年次未詳〕九月二十六日

御状忝拝見仕候。追日寒冷ニ御座候処、

弥御清栄奉賀候。随而当方無異、

罷在候。御休意被下候。然者此間ハ

山科御訪御宿番之由、御苦勞奉存候。

御詠草拝見、御返進申上候。御清書

何卒廿九日迄ニ御頼申上候。扱

野翁義も大御無沙仕候。来月

さし入ニは何とぞ参上仕度奉存候。

此節ハ殊之外雅俗用さしいで候者

せはしく暮し申候。何れ来月者

参上と相心掛罷在候。乍筆末

御家内様へもよろしく御伝被下候。

御報迄如此御座候。恐惶謹言

九月廿六日 千たて

秋の屋君

以手紙申上候。追日寒氣相増候処、

弥御清栄奉賀候。随而野翁無異

罷在候。御安意被下候。然者此

雲丹此頃沓岐国人入門在之、

彼地より沢山登し到来致候、

越前之うにとハ製ちがひにて

如何御座候半と存候得共、余り

沢山貰ひ候ニ付、少々御分ケ呈上

仕候。御酒之薬にハよろしからん

と存候。御笑味被下候。此節追々

寒氣ニ而御地へも当年ハ罷出候義

出来かね申候。乍憚御家内様へ

宜敷被仰上被下候。寔ニ先月

例祭ニハ重篤君共御豎詠草

御差送り、賑々敷会相勤申候。

此節甚雅事繁用ニ而いまだ

写シ不仕、不遠相写し入御覧可申候。

矢西君へも御不沙汰仕候段、宜敷

被仰上被下候。さしたる事も無御座候

得共、御訪旁如此御座候。猶

期後音時候。恐々謹言。

千たて

十月十七日

秋屋翁

御許ニ

三十七〔年次未詳。天保十〇十二年頃カ〕十月十七日

尚々今日ハ月次会ニ御座候。

兼当御笑覧被下候。

山館冬来 千たて

門さしてなしとやいはん神無月

ふゆをいざなふ軒の山風

^{当座}
夜埋火

夜もすがらかきおこされてやする哉

ものこそいはねあはれ埋火

夜を寒ミおもひおこせる埋火に

まくらをよせて春の夢見ん

右入御笑覧候

*重篤君……矢西重篤カ。通称、三左衛門。大津の人。富樫広蔭門。

天保二年生。富樫広蔭編『言幸舎門中千百人一首』（安政四年刊）に入集。

■「壱岐国人」が、書簡十九の「後藤氏」を指すのであれば、本書簡は天保十二年以前ということになる。また、「重篤君」が矢西重篤であれば、さほど年次は遡りえない。とすると天保十〜十二年頃かと推定される。

三十八【年次未詳】十月十八日

忝拝見仕候。如来意追日

寒冷相増候。弥御清榮奉存候。野翁

風邪追日快気仕候。御安心被下候。

貴翁も御同前之御様子、兎角

此節ハ一統之流行と存候者、

御自愛被成候。正徳寺様へ

御返し御世話忝候。

奉納入手仕候。鳥目百三十文

是又慥ニ受取申候。月次御詠草

即夜前会席ニ而披露仕候。

御序ニ御清書御こし被下候。

野翁も大低貴翁同様ニ

詠御座候。少々おもふきハ違申候。

春秋の花はいそ野の冬

がれにうつゝともなくの

こるなでしこ 御笑覧被下候。

右御報如此御座候。早々以上。

十月十八日 紙魚

秋のや君

三十九【包紙】（年次未詳）二月十八日

【包紙表】

大津舟頭町

かぢや源兵衛様 城戸範次

無事急用

質済

【包紙裏】

二月十八日

(朱印) (「志美廻／牟呂也」) 從京都

【紙背】

千楯

月前梅

(食卓十点)

影見れば梅か月かと
はるの夜のおほろのしミづ
くみぞかねける

月影にいろいろばゝれて
うめのはなあやなく袖を
かをらする哉

おのが香を月にゆづりて
いろ見せぬ梅はこゝろも
あやなかりけり

＊翻刻に際し、高梨素子氏、勝又基氏のご教示を得た箇所がある。記
して感謝申し上げます。

＊また、貴重な資料の閲覧をお許し下さった諸機関、真顔門人につい
てご教示下さった牧野悟資氏、金戒光明寺西住院の過去帳について
ご教示下さった戸川隆博氏に、心より感謝申し上げます。

摂関期の立后関係記事

—『小右記』を中心とする古記録部類作成へ向けて—

三橋 正*

はじめに

日本史研究において古記録（日記）は古文書と並んで重要な資料とされている。翻刻やテキストの公開は近年盛んになっているが、その読解は難しく、若手研究者や海外の研究者には容易に使いこなせない現実がある。少なくとも書下し文と註釈が必要となるが、それを作成するには、古記録の相互関係（編年比較）や人物比定が必要で、儀式次第や政務運営を理解するためには、諸資料を関連させる研究が不可欠である。

小右記講読会（代表三橋正）では、『小右記註釈 長元四年』上下（八木書店発売、二〇〇八年）の刊行後、講読会（例会と読直し会）を継続して『小右記』長和年間（一〇一二～一〇一六）の註釈を作成すると共に、平成二十一年度から文部科学省科学研究費補助金（基盤研究

C）による『小右記』註釈と平安時代データベースの作成」の作業を並行して進め、理想的な古記録データベースのあり方を模索してきた。これらの成果の一部は、平成二十一年度における『左経記』講読の内容や、平成二十二年度におけるロンドン大学アジアアフリカ研究学院（SOAS）での『小右記』講読会の報告などと共に、『小右記講読会』のホームページ（<http://saneyori.meisei-u.ac.jp>）にて公開している。将来的には『小右記』『左経記』などの摂関期の古記録に限定されない総合的な古記録データベースを構築しようとしており、そのための理想的なウェブの設計について、概要と具体的な取り組みの成果をまとめておきたい。

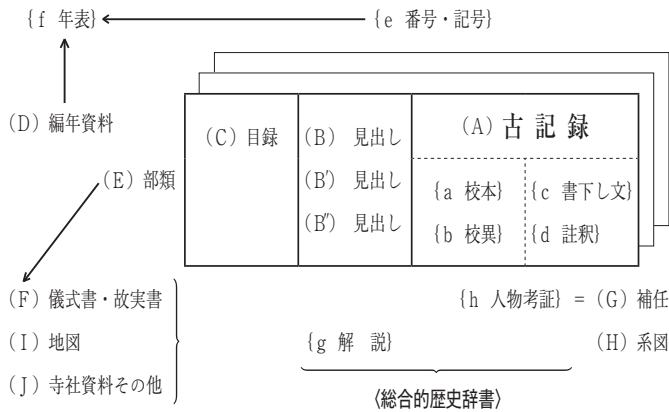
一、古記録データベースの制作理念

『小右記』を中心とした古記録研究により、日記は単に付けられて保存されていたのではなく、筆写されながら活用され続けてきたことに真の意義があったことが明らかになった。それは「古記録文化」と呼べるきもので、前近代における日本社会の知の体系を作り出していた。具体的には、古記録（A）を書写する際に見出し（B）を付け、それに基づく目録（C）を活用して、『日本紀略』『本朝世紀』などの編年資料（D）や部類（E）が作成され、さらに諸知識（故実）を集成した儀式書・故実書（F）や人物比定に必要な補任（G）や系図（H）が成立した。近世における内裏図・大内裏図の復元など歴史地図（I）の作成や、神社・寺院などにおける諸資料（J）の集成にもつながった。

現代の研究者もこのような知の体系を理解した上で古記録を活用しなければならぬが、それを正確に読みこなすためには、同時代の複数の

古記録（A）の関連記事について、本文を校本（a）として校異（b）と共に確定し、それに基づく書下し文（c）と註釈（d）を作成するだけでなく、見出し（B）を活用しながら番号・記号（e）を付けて整理し、それを編年資料（D）との関係で年表（f）にまとめ、政務・儀式・事件などについては部類（E）・儀式書（F）などを用いた解説（g）を書き、官職によって示される登場人物は補任（G）や系図（H）との関係を人物考証（h）で明らかにし、建物などの場所については地図（I）上に位置付けるなどの作業が必要になる。

〈古記録を中心とした日本史資料データベースの概念図〉



すなわち、理想的な古記録データベースは、テキストをあるがままに公開するだけでなく、諸本の校合による校本を確定し、それに基づく読み（書下し文）や解釈（註釈または現代語訳）を提示し、背景にある研究成果をも含めて、幅広い人々に活用してもらえらるものでなければならぬ。さらに、一時代に限定されない通時代的に複数の資料を統合できるような研究と普及（教育）を兼ね備えたシステムの構築が求められており、現在、他の古記録の註釈を進めている歴史研究グループと情報学のコンピュータ情報処理研究グループからなるチームを作り、新たな研究段階へ駒を進めつつある。

二、部類的読解の意義

最も重要なことは、それぞれの古記録が書写・活用されていた時代のあり方をも復元しながら、本文を読解していくことである。そのために、多くの古記録の写本に付けられた「首書」をデータベースに活用し（その無い部分は補って）、それを見出しとした部類を再構成する方法を採用する。例えば、『小右記』には自筆本がなく、写本のみ残されているが、それは中世以降においても『小右記』の記載が政務・儀式の参考に供される必要があったからである。本文に「首書」の形で見出しが付けられているのはそのためであるが、それは現在残されている写本の二つの系統（A系本・B系本）で別のものが付けられており、書写段階、ないしは写本を活用する段階で、内容を理解しながら読まれていたことを裏付ける。そしてA系本の「首書」に基づいて『小記目録』（全二〇巻のうち現存は一八巻）が作成されているように、年中行事・臨時などの項目別に本文記事を検索できるような工夫もなされていたのである。

これまで『小記目録』は本文の欠落を補う程度にしか利用されていなかったが、これを軸に読解・註釈することで、古記録の真の価値を見出し、「古記録文化」の精神世界を復元することができると思われる。

従来の註釈では、年次ごとに読み進める方法が採られてきた。歴史を復元するという意味で、基本的かつ根幹的な作業である。しかし、政務・儀式の執行に役立てるといふ「古記録文化」の精神からは、時系列に従うのとは別の、部類的な読み方が不可欠である。それは、同一項目については、異なる年次の記事も並行して読んで註釈を施すということである。これによって、次第など儀式書との共通点と年次ごとの相違点（問題点）が明確になり、より当時の関心に即した正確な読み方ができるだけでなく、書写の誤りや本文・目録の欠落部分なども容易に見出せるようになる。

最終的には、ウェブ上でそれらをわかりやすく示すことができるシステムを構築したいと考えているが、ここでは紙面の限界があるものの、「立后」の項目をサンプルとして取り上げて、その関連記事を「首書」と共に掲載する。

三、摂関期の立后記事

「立后」とは、皇后を宣命によって定めることで、「きさきだち」「皇后冊立」ともいう。『小右記』には四つの事例に関する記事があるが、現存する『小記目録』にその項目はない。『小記目録』全二〇巻の構成は、第一〜七が年中行事、第八が神事、第九〜一〇が仏事、第十一〜二〇が臨時であるので、欠損した第一三「臨時三」に「行幸（諸社行幸を除く）」「行啓」「入内」「親王宣下」「改元」「立太子」「辞太子」などと

共に載録されていたと考えられる。また、同じく欠損した第一一「臨時一」には、「讓位」「即位」「大嘗祭」「一代一度大神宝使（五畿七道奉幣使）」「一代一度仁王会」「一代一度仏舍利」などの天皇代替わりの事項がまとめられていたと考えられるが、『小記目録』の復元と本文記事との詳細な対比と考察については後日を期したい。

ここでは『小右記』にある四つと同時代の他の二つの計六つの事例について、『権記』『御堂関白記』『左経記』、さらに『日本紀略』『本朝世紀』などの同時代史料と並置させる形式で、日付に従って史料ごとに番号①②③を振って、書下し文を掲載した。ウェブ上の古記録データベースとも連動できるように、古記録については内容に即して段落分けをした上で「首書（見出し）」を付けた。『大日本史料』『皇室制度史料』などでは同日条の関連しない記事を省略しているが、ここでは古記録の真の価値を損なわないように、敢えて同日条全文を掲げ、関連する部分の「首書」を各史料の番号の下に記号（*1、▼aなど）で示した。これにより、既存史料集の編纂ミスなどが明らかになった部分もある【事例1】⑤注1参照。

書下し文や「首書」記号は『小右記註釈 長元四年』に準拠しているが、読者の便宜のために改めた部分がある。書下し文の元となる校本（原文）については、できるだけ多くの写本・活字本を参照して作成したが、紙面の都合で割愛し、従来と異なる校訂上の変更をした部分のみ、各史料ごとに注記（注1）（注2）…を施した。「首書」記号については以下の通りで、いずれも底本にあるものについては記事順に番号を、底本になく追加記号を付けたものについては記事順にアルファベットを付した。

『小右記』（藤原実資の日記）

*…長元四年条の底本（伏見宮本）と同じB系本の写本にあるもの。

+…尊経閣文庫（前田家）本などA系本の写本にあるもの。

▼…底本に首書が無く、新たに見出しを作成したもの。

◆…底本になく『小記目録』に記事があるもの。番号は編目順。

★…逸文。

・追加記号のアルファベットは小文字

『御堂関白記』（藤原道長の日記）

※…底本にあるもの。

▲…底本に首書が無く、新たに見出しを作成したもの。

・追加記号のアルファベットは大文字

『権記』（藤原行成の日記）

△…底本に首書が無く、新たに見出しを作成したもの。

☆…逸文。

・追加記号のアルファベットは大文字

『左経記』（源経頼の日記）

※…底本にあるもの。

▽…底本に首書が無く、新たに見出しを作成したもの。

◇…底本に本文がなく、巻頭の目録だけに項目があるもの。

☆…逸文。

・追加記号のアルファベットは小文字

四、事例解説

【事例1】は、天元五年（九八二）三月十一日（⑭⑮）に立后された

藤原遵子（九五七〜一〇一七）の記事である。遵子は、時の関白・太政大臣で「殿下」と呼ばれていた藤原頼忠の一女で、母の敵子女王は中務卿代明親王の女であった。天元元年（九七八）四月十日、二〇歳を過ぎて円融天皇のもとに入内し、翌月廿二日に女御の宣旨を蒙って「弘徽殿女御」と称されていた。すでに右大臣藤原兼家の女である女御の詮子には同三年に懷仁親王（のちの一条天皇）が生まれていたにもかかわらず、遵子は親王がいないのに皇后（中宮）になったので「素腹の后」と呼ばれた（『栄花物語』二・花山たづぬる中納言）。しかし、父頼忠の存在は大きく、その甥で蔵人頭を勤めていた藤原実資の日記『小右記』からは、立后をめぐる天皇との水面下の遣り取り（①▼a④▼a）や準備（⑥▼b⑬▼a⑤c）、左大臣源雅信を内弁（上卿、儀式進行の責任者）として行なわれた当日の儀式（⑭⑮）、その後の慶賀（⑯▼a⑱▼b）などについて、細かな様相が伝わってくる。実資自身も、同じ小野宮一門から皇后が生まれるということと重要な役割を果たし、中宮職の設置に際しては亮に任じられている（⑭▼ch）。

【事例2】は、正暦元年（九九〇）十月五日（⑤⑥⑦）に立后された藤原定子（九七六〜一〇〇〇）の記事である。定子は、同年五月に摂政となった藤原道隆の女で、母は高階貴子であった。同年正月に入内、翌月に女御となり、従四位下に叙された。十月に皇后（中宮）となるが、既に太皇太后昌子内親王（冷泉天皇皇后）、皇太后藤原詮子（円融天皇女御・一条天皇母）、皇后藤原遵子がいて、遵子を皇太后に転上できなかったため、遵子の中宮職を皇后宮職に改めて、定子に中宮職を付置した（⑦）。これにより二皇后並立の新例が開かれ、以後、先立の皇后には皇后宮職を、新立の皇后には中宮職を付置するのが常例となった。その時に参議になっていた藤原実資は、定子立后の報を聞いて「驚奇する

こと少なからず」(①▼b)と記し、さらに道隆の息(定子の兄)伊周の求めに応じて、遵子立後の儀式の日記【事例1】(⑭)を使の弓削以言に書写させて送ったことを記した後で「皇后四人の例、往古聞かざる事也」と驚きを示している(②▼a)。しかし、まさに全盛期を迎えていた中関白家に対し、小野宮家の劣勢は覆うべくもなく(前年六月に頼忠も薨去)、道隆に御慶を申しに行ったにもかかわらず、実資は会ってもらえなかった(③▼a)。儀式を日記に書き留めた時の気持ちは想像するに余りあるが、饗宴を同年五月に薨じた兼家(道隆の父)の喪家で催したこと(⑤▼d)、内弁を勤めた大納言藤原朝光の失態(⑤▼f)を批判するのが精一杯であった。なお、長徳元年(九九五)には定子の妹である原子が東宮居貞親王(のちの三条天皇)に入侍するなど、後宮は中関白家の栄華に彩られ、その有様が定子に仕えた清少納言の『枕草子』に描かれている。しかし、同年四月に道隆が薨じ、翌年の長徳の変で中関白家の凋落が決定的となった時に、定子は出家した。一条天皇との間に脩子内親王を儲けたのはその年の十二月であり、長保元年(九九九)に敦康親王を儲けるも、翌二年に脩子内親王を出産した翌日に崩御した。

【事例3】は、長保二年(一〇〇〇)二月廿五日(⑭⑮⑯)に立后された藤原彰子(九八八〜一〇七四)の記事である。彰子は、時の左大臣で内覧の宣旨を受けていた藤原道長の長女で、母は源雅信女の倫子である。道長は、一条天皇朝での自らの地位を確固たるものにするため、一二歳で女子の成人儀式にあたる着裳をしたばかりの彰子を、長保元年(九九九)十一月一日に入内させ、七日に女御とした。その彰子の入内に際して、道長が調度として作成中の屏風に貼る和歌を人々に依頼し、実資が公卿としてただ一人詠進せず、日記に花山法皇までが御製を詠進

したことなどを批判していることは有名である(『小右記』長保元年十月廿八日条)。翌二年の立后に到る経緯については、一条天皇の蔵人頭を勤めていた藤原行成の日記『権記』(①〜④・⑥⑧⑨⑬)に詳細に記されている。中宮に定子がいることにより躊躇を示す天皇と、早く実現させたい東三条院(詮子、一条天皇母で道長姉)・道長との間を行成が奔走し、正月廿八日に兼宣旨(兼ねて決定を伝えて任命の日時を勘申させる宣旨)が下った(⑤▲A・⑥▲A)。その間に道長から「汝の恩の至也」(①△C)と言われるほどの働きをした行成も感慨深かったようで、当時の藤原氏の皇后(詮子・遵子・定子)が皆出家して氏祭の勤め(奉幣や大原野祭での饗宴など)を果たさずに「神事違例」が続いている現状を指摘し、二后並立となっても「神事」を優先させなければならぬ「神国」の朝廷に彰子の立后は必要であるとして、天皇を説得させたことも記されている(⑥△B)。その後の準備はもちろん、立后当日についても、道長の『御堂関白記』(⑭▲A〜C)以上に『権記』(⑮)の記載が詳細であり、土御門第で冊命の勅使についての指示を出す道長の様子(△B)、里内裏(一条院)の設営(△C)、右大臣藤原顕光を内弁としてなされた立後の儀式(△D〜G)、本宮(土御門殿)の設営や儀式(△H〜K)、そして最後に三后の職の変更を総括し、宣命使の作法をコメントするなど(△K)、細かな遣り取りもわかるように記されている。彰子に仕えた女房に紫式部がおり、寛弘五年(一〇〇八)に敦成親王(のちの後一条天皇)が生まれた時の様子を『紫式部日記』に書いている。彰子はまた、翌年に敦良親王(のちの後朱雀天皇)を儲け、道長の栄華を支えた。一条天皇の崩御により皇太后、三条天皇の譲位により太皇太后となるが、後一条天皇(および後朱雀天皇)の国母であり、万寿三年(一〇二六)に三九歳で出家しても上東門院の称号

を受け、女院として天皇家・摂関家の要であった。道長没後にも文化を牽引していたことは、『小右記』長元四年条などからもわかる。

【事例4】と【事例5】は、三条天皇の二人の皇后の立后関係記事である。三条天皇（九七六～一〇一七）は二十五年に及ぶ東宮生活の後、寛弘八年（一〇一一）に三六歳で即位した。既に数人の配偶者があったが、その一人が正暦二年（九九一）に東宮妃となった故大納言藤原済時の娘城子（城子とも）であり、もう一人が寛弘元年（一〇〇四）に尚侍となった藤原道長の二女妍子（彰子の同母妹）であった。（城子の先に摂政藤原兼家女綏子と関白藤原道隆女原子がいたが、綏子は密通によって退き、原子も頓死した。）二人は同年八月廿三日、同時に女御となるが、翌二年二月、子供のいない妍子が先に中宮になり、皇子皇女を生んでいた城子の立后は二ヶ月後であった。父親の力がものをいう摂関期を象徴しているが、二人の立后には単なる時間的な先後という以上に大きな違いがあった。

【事例4】は、長和元年（一〇一二）二月十四日（⑧⑨）に立后された藤原妍子（九九四～一〇二七）の記事である。この時には藤原行成が宣命使を勤めているが（⑧▲B）、『権記』は残されていない。『小右記』もこの年の春（正月～三月）の記事を欠いているが、実資は父藤原齊敏の忌日に当たって当日に参入していないから【事例5】⑥▼J、記事があったとしても詳細ではなかったと想像される。古記録史料としては父道長の『御堂関白記』のみであるが、この頃には道長も日記を付ける習慣を身につけ、自分の子供の重要な儀式については長い記事を残している。特徴的なのは、兼宣旨を受けて妍子が内裏から退去した東三条第での記載で、正月三日条（①）では全参加者を記している（▲C）。立后当日の二月十四日条（⑧）に、内裏での宣命宣制・宮司除目の記載が

あるが（▲BC）、裏書にその倍以上を費やして本宮（土御門第）での拝礼・饗宴・穩座・賜祿・勅使のことを記している（▲D～F）。また、翌日・翌々日の饗宴（⑩▲A・⑪▲A）、啓陣の諸衛への賜祿（⑫▲B）、興福寺・仁和寺・延暦寺の僧の慶賀（⑬▲A・⑭▲D）へと続く。妍子は、道長によって「后がね」として育てられ、東宮居貞親王（のちの三条天皇）のもとに入る時も優秀な女房がたくさん集められたという『栄花物語』八・はつはな）。立后の翌年七月に禎子内親王を出産した時、道長が皇子でないことに不快感を示したというが（『小右記』十二日条）、それでも多くの女房が集められた（『栄花物語』一一・つぼみ花）。姉妹の中で最も派手で、万寿二年（一〇二五）に皇太后として枇杷殿で開催した大饗での女房たちの華美は、関白である兄頼通から注意されるほどであった（『同』二四・わかばえ）。同四年九月十四日に出家・崩御するが、臨終に立ち会った道長は娘より長生きさせた仏への恨み言を口にしたという（『同』二九・たまのかざり）。

【事例5】は、長和元年四月廿七日（⑥⑧）に立后された藤原城子（九七二～一〇二五）の記事である。父済時は、長徳元年（九九五）に五五歳で薨去、時に正二位大納言兼左大将であったが、立后の日に右大臣を追贈された。母は源延光女である。皇后となる前、正暦五年（九九四）に敦明親王（後の小一条院）を儲け、三条天皇の寵愛を受けていた。それにもかかわらず、妍子の立后が先になった理由は、道長の意向以外に考えられない。しかも立后の当日には、東三条第に下がっていた妍子の入内も時刻をずらして計画されたのである（②▼C）。実資は、小一条家によって進められる立后に必ずしも快く思っていなかったようで、城子の兄である通任から立后の雑事を尋ねられ、遵子立后の日記記事【事例1】⑭を抄出するよう依頼されたことについて、「事多く、鬱

「有り」と記している(③▼c)。前日の廿六日に、妍子の入内に対しては糸毛車(⑤▼a)、城子の饗宴に対しては唐瓶子や龍鬚筵を(⑤▼c)、それぞれの求めに応じて送っている。また、廿七日には藤原公任が娘と道長の息教通を結婚させる婿取の儀もあり(⑦▲G)、実資は前日に綾の表衣と下襲(⑤▼b)、当日に女装束を送っている(⑥▼c)。前日に妍子の入内(行啓)に供奉すべきという通達があったが(⑤▼a)、実資は返事をしていないので、体調不良もあって、どちらへも行かないつもりであったのかも知れない。当日の『小右記』廿七日条(⑥)は、立後の記事がほとんどで(+4▼bc以外)、しかも読むのが大変なぐらいに長い。当日になって大臣が三人とも来ないから権大納言の実資も参内せよとの命が伝えられ、公卿が道長の思惑を恐れて誰も立後の儀に出ないことを察知し、「天に二日無く、土に二主無し」だから恐れることはない^とと決心して、病をおして行くことにした(▼a)。未一点(午後一時半頃)に参内してその旨を伝え(+1)、初めて正式に内弁を仰せつかったのであるが、その勅命の伝え方についての頭弁藤原朝経との遣り取りにも緊張感が漂う(▼e)。諸司・諸衛を召仰して、立後の宣命を作成することになるが(▼f)、草(下書き)を内覧である左大臣道長に届けても、妨害にあつて使がなかなか戻ってこない(▼g)、例文通りに作ったにもかかわらず、再三にわたり訂正が求められた(▼h)。やっと宣命を清書し(▼i)、宣制の儀へと進むが、他に参内した公卿は藤原隆家・懷平・通任の三人だけで、諸大夫は一人もいなかった(▼j)。後で聞いた話として、公卿たちの集まる東三条第に召使を送り参内を促したが、その召使が嘲笑されたということも記されている(▼r)。その後、気分が悪くなつても、漿水(おみず、おもゆ、または粟米飯を水に漬けて発酵させた飲料)を飲んで回復させ、御前での除目

を終わらせて清書させた(▼k)。次の啓陣の儀では、近衛府の次將と衛門府・兵衛府の佐が一人もおらず、ただ外記に命じることしかできなかった(+2)。本宮(皇后亮藤原為任の堀河第)における拝礼・饗なども寂しいもので(▼m/p)、本来は内裏から届けられるはずの大床子と師子形が道長の妨害で届けられず、本宮(城子)が準備したという(+3)。様々な嫌がらせを受けながらも何とか儀式を終了させたが、朝儀の乱れと皇威の失墜を嘆かないわけにはいかなかった。翌廿八日条(⑨)に、城子から満悦の仰せが伝えられたが(▼a)、参内して中宮妍子のいる飛香舎に行つて道長をはじめとする公卿たちが集まっている光景を目にし、前日の城子立後の儀と比較して、「弥、王道弱く、臣威強きを知る。嗟乎々々」と記している(▼b)。けれども、困難な状況下における急な命令にもかかわらず、儀式を滞りなく執り行なった実資の力量は特筆すべきで、これによって天皇の絶対的な信頼を得たこととはもちろん(⑨▼e・⑩▼b・⑪▼a)、その存在を誇示できたのである。道長一家の全盛期にあつても、自らの活路を見出したと感じたのであろう。除目の最中に出てきた蜈蚣(ムカデ)について陰陽師だけでなく儒者の大江匡衡にも意見を聞き、「天子の慶福」(⑬+1▼a)や「天口」(三公)(⑭+1)と関連させて十二月頃に大臣への出世が期待できるという解釈を書き留めている。

【事例6】は、寛仁二年(一〇一八)十月十六日(⑩⑪⑫⑬)に立后された藤原威成(九九九―一〇三六)の記事である。長和元年(一〇一一)に一四歳で尚侍、寛仁元年に御匣殿別当となり、同二年三月七日に二〇歳で九歳年下の後一条天皇のもとへ入内、同年四月に女御、十月に中宮となった。道長にとっては孫と娘の結婚であり、同母姉の彰子(太皇太后)・妍子(皇太后)と合わせて「一家三后」という未だ曾てない

栄光を手に入れることになった(⑥+1)。威子立後のことは、七月廿八日(①)に道長と彰子と摂政頼通の三者で話し合われ(▲A)、日時まで決められたように(▲C)、まさに一家の中ですべてが進められていたから、前々のような天皇と外戚の間の緊張感はなく、十月五日の立后兼宣旨(②▲B・③・④+2)以降の諸儀式も形式的に遂行されていた。立后当日については、やはり『小右記』(⑩)の記載が優れており、儀式の進行に従ってイレギュラー(変則的)な点を逐一指摘しながら記している。最も注目される点は、内弁であった左大臣顕光について、参内が遅れて混乱があったこと(▼a)、宣命宣制で「トネ召せ」と言うべきところを「マウチキミタチ召せ」と言って道長を驚かせたこと(▼c)、(除目の場で予告なく取り上げた少進の人事が認められず)本宮へ行かないと言っていたのに結局は参入したこと(▼f)、などの失態が挙げられていることである。他にも、宣命宣制では、宣命使藤原実成の父である右大臣公季が拝礼の列から外れたこと(+3)、実資以下の公卿が外弁(承明門外)から入って南庭に列立する際に少納言藤原惟光が一人ひとりに揖したこと(▼b)、宣制後の宣命使の本列への戻り方についての両説と、大臣の退出経路の誤りが指摘されている(▼c)。除目では、時間短縮のために道長の命で摂政の前で清書し(+4)、大夫藤原齊信と権大夫藤原能信が奏慶のために射場へ向かう際に昇殿の人なのに南殿を経由しなかったことも書かれている(▼d)。本宮(土御門第)の儀では、啓陣で内弁が命じる詞と左兵衛佐藤原惟任の剣の違例(▼e)、先に参入していた大夫・権大夫も拝礼で列に加わること(▼g)が述べられている。いずれも単なる記録や知識という域に留まらない、後世にも維持されるべき理想的な儀式を描き出そうという強い意志の表出としてとらえるべきであろう。そして有名な本宮での饗宴の

場面となり、正式の勸盃後に席を改めて酒宴・奏楽・演舞などの興を催す穩座で、道長が戯れて酒杯を子の頼通に勧めて欲しいと実資に言い(▼h)、さらに皇后となった娘の妍子から父親である自分も禄をもらってご満悦になり、実資に返歌を約束させた上で「この世をばわが世とぞ思ふ望月のかけたることもなしと思へば」の歌を詠んだことが記されている(+5)。『左経記』(⑫)は、最初の部分を欠くものの、紫宸殿の設営から始まり(▽a)、本宮の饗(▽g)に至るまで儀式を詳細に記録し、御調度の勅使(※2)・彰子の使(▽h)についても、左少弁という立場で知り得たことを書いているが、公卿たちの遣り取りは描かれていない。『御堂関白記』(⑪)も、道長の日記としては長い方であるが、内裏での儀については全体の三分の一程度で、そのほとんどが内弁顕光の失態についてである(▲BD)。自筆本では妍子立後の記事と同様に裏書に書かれていたと考えられるが、本宮(土御門第)の儀に多くの紙面を費やしており(▲F-K)、道長がどちらに力を入れていたかは明白である。それは立后だけの問題ではなかった。直後の廿二日に、後一条天皇と東宮(敦良親王)を土御門第に行幸・行啓させ、道長の子供と孫が一堂に会する中で競馬をすることが予定されており、その準備が立后と並行して進められていた(⑥+12・⑧▼b・⑨▼a・⑭▼a b・⑰+2・⑳▲C)。そして、その土御門行幸の日の条は、立後の条(⑪)より長く、『御堂関白記』の中で最長の記事となっている(『小右記』も立后より多い)。このような時代変化をも勘案し、立后記事を比較検討することも必要であろう。また、威子は後一条天皇にとって唯一の配偶者であった。天皇制や後宮の歴史にとって、大きな転機となったことも付記しておきたい。

五、立後の儀式と古記録

平安時代中期から後期にかけて、所謂摂関政治を主導した摂政・関白は、令制官職機構を超越する存在で、各天皇一代限りに有効な詔勅によって任命された。その地位を得て権力の頂点に立つためには、同じ藤原北家の中でも、天皇との個人的な結びつき、特に外戚関係を持つことが必須であった。人臣最初の摂政となった藤原良房も、道長の父兼家も、その権力の確定に天皇の外祖父となったことが最も重要な要素としてあった。そして、道長はその関係を二重、三重に張りめぐらしたことで摂関全盛期を築き上げた。その間、皇男子の誕生とその即位という不確定な要素に左右されながら、藤原北家一門の兄弟・従兄弟たちは権力をめぐる攻防を繰り返したのである。その勝敗とは必ずしも一致しないが、天皇の正室である皇后になることがいつの時代にも増して重要であり、その儀式は権力を象徴する意味を持っていた。

立後の儀式は平安前期には確立しており、貞観年間（八五九～八七七）に編纂されたと考えられる『儀式』（巻五・立皇后儀）には、前日に式部省から王卿を参列させる命を通達すること、当日に紫宸殿で天皇が出御し、南庭の参列者に対して宣命を読み聞かせること（宣命宣制）、その詞（宣命の文）、後日に拝舞することなどが規定されている。宣命の文章は「内裏式文」によって作られるとも見えるが（【事例1】⑭▼b）、現存する『内裏式』に立後の項はない。『西宮記』（臨時七・立皇太子任大臣事）では、宣命宣制に続いて、宮司の除目、諸衛の次将による啓陣があり、さらに本宮に移って、王卿らの拝、饗・禄、女官の参仕、神祇官による大殿祭、三日後の啓陣終了の饗・禄、そして奉幣など

が続くことになっている。『北山抄』（巻四・拾遺雑抄下・立后事）は、『内裏儀式』『任官式』『清涼抄』『儀式』『讓国式』や先例などを参照しながらまとめている（「内裏式、不_レ制_二立后等式_一」とある）。『江家次第』（巻一七・立后事）は更に詳しく、本宮の儀についても細かく記しているが、これは摂関家の儀式が充実したことの影響である。

摂関期の実態を知るためには、これらの儀式書を参照しながら、いくつかの場面に分けて古記録の記事を読まなければならない。準備からの主要な儀式の流れと、その関連記事は以下の通りである。

〈準備〉

- ・立後の兼宣旨：天皇と摂関・女院などの間で正式に立后が決定されると、「誰々を以て皇后に立てるので、儀式を行なう準備をし、日時を定めよ」という内容の兼宣旨が発せられる。【事例1】⑧▼c e、【事例2】③+1、【事例3】⑤▲A・⑥△A、【事例4】①▲A・②【事例5】①▲A、【事例6】②▲B・③・④+2。
- ・奏慶：天皇に慶賀を申し上げる。【事例1】⑧▼d f・⑭▼e、【事例3】⑥△C、【事例4】①▲A・②。
- ・日時勘申と奏上：陰陽寮の勘申をもとに日時が決められ、天皇へ伝えられる。【事例1】⑧▼g・⑪▼a・⑫▼a、【事例6】①▲C・②▲B・⑥+4。
- ・雑事定：この前後に準備が進められ、内裏から大床子二脚・師子形などが届けられる。【事例1】⑧▼g・⑨▼a・⑩▼a・⑪▼b・⑫▼a・⑬▼a 【事例2】④、【事例3】⑥△F・⑧△A・⑫△C・⑬△A・⑭▲A・⑮△B E F、【事例4】④▲A・⑥▲A・⑦▲A、【事例5】④▲C・⑤▼c、【事例6】⑥+4・⑨▼b。

・女御退出…皇后となる女御は宣命を受けるために内裏を出て里第に移る。【事例1】^⑬▼b c、【事例3】^⑦▲A・^⑧△F・^⑨・^⑩▲B・^⑪△E、【事例4】^①▲B▲C・^②・^③▲A、【事例5】^⑥+3、【事例6】^②▲A B・^③・^④+34・^⑤▲A・^⑦▲A・^⑪▲H・^⑫※2。

〈当日〉

・御装束…紫宸殿・南庭などの設営を行なう。【事例1】^⑭▼a、【事例2】^⑥、【事例3】^⑮△C、【事例4】^⑧▲A、【事例5】^⑥+1▼q、【事例6】^⑫▼a。

・宣命の草・清書…内弁が内記に宣命の下書きを作成させて天皇に奏上し、許可が出ると清書させて再び奏上する。【事例1】^⑭▼b、【事例2】^⑤▼a、【事例3】^⑮△D、【事例4】^⑧▲B、【事例5】^⑥▼f i q・^⑦▲E、【事例6】^⑩▼a+2・^⑪▲C・^⑫▼b。

・宣命宣制…天皇が紫宸殿に出御し、南庭に列立した王卿に宣命使が宣命を宣制する。【事例1】^⑭▼d・^⑮、【事例2】^⑤+1▼b f・^⑥・^⑦、【事例3】^⑭▲B・^⑮△E△K・^⑯、【事例4】^⑧▲B・^⑨、【事例5】^⑥▼j・^⑦▲E・^⑧、【事例6】^⑩+3▼b c・^⑪▲D・^⑫▼d・^⑬。

・宮司の除目…中宮職の宮司（大夫以下の職員）を定め、奏上する。その後、任命された宮司による奏慶もある。【事例1】^⑭▼c f h・^⑮・^⑯▼a d・^⑰▼a b、【事例2】^⑤▼c・^⑦、【事例3】^⑭▲B・^⑮△F K・^⑯、【事例4】^⑧▲C・^⑨、【事例5】^⑥▼k l o q・^⑧・^⑫▼a・^⑬+1▼a・^⑭+1、【事例6】^⑧▼c・^⑩+4▼d・^⑪▲E・^⑫※1・^⑬。

・啓陣…近衛府の次将と衛門府・兵衛府の佐が皇后を警護するために陣に着く。【事例1】^⑭▼g・^⑮、【事例3】^⑮△G、【事例4】^⑧▲C、【事例5】^⑥+2、【事例6】^⑩+4▼e・^⑫▼e。

・本宮の拝礼…王卿は内裏から皇后のいる里第に移動し、拝礼する。【事例1】^⑭▼i、【事例2】^⑤▼d、【事例3】^⑭▲C・^⑮△H I J、【事例4】^⑧▲D、【事例5】^⑥▼m、【事例6】^⑩▼g・^⑪▲F・^⑫▼f。

・本宮の饗…皇后による饗・禄がある。宴座から場所を移し、穩座もある。【事例1】^⑭▼j、【事例2】^⑤▼e、【事例3】^⑭▲C・^⑮△J、【事例4】^⑧▲E、【事例5】^⑥▼n、【事例6】^⑩▼h+5・^⑪▲G H J・^⑫▼g※2。

・冊命の勅使…天皇から皇后へ冊命を伝える使（勅使・中使）が遣わされる。使は禄を受け取る。【事例1】^⑭▼l、【事例3】^⑮△B、【事例4】^⑧▲F、【事例5】^⑥▼p、【事例6】^⑪▲I。

〈後日〉

・本宮の饗…さらに二日間にわたり饗宴がある。【事例1】^⑮▼a c・^⑰▼c d、【事例3】^⑮▲A、【事例4】^⑩▲A・^⑪▲A、【事例5】^⑨▼f、【事例6】^⑭+1・^⑮▲A・^⑯※1・^⑰※1・^⑱▼a。

・啓陣終了…解陣し、次将・佐らに饗・禄を給う。【事例1】^⑮▼c、【事例3】^⑮△F、【事例4】^⑫▲B、【事例6】^⑲▲A。

・慶賀…勸学院の学生、興福寺・延暦寺・法性寺・仁和寺の僧らが慶を啓しに参入する。【事例1】^⑮▼b・^⑱▼b、【事例3】^⑰▲C・^⑱△B・^⑲▲A、【事例4】^⑬▲A・^⑭▲D・^⑮、【事例5】^⑫+1、【事例6】^⑲+1・^⑲▲B・^⑲・^⑲▼a・^⑲+1。

古記録（日記）は、それぞれの記主の立場により異なる視点から同一の儀礼を記録している。よって、これらを場面ごとに比較しながら読むことで、儀式書だけでは再現できない儀式の詳細が明らかになるだけでなく、各事例の特殊性も浮かび上がってくる。古記録史料の最大の特徴は、単なる儀式の復元に留まらず、その社会的な意味が明確になることである。

そのような観点で以下の史料を通覧すると、摂関期においては『小右記』の記事が圧倒的な存在感を示していることがわかる。天元五年の遵子立后記事（事例1）^⑭などは、古記録として残された最古の立后記事であるだけでなく、定子立后（事例2）^②と城子立后（事例5）^③（▼c）の時、それぞれ中関白家・小一条家の求めに応じて抄出・送付されている。実資は儀式に精通する重鎮として尊敬され、『小右記』の記事も規範として貴族社会全体に活用されていた。その自負が、単に日記を書き続けるだけでなく、より正確でより詳細に記録しようとして長い記事へと発展させていく原動力になっていたことは間違いない。また、正しい儀式をシミュレートしながら日記を付ける習慣を身につけていたからこそ、城子立后（事例5）^⑤において急な指名で、しかも道長による種々の妨害があったにもかかわらず、権大納言の実資が内弁の大役を無事に果たすことができたのである。

『小右記』の記載が時代によって変化していることも勘案して読まなければならない。定子立后記事（事例2）^⑤までは、批判点・疑問点は注記されているものの、必要事項を要領よくまとめる程度の記載であった（第一期）。しかし城子立后記事は、小野宮流の筆頭公卿という立場もあって、道長への批判が多く、鬱憤を書き留めていたことも一日の記載を長くする要因であった（第二期）。そして後一條天皇朝におい

て、威子立后記事（事例6）^⑩のような、儀式の理想の姿を後世に示す緻密な記載となった（第三期）。その後、実資は重要な儀式の内弁・上卿を多く任される朝儀の執行者としての地位を確立し、八〇歳を越えてからは儀式の監督者となって（第四期）、膨大な記録を残すことになった。ここに『小右記』の真の価値があり、その日記のあり方は後世の規範ともなったのである。

『御堂関白記』にも記主道長による記述の差違（発展）があり、『権記』から『左経記』（記主源経頼は『権記』の記主行成の娘婿）へと展開することも考慮しなければならない。これらの立后記事は摂関期の研究や概説に不可欠であり、これまでもよく取り上げられている。しかし、改めて整理し、記主の立場や書振りの違いを意識して読み直すことで、新たな発見が得られると期待される。

おわりに

理想的な古記録データベースを追求していった結果、部類的な読解が必要との認識にいたり、その一例として立后関係記事をまとめてみた。さらに、詳しい註釈や人物・役職（官職・身分）・場所（地図）と関連させた考証を作成しなければならぬし、それをウェブ上で展開させるようにするには、研究面だけでなく、技術面での検証を積み上げなければならない。完成にはこれからも多くの時間を費やさなければならないが、少しずつ成果を公表しながら、前進していきたいと思う。

最後に、書下し文の作成や考証について、東海林亜矢子・八馬朱代・村上史郎・山岸健二の各氏にご協力いただいたこと、また小右記講読会の成果を利用させていただいたことを記し、謝辞に代えさせていただく。

【事例1】 天元五年（九八二）藤原遵子中宮立后

①『小右記』 天元五年二月廿三日条（▼a）

▼a 「女御（＝藤原遵子）の立后の御気色有る事」

▼b 「彈正 忠 近光（＝源カ）、寄物の事に依り、藤宰相（＝佐理）に召候ぜらるる事」

▼c 「内の御物忌に参籠する事」

▼d 「伊予国、賊首能原兼信等の追討の解文を言上する事」

廿三日。丙戌。

▼a

四条殿（＝藤原頼忠）に参る。殿下（々々）（＝頼忠）、式（＝職御曹司）に参らる。即ち御共に候ず。皇后の事、御気色有るの由、密々（×蜜云々）に仰せらるる事有り。是、去る廿日、少将命婦（×婦）（＝良峯美子）告ぐる所なり。仍りて祿を与ふと云々。是、又、慥かな仰に非ざれば、尤も私蔵すべし。

▼b

彈正 忠 近光（＝源カ）、去る十八日より、寄物の事に依り、藤宰相（＝佐理）の御許に召候ぜらる。兩三度、消息を奉ると雖も、已に以て答無し。仍りて此の由を殿下に申す。即ち御消息を遣はさる。彼の宰相、驚き乍ら参入すと云々。即ち之を免ずと云々。人々云はく「尤も奇しむべき事也。法官を召候ぜらるるの事、往古来今、未だ聞かざる事也。」

▼c 「入夜、内の御物忌に参籠す。」

▼d 戌時許、伊予国より、賊首能原兼信及び他の賊等十五の追討の解文を言上す。

②『小右記』 天元五年二月廿五日条（▼g）

▼a 「直物の日時的事」

▼b 「周防守（＝藤原義雅）・筑後守（＝藤原文信）、今年を以て、初任と為す事」

▼c 「受領の任符の請印の事」

▼d 「石清水臨時祭の調衆始」

▼e 「釈奠の酢を献る事」

▼f 「源中納言（＝保光）の外孫（＝藤原行成カ）の元服」

▼g 「少将乳母（＝良峯美子）、御気色有るの由、密々に相談する事」

廿五日。戊子。

▼a

参内す。左大臣（＝源雅信）参入せらる。奏せられて云はく「来たる廿七・八日の兩日の間、直物を行なふは如何。」者り。仰せられて云はく「廿七日は御衰日。八日（＝廿八日）は大原野祭の儀（×穢）、廃務に非ずと雖も、便宜無かるべし。来月三ヶ日を過ごして行なふべし。」者り。

▼b

周防守義雅（＝藤原）申請す。「今年を以て、初任と為さむ。」者り。「去年十二月廿七日任。」「装束の行程、明年に及ぶ。請に依れ。」筑後守文信（＝藤原）申請す。「今年を以て、初任と為さむ。」者り。「去年十月十七日任。」「装束の行程、誠は明年に及ばずと雖も、間裁許の例有り。仍りて殊に免し給へ。」者り。件の申文二通、左大臣に下し給ふ。

▼c

仰せられて云はく「々々」受領の任符（×府）、未だ請印せざれば、今

月の内に請印すべし。」者り。

▼d 今日、石清水臨時祭の調衆始。件の祭、平安に遂げらるべきの由、

彼の宮の別当（＝聖清）の許に仰遣はす。

▼e

大学助有家（＝藤原）、昨日の釈奠の酢を献る。内蔵寮、祿を献ら

ず。仍りて給はず。即ち藏人恒昌（＝平、御前に持参す。先是、孝忠（＝藤原、御前に於いて問ひて云はく「何物。」者り。答へて云はく「大学寮より（×■）、昨を献る。」者り。「須く称唯し、物の名を奏すべし。失也。」

▼f 今日、源中納言（＝保光）の外孫、〔故右近少将義孝（＝藤原）の息（＝藤原行成カ）〕。桃園家に於いて、元服を加ふと云々。消息有りと雖も向かはず。

▼g 候宿す。御事、已（×也）に御気色有るの由、少将乳母（＝良峯美子）、密々に相談す。感悦の賜、一時千廻なり。

③『小右記』天元五年二月廿六日条（▼a）

▼a 「去夜、英俊（＝良峯）の母（＝美子）と相談する事」

▼b 「室町（＝藤原齐敏の女、実資の姉）に詣づる事」

廿六日。己丑。

▼a 早朝、私に退く。去夜、承香殿に於いて、英俊（＝良峯）の母（＝美子）に相逢ふ。聊か相談する事有り。

▼b 室町（＝藤原齐敏の女、実資の姉）に詣づ。

④『小右記』天元五年二月廿九日条（▼a）

▼a 「少将乳母（＝美子）、綸旨を太相府（＝頼忠）に伝ふる事」

▼b 「検非違使の職掌を勤めしむる事」

廿九日。壬辰。

▼a 今明、殿上の物忌なり。仍りて参内せず。太相府（＝頼忠）より召有り。仍りて式（＝職御曹司）に参る。仰せられて云はく「昨夕、少将乳母（＝美子）、綸旨の命を伝へて云はく『皇后の事、暫く秘隠すべし。』

但し、事儲に至りては、用意すべし。』者り。来月五日、雑事を定むべし。』者り。秉燭、罷出づ。

▼b 都督（＝菅原輔正）云はく「彼の事、已に許容（×、容）有り。」者り。（注1）▼bの「彼事」は、廿八日条の検非違使の職掌のことで、立后に関係しない。

⑤『小右記』天元五年三月一日条（参考）

▼a 「日食、曆に叶ふ事」

▼b 「殿下（＝頼忠）の命に依り、女装束一襲を奉仕する事」

▼c 「室町に詣づる事」

一日。癸巳。（日食十五分の七。虧初辰三刻一分、加時已一刻二分、復末已三刻三分。）

▼a 日食、曆に叶ふ。

▼b 女装束一襲、殿下（＝頼忠）の命に依りて奉仕せしむ。彼（×被）の御経営（×堂）の間、然るべきの用に依り、他の人等奉仕す。

▼c 晚景、室町に詣づ。

（注1）本条を大日本史料は「十一日、癸卯、女御従四位上藤原遵子ヲ立テ、皇后ト為シ、中宮ト称ス」という立后関係の記事として引くが、▼bの「女装束」は、翌二日から行なわれる頼忠第の御読経料と考えられ、本条に関係記事はない。

⑥『小右記』天元五年三月二日条（▼b）

▼a 「殿（＝頼忠）の御読経始」

▼b 「立后の用意を致すべきの由を奏聞する事」

二日。甲午。

▼a 早朝、殿（＝頼忠）に参る。御読経始也。新造の寝殿に於いて、之を修せらる。

▼^b 午時許より、雨、太^{はな}だ降る。入夜、参内す。此の間、甚雨暴風。内の候宿。殿下命ぜられて云はく「後の事、大略、少将乳母（＝美子）の告ぐる旨、事疑^{ひね}有るべきに非ず。然而、慥かな仰を承はらむと欲す又、秘すべきの由、仰事有り。若し事儲有らば、必ず諸人の聴に及ぶ歟。一定を承はり、用意を致すべきの由、奏聞すべし。」者^てり。

⑦『小右記』天元五年三月三日条（▼^a）

*1「御燈」

▼^a 「立後の事儲を用意すべきを仰せられる事」

▼^b 「円融寺行幸の日時勘申並びに饗禄を儲けしむる事」

▼^c 「季御読経の日時を勘奏し、仁王会・御祭等を奉仕せしめむとする事」

▼^d 「後院に納むる舞装束を円融寺に施入せしむる事」

*1 三日。乙未。

早朝、御湯殿に供ず。御禊の事有り。御燈を奉られず。其の儀、例の如し。御物忌と雖も、仰に依り、恒の如く、御座を供ず。「御簾の前。」宮主（×）、穢に依り、御物忌に籠候ぜず。（依仰如恒供御座）仍りて占部尹忠を以て、御禊に奉仕せしむ。禊（々）了り、魚物を供ず。

▼^a 後の事、奏聞す。仰せられて云はく「其の期に至り、追ひて以て仰すべし。事の儲に於いては、早く用意すべし。但し、暫く披露すべからず。」者^り。

▼^b 仰せて云はく「円融寺行幸の日時並びに御出の門等、大納言重信（＝源、勘申せしむべき歟。御諷誦の布、及び御寺別当並びに三綱等の祿、儲候ふべし。公卿以下侍従・殿上人・藏人所等の饗、所司に仰せて奉仕せしむべし。諸司・諸衛は、本司・本府奉仕せしむべし。」

者^り。

▼^c 仰せて云はく「季御読経の日時、勘奏せしむべし。又、仁王会、若しくは行なふべき歟。世間静かならず、尤も慎御すべし。又、色々の御祭等、奉仕せしむるは如何。其の由、太相府（＝頼忠）に仰すべし。」者^り。

▼^d 「後院に納むるの舞装束、円融寺に施入せしむるは如何。」者^り。

⑧『小右記』天元五年三月五日条（▼^c、▼^f、▼^g）

▼^a 「仁王経・転読」

▼^b 「太相国（＝頼忠）の御読経結願」

▼^c 「立後の日を奏すべきの仰有る事」

▼^d 「太相府の奏慶」

▼^e 「立後の兼宣旨」

▼^f 「公卿等の慶賀」

*1 「大式、解由を得べき事」

▼^g 「立後の雑事定」

五日。丁酉。

▼^a 今日より三ヶ日を限り、寿慶・慶円（々円）・尊延等を以て、仁王経を転ぜしむ。

▼^b 早朝、太相国（＝頼忠）に参る。今日、御読経結願也。

▼^c 殿下（＝頼忠）命ぜられて云はく「皇后の事、未だ其の日を承はらず。今日は吉日なり。若し然るべくは、慥かな仰を蒙らしめ、皇后を立つべきの日を定申せ。此の如きの事、若し延事（×廻事）に及ばば、定めて成り難き歟。之を以て思を為す。早く参内し、此の旨を以て洩奏すべし。」者^り。参内し、此の趣を奏（奏×）す。仰せられて云はく「事、

既に一定す。早く立后の日を奏すべし。」者り。式（＝職御曹司）に参り、（殿下、式に参らる。」此の由を申す。即ち朝服を着し給ふ。御前に召し、親ら祿を執給ふ。〔女装束一襲。織物の祿を加ふ。〕

奏せられて云はく「年来、頻りに朝恩を蒙り、已に高位に登る。日夕の思、朝恩、報い難し。重ねて今日に及び、更に此の仰を戴く。感悦の深、為す所を知らず。朝恩、身に余り、前後不覚なり。」者り。祿を給はりて纏頭し、庭中に下りて再拜す。（此の間、大相府、射場殿より下りて坐す。）内に帰参し、此の由を奏す。即ち太相府、射場殿に参り、余を以て、慶の由を奏せらる。聞食すの由を仰せらる。剣を着し、綸旨を伝ふ。舞踏し了り、殿上に参上す。仰せらるる趣、前の如し。仰せられて云はく「須く御前に召し、此の由を仰すべし。而るに乱るる間、御前に召すこと能はず。」者り。太相府、退下す。

仰せられて云はく「弘徽殿息所（＝藤原遵子）を以て、皇后に立て給ふべし。供奉の所司に、且は誠仰すべきの由、左大臣（＝雅信）に仰すべし。冊命の日に至りては、追ひて仰すべし。」者り。左大臣、直物の事に依り、左仗に候す。即ち綸旨を以て仰せ了りぬ。

陣に候する公卿等、弘徽殿に参り、皇后の慶を申さる。

*₁ 仰せて云はく「皇太后宮（太々）（＝昌子内親王）より、頻りに奏せられて云はく『前大式藤原朝臣（国章）を以て、権大夫に任ずべきの由を請ふ。』若しくは直物の次に許すべき歟。又、大式輔正朝臣（＝菅原）の申文、（兼式部権大輔・民部権大輔。）修理亮博古（＝藤原）、帯ぶる所の職を以て備中介橘輔政に相替する申文、石清水宮、造作料に伊勢介を申請する奏状、常陸介満仲（＝源）、旧の如く馬権頭を兼任する事、件等の事、太相府定申すべし。」者り。

奏せられて云はく「前大式藤原朝臣、未だ解由を得ず。然而、大式、

未だ解由を得ざる間の給官の例、問、其の例（×、）有り。下勘へられて許さるべき歟。」者り。「輔正朝臣の兼官の事、唯、勅定に在るべし。大式、給官の例無し。陸奥・出羽守の兼官の例を引載す。此の如き事、勅定に在るべき歟。博古の相替（×、）、又、勅定に在るべし。官を以て相替する例、甚だ以て希有なり。又、勅定に在るべし。石清水宮の申請の事、已に宣旨有り。許し給ふべき也。満仲の申請の事、許さるるに、何事か之有らむ也。常陸・陸奥守（×々奥陸等守）の兼官の例多し。就中、満仲、是、本、馬権頭なり。唯、『兼』の字を賜ふべき歟。」者り。前大式藤原朝臣、已に其の例有り。更には下勘ふべきに非ず。之を許すべし。輔正朝臣の申請の事、殊に免し給ふべし。

〔大相府申されて云はく「若し免許すべくば、民部輔を給ふべし。式部輔に至りては、是、献題の職なり。已に遠境に赴くは、其の便無かるべき歟。』猶、式部権大輔を許すべし。」者り。「博古の事、殊に之を許すべし。又、輔政、童井（×々）の時、久しく雲上に候す。殊に之を許すべし。満仲の事、又、之を許し給へ。石清水宮の申す事、請に依れ。」者り。

*₁ 仰せて云はく「臨夜に依り、御前に召さざるの由、左大臣に仰すべし。即ち陣座に於いて、件等の申文を下給へ。又、前大式藤原朝臣・満仲の兼官は、詞を以て、之を仰せ。」左大臣奏せしめて云はく「石清水宮の申請する伊勢介は、其の数二人なり。一人は自給、今一人は高頼（＝藤原）等。高頼の転を以て、他の日に給ふべき歟。」仰せて云はく「請に依れ。」者り。

今夜、式に於いて、立后の雑事を定めらる。又、光栄（×々光栄）朝臣（＝賀茂）を以て、立后の日時を勘申せらる（之）。勘申して云はく「来たる十一日、癸卯。時は酉二点。」

⑨『小右記』天元五年三月六日条(▼a)

▼a「所々の饗禄を定むる事」

六日。戊戌。

▼a式(＝職御曹司)に参る。立后(×皇)の日、並びに三ヶ日(×々一今日)の所々・陣々の饗、並びに禄等の事を定めらる。〔所々の饗饌の定文

は、別(×列)に在り。〕去夕、大略、定始めらる。

⑩『小右記』天元五年三月七日条(▼a)

▼a「四条殿の掃除等の事を行なふ事」

七日。己亥。

▼a式(＝職御曹司)に参る。雑事を定めらる。晚景、承香殿に参らる。

四条殿の掃除等の事、行事人を差別けて行なはる。

⑪『小右記』天元五年三月八日条(▼a b)

▼a「立后の日時勘申」

▼b「中宮の御台盤の事」

八日。庚子。

▼a今日、余を以て、立后の日時勘文を奏せらる。仰せて云はく「左大臣(＝雅信)に仰すべし。彼の日の酉時以前に、公卿・所司等参入し、

酉二点を以て、宣命を讀ましむべし。」者り。候宿す。

▼b作物所に給ひ、修理せしむるの御台盤を以て、中宮の御台盤に用ふべきの由、預千春に召仰せりぬ。

⑫『小右記』天元五年三月九日条(▼a)

▼a「左府(＝雅信)に立后の日時を申す事」

九日。辛丑。

▼a式(＝職御曹司)に於いて、雑事を定めらる。未時許、左府(＝雅信)に参る。立后の日時を申す。即ち諸司を催促すべきの由、同じく綱旨を伝ふ。

⑬『小右記』天元五年三月十日条(▼a c)

▼a「四条殿の御装束の事」

▼b「大床子・師子形等の事」

▼c「女御(＝藤原遵子)退出」

十日。壬寅。

▼a降雨。殿(＝頼忠)に参る。今日、四条殿の御装束の事有り。

▼b参内す。蔵人所の大床子二脚(×三脚・師子形等を以て、小舎人を

差はし、四条殿に奉る。

▼c今夜、女御(＝藤原遵子)御出せらる。〈亥時〉

(注1) ▼bの「三脚」を「二脚」に改めた理由は、【事例3】⑮△E【事例6】⑫▽a ※2による。

⑭『小右記』天元五年三月十一日条(▼a c)

▼a「立后の御装束」

▼b「宣命の草」

▼c「中宮職を書出す事」

▼d「宣命宣制」

▼e「奏慶」

▼f「中宮大夫の事」

▼g 「啓陣」

▼h 「宮司の除目」

▼i 「本宮の拝礼」

▼j 「本宮の饗」

▼k 「女房・侍所別当等を補する事」

▼l 「冊命の勅使」

▼十一日。癸卯。

▼a 殿（＝頼忠）に参る。次いで参内す。今日、女御従四位上（○）藤遵子（○遵子）を以て、皇后に立つ。其の儀、南殿の御装束、略、相撲召合の儀の如し。（御簾を垂らす。）南廂の東第三間に、内弁の兀子を立つ。又、宜陽殿に兀子を立てず。

▼b 左大臣（＝雅信）奏せられて云はく「宣命の草を奏すべし。内裏式文に依りて有るべき歟。将、俛詞（×詒詞）有るべき歟。」者り。仰せられて云はく「前々の例に依り、俛詞（×詒詞）を載すべし。」者り。左大臣、射場殿に参る。余を以て、宣命の草を奏せらる。御覽じりて返給ふ。

▼c 此の間、太相国（＝頼忠）、式（＝職御曹司）に参らる。召に依りて参入す。余を以て、中宮職司等を書出ださる。大進正五位下源輔成・少進正六位上藤原為政・少進正六位上藤原正信・大属正六位上肥田維延。大夫・亮は、其の人を注さず。即ち一紙に書き、封を加ふ。奏せられて云はく「宮の下司は、此の如し。大夫に至りては、勅定に在るべし。」者り。下官（＝藤原実資）を以て、亮と為すべきの由、右中弁（＝藤原懷遠、後の懷平）を以て奏せらるる也。仰せられて云はく「大夫の事、猶、以て定申せ。」者り。

▼d 此の間、天皇（＝円融）、南殿に出御す。（時は酉一点。）内侍、人を

喚ぶ。左大臣、靴を着して参上して着座す。諸衛、開門す。内弁（＝雅信）、舍人を召す。二声。称唯す。少納言師衡（＝藤原カ）代参す。内弁云はく「刀禰召せ。」者り。称唯して退還る。大納言為光（＝藤原）以下諸大夫参入す。内弁、中納言文範（＝藤原）（民部卿）を召す。称唯して参上す。宣命を給ふ。東軒廊に立つ。其の間、内弁の大臣起座し、列に加はる。宣命使、（加列）宣制すること、式の如し。群臣（×部臣）拝すること、式の如し。拝し了り、左大臣以下、承明門より出づ。諸衛（×門、門を閉づ。天皇、還御す。

▼e 太相府参られ、殿上に候ぜらる。奏して云はく「皇后の宣命の慶、前後不覚。頻りに朝恩を戴（×戴）き、為す所を知らず。」者（○）り。仰せられ（○）て云はく「夜、深更に依り、御前に召さず。」者り。唯、聞食す由を仰せらる。

▼f 太相府奏せられて云はく「右大将藤原朝臣（済時）・中納言源朝臣（源×）（保光（×充）、共に是、任（×仕）に堪ふべき者也。済時は、氏の公卿の内為り。又、上臈為り。保光（×充）は、言われ無き□為るの上、亦、傍親為り。此の間、御定に在るべし。」者り。仰せて云はく「猶、定申すべし。」者り。奏せられて云はく。又、初の奏の如し。仰せて云はく「右大将藤原朝臣は上臈為り。彼を以て、大夫と為すべし。」者り。太相府退出せらる（中宮に参らる。）と云々。

▼g 仰せて云はく「例に依り、啓将（○）等、中宮に参らしむべし。」者り。即ち左大臣に仰す。伝聞く。「諸衛の佐を膝突の座に召し、仰せらる（×御。）と云々。（佐無きの府は、外記（×前記）を以て仰せしむと云々。）

▼h 左大臣を御前に召し、中宮職司を定めらる。（大夫は右将済時、兼。亮は下官、兼。大進は散位源輔成。少進は為政・正信。大属は式部大

録肥田維延、兼。」頃之、退下す。其の後、射殿の辺に参り、清書を奏せらる。維延に「兼」の字無し。仍りて「兼」の字を注すを仰せらる。又、重ねて陣に於いて奏せらる。右大将・下官、射殿に於いて、藏人宣孝（＝藤原）を以て、慶の由を奏せしむ。（近衛府無きに依り、藏人を以て奏せしむ。）下官、即ち名所を殿上簡に改注す。

▼大・下官、中宮に参る。（同車す。）右中弁（×左中弁）懷遠を以て、慶の由を啓せしむ。（大進・少進等、之の如し。）中門より入る。西対の異の辺に於いて拝礼す。此の間、左大臣以下参入す。余を以て啓せらる。公卿拝礼の間、皇后（＝遵子）理髮す。白御衣（×）、白簪。白御装束を着し給ひ、倚子に着し給ふと云々。典侍（×子）恭子（＝橘）理髮すと云々。「上達部参入す。」者り。仰せられて云はく「聞食す。」者り。左大臣以下侍従、庭中に進みて拝礼す。

▼了りて西対の座に着す。「先是、寢殿の御簾の外、灯台を以て、灯を炬す。此の間、主殿の女嬬等参入し、灯炬を以て、之を供（×給す。）其の儀、東廂を以て、公卿の座と為す。（東面（×向）の廂の簾懸けず。）高麗端畳を敷き、其の上に、土敷・茵・円座等を敷く。（右大将云はく「皆、円座を用ふる也。」）四位侍従の座は、南廂に在り。（紫端畳を敷く。）五位侍従の座は、南廊に在り。諸大夫の座は、本の藏人所に在り。殿上人の座は、本の藏人所。宮の侍の座は、本の侍所。左右近・左右兵衛は、門内に在り。左右衛門は、門外に在り。皆、平張を用ふ。上卿の座は、机を定立つ。公卿兩三、座席狭きに依り、仮に円座を召し、東の頭に敷く。（対座。）大夫済時勸盃す。一巡の後、太相府出でて着座す。「御座は、公卿の座の上の東の頭なり。菅円座を用ふ。南面。」即ち机を立つ。下官献盃す。「一巡し、太相國に献る。」次いで飯を居る。須く先づ粉熟を居うべし。而るに儲けず

と云々。次いで右中弁、献盃す。亦、通に勸盃す。数巡の後、宮司、侍従の祿を韓櫃に納め、庭前に昇出だす。中務少輔致時朝臣（＝源、見参を唱ふ。此の間、公卿、祿を給はる。（大掛。二位（宰相）は赤絹（絹×）を加ふ。侍従は足絹。四位は白絹。）太相府の御祿は、大夫執りて奉る。鶏鳴、公卿退出す。

▼今夜、令旨を奉はり、藤詮子を以て、宣旨と為す。（是、皇太后大夫（×皇后大夫）（＝源重信）の妻。中宮の姉。）藤原淑子（×■子）を以て、御匣殿別当と為す。（参議佐理（＝藤原）の妻。）藤原近子を以て、内侍と為す。（信濃守陳忠（＝藤原）の妻。）下官及び右中弁懷遠を以て、侍所別当と為す。大進輔成朝臣、令旨を奉はり、男女房の簡、今夜始めて書く。宣旨・内侍の着簡は、先例無きに依りて着せず。御匣殿別当・少将乳母（良峯美子）、同じく着簡す。下官・右中弁・侍所長藤原長忠・同望弘等、同じく着簡す。而るに四人を以て、籍に付するは、頗る詞の忌有り。仍りて阿波守任朝臣（＝源）を加ふ。侍所長は、今夜、令旨を下さる。御髪を理する典侍恭子は、給物有りと云々。慥かには色目を知らず。或説に云はく「絹。」と云々。之を尋問ふべし。

▼今日、午時許、侍従公任朝臣（×公卿任朝臣）を召し、中使と為し、中宮に奉らる。祿を給ふこと有り。女装束。

（注1）▼bの「内裏式文」「儉詞」は未詳。『儀式』（巻五・立皇后儀『新儀式』（巻五・冊命皇后事）に例文がある。「詒詞」ならば「てらう詞」という意味か。

（注2）▼jの「二位（宰相）」は、この時に二位の参議がないので、単なる「二位」とした。

⑮『日本紀略』天元五年三月十一日条

十一日、癸卯。

女御從四位上藤原遵子を以て、立てて皇后と為す。天皇（＝円融）、南殿に出御す。左大臣「雅信」以下参り了りぬ。宣制の後、殿上に於いて、宮司を任ずるの除目有り。次いで諸衛を召し、啓陣を仰す。次いで大臣以下、参賀す。

⑯『小右記』天元五年三月十二日条（▼a～d）

▼a 「殿（＝頼忠）等に慶を申さしむる事」

▼b 「勸学院歩」

▼c 「少将乳母（＝美子）等に禄を給ふ事」

▼d 「大夫殿（＝藤原濟時）に慶を申す事」

十二日。甲辰。

▼a 殿（＝頼忠）に参る。慶を申さしむ。次いで宮（＝遵子）に参る。北御

方（＝頼忠室嚴子女王カ）に申さしむ。

▼b 今日、勸学院の学生等、宮に参入す。先づ令旨を啓陣に下し、学生

を入れる。大進輔成朝臣をして慶の由を啓せしむ。内侍に伝へて啓せし

む。聞食す由を仰す。拝し奉る。了りて、正絹を給ふ。（或時は、饗

禄を給ふ。或時は、事、倉卒に依り、饗を儲けられず。職事は白足絹

（＝自足）、学生は赤絹。□、大。六位、或は禄を取り、之を給ふ。）畢

りて又、拝礼を致すと云々。

▼c 少将乳母（＝美子）、昨日より祇候す。今日、平綾六疋・絹十疋を給

ふ。通宮に納む。陪從の女の中に、絹十疋を給ふ。少式・兵衛命婦等、

之に候す。給物を知らず。尋記すべし。

▼d 入夜、罷出づ。大夫殿（＝藤原濟時）に参る。慶を申さしめむが為な

り。宮に参らるるに依りて罷出づ。

（注1）▼bの「□、大」は未詳。

⑰『小右記』天元五年三月十三日条（▼a～d）

▼a 「左府（＝雅信）に慶の由を申さしむる事」

▼b 「東宮（＝師貞親王）に慶の由を啓せしめ、殿上簡に付す事」

▼c 「啓陣終了の禄」

▼d 「時刻を啓し、名謁有る事」

▼e 「御物忌に籠候する事」

十三日。乙巳。

▼a 左府（＝雅信）に参る。慶の由を申さしむ。御出に依りて空しく以て

罷出づ。

▼b 次いで東宮（＝師貞親王）に参り、慶の由を啓せしむ。拝し了り、殿

上簡に付す。

▼c 頃之、中宮（＝遵子）に参る。今日、諸衛の佐等を侍所に召着す。

禄を給ふ。判官以下は直に給ふ。（但し、例は第四日（×々）の早朝に、

之を給ふ。明日は御衰日に当たるに依り、今日給ふ。今夜祇候し、明

日罷出づべきの由、之を仰せしむ。）女房等に、禄を給ふこと差有り。

▼d 又、宮主、装束の史・官掌・史生等に、同じく給ふ。所々の饗饌

は、昨の如し。給禄の色目・所々の饗等は、別紙に在り。

▼e 今日、初めて時刻を啓す。又、名謁有り。

入夜、参内す。御物忌に籠候す。

⑱『小右記』天元五年三月十五日条（▼a b）

▼a 「所々の別当・預・下部等を定めらるる事」

▼b「興福寺僧の慶賀」

十五日。丁未。

▼a 中宮に参る。大夫（＝済時）、同じく参らる。所々の別当・預・下部等を定めらる。又、女房・〔尿〕遠侍者・大番侍者・藏人等を定む。侍所の名簿等、同じく下給ふ。

▼b 興福寺の僧等参入す。禄を賜ふこと、差有り。

【事例2】正暦元年（九九〇）藤原定子中宮立后

①『小右記』正暦元年九月廿七日条（▼b）

+1「内記（＝藤原惟貞）、位記を持来たり、禄を賜はる事」

▼a「秋季御読経」

▼b「女御（＝藤原定子）、皇后に立ち給ふべき事」

廿七日、己亥。

+1 内記惟貞（＝藤原）、三位の位記（々記）を持来たる。大褂を給ふ。史生は疋絹。

▼a 今日、秋季御読経。物忌に依りて参入せず。

▼b 修理権大夫（＝藤原安親）の消息に云はく「来月五日、内大臣（＝藤原道隆）の女御（＝藤原定子）、皇后に立ち給ふべし。」者り。驚奇すること少なからず。

②『小右記』正暦元年九月卅日条（▼a）

▼a「立后（りつごう）の日記を送る事」

卅日、壬寅。

▼a 右頭中将（＝藤原伊周）、以言（＝弓削）を使はし、立后の時の儀式の日記を借る。即ち書写せしめ、彼に付し、之を送る。来月五日、其の事有るべしと云々。皇后四人（＝太皇太后昌子内親王・皇太后藤原詮子・皇后藤原遵子・中宮藤原定子）の例、往古聞かざる事也。

③『小右記』正暦元年十月三日条（▼a +1）

▼a「摂政（＝藤原道隆）に立后の御慶を申さしむる事」

+1「立后の中使、摂政（＝藤原道隆）第に参る事」

三日、乙巳。

▲^a 摂政（＝藤原道隆）第（×弟）に参る。立后の御慶を申さしめむが為也。所^{しやう}有るに依りて相^{あひあ}遇はざるの由を言^い出ださる。参内す。

▲¹ 左頭中将（＝藤原公任）云はく「昨日、中使と為て摂政殿に参る。是、皇后の仰事と云々。祿有り。」

④『本朝世紀』正暦元年十月三日条

三日、乙巳。天晴。

上卿^{しやうけい}遅参す。仍りて政^{まつりごと}無し。午後、参議藤原安親卿・同懷忠卿・同実資卿、左仗の座に参着す。左大臣（＝源雅信）、里第に、大外記中原朝臣致時を召して仰せて云はく「今日五日を以て、皇后に立て奉るべし。宜しく諸卿に廻申さしむべし。又、供奉の諸司を召仰せ。」者^てり。仰^{おほせ}を承^{うけたま}はり、局（＝外記局）に参りて召仰せ、諸卿に申さしむ。中務・式部・兵部・彈正等の省・台の官人を召仰す。

⑤『小右記』正暦元年十月五日条（+1 ▼ a ~ f）

+1 「立后の事（定子）」

▼ a 「宣命の草・清書」

▼ b 「宣命宣制」

▼ c 「宮司の除目」

▼ d 「本宮の拝礼」

▼ e 「本宮の饗」

▼ f 「内弁の失誤」

五日、丁未。

▲¹ 参内す。今日、立后の事有り。未時、南殿に出御す。

▲^a 左府（＝雅信）、陣に候ず。内記を以て、宣命の草を撰録（＝道隆）に奉らる。即ち摂政（＝道隆）、参内せらる。右大弁惟仲（＝平）を以て、清書を覽ぜらる。

▼^b 公卿、即ち外弁に出づ。（靴を着す。隱文帶を用ふ。）左府、陣に候じ乍ら、内弁を奉仕せず。故障を申さるる歟。大納言朝光（＝藤原、内弁と為る。承明・（旦）建礼等の門を開く。少納言帰出で了りぬ。公卿、承明門より参入す。諸大夫参列すと云々。内弁（＝朝光、中納言右兵衛督伊陟（＝源）を召す。称唯し、列を離れて参上し、内弁の後に進み、宣命を賜はる。了りて暫く軒廊の東第二間に立つ。（立つ所、云々と定まらず。尋見るべし。）内弁退き、庭中の列に下立つ。了りて宣命使、版に就く。宣命を読むこと兩段。群臣兩段再拜。了りて宣命使左廻に、本列に加はる。了りて次第に承明門より退出するこ

と、入る儀の如し。

▼^c 陣座に候ず。大納言重信（＝源）・左大将濟時（＝藤原）・参議佐理

（＝藤原）・時光（＝藤原）等遅参し、直に陣に候ず。左相府（＝雅信）・左大弁（＝藤原懷忠）、摂政の直廬に向かふ。宮司の除目有り。（大夫は中納言道長（＝藤原）。権大夫は道綱（＝藤原）。皆、是、重服。亮は清通（＝大江）・左中弁扶義（＝源）。大進は明順（＝高階）。権大進は道行（＝藤原）。少進は□□。属は□□（□□×）。除目了り、左府以下、敷政門より退出す。除目の下名・諸陣の事等、左府、春宮大夫（＝藤原公季）に委ぬ。

▼^d 申時許、彼の宮（＝藤原定子）に参る。（南院。故入道摂政（＝藤原兼家）薨逝の砌也。已に是、喪家なり。尋ぬべし。）左大臣、先づ隠所に入奉。大納言重信、貫首為り。亮清通を以て、公卿参入の由を啓（×諸）せしむ。返事を奉はり、庭前に列立す。侍従相従ふ。

▼^e 拝礼了りて着座す。次いで左府着座す。(座々)は、西対の母屋に在り。雲上の侍従の座は、南廂に在り。他の侍従の座は、南廊に在り。二三巡は、亮並びに近親の非参議の人々と云々。大夫、重服に依りて見えず。四巡了り、左府退出す。五巡了り、侍従以上の祿と云々。公卿は白褂。侍従は疋絹敷。戌時許、事了りぬ。
▼^f 伝聞く。「内弁の納言、未だ承明を開かざるの間、大舍人を召す。」と云々。失誤甚しき也。

⑥『本朝世紀』正暦元年十月五日条

五日、丁未。天晴。

此の日、女御從四位下藤原朝臣定子を以て、皇后に立て奉る事有り。仍りて尋常の政・結政所の装束、例の如し。辰二刻、装束使左大史大春日朝臣良辰、史生船隆範・官掌佐伯直輔・使部等を率ゐ、紫宸殿の御装束の事を行事す。「掃部寮、御椅子並びに御屏風を立つ。内蔵寮、御簾等を懸くること、常の如し。」内弁の大臣の元子、殿上の南廂の東第三の柱の西側に立つ。「柱を去ること、一許尺。」主殿寮、班幔を軒廊の北の小庭に立つ。又、宜陽殿の西廂に懸く。又、弓場殿の南庭並びに校書殿の砌に立つ。又、春興・安福殿の坤・巽の角並びに月華門の闕の内の南腋に懸く。又、永安門の西の棚の前に懸(懸く)。掃部寮、座を階下に敷く。節会の儀の如し。又、内弁の上卿の元子の座、宜陽殿の西廂の北第二間の砌の内に立つ。

時に、中務省、日華門より入り、宣命の版位を置く。「尋常の版位を去ること、北に一許丈。」次いで式部省、同門より入り、親王以下の位の標を庭中の左右に立つ。

已剋、左大臣(雅信)、大納言藤原朝光卿、中納言同顯光卿・源重

光卿・同保光卿、權中納言藤原公季卿・源伊陟卿、從三位高階成忠卿〔式部大輔〕・源泰清卿〔左京大夫〕・藤原高遠卿、左仗座に参着す。

⑦『日本紀略』正暦元年十月五日条

五日、丁未。

中宮〔遵子〕を改め、皇后と為す。女御從四位下藤原定子を以て、冊て中宮と為す。即ち宮司を任ず。

【事例3】長保二年（一〇〇〇）藤原彰子中宮立后

①『権記』長保元年十二月七日程（△B～C）

△A「位記を成すべきの事」

△B「院（＝藤原詮子）の御書を奏覧する事」

△C「院の御書・勅報を左府（＝藤原道長）に伝ふる事」

七日、丙辰。

△A 左府（＝藤原道長）に詣づ。千枝（＝大中臣）の申す位記、成すべきの由を申す。宣旨已に下り了りぬ。而るに廃朝の間に依り、政始を相待つ。世間不淨。尤も忌避すべし。已に叙位の由を承はる。位袍を着し、慶賀を申す。早く罷下り、造宮（＝内宮）の事を勤むべきの旨なり。命せて云はく「申す所然るべし。宣旨已に下る。位袍を着するに於いては、事妨無かるべし。又、早く罷下り、造宮の事を催行なふは、甚だ吉事也。」者り。亦、道貞朝臣（＝橘）の位記、成すべき事を申す。又、命じて云はく「則孝（＝源）に仰せて作らしめよ。」

△B 亦、示さるるの旨有るに依り、院（＝藤原詮子）に参る。「御書有り。」亦、院の御書を給はり、大内に持参す。昼御座に於いて、之を奏覧す。次いで大臣（＝道長）の申さしむる旨を奏す。仰せて云はく「此の事、如何。」申して云はく「諸司の三分以下、任ぜらるるの時、諸卿僉議（×会議）す。公事は無止し。自から以て此の如し。況や是、大事なり。愚意及び難し。但し、丞相（＝道長）の申す所、懇切にして、其の旨然るべし。加以、先日、仰せらるる所の事有り。然らば則ち、今日、指して其の期を仰せらるること無く、只、廃朝を仰せらるべきの間、事憚無きに非ず。此の事に至りては、然るべきの事也。参入するの日、面して事由（事×）を仰すべき歟。」勅して曰はく「然るべし。」

即ち御返事を賜はり、院に持参す。

△C 又、院の御書を以て、左府に持参す。時に、已に秉燭に及ぶ。権中将（＝源成信）をして、事由を申さしむ。悩に依り、簾外に出でざるを示さる。命に依り、簾中に入り、御返事を伝奉す。又、勅報の旨を伝ふ。丞相命せて云はく「此の事、指期日を承はらずと雖も、一定の由を承はる。汝（＝藤原行成）の恩の至也。大都、顧問に候ずるの後、事に触れ、芳意の深きを見ると雖も、其の悦を示すこと能はず。今、斯の時に在り。弥、厚恩を知る。汝の一身の事に於いては、思ふ所無し。我、数の子の幼稚有り。汝、亦、数の子有り。若し天命有らば、此の如き事有るの時、必ず此の恩に報ゆべし。亦、兄弟の如く相思ふべきの由、仰合むべし。」者り。欣悦し給ふ旨、甚だ多し。権中将に相逢ひ、雑事を示す。深更に及びて退出す。

②『権記』長保元年十二月十四日程（△D）

△A「美濃守為憲（＝源）並びに宗忠（＝藤原）等の罪名を勘ふべき宣旨の事」

△B「官奏無き事」

△C「拾遺抄」を東院（＝藤原義懷）に返し奉る事」

△D「延長元年（＝四月廿六日）の立后（＝藤原穩子）の例文を左府（＝道長）に奉る事」

△E「僧正（＝観修）に護身を受くる事」

十四日、癸亥。

△A 晨、権中将（＝成信）と共に参内す。左大臣（＝道長）の御宿所に参る。雑事を申承はる。辰より午に及ぶ。右中弁（＝源道方）に、美濃守為憲（＝源）並びに宗忠（＝藤原）等の罪名勘ふべき宣旨の事、並びに

美濃国に守為意の釐務を停むべき宣旨を給ふ並びに散位宗忠に禁法を

用ふべき事を仰（仰×）す。

△B 今日、官奏有るべし。然而左大弁（＝藤原忠輔）、所勞有りて参らず。

予、参入すと雖も、脚下恙有り、束帶すること能はず。仍りて官奏無し。

△C 東院（＝藤原義懷）に詣づ。先日借り給ふ所の『拾遺抄』を返奉す。

△D 帰宅す。

此の夕、左府（＝道長）に詣づ。延長元年（＝四月廿六日）の立后（＝藤原穩子）の例文三通を奉る。

△E 僧正（＝親修）に相謁し、護身を受く。示されて云はく「延命の爲に、毎月十五日、尊勝念誦並びに泥塔三百基、及び月三度、印を供すべし。（八日は薬師、十八日は観音、廿三・四日の間は不動尊。）」帰宅す。

△A 「權記」長保元年十二月廿七日条（△E）

△A 「明年正月の節会の列見の白馬の事」

△B 「白馬の事並びに致頼（＝平）・宗忠・維衡（＝平）等の配流の事」

△C 「右大臣（＝藤原顯光）及び右衛門督藤原朝臣（＝公任）、配流・移郷の国を定むる事」

△D 「明年、白馬御覧を行なふ事」

△E 「院（＝詮子）、内裏より出で給ふ事」

廿七日、丙子。

△A 内に候ず。仰に依り、藏人弁（＝源道方）を遣召す。大外記善言朝臣（＝滋野）申して云はく「左馬寮、明年正月の節会の停止を申さしむと云々。若し然らば、白馬の事は如何。今日、白馬列見。寮、大事と申

す也。仰に随ひて進止すべくば、此の由、左大臣に申す。大臣（々々）、早く奏せしむべきの由を仰す。」者れば、之を奏す。仰せて云はく「此等の事を左大臣の許に遣仰せむが爲に、今朝、道方を召さしむる也。貞観十四年の例は、節会、止むと雖も、内殿に於いて、猶、白馬を覽す。是、祖母太后（＝藤原順子）の心喪の内也。今、太皇太后（＝昌子内親王）は、服親に非ずと雖も、崩去の後、冊九日の中也。相定めて申すべきの由、仰遣はさむと欲する也。」と云々。

△B 右中弁（＝道方）参入し、事由を奏す。即ち仰せて云はく「青馬の事、並びに致頼（＝平）・宗忠・維衡（＝平）等、遠所に遣はすべきの事、今日仰すべきの由等、左大臣家に罷向かひて仰すべし。」と云々。帰参して復命す。「節会、止むと雖も、猶、内殿に於いて白馬を覽すべし。遠所に遣はすべき人々の事、只、叡慮に在るの由、先日申さしめりぬ。」者り。此の旨を奏するの間、右大臣（＝藤原顯光）参入す。仰せて云はく「道方をして大臣（＝顯光）に伝へしむべし。宗忠・致頼等、法家、断罪すべき由を勘申す。然而、殊に思食す所有り。只、位階を追ひ、遠流に処し、並びに維衡、五位を帯び乍ら移郷すべきの由なり。」大臣（＝顯光）奏せしめて云はく「遠流の人々の事、仰に随ひて行なふべし。但し、移郷の事、配所を相計るべくば、諸卿相共に定申すべし。而るに今日、不勘定有るべきに依り、諸卿参るべきの由を誠仰せしむと雖も、参入する所は、右衛門督藤原朝臣（＝公任）・忠輔朝臣の只二人也。事、已に無止し。只、両三人定申すの事、憚有り。但し、右衛門督藤原朝臣、已に延尉（＝檢非違使別当）為り。只一人と雖も、彼（△C）と相議して定申すべき歟。」

仰せて云はく「無止きの事に在りと雖も、罪の輕重等を定むべきに非ず。配所の遠近に至りては、已に定例有り。申さしむる如く、藤原

朝臣（＝公任）と相定めて申すべし。」

△D 又、善言朝臣に仰せて云はく「左馬寮、白馬の事を申さしむ。節会、停むと雖も、内殿に於いて覽ずべし。但し、列見の間、例と為て、射の事有り。宴の如しと云々。縦ひ列見を行なふも、他の事を止むべし。」

△E 院（＝詮子）の御方に参る。仰せて云はく「明年の御慎の事等あり。后の事（＝彰子立后）を申すに、許すべきの天氣有り。」院、御出す。御共に候ず。

左府に参る。穢に依り、着座せず退出す。

（注一）△Eは史料纂集本に「明年御慎事等申、后事有可許之天氣」とあるのを「明年御慎事等、申后事有可許之天氣」に改めた。

④『権記』長保元年十二月廿九日条（△B）

△A「滝口を補する事」

△B「立后の事、暫く披露すべからざる事」

△C「節折・追儼の事」

△D「闘乱の事」

廿九日、戊寅。

△A 左府に詣づ。雑事を申承はる。紀宣明の申す滝口の名簿、右中弁（＝道方）に付す。召に依りて参内す。右中弁云はく「宣明の事、宣旨下る。又、左大臣（＝道長）の申さるる菅原輔時、同じく宣旨を下す。」と云々。

△B 御前に候ず。仰せて云はく「后の事、一日、院（＝詮子）に申す。暫く披露すべからず。」

△C 節折の事、兼宣（＝源）、之を行なふ。追儼の事、平中納言（＝惟仲）

申行なふ。奏せしめて云はく「貞元二年以往、大中納言・参議、相共に此の夜の事を行（行×）なふ。而るに年来の間、上卿一人、行なふの時有り。今夜、分配の大納言民部卿藤原朝臣（＝懷忠）・参議俊賢朝臣（＝源）等、障を申して参らず。仰せて云はく「例に依りて行なふべし。」

△D 藏人頼貞（＝源）云はく「御使と為て、此の酉剋許、内府（＝藤原公季）に参るの間、三条堀川の間、虚車相逢ふ。行路を遮りて通さしめず。慮外の闘乱有り。仍りて右衛門志伊遠（＝美努）をして、之を捕へしめて将参る。」者り。早く奏すべきの由を示す。右中弁、勅を奉はり、伊遠に仰せて禁ぜしむ。

子一剋、追儼。行事藏人実房（＝藤原）。

⑤『御堂関白記』長保二年正月廿八日条（▲A）

▲A「立后の兼宣旨」

▲B「院（＝詮子）、内裏より出で給ふ事」

廿八日、丙午。

▲A 已時を以て、大藏卿正光（＝藤原）を勅使と為て、宿所（＝一条院東北

対）に来たる。仰せて云はく「女御（＝藤原彰子）を以て皇后と為すべし。

宜しき日を定申せ。」勅使に、禄物を賜ふ。「女装束。綾の細長を加ふ。」即ち殿上の方（＝一条院北対西廂）に参り、慶賀の由を奏せしむ。又、院（＝詮子）の御方に参りて同じく申す。還出づ。雑事を定む。晴明朝臣（＝安倍）を召して日時勘申す。出で給ふべき日・宣命の日并びに入御の日（日×）、同じく勘ふ。源大納言（＝時中）・民部卿（＝藤原懷忠）・中納言（＝平惟仲カ）・左衛門督（＝藤原誠信）・右衛門督（＝藤原公任）・左大弁（＝藤原忠輔）・宰相中将（＝藤原齊信）来問ふ。土御門（門×）

より立つべきに依り、彼に渡り、雑事等、見仰す。
 ▲^B又、参内す。院の御出に候す。

⑥『権記』長保二年正月廿八日条(△A△C△F)

△A「立後の兼宣旨」

△B「藤氏の後、出家に依り、氏祀を勤め給はざる事」

△C「左大臣(＝道長)の奏慶」

△D「結政」

△E「御祈願の事」

△F「立後の雑事定」

△G「院(＝詮子)、内裏より出で給ふ事」

△H「成房少将の還昇の事」

廿八日、丙午。

△^A早旦、参内す。此の日、藏人頭正光朝臣(＝藤原)、勅を奉はり、女

御(＝彰子)の御曹司(々曹司)に詣で、之を伝ふ。左大臣(＝道長)、立
 後の宣命の日、拭申さしむべきの由なり。先日、内々に此の気色を以
 て、大臣に告ぐべきの由、勅命を蒙る。然而、院(＝詮子)より伝仰せ
 らるるは便宜有るべきの由を申す。上(＝一条天皇)、之を諾す。(☆)

△^B此の事、「大臣、予め内に、院の仰に依り、承はらるる所也。」「今日、
 吉日に依り、仰せらるる所を露す也。」去る冬の末、太后(＝昌子
 内親王)崩じ給ふ(＝長保元年十二月一日)以来、度々、其の旨を催奏す。

当時、坐す所の藤氏の皇后は、東三条院(＝詮子)・皇后宮(＝藤原遵
 子)・中宮(＝藤原定子)なり。皆、出家に依り、氏祀を勤むること無し。
 職、納むるの物、神事に充つべし。已に其の数有り。然而、入道の後、
 其の事を勤めず。后位を帯ぶと雖も、納物有りと雖も、尸禄素飡の臣

の如し。徒らに私用に資(×費)し、空しく公物を費す。(☆)之を朝
 政に論ずるに、未だ何の益も有らず。度々、怪に依り、所司、神事違
 例の由をト申す。疑慮至る所にして、此の如きの漸在るを恐るる歟。

永祚中(＝九八九～九九〇)、四后(＝太皇太后昌子内親王・皇太后藤原詮子・皇后
 藤原遵子・中宮藤原定子)有り。是、漢の哀(＝哀帝)の乱代の例也。(☆)

初めて立つるの儀(×議)、謗毀の例有りと雖も、爰に准拠を出だすに
 致りては、難無き歟。況や当時(＝一条天皇)、二后(＝皇后遵子・中宮定子)
 在る所也。今、其の一を加へ、神事を勤めしむるに、何事や有らむ哉。

我が朝は神国也。神事を以て、先と為すべし。中宮、正妃為りと雖も、
 已に出家入道せらる。随ひて神事を勤めず。殊私の恩有るに依り、職
 号を止むること無く、全ら封戸を納むる也。重ねて妃を立て、后と為
 し、氏祭を掌らしむるが宜しかるべき歟(☆)。又、大原野祭、其の

濫觴を尋ぬるに、后宮の祈る所に在り。而るに当時の二后共に勤むる
 所無し。左大臣、氏長者に依り、独り其の祭を勤む。闕怠を致さずと
 雖も、神明の本意に非ざるを恐るる歟。是亦、神事の違例と謂ふべし。

小臣(＝藤原行成、藤氏の末葉を以て、(☆)氏祭を思はむが為に申す所
 也。其の可否に於いては、只、聖沢に在り。此の間、奏する所、多し
 と雖も、悉く之を詳かにすること能はず。主上(＝一条天皇)・大臣(＝
 道長)、具(□)に察する所也。

△^C大臣、勅命を奉はるの後、女装束一襲を以て、勅使に被く。(☆)大
 臣、御所に参進み、慶の由を奏せしめ、拝舞す。(大藏卿正光朝臣、
 之を伝ふ。)亦、院の上御廬に参り、慶を啓し、再拜す。(予、之を伝

啓す。)(☆)予、立後の旧記を以て、之を奉る。先日、命に依る也。

△^D次いで結政に参る。平中納言(＝惟仲)、加階の後、今日、始めて庁
 の事を行なふ。

△E 召使、戸を牽くの後、官掌、内裏の召の由を告ぐ。上卿の着座を

待つに、時刻〔 〕多く移る。仍りて座を立ちて参内す。勅に依り、御祈願の事等を仰遣はす。御誦経料の布、支配す。〔八幡は甘端、石

山は甘端、山〔比叡山延暦寺〕は十端。〕又、軍茶利法、今日より始む。十ヶ日を限りて修すべきの由、法務僧都〔雅慶〕の房に遣仰す。〔真言院に於いて也。〕行事は実房〔藤原〕。

△F 東宮〔居貞親王〕に参る。左府〔道長〕に詣づ。〔二条〔源奉職宅〕。〕立后の日の雑事を定めらる。

△G 次いで土御門殿より、内に参り給ふ。御車に候ず。院〔詮子〕出御す。御共に候ず。

△H 成房少将の還昇の事、大藏卿に付して奏せしむ。藤中将と同車して帰宅す。

〔注〕△ABCの〔☆〕の部分には、『冊命皇后式』や『柳原家記録』一一所収『立后雑事抄』に引載されている記事と異同がある。

⑦『御堂関白記』長保二年二月十日条（▲A）

▲A 「女御〔彰子〕退出」

十日、戊午。

女御〔彰子〕出で給ふ〔源奉職の二条宅〕。源大納言〔時中〕・右大將〔藤原道綱〕・平納言〔惟仲〕・左衛門督〔誠信〕・左大弁〔忠輔〕・宰相中将〔齊信〕・源宰相〔俊賢〕等来問ふ。昨日の夜より、小雨、時々下る。殿上人の四位・五位廿四人、六位二人、勅に依りて供奉す。殿上人、禄有ること、常の如し。内の女方、典侍・命婦〔姫〕等七人來たる。各、禄有り。

⑧『権記』長保二年二月十日条（△A F）

△A 「北陣〔朝平門〕の外並びに堀河の西を掃治せしむる事」

△B 「宣旨」

△C 「結政」

△D 「大威徳法の事」

△E 「右中弁〔道方〕等、慶を院〔詮子〕に啓する事」

△F 「女御〔彰子〕退出」

十日、戊午。

△A 国平朝臣〔多米〕を召し、北陣〔朝平門〕の外並びに堀河の西の掃治の事を仰す。〔左右衛門府・京職に仰すべし。〕

△B 宣旨十三枚を下す。〔左大臣。〕子細は、目録に在り。

△C 結政に参る。中・少弁参らず。了りて参内し、事由を奏せしむ。

△D 尊叔律師の許に十箇日の大威徳法の事を遣仰す。料物は、穀倉院の納むる播磨国の米廿九石を充つる下文、行事すべき藏人実房に付す。

左府〔道長〕に参る。帰宅す。少将来たる。左府に詣づ。彈正宮

〔為尊親王〕に参る。宮〔御坐さず〕。

△E 院〔詮子〕に参る。右中弁〔道方〕・後少将〔成房〕等、殿上の悦

を啓せしむ。藏人等の装束に依り、余、院司〔東三条院別当〕を以て、

之を啓す。次いで参内す。左府参らる。

△F 女御〔彰子〕、此の夜、戊戌に出で給ふ。〔二条。〕奉職朝臣〔源〕の宅。大臣〔道長〕、月来、此に住み給ふ也。大藏卿〔正光〕、勅命を奉はり、殿上の十人を催し、前を行かしむ。此の外、卿相以下、其の数有り。藏人、輦車宣旨を仰す。東対の南廂に、上達部・殿上人の座を儲く。一兩巡の後、纏頭有り。〔殿上人。〕

⑨『日本紀略』長保二年二月十日条
十日、戊午。

女御彰子、立后すべきの宣旨を蒙る。仍りて内裏より出御す。

⑩『御堂関白記』長保二年二月十一日条（▲B）

▲A「春日祭神馬使」

▲B「御使（＝藤原成房）有る事」

▲C「院（＝詮子）、法興院に渡り給ふ事」

▲D「中宮（＝定子）参内し給ふ事」

▲E「祭使（＝春日祭使（＝源頼定）のに袴を送る事」

十一日、己未。小雨、昨日の如し。

▲A「ひがしのかわ」東河（＝鴨川）に出で、神馬を出立つ。伊祐朝臣（＝藤原）を以て、

使（＝春日祭神馬使）と為す。

▲B「内（＝一条天皇）より、御使有り。成房朝臣。酒肴有り。女装束を給

ふ。褂を加ふ。

▲C「院（＝詮子）、法興院に渡り給ふ。

▲D「又、中宮（＝定子）参内し給ふ。神事の日は如何。事、毎と相違す。

彼の宮進藤原惟通・右近将監藤原永家、爵給はると云々。惟通は彼

の臨時給（時×）、永家は祭使の功と云々。

▲E「祭使（＝春日祭使）（＝源頼定）の許に、袴を送る。

⑪『権記』長保二年二月十一日条（△E）

△A「春日祭使（＝源頼定）に摺袴を送る事」

△B「列見」

△C「明日の奉幣に依り、維弘（＝橘）の宅に向かふ事」

△D「検非違使別当（＝藤原公任）、辞退の状を送る事」

△E「御使（＝藤原成房）有る事」

△F「院（＝詮子）、法興院に移り給ふ事」

△G「中宮、内裏に入り給ふ事」

十一日、己未。

▲A「春日祭使立つ。仍りて摺袴一腰を使の中将「頼定（＝源）」の許に送

る。

▲B「此の日、列見。官（＝太政官）に参る。結政に就くの間、晴儀を用ふ。

上卿、庁（＝外記庁）に就くの後、更に雨儀に改む。史等、申文を結ぬ

ること、常の如し。訖りて左大弁、起座し、庁に就く。予、又、起座

し、暫く造曹司所に就く。例也。尋常の政、常の如し。式部具せず。

仍りて兵部を召す。事了りて卿相、朝所に就く。予、壁の外に暫く

佇立す。中弁以下、座に就かず。史生大鳥為範を差はし、早く座に就

くべきの由を示送る。仍りて予、先づ座に就く。次いで中弁以下着し

訖りぬ。一献の間、盃、予の手に在り。史生、酌せむと欲するに、左

中弁（信順（＝高階））、史に目して酌せしむ。觴行数巡の後、官掌、装

束（＝宴座の装束）了るの由を申す。上卿、箸を置く。以下、之に従ふ。

弁・少納言等、南廂に下立つ。上卿以下（下×）、一々揖して退出する

こと、例の如し。

▲C「余、帰宅す。小児等を將て、維弘（＝橘）の宅に向かふ。明日、奉

幣せむが為也。

▲D「検非違使別当（使×）（＝公任）、右衛門志果犬養為政を使と為し、辞

退の状を送る。即ち左府に詣づ。坐さず。相尋ねて東宮に参り、案内

を申す。

▲E「権中将（＝源成信）示す。「今朝、成房少将、御使と為て、女御殿（＝

彰子^{△F}）に参り、泥酔^{でいすい}す。」と云々。参内す。

此^{△G}の夜、院（＝詮子）、法興院に御す。

中宮（＝定子）、内裏に入御す。

大藏卿（＝正光）、宿所に過ぎらる。示して曰はく「中宮少進藤原惟通、宮（＝定子）の臨時御給を給はる。右近将監永家（＝藤原）、去年の巡に非ざる祭使の功に依り、不次に爵を給はる。」と云々。

⑫『権記』長保二年二月廿二日条（△C）

△A「臨時仁王会定」

△B「内堅所を以て、停止する太皇太后宮職に改入るる事」

△C「立後の行事藏人を定むる事」

△D「美濃国司為憲（＝源）の事を定申す事」

廿二日、庚午。

△A^B左大臣、臨時仁王会の事を定申さる。

奏せられて云はく「太皇太后宮職、已に以て停止す（＝長保元年十二月七日）。其の替、内堅所を以て改入る。」「請に依れ。」

頃之^{△B}、大臣、左少弁（＝藤原朝経）をして仁王会の僧名・日時勘

文并びに檢校・行事等の定文を奏せしむ。（来月五日。）

△C^C来たる廿五日の立後の事、行事、定むべき由、式部丞源藏人（＝忠

隆）に示す。奉仕すべしと云々。

△D^D大臣奏せられて云はく「美濃国司為憲（＝源）の事、前日の仰に依

り、定申さむと欲するに、参入の諸卿幾ならず。後日、定申さむと欲す。若しくは延引する歟。」仰せて云はく「参入（×泰入）の諸卿をして定申さしむべし。」頃之、奏せられて云はく「民部卿藤原朝臣（＝懷忠・中納言平朝臣（＝惟仲）・忠輔朝臣等定申して云はく『美濃守

為憲、藤原宗忠殺害の事の日記を与判するに依り、勘問せらる。避申す所無し。法家の勘申に依り、宗忠は流罪に処し了りぬ。為憲は、同じく彼の勘状に任せ、解官せらるべし。然而、宗忠は、斬を減じ、流に処す。解官に至りては、亦、之を減じて行なはるべき歟。加之、彼の国の百姓等、国内興復し、解任すべからざるの由を申す。又、造作（＝内裏）の事、任限有るに依り、国を遷替すべきは、或は懈怠を致すべきの聞有り。此の如きの事を付し、殊に優免せられ、将来に励さしむべき歟。』仰せて云はく「定申すに依れ。」国平朝臣に仰す。

大臣、亦、申されて云はく「此の夜、候宿すべしと雖も、経営期迫る。具せざる事多し。仍りて候すること能はず。但し、宣命の日の剋限等、民部卿藤原朝臣に仰せらるべき歟。」仰に依り、之を仰（々）す。戸部（＝懷忠、余亦大外記善言朝臣に仰せらる。余、亦、左大史国平朝臣に仰す。

（注1）△Cを史料纂集本は「来廿五日立后事、行事可定由式部丞、源藏人可奉仕云々」とするが、改めた。

⑬『権記』長保二年二月廿三日条（△A）

△A「障子の色紙形の本文を書く事」

△B「左源中将（＝経房）・後少将（＝成房）の勘事」

△C「天文密奏を上る事」

廿三日、辛未。

△A^A早朝、衙に参る。召に依り、左府（＝道長）に詣づ。寝殿の障子の色紙形の本文を書く。

△B^B左源中将（経房）・後少将（成房）、勘事。

△C^C此の夕、日薄く食す。吉昌朝臣（＝安倍）、変異の奏を上る。

⑭『御堂関白記』長保二年二月廿五日条（▲A）（C）

▲A「立後の事」（上欄付箋）

▲B「宣命宣制・宮司除目」

▲C「本宮の拝礼・饗」

廿五日、癸酉。

▲A

寅時を以て、女御（＝彰子）、土御門（×土門）に渡り給ふ。糸毛を用ふ。金作の車等は人給。西門より御入す。南門より人給の車入る。殿

（＝土御門殿）の御装束等、昨了りぬ。源大納言（＝時中）・平中納言（＝惟

仲）・宰相中将（＝藤原齊信）・源宰相（＝俊賢）等候す。

▲B

午時を以て、内に参入す。西時、宣命。右府（＝顕光、之を行なふ。南殿に御す。本殿に御す後、宮司、除書（×余書）有り。御前に於いて、

右大将（＝道綱）奉仕す。自余の雑事（事×）、右大臣（＝顕光、之を行

なふ。

▲C

事了り、宮（＝彰子）に参る。前例に依り、列（×例）に立たず。則忠

朝臣（臣×）（＝源、上卿参る由、申す。後に列立（×例立）し、東対に

着す。西より列（×例）有り。自余、常の如し。御前に於いて遊有り。

⑮『権記』長保二年二月廿五日条（△B）（K）

△A「小兒喰始」

△B「冊命の勅使」

△C「立後の御装束」

△D「宣命の草・清書」

△E「宣命宣制」

△F「宮司の除目」

△G「啓陣」

△H「理髪」

△I「本宮の御装束」

△J「本宮の拝礼・饗」

△K「中宮職の事」

廿五日、癸酉。

▲A

巳刻、小兒始め喰ふ。前物、文佐朝臣（＝平、之を調ふ。小台六本。左相府（＝道長）の上東門第に詣づ。此の日、立后。丞相（＝道長、命

せて云はく「今日の御使、前々、親昵の人を給はる。」と云々。「天徳

二年は謙徳公（＝藤原伊尹）、天祿四年（＝天延元年）は閑院大納言（＝藤原

朝光）、天元五年（五×）は右衛門督（門×）（＝藤原公任、皆、後の兄弟な

り。「亦、大床子・師子形等、宣命了りて即ち給はるべし。」者り。

▲C 参内す。「二条院。」南殿（殿×）の装束、紫宸殿に准じて供奉す。

但し、間敷は、二間を減ず。然而、御簾の西間に、内弁の元子を立つ

ること、例の如し。

▲D

宣命の事を仰せらる。奏して云はく「四条后（＝遵子）を以て、皇太

后と為すが宜しき歟。」（亦、先々の行事を仰せらる。亦、御使遣

はすべきの事を申す。仰に依り、権中将（成信）を遣召す。頃之、

参入す。又暫之、左大臣（＝道長）参らる。宣命の刻限は西二刻也。

先之、右大臣（＝顕光）参らる。召有りて、屋御座に参る。仰せて云

はく「皇后（＝遵子）を以て、皇太后と為し、女御従三位藤原朝臣彰子

を以て、皇后と為すの由、仰すべし。」即ち右仗に到り、右大臣に仰

す。大臣（々々）、南座に移る。官人を召し、膝突を置かしむ。内記を

召さしむ。即ち大内記宣義朝臣（＝菅原）参る。仰を奉はり、草を以て、

大臣に覽ず。御所に参る。「殿上の小板敷の戸の外。」余をして之を奏

せしむ。仰せて云はく「草に依れ。」〔件くだんの草、左府（＝道長）の命に依り、予め宣義朝臣に仰せ、之を書儲けしむ。〕次いで出御す。

次いで右大臣、便所に於いて、亦、清書を奏せらる。〔此の度、若しくは母屋の御簾の下に参り、内侍に付せらるべき歟。〕

△E 返給はるの後、近仗、階下に陣す。内侍、檻に臨む。大臣参上す。闌みかど司出づ。〔門を開かず。西中門、本自開く也。〕大臣、舍人を召す。〔二音。〕大舍人、中門の外に於いて称唯す。少納言藤原朝臣朝典、代わりに版に就く。大臣宣る。〔刀禰召せ。〕朝典称唯す。中門の外に出でて召す。大納言源時中卿・藤原道綱卿、権大納言同懷忠卿（□）、

中納言平惟仲卿・藤原時光卿、参議藤原誠信卿・同公任朝臣・同忠輔朝臣・齐信朝臣・源俊賢朝臣等参入し、標の下に就く。〔四位以下は列入せず。〕大臣、中納言平朝臣（＝惟仲）を召す。〔詞に云はく「中の物申す司（＝中納言）の平朝臣。」其、長官（＝前中宮大夫）為れば上の字を召さず。仍りて只、「ム宮（×宣）の」と召す。而るに今、「司の」と称するは、繆案也。〕平朝臣称唯す。揖して列を離れて斜行し、南殿の西南の渡殿を経て昇殿す。大臣（＝顯光）の左方の長押の下に立つ。大臣、宣命を給ふ。〔左手に、之を給ふ。〕納言（＝惟仲、笏を握みて進寄り、之を給はる。右廻に下殿す。大臣の列に就くを待ち、然る後に宣命の版に就く。宣制一段。群卿再拜す。又、宣制一段。群卿、又、再拜す。納言、右廻に本位に就く。大臣以下退出す。此の間、藏人則隆に仰せ、出納を差はし、中宮（＝彰子）に大床子二脚・師子形二頭・挿鞋一足を奉らしむ。

△F 天皇（＝一条）、本殿に還御す。先是、右大臣命じて云はく「今日、衰日に当たるに依り、除目に候ずべからざるの由、左大臣（＝道長）に申すべし。」者り。即ち案内

を申し了りぬ。時に、左大臣、権中將（成信）をして、源大納言（＝時忠）に密（密）かに告げしむるも、中宮に参る。若しくは除目に堪ふべからざるに依る歟。召有り、御前に参る。仰せて云はく「除目有るべし。右大将藤原朝臣（＝道綱）を召せ。」予、勅を奉はり、藏人所の菅田座一枚を召し、南又廂に鋪く。〔但し、御簾を垂らさず。〕時に、殿司、灯を供す。

主上（＝一条天皇）出御す。人を召す。大藏卿（正光）参入す。仰に依り、大将を召す。〔此の間、大臣、経房中將を中宮に遣はし奉り、大床子を立つべき、師子形を置き、並びに椅子を立つべき事を申さる。【拜礼の為也。】次いで紙・筆を召す。〔左大臣、予め土代を書き、之を献上する也。〕除目。訖りて大将退下す。〔大夫源時中（兼）、権大藤原齊信（兼）、亮藤原正光（兼）、権亮源則忠（兼）、大進大江清通（兼）、権大進源高雅（兼）、少進橘忠範（兼）、藤原陳泰（兼）、大属丸部兼善（兼）、少属飛鳥戸光正（兼）、権少属（□□□□）。〕左大臣奏せられて云はく「橘朝臣良藝子〔院の弁命婦〕を以て、宮の内侍と為さむ。』奏聞し了りぬ。

△G 亦、六衛の啓陣、例に依りて遣はさしむべきの由を仰せらる。右大臣に仰す。大将（＝道綱）、暫く壁後に立つ。大臣（＝顯光）、諸衛に召仰す。退出の後、陣に着すべし。清書せしむる也。

△H 此の間、左大臣に申し、中宮に参る。〔大臣以下、清書の後、中宮に参らるべき也。〕御消息〔丞相の旨〕に因り、藤三位（＝繁子）に相遇ひ、理髪の事を問ふ。〔奉仕せらるるが宜しかるべきの由、内々に相示す也。〕

△I 中宮、寢殿に御す。東対の南は、放出四間。母屋は、南北行に東西対座。高麗端・土敷を鋪く。上に、円座を鋪き、参議以上の座と為す。

〔並びに北上。親王、東座に着す。錦端畳を鋪く。大臣、西座に着す。納言以下参議以上の座に及びては、例の高麗端。〕南廂は、両面端畳を鋪き、四位侍従の座と為す。南廊は、紫端畳を鋪き、五位侍従の座と為す。皆、予め俎上の饌を備ふ。東孫廂は、殿上人の座を儲く。〔予、春宮属錦信理に仰せて奉仕せしむ。〕

△頃之、諸卿、西中門に参らる。亮正光朝臣をして事由を啓せしむ。〔拝賀。侍従相従ふ。〕訖りて次第に着座す。次いで彈正尹・大宰帥兩親王（＝為尊・敦道）着座す。

事了りて、御前に召す。又、砌の下に管絃の者を召す。時に鸚鵡頻りに飛び、鳳管數鳴る。万春の樂は未だ央ならず、一夜の漏は將に曙けむとす。事了りて、祿を賜ふこと、差有り。藤中将（＝実成）と同車して帰宅す。

△皇后宮職（職×）、皇太后宮職と為す。中宮職、皇后宮職（一）と為す。新後の宮、中宮職（中□□）と為す。

宰相中将（＝藤原齊信）云はく「宣命使、殿上にて右廻するは、疑有り。」「下殿すべきに依り、右廻は疑無き也。」「亦、西渡殿を出で、宣命の版に就くの間の斜行は、非也。」「又、宣命了りて還るの時、南向して揖するは失也。」「還りて揖するは非也。西に折れむと欲して揖するは、失に非ざる耳。』

（注一）△Dの（△）の部分には、『冊命皇后式』や『柳原家記録』一一所収『立后雜事抄』に引載されている記事と異同がある。

①⑥『日本紀略』長保二年二月廿五日条

廿五日、癸酉。

女御従三位藤原朝臣彰子を以て、皇后と為す。〔之を中宮と号す。〕

即ち宮司を任じ、元の中宮職を以て、皇后宮職と為す。

①⑦『御堂関白記』長保二年二月廿七日条（▲A C）

▲A 「女官等に被物を給ふ事」

▲B 「祈年穀奉幣」

▲C 「勸学院歩」

廿七日、乙亥。

▲A 女官等に、被物給ふ。

▲B 今日（日×）、奉幣（＝祈年穀奉幣）の事有りと云々。

▲C 勸学院歩（×歛院歩）。拝礼。着座。祿を給ふ。

①⑧『権記』長保二年二月廿七日条（△B）

△A 「祈年穀奉幣」

△B 「勸学院歩」

廿七日、乙亥。

△A 参内す。〔未廻。〕祈年穀奉幣使発遣すべし。行事の権左中弁（＝藤原説孝）、幣料の未進の国々を書出だす。奏覧す。余を召して仰せられて云はく「廻限過ぎむと欲す。幣物具せず。祈る所無止し。黙爾すべからず。」と云々。仍りて忽ち練用の絹十四疋を求め、行事所に付せしむ（×付令）。件の代、召納め、早く返補なふべきの由、行事弁に示す。南殿に出御すべし。仍りて殿の南廂の東第一間の格子を上げ、母屋に御障子を立つ。掃部寮、御屏風一帖を立て、神事の御座を鋪く。右大臣（＝顕光）、宣命の草并びに清書を奏せらると云々。

△B 中宮（＝彰子）に参る。勸学院司・学生等参入す。〔内に候ずるの間、院事正秀（□）来たり、参るべきの由を告ぐ。〕東対の南廊に、坐を儲

く。学生等、馬場殿の辺を徘徊（徘徊）す。権亮則忠朝臣相迎ふ。別当勘解由判官行忠（＝藤原、之に見参を付し、事由を啓す。報令を承はるの後、庭中に列立す。再拜し、座に就く。有司・学生、鳴高を称す。行事の間、還りて誼譚を成す。例也。一巡。（大夫（＝時中）・権大夫（＝齊信）。）二巡。（亮（＝正光・権亮）。）三巡。（右源中将頼定・権中将成信。）次いで汁物。觴巡数行の後、朗詠発音す。次いで復飯を召す。饌を撤するの後、禄を給はりて退出す。右大将（＝道綱）・余、参ると雖も、勸盃せず。別当（＝勸学院别当）為るに依る也。事訖りて退出す。

①9『権記』長保二年二月廿八日条（△F）

△A「結政」

△B「藤相公（＝藤原懷平）の中娘の夭亡を弔ふ事」

△C「院（＝詮子）の御読経の結願」

△D「六条（＝具平親王）、悩み給ふ事」

△E「三条殿（＝藤原頼忠）の北方（＝蔵子女王）に謁する事」

△F「啓陣終了」

廿八日、丙子。

△A結政に参る。

左府（＝道長）に詣づ。僧正（＝親修）に謁す。

△B藤相公（＝藤原懷平）の御許に赴き、中娘の夭亡（＝二月七日）を弔ふ。

△C院（＝詮子）に参る。御読経の結願也。

△D六条（＝具平親王）に詣づ。悩み給ふ由を問ひ奉る。

△E皇太后（＝遵子）に参る。三条殿（＝藤原頼忠）の北方（＝蔵子女王）に謁す。

△F中宮の啓陣、今日、返さる。饗禄を給ふと云々。

②0『御堂関白記』長保二年三月廿七日条（▲A）

▲A「法性寺・仁和寺僧等の慶賀」

▲B「臨時祭（＝石清水臨時祭）試楽」

廿七日、甲辰。

▲A法性寺（＝法住寺）僧、宮（＝彰子）に参る。三綱・阿闍梨等也。又、

仁和寺僧等参る。僧綱四人。是、禄を賜ふ。

▲B臨時祭（＝石清水臨時祭）試楽。

【事例4】長和元年（一〇二二）藤原妍子中宮立后

①『御堂関白記』長和元年正月三日条（▲A～C）

▲A「立后の兼宣旨」

▲B「尚侍（＝藤原妍子）退出」

▲C「饗禄の事」（裏書）

三日、辛未。

▲A（裏書）

大内に参る。戌時、右大弁道方（＝源、宿所に來たる。仰せて云はく「尚侍（＝藤原妍子）を以て、皇后に立つべし。宜しき日定申せ。」者り。道方に、女装束を授く。即ち弓場殿に着し、賀の由を奏す。「拝無し。」即ち御前に参る。宿所より参る間、前松平の人々、左右宰相中将（＝源経房・藤原兼隆・左右三位中将（＝藤原教通・藤原頼宗）・公信朝臣（＝藤原・濟政朝臣（々々）（＝源・忠経（＝藤原）・朝任（＝源）等なり。

▲B（裏書）

▲C「御齋会結願」

三日。上達部・殿上人着座す。巡献の後、宣旨に依り、供奉する殿上人卅余人に、禄を賜ふ。各、差有り。上達部には為さず。來らるる上達部は、藤大納言（＝道綱・春宮大夫（＝藤原齊信・皇太后宮大夫（＝藤原公任）・中宮大夫（＝源俊賢）・左衛門督（＝藤原頼通）・藤中納言（＝隆家）・侍從中納言（＝藤原行成・右衛門督（＝藤原懷平・右宰相中将・大藏卿（＝藤原正光）・左宰相中将・左兵衛督（＝藤原実成）・左右三位中将・源宰相（＝頼定・修理大夫（＝藤原通任）等也。方忌有るに依り、女方（＝源倫子）と還來たる。

②『日本紀略』長和元年正月三日条

三日、辛未。

女御藤原妍子、立后すべきの由の宣旨を蒙る。仍りて左大臣「道長」以下、弓場殿に参り、慶賀を申さる。此の後、女御「妍子」、東三条第に遷御す。

③『御堂関白記』長和元年正月四日条（▲A）

▲A「御使（＝高階在平）有る事」

四日、壬申。雨下る。

▲A（裏書）

東三条に渡る。上達部多く來らる。御使は式部丞在平（＝高階）。数盃にして、泥酔の氣有り。禄・御返事等を賜はる。還参る。

④『御堂関白記』長和元年正月十四日条（▲A B）

▲A「立后の雑事定」

▲B「東三条第の修善」

▲C「御齋会結願」

十四日、壬午。

▲A（裏書）

皇后立ち給ふべし（×可皇后立給）。雑事等を定む。御調度・御器等、造り始む。

▲B（裏書）

今夜より、教静律師を以て、東三条に於いて修善を行なふ。土御門に、帰來たる。女方（＝倫子）、又、同じ。

▲C（裏書）

入夜、大内に参る。御齋会の結願に候ず。御論義（御論議）・禄等、常の如し。事了り、罷出づ。

⑤『御堂関白記』長和元年二月八日条（▲A）

▲A「立后の祈」

▲B 「主上（＝三条天皇）、御齒を取らしめ給ふ事」

八日、丙午。

▲A 「立后の事有るべき由の祈、所々に申さしむ。僧等、又、同じ。」

▲B 立后の事有るべき由の祈、所々に申さしむ。僧等、又、同じ。

▲B 今日、内裏（×太裏）（＝三条天皇）、御齒を取らしむと云々。藤大納言

（言×）（＝道綱）・藤中納言（＝隆家）来た。其に、相命じて云はく「須く参入すべし。而るに今明の慎事有りて参入せず。早く参らる

る後、若し出で給ふ次に御座さば、案内を示し給へ。」有暫還来た

る。兩人示して云はく「御齒を取らしめ給ふも、殊事（事×）無し。」者り。中納言、御齒持ちて見せしむ。是、仰に依る也と云々。

⑥『御堂関白記』長和元年二月九日条（▲A）

▲A 「立后の文書等を内覧する事」

▲B 「春日祭使（＝藤原兼経）出立つ事」

九日、丁未。

▲A 「中宮より、立ち給ふ時の文書等持来たる。之を付し、諸司・

所々の司等に召仰す。然るべき事等、又、相定む。

▲B 中宮（＝藤原彰子）より、使（＝春日祭使藤原兼経）の所の夜の装束、及び

給ふと云々。尚侍（＝藤原妍子）、又、遣はす。女方、又、送る。我、

舞人の下重・正絹（×見）の料等、之を送る。一条（＝一条第）より立つ

と云々。使、大内に参る。女方（＝女使力）を召すと云々。

⑦『御堂関白記』長和元年二月十三日条（▲A）

▲A 「東三条第の装束の事」

十三日、辛亥。

▲A 東三条（＝東三条第）に渡り、殿上を装束せしむ。

⑧『御堂関白記』長和元年二月十四日条（▲A、F）

▲A 「立后の御装束」

▲B 「宣命宣制」

▲C 「宮司の除目」

▲D 「本宮の拝礼」（裏書1）

▲E 「本宮の饗」（裏書2）

▲F 「冊命の勅使」（裏書3）

十四日、壬子。

▲A 夜より雨下る。未時許、晴氣有り。殿上の装束了りぬ。然るべく、

所々の司等を定め、惟風（＝藤原）に賜ひて領く。

▲B 大内に参る。西許なり。戌時、宣命、常の如（如×）し。但し、御

出無し。右府（＝藤原顯光）行事す。侍從中納言（＝藤原行成）は宣命使。

戌一点を以て、草を奏す。即ち清書を奏す。二点、宣命あり。此の間、

月明らかにして、晴儀を用ふ。

▲C 事了り、宮司の名簿（×簿）を書きて奏聞す。又、右大臣（＝顯光）に

授（×受）く。御出し、大臣（＝顯光）を召す（×召御出大臣）。除目あり。

陣に於いて清書し、之を奏す。式部に賜ふ。

▲D 啓陣を仰す。

十四日。本宮に参詣（×詣）す。亮能信朝臣（＝藤原）を以て、事由

を啓せしむ。拝礼す。此の間、掃部、御椅子を供す。昼御座（×書御

座）を撤（×撤）し、毯代を敷き、御椅子を立つ。又、藏人所より、大

床子・師子形・御草鞋等を渡さる。此等、皆立て了りぬ。御髪を理へ、

草鞋を着し、椅子の御座に着す。御装束は白。後に公卿・侍從列立す。

北面西上。再拝す。

▲E(表書2)

東対の座に着す。西より列を引く。座定まりて後、余着座す。大夫(道綱)と座を立ち、盃を取り、次々に上達部に献る。次第に之を取る。此の間、采女等、御膳を供ず。女方、皆、理髪す。此の中、大番侍者四人・蔵人(人×)四人は、額・末等を用ふ。是、御膳を供するに依る也。陪膳、又、此の如し。御帳の東辺の大床子の御座に、之を供す。

五献の後、上達部を、御前に召す。数献の後、下より禄を賜ふこと、各差有り。事たり、人々退出するの後、五・六人の上達部留候ず。此の間、内御乳母兵部、御髪を理ふ。仍りて禄を賜ふ。女装束。織物の綾の褂等、相加ふ。衣宮に入る。絹廿疋を加ふ。又、参る乳母の典侍の小宣旨には、女装束。織物の褂・絹十疋を加ふ。掌侍(×常侍)・乳母子には、織物の褂・袴・絹七疋。命婦には、綾の褂・袴。絹六疋を加ふ。蔵人には、綾の褂・袴・絹四疋。采女・博士並びに女官等には、或は褂・袴、褂。絹二疋、一疋。差々に随ひ、之を給ふ。入る所の絹四百余疋、五百疋(□)に及ぶ。

▲F(表書3)
此の日、未時許、大内より勅使有り。能信朝臣なり。是、今日、立后の宣命有る由の御使也。禄を賜ふ。大褂一重。袴を加ふ。

⑨『日本紀略』長和元年二月十四日条

廿五日、癸酉。

女御従三位藤原朝臣彰子を以て、皇后と為す。「之を中宮と号す。」即ち宮司を任じ、元の中宮職を以て、皇后宮職と為す。

⑩『御堂関白記』長和元年二月十五日条(▲A)

▲A「本宮の饗」

十五日、癸丑。天晴る。

▲A 大臣の外、諸卿参入す。東対の唐廂に、座を設く。对座。殿上人(人×)着す。数献の後、各退出す。此の日(日×)、御使蔵人右近少将朝任朝臣(源)参入す。数巡。女装束を賜ふ。

⑪『御堂関白記』長和元年二月十六日条(▲A)

▲A「本宮の饗」

十六日、甲寅。時々、雨下る。

▲A 諸卿参入すること、昨日の如し。御使蔵人(人×)は内蔵権頭景理(大江)。禄を賜ふこと、昨日の如し。兵部乳母、三箇日間、御髪を理ふ。今夜、罷出づ。仍りて紫檀地の螺鈿の薰炉(炉×)、銀の籠等を加へ、小宮に、薰香を入れ、薄物に褰み、銀の五葉の枝を付して給ふ。又、彼の陪従の者四人に、白褂各一重を賜ふ。女方等、三箇日間、皆、理髪すること、初日の如し。

⑫『御堂関白記』長和元年二月廿一日条(▲B)

▲A「皇太后宮(藤原彰子)に参る事」

▲B「啓陣終了」

廿一日、己未。

▲A 中宮より土御門に渡る。女方(倫子)、又、同じ。皇太后宮(藤原彰子)並びに大内に参る。入夜、罷出づ。女方、皇太后宮に参る。

▲B 此の日、啓陣の諸衛に、禄を賜ひて帰遣はす。四位には褂・袴、五位には褂一重、判官には単重、志・府生には足絹(×見)。舍人等には、布を賜ふ。

⑬『御堂関白記』長和元年三月四日条(▲A)

▲A「興福寺・仁和寺僧の慶賀」

▲B「皇太后宮(＝藤原彰子)の懺法御読経の僧名定」

▲C「法性寺に詣づる事」

四日、辛未。

▲A 中宮(＝妍子)に参る。興福寺僧・仁和寺僧、御慶賀に参る。各、禄

を賜ふ。僧綱は大掛一領、別当は一重、已講は横被(×黄被)。自余は

疋絹(×見)。

▲B 皇太后宮(皇×)(＝藤原彰子)に参る。御読経の僧を定む。懺法。十

五口。来たる十一日。

▲C 法性寺に詣づ。女方(＝倫子)、之に同じ。

⑭『御堂関白記』長和元年三月廿三日条(▲D)

▲A「一条院(＝一条太上天皇)の御法事の雑事定」

▲B「季御読経初」

▲C「皇太后宮(＝彰子)の御八講定」

▲D「延暦寺僧の慶賀」(裏書)

廿三日、庚寅。

▲A 一条院(＝一条太上天皇)の御法事の雑事を定む。悩有るに依りて参ら

ず。中宮大夫(＝道綱)・東宮大夫(＝齐信)・皇太后宮大夫(＝俊賢)来た

る。悩むと雖も会合す。御法事の事(々)等を示す。

▲B 件の人々、先づ内裏(×太裏)の御読経初(経×)に参る。次いで一

条に参る。定むべき由を示し、退出す。

▲C 皇太后宮(＝彰子)の御八講の事を定む。

▲D(裏書) 廿三日。入夜、延暦寺、中宮(＝妍子)・東宮(＝敦成親王)に賀表を

奉る。東宮は、去年、事(＝一条院の崩御)等有り、今に延引すと云々。
使の三綱に、禄を賜ふ。各、単重一重。小綱八人は疋絹(×見)。兩
宮(＝妍子・敦成親王)、此の如し。

⑮『日本紀略』長和元年三月廿三日条

廿三日、庚寅。

季御読経始。

其の日、延暦寺僧、中宮(＝妍子)・東宮(＝敦成親王)の冊立を賀す。

【事例5】長和元年（一〇一二）藤原城子皇后立后

①『御堂関白記』長和元年三月七日条（▲A）

▲A「立后の兼宣旨」

七日、甲戌。

▲A 内より右大弁（＝源道方）来たる。「今日、宣耀殿女御（＝藤原城子）を以て、皇后に立つべき宣旨下すは如何。」者り。奏せしめて云はく「先日、仰事を承はる。左右の仰に随ふべし。」者（×云）り。宣旨下ると云々。雨下る。

②『小右記』長和元年四月九日条（▼c）

▼a「斎院の三年一請物の事」

▼b「皇太后宮（＝彰子）の病」

+1「吉田祭の饗、中宮奉仕せらるべし。而るに穢に依りて延引の事」

▼c「中宮（＝藤原妍子）入内と立后（＝藤原城子）の時剋の事」

▼d「内蔵寮の請奏」

九日、丙午。

▼a 左中弁（＝藤原朝経）来たりて云はく「前加賀守兼澄朝臣（＝源）、斎院の三年一請の絹の事を申す。今朝、左府（＝藤原道長）命ぜられて云はく「暫く催責むるを免せ。」者り。子細は注さず。

▼b 又、云はく「皇太后宮（＝藤原彰子）、俄に悩み給ふ。左府營ぎ参らる。僧等加持し奉る。頗る宜しく御坐す由、彼是、云々す。」

+1 又、云はく「十五日、吉田祭なり。而るに彼の祭の饗は、中宮奉仕せらるる所なり。内裏の穢に依り、饗有るべからず。仍りて廿七日子日を用ふべしと云々。但し、平野・松尾・梅宮等の祭は延引せず。」

と云々。

▼c 又、云はく「中宮（＝藤原妍子）、廿七日に内に入り給ふべしと云々。彼の日は后（＝藤原城子）を定むる日也。然而、時剋前後有り。何事か有らむ乎。是、俊賢卿（＝源）、左府に申す所なり。」と云々。

▼d 蔵人業敏（＝高階）来たり、内蔵寮の請奏を下す。「松尾の御幣の料。」便ち左中弁に下す。

③『小右記』長和元年四月十八日条（▼c）

▼a「御禊の点地の事」

▼b「大嘗会行事所始の日時の事」

▼c「立后の日記を送る事」

十八日、乙卯。

▼a 左中弁（＝朝経）来たりて云はく「御禊の点地の事等、兼ねて宣旨を山城国に給ひて勤行なはしむる也。仍りて旧例に任せ、宣旨を給ふ。其の返解持来たる。其の状に云はく（云）『愛宕郡司を以て勤仕せしむる所なり。而るに右馬寮に召籠められ、召仕ふこと能はず。今一人は、左馬寮の召捕に依りて逃隠る。』と云々。件の解文、左中弁を以て、左相府（＝道長）に奉る。御返報に云はく「更に奏すべからず。右馬寮の事は、御監（＝実資）、仰下すべし。」者り。官方より召仰すべきの由、弁（＝朝経）に仰せたりぬ。亦、年預の允貞国を召し、愛宕郡司、国司に請けしむべきの由を仰す。若し弁申すべき事有らば、祭の間を過ごして弁申さしむべし。国司請取るの後、遁避けしめ難き歟。貞国申して云はく「数日、御馬の薨の事に依りて召候ぜしむる所なり。今に至りては、其の身を免ずべし。」と云々。

▼b 弁（＝朝経）云はく「左府（＝道長）、大嘗会行事所を始むべき程を

問はる。大略、今月晦比に始むべき由を申す。命じて云はく『来月、故一条院（＝一条太上天皇）の御法事、並びに院の奉為に、皇太后宮（＝彰子）、八講を修せらるべし。彼の宮大夫（俊賢、御禊の行事）・左衛門督（頼通（＝藤原）。大嘗会の行事）。吉服を着し、其の事に従ふは、便宜無かるべし。此の程を過ぎ、六月に始行するが宜しかるべきの由、伝示すべし。』者り。答ふるに謹奉を以てす。此の事、意を得ず。当時（＝三条天皇）の事を忽せにせらるるに似る。

▼cよにいり
入夜、修理大夫（＝藤原通任）来たり、雑事を談ず。多くは立后の間の雑事也。少々の事、相示し了りぬ。四条宮（＝藤原遵子）立ち給ふ間の記、又々、撰出だして送るべきの由、同じく示し了りぬ。事多く、鬱氣有り。

④『御堂関白記』長和元年四月廿五日条（▲C）

▲A「賀茂祭使還立」

▲B「中宮（＝妍子）入内の定」

▲C「女御（＝城子）の立后料を送る事」

廿五日、壬戌。

▲A
左衛門督（＝頼通）の車（×東）に乗り、密々に見物す。人知らず。左衛門督・三位中将二人（＝藤原教通・藤原頼宗、還立所に行く）。

▲B
左衛門督、大内に参り、中宮（＝妍子）の内に参り給ふに（×参中宮内絶、御前等を定むるを奏す。外記徳如（＝中原）持来たる。「解陣の事等、同じく行なふ。」者り。

▲C
民部大輔（部×）為任（＝藤原）を以て、宣耀殿（＝城子）の立后料に、絹百疋を送る。

女方（＝源倫子）、中宮に参る（×参女方中宮）。

⑤『小右記』長和元年四月廿六日条（▼c）

▼a「中宮（＝妍子）の行啓の事」

▼b「四条大納言（＝公任）に駕取の料を送る事」

▼c「立后の饗所料の事」

▼d「斎院に歌舞有る事」

▼e「斎院（＝選子内親王）の下部の夢の事」

廿六日、癸亥。

召使来たりて云はく「中宮（＝妍子）の行啓（×禊）に供奉すべし。

「明日。」彼の宮属良明（＝宇治）申して云はく『糸毛車を奉るべし。』者り。へ車副十二人。斎院の車を遣借し訖りぬ。

▼b
四条大納言（＝公任）に、綾の表衣・下襲を借送る。使に付し了りぬ。

明日の駕取の間、着すべき料敷。

▼c
明日の立后の饗所料、匠作（＝通任）、唐瓶子四口を借る。即ち送る也。匠作示送りて云はく「明日の立后の事、左相府（＝道長）行なはるべからず。仍りて今日、藏人を差はし、右相府（＝顕光）に仰遣はさるべし。」者り。「左府、民部大輔為任（＝藤原）を招き、桑糸百疋を女御（＝城子）の許に奉らる。」者り。匠作、興光朝臣（＝三善）を以て云送（云×）りて云はく「土敷料の龍鬘・庭二枚、求得ること能はず。」者り。

▼d
興光朝臣に付し、求むる数を送り了りぬ。

斎院長官為理朝臣（＝源）云はく「斎王（＝選子内親王）、院に還るの後、歌舞（舞）、例の如し。院は、是、御社に同じ。神殿有るに依る。諒闇と雖も、歌遊有り。」と云々。

▼e
又、云はく「院の下部の夢に『乗車の人、東門の外に来たり、車を留め、院司等を召出だす。長官已下悉く参列す。乗車の人云はく「祭

は停むべしと云々。如何。実歟。」為理申して云はく「然らざる事也。行なはるべき也。」甘心の氣有りて歸去る。』者り。

⑥『小右記』長和元年四月廿七日条（+123、▼a・d（r））

- ▼a 「大臣三人（＝道長・顕光・公季）の不参に依り、参内の仰有る事」
- ▼b 「吉田祭使の身代の事」
- ▼c 「四条大納言（＝公任）に女装束を送る事」
- ▼d 「諷誦」
- +1 「立後の節会（女御城子）」
- ▼e 「内弁を勤むる事」
- ▼f 「宣命の草」
- ▼g 「左府（＝道長）、立後の事を妨遏する事」
- ▼h 「左府、宣命の文を改むる事」
- ▼i 「宣命の清書」
- ▼j 「宣命宣制」
- ▼k 「宮司の除目」
- +2 「諸衛の将・佐一人も参らず。仍りて啓陣の事、直、外記に仰す」
- ▼l 「下名」
- ▼m 「本宮の拝礼」
- ▼n 「本宮の饗」
- ▼o 「除目を新后宮（＝城子）に奉る事」
- ▼p 「冊命の勅使」
- +3 「左府の妨遏に依り、大床子・師子形、内より奉られざる事」
- ▼q 「史奉親朝臣（＝但波）、立后に奉仕せざる事」
- +4 「中宮（＝妍子）の入内の事」

▼r 「大藏卿（＝正光）、召使に石を打つ事」

廿七日、甲子「危日」。

去夜より甚雨。朝間、弥、甚だし。内豎来たりて云はく「先に式部（＝高階在平）仰せて云はく『大臣三人（＝道長・顕光・公季）、障有りて参らず。已剋以前に参入すべし。』者り。何事かを知らず。推量する所は、若しくは今日の立後の事歟。左相府（＝道長）を憚りて参られざる所歟。天に二日無く、土に二主無し。仍りて巨害を憚らざる耳。予申さしめて云はく「去夜より、聊か所労有り。相扶けて参入すべし。已剋以前は参入し難き也。」

匠作（＝通任）、長筵を借送る。即ち、之を送る。新后（＝城子）の饗所料歟。

▼b 「尹中納言（＝時光）、人を以て云送りて云はく「将監兼任（＝藤原）、今日、吉田祭使を勤むべし。而るに日来、寸白を悩み、未だ減平すること能はず。仍りて将監仲重（＝身人部）に談じ、身代と為して出立したむるの由、昨夕、左府（＝道長）に申す。許容し了りぬ。其の命に云はく『大将（＝実資）に触るべし。』者り。仍りて示送る所也。」者り。答ふるに、聞き給はるの由を以てす。袴、摺らず。賀茂祭の袴の如し。隨身の近衛守近（＝安倍）を差はし、尹中納言の許に送る。被物。〈単重〉。

▼c 「女装束一襲、（二藍の織物の唐衣。同色の織物の褂【色頗る唐衣より薄し。】・紅染の擣（×擣）の綾の褂一重。同色の重袴一具。」四条大納言（＝公任）の御許に送り奉る。先日、示送らるるに依る也。今夜、智の宮（×芳）有りと云々。（左三位中将教通。）

▼d 「早旦、諷誦を清水寺に修す。多事の日に依る也。女装束の使の男（出納）、疋絹を与へらる。感悦の報有り。」就中、

打衣太だ鮮明なり。」者り。

参内す。〔未一点〕諸卿参らず。大外記敦頼朝臣（＝菅野）云はく「南殿の御装束、及び所々の屏幔、皆立つ。今日の事、上卿、未だ仰下されざるの前、装束使奉仕す。左中弁（＝朝経）参らず。又、史奉親朝臣（＝但波）参らず。云々の如くば、奉親朝臣、宅より、下藤の史の所に仰遣はし、奉仕せしむる所（々）也と云々。奉親朝臣（＝）は左府に候ずる者也。若しくは承はる所有る歟。」者り。参入するの由、資平（＝藤原）を以て頭弁（＝道方）に示さしむ。余、仗座に着す。小庭の前に、屏幔を立つ。宜陽殿の西壇に、同じく曳く。

小、時、頭弁、陣に出でて云はく「今日、立后の事有るべし。而るに其の事を行なはしめむが為に、昨日、藏人在平を差はし、右大臣（＝顕光）の許に仰遣はす。奏せしめて云はく『日来、所労有り、参入すべからず。但し、承引するの人無くば、相扶けて参入すべし。』者り。次いで内大臣（＝公季）に仰せらる。物忌の由を申さる。仍りて下臣（＝実資）に仰せらるる所也。」者り。此の間、藏人在平、陣に出で、頭弁の後に居す。宣旨を伝仰すべきに似る。事、奇怪に依り、之に示して退かしむ。頭弁、同じく指示する而已。

頭弁云はく「先づ参入するの由を奏すべし。」者り。即ち殿上に参上す。相替はりて在平来たり、綸旨を伝へて云はく「所司具する乎。」者り。答へて云はく「初めに承はる所無し。何事乎。如何。」云はく「今朝、内堅を差はして申さしめて云はく『大臣、参らるべからず。今日の立后の内弁奉仕すべし。又、未剋、宣命の事有るべし。早く参入すべし。』者り。答へて云はく『内弁の事、承はらず。内堅、只（×）亦、参入すべき由を仰す。今に至りて勅有り。』召仰すべき由、奏聞し了りぬ。〔思ふ所は、内弁の事、内堅を以て伝仰すべからざる

歟。若しくは日来、之を仰す。若しくは参入するの時、面して仰すべき歟。古伝を知らざる也。〕外記公資（×頼（＝大江））を召す。内記を召遣はすべき事、所司・諸衛を召仰すべき事、諸卿に廻告ぐべき事等、之を仰す。

其の後、頭弁仰せて云はく「宣耀殿女御（＝城子）、皇后と為すべきの宣命、作らしむべし。」者り。余問ひて云はく「中宮（＝妍子）を尊び、皇后と為し、女御を以て、中宮と為すべき歟。」云はく「只、皇后と為すべし。」者り。問ひて云はく「御名は城子歟。」云はく「然る也。」者り。又、云はく「位は從五位下。」者り。内記資信（＝菅原）参入す。從五位下藤原城子、皇后と為すべきの宣命の事を仰す。但し、中宮立ち給ふの宣命、相同じ歟。亦、宣命、前々の立后の時と、相違無く、例の状を為す。須く先づ前々の宣命の草を召見るべし。然而、内々に見る所有り。仍りて直ちに仰せ了りぬ。見合はすべき由、敦頼朝臣に仰す。予、南座に移る。内記、宣命の草を進る。事誤無し。見了り、左相府に奉る。時剋多く移るも帰参らず。若しくは是、申通すの人無き歟。頭弁並びに敦頼朝臣、同じく此の疑を成す。相府（＝道長）、立后の事、頻りに妨遏有るの故也。万人、怖畏を致す。

按察中納言（隆家（×兼（＝藤原）・右衛門督（懷平（＝藤原））・修理大夫（通任）等参入す。自余の卿相、中宮に候ず。〔東三条。左府同じく坐すと云々（々々）〕召使、諸卿参入すべきの由を申しむ。卿相の前に召出だし、口々に嘲弄罵辱す。敢へて云ふべからず。公事無きに似る。敦頼朝臣彈指す。敦頼朝臣云はく「左府、召有り。然而、事を左右に寄せ、暫く参らず。」者り。今日の事を行なひ了るの後、参入すべきの由、之を仰す。今夜戊剋、東三条より、中宮、内裏に入り給ふ。万人、此の事に帰し、立后の事を忽諸にす。宣命の版、数度

催す後に中務置く。式部、臨晩に僅に標を立つ。今日の事、猶、水を以て、殿に投ずるがごとし。是、相府の氣に依る也。

申終許、内記帰來たりて云はく「宣命の草、左府に内覧す。命じて云はく『宣命の文、例文に違はず。但し、先に立ち給ふ后（中宮）有り。』」閫（×閫）の内「斯理弊の政（×斯理弊政「弊伎」）」の文は除かるべき歟。抑、計行なふべし。』者り。意を得ずと雖も、其の文を削らしめ、亦、相府に奉る。「亦、命じて云はく『天下政』と云ふ文及び其の次の文は停むべし。亦、「食国として古より行來たる」と書くべし。已下の文は、旧の如し。』者り。御難を強ふる也。奇しむべき也。『改直す後は、更に持來たるべからず。奏聞すべきの由を示すべし。』者り。彼の命の如く改書かしむ。

▼御所に進み、（階下を経て、射場に進む。）奏せしむ。即ち返し給ふ。清書せしむ。進みて奏す。返し給ふ。陣に復（×後）す。暫くして内記に返給ひ、陣座に候ぜしむ。

▼陣後に出で、靴を着す。外記を召し、陣を引くべきの由を仰す。外記申して云はく「陣を引き了りぬ。」仍りて宣命を笏に取副へ、軒廊に進む。（衝黒。）而るに左右の陣、未だ引かず。催仰せて引かしむ。近仗、中儀を服し、（將は縫腋、弓箭を帶ぶ。開門の近衛は黄衣を着す。）南階を挟み、左右に立つ。

次いで内侍、東檻に臨む。還入る後、予、東階より昇る。南の簀子敷（×簀子敷）を歴て、兀子に着す。（東第三間の柱の下。）

次いで承明・建礼等の門を開く。小選、閫司、承明門の東西の座に分着す。次いで予、舍人を召す。二声。大舍人、称唯す。少納言守隆（＝源）代人（×戌入）り、版位に就く。宣る。「刀禰召せ。」上達部、標に就く。

立定まり、（中納言（言×）隆家、参議懷平（×）通任の三人。諸大夫、一人も参らず。往古聞かず。）中納言藤原朝臣（隆家）を召す。称唯して参上し、簀子（×簀子）に立つ。余、右手を以て、宣命を給ふ。之を受けて退下し、軒廊の西第一間の東の柱の下に立つ。（柱の外に、南面して立つ。）

次いで予、退下し、軒廊の東二間より出で、列に加わる。次いで宣命使（＝隆家）、版位に就く。宣制二段。卿相、段毎に再拜す。式に依る。但し、第二段に、或は舞（舞＝舞）有り。近則、中宮（＝妍子）立ち給ふ日、舞（舞＝舞）有りと云々。彼の日、忌日（＝藤原齊敏）に依りて参らず。只、伝聞く所なり。先日、内議有り。然而、今日、式に存す。又、『故殿御記（＝清慎公記）』に見ゆ。仍りて舞踏を用ひざる而已。宣命使、列に立ち了りぬ。予、承明門より出づ。次第に皆出づ。東の閤門・敷政等の門に入り、陣に復（×後）す。

▼即ち藏人雅康（＝平）、召を伝ふ。予、南殿の北廂を経て参上す。心神極めて悩み、侍所に於いて、御漿水（×下）を飲（×飯）む。御前に参り、（又廂より進む例也。）東廂の円座に候す。（御座に当たる。）除目の事を仰せらる。男等を召し、硯を召す。之を居う。柳筥、統紙を納む。亦、先づ頭弁に示し、宮司に任すべき者の名簿（×簿）を加納めしむ。仰せて曰はく「云々。」称唯し、笏を置く。先づ墨を磨ぐ。仰に随ひ、大夫を書く。奏して云はく『兼』の字。天許あり。次いで又、仰に依り、亮を書く。「兼」の字は大夫に同じ。仰せて云はく「次々に書くべし。」者り。硯に納むるの宮司の名簿（×簿）を覧す。仰せらるる所歟。前に又、本宮の注進に随ひて書く所也。今般の宮司、多く是、本官有り。皆、「兼」の字を賜はる。書体は上に注す。書き了り、硯等を撤す。除目を以て、柳筥に盛る。笏を腰に挿し、御辺に

進みて奏覽す。笏を抜き、復座す。御覽じりぬ。進みて笏を挿し、之を給はり、復座す。即ち入御す。

余、除目を笏に執副へ、退下して陣に復す。外記を召し、硯を進らしむ。右衛門督（＝懷平）の前に置く。余、除目を金吾（＝懷平）に授けて清書せしむ。別紙に大夫を書き、亮已下は一紙に書く。

此の間、頭弁、仰を伝へて云はく「皇后宮、陣を侍らしむべし。」者り。外記公資を召し、六衛の將・佐等の候不を問ふ。「巻文を進ると雖も、一人も参らず。」者り。今日の気色を見るに、甚だ以て言外也。召催す將・佐、参入すべからざる歟。仍りて皇后宮、陣を候はしむべきの由、直、外記に仰せりぬ。前例は、一府の佐も参らざるの時、外記を以て、志に伝仰せしむ。抑、前例は、上卿、膝突二枚を敷かしめ、左右の佐を召し、一度に之を仰す。初は近衛府、次いで衛門、次いで兵衛。然而、時の議に随ひ、蓋し此の如き歟。更に催召さしめず、外記に仰する耳。

清書了りて後、外記を召す。宮に、清書を盛り、外記に給ふ。御所に進みて奏聞す。返し給ふ。陣に復す。

外記をして式部を召さしむ。外記公資、度々、式部侍する由を申す。是、例也。夜闌に依り、三度に及ばず。式部丞在平（＝藏人）参進み、小庭に立つ。予、北面して宣りて云はく「万宇古。」在平称唯し、膝突に進む。予、右手を以て、之を給ふ。之を受け、本所に退立つ。宣る。「万介多へ」と。称唯して退出す。

余・大夫（隆家・同車）・右衛門督（懷平）・修理大夫（通任）、新后の宮に参る。（亮為任（×理）（藤原）堀河辺。故道順（＝高階）の宅。）西御門・同方の中門より参入す。先づ宮司等奏慶せしむ。（寝殿の坤の辺に於いてす。）拝礼了りて、亮為任を以て上達部参入の由を

啓せしむ。即ち啓の由を伝ふ。仍りて次第に庭中に進みて拝礼す。

（上達部四人（＝実資・隆家・懷平・通任）。侍従一人も参らず。）

畢りて御前を経て、東対の座に着す。（母屋は簾を懸けず。北上対座。嘉木の机・高麗端疊を用ふ。土敷・円座を用ひず。）侍従の座、〔南廂。西上北面。机。〕〔黒柿。〕疊。〔紫端。〕侍従一人も参らず。亦、所々の殿上人・諸大夫の饗、酒部の幄に有りと云々。殿上人一人も参らず。役送は五位五・六人許歟。其の外は見えず。

女院（＝藤原詮子、皇后に立ち給ふの日、母屋の饗有り。其の後々の立后の饗、皆、此の儀（×議）を用ふ。四条宮（＝藤原遵子）立ち給ふ饗の座、廂を用ふ。高麗疊の上に、土敷・茵を敷く。彼の時、例を尋ねて行なはるる所なり。但し、濟時卿（＝藤原）云はく「皆、円座を用ふ。」と云々。

今夜、夜深（々深）く、客少なし。亦、勸盃の人無し。予、大夫（＝隆家）に示して云はく「勸盃の人、相分つべからざる歟。」大夫甘心す。一献は大夫。次いで粉熟を居う。二献は亮為任。飯・汁物を居う。箸を下ろす。三献は修理大夫。次第に、禄有り。納言（＝実資・隆家）は大褂一重。両宰相（＝懷平・通任）は烏子重。禄の後、退出す。（子剋許）正絹を隨身に給ふ。

今夜、為任云はく「式部卿宮（＝敦明親王）出で給ふは如何。」者り。答へて云はく「上達部幾ならざる内、然かるべきの人無ければ、出で給はざるが宜しき歟。」甘心して退帰る。

皇后宮職（宮×）

大夫従二位藤原朝臣隆家（兼）
亮従四位上藤原朝臣為任（兼）
大進正五位下藤原朝臣良道

権大進従五位下藤原朝臣俊忠〈兼〉

少進正六位上藤原朝臣師通

大属正六位上安倍連為善〈兼〉

少属正六位上伴宿禰興忠〈兼〉

寛弘九年四月廿七日

本宮の注奏に随ひて任ずる所なり。今日、為任朝臣を以て新后宮

（＝城子）に奉らる。

冊命の由を聞かると云々。是、前例也。禄有り」と云々。

冊命以後、藏人章信（＝藤原）を以て御挿鞋を新后（＝城子）に奉らる。

禄有りと云々。度々の例を見るに、大床子・師子形は、内より奉らる。

而るに左府妨遏す。仍りて本宮造らしむと云々。

後日聞く。「史奉親朝臣云はく『除目の清書、左府に奉らるべき

歟。』と云々。除目は専ら奉らざる也。奉親、至愚の又至愚也。奉親

朝臣、八省に参りて参内せず。下臈の史を以て御装束を奉仕せしむ。

是、極めて冷淡（×談）なる事也。敦頼朝臣の申す所也。

今夜、〈戌剋〉中宮、東三条院より、内裏に入り給ふ。右三位中将

頼宗（＝藤原）、正三位に叙す。后（＝妍子）の乳母藤原高子、加階すと

云々。是、頭弁談ずる所也。東三条の慶賀歟。上階の慶は甘ぜざる事

也。

行啓に供奉する卿相、大納言道綱（＝藤原）・斉信（＝藤原）、中納言俊

賢（＝源・頼通（＝藤原）・行成（＝藤原）・時光・忠輔（＝藤原）、参議正

光（＝藤原・経房（＝源）・実成（＝藤原）・頼定（＝源）、右三位中将頼宗。

藏人頭（＝道方）より始めて、侍臣、首を挙げて扈從す。両処は玄隔な

り。王憲（×主憲）を怖れざる歟。上達部、障を申し、冊命に参らず。

俄に、或は触穢、或は所勞。就中、源中納言俊賢、冷泉院（＝冷泉天

皇）の素服を給はるに依りて参入せず。「吉田祭に当たるに依る。」者

り。而るに行啓に供奉し、内裏に参入す。既にして、公事を忽諸にす。

後聞く。「諸卿、東三条に候するの間、喚使、参内すべきの由を申

す。手を打ちて同音に咲ふ。其の後、嘲哂すること極無し。大藏卿

（＝正光）、石を執り、召使を打つこと兩三度なり。」と云々。狂乱歟。

神の咎有る歟。天譴有る歟。至愚の者と謂ふべき也。

（注1）▼f「為例状、須」、古記録本「為例状、須」、史料本「為例、依須」、大成本

「為例、状須」。

⑦『御堂関白記』長和元年四月廿七日条（▲E）

▲A「由祓」

▲B「吉田祭」

▲C「中宮（＝妍子）入内の事」

▲D「中宮に供奉する公卿」（裏書1）

▲E「立后（＝城子）の事」（裏書2）

▲F「中宮の饗」（裏書3）

▲G「左三位中将（＝教通）、太皇太后宮大夫（＝公任）の女と婚する事」

（裏書4）

廿七日、甲子。

▲A「早朝、東河に出でて禊す。吉田祭奉幣せざる由なり。」

▲B「女方（＝倫子）と中宮（＝妍子）に参る。中宮（々々）、吉田祭の事、奉

仕せらる。又、例幣に加へ、神宝、使に付す。

▲C「亥時、内裏に入御す。諸陣の尉以下には、例の如く、禄を賜ふ。上

達部・五位以上には賜はず。是、諒闇（×涼闇）に依る也。須く六位以

下には給ふべきに非ず。前例に依る。而るに下部等、寂然の由を申す。

仍りて臨時に之を賜ふ。

▲D(表書1) 廿七日。供奉の上達部、春宮大夫(「音信」・皇太后宮大夫(「俊賢」・侍從中納言(「行成」・大藏卿(「正光」・左兵衛督(「実成」・源宰相(「頼定」此等は指(「旨」さるる人也。指されて参らざる人、右大將(「実實」、内に候ず。召に依ると云々。隆家中納言、今の大夫。右衛門督(「懷平」、年来、相親しき人也。今日来たらず、奇しく思ふこと少なからず、思ふ所有る歟。指されずして候する人々、左衛門督(「頼通」・尹中納言(「時光」・左宰相中將(「経房」・右三位中將(「頼宗」・戌時許、頭弁(「道万」来たりて仰せて云はく「右近中將頼宗・藤原高子、一階を叙すべし。」是、前例に依る也。朝任を以て、案内を申さしむ。仍りて仰せらるる也。

▲E(表書2) 此の日(日×)、女御城子(子×)を以て、皇后と為す。右大臣(「顯光」・内大臣(「公季」、障の由を申して参らず。仍りて右大將を召し、宣命を行なはる。時、未時に、諸司に仰す。陰陽師の勘ふる時は子時と云々。而るに夜半也と云々(云)。只、定めらると云々。陰陽師等奇しき申すと云々。参入する上達部、実資・隆家・懷平・通任等の四人と云々。侍從は候ぜず(×不候侍從)。殿上人、一人も参らず(×不参殿上人)と云々。

▲F(表書3) 御宿所(「飛香舍」に、酒食(×西食)を儲く。上達部の出車還る間、之に着す。朝夕の御膳を供する後に参上し給ふ。内に候する女方、見参、物を賜ふ。乳母等に女装束、命婦に綾の褂・袴、蔵人(「女蔵人」に綾の褂、合わせて廿五人。得選に白褂一重、長女・御廂人・刀自(×負仕)等に、疋絹(×見)給ふ。

▲G(表書4) 此の夜、左三位中將(「教通」、太皇太后宮大夫(「公任」と因縁を為す。彼の宮(「四条宮」の西対に此の事有りと云々。共は、五位八人、

六位二人。隨身等・雑色十人、之を遣はす。知章朝臣(「藤原」、此の外に、車後に乗る。

⑧『日本紀略』長和元年四月廿七日条

廿七日、甲子。

女御從四位下藤原朝臣城子を立て、皇后と為す。中宮職と号す。故濟時卿(「藤原」の女。

此の夕、中宮「妍子」、飛香舍に入る。

⑨『小右記』長和元年四月二十八日条(▼a e f)

▼a「新后(「城子」、悦を仰せらるる事」

▼b「中宮(「妍子」の御方に参る事」

▼c「皇太后宮(「彰子」の御悩」

▼d「左三位中將(「教通」と四条大納言(「公任」の女の後朝」

▼e「主上(「三条天皇」の立后の間の仰事」

▼f「冊命の後朝の御使」

廿八日、乙丑。

▼a「新后(「城子」、亮為任朝臣を以て、昨日の行事の悦を仰せらる。

▼b「参内す。一両の卿相相共(々共)に、中宮(「妍子」の御方(「飛香舍」に参る。左府(「道長」・卿相、数多候ぜらる。昨日の事を思ふに、弥、王道弱く、臣威強きを知る。嗟乎嗟乎(×差々々々)。饗饌有るも、酒あらず。

▼c「皇太后宮(「彰子」、日来、寸白を悩み給ふ。御頼と云々。只今、痛悩み給ふの由、一両度、御消息有り。

左府(「道長」云はく「三ヶ日、罷出づべからず。而るに此の告有り。

之を如何為む。」予答へて云はく「必ずしも籠坐すべからざる歟。」相府（＝道長）云はく「然るべき事也。車を取遣はすも、早くは将来（＝持来）たるべからず。左衛門督（＝頼通）の車に乗りて馳参るべし。」者予と右衛門督（＝懷平）と同車し、皇太后宮に参る。〔途中、秉燭す。〕小時、左府参らる。中宮に候ざるの卿相、同じく参る。兵部卿（＝忠輔）参らず。予暫く候じて罷出づ。〔戊剋許〕

今日、中宮に参る卿相、大納言齊信、中納言俊賢・頼通・隆家・行成・忠輔、参議（＝懷平）・正光・経房・実成・頼定、三位中将・教通・頼宗、雲上の侍臣雲集する而已。

▼^d今朝、四条大納言（＝公任）の消息に依りて、資平、太皇太后宮（＝遵子）に詣向かふ。件の宮（＝四条宮）の西対に於いて、去夜、婚礼を行なふ。〔女十三。〕後朝使右衛門佐輔公に、〔高麗端暈を以て、座と爲す。今朝、御消息有り。予申遣はす所也。〕盃酒を勧むるの垣下と爲て招く所也と云々。内の御使の外、四位已上を招き、垣下（＝恒下）と爲すは、必ずしも然るべからざる事なり。亦、饗饌有りと云々。前大和守景齐（＝藤原）・左京大夫長経（＝源）及び五品等、多く会すと云々。一家（＝小野宮家）、過差無く、今、此の事有り。計之、後悔有る歟。

▼今夜、皇太后宮より退出するの間、資平、車後に侍りて云はく「今日、内の陪膳に候ず。仰せて云はく『近くに祇候すべし。』者り。仍りて御台盤の下に進候ふ。仰せて云はく『昨日の立后の事、無止く思す事也。而るに大臣より始めて諸卿参らず。大将藤原朝臣（＝実資）、召に応じ、即ち参入し、件の大事を行なふ。悦思ふこと、極無し。久しく東宮に在り、天下を知らず。今適、登極して意に任すべき也。然らざるの事、愚頑也。然るべきの時有らば、雑事を云合はすべきの

由、且は此の事を伝仰すべし。汝（＝資平）、外に漏らすべからず。又、大将漏らすべからざるの人也。汝、見る所有り。仍りて伝仰する所也。』仰せ了り、早く起ちて入り給ふ。」者り。余戒めて云はく「努力々々（努々力々）、妻子にも談すべからず。但し、明日、必ず陪膳に候じ、只、恐る由を奏すべき也。」希有の仰事也。

▼未剋許、慶僧正（＝慶巴）過ぎらる。良久しく清談す。

或云はく「今日、藏人朝任朝臣を以て新后に奉らる。被物有り。」と云々。冊命の後朝の御使歟。

⑩『小右記』長和元年四月卅日条（▼b）

▼a「三位中将（＝教通）の共の事」

▼b「主上（＝三条天皇）の立后の間の仰事」

卅日、丁卯。

▼^a季信朝臣（＝平）云はく「三位中将（＝教通）の共の近江守（＝知章）、乗車して相従ふ。其の外、五位八人・六位二人なり。」者り。

▼^b右衛門督「懷平」示送りて云はく「召に依り、今朝、参内す。立后の日の事を仰せらる。『公（＝三条天皇）の大辱爲り。皇后（＝城子）の爲ならず。上達部の冷淡（＝談）なること、仰尽すべからず。』者り。『彼の日、早く参り行事す。尤も悦思ふ。伝仰すべし。』者り。『且つは資平を以て仰せしむ。』者り。食禄の身、王命に背き難し。素食の責、日夕、歎く所なり。

⑪『小右記』長和元年五月一日条（▼a）

▼a「主上（＝三条天皇）、立后の事に依りて悦思ふ事」

▼b「島の馬を馳する事」

一日、戊辰。

▼^a 参内す。太皇太后宮大夫公任・同宮権大夫行成・右衛門督懷平（々）参入す。公任卿、良久しく、聶（＝教通）の雜事を談ず。右衛門督云はく「昨今、御前に候ず。仰せられて云はく『立后の事、右大将（＝実資、召に応じ、参入して行事す。一に悦思ふ所、一にいとほしく（伊と保之久）なむ思ふ。憚恐るる所有りて、諸卿参らず。猶参りて執行なふ。此の由を伝仰すべし。』者り。奏するに恐申すの由を以てす。亦、談じて云はく『左大臣（＝道長）の所為、極めて奇怪也。諸卿同心し、朝威を失ふ。歎思ふこと少なからず。此の如き事に依り、命暫く保たむと欲す。』頗る思食す所有る歟。」者り。申剋に退出す。皇

后宮大夫（＝藤原隆家）、陽明門の内に相逢ふ。

馬頭（＝藤原兼綱）、允貞国を以て申さしめて云はく「島の馬を馳せむと欲す。諒闇の年、云々、定まらず。案内を承はりて進止せむ。」者り。能く前例を尋ね、又、左寮（＝左馬寮）に問ひ、左右すべきの由、報答し畢りぬ。

⑫『小右記』長和元年五月二日条（+1▼a）

▼a「除目の内覧の事」

+1「勸学院の衆、長者（＝道長）の命に依り、立后を賀するに参らざる事」

二日、己巳。

▼^a 大外記敦頼朝臣云はく「兩度、史奉親朝臣（＝但波）云はく『一日の除目、内覧有るべき歟。』者り。敦頼答へて云はく『未だ奏覽せざるの書を以て、内覧を経べき歟。除目に至りては、御前に於いて御覽する所、已に了る書なり。更に亦、奉らるべからざる歟。』奉親云はく

『前日、大納言道綱卿、承行なふ所の除目の清書、之を奉らる。』者

り。又、答へて云はく『若しくは家々の御説歟。』者り。吾答ふる所は、「奉親、無才多言にして、故実を知らざる者也。道綱卿、清書を以て、左府（＝道長）に奉るは、案内を知らざる也。不覚の人の例を引きて謗難する所は如何。還りて嘲るべきに似る。件の事、先日、四条大納言（＝公任）の御許より告送らるること有り。彼の納言（＝公任、則ち奉親に前例を知らざるの由を示す。適、故実を失なはずに行なふ所也。而るに謬言を以て謗難する所は至愚也。」示すべきの由、敦頼朝臣に含め畢りぬ。

+1 或云はく「勸学院、例に依り、皇后（＝城子）に御慶を啓せむと欲す。而るに先づ案内を長者（＝道長）に申す。参るべからざるの由を召仰せらる。仍りて参入せず。」と云々。

（注1）▼aの古記録本「至除目於御前所御覽已了、書更亦不可被奉歟、」を「至除目於御前所御覽已了書、更亦不可被奉歟」とするなど、読点の位置を変更した。

⑬『小右記』長和元年五月四日条（+1▼a）

+1「除目の執筆の間の蜈蚣、光榮（＝賀茂）を以て占はしむる事」

▼a「占串」（裏書）

▼b「雷鳴陣に参らざる事」

+2「主上（＝三条天皇）、中宮（＝妍子）の御方に渡御する事（公卿・侍臣、饗有り）」

四日、辛未。

+1 去月廿七日の除目の蜈蚣、昨日、光榮朝臣（＝賀茂）を以て占はしむ。占、裏に注す。

▼^a 裏書 御前に候じ、除目を奉仕するの間、八寸許の蜈蚣、硯を去ること

幾ならず北行す。心に、告徴を存す。神告を得むが為に、光榮朝臣を招きて占はしむること、左に注す。

占ふ。四月廿七日、甲子。時、戌を加ふ。河魁(×何魁)、子に臨むを、用と為す。将、玄武。中、伝送・天后。終、勝先・騰蛇。御行年、西、上に、小吉・天一。卦遇、元首。

之を推す。用、日財に起つ。御年は、上に、天一を見る。日財は、是、財を主る。天一は、是、天子を主る。又、天福為り。此を以て、之を言ふ。天子の福慶を蒙むるを主るの象乎。

寛弘九年五月三日 賀茂光榮

▼b「度縁請印」
隨身を差はし、参入せざるの事を蔵人の許に云遣はす。(所労有るの由なり。雷鳴に依る也。)

+2 昨日、初めて主上(三条天皇)、中宮(妍子)の御方に渡御すと云々。之に因り、左相府(道長)及び卿相数多参入す。皆、束帶。上達部・殿上人の饗饌有りと云々。往古聞かざるの事也。

⑭『小右記』長和元年五月十一日条(+1)

▼a「仁王經不断御読経の僧名定」

▼b「度縁請印」

+1「除目の間の蜈蚣、匡衡、会釈する事」

十一日、戊寅。

▼a 参内す。左大臣(道長)参入す。仁王經不断御読経の僧名を定申す。〈廿一口〉。左近中将経房執筆す。日時勘文を加へ、〈廿三日〉。頭弁(源道方)を以て奏せらる。即ち返し給ふ。右少弁資業(藤原)に下賜ふ。先づ僧名を結申す。次いで日時勘文。宣して云はく「廿三日。」次いで仁王經の由を仰す。畢りて史に仰せ、上(道長)の前の筥文并

びに参議(経房)の前の硯等を撤せしむ。

▼b「先是、参議頼定(定×、宣旨に依り、結政所に向かひ、度縁を請印せしむ。伏座を起ち、敷政門より出づ。皇太后宮大夫俊賢云はく「捺印すべきの度縁五百枚。」者り。治部(治部卿に依りて知る所歟。申剋計、罷出づ。

今日参入する卿相(×相卿)、左大臣・太皇太后宮大夫公任・皇太后宮大夫俊賢・左衛門督頼通・皇后宮大夫隆家(早出す。事故有るに似る。皇后宮大夫の事に依り、左府(道長)の気色宜しからざる歟。隆家卿、怖畏の氣無し。侍從中納言行成・左近中将経房・左兵衛督実成・伊予守(伊与守)頼定。

+1 月に乗じて、式部大輔匡衡(大江)來たる。雜事を談ずる次に云はく「一日、召に應じて早参り、立后の事並びに除目の事を行なふ。極めて感思ふ所あり。」言ふ所太だ多し。敢へて記すべからず。其の次に、除書の間の蜈蚣の事を語る。蜈蚣を会釈して云はく「呉」の字は、天に、口を載す。『公』の字は、三公也。天口より出で、三公と為るべき歟。『呉』なれば、十二月を期とすること、疑始無かるべし。彼の日は甲子なり。物の始に、除目を行なはる。事始と謂ふべき也。亦、初めて皇后宮の除目を行なふ。『皇』は御門也。『后』はきさき(き佐き)なり。帝后「御門きさき」の相は、除目有る事の相を兼ね。亦、大夫の名(隆家、訓読して「いへをさかやかす(伊部平佐加や加す。』と云ふ。尤も興有る事也。」又、云はく「周公並びに呉公也。彼の家は周公也。予の家は呉公也。左右思慮するに、三公に昇ること、近くに在るべし。」者り。識者(匡衡)の言、後鑑の為に聊(×聊)か記置く所なり。件の匡衡、月來、食せず、恙(×恙)有り。而るに夜に隠れて來たる所也(著)。

【事例6】寛仁二年（一〇一八）藤原威子中宮立后

①『御堂関白記』寛仁二年七月廿八日条（▲A C）

▲A「太皇太后宮（＝藤原彰子）、尚侍（＝藤原威子）の立后を仰せらるる事」

▲B「相撲の拔出」

▲C「立后の日時勘申」

廿八日、戊子。

▲A「候宿す。早朝、宮（＝太皇太后宮藤原彰子）の御方（＝弘徽殿）に参る。

摂政（＝藤原頼通）、又、参る。宮仰せられて云はく「尚侍（＝藤原威子）、立后すべき事、早々たるが吉とすべし。」者り。余申して云はく「宮

（＝中宮藤原妍子）御座すに、恐申し侍る。是以て、未だ此の如き事を申さざる也。」又、仰せられて云はく「更に然るべき事に非ず。同じ様

有るを以て慶思ふべき也。」摂政申して云はく「早く日を定めらるべし。」者り。慶の由を申して退下す。

▲B「未時、御出す。五番。東宮（＝敦良親王）参上す。其の儀、常の如し。事了りて還御す。東宮、又、下り給ふ。太后（＝彰子）、御物忌に依り、南殿に御さず。東宮、弘徽殿に着し、宮の御前に参入し給ふ。

供奉する公卿等を、殿の東廂に召し、酒肴を給ふ。本目の本意に非ず、早卒の事也。突重等合はざる也。御衣を以て、公卿に給ふ。摂政の祿は、左大将（＝藤原教通）取る。右府（＝藤原顕光）の祿は、我（＝藤原道長）取りて云はく「子孫、□らるは堪へ難し（子孫被□難堪）。」と云々。興

の気色有り。我、着座せず。候ずる公卿廿一人に、御衣を以て、皆給ふ。忽事に於いては甚大也。事了りて還御す。女方（＝源倫子）相具して退出す。中宮大夫（＝藤原道綱）・按察大納言（＝藤原齊信）・源大納言（＝俊賢）、又、子等、摂政を初と為て来たる。自余の人々、五・六人

計来たる。

▲C「吉平（＝安倍）を召し、立后の日を勘へしむ。「十月十六日。」者り。

惟憲朝臣（＝藤原）を以て、定文を書かしむ。深更、人々退出す。

此の日、天陰るも、雨降らず。入夜、時々微雨降る。

②『御堂関白記』寛仁二年十月五日条（▲A C）

▲A「女御（＝威子）退出」

▲B「立后の兼宣旨」

▲C「女御の為の修善」

▲D「近衛御門（＝源明子）、法性寺五大堂に詣づる事」

五日、甲午。

▲A「女御（＝威子）、内より土御門に出づ。

▲B「未前、宿所（＝土御局）に候ずる間、經通朝臣（＝藤原）仰せて云はく「女御を以て、后と為すべき日時、申定むべし。」者り。左大将（＝教通）を以て、祿を授けしむ。「女装束。」承はる由を奏す。

亥時、筆を上宿所（＝土御局）に寄す。上達部、大納言以下十三人来る。上東門より出で、土御門の寢殿に御す。上達部・殿上人の座、西対の唐廂に儲く。両三献の後、殿上人の被物、例の如し。上達部に為さず。内の女方十九人送來たる。典侍に女装束、掌侍に綾の褂・袴、命婦に白褂・袴、藏人（＝女藏人）に白袴、授け了りぬ。

▲C「此の日より、心替を以て、女御の為に修善せしむ。

▲D「此の曉、近衛御門（＝源明子）、法性寺五大堂に詣づ。院（＝小一条院敦明親王）、同じく参り給ふ。

③『日本紀略』寛仁二年十月五日条

五日、甲午。

弓場始。

今日、女御尚侍藤原威子、立后すべき宣旨を蒙る。上東門第に出づ。

今日、駒牽有り。

④『小右記』寛仁二年十月六日条（+2）4

+1「季武（＝水取）、原免せらるる事」

▼a「射場始」

+2「勅使（＝藤原経通）を以て、立后すべきを仰せらるる事」

+3「尚侍の退出の事」

+4「御書を女御に遣はす事」

六日、乙未。

宗相朝臣（＝藤原）を召遣はす。面して、季武（＝水取）の事を示す。若し一問を経ば、原免せられ難き歟。今年、殊に慎むべきの上、去る晦の夜、焚惑（＝火星）の変有り。「右大将、重く慎むべし。」と云々。仍りて密々に案内を宗相朝臣に仰す。朝臣（々々）云はく「別当（＝藤原頼宗）に申し、假を給はるべし。」者り。事理、故殺の者、假を給はるべからず。然而、殊に権議有り、優免すべき歟。従者の男の下手而已。

季武原免すと云々。

▼a 宰相（＝藤原資平）来たりて云はく「昨日申剋許、射場に出御す。大納言斉信（＝藤原）、中納言行成（＝藤原）・教通（＝藤原）・頼宗・能信（＝藤原）、参議兼隆（＝藤原）・道方（＝源）・頼定（＝源）・公信（＝藤原）・

通任（＝藤原）、三位中将道雅（＝藤原）、参議（一）資平。大殿（＝藤原道

長）並びに摂政（＝藤原頼通）、御後に候ぜらる。

+2 后位の事、藏人頭左中弁経通を以て、尚侍（＝威子）に仰遣はさる。

纏頭あり。

+3 今夜、尚侍退出す。諸卿、彼の直廬（＝上御局）に会す。入夜、大納

言俊賢、中納言経房（＝源）・実成（＝藤原）、彼の直廬に参る。主上（＝

後一条天皇）渡御す。

亥刻、上東門より退出す。大殿並びに摂政・大納言斉信已下、車の

後に相従ふ。皆、上東門より出で、上東門第に参る。饗饌有り。殿上

人等、纏頭あり。

季武の事、別当に伝示す。别当（々々）云はく『件の事、気色に依

りて進止すべし。未だ一問を経ざるの間に優免するは、亦、何事か有

らむ乎。』初め仰する所、極めて奇怪也。〔者〕と云々。

+4 入夜、宰相来たりて云はく「今日、大殿に参る。大納言斉信・公任

（＝藤原）、中納言、宰相、首を挙りて参入す。此の間、御書を女御の

御許（々々）に給ふ。〔尚侍〕御使（＝源定良）。中納言已下通に勧盃す。

事、未だ了らざるに罷出づ。』

⑤『御堂関白記』寛仁二年十月六日条（▲A）

▲A「内（＝後一条天皇）より御使（＝源定良）有る事」

六日、乙未。

▲A 内（＝後一条天皇）より御使有り。定良（＝源）。寝殿、西より第三間に、座を設く。左大将、御書を取る後に着座す。上達部十余人、彼の座の辺に到着す。盃を進る。按察大納言（＝斉信）・源大納言（＝俊賢）、渡殿に在り。御返事あり。女装束を授く。小舎人は二足。勅使（使×）

立つ後、渡殿の座に着し、盃を進る。

⑥『小右記』寛仁二年十月七日程(+124)

+1「一家三后の事」

▼a「行幸の日時勘申」

+2「行幸の日、御馬を馳すべき間の事」

+3「維摩講師の辞退の事」

+4「立后の日、始祖の大臣(藤原鎌足)の遠忌に相当たる事」

七日、丙申。

+1みのおわりばかり

已終許、大殿(道長)に参る。宰相(資平)、相従(々従)ふ。太閤(道長)、馬場に坐す。仍りて直ちに進む。工匠数多营造す。亦、石を立てらる。奉謁の次に、一家三后の事を申す。未だ曾て有らざる而已。

▼a 行幸の事を命す。「廿・廿二日(々二日)の兩日勘申す。廿日は、遠行を忌む。陰陽家、忌無かるべき由を申す。然而、廿二日は吉日なり。仍りて彼の日に行幸有るべし。」余申して云はく「主上(後一条天皇・太后(彰子)・東宮(敦良親王)、御すべき也。尚、優吉日を用ひしむるが、尤も善かるべき歟。」太閤云はく「太后、同輿し給ふべき行幸なり。即ち青宮(敦良親王)渡り給ふべし。」者り。

+2 又、御馬を馳せらるべき事を申す。命じて云はく「康保二年等の例に依り、競馬有るべからず。左右の御馬各十疋並びに駒各十疋、馳すべし。」者り。余申して云はく「当年、駒、馳せらるべし。而るに駒牽の御馬、馳渡すべきに非ずと云々。官馬の外、龍駒と云ふと雖も、他の蹄を以て、天覧に備ふるは、本意無かるべし。就中、御馬乗の官人已下廿人、然るべき者無し。極めて便無かるべし。之を如何為む。」

命じて云はく「最も然るべき事也。前例有るに依り、駒を馳すべきの事を略定する也。当日に臨み、左右馬寮、事由を奏せしむるが宜しかるべし。」者り。

+3ゆいまこうじ

維摩講師安潤の辞退云々を申す事、昨、彼是の卿相云はく「今日、辞退す。」と云々。余申して云はく「俄かに辞退有れば、専寺の僧を以て、宣旨を下さるるが便宜有る乎。」命じて云はく「然るべき事也。」余申して云はく「誰等の間乎。」命じて云はく「上臈と謂へば長保、下臈と謂へば経救・永昭等の間歟(口)。」者り。

小、時、入夜り、宰相(資平)来たりて云はく「摂政殿(頼通)に参る。維摩講師の安潤の辞書、之を進る。摂政、大殿(道長)に持参す。」と云々。

+4 安潤の辞退の事、扶公僧都の許より、之を告送る。

又、云はく「十六日、立后すと云々。彼の日、始祖の大臣(藤原鎌足)の御忌日。便無かるべき歟。大殿に洩達すべし。」者り。漏申すべき事に非ず。

⑦『御堂関白記』寛仁二年十月九日程(▲A)

▲A「御使の事」

九日、戊戌。

+Aよにいり 入夜、内より女御の方に、御使有り。藏人範国(平)。

⑧『小右記』寛仁二年十月十四日程(▼a c)

▼a「立后の日の参入の剋限」

b「大殿(道長)、馬を牽く事」

▼c「大殿、新后の大夫等を命せらるる事」

十四日、癸卯。

▼a「召使申して云はく「大外記文義朝臣（＝小野）申さしめて云はく『明後日の巳時以前に参入すべし。』」者り。〔立後の日敷。其の由を申さず。召使申漏らす歟。〕」

▼b「入夜、宰相（＝資平）来たりて云はく「今日、摂政（＝頼通）及び諸卿、多く大殿（＝道長）に参会す。冊余疋の馬を牽かしむ。殿下（＝道長）・摂政・左大将（＝教通）の隨身等を騎らしむ。上下猥雑（×挿）し、宛も夢想の如し。」と云々。

▼c「四条大納言（＝公任）の御消息の状に云はく「新宮の大夫は按察大納言齊信、権大夫は新中納言能信。」者り。一昨、大殿命せらるる所也。

⑨『小右記』寛仁二年十月十五日条（▼b）

▼a「隨身に行幸の装束料を賜ふ事」

▼b「公卿等、立後の事に奔營する事」

十五日、甲辰。

▼a「絹十三疋、隨身等に賜ふ。〔番長は三疋、近衛は二疋。行幸の装束料。〕」

▼b「臨昏、宰相（＝資平）来たりて云はく「大殿（＝道長）に参る。卿相、首を挙りて参会す。東西奔營、終日、間無し。」と云々。

⑩『小右記』寛仁二年十月十六日条（+1）5、▼a（h）

+1「立後の事（女御威子）」

▼a「中宮（＝妍子）を皇太后と為す事」

+2「仰詞の相違に依り、太閤（＝道長、左大臣（＝顕光）を罵辱する事」

+3「実成卿、宣命使為るに依り、右大臣（＝公季）、列に立たれざる事（父子の間）」

▼b「列立の事」

▼c「宣命宣制」

+4「宮司の除目の事」

▼d「大夫奏慶・下名」

▼e「啓陣」

▼f「御前の事」

▼g「本宮の拝礼」

▼h「本宮の饗」

+5「太閤（＝道長）の和歌の事」

+1十六日、乙巳。

今日、女御藤原威子を以て、皇后に立つるの日也。〔前太政大臣（＝道長）の第三娘。一家に、三后を立つるは未曾有なり。〕小衰日に依り、諷誦を清水寺に修す。亦、僧等に読経せしめ、祈願を致す。又、金鼓を打たしむ。

▼a「宰相（＝資平）同車して参内す。〔已二刻。〕卿相、未だ参らず。小ありて、左・右大弁（＝道方・朝経）等参入す。日午、右大臣（＝公季）及び諸卿参入す。藏人右少弁資業来たり、右大臣に仰せて云はく「中宮（＝妍子）を皇太后に、女御威子を皇后に、其の宣命を作らしむべし。」者り。即ち左大臣（＝顕光）参入す。右大臣、案内を左大臣「顕光」に触る。即ち起座す。上臈参入の由を奏せしめむが為歟。

+2「未だ左右の仰有らざるの間、左大臣、大内記義忠（＝藤原）を召し、立後の宣命を進らしむ。即ち其の草を進る。彼是云はく「右大臣、已に仰を奉はり了りぬ。縦ひ内々の仰有りと雖も、当日の仰に依り、宣

命の事を仰すべき歟。」〔或云はく「左大臣、仰を承はらず。皇后

（＝賊子）を皇太后にと、宣命を作るべきの由、内記に仰す。」と云々。

仍りて大殿（＝道長、此の由を聞き給ひ、左大臣を罵辱せらるるの詞、

敢へて云々すべからず。）太だ前例に違ふ。此の間、資業、宣命の趣

を左大臣に仰す。便ち資業に付し、草を奏せしむ。〔摂政に奉らるる

歟。午終未始歟。〕即ち清書すべきの由を仰せらる。清書、亦、

奏す。返し賜はり了りぬ。

宣命使の納言の事、資業を以て気色を候ぜしむ。〔大殿早参す。此

の如き事を与奪せらると云々。〕「右衛門督実成〔中納言〕奉仕すべ

し。」者り。右大臣云はく「子（＝実成、宣命使為り。父（＝公季）、拜

礼を致すは、便無かるべき歟。」案内を申さる。仰に依りて列立せず。

近仗、中儀を服す。〔胡床を立てず、縫腋・壺胡録（壺胡録）等也。〕

此の間、宸儀（＝後一条天皇）、南殿に出御す。〔大殿・摂政（＝頼通）・右

大臣、南殿の簾中に候す。〕下官（＝藤原実資）及び諸卿、敷政門より出

で、外弁に向かふ。鳥曹司に於いて、靴を着して着座す。床子を立つ

るに、式筥を置かざるは、違例と謂ふべし。

外記を召し、大舍人・式部・彈正並びに刀禰の候不を問ふ。申して

云はく「皆侍り。」者り。早く列を引くべきの由を仰す。其の程（＝

程）幾ばくならず、承明・長樂・永安・建礼等の門を開く。〔右兵衛

は空陣。建礼門の西扉は開かず。仍りて左陣（＝左兵衛）開く。其の後、

右の官人・兵衛両三、陣を立つ。内弁（＝左大臣）、舍人を召す。大舍

人称唯す。少納言惟光（＝藤原）参入す。余起座し、左兵衛陣（＝宣陽

門）の頭に進立つ。次第に列立す。惟光還出づ。召を伝へ、幔の後に

退入り、更に幔の東の頭に進立つ。上達部、左兵衛陣の南の頭に到

り、次第に揖して参入す。惟光、人毎に待ちて揖す。太だ奇怪也。前

例を知らざる歟。諸卿、標に就く。刀禰、只三人、列に立つ。〔四位

吉平（＝安倍・五位吉昌（＝安倍）・文高（＝惟宗）、皆、陰陽家なり。〕

立定まり了りて、内弁、右衛門督を召す。称唯して参上す。宣命

を給はり、下殿し、軒廊の西二間に留立つ。〔北に退く。〕次いで内弁、

殿より降り、列に立つ。次いで宣命使、宣命の版位に就く。宣制兩

段。群臣、段毎に再拜す。了りて宣命使、左廻し、本列に復す。〔其

の道、直ちに南行し、列に復す。若しくは元道を経て、列に復すべき

歟。大臣及び上臈の列の上を度り、列に復するは、頗る便宜無し。前

例有（＝）るべし。大納言齊信云はく「兩説有り。」者り。〕次いで左

大臣已下退出す。〔大臣、幔の南を経るは、例を失す。余已下、入る

儀の如く、幔の北より退出す。〕鳥曹司に向（＝問）かふ。鞞を脱ぐ。

東閣門より入り、陣に復す。右大臣、陣の壁後に在り。密語りて云

はく「内弁、須く刀禰を召すべし。而るに『侍従〔マウチ君達〕召

せ。』と宣る。大殿驚奇せらる。」と云々。

藏人頭定頼（＝藤原）、摂政の御消息を両府（＝顯光・公季）に伝ふ。

〔立後の宣命の事、藏人頭、上臈に仰すべき歟。重事に至りては、藏

人を以て仰せられ、軽事は頭を以て示さる。爰に頭は輕、藏人は重と

知る。左中弁経通、維摩会に参り、未だ帰らずと云々。〕兩府、即ち

彼の御宿所に詣でらる。小後、諸卿参入す。兩府・左大弁道方、摂

政の前に於いて、中宮の宮司（々司）を任ず。〔大夫は正二位藤原朝臣

齊信【兼。大納言・按察】、権大夫は従二位藤原朝臣能信【兼。権中

納言】、亮は正四位下橘朝臣則隆【兼。但馬守】、権亮は従四位下藤

原朝臣兼房（兼）、大進は従五位下藤原朝臣公業、権大進は従五位下

源朝臣為善【兼。三河守】、少進は藤原頼文【兼。雅樂助】、権少進

は藤原（一）明通。大属は江沼元明【兼。主計允】、少属は惟宗行政

【兼。木工属。】、権少属は為信【兼。主計属。】。左大臣、除目を笏に取副へて退出す。「大殿の命に依り、摂政の前に於いて、便ち清書す。事を早めむが為歟。」

左大臣云はく「啓陣の事を召仰せ。「早く罷出づべし。除目は、納言下給ふべし。」者り。彼是云はく「除目を給ふの後、啓陣の事を召仰せらるるの例也。」大臣諾す。外記を召す。宮に、除目を納む。外記に給ひ、陣に復す。已次、相従ふ。

此の間、斉信・能信卿、宣仁門より入り、階下を経て、射場に進みて奏慶す。「両卿は昇殿の人也。南殿を通り、射場に進むべき歟。」即ち元道を経て退出す。

左大臣、式部丞を召し、下名を給ふ。「まうこ（万字古）」「まけたまふ（万計給）」等の詞、誤無し。」

次いで膝突二枚を敷かしむ。六衛府の将・佐を召し、仰せて云はく「中宮の啓に侍れ。」（可仰）「啓陣に侍れ」と仰すべき歟。先づ左右の近、次いで左右の衛門。右衛門参らず。左兵衛佐惟任（藤原）、螺鈿剣を着す。太達例なり。上達部、隠文帯・螺鈿剣を着するの例也。右衛門参らず。仍りて外記に之を仰せらる。」

次いで左右大臣已下、敷政門より出で、新宮（威子）に参る。「初め左大臣参るべからざる由を陳べらる。而るに忽ち其の詞を変へて参らるるは如何。俊賢卿云はく「今日、俄かに宮の少進を申さるるに、許容無し。仍りて忿怒して陳べらるる所也。」上官、御前（前驅）を奉仕すべき歟。其の由、俊賢卿に示す。答へて云はく「上官、思失なふ歟。」者り。大臣、敷政門より出づるの時、上官、御前を奉仕す。大臣留まるの例也。

左大臣已下、新宮に参着す。「上東門院。〔宮司・御傍親の卿相、

先に参る。〕亮則隆朝臣を以て、事由を啓せらる。「大夫云はく「先に参り、宮司の慶を啓せしめ了りぬ。又、此の列に立つは如何。」者り。余答へて云はく「彼は宮司の慶也。此の度は、諸卿を引かれ、拝礼を致すべき歟。」俊賢卿、余の陳ぶる答旨と同じ。仍りて大夫・権大夫列す。」帰出で、令旨を伝仰す。左大臣已下、西中門より入りて列立す。「西上。」侍従列せず。再び（拜）催さしむるも、遂に参列せず。

太閤（道長）、御簾に於いて、数度高声に催仰せらる。「拝礼了りぬ。次第に東対に着す。（母屋。北上对座。上古は廂の座と云々。侍従

は南の母屋の廂、西上北面。五位侍従は南廊に在り。）件の対は、簾を懸けず。四尺の屏風を立て、高麗端畳を敷き、茵・円座を敷かず。侍従の座は、紫端畳を敷く。先是、皆、饗を居う。机。一献。

〔摂政、大夫斉信。〕二献。（左大将教通、権大夫能信。）三献。（皇太后宮権大夫経房、左衛門督頼宗。）一献、勧盃了り、摂政着座し、皇太后宮大夫道綱着座す。（道綱卿、腰痛を称して参内せず、直ちに宮に参る。）五・六献、上達部勧盃す。此の間、采女、御膳を供す。

了りて菅円座を南面の簀子（御前）に敷き、公卿を召す。摂政已下参入して着座す。次いで衝重を居え了りぬ。太閤、盃を執り、上頭に進居す。摂政、座を避け、右大臣に向居す。已に行酒の道無し。地を経て、南階より昇る。便に用ふる歟。次々の勧盃の人、已に其の道無し。仍りて衝重を撤す。南階の東腋に、座を敷き、伶人を召し、衝重を給ふ。卿相・殿上人等絃歌す。人々相応じ、堂上・地下、糸竹同声す。三・四巡の後、太閤戯れて云はく「右大将（実資）、盃を我が子（摂政也。）に勧むべし。」余、盃を執り、摂政に勧む。摂政（々々）、左府に度す。左府（々々）、太閤に献る。太閤（々々）、右府に度す。次第に流巡す。次いで禄を太閤已下に給ふ。（大樹。）

太閤云はく「祖の子の祿を得るは有るや。」と。又、伶人に祿を給ふ。太閤、下官（＝実質）を招呼びて云はく「和歌を読まむと欲す。必ず和すべし。」者り。答へて云はく「何ぞ和し奉らざらむ乎。」又、云はく「誇りたる歌になむ有る。但し、宿構に非ず。」者り。「此の世をば我世とぞ思ふ望月の虧けたる事も無しと思へば。」余申して云はく「御歌、優美也。酬答するに方無し。満座、只、此の御歌を誦むべし。元稹の菊詩、居易（＝白居易）和せず。深く賞歎す。終日、吟詠す。」諸卿、余の言に響心し、数度吟詠す。太閤和解し、殊に和するを責めず。夜、月明深し。酔を扶け、各々退出す。

今日参入する卿相、内大臣（摂政）・左大臣・右大臣・皇太后宮大夫道綱・余・中宮大夫斉信・太皇太后宮大夫俊賢・左大将教通・左衛門督頼宗・皇太后宮権大夫経房（×方）・中宮権大夫能信・右衛門督実成・伊予守兼隆・左大弁道方・右兵衛督公信・修理大夫通任・右大弁朝経・侍従資平。大納言公任・中納言行成参らず。故四条（＝藤原遵子）の宮司に依り、避くる所有るに依ると云々。左兵衛督（＝頼定）、煩ふ所有りて参らずと云々。

⑪『御堂関白記』寛仁二年十月十六日条（▲A（K））

- ▲A「立后の事」
- ▲B「内弁を改むる事」
- ▲C「宣命の草・清書」
- ▲D「宣命宣制」
- ▲E「宮司の除目」
- ▲F「本宮の拝礼」
- ▲G「本宮の饗」

▲H「御調度の勅使」

▲I「冊命の勅使」

▲J「典侍等の女房参入する事」

▲K「太皇太后宮（＝彰子）の御使」

▲L「十六日、乙巳。」

▲A「此の日、立后の宣命有り。時は午。」

早朝、摂政（＝頼通）来らる。然るべき雑事を行なひ、大内に参る。示して云はく「余（＝道長）、参る事、遅々すべし。早く行きて具へ、相待たるべき者也。」

▲B「午時、左大臣（＝顕光）遅参す。仍りて右大臣（＝公季）、宣命の事を承はる。即ち左大臣参入す。右大臣、此の由を奏す。左大臣、本目、之を承はる。仍りて改仰す。」

▲C「草・清書等を奏す。」

▲D「了りて南殿に御出す。内侍、檻に臨む。左大臣参上す。開門す。關司、座に居す。次いで舍人を召す。少納言（＝惟光）進む。仰す。『大夫達召せ。』須く『刀禰』と召すべし。是、大失也。次いで公卿・侍従列立す。右衛門督藤原朝臣（＝実成）を召す。参上す。宣命を給ふ。其の儀、常の如し。了りて退出す。右大臣、列に立たず。右衛門督の使爲るに依る也。簾中に候ず。還御す。余、即ち退出す。」

▲E「宮司の除目。摂政の宿所に在りと云々（々×）。『両大臣（＝顕光・公季）来らる。』者り。」

▲F「自余の事行置く。先づ摂政参る。次いで大夫（＝斉信）・権大夫（＝能信）・亮（＝則隆）等、慶の由を啓す。次いで諸卿参入す。亮則隆を以て、慶賀の由を啓せしむ。即ち御椅子に着す。（理髮。草鞋を着す。）諸卿列立す。（西上北面。）再拝し了りぬ。」

▲G 東対の座に着す。女方、皆、理髪す。五・六巡の後、采女、御膳、東北の渡殿（殿×）の簀子並びに寢殿の東・南の簀子を経て、之を供す。御大盤。〔台を加ふ。〕

女方八人理髪し、昼御膳を供する料の大床子、之を供す。供し了り、御髪を理へ乍ら、之に着す。後に、円座を簀子に敷く。上卿を御前に召す。衝重を給ふ。又、階下に、伶人を召す。数曲。数献の後、禄を給ふ。大掛一重。此に於いて（於■此、余、和歌を読む。人々、之を詠ず。事了り、分散す。

▲H 御倚子は、掃部寮、之を供す。毯を加へざるに依り、家に候ふもの、之を用ふ。大床子は藏人所より、御挿鞋は内藏寮、之を供す。余、内より出づ。御倚子・大床子を立てしむ。御倚子は、昼御座を撤し、之を立て。大床子は、御帳の東に立つ。大床子の御使藏人頼宣（＝藤原）、禄を給はる。綾の掛・袴。

▲I 内（＝三条天皇）より（□）、定頼朝臣、御使に参る。宣命有るべき由なり。簾の前に召し、大掛・袴を給ふと云々。

▲J 此の曉、内の御乳母修理（＝藤原基子カ）・宰相（＝藤原豊子）等の典侍参入す。修理典侍は、御髪を理ふ。宰相典侍は、陪膳を奉仕す。送物は、各銀の小宮一双。薫香を入れ、銀枝を付す。火取。銀の籠を加ふ。各、地蒔の螺鈿。蒔絵の細櫃。女装束を入る。〔縫はず。裏在り。〕永絹、各十五疋。退出するに、車に入る。参入の掌侍は、女装束・絹七疋。自余の女方は、白の掛・袴・絹五疋。髪上・繖・御額の者は、白の掛・袴・絹三疋。我着する柏等、之を給ふ。留候する摂政以下、之に応ず。吉志命婦と云ふ者、古きは、只、是一人也。自余の者四人は、掛一重・絹二疋。采女は、白の掛。

▲K 太皇太后宮（×皇太后宮（＝彰子）より、御使と為て、亮左近衛中将兼

綱（×経）（＝藤原）、御額並びに御装束を奉らる。綾の掛・袴を給ふ。即ち、之を着す。皆、白なり。

⑫『左経記』寛仁二年十月十六日条（※12、▽a）h）

▽a 「南殿の装束」

▽b 「宣命の草・清書」

▽c 「陣を引く事」

▽d 「宣命宣制」

※1 「摂政（＝頼通）の直廬に於いて宮司を補する事」

▽e 「啓陣」

▽f 「本宮の拝礼」

▽g 「本宮の饗」

※2 「藏人方の御物の事」

▽h 「太皇太后宮（＝藤原彰子）の御使」

▽a 上文 南廂、西第三間より六間に至り、之を立つ。母屋の南に副へ

て立つる也。卯・酉、妻と為す。又、第六間の御簾に副へ、殿の北障子に至（×ま）り、数帖を立つ。子・午、妻と為す。第三間の西に、一帖を立つ。子・午、妻と為す。〔已上、五尺（×人）の馬形の御屏風。〕御屏風の内に、広・長筵等を敷満たす。中間に、大床子二脚を立て、御座（×簾）と為す。〔移代・鎮子等有り。〕御帳の戌亥の方の障子の下に、御屏風を立て廻らす。其の中に、御倚子を立て、御装束所と為す。〔凡そ相撲の装束の如き也。〕同じ廂の東第三間に、兀子を立て、内弁の座と為す。〔南中央に廻らし、之を立つ。〕又、階下に座を敷く。次いで主殿に仰せ、宜陽殿の御座の蓐の上に、幔を懸く。兼ねて又、軒廊の北庭、弓場の南、右近陣の前の棚（×棚）等の庭に、幔

等を立つ。次いで中務、宣命の版位を置く。「尋常版の北一許丈。」次いで式部、公卿以下の標を庭中の左右に立つ。「(件の二省、日華門より入る也。)」

次いで右大臣(＝公季)、陣座に於いて、藏人右少弁資業をして、宣命の草并びに清書等を奏せしむ。「此の間、左大臣(＝顯光)参らる。仍りて事由を奏せらるるの後、内弁の事、左大臣行なはる。』

群卿、外弁に着せらる。午刻に及び、御出す。左右近の將曹各一人、中・少將以下を率ゐ、日・月華兩門より陣す。南階の東西に、陣を立つ。諸陣、中儀を服す。中・少將等、縫腋・壺胡錄(壺胡錄)・靴等を着(着)。す。

次いで内侍、檻に臨む。内弁、兀子に着す。「(先づ、青璣門(＝青鏤門)の内に於いて、靴を着す。宣命を笏に副へ、東階より昇る。経るに簀子の南(＝画)を以(＝北)てし、之に着す。』次いで左右近衛將曹各一人、近衛各八人を率ゐ、南に趨り、承明(＝永明・長樂・明)永安等の門を開く。「(左右近衛各二人陣す。長樂・永安兩門に、陣を立つ。』左右兵衛、建礼門を開く。次いで闇司二人、殿の西より出で、承明門の左右の腋(＝塾)の草塾に着す。次いで内弁召す。宣る。「刀禰召せ。」少納言(＝惟光)称唯(称)して退出す。門前の幔の東の妻を経て、幔の外(＝出)に立立ちて暫く休む。此の間、諸卿、外弁の座に立ちて列立す。少納言、門の南の壇の下に還立つ。王卿を召し、幔の外に還立つ。王卿以下、次第に南庭の標の下に参列す。次いで内弁、宣命使を召す。「(右衛門督(＝左衛門督)(＝実成)。」微かに称唯(唯)し、列を離る。軒廊の東二間并びに東階・南の簀子を経て、内弁の後方(＝頗る西面に倚る)の翼の方に立つ。内弁、左手を以て、宣命を給ふ。宣命使(々々使)、笏を挿み、宣命を給はる。右廻して退下

す。暫く、軒廊の西第二間の北辺に立つ。内弁起座す。簀子并びに軒廊の東二間を経て、庭中の標の下に立つ。次いで宣命使、廊の西二間を経て、南に行く。日華門の北扉に当たり、南に面し乍ら揖す。更に西に折れて行き、版位に立ちて揖す。右手に、宣命を持ち、「(胸に当てる。』右に寄せ、宣命を開きて挙ぐ。宣制一段。群臣再拜。又、一段(＝)。再拜し畢りぬ。(奏宣命奉、宣制一段、群臣再拜、又段、再拜了)宣命を巻き、笏に副えて揖す。左廻し、列の西の弁・納言の後を経て、本の位に帰立つ。公卿以下、一々退出す。次いで還御す。

次いで摂政(＝頼通)の御直廬に於いて、除目有り。「(宮司(＝宮司)等を任ぜらるる也。左右大臣(＝顯光・公季)并びに執筆の左大臣(＝道方)許候ぜらる。自余の人々、便所に候ぜらるる。』畢りて上卿以下、左仗の座に帰着す。式部を召し、下名を給ふ。

次いで陣の官人に仰せ、膝突を敷加へしむ。外記に仰せ、諸衛の官人等を召す。「(將(＝時)・佐等参る。』中宮(＝藤原妍子)に啓陣参るの由を仰す。

次いで諸卿、侍従等を率ゐ、中宮に参る。「(午時。御簾□□御殿。』西中門の外に於いて、宮司(＝橋則隆)をして事由を啓せられしむるの後、庭中に列立す。「(王卿一列。侍従、列せず(＝)。西上北面(＝東上北面)。」拜し畢り、一々着座す。

一献。「(撰政殿。瓶子は権亮兼房。大夫(＝齊信)。瓶子は余。』二献。「(左大将(＝教通)。権大夫(＝能信)。」三献。「(左衛門督(＝頼宗)。皇太后宮権大夫(＝皇后宮権大夫)(＝経房)。」次いで汁物を供す。

五・六巡の後、召引有り、南の縁に着せらる。次いで衝重を着す。又、階下に、座を敷く。絃管の人々を召す。「(同じく衝重あり。』御延年有り。数盃の後、禄有り。「(諸卿は大褂。四位の侍従は疋絹。五位

は綿。繕（×僂）はず。」事^{こと}了り、上下分散^{かんさん}す。

右の饗^{けい}の座、東台^{ひがしのたい}の母屋に儲けらる。「北上^{きたがし}対座。赤木^{あかぎ}の机。」四位侍従は東廊^{とうろう}。「北上。東西（×画）対座。」同じ台の東廂^{とうしょう}に、殿上人の座を儲けらる。

※²今朝、使^しの藏人式部丞^{しやうじんしきぶしやう}藤頼宣^{とうよりののぶ}、御物等^{ごぶつどう}を中宮に奉らる。師子形^{ししかた}（×頭二頭、件^{くだん}の物、故女院^{こにょいん}（＝詮子）より渡さると云々。大床子二脚、掃部寮^{さうぶりやう}（×宮）。仍りて渡さるる也。」平文倚子一脚、〔布端〕御^ご挿鞋^{そうかい}一足。〔高麗〕^{こうらい}。

又、大宮（＝藤原彰子）より、使兼綱朝臣^{ついかんどうしん}（×高綱朝臣）、額^{ひたい}を中宮に奉らると云々。御使等、皆、被物有りと云々。

〔注1〕東山御文庫本および『大日本史料』による。以下同じ。

⑬『日本紀略』寛仁二年十月十六日条 十六日、乙巳。

宣命あり。皇后藤原妍子^{けんし}を以て、皇太后と為す。女御正二位（×從一位）藤原威子を以て、皇后と為す。即日、宮司を任ず。中宮と号す。

⑭『小右記』十月十七日条（+1）

▼a「大殿の目、殊に見えざる事」

+1「御書の勅使（＝藤原公成）、宮に参る事」

▼b「本宮の饗」（頭書）

十七日、丙午。

▼^a晩景^{ばんけい}、宰相（＝資平）同車し、中宮（＝威子）に参る。泉渡殿に於いて、大殿（＝道長）に奉謁す。摂政（＝頼通）及び諸卿参集す。大殿、清談^{せいだん}せらるる次に、目見えざる由を命す。「近則、汝^{なんじ}（＝実資）の顔、殊

に見えず。」申して云はく「晩景と昼時とは如何。」命せて云はく「昏時・白昼に因らず、只、殊に見えざる也。」

御書の勅使右中将公成（＝藤原）、先づ畳・茵を南面の簾の前に敷く。権大夫能信及び近習^{きんじゆしやう}の卿相、酒を勧む。此の間、秉燭^{へいしよく}に及ぶ。先是、卿相・殿上人等着座す。御書使、御返事・纏頭^{おんかえりごととてんとう}を取りて退出す。大殿呼び、殿上人の座に着し、食に就かしむ。三・四巡の後、事了りぬ。〔戌刻許。〕

参入する人、摂政、大納言齐信・俊賢、中納言行成、〔昨日以前、皇太后権大夫参らず。彼^{かれ}の大夫公任云（×三）はく「今日、参るべからず。」者り。親と疎との間敷。〕教通・頼宗・経房・能信・実成、参議（一）兼隆・道方・公信・通任・資平。

▼^b（頭書）今夜の巡行、大殿、下官^{げかん}（＝実資）に給ひ、摂政に奉らしむ。次々、例の如し。

⑮『御堂関白記』寛仁二年十月十七日条（▲A）

▲A「本宮の饗」

十七日、丙午。

▲^A上達部・摂政以下多く参る。東対の廂に、饌^{せん}を儲く。右近中将公成、御使に参る。座を敷き、之を召す。一兩献の後、殿上人の座に着す。又、之を召す。御返事並びに禄を給ふ。織物の掛・椅。

⑯『左経記』寛仁二年十月十七日条（※1）

※1「勅使の事」

十七日、丙午（丙午×）。

※¹参内す。次いで中宮（＝威子）に参る。内（＝後一条天皇）の御使^{おつかい}有り。

「權中將公成。数盃の後、禄有り。」次いで上達部・殿上人に、儲有り。

⑰『左経記』寛仁二年十月十八日条（※1）

※1「第三夜」

十八日、丁未（丁未×）。

※1 雨降る。晩景、大殿（＝道長）に参る。上達部・殿上人の饗、去夕の如し。事、晩に及び（×及事晩）、主殿の官人以下立明の者を御前に召す。疋絹等（ひけん）を給ふ。卅余人と云々。

⑱『小右記』寛仁二年十月十九日条（▼a）

▼a「昨日の本宮の饗」

▼b「馳馬奏の事」

十九日、戊申。

▼a 宰相（＝資平）来たりて云はく「昨日、中宮（＝威子）に参る。饗饌、一昨の如し。卿相参入す。大殿（＝道長）・摂政（＝頼通）、饗の座に出居す。」

▼b 右馬頭輔公（＝藤原）来たりて云はく「馳すべきの御馬六疋なり。

其の外は極めて異様なり。但し、代馬を立てむと欲するに、便無かるべき由、大殿の命有り。交易の御馬の同じ毛の馬を以てす。只、交易のム毛と載するは如何。此の由、昨日、大殿に申す。命じて云はく『何すべきの事乎。』者り。今日、案内を申す。進止すべきの由、答報じ了りぬ。』奏（＝馳馬奏）の事、当日、御監・頭・助等の署を加ふ。時刻推移し、明後日署し了るが宜しかるべきの由、之を仰す。件の奏、騎者を載すべからず。競馬の時、乗人・走馬（×徒馬）を注す。古の奏案に、出見さしむ。「件の事、大殿、鬱の御氣有り。」者り。仍りて奏

案等、覽じ了らば、持来たるべきの由を示し訖りぬ。

⑲『小右記』寛仁二年十月廿日条（+1）

+1「氏院（＝勸学院）の衆、中宮（＝威子）に参賀する事」

+2「行幸の召仰の事」

廿日、乙酉。

+1 早旦、宰相（＝資平）来たりて云はく「今日、勸学院の衆等、中宮（＝威子）に参り、慶を申すべしと云々。仍りて参入す。」者り。
+2 今日、太皇太后宮大夫俊賢、行幸（々々）の召仰の事を行なふ。

⑳『御堂関白記』寛仁二年十月廿日条（▲A B）

▲A「啓陣終了」

▲B「勸学院歩」

▲C「行幸の召仰」

廿日、己酉。

▲A 中宮の啓陣帰る。佐に掛一重、左衛門尉宗相（＝藤原）に単重、六位の尉・志・府生に各疋絹（×見）、舍人に例の祿。
▲B 勸学院の衆参る。東廊に、座を儲く。庭中にて拝礼す。少（×小）し東に寄りて着座す。上達部勸益す。

▲C 此の日、行幸の召仰あり。源大納言（＝俊賢）、之を行なふ。

㉑『日本紀略』寛仁二年十月廿日条

廿日、己酉。

勸学院の学生、皇后宮に参る。

②『小右記』寛仁二年十月廿六日条（▼a）

▼a「山階寺の慶賀の事」

+1「新后（＝威子）の入内の事」

▼b「入内の出車の事」（頭書）

廿六日、乙卯。

▼^a 山階（＝興福寺）の権別当僧都（＝扶公）来たりて語る次に云はく「晦

日、山階寺、中宮（＝威子）の御慶を申すべし。」

+1 西剋許、召使来たりて云はく「外記国儀（＝高橋）申して云はく『今

日、中宮行啓す。供奉すべし。』者り。所勞を称して参らず。

たそがれ 黄昏、宰相（＝資平）来たりて云はく「行啓に供奉す。」者り。余、

行幸より以後、痔病重く発る。行啓に扈從すること能はざるの事、左

將軍（＝教通）に達すべきの由、宰相に含め了りぬ。大殿（＝道長）に達

せしめむが為也。今朝、痔重く発る。重ねて頭弁經通の許に示遣はし

訖りぬ。

▼^b（頭書）今夜、新后、内裏に入り給ふ。出車を奉る。

③『小右記』寛仁二年十一月廿九日条（+1）

+1「山階寺の僧、中宮に慶を啓せしむる事（時に、禁中に御す）」

廿九日、丁亥。

+1 山階寺の権別当僧都（＝扶公）来たりて語りて云はく「昨日、山階寺

の僧等、中宮に御慶を啓せしむ。玄輝門の外に於いて、禄を給はる。」

者り。

翻訳哲学研究のための資料

——日本の哲学者による翻訳論——

上原麻有子*

本資料は、「翻訳哲学」という観点から日本哲学研究を深めるために作成したものである。「翻訳哲学」とは何か、また資料作成の意義は何かについて述べる前に、翻訳を巡る、以下のような前置きが多少必要かと思われる。

翻訳は、常に身近にある、文化的、社会的実践だと考えられる。外国の小説やエッセー、映画も、新聞、テレビ等で報道される海外のニュースもすべて、一般的な意味、あるいは広義の意味において、翻訳が実践としてなされたものであり、その産物としてのテキストなのである。翻訳がわれわれの生活を見えない所から支えているのだということに、まずは視線を向けておきたい。

その意味で、西洋文明を大急ぎで摂取した明治時代、翻訳の役割は、現代よりも一層具体性をもって認識されていたであろう。それは、日本が初めて西洋と本格的に接し、西洋の言語を真剣に学び、理解しなければなら

ばならなくなった時代であるからこそ、強調してしかるべきことなのだ。近代の日本語自体が、言文一致と翻訳相俟ってそこから生み出されたわけである。坪内逍遙、二葉亭四迷、森鷗外、あるいは上田敏らは、皆、翻訳し、翻訳論を残した。近代文学は、翻訳に培われたと言っても過言ではない⁽¹⁾。そして、文学における新しい文章のころみは、日本語の近代化を率先して引き受けたのである。

さらに一つ、近代日本における翻訳の貢献について、明治憲法の例を挙げておこう。草案作成の過程で、ドイツ人法学者ヘルマン・ロエスレルによる、ドイツ語の「日本帝国憲法草案」を日本語に翻訳し、夏島修正案が作成される。これに井上毅、ロエスレルの助言を加え、伊藤博文のもと憲法起草者らが集まり、再修正案を出して推敲し完成したのが明治憲法なのである⁽²⁾。

ところで、翻訳は実践とその成果の他、理論的、つまり翻訳批評的側面からも語ることができる。先に触れたように、文学者が翻訳論を唱えた例は多い。ただ、他国に比べ、日本の翻訳論は実践の多さに釣り合わないようである。おそらく、各小説家、詩人、思想家などの著した翻訳論は少ないためか、これまで体系的には取り上げられてこなかったのだろう。一九九一年刊行の、『日本近代思想大系 15』（岩波書店）収録「翻訳の思想」は、貴重な翻訳資料集である。明治初期の政治、法律、歴史、美学における主な翻訳と五人の思想家による各翻訳論に、注と問題を付し編集されている。また、二〇一〇年には、『明治初頭から戦時中までの日本の主要な翻訳論のテキスト三十一編』に、『翻訳学⁽³⁾』的観点から、欧米の翻訳研究とも比較対照した解題を加えた一冊、『日本の翻訳論——アンソロジーと解題』（法政大学出版局）が出版された。ここに名を連ねる翻訳論者の大半は文学者であるが、福澤諭吉、そしてジ

ジョン・スチュアート・ミルの *On Liberty* を翻訳した、高橋正次郎が含まれている⁽⁴⁾。しかし、厳密な意味で福沢は哲学者とは言い難く、また高橋自身が哲学者であったかは不明である。日本の哲学者による翻訳論というものが、アンソロジーとして編集された形跡は、今のところない。

そもそも、哲学の翻訳は明治初期から実践されてきたが、哲学者の翻訳論が話題になったことなどあるのか。あるいは翻訳について考察すること自体、哲学者の関心を引かないため、彼らはさほど論じてこなかったのだろうか。荻生徂徠が『訳文筌蹄』の中で示した「訳学」は、日本の翻訳論の草分けと見なせるが、珍しい例であろう。翻訳は哲学的範疇の問題には入り得ないというのが、日本の哲学者一般の理解なのかもしれない。私にとって「翻訳哲学」研究は、このような疑問が一つの出発点となり始まったのである。日本とは対照的に、欧米では聖書解釈の伝統の流れを汲んでか、哲学者が翻訳について深く考察し、まとまった分量の論述を行っている例が、歴史的に多数見受けられるのだ。

戦後では、ハイデガーが翻訳 (*Übersetzung*) を哲学的問題として解釈学的に説明し、「伝統」 (*Überlieferung*) と捉えた。古代ギリシャ哲学を自らの時代において再解釈したように、異なる時代に作品を移すことが翻訳であり、それが伝統となる、「翻訳は〈歴史〉の最奥部の運動に加わるのだ」とハイデガーは言う。また、デリダの *Des tours de Babel*「バベルの塔」(一九八五年) は、ベンヤミンの難解な翻訳論の解釈、解説を通して、脱構築により、原作と複製の関係性を、従来の翻訳的・二元論の枠組みを超えたものとして提示する。翻訳は言語間の補完的役割を担い、言語と言語の類縁関係を作り出す。孤独な状態にある言語は衰えてゆくが、言語同士が交差すれば、相互に成長し豊かになる⁽⁷⁾。翻訳を巡る諸問題は、リクルールにとっては言語学的、言語哲学的観点から、

自らの思索の中核をなすものであった。二〇〇四年には、九〇年代に執筆した三論考を収録した *Sur la traduction* (翻訳について) が出版されている。諸問題の一例として、翻訳不可能性と原作への忠実さについての考察がある。リクルールによれば、忠実さとは、秘密を明かしそうとする傾向を持ちながら、それに逆らって秘密を守る言葉の能力に忠実であることだという。つまり、他への忠実さではなく自らへの忠実さのことなのだ。そのことは、自言語内にあっても言葉で表現し尽くせない、あるいは説明し尽くせないゆえに問題となる。翻訳の問題は、そもそも同一言語において起っているのである⁽⁸⁾。

ところで、本資料の標題に掲げた「翻訳哲学」は、フランスの翻訳学における概念であるが、翻訳と哲学の近さを説いている。翻訳実践とは、正に哲学的行為に値するのである。私が、哲学者が翻訳に関心を抱くか否かに注目するポイント⁽⁹⁾は、そこにある。言い換えれば、哲学者の言葉に対する哲学的態度を知ろうということなのだ。

以上のようなことから、近代日本の、つまり、ほぼ明治から第二次世界大戦終了までの哲学者による翻訳論を取り敢えず収集してみるという目的で、この資料を作成した。そして、予想に反し、本資料のために選んだ京都学派の哲学者らが翻訳の根本的問題に思いのほか関心を寄せていることが明かになった。分量も論の深まりにも限界はあるが、垣間見た彼らの翻訳論を手がかりに、まずは彼らの哲学自体をそして京都学派の哲学を、翻訳哲学の側から照射し、新たなアプローチによって探究する道を切り開くことが期待できそうである。

紙幅の関係上、翻訳について語った哲学者を網羅したわけではなく、入手できた文献から検索し、次の七人に限定した上で、関連部分を抜粋した⁽¹⁾。また哲学者自身による翻訳書のある場合は、それも記載し

た(②)。今後も、資料を補足するための作業は続けなければならない。

*引用には、出典が旧漢字、旧仮名づかいの場合はそのまま採用しているが、一部の旧漢字は常用漢字に改めてある。

西周(一八二九—一八九七)

①

『萬國公法』(一八六八年) [Simon Vissering による国際法の講義記録 Volkerecht]

『心理學』(一八七五—七六年、一八七八—七九年) [Joseph Haven, Mental Philosophy: including the intellect, sensibilities, and will, 1857]

『權利争闘論』(蔵本がなづため、刊行されたか否かは不明) [Rudolf von Ihering, Der Kampf ums Recht, 1872]

『利學』(一八七七年) [(漢訳) John Stuart Mill, Utilitarianism, 1863]

②

西の翻訳への言及箇所は哲学的著作の全般に亘り多数であるため、ここでの引用は、次の四つに止める。

・「心理學翻譯凡例」(ヘブレン『心理學』の翻訳)『西周全集 第一卷』宗高書房、一九八一年、八—九頁]

本邦從來歐洲性理ノ書ヲ譯スル者甚タ稀ナリ是ヲ以テ譯字ニ至リテハ固ヨリ適從スル所ヲ知ラス、且漢土儒家ノ説ク所ニ比スル二心性ノ區分一層微細ナルノミナラス、其指名スル所モ自ラ他義アルヲ以テ別ニ字ヲ選ヒ語ヲ造ルハ亦已ムヲ得サルニ出ツ、故ニ知覺、記性、意識、想像等ノ若キハ從來有ル所ニ從フト雖モ、理性、感性、覺性、悟性等ノ若キ、

又致知家ノ術語觀念、實在、主觀、客觀、歸納、演繹、總合、分解等ノ若キニ至リテハ、大率新造ニ係ハルヲ以テ讀者或ハ其意義ヲ得ルヲ難ニスル者アラン、……篇章ノ首項ニ係ハル字眼等ノ若キハ、通篇唯一定ノ字ヲ用キ、上下文義ノ爲ニ已ムヲ得サル勢アルニ非レハ敢テ漫リニ他語ニ換ヘ意ヲ取リテ翻譯セサルヲ以テ、讀者其上下文義ヲ推シ、通篇前後ヲ照シテ之ヲ熟考セハ其旨趣ニ通スル亦難キニ非ルヘシ、是譯者ノ庶幾スル所ナリ

・「凡例」(フィセリング『萬國公法』の翻訳)『西周全集 第二卷』宗高書房、一九八一年、七頁]

翻譯ハイトカタキ業ニシアレハ大ナル訛謬ナクトモ意致ニ深淺ノ別ト文理ニ抑揚ノ差ヒトアルハ免レ難キモノナルヲヤ……

・『百學連環』(一八七〇年)『西周全集 第四卷』宗高書房、一九八一年、一四五—四六頁]

Philosophy なる文字は希臘の *φιλο* につゝ、英の love なり。又 *sophy* は *σοφία* にして、英の wisdom なり。其意は賢なるを愛し希ふの義なり。哲學を理學、或は窮理學と名つけ稱するあり。此學をヒロソヒーと呼ひなせし人は Pythagoras にして、即ち賢を愛し希ひ己レ賢となりたきの意を以て名附けし所なり。其後此の學を爲せる Sophist の仲間(偽學者)に於て、自から賢者となりて之を學ぶの意を以て Sophist と稱せり。然るに希臘に Socrates なる人ありて、始めのヒロソヒーと稱するを以て好しとし之に一定せり。ヒロソヒーの意たるは、周茂叔の既に言ひし如く聖希天賢希聖士希賢との意なるか故に、ヒロソヒーの直譯を希賢學となすも亦可なるへし。英國に於てはヒロソヒーと稱するを種々に廣く使ひなして、格物學を Natural Philosophy、或は Philosophy of Mechanical などと言へり。蓋シ英國に於てのミある所なり。ヒトソヒーの定義は Phil-

他 上 諸 學

Isophy ie the science of sciences とて、諸學の上たる學なりと言へり。凡そ事物に於て統轄の理といふものありて、必ずしも萬事に就て統轄せざるへからず。故にヒロソヒーは諸學の統轄にして、國民の國王に於けるか如く、諸學皆ヒロソヒーに至りて一致の統轄に歸せざるへからず。・『生性發蘊』（一八七三年）『西周全集 第一卷』宗高書房、一九八一年、三二頁]

哲學原語、英]フィロソフィ、佛]フィロソフィー、希臘ノフィロ愛スル者、ソフォス賢ト云義ヨリ傳來シ、愛賢者ノ義ニテ其學ヲフィロソフィト云フ、周茂叔ノ所謂ル士希賢ノ意ナリ、後世ノ習用ニテ専ラ理ヲ講スル學ヲ指ス、理學理論ナト譯スルヲ直譯トスレトモ、他ニ紛ルコト多キ爲メニ今哲學ト譯シ東洲ノ儒學ニ分ツ

中江兆民（一八四七—一九〇一）

①

『字國財産相續法』（一八七七年）[Fortuné Anthoine de Saint-Joseph' 原著の表題は不明]

『英國財産相續法』（一八七七年）[Fortuné Anthoine de Saint-Joseph' 原著の表題は不明]

『佛國訴訟法原論』（一八七八—七九年）[Edouard Bonnier, *Eléments de procédure civile*, 1853]

『民約譯解』（一八八二年）[漢訳] Jean-Jacques Rousseau, *Du Contrat social, ou principes du droit politique*, 1762]

『非開化論』（一八八三—八四年）[Jean-Jacques Rousseau, *Discours sur les Sciences et les Arts*, 1750' 土居言太郎との共訳]

『維氏美學』（一八八三—八四年）[Eugène Veron, *L'Esthétique*, 1878'

野村泰亨との共訳]

『理學沿革史』（一八八六年）[Alfred Fouille, *Histoire de la philosophie*, 1878]

『道德大原論—倫理學參考書』（一八九四年）[Arthur Schopenhauer, *Grundprobleme der Ethik*, 1841' Auguste Laurent Burdeau による仏訳からの重訳]

②

・『一年有半』（一九〇一年）『明治文學全集13 中江兆民集』筑摩書房、一九八四年、一七八頁]

翻譯は故森田思軒最も佳なり、……學漢洋を兼て、而して殊に漢學の根底有る者、之一人也、故に善く文字を驅使して左右皆宜し、之れに亞て涙香の小説頗る觀る可し、余涙香の譯せし所の原書、一も會て讀みたること無し、思ふに是れ痛く節略を加へたるものなる可し、而して絶て痕迹を見はさず、其裁緝の巧は又恐らくは他人の及ぶ所に非ず

井上哲次郎（一八五五—一九四四）

①

『世態開進論』（一八八〇年）[Ernest Francisco Fenollosa' 原著の表題は不明、和田垣謙三・木場貞永との共訳]

『哲學字彙』（一八八一年）[William Fleming ed, *The Vocabulary of Philosophy: Mental, Moral, and Metaphysical, with Quotations and References For the Use of Students* に基づき起稿' 附清國音符' 和田垣謙三・国府寺新作・有賀長雄との共編]・『改訂増補 哲學字彙』（一八八四年）[附梵漢對譯佛法語彙／清國音符、有賀長雄との共編]・『英獨

佛和 哲學字彙」(一九一二年)「元良勇次郎・中島力造との共編」

『倍因氏心理新説』(一八八二年)「Alexander Bain」原著の表題は不明

②

・「序」『哲学と宗教』(一九一五年)「井上哲次郎集 第5巻」クレス出版、二〇〇三年、二頁

翻譯事業の如きは、社會を益する所なきにあらずと雖も、實は高等通辯のみ。縦い哲學に關係ありとするも、哲學其者とは全く別ごとのみ。

西田幾多郎 (一八七〇—一九四五)

① 翻譯書・出版はなし。

②

・「問題は口語體の精鍊」(一九一六年)「西田幾多郎全集 第十九巻」

岩波書店、一九八〇年、七一八—七一九頁

余は此問に於ける口語體と翻譯體との區別を明に分らぬが、普通「何々である」といふ様な文體を口語體とすれば、現代の思想、感情を表はすには、口語體の文章を精鍊し、發展せしむるの外はないと信ずる。漢文體や國文體の文章にて現代の思想感情を自由に且つ適切に言ひ表はすことは困難であると思ふ。……口語體では威嚴がないとか、野卑だとかいふ人があるかも知らぬが、それは口語體其物の罪といふよりも、寧ろこれに盛られたる思想感情の罪が多いのではなからうか。ローマ字を採用するか否やといふ如きことに就ては、余は國文學の假名遣など今日我等に随分六ヶ敷もあり、又我國に於ける漢字の讀み方などあまりに不規則、

亂雑であるから、此等の點は何とか改めねばならぬと思ふが、今直にローマ字を用ゐては、漢字によつて得たる便宜を一時失ふこととなり、思想の表現に非常な不便を感じるであらうと思ふ。

……現代の思想感情を自由に立派に書くことのできる様な口語體の文章を發達せしむるには漢文や國文を十分に咀嚼し利用すべきは言ふまでもなく、外國の哲學や文學のこなれた翻譯といふことも必要ではあるまいかと思ふ。現代の我等の思想は歐洲の文化に負ふ所が多いから、外國の哲學や文學の言ひ表はし方を學ぶことが我々の言語や言ひ表はし方を豊富にする一つの手段であると考へる。

・「木村素衛譯 フィヒテ著『全知識學の基礎』序」(一九三〇年)「西

田幾多郎全集 第十三巻」岩波書店、一九七九年、二一五頁

他の國語にて物せられた思想家の書を読み、深く之を理解するには、先づその國語に通ぜざるべからざるは云ふまでもない。まして我國の今日、フィヒテの哲學を理解し得る程のものの獨逸語を解せざるものも少かるべきにと云はれるかも知れない。併し大思想家の書を我國語に譯することは、單に他國語を知らざるものをしてその思想を理解せしめるのみでなく、我國語をしてその思想家の思想を語らしめることによつて、その思想に言表的生命を與へ、その思想をして我國に於て郷土的發展をなさしめることでなければならぬ。言語と思想とは離すべからざる内面的關係を有つて居る、生きた思想は自らそれ自身の表現を生み出さねばならぬ、生きた表現は自らそれ自身の思想を生み出さねばならぬ。フィヒテを我國語に譯することは、フィヒテに我國語的生命を與へることによつて、我國に於てフィヒテの思想を生み出すに資することではなければならない。フィヒテの譯はフィヒテを日本的に歪めるかも知れない。併しそれは一方から見れば却つてフィヒテを郷土化することではなければならない

ない。

・「桑原武夫譯『アラン 散文論』推薦の辭」(一九三四年)『西田幾多郎全集 第十九卷』岩波書店、一九八〇年、七三四頁]

ベルグソンの直観といふものは、私の考ではフランス哲學の底を流れるサンティマンとかサン・アンチームとかいふものの極度の發現である。而してそれは既にデカルトの合理主義にその源があると思ふ。アランのアンタンドマンでも、それは英語のアンダスタンディングでもなければドイツ語のヴェルスタントやヴェルヌフトでもない。

田辺元(一八五五—一九六二)

①

『科學の價值』(一九一六年) [Jules Henri Poincaré, *La valeur de la science*, 1905]

『物理學的世界像の統一』(一九二八年) [Max Karl Ernst Ludwig Planck, *Die Einheit der physikalischen Weltbilder*, 1909]

②

・「譯者序」(ポアンカレ『科學の價值』の翻訳) [岩波書店、一九二〇年、二—三頁]

余は氏の秀麗なる原文に對比して余の譯文の拙劣なることを殊に痛切に慚愧せざるを得ない。否啻に拙文意味の晦澁を來たしたのみならず、獨譯英譯との比較對照に依つて誤譯無きを力めたるに拘らず、余の力の不足なる爲めに意外の誤謬遺漏を犯せることなきを保し難い。

・「第四章『若きパルク』の詩の限界とその超克」『ヴァレリーの藝術哲學』(一九五一年)『田邊元全集 第十三卷』筑摩書房、一九七三年、

九二—九六頁]

以上で私は、ヴァレリーの詩『若きパルク』の全體を、解釈しつつ翻譯し終った。初は解釈を主として、その引證に詩句の拔萃翻譯を添へる豫定でゐたのであるが、實際に當つて見ると、象徵詩の抄譯引證といふことが、たうてい不可能なることを悟らざるを得なかった。それといふのは、全體から切離して部分を抜き出せば、もはや象徵の性格は喪失せられて、單なる記號に過ぎなくなるからである。記號はいはば有の有化に止まり、無の有化たる象徵ではないのである。無の有化としての象徵が成立するのには、かへつてその反對なる有の無化といふべき、二律背反的矛盾に由來する有の没落過程が、それを媒介するのでなければならぬ。このやうな交互的媒介の轉換的統一が、自己還歸の全體として、部分を無の有化たらしめるにより、これが象徵となるのである。この媒介を抽象してしまへば、象徵の象徵性は見失はれる外ない。象徵詩の拔萃といふことが不可能でなければならぬゆゑである。これに氣附いた私は、遂に意を決して全體を翻譯せざるを得なかつたのである。……その後菱山修三氏の譯のあることを友人から知らされたので、こんどはそれと私の譯とを對照して見た。さすがにみづから詩人である同氏の譯は、たうてい私の想ひも及ばない適切雅馴な譯語を自由に驅使してあるので、私はそのままこれを借用して私自身の譯語を改めた箇所がいくつかある。また佛語の解釈そのものに於て、私の誤謬を菱山氏の譯により氣附かせられた場合もあつた。……しかしながら、翻譯は同時に詩そのものの解釈と不可分離の關係にある。たとひ私が、今述べた如くいくつかの場合に於て、菱山氏の譯に教へられて私自身の譯に修正を加へたとしても、それは詩全體に對する私の解釈に牴觸しない範圍内でのことであるのはいふまでもない。ところで全體の解釈に於ては、菱山氏と私とはかなり

に相違する。氏の譯詩中には、私にとつて意味の不可解なる箇所がいくつかあつた。また詩全體の脈絡に於て、私には私自身の解釈が、それを一層正確明瞭に把握せしめると信ぜざるを得ない場合がなくもなかつた。とにかく私の譯はその成立上當然の事ながら、菱山氏の譯とは全然別箇のものであつたわけである。それで私は、同氏の譯の外に私の拙い譯も、一慶存在を要求し得るかと思つてこれを公にするのである。……

そもそも象徴詩が、ヴァレリイ自身の解した如く、言葉の意味と音調との對立の統一を、音調の諧和のために意味の明確を犠牲にしても追求するところの精神の作業であるとしたならば、言葉の音調の固有地盤なる夫々の國語から解き離して、同一共通の意味だけを媒介となし、一國語に於て作られた象徴詩を他國語に移すいはゆる翻譯といふものが、果して可能であると思惟せられ得るであらうか。もとより、言葉の音調を全く異にするフランス語の象徴を、日本語の翻譯に於て維持するとふ如きことは、たうていできない相談である。果してさうだとすると、象徴の移植は、音調の感覺的諧和の面に於て行はれるのでなく、原詩に於てこの側面を媒介にして展開せられた、「有の無化、即、無の有化」といふ辯證法が、感覺的表象を媒介にして他國語に移植せられることこそ、象徴詩の翻譯といふものであるといはなければなるまい。その際原詩の音調が象徴の形成に指導性をもつといふ事態が、翻譯に於て維持せられることは、例へば佛語と英語との間に於ける如き言語の系統的親近が存する場合に限るのであつて、佛語と日本語との間などに期待せられる筈のものではない。日本語の譯詩が、若し象徴の音調的諧和の側面を發揮することがあるとするならば、それはもはや原詩の同じ側面の維持なしに移植ではなくして、全く日本語自身の立場からの創造でなければならぬであらう。舊くは上田敏氏の『海潮音』から、近くは鈴木信太郎氏の

『近代佛蘭西象徴詩抄』に至る譯業は、この意味に於て尊敬すべき創造に外ならぬと思ふ。これこそまさに、翻譯即創造といはれるべきものである。ドイツ語で *Nachdichtung* といふのはその意味であらう。

さてこのやうな解釈と翻譯とは、その係はるものが象徴である以上は、必然に無の地盤に於て行はれるのであつて、決して單に一國語に於ける有の表現を、他國語に於けるその表現に移すところの、散文の翻譯と同じやうに考へることはできない筈である。無は決して有の如く既成的存在として客觀的に思惟せられるものではない。それはただ、有の自同的存在性が、その含む二律背反的矛盾性によつて崩壊に齎され、その没落壞滅の過程が主體の行為的自覺に顯はされることに於て成立するのである。この自覺の展開が概念の自己否定的運動に即して行はれる否定の論理が、すなはち辯證法に外ならない。従つてそれは「否定の論理」であると同時に、「論理の否定」でもなければならぬ。この後の側面が行為的主體的に自覺せられて、挫折即突破の超越作用により、ふたたび論理の肯定に轉ぜられ、いはゆる「否定の論理」に復活せしめられるのが、辯證法の回歸運動である。象徴はこの概念の回歸自己否定作用、すなはち「有の無化、即、無の有化」、を感覺的表象に結晶せしめるものに外ならない。それであるから、その内容は、決して直接なる表象そのものであるのではなくして、その自己否定即自己肯定なる概念の辯證法的運動にあるのである。すなはち表象の客觀的内容に於て直接に象徴性が成立するのではなくして、その概念的思惟が二律背反の結果、「論理の否定」に陥り、しかも却てそれが「否定の論理」に轉換復活せらるる辯證法の、主體的自覺に於て成立するのである。ここに象徴詩の翻譯に對して辯證法の有すべき獨特なる意味がある。何となれば、無の有化としての象徴は、直接に有の表象そのものに成立するのではなくして、有

の無化なる辯證法に媒介せられるのでなければならぬ以上は、辯證法を離れて象徴の成立は自覺せられる筈がないからである。單なる有としての表象を、語の媒介により、一國語から他國語に轉移せしめ、またその概念的思惟を、飽くまで客觀的基體の同一性に依據するものとして、必然的客觀的な内容に固定する自同性的論理に立脚せしめるところの散文翻譯の場合には、全く認められない辯證法の主體的自覺が、無の上に成立する象徴を根據附ける基盤として、その翻譯をも基底附けることは、當然でなければならぬ。それにより、辯證法が象徴詩の翻譯に對して發揮するその獨特なる意味は、疑を容れる餘地の無いものであると信ずる。

三木清（一八九七—一九四五）

①

『ドイッチェ・イデオロギー』（一九三〇年）[Karl Marx／Friedrich Engels, *Die deutsche Ideologie*, 1845-1846 執筆, David Borissovitch Riasanow 編, 1926]

『哲學とは何か』（一九三〇年）[Wilhelm Dilthey, "Das Wesen der Philosophie" (1907)・Edmund Husserl, *Philosophie als strenge Wissenschaft* (1911)・Max Scheler, *Vom Wesen der Philosophie und der moralischen Bedingung des philosophischen Erkennens* (1917)・*Vom Ewigen im Menschen* (1917) のマンロービー、戸田三郎、坂田徳男との共訳]

『省察』（一九四八年）[René Descartes, *Meditationes de prima philosophia*, 1641]

②

・「輕蔑された翻譯」（一九三一年）『三木清全集 第十七卷』岩波書店、一九六八年、一九五—一九九頁

我が國の學者は少くとも同國人のものをあまり讀まなさ過ぎるのではないか。

これには色々な理由があらう。しかしその一つが日本の學者の多くは自分の國の言葉を愛しないといふところにあるのは確かなやうに見える。言葉を愛することを知らない者に好い文章の書ける筈がない。悪文、拙文は我々の間では學者にとつて當然なことであると思はれてゐる。……然るに若し言葉と思想とが離すことのできぬ内面的關係をもつてゐるとすれば、このやうな事實は、少くとも一面に於いては我が國の學者に自分自身の思想を求め、形作らうとする衝動と熱意とが缺けてゐるといふことの證左でなければならぬ。……

……ドイツ哲學の發展の發端をなしたのはライプニッツであつたが、彼はその當時すさまじい勢でこの國へ侵入して來たフランス語に對し、また傳統的なラテン語に對して、母國語の價値に關するいくつかの文書を書いてドイツ人に警告し、ドイツ語をラテン語に代へて學術語として使用することを主張した。彼はドイツ語で哲學上の論文を書いた最初の人に屬してゐる。そのほか、彼はローマ法をドイツ語に翻譯してしまふことの必要を力説した。またヘーゲルが自分の思想を出来るだけ純粹なドイツ語で表現することに努め、ラテン語から來た言葉をさへ避け、寧ろ俗語を活用しようとしたのは有名な事實である。このやうにして、全くドイツ固有な言葉の意味を有するかの「ガイスト」（精神）の哲學が完成されるやうになつたのである。

哲學者ライプニッツもその必要を大いに認めた翻譯といふものの意味は、外國語を知らない者にその思想を傳達することに盡きるのではない。

思想と言葉とが密接に結合してゐるものである限り、外國の思想は我が國語をもつて表現されるとき、既にもはや單に外國の思想ではなくなつてゐるのである。意味の轉化が既にそこに行はれてゐる。このときおのづから外國の思想は單に外國の思想であることをやめて、我々のものとして發展することの出来る一般的な基礎が與へられるのである。翻譯の重要な意味はここにある。このことを考へるならば、翻譯でものを讀むといふことは學問する者にとつて恥辱でないばかりか、必要でさへあることが分る。

支那や日本に於ける佛教の發達の場合を見よ。この獨自な發達は原典ではなく、却つて翻譯書の基礎の上に行はれたのである。或ひはボエチウスによるアリストテレスのラテン譯が中世のスコラ哲學の發展に與へた影響、或ひは聖書のルッテル譯がドイツ文化の發展に及ぼした影響などを想ひ起すがよい。何でも原書で讀まねばならぬと思ひ込んでゐることが如何に無意味であるかが分るであらう。

然るに日本の學者の多くは何故かそのやうに思ひ込んでゐるのである。彼等は翻譯書を輕蔑することをもつて學者の誇であるかのやうに考へてゐる。なるほど、そのやうな翻譯も、翻譯たるの性質上、不正確、不精密を免れない。誤譯なども多い。しかしこのやうな缺點は語學者や註釈學者にとつては最も重大な性質のものであつて、自分で考へることを本當に知つてゐる者にとつては何等妨害とならないのみか、そのやうな不正確、不精密、誤譯から却つて面白い獨創的な思想が引出されてゐる場合さへあるのである。……

私は固より誤譯の出現を希望する者ではない。寧ろ正反對である。しかし私は今日學問する人が、先づもつと我々同志の書いたものに注意すると共に、次に日本語になつた翻譯書をもつと利用することを希望せず

にはゐられない。原書癖にとらはれて翻譯物を輕蔑し、折角相當な翻譯が出てゐるのに讀まないで損をしてゐる學徒も多い。どんなものでも原書で讀まうとしてゐるために、自分で考へる餘裕を奪はれてゐる人もある。なんと云つても翻譯なら速く讀める、その上翻譯書はその内容の要領を掴む點から云つても便利である。原書癖を矯正することによつて得られる利益は想像されるよりもずっと大きいだらうと思ふ。我々はまだまだ外國思想を移植する必要がある。けれどもこのことと原書癖とは區別されねばならぬ。翻譯書は學者以外の者の讀むものであるかのやうに考へてゐる偏見をなくすることが必要であると思ふ。

・「哲學はやさしくできないか」(一九三二年)『三木清全集 第一卷』

岩波書店、一九六六年、四八〇—四八一頁

よく云はれることは、現在の日本の哲學のむつかしいのは、それが西洋の哲學の模倣であり、翻譯であるからである、といふことである。しかしさういへば、數學だつて物理學だつて根本においては同じことではないかといふ議論もできよう。哲學は實にへんてこな言葉を使ふのでわからぬといふ。……哲學上の種々なる術語も少し勉強すればわかる筈だ。かうして哲學がむつかしいと一般に云はれるとき、それは根本において何か別の意味で語られてをり、そしてそれは哲學の或る特殊性に係してゐるでなければならぬ。即ち哲學には何かほんたうに模倣できないもの、翻譯できないものが含まれるのである。そのやうなものは哲學の理論的要素ではなく、寧ろ思想的要素であらう。模倣や翻譯のできないものを模倣し翻譯しようとするから、むつかしくなり、わからなくなるのである。理論は模倣され翻譯されてもわかるものである(それがほんたうの模倣、ほんたうの翻譯でなければならぬことは云ふまでもない)。さうでないのは思想である。しかも理論も哲學においては思想と

結合してをり、はなればなれのものでない。かくして哲學において要求されるのは「思索の根源性」であると云はれ得るであらう。

戸坂潤（一九〇〇—一九四五）

①

「意思の自由」（一九二四年）[Wilhelm Windelband, *Über Willensfreiheit*, 1904]

「自然哲学原理」（一九三一年）[Immanuel Kant, *Metaphysische Anfangsgründe der Naturwissenschaft*, 1786]

②

・「三木清氏と三木哲学」（一九三六年）『戸坂潤の哲学』こぶし文庫、二〇〇一年、六三—六四頁]

独創家でないからと云って、併し思想家の恥でも何でもないことは、云うまでもない。下手に独創的な思想家はあぶなっかしいものだ。寧ろ勝れた解釈家の方が、有益な思想家だろう。解釈家というのは、最高の意味に於ける翻訳家のことでありそしてこの翻訳なるものに文化的な意義を認めることを、世間は全く知らないのだ。世界的文化の大である所以はまずそれが翻訳され得るという点に見られるのである。翻訳して価値の減る文化はロクな文化ではないのだ。但しここで云う翻訳とは文章の翻訳のことではなくして文化の翻訳のことだ。例えば三木清の解釈家たる所以に通じる処のもののことだ。

・「付一」クリティシズムと認識論との関係『認識論とは何か』（一九三七年）『京都哲学撰書 第10巻 戸坂潤 科学と文学の架橋』燈影舎、二〇〇一年、四五六—四五九頁]

翻訳ということがやはり一種の文化運搬であろう。翻訳とクリティシズムとの事実上の縁故については改めて述べるまでもあるまい。ごく卑近一例を取るとして、ある外国の古典的価値のある文芸作品を翻訳するとする。とたちまち問題になるのはテキスト（本文＝原文）である。

我々に与えられている各種のテキストは恐らく多くの文献学者によってテキスト・クリティク（本文批評）されたものだ。しかしこの際、この文献学者はすでにそれだけ批評作家であったのだ。で、すでにこの批評の成果から無関係に翻訳しようと思っても、出来ないように出来ているのだ。……本文の誤植（？）は翻訳者にとってはただの誤植以上の重大さを有つことは察するに難くない。少なくとも原文の誤植は翻訳しようとする時の重大な躓きになる。と共に、また翻訳によって誤植というもののは最も丁寧に訂正される機会を与えられるものでもある。

だが翻訳とクリティシズムとの縁故は、もっと論理的な本質のものだ。それは正に認識論的な関係である。翻訳は言語的作品を外国語によって再生すること、或いは複写することであろう。……鷗外の『即興詩人』は複写の「モナリザ」よりも、その真正さ（*Echtheit*）が高い。してみると翻訳の文化的価値は、普通の複写……の複写的近似性にあるよりも、再生的な独自性ないし創造性にあると見ねばならぬ。翻訳を妨げ不可能にさえすると言われる国語の相違が、そういうギャップや距離が、かえって翻訳の文化的独自性や創造性を結果している。……

……思想や世界が文学の形に本当に翻訳されていれば、それは作品の成功なのであって、むしろ翻訳されずにそのまゝ——生のまゝ——ノザバリ込んで来るからいけないのである。元来が漢代の儒教や支那仏教のものであったカテゴリーをば、近代社会のカテゴリーへまで翻訳する労を取らないで（言葉を翻訳しても駄目でカテゴリー体系が現す思想を近

代的に翻訳しなければならぬが)、そのまま現代へ持ち込むことが、現に如何に現代社会の合理的認識を妨げているかを見るべきだ。これを翻訳した上で持ち込むならば、それは東洋文化の古典として、現代人にとって文献学的に絶大な価値のある文化財となり得る。翻訳の労を取るから取らないかで、宝石も瓦礫と化する。広義の翻訳一般はこうした一種の論理学的機能であるが、普通の意味での翻訳も、思想を国語に基づく特殊性から解放し、宇宙的な世界理性による一般性の場所において、これを分封するという論理的操作である。場合によっては漢籍はローロッパ訳の方が示唆的であつたりするのは、ここに原因する。翻訳によって原物はほとんど全く別の姿に変わるのではあるが、その換骨奪胎において必ずもののエッセンスは再生され得ねばならぬ。もしそれが原則的に不可能だと言ひ、本気で翻訳が文学的に不可能だというなら、世界文学などというものはあり得ないということに帰着する。バイブルはユダヤ人の文学でしかなく、ゲーテの『ファウスト』はドイツ人の文学でしかなくなる。だが新約はかえってギリシア・ローマ人の手によって彼らの言葉で書かれたのではなかったか。……実を言うと、世界文学は翻訳によって可能になるのではない。逆にそれは翻訳に先行し、翻訳を社会的に成功させる文化的条件をなす。世界文学は社会のインターナショナルリズムによって必然にされることも宣言されている。——すると翻訳の問題は文芸について言えば、根本的に世界文学の問題である。文化一般についてはそれは世界文化の問題である。文化を世界的に運搬媒介するという問題だ。するとこれはクリティシズムと大同小異の本質を備えていると言わなくてはならなくなつて来る。実際、翻訳の社会的目的は文化の紹介であろう。紹介を少し具体的にやろうとすれば、いやでも批評へ赴かざるを得ない。でつまりクリティシズムなるものは、諸文化内部におけ

る一切の細胞間の、広義における翻訳のようなものと考えられていいわけである。

註

- (1) 水野的は、「近代文章史は欧文脈摂取の歴史」であり、江湖山恒明を引いて「翻訳文が力強い役割を果たした」(『日本文学史』、河出書房、一九五六年)とし、「この点で従来の文学史は翻訳の役割を過小評価している」と述べている。『日本の翻訳論——アンソロジーと解題』柳父章・水野的・長沼美香子編、法政大学出版局、二〇一〇年、三八頁を参照。
- (2) 江村栄一「幕末明治前期の憲法構想」『日本近代思想大系9 憲法構想』岩波書店、二〇〇〇年、四八八—四八九頁。憲法翻訳における主語の研究については、柳父章「日本における翻訳」同右『日本の翻訳論』二二—二五を参照のこと。
- (3) 二〇世紀後半から西洋では、「翻訳に関する研究を独立した領域とし、科学にまで高めようとする動きが起り、translation studies, traductologie, Übersetzungswissenschaft などと命名された。翻訳、翻訳者に関する複雑な問題を扱う学問である。ジェレシー・マンデー、「第一章 翻訳学における主要な論点」『翻訳学入門』鳥飼玖美子監訳、みすず書房、二〇〇九年。
- (4) この哲学の訳書『自由之権利』(一八九五年)が、自由民権運動に多大な影響を与えたことはよく知られている。
- (5) Heidegger, *Le principe de raison*, traduit de l'allemand par André Préau, Paris, Tel Gallimard, 1962 (1957), p. 213. マントワース・ベルマン『他者とどう試験——ロマン主義ドイツの文化と翻訳』藤田省一訳、みすず書房、二〇〇八年、三七二頁。
- (6) *La tâche du traducteur (Die Aufgabe des Übersetzers)*, 1923, *Sur le langage en général et sur le langage humain* (1916), *「トランス」* Maurice de Gandillac (*Mythe et violence*, Denoël, 1971) の訳を使用しよう。
- (7) Jacques Derrida «Des tours de Babel», *Psyche: Invention de l'autre*, Paris, Galilée, 1987, pp. 232-233.
- (8) Paul Ricoeur, «Le paradigme de la traduction», *Sur la traduction*, Paris, Bayard, 2004.

能〈千手 重衣之舞〉の演出・再構成

田村良平* (村上 湛)

このたび大阪・大槻能楽堂の理事長である観世流シテ方・大槻文藏氏の依頼により、能〈千手〉の演出・再構成を試みた。同能楽堂の通年企画たる『平家物語』シリーズの一環である。番外曲の復興を含め、古典の能作品をこうしたかたちで再生するのは、独力としては今回で五作目となる。

この種の作業に臨む際の基本的な私のスタンスとして、現在の、ということとは江戸式楽によって形成された能の様式性に則って、現行曲に準ずる完成度を目指す、ということがある。と同時に、演技・演出の技法は外部から移入したり安易に創作したりせず、すべて能の既存要素を用いて舞台を構成することを原則と考える。たとえば歌舞伎や他の邦楽など能より時代の下る諸藝能の技法の逆輸入は、厳としてこれを否定したい。

能に限らず、いやしくも古典たるもの、もともと個々の具える様式性を信用せずして再生も何もあったものではない。むしろ、「様式とはい

かなるものか」という根本的な議論はあっても良いが、古典藝能・古典藝術の生命線は、ひとえにそれぞれの拠って立つ様式性に存する。

とはいえ、新作、あるいは現代的視点に立つまったくの再創造ということならばこの限りではなく、タブーも存在しない。その場合は、作者の個性によるその成果が観客や評者によって応分に評価・判定されるのが自然なすがたである。

私にとっての演出・再構成は、こうした「個性」の発露の場ではない。いわば、古美術品の補修・復元にも似た作業にほかならない。その結果、能作品がもともと具えたその様式性に則って新たな現代的価値を示す手助けをするのがすべての目的である。今回の演出・再構成作業もこのように一貫した私の意図に基づくものであることを、以上ちょっと確認しておきたいと思う。

金春禅竹の作と見なし得る〈千手〉は名曲だが、普通に上演すると全曲一時間半。他にもっと長大な能はあるとはいえ、中入のない一場物の現在能で内容も陰気、二段三節構成の長い「クセ」に加えて《大小序之舞》が伴う点、体感時間が異常に長い能の一つである。したがって敬遠され易く、名演があまり目にできない。

シテ方五流儀すべての現行曲ではあるが、その中で観世流のみ、江戸時代中期に考案されたとおぼしい流儀独自の小書(特殊演出)「えいぎょく 謡曲之舞」を有している。簡単に言えばこれは、A・千手の出の謡「次第・サシ・下歌・上歌」をすべて省き、B・地謡「クリ・サシ・クセ」を抜き、C・《大小序之舞》を《大小中之舞》に換える演式である。大鉦を揮うかたちで、詞章の分量は大幅に短くなるため、観世流の〈千手〉といえは「謡曲之舞」のほうが常の型よりも上演頻度が高い。

ただ、観世元章の考案と推量されているこの小書は、頻演される割に、「これ」という伝承上の決定型が定まっていらない。加えて、演出が整理されているようでも解釈の方向が明確でないから、演者の気分は常の「千手」に引きずられてさほど区別もなく冗漫になりがちである。しかも、この能の劇性の中核である「クセ」を抜くのはいかにも時間短縮の便法で単純に過ぎて、私はこの「郢曲之舞」をあまり高く評価していない。今回は、冒頭に梅原猛氏の講演が付き、「千手」のあとに観世元雅の「重衡」の上演を伴う、かなり盛り沢山の内容である。ついては「千手」の上演時間を少し短縮したい、けれども「郢曲之舞」ではない意味のあるものを別に作りたい、との大槻氏の意向であった。これを受け、「時間短縮の便法」という側面を残しつつ、「郢曲之舞」とは内容を一新しようというのが作業の出発点である。

従って、このたびの演出・再構成は部分的に「郢曲之舞」と類似するものの、本質的には異なる。詞章の整理だけでなく、何ヶ所か型も新案したが、この能の劇的意図と抵触しない限り交通整理的な調整はせず、原則として既存の型は活かした。今回は特別の趣向でシテ方異流競演の形式（地謡は観世流）を踏んだ。喜多流・塩津哲生氏の千手、観世流・大槻文藏氏の重衡、各々の流儀の特性を活かし、能「千手」の魅力の源泉である「静かな心のドラマ」の充実を目標とした。

詞章全文は後掲することとして、以下、今回の演出面での覚え書きを順に列記しておく。

①能の冒頭、ワキ・狩野之介宗茂が舞台に登場すると、常は続いて「次第」の囃子となり、千手が出て「次第・サシ・下歌・上歌」を謡う。今

回はこの「次第」→「上歌」を省略した。また、常の型であれば千手が「次第・サシ・下歌・上歌」を謡い終えてから続く重衡の「サシ」「身はこれ槿花一日の榮」以下をワキの出の直後にすぐ謡い、その間に千手が幕から出る手順にした。以上は「郢曲之舞」と同じ処理である。ただし、千手が橋掛りノ松で立ち止まり、舞台の重衡のつぶやきに気づいて耳を澄まし、面をクモらせてこれを深く心に留める演技を加えた点は「郢曲之舞」にはない今回の新工夫である。

②源頼朝に願ったものの出家の許しを得られないと知った重衡の悲哀の吐露（問答）のうち「口惜しやわれ一の谷にていかにもなるべき身の生け捕られ」以下は「前業よりなほ恥かしうこそ候へ」で切り、以下に続く千手とのやりとりと地謡「下歌」を省略。これは「前業よりなほ恥かしうこそ候へ」までで充分のことを言い尽くしていると判断したため処理であり、冗漫な愁嘆を切り詰めて劇展開を迅速にする意図である。ここで扇を酒器に見立てたワキが立ち、「今日の雨中の夕べの空」と謡い掛け（ワキの定型）、自然と酒宴の場に転ずる。以上は「郢曲之舞」とは無関係な今回の新案。

③能「千手」の眼目は、「詠」に当たる千手の朗詠である。常の如く囃子が打ち止めた静寂の中、「羅綺の重衣たる。情無きことを機婦に妬む」と、千手は高音で謡い上げる。

『和漢朗詠集』に収録されたこの句は、死後「北野の天神」として畏怖された菅原道真の作と信じられた。『平家物語』に見られるように、後世そのため、艶やかな内容とは無関係に、「この詩を詠ぜば聞く人までも守るべしとの御誓ひなり」との伝説が生じた。朗詠の別称が「郢曲」である。既存小書名「郢曲之舞」も、やはりこの部分を一曲の眼目と考えるところから命名されたものだろう。

千手は安倍川西岸・手越の宿の長の娘である。同じく能で名高い熊野(湯谷)が天龍川畔・池田の宿の長であるのと好一対。二人とも「長」宿場の遊女の統括者」たる出自を反映し、歌舞音曲や詩歌など社交教養に精通している。

院政期以来、各地の遊女たちは都の権力者と親しく交わって高い品性を与え、文化的ネットワークを形成していた。朗詠に関わる知識も充分だったに相違ない千手が、刑死の危機を目前とした重衡の無事を祈って、ここで特にこの詩句を選んで歌う意図は明白である。

重衡はその意図に気付かぬはずはない。しかも、これは「忝くも北野の御作」である。常の型だとただ千手が独吟しているだけで舞台面に変化はなく、朗詠の最中も重衡は床几に掛かったまま平然としているが、それでは天神に対して不敬に当たるばかりか、重衡自身が千手の芳心を理解していない朴念仁に見え、私はこれまで疑問に思っていた。

今回は、千手の朗詠が始まるとすぐ、重衡は心づいて床几を下り舞台に膝をつき、頭を下げて謹聴の姿勢を取った。続く「只今詠じ給ふ朗詠は」では舞台正面に天神を敬う心で、千手・重衡・宗茂それぞれ合掌の型を加えた。三人もろともに目に見えぬ天神に祈りを捧げ、重衡の行く末を祈る心の表現である。実際に見ていてこの場の感動は静かに深く、成功していたように思われる。

④「郢曲之舞」では「クセ」を抜くが、藝能史的に曲舞こそ遊女・白拍子の藝の見せどころである。したがって、これを省いたら千手の性格がきわめて曖昧になると私は考える。今回は「クセ」は省かず、常のとおり舞うことにした。その代わり「クセ」に先立つ「クリ・サシ」は省略して、地謡「朗詠してぞ。奏でける」から直接「クセ」に繋がった。

細かいことだが、ここで少し問題があるにはある。どんな能でも「ク

セ」は下音以下から始まる約束であり、したがって、その直前はこれに吊り合う低い音で収める必要がある。が、「朗詠してぞ。奏でける」は上音で謡い収める句であり、常のままでここに音程差が生ずる。よって今回は「朗詠してぞ。奏でける」の短い詩句の間に上音から下音に降下する節を工夫し「クセ」に接続した。実際に聴けばまずまず自然な流れではあったが、常の能では採らない処理だったため、少し後考を期す必要があるかもしれない。

ちなみに、この「クセ」は、西海で生け捕られた重衡が、奈良を経て鎌倉に護送された道中を謡うものである。「重衡の過去を千手が舞うのは変だ」としてこの「クセ」を退ける意見があるが、私は賛同しない。千手はただ藝人としての勤めを果たすだけではなく、常に重衡の心に寄り添い、その人生の全うを願う誠意を尽くしているのは、先ほどの朗詠の場で明白である。ここでも、「重衡のたどった生の軌跡を千手も同じくたどることにより、観客もろとも重衡の人生の重みを分かち合う実感」がこの「クセ」の意義だと思う。その意味でも、「この能から「クセ」を抜いたらドラマが成立しない」というのが私の主張である。

⑤「クセ」に続いて太鼓の入らない《序之舞》。「郢曲之舞」ではこれを《中之舞》に換えて位取りを軽くする約束である。《熊野》がそうであるように《中之舞》には酒宴の舞としての性格があるので《千手》にこれを援用しても劇的に誤りではないが、《中之舞》の軽快な調子は、重衡の刑死を目前とした《千手》にどうしても合わない。

「クセ」と同様、そもそも《序之舞》は一面で遊女の舞う舞としての性質を持っている。その眼目は、一定の曲節に合わせて拍子を踏むなどの足づかいを見せる冒頭の「序」の部分にある。今回は、《道成寺》の《亂拍子》(これも白拍子の舞藝)に通ずる「足づかいの藝」たる「序」

をしっかり見せることを意図した。この「序」、現在では常は三ツ（三節）に省略されるところ、今回は正式に五ツ（四節）丁寧に踏んで際立たせ、《序之舞》の《序之舞》たるゆえんがこの「序」にあることを強調した（実際には一節増えるだけなのだが、静謐なこの部分での添加には、ある「意味」が感じられる）。

今回は、笛方・藤田六郎兵衛氏の発案で、「序」の直後に続け、一クサリ（八拍）の特殊な笛の手を挿入した。藤田流に伝わる。〈定家〉〈二人静〉専用の習イの手ということだが、常の《序之舞》の譜に移行する前に特色ある音色が挿入されることにより、この能一番が特別なドラマを有するもののように感じられる効果が加わった藤田氏の吹奏も技巧・気品ともに充分の音色であり、ここで佇立する塩津氏の姿もまた立派なものだった。画龍点睛の工夫といえよう。

《序之舞》そのものの寸法はぐっと短くした。すなわち、「序」が済んで「カカリの段」に入り舞台を一周して扇を広げる。ここから「初段」となると、そのまま右に取って橋掛りに流れ、囃子の拍子を崩す。老女物だと「休息」に相当する部分である。

A・ここですまず千手は舞台の重衡を見込み思い入れ（一クサリ）↓ B・次に右に外し身を背けて左手でシオリ〓同情の涙を流し、重衡は気づいて一ノ松の千手を見やり（二クサリ）↓ C・千手が気を取り直すと笛の調子が上がり（三クサリ〓囃子の拍子が元に戻り、短いながらここから《盤渉序之舞》、千手はそのまま舞台に戻って舞い上げた。以上、囃子の三クサリの間に濃密な演技を盛り込んだ体裁。「郢曲之舞」でもこれに類似の型は見られるが、ここまで徹底したものではない。やはり今回の新工夫である。

《序之舞》だけで所要時間七分ほど。常より五分は短く済んだかたち

である。ちなみに桃山時代以降の囃子伝書で、盤渉は「水の調子」と言われた。今回は、千手の流す涙がこの盤渉の調子呼び寄せたと趣向にしたわけである。笛の調子が上がることにより、曇り空から一瞬、サツと光が差すように能の気分が変わったのは成功の証と言えよう。

⑥《序之舞》のあとは千手と重衡の合奏。開いた扇を左手に抱え持つのは奏楽の定型である。観世流と喜多流とは身体の向きなど微妙に異なるが、互いの思いやりをそれぞれ個別に表わすようで効果的なので、見るべきところで互いの顔をジッと見つめ合う以外、それぞれの流儀の型に拠った。

「琴を枕の短夜の假寝」と謡われるとおり、二人の合奏は同衾の暗示である。やりようによっては下品にも見えかねず、それは避けたい。ただ何もせず、じっとしていることに賭けた。

この場の重衡は、時として勤行用の掛絡（小袈裟）を首から掛けることがある。男女の共寝を暗示する場に、この姿では憚りがある。よって、今回は掛絡を用いないことにした。頼朝から出家を許されていないのが重衡の現状ゆえ、その意味からも、掛絡を掛けない〓掛けることができないうが、重衡の無念を表現もできる。

ちなみに、重衡の扮装は常は大口。「郢曲之舞」の時は格を上げて貴人常用の指貫をはくことが多い。今回は大口にした。〈盛久〉がそうであるように、「大口+モギドウ（上着を着ないこと）〓囚人の扮装」と能では決まっている、その定型を取って踏んだのである。

⑦最後、重衡は立ち上がり、宗茂のあとから護送される態で歩む。地謡「引き離るゝ袖と袖との露涙」で、観世流にも喜多流にも、二人が行き違いながら片袖を触れ合わず型がある。これは文字とおりの「当て振り」で具体性が強過ぎ、演技のための演技に墮しがちなので、今回は避

けた。ただし、ここでも視線のやり取りは厳格に指定した。「何なかなかの憂き契り」と、ひととき千手を見つめ、あとは振り向きもせず去る重衡。万感の思いを籠めて重衡の後ろ姿から目を離さず見つめ見送る千手。

千手が舞台常座で重衡を見送ったあと、千手は左に取り（正面より右をウケた形）、耐えかねて泣き臥す心で左手でシオリ、そのまま膝をついて上体をクモらせて終曲。これらの型も新案である。

以上、全体では一時間。常の〈千手〉より三十分、「郢曲之舞」より十五分は短く済んだことになる。

最後に、今回新案の小書名「重衣之舞」について。

能の最後、地謡「はや後朝に引き離るゝ袖と袖との露涙」とあるのが、今回の小書名「きぬぎぬのまい」の命名由来である。

古語で「衣」は「きぬ」と読む。逢瀬の翌朝を示す「後朝」の語源は、別離の前に互いに男と女がそれぞれの下着の衣を取り換えて身に着けた習慣にある。これを踏まえ、「衣」を二つ「重」ねた熟語「重衣」に「きぬぎぬ」の当て読みを用いた。もちろんここには、能一番の中で最も劇的に眼目であったとした朗詠の中の詞（羅綺の）重衣^{ちやうぎ}を利かせ、演出の意図を暗示した趣向である。

祈りを籠めた千手の朗詠。契りの翌朝の永遠の別離。この二つを能〈千手〉のドラマの焦点と捉えた演出が、今回の新案「重衣之舞」なのである。

主要な上演データを付し、以下、〈千手 重衣之舞〉の全詞章を後世への記録のため掲載する。機会を得て再演を試み、さらに練り上げるこ

とができれば幸甚である。

なお、本曲の曲名および役名は、観世流では「千手」、喜多流では「千壽」と表記する。今回は観世流・大槻能楽堂での企画ということで、「千手」に統一した。また、常では千手がシテ、重衡はツレの立場になるが、「郢曲之舞」でそうするように、今回は千手と重衡は互角の両ジテ扱いとした。

平成二十三年九月二十四日（土）午後二時開演
大槻能楽堂自主公演「平家物語を観る」『戦のあわれ！』を語る（十八）

能〈千手 重衣之舞〉

シテ（千手前） 塩津哲生（喜多流）

シテ（平重衡） 大槻文蔵（観世流）

ワキ（狩野介宗茂） 宝生閑（下懸宝生流）

笛 藤田六郎兵衛（藤田流）／小鼓 成田達志（幸流）／大鼓 河村

総一郎（石井流）

地謡（観世流） 観世喜正（地頭）・齊藤信隆・上野雄三・山本正人・

長山耕三・齊藤信輔・水田雄昭・山田薫

後見 狩野了一・佐々木多門（以上喜多流）

※この日は冒頭に梅原猛氏の講演「〈千手〉〈重衡〉／妖なる愛と奈良坂の怪」（以上、予告とは異なる当日発表の演題）があり、〈千手 重衣之舞〉の後で能〈重衡〉（シテ・大槻文蔵）が併演された。

能〈千手 重衣之舞〉上演詞章

※原則として以下の現行詞章に基づいている。

千手Ⅱ喜多流／重衡と地謡Ⅱ観世流／ワキⅡ下掛宝生流

《名ノリ笛》

〔名ノリ〕

ワキ／これは鎌倉殿の御内に。狩野介宗茂にて候。さても相國の御子重衡の卿は。このたび一の谷の合戦に生け捕られ給ひ候を。それがし預り申して候。朝敵の御事とは申しながら。頼朝いたはしく思し召され。よくいたはり申せとの御事にて。昨日も千手の前を遣はされて候。かの千手の前と申すは。手越の長が女にて候が。優にやさしく候とて。御身近く召し使はれ候を遣はされ候事。まことにありがたき御志にて御座候。今日はまた雨中御徒然。酒を勧め申さばやと存じ候。

〔サシ〕

重衡／身はこれ槿花一日の榮。命は蜉蝣の定めなきに似たり。心は蘇武が胡國に捕はれ。岩窟の内に籠められて。君邊を忘れぬ志。それは衛律が謀にて。敵を亡ぼし舊里に歸る。われはいつとなく敵陣に籠められて。繚綯の責を受ける。知らず今日もや限りならん。あら定めなや候。

〔問答〕

千手／いかに誰か御入り候。

ワキ／誰にてわたり候ぞ。や。千手の前の御参りにて候。

千手／参りたるよし御申しさむらへ。

ワキ／しばらく御待ち候へ。御機嫌を以つて申さうずるにて候。いかに申し上げ候。千手の御参りにて候。

重衡／たゞ今は何の爲にて候ぞ。よしよし何事にてもある。今日の對面は叶ふまじきと申し候へ。

ワキ／畏つて候。いかに申し候。御参りの由申して候へば。何と思し召し候やらん。今日の御對面は叶ふまじき由仰せ出だされて候。

千手／これは思ひの外なる仰せかな。これも私に非ず。雨の中を慰め申せとの。頼朝よりの仰せにて。琵琶琴持たせて参りたり。その由心得て御申しさむらへ。

ワキ／御誼の趣申して候へば。これも私にあらず。頼朝よりの御誼にて。琵琶琴持たせて参りたり。よしよし御憚りはさる事なれども。たゞこなたへと請ずれば。

千手／その時千手立ち寄りて。

〔上歌〕

地謡／妻戸をきりゝと押し開く。御簾の追風匂ひ来る。花の都人に。恥かしながら見みえん。げにや東の果しまで。人の心の奥深き。その情こそ都なれ。花の春紅葉の秋。誰が思ひ出となりぬらん。

〔問答〕

重衡／いかに千手の前。昨日あからさまに申しつる出家の御暇のこと聞かまほしうこそ候へ。

千手／その由申して候へば。御身は朝敵の御事なるを。たゞかりそめに預かり申しながら。私として出家を許し申さんこと。思ひも寄らずとこそさむらひしか。わらはも御心の中推し量り参らせて。いかほど細々と申し参らせてこそさむらへ。かひなき出家の御望み痛はしうこそ候へ。

重衡／口惜しやわれ一の谷にていかにもなるべき身の生け捕られ。今は東の果てまでも。かやうに面をさらすこと。前世の報いと言ひながら。また思はずも父命により。佛像を亡ぼし人壽を斷ちし。現當の罪を果す

こと。前業よりなほ恥かしうこそ候へ。

〔掛合ヒ〕

ワキ／今日の雨中の夕べの空。御徒然を慰めんと。樽を抱きて参りつゝ既に酒宴を始めんとす。

千手／千手もこの由見るよりも。御酌に立ち重衡の。御前にこそ参りけれ。

重衡／今はいつしか憚りの。心ならずには思はずも。手まづ遮る盃の。心一つに思ふ思ひ。

ワキ／それそれいかに何にても。御肴にと勸むれば。

千手／その時千手とり敢へず。

〔詠〕

千手／羅綺の重衣たる。情なきことを機婦に妬む。

□□

三人／たゞ今詠じ給ふ朗詠は。忝くも北野の御作。この詩を詠ぜば聞く人までも。守るべしとの御誓ひなり。

重衡／さりながら重衡は今生の望みなし。

三人／たゞ來世の便こそ聞かまほしけれとのたまへば。

千手／わらは仰せを承り。十惡といふとも引攝すと。

地謠／朗詠してぞ。奏でける。

〔クセ〕

地謠／今は梓弓。よし力なし重衡も。退かんとするいづ方も。網を置きたる如くにて。遁れかねたる淀鯉の。生け捕られつゝありて憂き。身を鱗類のそのまゝに。沈みは果てずして。名をこそ流せ川越の。重房が手に渡り心のほかの都入り。

千手／げにや世の中は。

地謠／定めなきかな神無月。時雨降りおく奈良坂や。衆徒の手に渡りな

ば。とにもかくにも果てはせで。また鎌倉に渡さるゝ。こゝはいづくぞ八橋の。雲居の都。いつかまた。三河の國や遠江。足柄箱根うち過ぎて。

明けもやすらん星月夜。鎌倉山に入りしかば。憂き限りぞと思ひしに馴るればこゝも忍び音にあはれ昔を思ひ妻の。燈火暗うしては數行虞氏が

涙の。雨さへしきる夜の空。

千手／四面に楚歌の聲のうち。

地謠／何とか返す舞の袖。思ひの色にや出でぬらん涙を添へて廻らすも。雪の古枝の枯れてだに花咲く。千手の袖ならば。重ねていざや返さん。

□□

地謠／忘れめや。

《序之舞》

〔ワカ〕

千手／一樹の蔭や一河の水。

地謠／みなこれ他生の縁といふ。白拍子をぞ謠ひける。

〔ノリ地〕

重衡／その時重衡。興に乗じ。

地謠／その時重衡興に乗じ。琵琶を引き寄せ弾じ給へばまた玉琴の。緒合はせに。

千手／合はせて聞けば。

地謠／峯の松風通ひ來にけり。琴を枕の短夜のうたゝ寝。夢もほどなく。東雲もほのぼのと。明けわたる空の。

□□

千手／あさまにやなりぬべき。

地謠／あさまにやなりなんと。酒宴をやめ給ふ御心の内ぞいたはしき。

〔歌〕

地謠／かくて重衡勅により。かくて重衡勅により。また都にとありしかば。ものゝふ守護し出で給へば。

千手／千手も泣く泣く立ち出で。

地謠／何なかなかの憂き契り。はや後朝に。引き離るゝ袖と袖との露涙。げに重衡のありさま目も當てられぬ。氣色かな目も當てられぬ氣色かな。

以上

歌川国芳における瞳の白点表現

『東西海陸紀行』 撮取以前を考える

山本陽子*

序

主人公の瞳に加えられた白点は、現代の少女マンガでは瞳の星とも呼ばれ、主人公のキラキラと輝く眼差しの表現として愛用されている。

これと同様に光の反射を表す瞳の白点が、百五十年以上前の浮世絵師、歌川国芳描くところの赤穂浪士、「誠忠義士肖像」の連作に見られることが指摘されてきた。その表現が何に拠ったのかは疑問とされていたが、近年、その原典として江戸に輸入されたオランダの書物『東西海陸紀行』の挿絵が挙げられた。ほぼ裸体の先住民の姿勢が義士の姿として転用されたことが注目され、瞳の白点の位置まで同じであるという、その換骨奪胎ぶりが話題となっている。

この書物との比較によって、「誠忠義士肖像」等に見られる歌川国芳

の西洋的な絵画表現の典拠については、解明が進んだ。しかし瞳の白点に関してみれば、これで総てが解決したわけではない。もともと国芳や、当時の洋風画家以外の日本人にとって、『東西海陸紀行』のような輸入西洋挿絵が、この白点表現を知る最初の機会であったのか。また仮に『東西海陸紀行』との出会い以前に、国芳の絵に瞳の白点表現が存在したとすれば、それはどのような意味を持つ表現だったのかを考えたい。

一 「誠忠義士肖像」の瞳の白点

「誠忠義士肖像」は嘉永五（一八五二）年、国芳五十六歳時の連作で、赤穂浪士一人一人の上半身を、大胆な姿勢で描いたものとして知られる。四十七士ながら出版されたのは最初の十二枚揃に止まり、小野寺幸右衛門の一枚が版下絵、矢間喜兵衛と不破数右衛門の二枚が草稿として残っている。⁽¹⁾ こうした未開版の絵が存在することから、当時は不評であったため版元により続刊が中止されたと、鈴木重三は推測する。⁽²⁾ しかし鈴木自身は「一番の特徴は顔貌の近代적写真描写」と評価し、「とりわけ、眼睛の描写で、黒目中に白点を抜き、光の反射を的確に表出した造形感覚が特記される」ことを指摘する。

総計十五枚のうち、斜め後ろから描かれた杉野十平治次房と、投げつけられた手あぶりの灰に顔をしかめる中村勘助正辰、草稿で瞳に墨の入っていない不破数右衛門の外は、版下絵の小野寺幸右衛門秀当・草稿の矢間喜兵衛を含めた十二図で瞳に白点が確認できる。前向きで遠くを見つめる大星由良之助や小野寺幸右衛門のみならず、刀を振りおろす瞬間の箭田五郎左衛門助武と柄杓の水を飲む邑松三太夫高直の伏し目、正面向きながら横目の富之森祐右衛門正固や右下を見つめる神崎弥五郎則休、



図1 歌川国芳「誠忠義士肖像」吉田沢右エ門包貞（部分）

真横顔の横川勘助宗則・吉田沢右エ門包貞（図1）、斜め上方向きの潮田正之丞高教、斜め下に行燈をかざす矢頭與茂七教兼、仰け反った横顔で横目の堀部矢兵衛金丸や振り向く矢間喜兵衛と、極めて多様な向きと形状の目の、それぞれの瞳の中心から外した箇所（白点）を抜くことで、的確に眼の光沢を表している。

この瞳の表現は何に由来するのだろうか。「誠忠義士肖像」連作に関する最も古い記事は『浮世絵師歌川列伝』にあり、筆者の飯島虚心は「骨相および着色等すべて西洋の画法によりて画く。頗る巧妙なり」と述べている。⁽³⁾飯島はまた、同書で「栗田氏曰く」として国芳が「西洋画数百枚」や「西洋の絵入新聞など」を所持し、「西洋画は真の画なり。余は常にこれに倣はんと欲すれども得ず、嘆息の至りなり。」と語った

こと、「野村氏曰く」として国芳が「西洋の画法を慕うこと甚だ深く、嘉永年間下谷の猪飼某という写真術の研究者と往来して「画法を談じていたことを記している。

国芳の洋風表現についてしばしば言及して来た鈴木重三は、私淑した葛飾北斎の洋風風景版画からの影響とともに、森島中良『紅毛雑話』のような海外紹介書の挿絵、模倣作もある亜欧堂田善の和製銅版画や、当時の唐物屋で扱われていたガラス絵と思しき「玉板油絵」など当時の国内で生産された洋風画からの図像の摂取を想定している。⁽⁶⁾

一方、写真史研究家の三井圭司は「瞳にキャッチライト（白い点）を描くという写真的な表現」を、『浮世絵師歌川列伝』に見えた同時期の鵜飼玉川との交流に由来すると見、「玉川の写真術を研究する視点が直截に関わっている作品」と考える。⁽⁷⁾

しかし二〇〇〇年に勝盛典子がニューホフの『東西海陸紀行』の挿図が国芳の版画に転用されていることを指摘し、一部の作品の典拠について、にわかに具体性が強まった。さらに勝原良太が同書と国芳作品との照合を行った結果、「誠忠義士肖像」のうち草稿を含む四点に『東西海陸紀行』の形態的な引用が行われていることが明らかになった。⁽⁹⁾

『東西海陸紀行』には世界各地の多様な風習が挿絵として掲載されているが、「誠忠義士肖像」には、半裸の先住民たちの特徴的な瞬間を捉えた姿が、全く別の場面として転用されているという。例えば吉田沢右エ門包貞は「マカッサルの毒矢を吹く男」（図2）の上半身を拡大し、「目付き、横顔、ねじり鉢巻、右手、顎や首の筋、前傾姿勢が同じ。半身にして呼子を吹く義士に変身させているが、吹き矢を吹く時の前傾姿勢を、槍で上体を支えて呼子を吹くという設定に改めた発想が利いている。」と比較される。

『紀行』の挿絵にはこのような人物肖像画が多数含まれているが、国芳はこれらの肖像画の眼の表情に特に感銘を受けたか、「誠忠義士肖像」の人物たちには、原拠図の目に白点が無い場合でも、富之森祐右エ門や潮田正之丞の瞳には白点を抜いている。」という。

たしかに意表を突く構図や、武者絵とは異なる肉付けを特徴とする「誠忠義士肖像」に限っては、いままでに無い角度から描かれた人体、吉田沢右エ門包貞の瞳の白い点までもが、『東西海陸紀行』からの転用に拠っていることは事実であろう。ただし国芳がそれまで瞳に白点を抜くという表現を全く知らなかったか否かは疑問である。

二 瞳の白点表現の西と東

眼の光沢を表現するために瞳に白を点じる技法は、陰影や光の反射、ものの材質感を捉えて描こうとする志向の強い西洋絵画では、古くから行われて来た。例えば紀元前一〇〇年頃の作というポンペイの「イッソスの戦い」のモザイクにおいても、主人公のアレクサンドロス三世と敵将ダレイオス三世とも、いずれの瞳にも光沢を表現するための白い石が



図2 『東西海陸紀行』挿絵「マカッサルの毒矢を吹く男」(部分)

ここで勝原が注目するのが、かつて鈴木が指摘した瞳の白点である。特に吉田沢右エ門包貞については「国芳は吹き矢を吹く男の瞳にある白点まで、同じ位置にとり入れている」とい

い、註記して『東西海陸紀行』に白点を加えた管見では唯一の作例として、南北朝期の絵巻物、飛驒守惟久の描く『後三年合戦絵詞』の中・下巻を挙げたい。他に全く類例がなく、絵具の剝落による白点かとも疑ったのだが、特に主人公である源義家が突撃する合戦の頂点の場面(図3)で用いられていること、首となった死者の目は全て瞑らせて描くなど、絵師が眼の表現に注意を払っていることから、単なる偶然とは考えがたい。瞳に白点がある数例はいずれも武者で、ほとんどが甲冑姿に限られ、源義家でも日常的な



図3 飛驒守惟久『後三年合戦絵詞』中巻 突撃を命じる源義家 (部分)

場面には用いられない。絵師飛驒守惟久に関しては画系もたどれず、類例も見出せないが、この表現は日本絵画に皆無というわけではない。

また瞳ではなく、白目部分に白点を入れる表現であれば、十六世紀の土佐光吉作「曾我物語図屏風」に存在することが、江村知子により指

摘⁽¹²⁾されている。「表現効果としては、黒目をより引き立たせるため、あるいは白目を潤んで光ったように見せるため、などの理由が考えられ」、「下男など野卑な相貌の人物、および曾我兄弟には部分的に用いられているが、三箇所⁽¹³⁾に描かれる頼朝像や、女性にはこうした特徴は認められない。」という。江村はさらに、光吉に先行する時代の土佐派の「浜松図屏風」の船引きにも同様の表現を見出し、「色黒に日焼けした肌に白目が目立って見え、平俗な人物を描写する際の伝統的手法であったことも考えられる。」⁽¹³⁾とい、この表現は当時の狩野派にも広がり、光信と長信の作品や「彦根屏風」などに継承されているという。

西洋絵画の陰影表現技法が日本に伝えられたのも、十六世紀の土佐派とほぼ同時期かこれに遅れる頃で、イエズス会の宣教師たちによってである。その成果の一端として、後の「泰西王侯騎馬図屏風」のアンリ四世の瞳には「水晶体の輝きを表現しているのであらうか、光が反射したような白点⁽¹⁴⁾（色彩としては淡いシアン色）が左右の眼球に描かれている」ことが報告されている。同様の表現は横向きの王侯たちやその馬の目にも、同時期の「レバント戦闘図屏風」⁽¹⁵⁾、また聖パウロを翻案したような「老師父図」や「達磨図」⁽¹⁶⁾などの眼球にも見られる。しかし、このような西洋画の影響に拠った表現は、キリスト教弾圧とその後の鎖国によって一旦断絶する。

新たに西洋の絵画技法の摂取が始まるのは、享保五（一七二〇）年にキリスト教以外の洋書の輸入が解禁され、もたらされたオランダ書籍の挿絵を通じてとされる。例えば平賀源内作の「西洋婦人図」の瞳には明らかに白の点が入れられ、源内により西洋画法を知ったという秋田蘭画の佐竹曙山の「写生帖」の鳥や、小田野直武の「笹に白兔図」の目、石川大浪の天保一〇（一八三九）年作ヒポクラテス像の横顔の瞳などにも

白点が見られる。洋風画という分野に限定すれば、当時、比較的普及していた表現であったといえるだろう。

三 「誠忠義士肖像」以前の国芳の白点表現

これらのことからすれば、西洋画に興味を持っていたという国芳が、新たに入手した西洋画ばかりでなく、従来のやまと絵や、江戸の洋風画によっても瞳に白点を入れる表現を知っていた可能性が出てくる。

そこで試みに国芳の作品の中で瞳に白点のあるものを探して年代順に表としたのが論末の《歌川国芳作品に見る「瞳の白点」表現のある作例一覧》である。『没後一五〇年 歌川国芳展』（註1参照）を中心に、これに漏れた作例を他の八書、鈴木重三『国芳』（註2参照）、稲垣進一・恵俊彦『国芳の狂画』⁽²⁰⁾、『歌川国芳—奇と笑いの木版画』⁽²¹⁾、『没後一五〇年記念 破天荒の浮世絵師歌川国芳』⁽²²⁾、『土—日本のダンディズム—』（註7参照）、『Heroes and Ghosts』⁽²³⁾『国芳の絵本』⁽²⁴⁾『武者絵 江戸の英雄大図鑑』⁽²⁵⁾から順に拾った。制作年は図版掲載書に記されたものに従った。国芳の作品は数多くとても網羅はできず、また摺りや縮小図版印刷時にごく小さい白点が消えてしまい確認できなかったものも少なくないので、あくまで目安に過ぎない。

それでも表の左から四列目に挙げたような浮世絵の主人公に限っても、瞳に白点を確認できるものは、天保六く七年頃とされる版下絵の「薩摩守平忠度」（後出）をはじめ、天保七年頃の「加賀屋版武者絵シリーズ那伽犀那尊者」、⁽²⁶⁾「通俗三国志英雄の壱人」の呂布・張飛、天保一〇く十二年頃の「周易八卦絵 巽風」、天保十二年頃の「道化仁王風神の角力」、天保後期の「源頼光の四天王土蜘蛛退治之図」の坂田公時、天保十四く

弘化四年の「鬼童丸」、弘化二〜三年頃の「山平版武者絵シリーズ 新中納言知盛」「弁慶が勇力戯に三井寺の梵鐘を叡山へ引揚げる図」、弘化期の「忠孝名誉奇人伝 山本勘助」、「上杉弾正大弼輝虎入道謙信」と「武田大膳大夫晴信入道信玄」、「川中嶋百勇将戦之内 長尾越前守政景・武田伊奈四郎勝頼・拾六才初陣真田喜兵衛昌幸・後殿甘粕近江守・武田晴信入道信玄・原隼人正」などで、「誠忠義士肖像」以前にも、ある程度の量の作例が間歇的に存在する。表からは、国芳が白点表現を、「誠忠義士肖像」の作成時において『東西海陸紀行』で初めて知って応用したのではないことが判る。⁽²⁶⁾

このうち弘化期の「川中嶋百勇将戦之内」連作の武田伊奈四郎勝頼と真田喜兵衛昌幸については、すでに勝原良太も『没後一五〇年記念 破天荒の浮世絵師歌川国芳』（註9参照）の該当作品「図版解説二十四・二十五」において「なお、このシリーズの武者たちの目は、いずれも黒目に白点を抜いてあり、国芳の写生意識の表われと思う。」と触れ、「通常浮世絵版画ではこのような表現は行わない。刊行年も弘化期であるからこの種の作例として早く、意義を持つものと思う。」という。

しかし、表に於いて主人公の瞳に白点を抜いた作品は、この弘化年間より早い天保年間中頃から、嘉永五年以降まで二十年以上に亘って断続的に見出すことができる。勝原の言うように弘化期の「川中嶋百勇将戦之内」連作の時点で写生から体得して突如使い始めたのではなく、すでに天保中期かそれ以前にこのような表現を知っていたことになる。ただし、国芳が獲得したこの表現はすべての作品には応用されず、大いに売れていたはずの天保中期から嘉永五年にかけて十数年の期間においても、その制作量から見れば極めて稀にしか使われていない。

四 瞳に白点のあるものの性格

この表現が断続的にしか用いられなかったのはなぜか、版下絵のまま残されている三枚続きの「薩摩守平忠度」(図4)によって考えたい。平忠度・岡部六弥太・兎原田子平が絡み合うようにして戦う様子が、それぞれの顔をほぼ正面向きで大きく捉えて描かれたものである。注目すべきはその顔面で、他の箇所には色指定がないにもかかわらず、三者とも顔に薄紅の隈で立体感がつけられ、眼球が細かく表現されている。睫毛が上下に入れられ、大きく剥いた眼球の丸みを出すために端には薄青がほかされて、瞳の虹彩は茶色に塗られ、黒い瞳孔の中心に白点が入れている。⁽²⁷⁾ 正面から照明をあてて撮った写真のような、写実的な眼球である。



図4 歌川国芳「薩摩守平忠度」版下絵(部分)

出版されることのなかったこの版下絵は、同じく三枚続きで三人の武者の絡み合って戦う様を大きく表した「真田与一能久・俣野五郎景久」が存在することから、同時期の天保六〜七年頃の作と考えられている。出版された方の「真田与一能久・俣野五郎景久」(図5)では、「薩摩守平忠度」と同様に、顔には薄紅の隈が、眼球の端には青が、茶色の虹彩の中央には黒で瞳孔が入れられているが、瞳の中心に白点は無い。この二組の三枚続きの瞳の表現

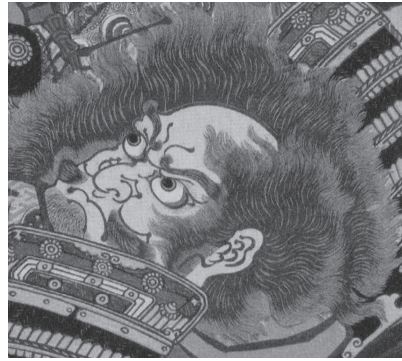


図5 歌川国芳「真田与一能久・俣野五郎景久」(部分)

因も、瞳の白点が版元や彫師に受け入れられなかったこと起因する可能性が高い。なぜ瞳の白点は敬遠されたのだろうか。

そこで、瞳に白点を持つ作例の主人公がどのような性格か、表に見た。まず挙げられる「誠忠義士肖像」や「川中嶋百勇将戦之内」の連作、版下絵の「薩摩守平忠度」の平忠度・岡部六弥太・兎原田子平、⁽²⁸⁾「通俗三国志英雄の老人」の呂布・張飛、「源頼光の四天王土蜘蛛退治之図」の坂田公時、「新中納言知盛」、「弁慶が勇力戯に三井寺の梵鐘を叡山へ引揚げる図」の武蔵坊弁慶、弘化期の忠孝名誉奇人伝の「山本勘助」、「上杉弾正大弼輝虎入道謙信」と「武田大膳大夫晴信入道信玄」、嘉永五年の「木曾街道六十九次之内」の袴垂保輔、晩年の「甲越勇将伝 武田家二十四将」、「川中嶋合戦」の上杉謙信・武田信玄・蜂河野善右衛門、遺稿が死後出版された『和漢英雄画伝』の筒井浄明・張飛・祐保・景久・晁蓋・四王天但馬守は、いずれも勇猛さで名を知られた武者である。それ以外の瞳に白点のある主人公として、十六羅漢の「那伽犀那尊

者」、「周易八卦絵 巽風」の風神、酒吞童子の遺児とされる「鬼童丸」、「大江山酒吞童子」、「和漢準源氏 乙女 天羅国斑足王悪華陽夫人頭」の王と獅子との間に生まれた斑足王が挙げられる。これらはいずれも神仏や鬼、常人とは違う出自を持つ異人である。また、盗賊の「木曾街道六十九次之内」の袴垂保輔や、源頼光に退治される酒吞童子とその遺児で頼光を仇として狙う鬼童丸が含まれるように、善良な存在とは限らない。

「武者絵の国芳」として著名ではあっても、国芳が武者絵以外のものを描かなかったわけではない。美人画や歌舞伎役者の似顔絵、説話画や変化に富んだ遊び絵も、数多く残されている。しかし瞳に白点がある主人公は勇猛な武者の戦闘場面か鬼神の類であり、決して美女や二枚目役者、子供や日常的な人物には見いだせない。国芳が瞳に白点を施した浮世絵は、善悪にかかわらず武者と鬼神のような、特定の対象に限られている。

五 瞳の白点が忌まれる理由

さらに国芳の作品中で、主人公以外で瞳に白点のあるものが、表の左から五列目、「瞳に白点(主人公以外)」の欄である。作例はこの方が多く、制作年代も国芳の武者絵の最も早い時代とされる文政初期まで十五年ほど遡る。注目すべきは瞳に白点が描かれた対象で、武者が乗った馬を除けば、そのほとんどが主人公と戦う敵役の怪物である。

大狸・白猿・鯀(山椒魚)・大蛇・大蝦蟇・大守宮・大蝸・大猪・古猫・土蜘蛛・熊・虎といった、実在の動物が変異や巨大化したもの、鰐鰐・雷獸・河童・山蛟・龍のように想像上の怪獣、人間の姿をした

といった仏神の名称を持つものさえも、ここでは破れ寺の魔王となつて相撲をし勝負を仕掛けるような、妖怪としての存在である。

瞳の白点はまず、これらの怪物たちの表現として用いられていた。国芳の武者絵として初期の「源三位頼政の鶴退治」の鶴(図6)や、文政九一〇年頃の武者絵の連作の怪獣、「通俗水滸伝豪傑百八人之巻人」の名作、浪裡白跳順が忍び込む水門の装飾で、あたかも主人公の頭に嚙



図8 葛飾北斎「百物語 さらやしき」(部分)

ものであっても茨鬼(木)童子のような酒呑童子の配下の鬼やその子供の鬼童丸、源経信の歌に詩を吟じ返した「鬼神」、床下の化物やお岩、盃に映った鬼女の影、異国の敵将や天狗の僧正坊などの鬼や妖怪に類するものである。仁王や雷神、韋駄天、青面金剛



図6 歌川国芳「源三位頼政の鶴退治」鶴(部分)



図7 歌川国芳「大江山酒呑童子」酒呑童子(部分)

みつつかのような鬼面にも、施されている。これら敵役の怪物の瞳に白を施した武者絵においてしかし、これに立ち向かう主人公の瞳に白点が彫られることはなかった。

「瞳を輝かせる」といえば聞こえが良いが、「目が光る」ことは当時、夜行性のネコ科の動物の眼が闇の中で光るように、怖ろしいもの、忌まわしいものの表現として存在した。瞳の白点は、鳥獣や妖怪の不気味さを感じさせる効果に用いられていたのである。²⁹⁾ たしかに「武勇擬源氏紅葉賀 平惟茂」の美女の酒杯に映る本性の鬼の影が眼を光らせる場面や、「大江山酒呑童子」(図7)で酒に酔った酒呑童子が本性を現し鬼に変身しつつある場面の、薄く開きかけた眼の光として加えられた瞳の白点は、極めて効果的に怖さを醸し出している。

しかし、対象が動物や妖怪ということであれば、瞳に白点表現がある浮世絵は国芳に限らない。たとえば『浮世絵師歌川列伝』に国芳が面会を求め「画法を談じ大いに得る所あり」とされる葛飾北斎では、国芳より早い作例として文化中葉頃とされる肉筆画「江口の君図」の象の目や、天保二三年の作という百物語の「さらやしき」のお菊の幽霊の目(図8)が挙げられよう。また溪斎英泉の天保年間とされる「藻中の鯉」の目にも白点は見出される。主人公の瞳ということではなかったの、この表現は当時の浮世絵に於いて、必ずしも稀ではなかったのである。

六 北斎の絵手本と国芳

国芳は当初、瞳の白点表現を何から学んだのか、『浮世絵師歌川列伝』には、「六七歳にして北尾重政が絵本武者鞋、および同政美が諸職画鑑等を見て人物を画く。」とある。絵手本『絵本武者鞋』の武者やその相

手の鬼や獣には瞳の白点表現は見出せないが、寛政六（一七九四）年刊行の北尾政美の『諸職画鑑』の、象のうち一頭が北斎の「江口の君図」の象と同様、瞳に白点があることが確認できる。⁽³⁴⁾また、国芳の洋風表現の取材源として紹介される（註6参照）天明七（一七八七）年序跋の森島中良の『紅毛雑話』⁽³⁵⁾にも、巻四の「獅子之図」の雄獅子の瞳に白点が見られる。

国芳が私淑し、洋風表現の影響を受けた（註3参照）とされる葛飾北斎にも、数多くの絵手本がある。その『北斎漫画』第二編に載る「龍」図は瞳を白抜きにし、「わにざめ」図では瞳に白点があけられている。後者の架空の獣「わにざめ」〈図9〉は、その背中を直角に丸めた形状が前足の位置も含めて、国芳の天保七年頃「本朝水滸伝豪勇八百人一個宮本無三四」に描かれる「山鮫」〈図10〉や、天保十四年の「源頼家公

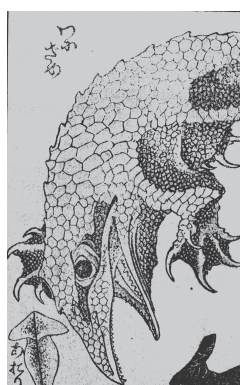


図9 葛飾北斎『北斎漫画』第二編「わにざめ」(部分)



図10 歌川国芳「本朝水滸伝豪勇八百人一個宮本無三四」「山鮫」

鎌倉小壺海遊覧 朝夷義秀 雌雄鰐を捕ふ図」の「雌鰐」⁽³⁷⁾に写されているので、国芳が『北斎漫画』のこの図を熟知していたことは確実である。

もっとも「本朝水滸伝豪勇八百人一個 宮本無三四」では「山鮫」の瞳の白は三日月形の形状となり、「源頼家公鎌倉小壺海遊覧 朝夷義秀雌雄鰐を捕ふ図」では瞳に白点があるのは雄

鰐のみで当該の雌鰐にはなく、国芳はこの時点では瞳の白点までを直模したわけではない。

実は北斎の絵手本にも、人物の瞳に白点を抜いたものが時折、見られる。『北斎漫画』では文政六年から天保四年の間に刊行された第十一編の「周の文王」の半身像、文政十二年正月新版とある『忠義水滸伝画本』の豹子頭林仲・美髯公朱全をはじめとする豪傑の約半数、天保七年発行の『絵本武蔵鑑』の武者の瞳にも、しばしばごく小さな白点がある。⁽³⁸⁾これら北斎の絵手本に勇猛な人物の瞳に白点を入れた表現があることを、当時の国芳が知っていたか否かは判らない。⁽³⁹⁾しかし仮に知っていたとしても当初の時点では、人物表現に取り入れてはいない。国芳が瞳の白点を使い始めたのは、まず武者の仇敵となる怪獣の表現としてであった。

七 敵役から主人公の表現へ

文政初期の「源三位頼政の鶴退治」から「通俗水滸伝豪傑百八人之壱人」で売れ出した時期を挟み天保年間前半にいたるこの時期、国芳は妖怪の瞳に白点を用いたばかりでなく、これに加えて様々な工夫を行っている。たとえば表の右端の「目の彩色表現の工夫」欄に挙げたように、白目の端に青の暈しを入れる・赤の暈しを入れる・白目全体を黄色にする・白目と点を黄にする・黄色い白目に赤い筋を入れるなど、怪獣の目の表現は実に細かく多様である。瞳の白点自体も、白目を黄白青の三重にした上で、瞳の白は三角にする・白目の端に赤と肉色を重ね、瞳の白い三日月型に灰色の影を添えるなどの変化も加えている。

国芳の代名詞となった武者絵において、必要なのは主役となる武者の



図 11 歌川国芳「川中嶋百勇
将戦之内」拾六才初陣真
田喜兵衛昌幸（部分）

勇ましきだけではない。敵役にも主人公と対峙しうる同等の迫力が求められる。国芳は奇抜な構図のみならず、敵となる怪獣の眼の表現によってもこれに応えようとした。瞳の白点はその工夫の一端だったのである。瞳の白点は眼の輝きを感じさせ、強烈な印象を与える。武者の敵役の属性として用い始めたこの表現の効果を、国芳は主人公にも試みる。瞳の白点表現は天保七年頃以降、十六羅漢的那伽犀那尊者や呂布・張飛といった異国人や風神、坂田公時や弁慶のような怪力の荒くれ者、次いで知盛の亡霊や鬼童丸のような負の性格を持つ主人公の作例に見出される。ただし怪獣の場合に比べ表現は極めて控えられ、いずれも瞳の中に見えるか否か程度の小さな白い丸点のみであり、作例も断続的である。

思い切った形で使われたのは、弘化期の「川中嶋百勇将戦之内」連作および、豎二枚続きの「上杉弾正大弼輝虎入道謙信」と「武田大膳大夫晴信入道信玄」の一对においてである。いずれも大判の一枚に武者一人の胸から上を描いたもので、原寸に近いほど拡大された顔の目は、睫毛の一本ずつや眼球の端の青味、時には虹彩の茶色まで加えた上で、瞳の中心にごく小さな白点が彫られている。真横向きの「甘粕近江守」や背中を見せ振り返った「真田喜兵衛昌幸」〈図11〉「原隼人正」、真正面向きの「上杉弾正大弼輝虎入道謙信」と「武田大膳大夫晴信入道信玄」の

ように、姿勢と視線は変化に富んでいるが、すべて瞳に白点がある。

これほど一連の作品において徹底しているにもかかわらず、迫力のある連作ながら、当時はさほど受け入

れられなかったのか、その後数年は、主人公の瞳に白点は見出せない。再びこの表現が用いられたのは嘉永四年の「大江山酒吞童子」と「大物之浦海底之図」であるが、酒吞童子も平知盛の亡霊も、負の性格を帯びた主人公であった。

八 「誠忠義士肖像」の白点

そして嘉永五年に、件の「誠忠義士肖像」連作が出版される。その吉田沢右エ門包貞の半身像では、瞳の白点の位置までが『東西海陸紀行』の吹き矢を吹く男の絵と等しく、「これらの肖像画の眼の表情に特に感銘を受け」原拠とした挿絵の目に白点がない富之森祐右エ門や潮田正之丞にまで、連作のほとんどの瞳に白点が入られるに至ったという（註9参照）。すでに瞳の白点表現を多様に用いていた国芳ではあるが、この時点で『東西海陸紀行』の瞳の表現から何らかの示唆を得て、「誠忠義士肖像」連作の瞳に白点を入れたことは確かである。

それが何であったのか、ひとつには敵役の妖怪や負の性格でない、正義の主人公の瞳にも白点を入れ得るということの裏付けかもしれない。版下絵の「薩摩守平忠度」で刊行が拒絶され、「川中嶋百勇将戦之内」連作で一旦行われながらもしばらく使われることのなかったこの表現を洋風画に見て、意を強くしたことは考えられる。ただしそのみであれば、『北斎漫画』第十一編や『忠義水滸伝画本』の豪傑にも、先例は見出せていたのである。

いまひとつ思い当たるのが白点の位置である。これまでの国芳の白点は、妖怪か主人公の武者かに拘わらず、黒目の瞳孔の位置に表されていた。そのほとんどが黒目の中央に開けられ、眼球の輝きと同時に視線の

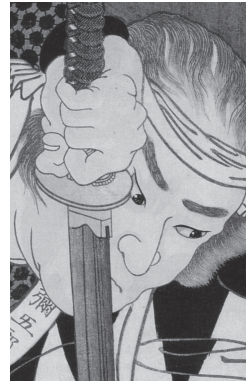


図12 歌川国芳「誠忠義士肖像」神幸弥五郎則休(部分)

の方向とは逆の黒目の中の左端にあり、瞳孔や視線の向きとは相反する箇所に表示されている。これは典拠となった『東西海陸紀行』の「白点まで同じ位置」の吹き矢を吹く男の瞳においても、同様であった。

国芳が『東西海陸紀行』の挿絵から得たのは、黒目の中心と異なる位置に白点を置く表現である。黒目の中心に白点が重なった場合はこちらが「眼光鋭く」睨まれるような強い視線を感じさせるのに対し、白点を黒目の中心から外した場合、視線と方向は一致しないので、純粹に眼球の光沢の表現となる。白点が瞳孔と重なるのを避けたためか、「誠忠義士肖像」に真正面向きで視線をこちらに投げかける構図のものはない。瞳に白点があるものは、いずれも画面の左右へ強い視線を放つ横目であり、ほとんどの場合白点は視線と逆方向の黒目の端に施されている。

国芳がこの連作において「黒目の白点の位置」を重視したことは、版下絵で残された小野寺幸右エ門秀当でも、草稿のままの矢間喜兵衛にさえも、黒目に墨が入られその端に白い小点が抜かれていることからも知れよう。しかしこれらが版下絵や草稿として残されているように、続編は摺られず、当時は不評であったと推測されている。その理由として鈴木は「当時の一般の嗜好に適合せず、理解者も少な」かったことを挙げる(註2参照)が、当時の鑑賞者が黒目の白点を眼球の光沢と捉えら

れなかったこともその一因かもしれない。

白点を黒目の瞳孔でない位置に表す試みは三年後、安政二年の「川中嶋合戦」の上杉謙信や蜂河野善右衛門、「和漢準源氏 乙女」の斑足王においても行われている。しかしこの年、国芳は中風を患い、作画数も減少していったといい、安政五年以降に出版されたものには、以前に描かれたまま未出版となっていた版下絵を用いたものが多いとされ、新たな瞳の表現は見られなくなる。

九 国芳から芳年へ

国芳が主人公の表現に取り入れようとしたしばしば試みた瞳の白点は、黒目の中心にあって瞳孔を表すもの、黒目の端に位置して眼球の光沢を意味するもののいずれも、同時代には受け容れられなかった。

この表現が再び見出されるのが、弟子の芳年の「魁題百撰相」(図13)である。鈴木重三は「誠忠義士肖像」の項で、「ただし、この造形感覚は、大分後に、かれの高弟月岡芳年により、明治二年(一八六九)「魁題百撰相」の揃いものとなって受けつがれている。」(註2参照)という、日本の古今の武者の上半身を表した浮世絵の連作である。



図13 月岡芳年「魁題百撰相」鈴木孫一(部分)

「誠忠義士肖像」の白点を写真的表現と見る三井圭司も、「魁題百撰相」の「登場するほとんどの人物が、瞳の表現において白点(キャッチライト)を附されて」いる共通点を挙げ、国芳の「誠忠義士肖

像」と比較する⁽⁴¹⁾。さらに「誠忠義士肖像」が十二点しか刊行されていないことに対し、「本シリーズは確認される範囲で六〇を越える種類をほこる。これらは頒布された数の大きな違いを示しているだろう。(中略)一四年の時を隔てて制作された本シリーズの方が、はるかに社会へ受け入れられたという可能性は高い。」という。そしてこの両者の制作年代が写真という媒体が一般的になる以前と以後であることを指摘し、「二つのシリーズにおいて、社会に受け入れられたかの差異は、写真的表現が用いられた画面について、写真そのものの一般化による受け入れ態勢の確立ということが一つの要因として挙げられるのではないだろうか。」という。

三井の見解にはまだ、国芳の表現への写真の関与の有無や、幕末の戦火といった世相の影響など、検証すべき課題は多いであろう。ただ少し後ではあるが、明治五年に撮影された明治天皇の御束帯姿や御小直衣姿の写真、明治六年撮影の御正服姿の肖像写真のいずれにも、瞳にはキャッチライトの白点を確認できる。さらに明治二十一年に「エドアルド・キョッソーネの謹写したコンテ画を写真師丸木利陽が撮影して完成させた⁽⁴³⁾」明治天皇御尊影、いわゆる御真影の瞳にも、白点は入れられている。瞳の白点は忌まわしいものの表現であるという感覚が、当時急速に消滅しつつあったことは事実である。

結

「誠忠義士肖像」連作において注目された瞳に白点を抜く表現は、歌川国芳にとって、これが初めての試みではなかった。主人公の武者に討たれる怪物の目の表現としては、国芳の初期の武者絵とされる文政初期

から存在していた。瞳の白点は幽霊や鳥獣の表現としてならば、同時代の北斎や英泉の作品にも見出すことができ、比較的一般化していたと考えられる。

一方、主人公の瞳に白点のある例はこれに遅れて天保七年頃から、弘化期の「川中嶋百勇将戦之内」の連作など、断続的に見られる。妖怪や動物の「光る眼」として忌まれていたこの表現を、国芳は主人公の武者にも用いようと試みたのである。

もっとも国芳が瞳に白点を入れた対象は、主人公の場合でも武者絵の武者と鬼神や亡霊に限られ、美人画や歌舞伎役者の似顔絵といった日常的な人物には用いられることはない。これは先に挙げた南北朝期の『後三年合戦絵詞』で瞳に白点がある例の多くが合戦の場面であったこと、白目に白点がある例が曾我兄弟や野卑な相好の人物に限られていたことと、一脈通じる所があるかもしれない。それでも主人公の瞳の白点表現が間歇的にしか見られないのは、その都度、版元か摺師の抵抗や、不人気による続刊の中断に直面したためと推測される。

国芳が『東西海陸紀行』の挿絵と「白点まで同じ位置」の「誠忠義士肖像」連作を描いたのは、このような時期であった。そこで国芳が挿絵に学んだのは白点表現自体ではなく白点の位置、すなわち黒目の中央に白点を入れるのではなく、視線と反対側の黒目の端に入れることであつたと考えられる。このことによって白点は瞳孔を意味するものではなく、純粹に眼球の光沢の表現となりえたのである。

しかし「誠忠義士肖像」は当時の人気を得られず、続刊が出ることはなかった。この表現が受け入れられるようになったのは国芳の死後、弟子の芳年による「魁題百撰相」に於いてであった。この白点が瞳の輝きとして少女マンガで愛好されるようになったのは、さらに百年後である。

「近代的感覚を先取りした絵師」⁽⁴⁴⁾の表現に、ようやく時代が追いついたのである。

註

- (1) 岩切友里子「図版解説七六」『没後一五〇年 歌川国芳展』二六〇頁 大阪市美術館他 日本経済新聞社 二〇一一年
- (2) 鈴木重三「図版解説一六二・一六六」『国芳』二〇三・四頁 平凡社 一九九二年
- (3) 飯島虚心「歌川国芳伝」『浮世絵師歌川列伝』一八五・二〇九頁 中央公論社 一九九三年(初出は明治二七(一八九四)年『小日本』)
- (4) 鈴木によれば、これに先立って阿部弘蔵「容斎国芳二画家の逸事」(『絵画叢誌』一十五卷)にも国芳が西洋の絵入新聞を所持していた記事があるという(註6参照)。
- (5) 鈴木重三「資料と作品で辿る―歌川国芳小伝」『生誕二〇〇年記念 歌川国芳展』五十六頁 名古屋博物館 千葉市美術館 サントリー美術館 一九九六年
- (6) 鈴木重三「付、洋風描写の来由」『国芳』二五〇頁 平凡社 一九九二年
- (7) 三井圭司「作品解説七六」『土一日本のダンディズム』八〇・八十一頁 東京都写真美術館監修 二文社 二〇〇三年
- (8) 勝盛典子「大浪から国芳へ―美術による蘭書受容のかたち」『神戸市立博物館紀要』第十六号 十七・四十四頁 二〇〇〇年
- (9) 勝原良太「国芳の洋風版画と蘭書『東西海陸紀行』の図像」『日本研究』三十四号 二四九・二七一頁 二〇〇七年、さらに勝原は『歌川派列伝』の記事に書籍を持っていたとされていることなどから、「様々な傷んだ本から寄せ集めた挿絵」集のようなものを想定する(「国芳の洋風版画と蘭書『東西海陸紀行』の図像・あとがき」『没後一五〇年記念 破天荒の浮世絵師歌川国芳』太田記念美術館 二〇一一年)。
- (10) 東京国立博物館蔵。『日本絵巻大成』十五「後三年合戦絵詞」中央公論社 一九七七年、中巻第七紙・第十二紙・第十三紙、下巻第八紙・第十五紙・第二十四紙。
- (11) 第二十四紙のみは賊徒追討の宣言を得られなかったとの沙汰を聞く義家の従者で、水干姿である。
- (12) 江村知子「光吉作品に見られる顔貌描写の特徴―白目の点描―『日本の美術』五四三号「土佐光吉と近世やまと絵の系譜」六十四・六十九頁 二〇一一年
- (13) 黒田泰三「狩野光信の顔貌表現における特徴について」『出光美術館研究紀要』十四号 十五・三十二頁、二〇〇九年
- (14) サントリー美術館・神戸市立博物館蔵。城野誠治「泰西王侯騎馬図屏風」の画像

- 情報化について―画像から見た事実と深まる謎―『南蛮美術の光と影 泰西王侯騎馬図屏風の謎』一八八・二〇〇頁 日本経済新聞社 二〇一一年
- (15) 香雪美術館蔵。「図版六三」『南蛮美術の光と影 泰西王侯騎馬図屏風の謎』日本経済新聞社 二〇一一年
- (16) 神戸市立博物館蔵。「図版九八」『南蛮美術の光と影 泰西王侯騎馬図屏風の謎』日本経済新聞社 二〇一一年
- (17) 養竹院蔵。「図版九五」『南蛮美術の光と影 泰西王侯騎馬図屏風の謎』日本経済新聞社 二〇一一年
- (18) 勝盛(註7参照)によれば大浪は『東西海陸紀行』を所持していたといい、挿絵を模写したものが紹介される。
- (19) 早稲田大学蔵 早稲田大学図書館古典籍総合データベース http://www.wtl.waseda.ac.jp/kosho/bunko08/b08_c0893/
- (20) 稲垣進一・恵俊彦編著『国芳の狂画』東京書籍 一九九一年
- (21) 『歌川国芳 奇と笑いの木版画』府中市美術館 二〇一〇年
- (22) 『没後一五〇年記念 破天荒の浮世絵師歌川国芳』太田記念美術館他 二〇一一年
- (23) Robert Schaap and Amy Reigle Newland『Heroes and Ghosts』Horei Publishing 1998
- (24) 恵俊彦監修解説『国芳の絵本』一 岩崎美術社 一九八九年
- (25) 『武者絵 江戸の英雄大図鑑』渋谷区立松濤美術館 二〇〇三年
- (26) インターネットの「yahanu貼交帖」上でも、「誠忠義士肖像」の瞳の白点に関して写真のキャッチライトとの関係を問う話題(註7参照)の中で、「その後、国芳ではもう少し古い時代の作品でも「瞳に白点」の表現がされているのを見つけた。国芳の場合、白点で瞳孔を表現している場合もあるようだ。」として、本論の表に掲載していない安政二年の「和漢渾源氏早蕨 唐土行者武松」を含む多数の国芳作品が挙げられている。(http://yajihun.tumblr.com/post/47925827/horibe-yahai-kuniyoshi) (二〇一一年一月一日アクセス)
- (27) 岩切友里子「図版解説四九」『没後一五〇年 歌川国芳展』二五六頁 大阪市美術館他 日本経済新聞社 二〇一一年
- (28) 天保六年頃の「真田与一能久・俣野五郎景久」がよく似た構図で同じく三枚続きであることから、『没後一五〇年 歌川国芳展』では同時期の作と推定する。
- (29) また、中を白く抜いた黒丸から、蛇の眼が連想された例として、蛇の目紋がある。
- (30) 永田生慈「解説四三」『大北斎展』図録 解説編 二十九頁 朝日新聞社 一九九三年
- (31) 「解説V―十四」永田生慈監修『葛飾北斎展 江戸のメディア 絵本・版画・肉筆

- 画』一四五頁 江戸東京博物館 一九九五年
- (32) 秋田達也「解説一六六」『ギメ東洋美術館所蔵浮世絵名品展』二一八頁 太田記念美術館 二〇〇七年
- (33) 国立国会図書館蔵「国立国会図書館のデジタル化資料」に拠る
- (34) 早稲田大学図書館蔵（早稲田大学図書館 古典籍総合データベースに拠る）
- (35) 早稲田大学図書館蔵（早稲田大学図書館 古典籍総合データベースに拠る）
- (36) 文化十二（一八一五）年、名古屋永楽屋と江戸角丸屋の共同出版。（永田生慈監修・解説『北斎漫画 復刻版』東京美術 二〇一一年）
- (37) この絵の雌雄の鰐は、没後一五〇年 歌川国芳展（註1参照）の「図版解説五二」では、「鰐の形は共に天明七年（一七八七）序跋の森島中良『紅毛雑話』の「カイマン」の図を参照して描かれており」とされるが、向かって右の雌鰐の形状に関しては、『北斎漫画』の「わにざめ」図の方がはるかに近い。
- (38) ただし片目のみ白点が見られる人物もあり、摺りの加減で白抜きになった場合と判別し難いものが多い。
- (39) 国芳が『通俗水滸伝豪傑百八人之巻人』の創作において影響を受けたとされる『新編水滸画伝』初編一〜十の挿絵（佐々木守俊「国芳の模した中国の水滸伝画像」『東京大学コレクション』十二 真贋のはざま デュシャンから遺伝子まで』二〇〇一年）には、瞳に白点を確認できるものは見出せなかった。
- (40) 岩切友里子「歌川国芳―幕末の奇才浮世絵師」『没後一五〇年 歌川国芳展』八〜十四頁 二〇一一年 大阪市美術館他 日本経済新聞社
- (41) 三井圭司「作品解説八四」『土―日本のダンディズム』八十四〜八十五頁東京都写真美術館監修 二玄社 二〇〇三年
- (42) 内田九一撮影。「図版1・〈参考〉1・6」『五箇條の御誓文発布百三十年記念展 明治天皇の御肖像』明治神宮 一九九八年
- (43) 「図版三七・三八解説」五箇條の御誓文発布百三十年記念展 明治天皇の御肖像』明治神宮 一九九八年
- (44) 鈴木重三「国芳の画想への偶感」『国芳』二五六頁 平凡社 一九九二年

歌川国芳作品に見る「瞳の白点」表現のある作例 一覧

出典 A:『没後150年 歌川国芳展』B:鈴木重三『国芳』C:稲垣進一・恵俊彦『国芳の狂画』D:『歌川国芳一奇と笑いの木版画』E:『没後150年記念 破天荒の浮世絵師歌川国芳』F:『土一日本のダンディズム』G:『Heroes and Ghosts』H:『国芳の絵本』①I:『武者絵 江戸の英雄大図鑑』の図版番号

年代	西暦	(シリーズ名) 題名	瞳に白点(主人公)	瞳に白点(主人公以外)	出典	目の彩色表現の工夫
文政初期		(源三位頼政の嫡退治)		鶴	I50	
文政9~10頃	1826~27頃	(川口版武者絵シリーズ) 瀬口内舎人渡辺綱		茨鬼童子	A14	白目端青
文政9~10頃	1826~27頃	(川口版武者絵シリーズ) 武田勝千代丸		大狸	B87	白目端赤
文政9~10頃	1826~27頃	(馬屋版武者絵シリーズ) 樋口治郎		白猿	A15	白目黄
文政11~12頃	1828~29頃	(通俗水滸伝豪傑百八人之巻人) 浪裡白跳順		水門の装飾石	A20	白目黄・光点黄
天保4~6頃	1833~35頃	(西村屋版武者絵シリーズ) 碓井又五郎飛驒山中二大猿ヲ打		白猿	A36	白目黄に筋・光点黄
天保4~6頃	1833~35頃	(西村屋版武者絵シリーズ) 出雲伊磨		鯉鮫	A37	白目黄白青・光点三角
天保4~6頃	1833~35頃	(西村屋版武者絵シリーズ) 小千部栖軽豊浦里捕雷		雷獸	E38	白目黄端赤
天保5~6頃	1834~35頃	(川口版武者絵シリーズB) 多嘉木虎之助		河童	G14	白目黄端赤
天保5~6頃	1834~35頃	(川口版武者絵シリーズB) 半上彈正ノ忠新景		鱈(山椒魚)	A16	白目黄端赤・光点三角
天保7頃	1836頃	(本朝水滸伝豪勇八百人一個) 宮本無三四		山蛟	G29	白目端赤光点変型灰色影
天保7頃	1836頃	(本朝水滸伝豪勇八百人一個) 土喜大四郎元貞		仁王	A30	端青・黒目茶
天保7頃	1836頃	(本朝水滸伝豪勇八百人一個) 鷺池平九郎		大蛇	A31	白目黄に赤筋
天保7頃	1836頃	(本朝水滸伝豪勇八百人一個) 渡辺源二綱		茨木童子	A32	白目黄端赤
天保7頃	1836頃	(本朝水滸伝豪勇八百人一個) 岩沼吉六郎信里		大守宮	A33	白目黄に赤筋
天保7頃	1836頃	(加賀屋版武者絵シリーズ) 那伽犀那尊者	那伽犀那尊者		A38	
天保7頃	1836頃	(加賀屋版武者絵シリーズ) 蝦蟇仙人		大蝦蟇	A39	白目黄に赤筋
天保7頃	1836頃	(通俗三国志英雄の巻人) 呂布	呂布	馬	I154	白目端青 白目黄(馬)
天保7頃	1836頃	(通俗三国志英雄の巻人) 張飛	張飛	馬	I156	白目端赤 白目黄(馬)
天保中期		玉取り(海女と龍)		龍	B204	白目端赤
天保年間	1830~44	流行娯のおそび		大蛇	C50	
天保年間	1830~44	和田小二郎義茂 荏柄平太胤長 和泉小次郎親衛		大蛇	E65	白目黄端青光点黄細長
天保10~12頃	1839~41頃	周易八卦絵 巽風	風神		A107	白目黄端赤
天保10~12頃	1839~41頃	建久四年源頼朝富士牧狩之図		大猪	E22	白目黄端赤
天保12頃	1841頃	道化仁王風神の角力		雷神・韋駄天	C170	白目端青
天保12頃	1841頃	武勇見立十二支 雄略天皇 亥		猪	B120	白目黄
天保後期	1838~42頃	源頼光の四天王土蜘蛛退治之図	坂田公時	土蜘蛛	I19	白目黄黒目変形(蜘蛛)
天保後期	1838~42頃	百人一首の内 大納言経信		鬼神	E67	白目緑赤
天保後期	1838~42頃	(馬屋版武者絵シリーズ) 鎌田又八		古猫	E44	白目黄に赤筋
天保10~13頃	1839~42頃	(馬屋版武者絵シリーズ) 毛谷村六助		河童	A42	白目黄
天保10~13頃	1839~42頃	化物忠臣蔵		床下の化物	A308	
天保13~14	1842~43	源頼光公館土蜘蛛妖怪図		土蜘蛛	A53	
天保14	1843	源頼家公鎌倉小坪壺海遊覧 朝夷義秀雄雌闘を捕ふ図		鯉	A52	白目薄赤
天保14頃	1843頃	頼朝公御狩之図		大猪	E23	白目端赤
天保14~弘化4	1843~47	鬼童丸	鬼童丸	蛇・天狗	E46	白目端赤
弘化元年	1844	竹沢藤次曲独楽 お岩稲荷		お岩	A379	
弘化2	1845	忠孝名誉奇人伝 山本勘助	山本勘助	大猪	G55	白目端青 白目端赤
弘化2頃	1845頃	伊達模様血気競 金神長五郎		青面金剛	A61	白目黄端赤
弘化2~3頃	1845~46頃	(山平版武者絵シリーズ) 新中納言知盛	知盛の亡霊		A54	
弘化2~3頃	1845~46頃	弁慶が勇力戯に三井寺の梵鐘を叡山へ引掲げる図	弁慶		A66	白目薄青
弘化2~3頃	1845~46頃	上杉弾正大弼輝虎入道謙信	上杉弾正大弼輝虎入道謙信		I123	白目端青黒目茶?
弘化2~3頃	1845~46頃	武田大膳大夫晴信入道信玄	武田大膳大夫晴信入道信玄		I124	白目端青黒目茶?
弘化2~3頃	1845~46頃	川中嶋百勇将戦之内 勇将長尾越前守政景	長尾越前守政景		I125	白目端薄青 黒目薄茶
弘化期	1844~48	川中嶋百勇将戦之内 武田伊奈四郎勝頼	武田勝頼		E24	白目端薄青 黒目薄茶
弘化期	1844~48	川中嶋百勇将戦之内 拾六才初陣真田喜兵衛昌幸	真田昌幸		E25	白目端青
弘化期	1844~48	川中嶋百勇将戦之内 後殿甘粕近江守	甘粕近江守		G36	白目端青
弘化期	1844~48	川中嶋百勇将戦之内 武田晴信入道信玄	武田晴信入道信玄		G37	白目端青
弘化期	1844~48	川中嶋百勇将戦之内 原隼人正	原隼人正		G38	白目端青
弘化期	1844~48	頼朝公御狩之図		大猪	E134	白目端薄赤
弘化3	1846	武勇擬源氏紅葉賀 平惟茂		鬼女の影	G40	
弘化4頃	1847頃	源頼朝卿富士牧狩之図		大猪	A72	白目黄
弘化4~嘉永3	1847~50	太平記英雄伝 葉藤利基入道立本		異国の敵将	G75	白目薄青
嘉永元年	1848頃	程義経恋源一代鏡		弁慶	I60	白目端青
嘉永元~3頃	1848~50	稲葉山におゐる荒猪を生捕たる強勇を大将の目にとまり臣下とす		荒猪	A81	白目黄に赤筋
嘉永2	1849	義経功臣 四天王出世鑑之内 亀井六郎		熊	A80	白目端赤
嘉永4	1851	大江山酒吞童子	酒吞童子		A85	
嘉永4	1851	讃岐院眷族をして為朝をすくふ図		鯉鮫	A84	白目黄に赤筋
嘉永4	1851	源牛若丸僧正坊二随武術を覚図		僧正坊	A88	白目黄
嘉永4	1851	大物之浦海底之図	平知盛		I86	白目端青
嘉永5	1852	誠忠義士肖像 潮田正之丞高教	潮田正之丞高教		A76	白目端青
嘉永5	1852	誠忠義士肖像 大星由良之助良雄	大星由良之助良雄		A77	白目端青
嘉永5	1852	誠忠義士肖像 吉田沢右エ門包貞	吉田沢右エ門包貞		B163	白目薄青
嘉永5	1852	誠忠義士肖像 横川勘平宗則	横川勘平宗則		B166	白目薄青

年代	西暦	(シリーズ名) 題名	瞳に白点(主人公)	瞳に白点(主人公以外)	出典	目の彩色表現の工夫
嘉永 5	1852	誠忠義士肖像 矢頭与茂七教兼	矢頭与茂七教兼		D116	白目端青
嘉永 5	1852	誠忠義士肖像 富之森祐右エ門正固	富之森祐右エ門正固		E247	白目薄青
嘉永 5	1852	誠忠義士肖像 箭田五郎左エ門助武	箭田五郎左エ門助武		F76	白目薄青
嘉永 5	1852	誠忠義士肖像 堀部矢兵衛金丸	堀部矢兵衛金丸		F76	白目薄青
嘉永 5	1852	誠忠義士肖像 邑松三太夫高直	邑松三太夫高直		F76	白目薄青
嘉永 5	1852	誠忠義士肖像 神崎弥五郎則休	神崎弥五郎則休		F76	白目端青
嘉永 5	1852	木曾街道六十九次之内四十一 野尻 平井保昌・袴垂保輔	袴垂保輔		I26	
嘉永 5	1852	甲越川中島大合戦		馬	B172	白目黄
嘉永年間	1848~54	甲越勇将伝 武田家二十四将 武田左馬之助信繁	武田左馬之助信繁		E27	目の外赤
安政元年	1854	通俗三国志之内 孔明六擒孟獲		大将馬忠 馬	B173	
安政 2	1855	川中嶋合戦	上杉謙信・武田信玄・蜂河野善右衛門	馬	A93	白目黄 黒目端灰色
安政 2	1855	和漢準源氏 乙女 天羅国班足王悪華陽夫人願	班足王		B171	白目端青
安政 2	1855	和漢準源氏 野わき 市原野鬼童丸牛皮隠頼光?	鬼童丸		D84	
安政 5	1858	牛若鞍馬修行図		僧正坊	B175	白目端青
文久元年	1861	酒田公時・碓井貞光・源次嗣と妖怪(天保頃の版下によるか)		妖怪	B177	白目端青 黒目周灰色
版下絵・版本・肉筆など						
天保 6~7 頃	1835~36 頃	薩摩守平忠度(版下絵)	平忠度・岡部六弥太・免原田子平		A49	白目端青・黒目茶黒
天保 9	1838	『昔旧在多士佐』(下瀬加賀)		鬼	I174	
嘉永 5	1852	誠忠義士肖像 小野寺幸右エ門秀当(版下絵)	小野寺幸右エ門秀当		B挿10	
嘉永 5	1852	誠忠義士肖像 矢間喜兵衛(草稿)	矢間喜兵衛		E228p	
文久元年以降	1861 以降	『和漢英雄画伝』遺稿を死後出版	簡井浄明・張飛・祐保・景光・晁蓋・四王天但馬守	鬼・馬・妖怪・虎	H	
不明		水を飲む大蛇(肉筆)		大蛇	D132	白目に灰色の筋

十号 目次

「伯の母」の話——歴史考察資料としての説話文學——	小堀桂一郎
『伊勢物語』成立私考 第四稿——『伊勢集』冒頭歌群とのかかわり——	井上 英明
「企業家精神」の時代	正慶 孝
闇の中への照射——モーム『コスモポリタンズ』の手法について——	和田 正美
「不亦楽乎」の俗解——原文を忘れた漢文訓読の危険性——	古田島洋介
キリシタン版における「分」の用法について	柴田 雅生
中国の新聞紙面研究についての考察（上）	馬 挺
第一回～第九回 目次	
漢字奇特的文化功能（中）	万 恵洲
中国の言語	三木 友里 呉 安其
ポルトフォリオ作成によるリーディング指導——一般教育英語をより魅力あるものに——	深澤 清
「小楽節」のかなた（2）——「スワンの恋」と「ヴァントウイユのソナタ」——	丸山 正義
リヒテンベルクの生涯——大学入学の頃の教師たち——	佐々木 滋
A Legacy of World War Two	牛村 圭
——The Tokyo War Crimes Trial and its Intellectual Influence upon Postwar Japan——	
To what extent can China solve its energy problems by cooperation with Japan?	森本 名美
「資料紹介」大韓帝国末期社会運動団体会員名簿(1)	林 雄介
研究成果及び活動一覧（平成十三年一月～十二月）	

CONTENTS

KOBORI Keiichiro	The Tale of a Lady in Heian Period —The Narrative Stories Which Help Consider Japanese History—
INOUE Eimei	On the Formation of the Tales of Ise (Part IV)
SHOKEI Takashi	The Age of Entrepreneurship
WADA Masami	On Maugham's 'Cosmopolitans'
KOTAJIMA Yosuke	Fukuda Tsuneari's Misunderstanding about the Word 'Yi' of the <i>Analects of Confucius</i>
SHIBATA Masao	'Bun' as a form noun in the books published by early Christianity in Japan.
MA Tei	Researches on the Layout of Chinese Newspaper ...
WAN Huizhou	The Singular Cultural Function of the Chinese Characters (Part II)
MIKI Yuri WU Anqi	The Language of China
FUKASAWA Kiyoshi	The Discovery of the Self by Multiple Reading
MARUYAMA Masayoshi	Au-delà de la Petite Phrase (2)
	—《l'amour de Swann》et 《la sonate de Vinteuil》
SASAKI Shigeru	Lichtenberg's life
	—Teaching staff with Lichtenberg admitted into university—
USHIMURA Kei	A Legacy of World War Two
	—The Tokyo War Crimes Trial and its Intellectual Influence upon Postwar Japan—
MORIMOTO Nami	To what extent can China solve its energy problems by cooperation with Japan ?
HAYASHI Yusuke	[An Introduction to the Sources] Membership Lists of Social Movement Organizations in the Last Years of the Great Han Empire

十一号 目次

古代に於ける時間秩序感覚——『古今集』巻頭の年内立春歌に就いて——	小堀桂一郎
『伊勢物語』成立私考 第五稿——『大和物語』とのかかわり——	井上 英明
現代的教養とは何か……	正慶 孝
ハンチントンの日本論について……	和田 正美
訓読文を読む順序——返り点の〈作用領域〉概念の導入……	古田島洋介
永遠に若く、そして美しく……	牛村 圭
新出の東北大学図書館本『承安五節絵巻』模本について……	山本 陽子
中国の新聞紙面研究についての考察（下）……	馬 挺
一九三〇年代宮城県の綴方教育と広瀬小学校……	小田嶋 悟
汉字奇特的文化功能（下）……	万 恵洲
“Patterns of Conquest”: Australian Fiction through the Occupation of Japan ……	加藤めぐみ
A Struggle to Find Religious Meaning: The Poems of R. S. Thomas……	深澤 清
グスタフ・マラー 4 友情と賞賛 音楽院卒業（一八七六—一八七八）……	アンリ＝ルイ・ド・ラ・グランジュ 丸山 正義訳
研究成果及び活動一覧（平成十四年一月～十二月）	
平成十四年日本文化学部共同研究会	

CONTENTS

KOBORI Keiichiro	How Ancient People Felt About Time.
INOUE Eimei	On the Formation of the Tales of Ise (Part V)
SHOKEI Takashi	On Cultivation
WADA Masami	Samuel P. Huntington's Concept of Japan
KOTAJIMA Yosuke	The Reading Order of <i>Kundoku</i> Sentences with Return Marks
USHIMURA Kei	Forever Young, Forever Beautiful
YAMAMOTO Yoko	The Shouan Emaki Owned by Tohoku University Library
MA Tei	Researches on the Layout of Chinese Newspaper (Part II)
ODAJIMA Satoru	A Study on Tsuzurikata Education in the 1930's, Miyagiken Hirose Primary School
WAN Huizhou	The Singular Cultural Function of the Chinese Characters (Part III)
KATO Megumi	"Patterns of Conquest": Australian Fiction through the Occupation of Japan
FUKASAWA Kiyoshi	A Struggle to Find Religious Meaning : The Poems of R. S. Thomas.....
LA GRANGE, Henry-Louis de	Gustav MAHLER 4 Amitiés et Admirations, Sortie du Conservatoire, traduit par MARUYAMA Masayoshi

十二号 目次

小堀桂一郎、田中敏両先生を送るの辞	井上 英明
自記年譜	田中 敏
自記年譜	小堀桂一郎
語史的「自由」論——備忘録より——	小堀桂一郎
『竹取物語』登場人物「性格論」第二稿——帝・かぐや姫・翁を中心に——	井上 英明
フランスと日本への眼差し——篠澤秀夫『フランス三昧』にこと寄せて——	和田 正美
『大正天皇御製詩集』補訂——補遺／断片／校訂・異文——	古田島洋介
仮名資料における文字列の解釈について——『土佐日記』二月六日条「いを不用」をめぐる考察——	柴田 雅生
国立能楽堂の二十年——創立二十周年に寄せて——	田村 良平
情報社会の論理と心理	正慶 孝
マンガ以前の日本絵画の時間との空間表現——マンガのコマと対比において——	山本 陽子
戦後日本精神史のなかの昭和二十三年——『菊と刀』と東京裁判と——	牛村 圭
中国語新聞の紙面編集の史的考察（上）	馬 挺
「北方教育社」同人鈴木正之の実践と「生活教育」についての考察——戦前における「特別活動」の実践として——	小田嶋 悟
川端康成の「犯罪」小説——『鬼熊』の死と踊子——「それを見た人達」「田舎芝居」「金塊」——	高橋 真理
書評岡田暁生「監修」『ピアノを弾く身体』（春秋社、平成十五年）	古田島洋介
グスタフ・マラー 5 過渡期 不安定、貧困、情熱 ヨゼフィーネ・ボイスル 社会主義者・菜食主義者マラー	
リービナーとの出会い（一八七八—一八八〇）	アンリールイ・ド・ラ・グランジュ
丸山 正義	森本 名美
Considering the Japanese Regional Concept of East Asia	浅野 正彦
The Introduction and Transformation of a Western Political Institution to Japan: Electoral Rules in the House of Representatives	
検査間相關関係から見る各種質問紙性格検査の妥当性の検討——YG性格検査、MAS不安検査、淡路式向性格検査、IDV	宗内 敦
独自性検査、精研式パーソナリティ・インベントリー、オールポート・ヴァーノン人格検査——	佐佐木茂美
『散文トリスタン物語』における「鉱物誌」ないしその出典に関する一考察——鉱物の介入と『物語』の企み——	
研究成果及び活動一覧（平成十五年一月～十二月）	

CONTENTS

INOUE Eimei	A Parting words in honor of Professors : KOBORI Keiichiro and TANAKA Satoshi
TANAKA Satoshi	Autobiographical Notes
KOBORI Keiichiro	Autobiographical Notes
KOBORI Keiichiro	A Chronological Interpretation of <i>Jiyū</i> (Freedom/Liberty)
	——From My Occasional Notes——
INOUE Eimei	“Characterēs” in the Taketori monogatari (<i>the Tale of Bamboo Cutter</i>)
	——The old man, the Shining Princess, and the Emperor——
WADA Masami	Looking Both at France and at Japan.....
KOTAJIMA Yosuke	A Supplement to the <i>Selected Chinese Poems of the Emperor Taisho</i>
SHIBATA Masao	How to identify the character strings in <i>Kana-bun</i> ...
TAMURA Ryohei	First Twenty Years, The National Noh Theatre of Japan, contributed this study for the theatre's twentieth anniversary.
SHOKEI Takashi	A Contribution to Post-Industrial Society
YAMAMOTO Yoko	The Presentation of Time and Space at Japanese Arts Before Meiji Period
	——on the Comparison with Panel Arrangement of Comics——
USHIMURA Kei	The Year of 1948 in the Context of the Post-War Japanese Intellectual History
	——The Significance of <i>The Chrysanthemum and the Sword</i> and the Tokyo War Crimes Trial——
MA Tei	Historical Researches on the Layout of Chinese Newspaper (Part I)
ODAJIMA Satoru	A consideration about the practice of a “Hoppo Kyoikusha” member Masayuki Suzuki and “Seikatsu Kyouiku”
	——As a practice of the Extra-Curriculum Activity in the days before the war——
TAKAHASHI Mari	On “Crime Novels” of Kawabata Yasunari
KOTAJIMA Yosuke	Book Review <i>Piano-Performing as a Physical Action</i> , ed. under the supervision of OKADA Akio...
LA GRANGE, Henry-Louis de	La Grange, Henry-louis de : Gustav MAHLER, les années intermédiaires, instabilité, misère et passion, Josephine Poisl, Mahler socialiste et végétarien, rencontre avec Lipiner (1878-1880), traduit par MARUYAMA Masayoshi.
MORIMOTO Nami	Considering the Japanese Regional Concept of East Asia
ASANO Masahiko	The Introduction and Transformation of a Western Political Institution to Japan : Electoral Rules in the House of Representatives.....
MUNEUCHI Atsushi	A consideration of the validity of personality inventories
SASAKI Shigemi	<i>Le Roman Tristan en Prose</i> et le Régne Minéral

十三号 目次

学者 佐佐木茂美先生	井上 英明
自記年譜	佐佐木茂美
漢文訓読における送り仮名——体系的説明の試み——	古田島洋介
伴大納言絵詞鎮魂説の再検討——脇役の顔貌表現を中心に——	山本 陽子
東海大学付属図書館蔵『馬内侍集』について——紹介と翻刻——	高橋 由記
動植物名の表記について	南川 隆雄
日本人の『フランダーズの犬』	井上 英明
『菊と刀』の読み方と比較文化研究の現代的位相	吉田 和久
第一人称単数の社会へ向けて	正慶 孝
中国語新聞の紙面編集の史的考察（下）	馬 挺
書評 外國語・外國文學と日本人——斎藤兆史・野崎敏『英語のたくらみ、フランス語のたわむれ』（東京大學出版會 二〇〇四年）を讀んで——	和田 正美
「国際シンポジウム」と「国際學術講演會」前後（報告と追記）	佐佐木茂美
チベット民族の心——ハタ「 <u>カルサ</u> 」——	三木 友里
War and Literature in Japan	牛村 圭
R. S. Thomas: Silent God in Modern Technocracy	深沢 清
The Representations of the Japanese in Contemporary Australian Literature	加藤めぐみ
翻訳教育のススメ	柴田耕太郎
「北方教育社」同人田村修二の実践と学級経営についての研究	小田嶋 悟
グスタフ・マラー 5（承前） 過渡期 不安定、貧困、情熱 ヨゼフィーネ・ポイスル 社会主義者・菜食主義者	丸山 正義
マラー リーピナーとの出会い（一八七八—一八八〇）	
研究成果及び活動一覧（平成十六年一月～十二月）	

CONTENTS

INOUE Eimei	A Parting words in honor of Professor SASAKI Shigemi
SASAKI Shigemi	Autobiographical Notes
KOTAJIMA Yosuke	An Essay on “Okurigana” in Kanbun-kundoku
YAMAMOTO Yoko	On the Painting Schrolls of Ban Dainagon’s Story
TAKAHASHI Yuki	An Introduction and Reprinting of <i>Uma no Naish Shū</i> in Tokai University
MINAMIKAWA Takao	A Note on How to Express Animal and Plant Names in Japanese
YOSHIDA Kazuhisa	A Reading of <i>The Chrysanthemum and the Sword</i> in the Contemporary Perspective of Comparative Culture
INOUE Eimei	A Dog of Flanders in Japan
SHOKEI Takashi	Towards “The First Personal Singular Society”
MA Tei	Historical Researches on the Layout of Chinese Newspaper (Part II)
WADA Masami	Foreign Languages and Literatures and Japanese People
SASAKI Shigemi	Le Symposium International et la Conférence Scientifique Internationale à l’occasion du 40 ^e anniversaire de la fondation de l’Universite Meisei.
MIKI Yuri	Tibet race’s mind— <i>Hata</i> —
USHIMURA Kei	War and Literature in Japan
FUKASAWA Kiyoshi	R. S. Thomas : Silent God in Modern Technocracy
KATO Megumi	The Representations of the Japanese in Contemporary Australian Literature.....
SHIBATA Kōtartō	An Encouragement of Teaching Translation
ODAJIMA Satoru	Research on the practice of “Hoppo Kyoikusha” coterie Shuji Tamura and the class management ...
LA GRANGE, Henry-Louis de	La Grange, Henry-louis de : Gustav MAHLER, les années intermédiaires, instabilité, misère et passion, Josephine Poisl, Mahler socialiste et végétarien, rencontre avec Lipiner (1878—1880), (Suite) traduit par MARUYAMA Masayoshi.

十四号 目次

返り点を正しく打つために——現行返り点法の要領——	古田島洋介
近代市民社会の奴隷的性格について	正慶 孝
シエイクスピアの或る場面の翻譯について	和田 正美
古代における伊勢神宮と天皇	三橋 正
聖衆来迎寺本六道絵「天道」幅小考	山本 陽子
綱吉の孝行奨励と諸作品の成立——駿河国五郎右衛門をめぐる(一)	勝又 基
明星大学蔵 奈良絵本『新曲』釈文	柴田 雅生
頭脳錠前師(抄訳)	フリードリヒ・デュレンマツト 佐々木 滋訳
『夜の寢覚』の女一宮——降嫁した内親王の問題として——	高橋 由記
「感情」の歌学史——心敬から芭蕉へ——	永田 英理
訳注・ノート「マオリ」の民話	井上 英明
一九六〇年代以降のオーストラリア文学にみる太平洋戦争の記憶	加藤めぐみ
ペーター・ハントケの文学的想像力——『サント・ヴィクトワールの教え』	服部 裕
が意味するもの	
グスタフ・マラー 5 (承前)	
過渡期 不安定、貧困、情熱 ヨゼフィーネ・ボイスル	
社会主義者・菜食主義者マラー リーピナーとの出会い(一八七八—一八八〇)	アンリ・ルイ・ド・ラ・グランジュ 丸山 正義訳
高齢者同士のセルフ・ヘルプ・グループの特質と課題	
——米国における相互支援活動に焦点をあてて——	間野 百子
条件文の論証価値について——言語内論証理論批判——	酒井 智宏
研究成果及び活動一覧(平成十七年一月～十二月)	

CONTENTS

KOTAJIMA Yosuke	How to Use the Return Marks in Kanbun-kundoku
SHOUKEI Takasi	The Road to Serdom
WADA Masami	On Japanese Translacion of a Scene in One of Shakespeare's Plays
MITSUHASI Tadashi	Ise Jingū and Emperor in Ancient Times.....
YAMAMOTO Yoko	On the hanging scroll of Tendō of Rokudō-e at Shōju-raigōji
KATUMATA Motoi	Tokugawa Tsunayoshi's encouraging policy for filial piety and production of workr of art ——about Goroemon in Suruga State (1)
SHIBATA Masao	A reprinting of the Nara-e hon 'Shinkyoku' in Meisei University.
Friedrich Dürrenmatt	Der Gedankenschlosser/translated by SASAKI Shigeru
TAKAHASI Yuki	Onna Ichinomiya in "Yoru No Nezame" ——as an issue of imperial princess who married...
NAGATA Eri	A Study of "Kansei" Imagery——From Shinkei to Basho——
INOUE Eimei	Notes and Comments on the MAORI Folktales
KATO Megumi	Australian Literary Reflections on the Pacific War since the 1960s
HATTORI Hiroshi	Peter Handkes literarische Phantasie Was "Die Lehre der Sainte-Victoire" bedeutet.....
LA GRANGE, Henry-Louis de	La Grange, Henry-louis de : Gustav MAHLER les années intermédiaires, instabilité, misère et passion, Josephine Poisl, Mahler socialiste et végétarien, rencontre avec Lipiner (1878-1880), (Suite) traduit par MARUYAMA Masayoshi.
MANO Momoko	The Characteristics and Challenges of self-help Groups among the Elderly : Focusing on Mutual Support Activities in the United States
SAKAI Tomohiro	À propos de la valeur argumentative des conditionnelles : critique de la théorie de l'argumentation dans la langue

十五号 目次

高邁——篆書に取り組む——	(口絵)	石川圭一
追悼 矢野浩三郎教授——世にあるも世を去るも——		和田正美
井上英明先生を送る惜別の辞		古田島洋介
「偽りの力」をあたえてしまった現代技術		正慶孝
ロバート・リンド小論		和田正美
復文の地平——失はれた学習法の復活を目指して——		古田島洋介
崇る御衣木と造仏事業——なぜ霊木が仏像の御衣木に使われたのか——		山本陽子
律令祭祀の変質と律令外祭祀		三橋正
藤井懶斎年譜稿(一)——出生から正保二年まで		勝又基
明星大学蔵 奈良絵巻『十番切』釈文		柴田雅生
橘則光について——『枕草子』を中心に——		高橋由記
『マハーバーラタ』における戦士の変装——ビーマはなぜ料理人に変装したのか		沖田瑞穂
ことばと自然の物語への旅立ち ペーター・ハントケの『反復』についての考察		服部裕
藏传佛教在台湾		三木友里
グスタフ・マラー 5 (承前)		
過渡期 不安定、貧困、情熱 ヨゼフィーネ・ボイスル		
社会主義者・菜食主義者マラー リーピナーとの出会い(一八七八—一八八〇)		アンリ・ルイ・ド・ラ・グランジュ
「戯曲の翻訳について」		丸山正義訳
日本語における文的トートロジーと述語的トートロジー		柴田耕太郎
研究成果及び活動一覧(平成十八年一月〜十二月)		酒井智宏

CONTENTS

ISHIKAWA Keiichi	Lofty——plod away at the studies of “Tensho” (frontispiece)
WADA Masami	Reminiscence Of The Late Professor YANO Kōzaburō
KOTAJIMA Yosuke	My Parting Words in Honor of Professor INOUE Eimei.....
SHOKEI Takashi	The Modern Technology and “False Force”
WADA Masami	On The Characteristics Of The Essays By Robert Lynd
KOTAJIMA Yosuke	For the Sake of the Revival of <i>Fukubun</i> or retranslation into the Original Classic Chinese Text——its Short History and New Teaching Method
YAMAMOTO Yoko	On the Legends of the Woods of Buddhist Statues.
MITSUHASHI Tadashi	“The Vicissitude of Ancient National Ritual in Japan ; Ritsuryō Ritual and Out of Ritsuryō Ritual”
KATSUMATA Motoi	Notes of a chronological record of FUJII Ransai(1) ——From his birth to 1645
SHIBATA Masao	A reprinting of the Nara-emaki ‘ <i>Jubangiri</i> ’ in Meisei University.
TAKAHASHI Yuki	On Tachibana-no-Norimitsu
OKITA Mizuho	The Disguises of the Warriors in the <i>Mahābhārata</i> ——Why does Bhīma Disguise in a Cook ?
HATTORI Hiroshi	Aufbruch zur Erzählung der Worte und der Natur Über “Die Wiederholung” von Peter Handke.....
MIKI Yuri	Tibetan Buddhism in Taiwan
LA GRANGE, Henry-Louis de	La Grange, Henry-louis de : Gustav MAHLER les années intermédiaires, instabilité, misère et passion, Josephine Poisl, Mahler socialiste et végétarien, rencontre avec Lipiner (1878-1880), (Suite) traduit par MARUYAMA Masayoshi.
SHIBATA Kōtarō	[Drama Translation]
SAKAI Tomohiro	Sentential and predicative tautologies in Japanese

十六号 目次

詩人の態度——高村光太郎の戦争詩に即して——	和田 正美
ドラッカー対ドラッカー……	正慶 孝
正慶 孝教授の遺業——哀惜の念を籠めて……	山下 善明
梁啓超『和文漢読法』（盧本）簡注——復文を説いた日本語速習書——	古田島洋介
西田幾多郎の「場所」に見る「形なきものの形」……	上原麻有子
日清戦争をめぐる子どもの情報環境……	磯部 敦
天人から天女へ——なぜ五衰の天人が女性とされるようになったのか——	山本 陽子
乳海攪拌神話とラゲナロク……	沖田 瑞穂
『狭衣物語』の一品宮——降嫁した内親王の問題として（二）——	高橋 由記
平安時代の古記録と『小右記』長元四年条……	三橋 正
藤井懶斎年譜稿（二）——慶安年間から延宝三年まで……	勝又 基
書評 岡田暁生『西洋音楽史——「クラシック」の黄昏』……	古田島洋介
Darwin and Representations of the Japanese 'Other' in Australian Writing……	加藤めぐみ
生活現場における発達障害を抱える子どもの理解と支援のありかたを考える……	西本 絹子
健脚が生む物語……ベーター・ハントケの風景を追う旅の報告……	服部 裕
グスタフ・マラー 6	
『嘆きの歌』 ベートーヴェン賞	
初めての契約 ハルとライバツハ（一八八〇—一八八二）……	アンリ・ルイ・ド・ラ・グランジュ
研究成果及び活動一覧（平成十九年一月～十二月）	丸山 正義 訳

CONTENTS

WADA Masami	How TAKAMURA Kotaro Wrote His Poems Dealing With War.
SHOKEI Takashi	Drucker versus Drucker
YAMASHITA Yoshiaki	Reminiscence of The Late Professor SHOKEI Takashi
KOTAJIMA Yosuke	Liang Qichao's <i>Hewen Handu-fa or How to Read Japanese in Chinese</i> with a bibliographical introduction and brief notes.
UEHARA Mayuko	Seeing "the form without form" in Nishida Kitarō's Concept of "Locus"
ISOBE Atsushi	The Media Environment of the Child in The Sino-Japanese War
YAMAMOTO Yoko	On the Change of TENNIN (天人) to TENNYO (天女)
OKITA Mizuho	The Myth of the Churning of the Ocean and Ragnarök
TAKAHASHI Yuki	Ippon no miya in "The Tale of Sagoromo" -as an issue of imperial princess who married (II)
MITSUHASHI Tadashi	Heian nobles's Diary and SHŌYŪKI (小右記)'s text in 1031
KATSUMATA Motoi	Notes of a chronological record of FUJII Ransai (2) —From 1648 to 1675
KOTAJIMA Yosuke	Book Review : <i>The History of Western Music</i> by OKADA Akio
KATO Megumi	Darwin and Representations of the Japanese 'Other' in Australian Writing
NISHIMOTO Kinuko	Understanding and Intervention to Children with Developmental Disorders in their daily life ...
HATTORI Hiroshi	Ein Reisebericht über die Landschaften in der Literatur von Peter Handke
LA GRANGE, Henry-Louis de	Gustav MAHLER, 6 <i>DAS KLAGENDELIED</i> , le prix Beethoven, les premiers engagements, Hall et Laibach (1880-1882), traduit par MARUYAMA, Masayoshi.

十七号 目次

漢文訓読の固定性と流動性(初稿) — 複数訓読共存原理 —	古田島洋介
『平家物語』 絵本・絵巻の挿絵について — 明星大学図書館所蔵本を中心に —	山本陽子
附 林原本・明暦版本・真田本・明星本場面对照表	
明星大学所蔵『平家物語』 絵本における撥音表記についての一報告	柴田雅生
能く竹雪の改訂上演	田村良平
『諸社禁記』 について — 古代から中世への転換期における穢の諸相 —	三橋 正
藤井懶斎年譜稿(三) — 延宝五年から貞享四年まで	勝又 基
『新体詩歌』 の出版を支えた人々 — 未紹介資料と諸本調査をもとに	青山英正
九鬼周造の「偶然」と「名」 — 哲学から文芸論へ	上原麻有子
スギ生葉に生息する <i>Pestalotiopsis</i> 糸状菌の培養特性	篠山浩文
デュニー教育論において使用される諸概念の考察	菱山覚一郎
R. S. Thomas: <i>Counterpoint</i> — 見開きページに秘められたもの —	深澤 清
Narrating the 'Other' at War: The Pacific War and the Japanese in Australian Literature	加藤めぐみ
文学の自律性とその限界 — ペーター・ハントケの "Die Tablas von Daimiel" を手掛かりにして —	服部 裕
ブルーストと印象主義	丸山正義
研究成果及び活動一覧(平成二十年一月〜十二月)	

CONTENTS

KOTAJIMA Yosuke	Stability and Mobility in <i>Kanbun-kundoku</i> , An Essay on the Coexistence of Various “ <i>kundoku</i> ” Readings·····
YAMAMOTO Yoko	On the Picture Books and Scrolls of <i>The Tale of the Heike</i> in the Meisei University Collection·····
SHIBATA Masao	The Notation of the Japanese Syllabic Nasal in the Picture Books of <i>The Tale of the Heike</i> in the Meisei University Collection·····
TAMURA Ryohei	Reinterpreting and Revitalizing the Noh <i>Takenoyuki</i> (<i>Snow of Bamboo</i>) ·····
MITSUHASHI Tabashi	On <i>Shosha-Kinki</i> (<i>Taboo in Shrines</i>): Various Aspects of Impurity from the Late Heian to the Early Kamakura Period·····
KATSUMATA Motoi	Notes of a Chronological Record of FUJII Ransai (3) — From 1677 to 1687·····
AOYAMA Hidemasa	People who Supported the Publication of <i>Shintai-</i> <i>Shiika</i> (<i>New Style Poems and Songs</i>): Unknown Materials and Versions·····
UEHARA Mayuko	Kuki Shuzos “Naming” and “Contingency”: From Philosophy to Literary Theory ·····
SHINOYAMA Hirofumi	Cultural Properties of <i>Pestalotiopsis</i> spp. Isolated from Healthy Sugi (<i>Cryptomeria Japonica</i>) Leaves ·····
HISHIYAMA Kakuichiro	A Study of the Concepts in John Dewey’s Educational Thought·····
FUKASAWA Kiyoshi	R. S. Thomas: <i>Counterpoint</i> —in Viewing a Double Page Spread ·····
KATO Megumi	Narrating the ‘Other’ at War: The Pacific War and the Japanese in Australian Literature ·····
HATTORI Hiroshi	Über Peter Handkes <i>Die Tablas von Daimiel</i> : Ob Handkes Literatur der Wirklichkeit gegenüber die Autonomie verloren hat? ·····
MARUYAMA Masayoshi	Proust et l'impressionnisme·····

十八号 目次

『これならわかる返り点』後始末——陳謝・回答・懸念——	古田島洋介
僧侶の恋歌（一）勅撰集編（上）……	前田 雅之
『左経記』治安二年（二〇三三）条書下し文……	三橋 正
連鎖する志——安政の大獄における水戸〈義民〉の詠歌……	青山 英正
能〈墨染櫻〉完曲の復興上演について……	田村 良平
あばら家の美学——絵巻に描かれた荒廃——	山本 陽子
自然と歴史——西尾幹二著『江戸のダイナミズム』からの小考……	山下 善明
ペーター・ハントケの『真の感覚の時間』における主観主義的な語りが意味するもの……	服部 裕
翻訳と解釈……	上原麻有子
インドネシアにおける地域語・民族語の使用実態——Bantik語の事例を中心に——	内海 敦子
剣道における踏み込み動作に関する研究……	金子 敬二 今福 一寿 共著
なぜその発想に至ったのか——発想展開を楽しむ——	篠山 浩文
『水の反映』——ジヴェルニーの「睡蓮の池」、モノとドビュッシーをめぐる随想……	丸山 正義
田園教会という選択——ある韓国キリスト教会の生き残り戦略——	秀村 研二
学童保育において発達障害をもつ子どもを支援するための職員間の連携作り……	西本 絹子
童話『幸福の王子』はなぜ「幸福」と言えるのか……	深澤 清
観客を挑発する異化効果——プレヒト『アルトゥロ・ウイの（抑えることもできた）興隆』——	岡田 恒雄
The Influence of Hinduism on Thai Buddhism ……	E・R・ムーニー
研究成果及び活動一覧（平成二十一年一月～十二月）	

CONTENTS

KOTAJIMA Yosuke	Supplementary Explanations for <i>Korenara-wakaru Kaeriten</i> of my own authorship
MAEDA Masayuki	Monks' Koiuta, The Japanese Traditional Lyrics on Love, in Chokusenshuu, Vol. 1.
MITSUHASHI Tadashi	Sakeiki in 1022: Reading Practice in Japanese
AOYAMA Hidemasa	A Chain of Spirits: Waka of "Gimin" (the Righteous People) from Mito in the Ansei Purge
TAMURA Ryohei	Sur la séance de pièce de Nô renaissant— «Sumizome-zakura»: le conte de l'esprit du cerisier transformant la couleur des fleurs en deuil
YAMAMOTO Yoko	On The Depictions of a Dilapidated House on Painting Scrolls
YAMASHITA Yoshiaki	Nature and History: Commentary on 'Dynamism in Edo' by Nishio Kanji
HATTORI Hiroshi	Eine Betrachtung über Peter Handkes "Die Stunde der wahren Empfindung". Warum konzentriert sich der Autor aufs Beschreiben der extremen Empfindungen von seinem Helden?
UEHARA Mayuko	Traduction et interprétation
UTSUMI Astuko	Domains of Ethnic Languages, Regional Languages, and the National Language: The Case Study of The Bantik Language in Indonesia
KANEKO Keiji IMAFUKU Kazuhisa	A Study on the FUMIKOMI Movement in Kendo
SHINOYAMA Hirofumi	My small conception
MARUYAMA Masayoshi	《Reflets dans l'eau》 — Essai sur Monet et Debussy autour de l'étang des nymphéas à Giverny
HIDEMURA Kenji	One choice for survival: A Case study of the Korean Presbyterian Church
NISHIMOTO Kinuko	Cooperation of After-school Child Daycare ("Gakudou-Hoiku") Teachers to Support Children with Developmental Disorders
FUKASAWA Kiyoshi	Why we can call him "The Happy Prince"?
OKADA Tsuneo	Der das Publikum provozierende Verfremdungseffekt —Bertolt Brechts „Der (aufhaltsame) Aufstieg des Arturo Ui“—
Eric R. MOONEY	The Influence of Hinduism on Thai Buddhism

十九号 目次

僧侶の恋歌(2) 勅撰集編(中) —— 八代集(『後拾遺集』『詞花集』) 所収歌の表現分析 ——	前田 雅之
能(戀重荷)の再構成・再演出について……	田村 良平
『栄花物語』の描く二后並立 —— 後冷泉朝後宮の特徴に関連して ——	高橋 由記
藤井懶斎年譜稿(四) —— 元禄元年から元禄十年まで……	勝又 基
『落語「宮戸川」の後半にかくされた趣向について」……	松本 尚久
柳瀬正夢「五月の朝と朝飯前の私」の制作動機 —— モダンボーイとカミソリ ——	山本 陽子
ハイデガーから道元へ —— 同一性の概念を橋として ——	山下 善明
宮沢賢治「注文の多い料理店」論 —— 獵師・犬・団子への着目……	青山 英正
西田幾多郎の身体論に基づく一つの考察 —— 作り作られる身体としての顔 ——	上原麻有子
二〇一一年一月 出エジプト記……	三橋 正
共同研究報告 「明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究とWEB公開、教育実践への応用」……	柴田 雅生 山本 陽子
個人主義の意味 —— 近代民主主義の価値観の理解のために ——	服部 裕
ブルーストの音楽 —— 『音楽家ブルースト』再読 ——	丸山 正義
タラウド語使用地域の言語使用と言語意識 —— インドネシア国、北スラウェシ州における民族語使用実態 ——	内海 敦子
ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言の複合語アクセント規則……	三村 竜之
R・S・トマスからの「贈り物」 —— 詩集 <i>Frequencies</i> を読む ——	深澤 清
共同研究報告 「明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究とWEB公開、教育実践への応用」……	勝又 道基 矢吹 道郎
研究成果及び活動一覧(平成二十二年一月～十二月)	

CONTENTS

MAEDA Masayuki	Monks' Koiuta, The Japanese Traditional Lyrics on Love, in Chokusenshuuu, Vol. 2.....
TAMURA Ryohei	Restructuring and redirecting 'Burden of Love', the Noh performance KOI-NO-OMONI
TAKAHASHI Yuki	Concomitance of the two empresses in "Eiga monogatari"
KATSUMATA Motoi	Notes of a chronological record of FUJII Ransai (4) — From 1688 to 1697.....
MATUMOTO Naohisa	Consideration concerning the latter half of Rakugo story titled "Miyatogawa".
YAMAMOTO Yoko	On the Motivation for Making "Gogatsu-no-Asa-to-Asameshimae-no-Watashi" Painted by YANASE Masamu
YAMASHITA Yoshiaki	From Heidegger to Dougen —linked by the concept: Identity—
AOYAMA Hidemasa	MIYAZAWA Kenji's "The Restaurant of Many Orders": Hunter, Dogs and <i>Dango</i>
UEHARA Mayuko	Une réflexion fondée sur la théorie du corps de Nishida Kitarô — le visage comme corps créant et créé
MITSUHASHI Tadashi	Exodus from Egypt: January 2011
SHIBATA Masao YAMAMOTO Yoko	A fundamental study of Japanese traditional picture books of Meisei University's library and the publication on the WEB site- Application for actual education-
HATTORI Hiroshi	A study on meanings of the individualism in the modern history — For understanding of the democratic values —
MARUYAMA Masayoshi	La musique proustienne — relecture de «Proust musicien»
UTSUMI Astuko	Language Use and Language Attitude in Talaud — The Actual Usage of Ethnic Languages in North Sulawesi, Indonesia —
MIMURA Tatsuyuki	Compound Accent Rules in Sandnes Norwegian.....
FUKASAWA Kiyoshi	Gifts from that one — Reading of R. S. Thomas: <i>Frequencies</i> —
KATSUMATA Motoi YABUKI Michirou	A fundamental study of Japanese traditional picture books of Meisei University's library and the publication on the WEB site- Application for actual education-



図1 ノルウェー全体から見た Rogaland Fylke の位置
(<http://en.wikipedia.org/wiki/Sandnes> より転載)



図2 Rogaland Fylke における Sandnes Kommune の位置
(<http://da.wikipedia.org/wiki/Sandnes> より転載)

- p. 147-161.
- 三村竜之 (2009). 「ストレスアクセントの多様性: ストレスアクセントの類型論に向けて」.
『東京大学言語学論集』29, pp. 183-193.
- 三村竜之 (2010a). 「ノルウェー語 Sandens (サンネス) 方言のアルファベット頭文字語の
音韻論」. 日本音韻論学会 2010 年度春期研究発表会 (2010 年 6 月 18 日、産学公連携セ
ンター・秋葉原サテライトキャンパス).
- 三村竜之 (2010b). 「ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言の複合語アクセント規則」.
『日本言語学会第 140 回大会予稿集』, pp. 182-187.
- 三村竜之 (2011a). 「ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言の複合語アクセント規則」.
『明星大学研究紀要【人文学部・日本文化学科】』第 19 号, pp. 63-77.
- 三村竜之 (2011b). 「ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言におけるアルファベット頭文
字語の音韻論」. 『音韻研究』第 14 号, pp. 19-26.
- 三村竜之 (2011c). 「ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言のアクセント: アクセントの
抽出とその弁別的特徴」. 『日本言語学会第 143 回大会予稿集』, pp. 244-249.
- Mimura, Tatsuyuki (2009). *Issues in Danish Word-prosody: A Synchronic Description*. 未
刊行博士学位申請論文. 東京大学.
- Oftedal, Magne (1947). "Jærske okklusivar." *Norsk Tidsskrift for Sprogvidenskap* 14,
pp. 229-235.
- Oftedal, Magne (1972). "Rural and urban dialects in a corner of Norway." Eds., Evelyn
Scherabon Firchow, Kaaren Grimstad, Nils Hasselmo, Wayne A. O'neil. *Studies for
Einar Haugen: Presented by friends and colleagues*. The Hauge/Paris: Mouton,
pp. 419-436.
- Selmer, Ernst W. (1927). *Den musikalske aksent i Stavanger-målet*. Oslo: Det norske
videnskaps-akademi i Oslo.
- 上野善道 (1980). 「アクセントの構造」. 柴田武編. 『講座 言語 第一巻 言語の構造』. 東
京: 大修館書店, pp. 87-134.
- 上野善道 (1984). 「N 型アクセントの一般特性について」. 平山輝男博士古希記念会編.
『現代方言語学の課題 2 記述的研究篇』. 東京: 明治書院, pp. 167-209.
- 上野善道 (2001). 「日本語のモーラ、ラテン語のモーラ、英語のモーラ」. 『国語研究』64,
pp. 8-16.
- 上野善道 (2002). 「アクセント記述の方法」. 飛田良文、佐藤武義編. 『現代日本語講座 第
3 巻 発音』. 東京: 明治書院, pp. 163-186.
- Vanvik, Arne (1956). "Norske tonelag." *Maal og Minne* 1956, pp. 92-12. [Eds., Ernst
Håkon Jahr and Ove Lorenz. 1983. *Prosodi/Prosody* (Studier i norsk språkvitenskap
2). Oslo: Novus forlag, pp. 209-219. に再録]
- Vanvik, Arne (1979). *Norsk fonetikk: Lydlæren i standard østnorsk supplert med materiale
fra dialektene*. Oslo: Fonetisk institutt, Universitetet i Oslo.

が、問に対する返答といった文脈がない場合は文全体が一つのアクセント句を成し、*tidligt* がアクセント音調を担う。

- 9) 城生 (2008) は注において「私の教え子である福盛貴弘氏は福盛貴弘 (2002) において、強さと高さの中間にあるアクセントをツヨサの「ツ」とタカサの「カサ」のコンタミネーションから、「つかさアクセント」と命名している」と言及しつつ、「スウェーデン語やノルウェー語などでは、高さと強さは別に強さアクセントが区別されている。このような例を並べてみると、強さアクセントと高さアクセントだけではいささかオーバーロードであり、両者の中間にもうひとつ別の新たな分類上の名称を設けた方が妥当であるということになる」と自らの見解を述べている。
- 10) 拙論 (2009) で用いた用語に若干の改良を加えたが、未だに暫定的な名称であること点に留意されたい。今後、読者諸氏の批判や助言を仰ぎながらより適切な用語を模索したい。
- 11) ここで述べるモーラの有無に関する議論は、日本言語学会第 143 回大会における口頭発表の際に聴衆から頂いたコメントに基づいている。
- 12) この他にも、後日、聴衆の内のお一方から貴重な助言を頂いた。Sandnes 方言の特にアクセント音調の解釈に関するもので、「Acc2 には主強勢を担う音節に音調の下降があるが、Acc1 には下降がない」とする解釈案である。本稿では、この案を、日本語アクセント論の用語を借りて「無核説」と呼ぶことにする。「無核説」では、Acc1 の語における高平調は強勢の特性によるものとして捉えられるという。筆者なりに「無核説」の立場に立ち Sandnes 方言のアクセント音調を考察すると、Acc2 の語における下降調は主強勢を伴う音節が担う「下げ核」によるものであるが、Acc1 の語における高平調からの漸次的な音調の下降は、音調の自然下降によるものと考えられる。この立場に立つと、例えば、絶対語末の位置に主強勢の現れる Acc1 の語における下降調が音声学的により自然に説明でき、また、筆者の解釈案では必要となる「モーラ」の概念をそもそも必要とすることが無く、筆者のアクセント解釈を改善する上で利するところが大きい。しかしながら、Acc2 の語において当該音節の内部で起こる音調の下降が、モーラではなく音節に「下げ核」を与えることで果たして説明が可能かどうか、疑問も残る。いずれにしても、この「無核説」は検討に値する非常に魅力的な代案であり、今後、慎重にその検討を進めていきたいと思う。

参考文献

- アジア・アフリカ言語文化研究所 (1967). 『アジア・アフリカ言語調査表 上・下』。東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- Borgström, Carl Hj. (1938). "Zur phonologie der norwegischen Schriftsprache." *Norsk Tidsskrift for Sprogvidenskap* 9, pp. 250-273.
- Fox, Anthony (2000). *Prosodic Features and Prosodic Structure: The Phonology of Suprasegmentals*. Oxford: Oxford University Press.
- Hansen, Aage (1956). *Udtalen i moderne dansk*. København: Gyldendal.
- 早田輝洋 (1988). 「「アクセント」早わかり」. 『月刊言語』 Vol. 7, No. 3. 東京：大修館書店, pp. 32-39.
- 早田輝洋 (1999). 『音調のタイポロジー』。東京：大修館書店。
- 福盛貴弘 (2002). 「つかさアクセント考」. 『認知科学研究』 第一号. 室蘭認知科学研究会, pp. 21-40.
- 城生 佰太郎 (2008). 『一般音声学講義』。東京：勉誠出版。
- 亀井孝、河野六郎、千野栄一編著 (1996). 『言語学大辞典 第 6 巻 述語編』。東京：三省堂。
- 川上 葵 (1973). 『日本語アクセント法』。東京：学書房。
- Kristoffersen, Gjert (2000). *The Phonology of Norwegian*. Oxford: Oxford University Press.
- 窪 蘭晴夫 (2002). 「音節とモーラの機能」. 窪 蘭晴夫、本間猛編. 『音節とモーラ』。東京：研究社, pp. 1-96.
- 三村 竜之 (2008). 「デンマーク語モーラ説の批判的検討」. 『東京大学言語学論集』 27,

「音節」に加えて「モーラ」も備えているとされる言語に関しては、これらの議論を十分に経ることなく「モーラ」の有用性や普遍性ばかりが主張されてきた嫌いがある。

筆者は、既にデンマーク語のモーラに関しては私見を述べてきたが（三村 2008）、そこでは、上野（2001: 8）に倣い「音節は音声言語にとって不可欠であり、したがって自然言語の全てに必要な単位であると捉えるが、一方、モーラは持つ言語と持たない言語があり、当該言語の音韻現象を説明する上で必要ならば設定すべきである」という立場を貫いてきた。今後、Sandnes 方言に関してもこの立場に徹し、モーラの必要性について考察を進めていきたい¹²⁾。

今後は、上記の二点を中心に Sandnes 方言のアクセント体系のさらなる考察を進め、より詳細なアクセント体系の全体像の解明を目指したいと思う。

◆ 本稿は、日本言語学会第143回大会（2011年11月26日、大阪大学豊中キャンパス）での口頭発表の内容及び予稿集原稿（三村 2011c）に、追加並びに修正を加えて発展させたものである。口頭発表の際に有益なコメントを下された聴衆の方々、特に上野善道先生（東京大学名誉教授、国立国語研究所）、小林正人先生（東京大学大学院人文社会系研究科）、松浦年男先生（北星学園大学）の諸氏にこの場をお借りして深くお礼を申し上げる。
E-mail: m.tatsu@d8.dion.ne.jp

註

- 1) インフォーマントは Brede Tingvik Haave さん（1988 年生、男性）。大学進学のため首都 Oslo に移り住むまで Sandnes に居住。ご両親もおそらく Sandnes の出身であるとのこと。本研究の調査に尽力して下さった Tingvik Haave さんにこの場をお借りして心よりお礼申し上げます。
- 2) 例えば、Sandnes 方言では、強勢を伴う短母音が無声阻害音からなる子音連結に先行する場合、当該母音の末尾にわずかな無声化の生じる、いわゆる「前気音 preaspiration」が確認されているが（例: *jakke* [jáʰk.kə FL]「上着」）、本稿での音声表記では全て割愛した。なお、これまでの拙論（2011b、c）において前気音の語例として *kaffi*「コーヒー」を挙げていたが、これは筆者の誤りである。
- 3) たとえば、Bokmål で特徴的な「反舌音 retroflexes」は Sandnes 方言には無く、また Bokmål では舌尖の「はじき音 flap」（あるいは「ふるえ音 trill」）として現れる r の音が Sandnes 方言では（デンマーク語と同じく）「有声口蓋垂摩擦音」として現れる点が特徴的である。
- 4) 本稿で用いる略号は以下の通り: adj.「形容詞」、adv.「副詞」、fem.「女性」、inf.「動詞不定形（英文法でいう「原形」に相当）」、masc.「男性」、neut.「中性形」、pl.「複数形」、pres.「現在形」、sg.「単数形」。
- 5) Sandnes 方言に関するものではないが、ノルウェー語（おそらく Bokmål を指すと思われる）の（高さ、ピッチ）アクセントが「二型アクセント」や「語声調」に準ずるという言及は、亀井孝ほか編著（1995）、『言語学大辞典 第6巻 述語編』所収の「アクセント」の項にも見られる:（また、）語の長さにかかわらず2種類しかないという点では、（先に述べた）語声調ないし二型アクセントと似た性質のものである（p.7; 括弧は筆者）。
- 6) 「アクセント」という用語及び概念が研究分野や研究者により多様である点に関しては、例えば Fox（2000: 114-115）を参照されたい。
- 7) 以下に示す筆者のアクセント観は、筆者の恩師である上野善道教授の理論（例えば上野（1980, 2002））に多くを負っている。
- 8) アクセント句に関する詳細な議論は稿を改めざるを得ないが、本稿の議論を理解する限りにおいては、例えば英語などのイントネーション研究で唱えられている tone unit/group や intonation unit/phrase にほぼ相当するものと考えて差し支えない。なお、アクセント句の切り方は、それが被さる発話の意味内容に応じて変動しうる点に注意されたい。例えば、本文に引用した *Du må komme tidligst* は、(4a) に示したように *Må jeg komme tidligst?* という問いの返答としては “*Du må komme*” と “*tidligst*” という二つのアクセント句に切れる

持たないタイプのストレスアクセントを(暫定的に)「(律) 動的ストレスアクセント dynamic/rhythmical stress accent」と呼ぶことにする¹⁰⁾。

7. 結語

7.1 まとめ

以上、本稿ではノルウェー語 Sandnes 方言のアクセントに関して、特に音調型の音韻論的解釈並びに音調と強勢の相関関係に重点をおいて詳細に論じた。その結果、以下の三点を結論として導いた：1) Sandnes 方言の Acc1 と Acc2 はいずれも下降調という種類の音調から成り立っている；2) 主強勢を担う音節に対する音調の下降の相対的な位置の違い、すなわち Acc1 では当該音節の直後に、Acc2 では当該音節の内部に下降が現れる点が、Acc1 と Acc2 の音調型を区別する上で真に音韻論的に有意義な特徴である；3) Sandnes 方言のアクセントは、位置の異なる二種類の下降調のいずれかを伴う強勢がアクセント核であるストレスアクセントの一種である。

7.2 今後の課題

Acc1 と Acc2 の音調型の本質的な特徴や音調と強勢の間の相関関係など、本研究では Sandnes 方言のアクセントに関する重要な側面を明らかにしてきたが、その一方で、未だ十分に考察のなされていない点も残る。現時点では、次の二点が今後の研究課題として挙げられる。

まず第一に、アクセント核である主強勢の位置に関して。本研究では、例えば表 1 及び表 2 に示した語例からも読み取れるように、ひとまずは主強勢の位置が語の特定の音節に限定されないものとして扱ってきた。しかしながら、これは飽くまでも Sandnes 方言において実際に観察される強勢の型を列挙したに過ぎず、主強勢の分布を決定する音韻論的なメカニズムが背後にあるか否かについては全く議論してはいない。従って、今後の課題として、主強勢の分布が、例えば語(単純語)の音節数や音節構造、語種などの情報から予測可能であるかどうか、詳細に検討していく必要がある。

第二の課題としては、音調の下降を担う単位としてモーラを認定する必要があるかという点が挙げられる¹¹⁾。というのも、本研究で筆者が提案した音調の下降の位置の違い、すなわち主強勢を担う音節の内部での下降と直後での下降という違いを認めることは、上野善道教授の言(私信：2011 年 11 月 28 日)を借りるならば、「音節を割る」ことを要求し、自ずとモーラの有無の議論へと繋がるからである。

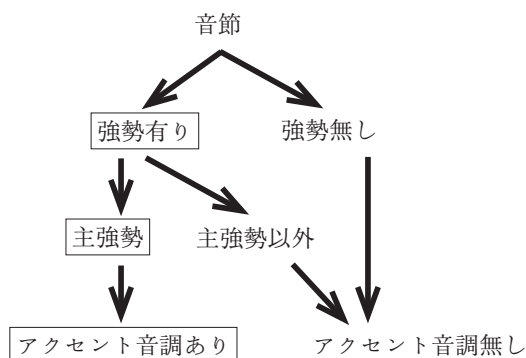
近年、音韻理論の領域では、世界の多くの言語において「音節」と「モーラ」が単一の韻律体系において共存し得る単位であると主張され、英語にもモーラの存在を認める立場が主流となりつつある(例：窪田 2002)。しかしながら、このような音韻理論の潮流に対して、筆者は懐疑的である。というのも、「音節」と「モーラ」の両方を持つ言語において、果たして「モーラ」がその言語の音韻論を記述する上で真に必要な単位であるか否かが十分に議論されているかどうか、甚だ疑問を感じるからである。「モーラ」に限らずいかなる言語単位も、「設定し得るか否か」という可能性の視点と「設定する必要性があるか否か」という存在意義の視点の両方から検討する必要があるが、少なくとも筆者の感ずるところでは、

(*<hormon* [ˈhɔ̃k.mó:n MH] 「ホルモン」 + *balance* [ˈba.láŋ.sə MHL] 「バランス」)

既に拙論(2011a: 67)において述べたように、Sandnes 方言では、複合語を形成する際、第一要素が本来有する主強勢が複合語全体の主強勢として現れ、その他の構成要素が単独形で有していた主強勢は、副次強勢など強さの度合いの低い強勢として現れる。ここで注意すべきは、複合語全体のアクセント音調、すなわち Acc1 を特徴づける高平調ないし Acc2 を特徴づける下降調は、単純語の場合と同様、主強勢を担う音節にのみ現れ、副次強勢など強さの程度の低い強勢を伴う音節には現れないという点である。

この事実は、アクセント音調と強勢の間に一種の「主従関係」が成立することを意味し、アクセント音調と強勢は Sandnes 方言の音韻論において「併存」するような対等の位置付けにあるのではないことを示す。Sandnes 方言における強勢とアクセント音調の従属関係を図示すると以下の通り：

(8) 強勢とアクセント音調の間の従属関係



以上から、Sandnes 方言のアクセントは、音調の下がり目の位置の異なる二種類の主強勢を「アクセント核」とするストレスアクセントであると結論づけることができる。

なお、Sandnes 方言のストレスアクセントが英語やドイツ語などのいわば典型的なストレスアクセントと大きく異なる点は、Sandnes 方言の場合、主強勢を担う音節の音調が音韻論的に有意義であるという点である。無論、英語やドイツ語においても、主強勢を担う音節には様々な音調が現れるが、これらの音調の「向き」は音韻論的には意味を持たない(川上 1973)。換言すれば、Sandnes 方言も英語も、主強勢を担う音節に種々の音調が現れるという点では共通するが、Sandnes 方言では音調が語のレベルで規定されているのに対し、英語やドイツ語では語レベルではなく文レベルで規定されており、「平叙文」や「疑問文」といった文の機能に合わせて音調が現れる点で異なるのである。

Sandnes 方言のように、アクセント核の音調が語レベルで音韻論的に意味を持つタイプのストレスアクセントを(暫定的に)「音楽的ストレスアクセント musical/tonal stress accent」と呼び、一方、英語のようにアクセント核の音調が語レベルでは音韻論的に意味を

上昇調～下降調」といった音調間の交替を過不足無く説明することが可能となる。例えば *vinter* [vín.tɔŋ HL]「冬」のように第一音節に主強勢を有する語における高平調は、当該音節直後の音調の下降の出発点のために「高」として実現していると捉えることができる。

また、*Amerika* [a.mé:.ɛi.ka MHML～MRML]「アメリカ」のような第一音節以外の音節に主強勢の現れる語に見られる短い上昇調は、先行する音節の中程度の音調から下降の出発点である「高」へと一気に到達させることが音声生理学的に困難なために、音調を漸次的に「高」へと高めた結果生じたものとして説明することが可能である。さらに、*avis* [a.ú:ɪs MH～MF]「新聞」など末尾音節が主強勢を担う語にみられる下降調は(狭義の)イントネーションの一種と考えられ、発話の末尾を標示するために現れたものとして説明することが可能である。このことは、*avis* など末尾音節に主強勢の現れる語に観察される下降調と Acc2 の音調形に観察される下降調が根本的に異質のものであることを意味しており、従って、*avis* などにおける下降調を Acc2 として解釈することは誤りであることが明らかとなる。

このような解釈を採ることで、Acc1 の語において主強勢を担う音節が、一方では後続する音節と常に「高低」の関係にあるにもかかわらず、他方では任意で短い上昇調や下降調をもとり得るという事実を過不足なく説明することが可能となる。

5.3 アクセントの弁別的特徴

これまでの考察から、Sandnes 方言の Acc1 と Acc2 の音調はいずれも下降調から成り立っており、Acc1 では主強勢を担う音節の直後に、一方 Acc2 では主強勢を担う音節の内部に下がり目が現れることが明らかとなった。ここから、Acc1 と Acc2 の対立において真に弁別的な特徴は、(先行研究の唱える音調の「種類」の違いではなく)音調の下がり目の違い、つまり下がり目が主強勢を担う音節に対して早く現れるか遅く現れるかという「位置」の違いである、と結論づけることができる。

6. 「強さ」か「高さ」か?

ここまでは音調の解釈が中心であったが、果たして Sandnes 方言において音調と強勢はいかなる関係にあるのだろうか。従来、ノルウェー語やスウェーデン語など強勢に加えて音韻論的に有意義な音調も有する言語のアクセントは、「高低アクセントと強弱アクセントの併存」や「(高低アクセントと強弱アクセントとは別の)中間的なアクセント」(例:福盛 2002、城生 2008)であると唱えられてきた⁹⁾。

これに対し筆者は、Sandnes 方言において強勢と音調は音韻論的には同等の資格を有してはおらず、飽くまでもアクセントとしてはストレス(強さ、強弱)アクセントであると考ええる。その論拠として複合語の例を以下に示す:

- (7) a. *appelsinmarmelade* [¹ap.pəl.sín.maʁ.mə.là:.də MMHMMML]「オレンジマーマレード」
 (<*appelsin* [¹ap.pəl.sín MMH]「オレンジ」+*marmelade* [²maʁ.mə.lá:.də MMLF]「マーマレード」)
 b. *hormonbalanse* [¹hɔʁ.mó:n.ba.làn.sə MHMML]「ホルモンバランス」

する中平調（MM）はアクセント句の句頭を、また漸次的な音調の下降（ML）はアクセント句の句末を示している。中平調や漸次的な下降調は、例えば表2に示した語例にも確認することができ、それぞれアクセント句の句頭と句末の標識として機能していると考えられる。

なお、上記の1)で述べた末尾音節に主強勢の現れる場合の下降調であるが、これも句末を標示する音調の一種であると考えられる。以下の例を参照されたい（音声字母による表記は割愛する）：

- (6) *se* *på* *film* 「映画を観る」
 see inf. on movie
 [M M F(~H)]

(6)は、形態統語論的な意味においての句の例であるが、この句全体が一つのアクセント句を成すと考えられ、*film*はアクセント句の末尾の位置に下降調を伴って現れている。ここから、*gi*や*byrå*など表2の末尾強勢の語に現れる下降調もアクセント句の終わりを標示していると考えることが出来る（アクセント音調である高平調が句音調である下降調となぜ交替しうのか、また下降調の意味に関しては、5.2節を参照されたい）。

以上をまとめると、Acc1の音調型も、Acc2の場合と同様に、語中における主強勢の位置が決まればそれに応じて全て自動的に導くことができると結論づけることができる。

5.2 アクセントの抽出

前節では、主強勢を担う音節に先行並びに後続する音節の音調が「アクセント句」とよばれるまとまりの属性であり、語中での主強勢の位置に応じて全て自動的に導かれるため、音韻論的な分析においては取り去ることが可能であることを明らかにした。

この点を踏まえて改めて(1)に示した（疑似）最小対の例や表1の語例を検討すると、Acc2において音節数の等しい語の音調型を相互に区別する上で有意義な部分は、主強勢を担う音節内部での音調の下降（F）のみであることが明らかとなる。

一方、Acc1の場合も同様に、(1)の（疑似）最小対の例や表2の語例から、主強勢を担う音節内部の高平調（H）が長さの等しい語を互いに区別する上で有意義な部分である、と結論づけられそうであるが、この点に関しては問題が残る。というのも、(2)の語例や表2の*byrå*や*appelsin*などの語例が示すように語末の位置では主強勢を担う音節に任意で下降調（F）も現れることがあり、また(3)の語例が示すように高平調の現れる主強勢を担う音節には短い上昇調（R）も現れうるため、仮に主強勢を担う音節の音調を「高平」と指定してしまうと、なぜ下降調や上昇調が現れうるのかが説明できなくなってしまうからである。特に下降調はAcc2の音調形において一貫して現れる音調であり、従って、末尾音節に主強勢の現れる語の音調が果たしてAcc1なのかAcc2なのか、音韻論的な位置付けを明らかにする必要も生じてくる。

そこで筆者は、Acc1の音調型における真に有意義な特徴は、主強勢を担う音節の直後での音調の下降と捉え、当該音節内部の音調に関しては規定されていない自由な状態である、という解釈を提案する。この解釈を採用することで、主強勢を伴う音節に現れる「高平調～短い

表 2: Acc1 の強勢／音調型

	I	II	III	IV	V...
1	<i>gi</i> [jé:F~H] 「与える」	<i>vinter</i> [vín.təŋ HL] 「冬」	<i>ananas (sic)</i> [án.na.nas HML] 「パイナップル」	<i>reserbane</i> [ré:.səŋ.bà:.nə HMML] 「サーキット」	<i>språkskolelærer</i> [spɤ́:g.sko:.lə.lè:.kəŋ HMMLL] 「語学教師」
2		<i>byrå</i> [by.ɤ́: MF~MH] 「事務所」	<i>artikkel</i> [aŋ.tʰik.kə] MHL] 「記事」	<i>narkotika</i> [naŋ.kʰó:.ti.ka MHML] 「麻薬」	<i>karbondioksid</i> [ka.bón.di.ok.síd MHMML] 「二酸化炭素」
3			<i>appelsin</i> [ap.pə].sín MMF~MMH] 「オレンジ」	<i>leninisme</i> [le.ni.nis.mə MMHL] 「レーニン主義」	<i>paradisepple</i> [pa.ɤ́.ðis.əp.plə MMHML] 【植物名】
4				<i>epidemi</i> [e.pi.de.mí: MMMF~MMM] 「疫病」	<i>memorisere (sic)</i> [me.mo.ɤ́.sé:.ɤ́a MMMHL] 「記憶する」
5...					<i>universitet</i> [u.ni.væŋ.si.tʰét MMMMF~MMMMH] 「大学」

料を検討することで、Acc1 の強勢ならびに音調の型に関して以下の三点が明らかとなる：

1) 語の長さを問わず、主強勢を担う音節には高平調あるいは下降調のいずれかが現れているが、下降調は主強勢が末尾音節にある語に、また高平調はそれ以外の語に限られており、どちらの音調が現れるかは主強勢の位置によって決まっている；2) 主強勢を担う音節に先行する音節は、Acc2 の場合と同様に、語の長さや主強勢の位置に拘らず常に中平調である；3) 主強勢を担う音節に後続する音節の音調は、Acc2 の場合と同様、語末にかけて漸次的に下降を示す。

上記の三点から、アクセント音調を除く音調は全て音韻論的には有意義でないものとして分離することが可能となる。ちなみに、Acc2 の音調型の場合と同様に、Acc1 の音調型から捨象することのできる音調は、アクセント句の属性として位置づけることが可能である：

- (5) *Er du japanske?* 「あなた、日本人ですか？」
 be pres. you sg. Japanese
 [M M HML]

(5) の文はそれ自体で全体で一つのアクセント句を成すと考えられ、アクセント音調に先行

- (4) a. (*Må jeg komme tidligt?* 「私は早くに来なくてはなりませんか?」)
 (Ja,) *du må komme tidligt.* 「(はい、) あなたは早くに来なくては
 なりません。」
 (yes) you sg. must come inf. early-neut.
 [M M FM FM]
 b. *Norsk er vanskelig.* 「ノルウェー語は難しい。」
 Norwegian be pres. difficult-neut.
 [M M FML]

上記の文は、いずれも一つ以上のアクセント句からなると考えられ、(4a)は“*Du må komme*”と“*tidligt*”という二つのアクセント句に分かれており、また(4b)は“*Norsk er vanskelig*”という文全体が一つのアクセント句を成している⁸⁾。(4a)のアクセント句“*Du må komme*”と“*tidligt*”ではいずれも次末音節にアクセント音調が現れているが、注目すべきは、いずれの場合も主強勢を担う音節に後続する音節が中平調を伴っている点である。この中平調はアクセント句の末尾の標識として機能していると考えられる。なお、(4b)が示すように、アクセント音調に二つ以上音節が後続する場合は、句末に向けての音調は漸次的な下降(...ML)を示す。このような句末に現れる中平調や漸次的な下降調は表1の語に共通して観察されるもので、いずれもアクセント句の音調が被さったものとして捉えることが出来る。

ここまでは主強勢を担う音節に後続する音節に着目してきたが、今度は主強勢を担う音節に先行する音節に注目したい。(4a)では“*Du må*”全体に、また(4b)では“*Norsk er*”全体に中平調が現れているが、これは、アクセント音調に至るまでの部分、いわばアクセント句の「句頭」の部分を表示していると考えられる。同様の中平調は、例えば表1の*marmelade*を始めとする第一音節以外の音節に主強勢の現れる語にも観察されるが、いずれもアクセント句の音調が被さった結果現れたもので、アクセント句の始まりからアクセント音調に至るまでの句頭の部分を標示している。

つまり、表1に示した語例が示す音調型は、アクセント句の属性である「句音調」が被さった結果現れたもので、アクセント音調を除いた部分は音韻論的には重要でないものとして捨象することが可能なのである。なお、ここで言うアクセント句は、大きさの点で、いわゆる形態統語論的な意味での「句」と同一である必要はまったくない。発話の意味内容を反映してアクセント上ひとまとまりを成せば、表1に示したような「語」であっても、(4)に示したような「文」であっても構わない点に注意されたい。

以上から、Acc2の音調型は、語中における主強勢の位置が決まればその他の音調が全てアクセント句の特性として規定されるため、自動的に導くことができると結論づけることが出来る。

5.1.2 Acc1

続いてAcc1の語例に移る。表2は、Acc1の強勢ならびに音調の型を、語の音節数と主強勢の現れる位置に基づいて分類したものである(語例は引用形で代表させる)。表2の資

表 1: Acc2 の強勢／音調型

	I	II	III	IV	V...
1	—	<i>kake</i> (sic) [k ^h á:ɡa FM] 「ケーキ」	<i>menneske</i> [mén.nəs.kə FML] 「人間」	<i>sparebørsa</i> [spá:ɐə.bœɾ.sa FMML] 「貯金箱」	<i>overvektige</i> (sic) [ø:və.væk.ti.ɡə FMMLL] 「肥満の」
2		—	<i>rutine</i> [ɾu.t ^h i:nə MFM] 「日課」	<i>allikevel</i> [a.li:kə.və] MFML] 「しかしながら」	<i>reklamebyrå</i> [ɾe.klɑ:mə.by.ɾø: MFMML] 「広告会社」
3			—	<i>marmelade</i> [maɾ.mə.lá:də MMFM] 「マーマレード」	<i>krokodilletegn</i> [kɾo.ko.dil.lə.t ^h əɲ MMFML] 「不等号」
4				—	<i>humaniora</i> [hʉ.ma.ni.ó:ɾa MMMFM] 「人文科学」
5...					

めたものである（語例は引用形）。なお、主強勢が末尾音節に現れる語で当該音節に下降調の現れる語例はない（後述するように Acc1 と解釈される）ため、表中では「—」で示してある。網掛けの部分は該当する語例が構造的に許容されず存在しないことを示す。

表 1 に示した資料を検討することで、Acc2 の強勢並びに音調の型について以下の四点が明らかとなる：1) 語の長さ（音節数）や主強勢の位置に拘らず、主強勢を担う音節には一貫して下降調が現れる（なお、主強勢を担う音節に現れる音調を便宜的に「アクセント音調」と呼ぶことにする）；2) 主強勢を担う音節に先行する音節は常に中平調を伴い、語の音調形を相互に区別する上では関与的でない；3) 主強勢を担う音節に後続する音節は、常に末尾音節に向けて漸次的に下降しており、語の音調形を相互に区別する上では関与的でない；4) ただし、次末音節に主強勢の現れる場合は、末尾音節の音調は中平調である。上記の四点から、主強勢を伴う音節に現れる下降調を除き、語に被さる音調は全て音韻論的には有意義でないものとして分離することが可能となる。

なお、アクセントを抽出する限りにおいては、主強勢を担う音節に前後する音節の音調は全て捨象されることは既に説いたが、これらの音調は全て、（形態統語論的な意味での）「語」に対して規定されているものではなく、むしろ音調が被さるアクセント上の単位（ここでは暫定的に「アクセント句」と呼ぶことにする）の属性であると考ええる。以下の例を参照されたい（音声字母による表記は割愛する：文強勢の位置を のように下線で示す）：

以上、分節音のレベルとは独立した自律的なものとして、つまりは「アクセント」として捉えられるからである。「型」の対立により知的意味の弁別がなされなくとも、れっきとした「型」は存在するのである。

ここで注意すべきは、筆者がここで「型」と呼ぶ「分節音のレベルとは独立した自律的な音形」の全てがアクセントではないという点である。アクセントの「型」は確かに語全体に被さるものではあるが、その「型」は語のある一か所に現れる本質的な特徴によって導き出すことができると考える。この本質的、すなわち音韻論的に真に有意義な特徴は、例えばイントネーションなど、少なくとも語レベルでは音韻論的に有意義でない特徴を分離することによって得られると考える。我々が実際に観察することができるのは、アクセントの上にイントネーションなど様々な音声特徴の被さった結果生じた重層的な物であり、従って、単に語を観察しただけではアクセントは得られない。アクセントは、観察した語の音声から様々な特徴を分離することによって「抽出」しなくてはならないのである。

ちなみに、アクセントを本質的に特徴づける特性は語の一か所にあらわれると述べたが、この点でアクセントは、例えば中国語北京方言に見られるような、語を組み立てる音節のそれぞれが音韻論的に有意義な音声特徴を担いうる「声調 tone」とは異なる性質を有する。

では、ここで改めて「ストレス（強さ／強弱）アクセント」という概念について若干の考察を行いたいと思う。従来、ストレスアクセントでは、本質的な特徴は「(音の) 強さ loudness/intensity」であると唱えられてきた。しかしながら筆者は、確かに「(音の) 強さ」の存在は認めるものの、むしろその他の特徴がストレスアクセントの本質的な側面として働いていることを唱えたい。一つには、既に早田(1988)が指摘しているように、(主)強勢を伴う音節ではそうでない音節に比べて、現れうる母音音素の数が多い点が挙げられる。また、(主)強勢を伴う音節はそうでない音節に比べて、頭子音や末尾子音の子音連結の構造も複雑な傾向にある(強勢を伴う音節は、いわゆる「長い」あるいは「重い」音節が好まれる)。さらに重要な点は、主強勢を伴う音節、すなわちストレスアクセントにおいて最も重要な音節には、様々な種類の音調が現れうるということである。後に詳述するが(第6節を参照)、英語のように音調の種類が音韻論的に有意義でない場合もあるものの、ストレスアクセントにおいては、主強勢を伴う音節は種々の音調の出現を「許容する力」を有しており、換言すれば、音調の変動の「起点」を成しているのである。以上の点を総合すると、Sandnes 方言は、(ひとまずは) ストレスアクセントの言語であると結論づけて差し支えないと思われる(Sandnes 方言のアクセントの位置付けの詳細に関しては第6節も参照のこと)。

5. アクセントの抽出

ここでは、前節で述べた筆者のアクセント観やアクセント分析の方法に従って、実際に Sandnes 方言のアクセントの音韻論的解釈を提示する。

5.1 非関与的な音調の分離

5.1.1 Acc2

議論の都合上、Acc2の語例から検討する。次頁の表1は、主強勢を担う音節に下降調の現れる語を、音節数(ローマ数字で示す)と主強勢の位置(アラビア数字)に基づいてまと

するような、語には全て Acc1 と Acc2 という toneme のいずれかが被さっていると捉える立場がある。言わば、日本語アクセント論でいう「語声調」(早田 1999) や「N 型アクセント」(上野 1984) に通ずる解釈で、語の長さ(音節数)を問わず、音調の型は常に二つであるとする立場である⁵⁾。

一見すると妥当性のある解釈ではあるが、この解釈が成り立つためには語中の主強勢の位置が固定的であることが前提となる。というのも、既に言及したように、Acc1 の高平調や Acc2 の下降調の現れる音節は主強勢を担う音節であるからである。しかしながら、語における主強勢の位置は(1)や(3)に示した語例から読み取れるように、特定の音節とは限らない(5.1 節の表 1 と表 2 の語例も参照のこと)。つまり、語の音節数が増えれば、それに応じて主強勢の分布の可能性も増えることになり、その結果、語に被さる音調の型が二つ以上になる可能性も生じてくるのである。以上から、いわゆる「二型アクセント」的な解釈は成立しないと結論づけることができる。

4. アクセントとは？

「アクセント」という用語を用いて何を意図するかは研究者により微妙に異なることがあり、また言語の音声的側面を扱う音声学と音韻論の間でも「アクセント」の概念は異なることがある。さらに、仮に音韻論の領域に限定したとしても、研究対象とする言語が異なれば、アクセントという用語の意図する概念が異なることもある⁶⁾。そこで本節では、Sandnes 方言のアクセント解釈を進めるにあたり、議論の出発点として共通の理解を得ておく必要があることを鑑み、筆者のアクセント観について簡単に述べておくことにする⁷⁾。

筆者の考えるアクセントの概念を一言で述べるならば、**特定の言語社会において慣習的に共有された、ある音声特徴を利用して実現される語の「音形」**である(なお、ここで「語」と呼ぶものは、厳密には(つまり音韻論的には)アクセントを担うまとまり、いわば「アクセント単位」とでも呼ぶべきものであるが、議論が煩雑になるのを防ぐために、ここでは便宜的に「語」という用語を用いる)。従って、アクセントが個々の言語において具体的に現れる際の音声実質は、アクセントそれ自体を定義する上では重要ではない、と筆者は考える。典型的には、例えば日本語に代表される「(音の) 高さ／ピッチ」や英語に代表される「(音の) 強さ／ストレス」といった音声特徴が利用されるが、ある言語社会において慣習的に共有される限りにおいては、「声門狭窄」や「喉頭緊張」、「(音の) 長さ／音量」といった音声特徴であっても理論的には可能である。

また、利用される音声特徴は、語を組み立てる分節音(語音)の情報から規定されるものではない、と筆者は考える。無論、アクセントの具体的な実現には分節音が影響を与える可能性はあるが、アクセントの本質的な部分は分節音に固有の音声特性とは切り離されるものである。だからこそ、言語によっては、アクセントが語の知的意味の弁別に寄与しうるのである。

なお、このような「弁別(的)機能」はアクセントの主たる機能ではなく、むしろアクセントが有する本来の特性から派生的に生じた、いわば副次的な機能であると筆者は捉えている。というのも、仮に、超分節の特徴によって作られた「型」が一種類しか無く、従って最小対が存在しない場合であっても、その「型」を分節音の特性から導き出すことができない

束」

c. *leser* [¹lé:.sə HL] (sic)「読む pres.」— *lese* [¹lé:.sa FL] (sic)「読む inf.」

なお、Bokmål との関連で特筆すべきは、Acc2 の音調は Bokmål と同じく下降調であるのに対し、Acc1 の音調は、低く平らに現れる Bokmål のものとは反対に高く平らである。そのため、Acc1 を伴う多音節語の音調は、主強勢を担う音節から後続する弱音節にかけて全体としてなだらかな下降調を描く。また、Acc2 に関しては、Bokmål では下降調の現れる音節以降の音節が（末尾音節を除き）低平調を伴うのに対し、Sandnes 方言では下降調の直後で一端中程度の高さに上昇し、その後語末にかけて漸次下降する点も特徴的である。

3. 想定される解釈案とその問題点

既に述べたように、Sandnes 方言のアクセントに関する先行研究は極めて乏しい。そこで、ここでは標準方言（Bokmål）あるいは Oslo 方言を対象とする先行研究に倣い想定され得る解釈案を提示し、その問題点を批判的に検討することで後の議論へと繋げたい。

まず、Borgström (1938: 260-263) などに代表される古典的な立場では、主強勢を伴う音節に Acc1 と Acc2 という二つの toneme を設定する。つまり、主強勢を担う音節に現れる音調の「種類」の違いが Acc1 と Acc2 を区別する上で有意義な特徴とする解釈である。

この立場では、確かに Acc2 の音調を適切に説明することは可能であるかもしれないが、Acc1 の音調を説明する上では問題が残る。というのも、(2) に示すような末尾音節に主強勢の現れる (oxytonal) 語では、H（高平調）と F（下降調）が任意で交替しうるからである。

- (2) a. *ned* [¹né:ɣ H~F] (sic)「下へ」
b. *avis* [¹a.vís MH~MF]「新聞」

もし主強勢を伴う音節の音調を「Acc1 = 高平調」、「Acc2 = 下降調」という図式で捉えてしまうと、末尾音節に主強勢の現れる語の音調を正しく捉えることができず、この点で問題が残る。

さらに、(3) に示すように、（特に）第二音節以降の音節が主強勢を担い、かつ高平調を伴う語の場合は、高平調に代わり任意で短い上昇調も現れる（R の記号で上昇調を示す）：

- (3) a. *Amerika* [¹a.mé:.xi.ka MHML~MRML]「アメリカ」
b. *beklaga* [¹be.klá:.ga MHL~MRL]「～を遺憾に思う」

Acc1 や Acc2 の音調を toneme として固定的に捉える解釈では、主強勢を伴う音節に現れる上昇調を適切に説明することができない。以上の二点から、主強勢を伴う音節に二つの toneme を設定する解釈は、Sandnes 方言のアクセント音調を正しく捉えてはいないと結論づけることができる。

同じく、ノルウェー語の伝統的なアクセント解釈として、例えば Vanvik (1956) が主張

1.5 表記

本稿では、議論の際に引用する資料は、まずイタリック体のラテンアルファベットでその綴りを示し、続いて音声字母を用いてその音声を提示する。但し、Sandnes 方言は（他の方言と同様に）正書法が確立していないため、本稿では便宜的に Bokmål の正書法で代用している。

本稿で用いる音声字母は基本的には国際音声字母 (IPA) に準拠しており、煩雑になることを防ぐため可能な限り簡略表記を用いている²⁾ が、以下の三点に注意されたい。まず、音調の表記は tone letter を用いず H (高平調)、M (中平調)、L (低平調)、F (下降調)、R (上昇調) の記号を用いた。母音や子音といった単音を表記する音声字母に比べて tone letter はそれほど一般的でない点に加え、音声表記が煩雑になるのを防ぐ為である。また、一部の資料に限定はされるが、音声表記から速やかに Acc1 と Acc2 の別を判読できるよう、音声表記の頭に上付きのアラビア数字の 1 と 2 を付した (例: [¹], [²])。さらに、強勢の表記には、IPA で一般的に用いられている [ˈa] や [ˌa] (母音は任意) の記号は用いず [á] や [à] の記号を用いた。こちらも、音調を示すアラビア数字との混同を回避し、判読のしやすさを重視した結果である。ちなみに音声表記中のピリオドは音節境界を示す。

なお、H、L、M、F、R の記号は、飽くまでも各音節の音調を (音韻論的な解釈を経た上で) 大まかに三段階に分けて捉えた、いわば簡略的な表記に過ぎない点に注意されたい。従って、中国語の声調のように、それぞれの記号が各音節の固有の音調を示している訳ではなく、仮に同じ記号で表記された音調であっても、具体音声としては厳密には高さが異なる可能性も十分にある。また、H や M といった記号を用いるからといって、筆者が Sandnes 方言の音調を「調素 toneme」の連続として解釈している訳でない点にはくれぐれも留意されたい。

2. Sandnes 方言の概要

Sandnes 方言の話される Sandnes はノルウェー南西部に位置する Rogaland 県 (Rogaland Fylke) の一都市 (kommune) である。2009 年の統計では約 6 万 5 千人の人口を有するノルウェーで 8 番目に大きな都市 (by) である (典拠: <http://www.sandnes.no>; ノルウェー国内での Sandnes Kommune の位置に関しては稿末の地図も参照のこと)。

Bokmål と比較すると、Sandnes 方言は分節音のレベルでは様々な特徴³⁾ を示すが、本研究の主題である韻律的な側面においてはそれほど大きな差異は示さず、唯一指摘すべき特徴としては Acc1 並びに Acc2 の音調型が挙げられる程度である。

Sandnes 方言では (標準方言と同じく) 語は主強勢を担う音節を必ず一つ有し、その音節には (主として) 高平調 (Acc1) か下降調 (Acc2) のいずれかの音調が現れる。語例は非常に限られるが、音調の区別のみで対立する (疑似) 最小対も確認されている。具体例を以下に示す (Acc1 - Acc2 の順):

- (1) a. *korte* [¹kʰɔ̝.tə HL] 「短い adj.sg.masc./fem.⁴⁾」 — *korte* [²kʰɔ̝.tə FM] 「短い adj.pl.]

- b. *avtale* [¹á:v.tʰà:lə HML] (*sic*) 「約束する」 — *avtale* [²á:v.tʰà:lə FML] 「約

れる Sandnes 方言の理論的研究への有益な資料を提供することはいうまでもなく、この点でも本研究は意義があると言えよう。

1.3 先行研究

既に前節で述べたように、ノルウェー語の方言研究は長年に渡る伝統があり、そのため、当然のことながら Sandnes 方言に関しても調査ならびに研究報告があるに違いないが、ノルウェー国外の研究者が参照可能な Sandnes 方言のアクセント資料は、管見に及ぶ範囲では皆無に等しい。しかしながら、隣接する都市の方言である Stavanger 方言は、Sandnes 方言に音声面では極めて類似しており、また Stavanger 方言に関する先行研究は比較的容易に参照が可能であるため、Stavanger 方言に関する記述を頼りに Sandnes 方言の姿を伺い知することは可能である。

とはいえ、Sandnes 方言自体の姿はあくまでも「窺い知る」ことができるに過ぎず、従って、量と質のいずれの面においても先行研究と呼ぶに値するものではない。そこで、本研究では、首都 Oslo (オスロ) の方言並びに Oslo 方言を基盤としたノルウェー南東部で主に用いられる標準方言 (Bokmål) を扱った研究に倣い Sandnes 方言のアクセントの解釈案を提案し、それを先行研究と想定して批判並びに検討を加えながら議論を進めていくことにする。

1.4 インフォーマント、資料、調査方法

本研究の資料は全て、筆者が Sandnes 方言の話者一名¹⁾をインフォーマントとして 2009 年から 2011 年にかけて実施した調査によって得られたものである。調査は大きく分けて二つの部分からなる：いわゆる「質問・解答形式」による基礎語彙調査と、「調査票読み上げ形式」、つまり印刷された調査項目を読み上げてもらう形式の調査とその後の確認作業を含めた追加調査である。

基礎語彙調査では、『アジア・アフリカ言語調査表』の上巻並びに下巻 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 1967) を用い、身体部位の名称を始めとする基礎的な語彙の収集を行った。基礎的な語彙の収集を通じて Sandnes 方言のアクセントの大まかな姿は捉えられるものの、基礎的な語彙の多くはいわゆる「固有語」であり、その大半が (ゲルマン諸語全般に見られる特徴ではあるが) 一音節ないし二音節からなる主強勢が第一音節に現れる語のため、導かれる結論が偏ってしまう危険性がある。アクセント解釈はもちろんのこと、音韻論的な分析と解釈を精密に行うためには、複合語や派生語、活用形を含めた三音節以上の長めの語や、外来語など第一音節以降の音節に主強勢の現れる語も採取する必要がある。先に述べた追加調査はこのような資料の補充を主たる目的としているが、この他にも、基礎語彙調査の確認作業も並行して行った。

追加調査の調査項目は、Bokmål に関する先行研究 (例: Kristoffersen 2000) や系統的及び類型論的に近い言語であるデンマーク語に関する記述 (Hansen 1956; Mimura 2009) を参考に選定した。調査票は Bokmål を用いて作成した。調査全体を通じて使用した媒介言語は主として日本語だが、必要に応じてデンマーク語も使用した。

さらに、本稿では、これまであまり注意深く考察されることのなかった「ストレス（強さ、強弱）アクセント」という概念についても検討を加える。従来のノルウェー語のアクセント研究では、便宜上、音調とストレスを分離して議論を進めるのが慣例であったが、この二つの韻律特徴を統合する試みはなされて来なかった。そこで、本研究では、音調とストレスを一つのアクセント体系へと統合する独自の見解を提示する。

1.2 本研究の研究史的意義

ノルウェーは、その国土が南北に細長く伸び、また陸地のほとんどを山脈が占めるという地理的特性を有するが故に、方言間の差異は大変著しいといわれている。この点を鑑みると、ノルウェー語の方言研究は長い歴史を有することが容易に想像される。しかしながら本研究の対象である Sandnes 方言に関しては、アクセントに限定すればまとまった研究報告は極めて乏しく、構造的に類似する近隣の方言を扱った研究報告からその姿を窺い知ることができる程度である。Sandnes を含む Rogaland 県の県庁所在地であり、また Sandnes と地理的に接している Stavanger (スタヴァンゲル) で話されている Stavanger 方言は類似性が高いとされ、Stavanger 方言の記述 (例: Selmer 1927; Vanvik 1956 [1983], 1979) から辛うじて Sandnes 方言のアクセントの姿を窺い知ることが可能である (なお、分節音に関しては、Ofteidal (1947, 1972) が詳しい)。

このように、外国人研究者が利用可能な資料は (一連の拙論を除き) 皆無に等しいと言っても過言ではなく、したがって本研究は、まず第一に、研究報告の乏しい方言のアクセント資料を日本人研究者が利用できる形で提供するという点で、非常に意義のあるものと言える。

第二に、本研究は、これまでのノルウェー語アクセント研究における方法論的な不備を改善しようという点で意義があると考えられる。そもそも、ノルウェー語アクセント研究は、Kristoffersen (2000) に代表されるように標準語に関しては大変研究が盛んではあるが、ノルド語学の伝統を受け継ぐがために、考察の対象とする語例が一音節ないし二音節からなる固有語に偏るという問題点を残す。また近年のノルウェー語アクセント研究は、自律分節音韻論など音韻理論の枠組みに基づいた理論研究に集中しており、従って、ある特定の音声・音韻現象の、それもある特定の部分に関しては考察が行き届いているものの、その反面、一つの方言に関してそのアクセントの全体像を捉えるまでには未だ至っていないと思われる。本研究では、外来語をも対象として新たな視点から考察を進めるが、本研究の提示する方法論は、標準方言のアクセント研究を改善する上でも重要な視点を投げかけると考えられる。

なお、既に冒頭でも触れたように、本研究は「純粹」に記述言語学的な立場に基づいている。その意図するところは、生成音韻論や最適性理論などのいわゆる特定の音韻理論の枠組みに基づいて一般理論を構築するのではなく、飽くまでもフィールドワークにより得られた一次資料を通じて、その資料を過不足無く説明することにのみ考察の範囲を限定するということである。音韻理論の枠組みによる理論的研究の重要性は否定するまでもないが、そのような理論的研究に値する言語は、英語や日本語を始めとする、「記述」の進んだごく一部の言語であると筆者は考える。従って、利用可能な資料自体が乏しい Sandnes 方言は、ごく限られた特定の現象に基づいて性急に理論的研究を進めるのではなく、むしろその全体像を描き出すべく詳細な記述研究を行うことが先決である。本研究の成果が、今後展開が期待さ

- 1.4 インフォーマント、資料、調査方法
- 1.5 表記
2. Sandnes 方言の概要
3. 想定される解釈案とその問題点
4. アクセントとは？
5. アクセントの抽出
 - 5.1 非関与的な音調の分離
 - 5.1.1 Acc2
 - 5.1.2 Acc1
 - 5.2 アクセントの抽出
 - 5.3 アクセントの弁別的特徴
6. 「強さ」か「高さ」か？
7. 結語
 - 7.1 まとめ
 - 7.2 今後の課題

1. 序

1.1 本研究の目的

本稿の目的は、筆者がフィールドワークを通じて採取した一次資料に基づき、ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言 (以下、Sandnes 方言とする) のアクセントを純粋に記述言語学の立場から音韻論的に記述することにある。

Sandnes 方言は、主強勢を伴う音節が語に必ず一つあり、その音節には (主として) 高平調と下降調の二種類の音調が現れる。ノルド語 (北方ゲルマン語) 学の慣例に倣い、本稿でも、前者を Acc1 (Acc はアクセントの意)、後者を Acc2 と呼ぶことにする。

これまで筆者は、アルファベットによる略語 (アルファベット頭文字語) を含む複合語や三要素からなる複合語など、複合語におけるアクセントに関しては様々な観点から考察を行い (三村 2010a, b, 2011a, b)、その結果、未だに不十分な点がわずかに残りはするものの、Sandnes 方言の複合語アクセントの全体像を明らかにするに至った。しかしながらその一方で、単純語のアクセントの音韻論的な解釈に関しては、紙幅の都合から明確な言及を差し控えてきた。そこで、本稿では、Sandnes 方言の単純語のアクセント解釈にのみ焦点を当てて、詳細な考察を試みる。

加えて、本研究は、これまで筆者がノルウェー語以外の言語に関してアクセント解釈を行う際にも基盤としてきた理論的枠組み、並びにその実践方法を示すことも目的としている。アクセントの記述には厳密な手順が要求され、特にピッチ (高さ、高低) アクセントの場合は、真に音韻論的に有意義な音調とイントネーションのような音韻論的には有意義でない音調とを分離することが分析作業の上で重要となる。しかし、例えばノルウェー語のアクセント研究に限定してみても、先行研究のほとんどがこれら二つの音調を混同したまま無批判に議論を展開する嫌いがあった。本稿では、このような傾向に警鐘を鳴らす意図を込めて、筆者が理想とするアクセント記述の方法を提案する。

ノルウェー語 Sandnes（サンネス）方言のアクセント

— アクセント抽出の理論と実践 —♦

三 村 竜 之*

要 旨

本稿の目的は、筆者がフィールドワークを通じて採取した一次資料に基づき、ノルウェー南西部で話されるノルウェー語 Sandnes（サンネス）方言のアクセントの音韻論的解釈を提案することにある。これまであまり深く考察されることのなかった「ストレス（強さ、強弱）アクセント」の概念について検討を加え、音調とストレスを一つのアクセント体系へと統合する独自の見解を提示する。

Sandnes 方言は、主強勢を伴う音節が語に必ず一つあり、その音節には高平調（アクセント 1, Acc1）と下降調（Acc2）のいずれかが現れる。標準方言に基づく伝統的な解釈案に倣うと二種類の「調素 toneme」や「語声調 word tone」が設定されるが、語全体の音調の型は主強勢の位置に応じて決まるため、語の長さ次第で型の数は二つ以上になりうることもあり、先行研究の解釈案は成り立たない。また、従来の解釈では Acc1 の音調型に観察される交替形を正確に記述することができない上に、その考察対象が第一音節に主強勢の現れる一音節語ないし二音節語に限定されているなど、問題が残る。

これに対し本研究では、様々な強勢の型をもつ多音節語も広く考察することで音調に関して音韻論的に真に有意義な特徴を導き、また強勢と音調の間に見られる従属関係に着目することで、Sandnes 方言のアクセントに関して以下の結論を導く：1) Acc1 と Acc2 の音調型はいずれも下降調から成り立つ；2) アクセント対立においては、主強勢を有する音節に対する下降調の現れる相対的な位置の違いが音韻論的に本質的な特徴である；3) Sandnes 方言のアクセントは、位置の異なる二種類の下降調のいずれかを伴う主強勢がアクセント核である、ストレスアクセントの一種である。

内 容

1. 序

- 1.1 本研究の目的
- 1.2 本研究の研究史的意義
- 1.3 先行研究

LOC：場所・動作の対象を表す名詞につくマーカー

NI-：代名詞と単数の人を表す所有格の名詞、および Undergoer voice における行為者を表す名詞につくマーカー

PROG：継続アスペクト

RED：重複

REL：関係代名詞。

注

- 1) 本論文において使用したデータは2011年8月の調査に得られたものが大半である。この調査は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所のプロジェクト「言語ダイナミクス科学研究 (LingDy)」における「研究未開発言語調査派遣」資金により行われた。この場を借りて関係者の方々にお礼を示したい。
- 2) タラウド語話者によると、方言は以下の6種である。(1) Salibabu 方言 (Salibabu 島)、(2) Kabaruan 方言 (Kabaruan 島)、(3) Nyiampak 方言 (Kalakerang 島)、(4) Beo 方言 (Kalakerang 方言)、(5) Esang 方言 (Kalakerang 島)、(6) Nanusa 方言 (Nanusa 諸島)。このうち、(3)、(4)、(5) の三つの方言は Kalakerang 島で話されている。Nanusa 諸島のうち、有人の島は Miangas, Karatung, Kakorotan, Marampit である。
- 3) SIL の援助もあり、タラウド語に聖書が訳されている。Salibabu 方言は一番威信があると考えられており、この聖書で用いられる方言に採用された。
- 4) 「*maN/naN/* の *N* は base の最初の子音の鼻音化、ないし同器の鼻音の挿入を示す。」
- 5) 接頭辞 *maN/naN-* が付加すると鼻音の重子音となるので、比較的聞こえにくく、実際に重子音になっているのかははっきりしないこともある。

結果アスペクトは、それぞれ動作が開始する前と終結した後の状態を表す。言い換えると、変化が起こる前と起った後の状態を示す。

現段階では、これ以上のことはわからない。今後の展望としては、語彙的アスペクトをさらに詳しく調べ、またテキスト中の UA- 形の用法を調べることによって、統一的な UA- 形の用法が説明できる可能性がある。

参考文献

- Bawole, G. (1981) *Structur Bahasa Talaud*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, Departmen Pendidikan dan Kebudayaan.
- Malee, J. N. (1995) *Sistem Morfologi Kata Kerja Bahasa Talaud*. Manado: Fakultas Pendidikan
- Noorduyn, J. 1991 'A Critical Survey of Studies on the Languages of Sulawesi.' Leiden: KITLV Press.
- Sneddon, J. N. (1984) *Proto-Sangiric and the Sangiric Languages*. Canberra: Pacific Linguistics Series B, No. 91.
- Sneddon, J. N. ed (1985) *Studies in Sulawesi Linguistics. part II. Linguistic Studies of Indonesia and Other Languages in Indonesia, NUSA* vol33. Jakarta: Badan Penyelenggara Seri Nusa.
- Tingginehe, R. R. (1967) *Perbandingan Semantik Bahasa Indonesia dengan Bahasa Talaud*. Thesis submitted to Institut Keguruan dan Ilmu Pendidikan, Bandung.
- 内海敦子 2011「タラウド語使用地域の言語使用と言語意識—インドネシア国、北スラウェシ州における民族語使用実態—」明星大学研究紀要—人文学部—日本文化学科. 第19号. pp217-234.
- Vendler, Zeno (1957). 'Verbs and Times'. *The Philosophical Review* 66 (2): 143-160.

省略記号

- 1sg: 一人称単数
1pl: 一人称複数
2sg: 二人称単数
2pl: 二人称複数
3sg: 三人称単数
3pl: 三人称複数
AV: Actor Voice
COMP: 完了アスペクトを表す clitic
CV: Conveyance Voice
I: 代名詞と単数の人を表す主語につく名詞マーカー
FUT: 未来を表すマーカー
GV: Goal Voice
LK: linker

表 2: 語彙的アスペクトと UA- 形のアスペクト

	未完了アスペクト	継続アスペクト	習慣アスペクト	結果アスペクト
Stative verb ATELIC	○	○	×	×
Activity verb ATELIC	○	○	○	×
Accomplishment verb TELIC	○	×	×	○
Achievement verb TELIC	○	×	×	×

Achievement verb の順にならべた。UA- 形のアスペクトが語彙的に決まっていることもあり、すべてを網羅的にまとめるのは難しいが、以下の点が指摘できる。

第一に、UA- 形は動詞の語彙的アスペクトの如何にかかわらず、未完了アスペクトを表しうる。UA- 形の基本的な用法が、未完了アスペクトなのではないかと考えることもできよう。

第二に、UA- 形が継続アスペクトを表すのは atelic な動詞に限るということである。telic な動詞の場合は、継続アスペクトを表すことができない。習慣アスペクトは atelic な Activity verb のみにみられる用法であるが、習慣アスペクトは「断続的に行われる継続した動作」を表すので、継続アスペクトの派生的な用法だとも考えられる。従って、習慣アスペクトは継続アスペクトの中に入れてしまうこともできる。習慣アスペクトを表すことができる動詞はほぼ職業的行為を表すものに限られているので (*mam-manara* ‘to work’、*ma-lutanga* ‘to hunt’ など)、特に独立したアスペクトと考える必要はないかもしれない。

第三に UA- 形が結果アスペクトを表すのは Accomplishment verb のときのみである。Accomplishment verb は、telic で終結点がはっきりしている。このような特徴を持つ Accomplishment verb のうち、動作が行われた後の結果が明白に観察できる動詞 (*sa?e* ‘to board’、*suan* ‘to plant’ など) が結果アスペクトを表すのだと言える。

第四に、瞬間的な動作を表す Achievement verb については、未完了アスペクトしか表すことがない。

以上の用法をまとめると、UA- 形は未完了アスペクト、継続アスペクト (習慣アスペクトを含む)、結果アスペクトを表す。これらに共通するのは、発話場面で『動作』あるいは『状態の変化』が発話場面で明白に観察されない」ということである。継続アスペクトに関しても、終結点がはっきりせず、いつから始まったか (開始点) もはっきりしない動作の継続を表すため、「発話場面で変化は観察されない」。

結論として、UA- 形 の 原 義 は 「 発 話 場 面 で の 変 化 が 明 白 に 観 察 さ れ な い 」 と い う 状 態 を 表 す の で は な い か と 仮 定 で き る 。 継 続 ア ス ペ ク ト は あ る 動 作 が 発 話 場 面 で 行 わ れ て い る も の の 、 目 的 も 開 始 点 ・ 終 結 点 も さ だ か で は な い の で 、 変 化 が 少 な い 。 ま た 未 完 了 ア ス ペ ク ト と

- (18) a. *baneza udde uʔaʔ-alabba ta-t-tiup-ann u-aɲinna*
 flag that UA-flutter RED-blow-ANNA NU-wind
 'That flag is fluttering blown by the wind.'
- b. *manuʔa udde tantaranna maɲ-ŋ-alabba letaʔa*
 bird that now MAN-RED-scratch ground
 'That bird is now scratching the ground.'

Activity verb の習慣アスペクトの例は (19) a であるが、実際には習慣アスペクトの例は少ない。習慣アスペクトは、習慣的に行う動作を表すものであるが、大体において職業を表すことになることが多い。

- (19) a. *i-maɲitou ua-manara su ʔailla*
 I-3pl UA-work LOC field
 'They are farmers.' (UA-form)
- b. *i-maɲitou ma-m-manara su ʔailla*
 I-3pl maN-RED-work (PROG) LOC field
 'They are working in the field.' (progressive form)

また Activity verb が未完了アスペクトを表すこともある。(20) a の *ua-ruai* (*ruai* 'to cry' の UA-形) は、「泣きそうな気持ちを味わっている」ということを表す。同じ動詞の継続アスペクトは (20) b に示したように、「泣いている」状態を表す。

- (20) a. *i-aʔu ua-ruai ma-dariɲikka battiʔa udde*
 I-1sg UA-cry MA-hear news that
 'I feel like crying hearing that news.' (UA-form)
- b. *i-aʔu l-u-l-luai ma-dariɲikka battiʔa udde*
 I-1sg RED-cry MA-hear news that
 'I am crying hearing that news.' (progressive aspect)

Activity verb の UA-形は動詞によって、継続アスペクト、習慣アスペクト、未完了アスペクトのいずれかを表す。

5. 結論

語彙的アスペクトごとに、UA-形をとったときのアスペクトをまとめると、以下の表2のようになる。atelic な Stative verb, Activity verb, telic な Accomplishment verb,

4.4. Activity verb: 継続アスペクトと習慣アスペクトおよび未完了アスペクト

ある長さの時間にわたって行われる動作を表し、その終結点が内包されていない Activity verb の UA- 形は継続アスペクトと習慣アスペクトあるいは未完了アスペクトを表すことがある。

まず、継続アスペクトについて述べる。Activity verb はすべて継続アスペクト形を持つので、UA- 形と継続アスペクト形の違いが分かりにくい場合もある。例えば、以下の (16) a, b は *alaŋŋa* 'to swim' の UA- 形と継続アスペクト形は両方とも「泳いでいる」状態を表す。調査協力者の Ipu 氏によると、UA- 形の方は「目的なく泳いでいる」感じが強く、継続アスペクト形は「目的をもって、何かの到達点に向かって泳いでいる」感じが強いという。つまり、継続アスペクトは「終結点に向かって行われる動作の継続」、UA- 形は「終結点を念頭におかない動作の継続」を表すということである。しかし、終結点を明示していない (16) a の文と、終結点を示した (16) b の文中において、UA- 形と継続アスペクト形を交換しても使用可能であるので、決定的な差とはいえない。

(16) a. *i-mari uʔaʔ-alaŋŋa su luaʔa*

Mary UA-swim LOC sea

'Mary is swimming at the sea.' (UA-form)

b. *i-mari tantaranna uʔ-alaŋŋa inai su melongwane*

Mary presently PROG-swim go LOC Melongwane

'Mary is swimming to Melongwane (central city of the Talaud islands).' (progressive aspect)

次の例 (17) は、a の UA- 形の文については上記の Accomplishment verb の例 (15) のように、CONVEYED THEME が主語になることもある。例 (17) b と対照されたい。

(17) a. *βawalu udde ua-tummaʔa su lisunna*

mallet that UA-pound LOC mortar

'A mallet is used to pound (something) in the mortar.' (UA-form)

b. *i-tou ma-b-balu amme*

I-3sg MA-RED-crush rice

'S/he is pounding rice.' (progressive form)

例 (18) a は、a の UA- 形が継続アスペクト形とはかなり異なる意味を表す。UA- 形の *uʔaʔ-alabba* (*alabba* 'to scratch' の UA- 形) は「はためている」状態を表すのに対し、継続アスペクト形は「ひっかいている」動作の継続を表す。

- b. *asu udde tantaranna ma-n-naʔappa manuʔa*
 dog that presently MAN-RED-catch chicken
 'That dog is now catching (i.e. chasing) a chicken.' (non-past form)

- (14) a. *i-maʔitou ua-saʔe su oto*
 I-3pl UA-board LOC car
 'They are on board the car.' (UA-form)

- b. *i-maʔitou s-u-s-saʔe su oto*
 I-3pl RED-/u/-RED-board (PROG) LOC car
 'They are boarding the car.' (progressive form)

以下の(15)では、UA-形の動詞がとる主語が、Conveyance Voice (移動物、道具を主語にとったときの動詞のヴォイス)をとるときと同様の主語になることが示されている。(15) aの *ua-suanna* (*suanna* 'to plant'のUA-形)は「植わっている」状態を表す。(15) bに示された Conveyance Voiceの文と同様、主語が「木々」となっている。(15) cに参考として挙げた Actor Voiceの文では木々を植える「彼ら」が主語となる。つまり、UA-形の動詞が CONVEYED THEME (移動物、道具など、空間を移動する無生物を表す意味役割)を主語とすることがあるのである。この現象は Activity verbのUA-形に関しても見られるものである。

- (15) a. *manambo aʔaluanna ua-suanna su letaʔa udde*
 many tree UA-plant LOC ground that
 'Many trees are planted on that ground.' (UA-form)

- b. *manambo aʔaluanna ni-suanna su l etaʔa udde*
 many tree NI-plant (CV) LOC ground that
 'Many trees were planted on that ground.' (past tense, Conveyance Voice)

- c. *i-maʔitou ma-s-suanna aʔaluanna*
 I-3pl MA-PROG-plant tree
 'They are planting trees.' (progressive form)

このように、Accomplishment verbのUA-形は未完了アスペクトあるいは結果アスペクトを表す。どちらのアスペクトを表すかは動詞語基によって決まっている。ただし、例(13), (14), (15)のように、動作の結果が目に見えて観察可能であり、長めの時間をかけて行う動作を表す動詞語基は結果アスペクトを表す傾向が強いのではないかと考えられる。一方、例(11), (12)は、かなり短い間に終了する動作を表しており、未完了アスペクトを表している。

以上のように、Achievement verb の UA- 形は未完了アスペクトを表す。

4.3. Accomplishment verb の UA- 形：未完了アスペクトと結果アスペクト

Accomplishment verb は終結点を内包し、動作の経過に一定の時間が必要な動詞であり、継続アスペクト形は「動作の継続」を表す。これらの動詞語基の UA- 形は終結点の直前の時点における状態を表すことがある。これは未完了アスペクトと言える。(11) a の *ua-lendappa* (*lendappa* ‘to get glitter’ の UA- 形) は、「輝く」一歩手前の状態を表す。(12) a の *ua-here* (*here* ‘to tear’ の UA- 形) は「破れそうである」という、「破れる」の一歩手前の状態を表す。これらの動詞の継続アスペクト形は (11) b、(12) b に示したように、「状態の継続」「動作の継続」を表す。

- (11) a. *harele udde ua-lendappa*
 sword that UA-shine
 ‘That sword will shine soon (because it is being polished).’ (UA-form)
- b. *βuaβanna udde l-u-l-lendappa*
 gold that RED-/u/-RED-shine
 ‘That gold is shining.’ (progressive form)
- (12) a. *laubba udde ua-here=te*
 clothes that UA-tear=COMP
 ‘That clothes is on the verge of being torn.’ (UA-form)
- b. *laubba udde tantaranna ma-ŋ-ŋere=te*
 clothes that presently MAN-RED-tear=COMP
 ‘That clothes is now being torn.’ (progressive form)

同時に、Accomplishment verb の UA- 形の中には結果アスペクトを表すものもある。(13) a の *ua-taʔappa* (*taʔappa* ‘to catch’) は、「捕まえた後、(犬が) 口にくわえている状態」を表すのに対し、その継続アスペクト *ma-n-naʔappa* は「捕まえるために追いかけている状態」を表す。(14) a の *ua-saʔe* (*saʔe* ‘to board, to ride’ の UA- 形) は「乗っている状態」を表す。その継続アスペクト形は (14) b に示したように、動作が進行中であることを示す。

- (13) a. *asu udde ua-taʔappa manuʔa*
 dog that UA-catch chicken
 ‘That dog has caught a chicken (and is holding it in its mouth)’ (UA-form)

b. *i-mari ma-tanaʔa su lirun*

I-Mary MA-live LOC Lirung

'Mary lives in Lirung.' (non-past form)

まとめると、Stative verb の UA- 形は、未完了アスペクトを表す場合と、継続アスペクトを表す場合がある。

4.2. Achievement verb の UA- 形：未完了アスペクト

Achievement verb は一瞬で終結する動作を表し、その継続アスペクト形は繰り返し行われる動作を表す。このような動詞語基は UA- 形をとらない場合も多いが、UA- 形を取る場合は、動作が行われる直前の状態を表す。以下の (8) a、(9) b の UA- 形が Achievement verb の UA- 形の例である。(8) a の *ua-oʔa* (*oʔa* 'to punch' に UA- が付加した動詞) は、「殴る」直前の状態、(9) b の *ua-pesanna* (*pesanna* 'to break' に UA- が付加した動詞) は「壊れる」ことが明らかな段階にあるということを示す。(10) a の *ua-puʔo* (*puʔo* 'to wake up' の UA- 形) は、「起きる」手前の半覚醒状態を表す。

(8) a. *lima=ne ua-oʔa=te*

hand=NI.3sg UA-punch=COMP

'His hand is ready for punching.' (UA-form)

b. *i-tou ma-ŋ-ŋoʔa si-hani*

I-3sg MAN-RED-punch SI-Hanny

'S/he is (repeatedly) punching Hanny.' (progressive aspect)

(9) a. *arabbi i-aʔu na-ʔellega lamaʔa udde taʔambe na-pesanna,*

yesterday I-1sg MA-see dish that not.yet NA-break

'Yesterday I saw that dish has not broken yet, (past form)

b. *arawe orassa indi lamaʔa udde ua-pesanna=ke.*

but hour this dish that UA-break=COMP

but now that dish is about to break.' (UA-form)

(10) a. *aʔellehanna i-tou ua-puʔo*

it.seems I.3sg UA-awake

'It seems that s/he is half awake.' (UA-form)

b. *i-aʔu ma-puʔo orassa sambau*

I-1sg MA-awake hour one

'I will get up at one o'clock.' (non-past form)

4.1. Stative verb の UA- 形：未完了アスペクトと継続アスペクト

Stative verb は、継続アスペクト形を持たない。また、UA- 形を持つものも少ない。少数の Stative verb が UA- 形をとると、未完了アスペクトを示す場合と、状態の継続を表す場合がある。

未完了アスペクトとは、「未完了の状態：動詞で表される状態に至る一歩手前の状態」を表すアスペクトである。感情や感覚、あるいはそれらの結果行われる動作を示す動詞の場合は「動詞で表される状態の一歩手前にある」ことを表す。その結果、動詞の表す意味が少々異なってくることもある。例えば、(5) a では、*ma-aʔilla* 'to see' という Stative verb の UA- 形、*ua-alla* が、'awake' という意味を表す。非過去形を用いた (5) b と対照していただきたい。また、(6) a のように、感情にかかわる動詞の場合、「動詞で表される状態にはまだ至っていないが、至る可能性がある」という意味を表す。これらも未完了アスペクトの範疇に入ると考えられる。

- (5) a. *anaʔa udde ua-alla taʔambe na-tiʔilla*
 child that UA-see yet NA-sleep
 'That child is awake and has not fallen asleep yet.' (UA- form)

- b. *anaʔa udde ma-aʔilla apalla su laʔuanna*
 child that MA-see boat LOC port
 'That child sees a boat at the port.' (non-past form)

- (6) a. *i-maʔitou ua-taʔt-u asu udde*
 I-3pl UA-fear-NU dog that
 'They feel little fear toward that dog.' (UA-form)

- b. *i-maʔitou ma-taʔt-u asu udde*
 I-3pl MA-fear dog that
 'They fear that dog.' (non-past form)

Stative verb が UA- 形をとったときに表すもう一つのアスペクトは、継続アスペクトで、「状態の継続」を表す。Stative verb には継続アスペクトがないので、UA- 形がその補完として継続アスペクトを表す。(7) a の UA- 形 (*ua-tanaʔa* 'be living') は (7) b の非過去形 (*ma-tanaʔa* 'to live') とほとんど同じように使えるが微妙な意味の違いもある。UA- 形は「一時的な状態」あるいは「以前とは異なる現在の状態」を表すが、非過去形にはそのような付加的な意味はなく、単に「現在の状態」を表す。

- (7) a. *i-mari ua-tanaʔa su liruppa*
 I-Mary UA-live LOC Lirung
 'Mary lives in Lirung.' (UA-form)

これらの動詞の非過去形は「まだ行われていない動作」を表す。これらの動詞の意味に動作の終結点は内包されておらず、atelicである。このとき、動詞語基の語彙アスペクトは Activity verb に分類する。

3.5. Accomplishment verb

ある一定の時間で終了する動作を表す動詞語基のうち、継続アスペクト形をとったときに、「動作・状態の継続」を表すものがある。これらを accomplishment verb とする。例えば *l-um-endappa* 'to get glitter' の継続アスペクト形 *l-u-l-lendappa* 'be glittering'、*ma-ŋere* 'to tear' の継続アスペクト形 *ma-ŋ-ŋere* 'be tearing' である。*l-um-endappa* は「光る」時点が終結点、*ma-ŋere* は「破れる」時点が終結点で、ともに telic である。これらの動詞の非過去形は「まだ行われていない動作」を表す。

3.6. Achievement verb (instantiative verb)

瞬間的に終了する動作を表す動詞語基は、継続アスペクト形をとったときに、繰り返して行われる動作を表す。これらを achievement verb に分類する。例としては *r-um-anta* 'to arrive' の継続アスペクト形 *r-u-d-danta* '(plural actor) repeatedly arrive' や、*ma-ŋoʔa* 'to punch' の継続アスペクト形 *ma-ŋ-ŋoʔa* 'to punch repeatedly' が挙げられる。これらの動詞の非過去形は「まだ行われていない動作・出来事」を表す。これらの動詞の意味に終結点が内包されており、telic であるといえる。これらは achievement verb に分類することにする。

3.7. 語彙的アスペクトのまとめ

ここで、以上の議論をまとめる。

まず、継続アスペクト形を持たないものは stative verb とする。継続アスペクト形がある動詞のうち、継続アスペクト形が「繰り返して行う動作」を示す場合は achievement verb、「動作の継続」を示し、atelic な場合は activity verb、telic な場合は accomplishment verb とする。次の節では、UA- 形を用いた例文を挙げ、それぞれどの語彙的アスペクトを持つかを考える。

4. 語彙的アスペクトと UA- 形

この節では、前節で述べた語彙的アスペクトごとに、UA- 形をとったときの動詞がどのような意味を表すかを考察する。

大まかに述べると、Activity verb の UA- 形は様々なアスペクトを表す。しかし、その他の Stative verb、Achievement verb、Accomplishment verb に関しては、ほぼ一定のアスペクトを表す。これらの動詞の UA- 形を先に述べ、最後に Activity verb の UA- 形の意味を述べることにする。

以下の例においては、参考のため、UA- 形と同じ語基が、非過去形、過去形、継続アスペクト形など、UA- 形以外の形態をとったときの動詞の例文も示し、参照できるようにしてある。

クト形（表1参照）に関しては、持っている動詞と持っていない動詞があるようである。継続アスペクト形の有無を判断することは時には難しい。一つには、動詞によっては非過去形と継続アスペクトの形態が似ているからである。接頭辞 *ma-/na-* あるいは接頭辞 *maN-/naN-* をとって Actor Voice を形成する動詞に関しては、声門閉鎖音や鼻音が重子音化したときに、本当に重子音化しているかどうかは聞こえにくいからである。例えば *ma-ʔellega* ‘to look at’ が継続アスペクト形の *ma-ʔ-ʔellega* ‘be looking at’ になったとしても、声門閉鎖の時間が長いかどうかはわかりにくい。また、*ma-nabbiʔa* ‘to sew’ が *man-n-nabbiʔa* ‘be sewing’ となっても、重子音の鼻音は一つの鼻音の2倍の長さで発音されるわけではない。筆者の感覚では1.5倍ほどであるので、聞き取りにくい。また、話者によっては非過去形や過去形においても、語基の最初の子音が長めに発音され、重子音と紛らわしい場合がある。

二つ目の理由としては、多分上記のような理由により、話者によっては継続アスペクト形があることを明確に認識していない場合も多いからである。特に1970年代生まれ以降の話者には、継続アスペクト形がよく理解できていない場合も多い。

三つ目の理由としては、動詞によっては継続アスペクト形が存在しないものがあるからである。

ただし、筆者が複数の調査協力者に対し、合計10回の調査で得たデータの結果からは、継続アスペクト形は一部の動詞を除いて確かに存在すると言えるし、先行研究にもそのように記載されている（Malee (1995)、Sneddon (1984)、Bawole (1981) など）。また、接中辞 *-um-* をとって Actor Voice を形成する動詞に関しては、非過去形と継続アスペクト形がかなり異なる形態をとるので、両者が混同されることはない。

以下では、主に非過去形の意味と、継続アスペクト形の有無、およびそれが表す意味による動詞の語彙的アスペクトの分類を試みる。

3.3. Stative verb

状態を表す動詞語基のうち、継続アスペクト形を持たないものがあるが、それを Stative verb に分類する。

継続アスペクト形は、3.2. で述べたように、音声的な条件によって認識しにくいこともあるが、複数の話者に聞いてみれば、明確に存在すると結論できる場合がある。他方、複数の話者にきいても継続アスペクト形と非過去形の違いが認められない場合がある。後者の場合、動詞語基の意味は「変化の少ない状態」を表すことが多く、継続アスペクト形は存在しないのだと考えられる。これらの動詞の非過去形は「現在の状態」を表す。例としては、*ma-tanaʔa* ‘to live in’、*ma-tautta* ‘to fear’、*ma-tiʔilla* ‘to sleep’ が挙げられる。上記に述べたように、このような動詞語基は stative verb（状態動詞）に分類する。以下、継続アスペクト形を持つ動詞の語彙アスペクトをその意味特徴によって残りのアスペクトに分類する。

3.4. Activity verb

動作を表す動詞語基のうち、動詞の継続アスペクト形が、「動作の継続」を表すものは Activity verb に分類する。例えば *um-alayya* ‘to swim’ の継続アスペクト形 *uʔ-alayya* ‘be swimming’、*ma-nabbiʔa* ‘to sew’ の継続アスペクト形 *ma-n-nabbiʔa* ‘be sewing’ などである。

- (4) *tantaranna i-maṇṭou ma-n-naṣa?u allu udde, i-ani s-in-um-abbi.*
 now I-3pl MAN-RED-lay tree that I-Any NA-UM-walk.by
 ‘When they are laying down that tree, Any walked by.’

2.3.3. UA- 形の概観

タラウド語の動詞は上に述べた継続アスペクト形のほかに、base に接頭辞 UA- が付加した継続や状態を表す形態を持つ。この UA- が付加した動詞（以下 UA- 形と表記）は、未来、現在、過去のいずれにおける事態についても用いることができる点でも、動作の継続や状態の継続を表すことができるという点でも継続アスペクト形と似通っている。しかし、両者には異なる点もある。それは UA- 形が動作の「結果」および「未完了」を表すことがあるという点である。つまり、UA- 形は「結果アスペクト」と「継続アスペクト」の双方を表す形態だと言える。

以下、適宜 UA- 形と継続アスペクト形の形態を比較しつつ、UA- 形の用法を明らかにする。

接頭辞 UA- は動詞の base の直前に付加される。例えば、*tana?o* ‘to live’ という base の UA- 形は *ua-tana?o* となる。ただし、接中辞 -um- をとって動詞を形成する base が母音で始まるときは、/ua/ ではなく /uṛa?/ となる。たとえば、*omaṇṇa* ‘to crawl’ に UA- が付加すると *uṛa?-omaṇṇa* となる。また、タラウド語には語頭で自由交替、語中で形態音韻論的な交替を示す音素のペアが三つある。/β/ と /w/、/d/ と /r/、/g/ と /h/ である。UA- が付加すると、それらのペアのうち、「弱い」ほう（近接音ないし摩擦音ないし trill）に交替する。

3. 動詞の語彙的アスペクト

3.1. 語彙的アスペクトの分類

タラウド語の動詞の語彙的アスペクトを概観してみたい。タラウド語の動詞のアスペクトがどのような体系をなしているかを探るために、Vendler 1957 の動詞の四分類、achievement verb, accomplishment verb, activity verb, stative verb を適用できるかを考えていきたい。

Vendler (ibid) は英語の動詞を分類しているのであるが、動詞はまず継続アスペクト（英語の場合は be + -ing の形態）をとることができて「（動作の）継続」を表すことができるものが activity verb と accomplishment verb である。Activity verb は atelic であり、動詞の終止点を内包しないが、accomplishment verb は atelic であり動作の終止点を内包する。継続アスペクトをとって「継続」を表さない動詞は achievement verb と stative verb である。前者は telic であって終止点を内包するが、後者は atelic であって終止点を内包しない。

以下ではこれらの概念がどのようにタラウド語に応用できるかを考える。

3.2. 継続アスペクト形の表す意味による分類

タラウド語の動詞は非過去形と過去形の形態は必ず持っている。これに対し、継続アスペ

表 1: タラウド語のテンス・アスペクト体系

Actor Voice			
	非過去形	過去形	継続アスペクト形
-um- 動詞	-um- + Base	na- + -um- + Base	C1 + /u/ + GEN + Base
例 lagge 'to laugh'	<i>l-um-agge</i>	<i>na-r-um-agge</i>	<i>l-u-l-lagge</i>
ma- 動詞	ma- + Base	na- + Base	ma- + C1 + Base
例: suanna 'to plant'	<i>ma-suanna</i>	<i>na-suanna</i>	<i>ma-s-suanna</i>
maN- 動詞	maN- + Base	naN- + Base	maN- + N + Base
例: here 'to tear'	<i>ma-ɲere</i>	<i>na-ɲere</i>	<i>maɲ-ɲere</i>
Goal Voice			
	非過去形	過去形	継続アスペクト形
-um- 動詞、ma- 動詞	Base + -ANNA	na-/ni- + Base + ANNA	C1 + /a/ + GEN + Base + -ANNA
maN- 動詞			
例: lagge 'to laugh'	<i>lagge-anna</i>	<i>ni-lagge-anna</i>	<i>l-a-l-lagge-anna</i>
Coneyance Voice			
	非過去形	過去形	継続アスペクト形
-um- 動詞、ma- 動詞	i- + Base	n-i- + Base	i- + C1 + /a/ + GEN + Base
maN- 動詞			
例: lagge 'to laugh'	<i>i-lagge</i>	<i>n-i-lagge</i>	<i>i-l-a-l-lagge</i>

2.3.2 アスペクトを表す小辞

そのほか、重要なアスペクトを表す要素には、完了アスペクトを表す *te* がある。また、*sarun* は非過去形とのみ共起しその直前におかれ、未来を表す要素である（例 1）。*sute* は過去形のみと共起しその直前におかれ、完了あるいは過去を示す（例 2）。*tantaranna* は継続アスペクト形あるいは後述する UA- 形のみと共起し、現在進行中であることを示す。この要素は動詞の直前におかれることもあるし（例 3）、文頭に出てきてもかまわない（例 4）。

(1) *alu udde sarun ma-zaɲu*

that tree FUT MA-wither
'That tree will wither.'

(2) *i-maɲitou-n-tallu suete na-ma-silo n-apa-pande wuzu awawisa m-maɲitou*

I-3pl-LK-three COMP NA-PA-see NU-REL-clever and holiness NU-3pl
'The three of them have shown their cleverness and holiness.'

(3) *i-maɲitou tantaranna ma-n-nazaʔu allu udde, i-ani s-in-um-abbi.*

I-3pl now MAN-RED-lay tree that I-Any NA-UM-walk.by
'When they are laying down that tree, Any walked by.'

は、北部スラウェシ州の他の地域からくることが多い。タラウド諸島の近くのサギル諸島から移住する人々もいるし、北部スラウェシ州の州都であるマナド市から移住することもある。中部スラウェシ、南部スラウェシから来る人々もいるし、遠くジャワ島から移住してくる人々も多い。

以下のデータの大部分は Christofer Ipu 氏（1939 年生まれ）による作例と、談話テキスト（語り手は Christofer Ipu 氏、Musa P. Tinuwo 氏（1941 年生まれ）、他 2 名）による。

2.2. タラウド語の音声

タラウド語には /i, e, a, o, u/ の 5 母音がある。子音は方言によって数が異なる。サリババ方言の場合は /m, n, ŋ, p, b, t, d, k, g, ʔ, β, s, h, z, r, l, w/ の音韻が認められる。このうち /b/ と /k/ は重子音でしか現れない。音韻を確定するにはさらなる考察が必要である。なお /r/ は trill, /ɾ/ は flap, /l/ は側面音である。/z/ には自由異音があるが、最も頻度が高いのは retroflex alveolar approximant であり、注意深い発話のときは retroflex alveolar fricative となる。調音時に上下の歯は合わさっていない。

2.3. タラウド語のテンスとアスペクトの概観

2.3.1. 非過去形、過去形および継続アスペクト

タラウド語の動詞を形成する base には特に多くの接辞が付加される。動詞には接中辞 *-um-/ni-um-*、接頭辞 *ma-/na-*、接頭辞 *maN-/naN⁴⁾* の三つの動詞形成接辞のいずれかをとり、最大三つの態（Actor Voice, Conveyance Voice, Goal Voice）をとることができる。どの態においても非過去形と過去形の二つのテンスの他に、継続アスペクトの形態がある。以下、これを「継続アスペクト形」と呼び、動詞のアスペクトの一つ、「継続アスペクト」とと区別する。継続アスペクト形は部分的重複の形態を持ち（base の最初の子音が繰り返される）、これは未来、現在、過去のいずれにおける事象にも用いることができる。この点において、継続アスペクト形は非過去形、過去形といったテンスとは異なる「アスペクト」として扱うべきと考えられる。しかし、実際の用法をみるとこの三者が相互補完的に用いられ、非過去形が「未来の事態」、継続アスペクト形が「現在の状態」や「進行中の事態」、過去形が「過去の事態」を表すことが多い。非過去形を「未来形」と呼ばない理由は、一般的な事象や現在における習慣を非過去形が表す場合があるからである。ただし、習慣的行為は継続アスペクト形で表現される方が多いので、テンスとアスペクトの体系についてはさらなる考察が必要である。継続アスペクト形は、一部の動詞（Stative verb（状態動詞））には存在しない。

非過去形、過去形、継続アスペクト形は表 1 に、まとめた。表中の C1 は base の最初の子音、N1 は base の最初の子音と同じ位置で鼻音化した音（たとえば /p, β/ の場合は鼻音化すると /m/ となる）を表す。タラウド語の動詞がとりうる 3 つの態が示されているが、すべての動詞がすべての態をとるわけではない⁵⁾。また、過去形に現れる接頭辞 *na-* あるいは *ni-* は、base が子音で始まる場合はしばしば接中辞 *-in-* と自由交替する。この接中辞は base の最初の子音のあとに挿入される（*s-um-a2e* の過去形は *na-s-um-a2e* あるいは *s-in-um-a2e*）。

タラウド語のアスペクト体系と結果 相・継続相を表す接頭辞 *UA-* が付加した動詞¹⁾

内海 敦子*

キーワード：オーストロネシア語族、タラウド語、継続アスペクト、結果アスペクト

1. 概説

インドネシア国北スラウェシ州で話されているタラウド語には結果アスペクトと継続アスペクトの両方を表すことができる、接頭辞 *UA-* が付加した形態がある。同言語には他に継続アスペクトも存在する。本発表では *UA-* 形を継続アスペクトと比較することによって、*UA-* 形の用法の分析を行う。

2. タラウド語の概要

2.1. タラウド語の話されている地域と本論文で使用するデータ

タラウド語はインドネシア国スラウェシ島北部州のタラウド諸島県 (Kabupaten Kepulauan Talaud) の全域で話されると考えてよい。タラウド諸島県は、その名の通りタラウド諸島から成り、その北端はフィリピン南部のミンダナオ島と接している。タラウド諸島の大きな島は、県庁所在地のメロンワネ市 (Melongwane) が在するカラケラン島 (Karakelang)、カバルアン島 (Kabaruan)、サリバブ島 (Salibabu) の三つである。フィリピン国境には小さな六つの有人の島といくつかの無人島からなるナウサ諸島 (Nausa) がある。そのほかに多数の無人島がある。

タラウド語はオーストロネシア、西マラヨ・ポリネシア言語グループの中のフィリピン・グループに属する。周辺の5つの言語 (うち4言語がインドネシア北部州、残りの1言語がフィリピン南部で話されている) からなるサギル諸語 (Sangiric micro-group, cf Sneddon 1984) の一つである。タラウド語は大きく六つの方言に分かれるとされる²⁾。本発表のデータはそのうちで一番標準的とみなされているサリバブ (Salibabu) 方言³⁾ に基づいている。

話者はすべての方言を合わせて3万人という推定 (Noorduyn, 1991) が20年前になされているが、発表者の行った社会言語学的調査の結果 (内海 2011) によると、若年層のタラウド語使用は激減しており、特に1970年代以降に生まれたものは流暢に話せないことが多い。なお、タラウド諸島の人口は最近の10年間で4万人ほどから7万人ほどに増えている。この増加は自然増とは考えられないので、移住による増加だと思われる。移住してくる人々

- 19) Butler, p. 101.
- 20) Monet, p. 16.
- 21) Butler, pp. 102-103.
- 22) Wildenstein vol I, p. 31, n. 215.
- 23) Ibid., p. 46, n. 355.
- 24) Butler, p. 108.
- 25) Ibid., p. 105.
- 26) Ibid., p. 107.
- 27) Ibid., p. 109.
- 28) Frédéric Bazille, *Correspondance*, Les Presses du Languedoc, Montpellier, 1992, 74 *A son frère*, p. 116.
- 29) Butler, pp. 112-113.
- 30) Bazille, 75 *Gaston Bazille à son fils*, p. 118.
- 31) Ibid., 76 *A sa mère*, p. 120.
- 32) Butler, p. 113.
- 33) Ibid., p. 149.
- 34) Ibid., p. 118.
- 35) Ibid., p. 116.
- 36) Wildenstein, vol. IV, 1803 *A Gustav Pauli*, p. 370.
- 37) エミール・ゾラ『美術論集』ゾラ・セレクション9、三浦篤・藤原貞朗訳、藤原書店、2010, pp. 105-106.
- 38) Gedo, p. 161.
- 39) Ibid., p. 163.
- 40) Butler, pp. 177-179.
- 41) Gedo, pp. 162-163.

* * *

今一度国立新美術館のワシントン・ナショナル・ギャラリーに戻ってみよう。実際は観客が多すぎて心ゆくまで『散歩』を鑑賞することはできなかった。ただし、背景の空がまるで描きかけのようになって、《見たところ無定型である雲の流れ、その雲がときおりその姿形をはっきりと見極められるようになる前、空の上に絶えず雲を動かしているさわやかなそよ風に旋回させられた霧のような雲の流れはほぼ抽象画のような機能、とはいっても具象画の範囲内ではあるが、そのような機能として作用している。抽象画としても自立しているようにも見えているにもかかわらずモネの雲は統一化されたゲシュタルトを描いているものの形を損なっているわけではない。むしろ雲の絶えざる動きはこの作品の主題論的な統一に役立っている、つまり、光と風を描くことが、同時に光と場所を描くことになっているのだ》¹¹⁾とジェドの言うところをはっきりと確認できた。

最後に一つだけ。展覧会のカタログに戻ろう。ジョルジュ・リヴィエールは「丘の上に立った若い女性と少年が、木いちごと高い草に囲まれながらあたりをみまわしている」と書いたとあるが、そうであるなら彼は何も見ていないことになる。「若い女性と少年」はじっとこちらを見るのであって「あたりをみまわして」いない。残念ながらこの批評家の原文を読んでいないので翻訳者の間違いか、それとも、この絵の「今にも動きそうな」雰囲気に関わられてしまったのかわからない。「散歩」を「散歩道」と翻訳してしまう翻訳者は英語しかわからない、フランス語を読んだこともない翻訳者であることだけは間違いのない。残念である。

注

- 1) Mary Mathews Gedo, *Monet and His Muse Camille Monet in the Artist's Life*, The University of Chicago Press, Chicago, 2010, p. 166.
- 2) Ibid.
- 3) カーラ・ラックマン『岩波 世界の美術 モネ』高階絵里加訳、岩波書店、東京、2003、p. 221.
- 4) Gedo, p. 161.
- 5) 『ワシントン・ナショナル・ギャラリー展 印象派・ポスト印象派 奇跡のコレクション』日本テレビ放送網、2011、p. 233.
- 6) ジェームズ・H・ルービン『岩波 世界の美術 印象派』太田泰人訳、岩波書店、2002、p. 14, p. 174.
- 7) Ruth Butler, *Hidden in the Shadow of the Master, The Model-Wives of Cézanne, Monet, & Rodin*. Yale University Press, New Haven & London, 2008, pp. 179-180.
- 8) Ibid., p. 183.
- 9) Ibid., pp. 183-184.
- 10) Ibid., p. 179.
- 11) Daniel Wildenstein, *Claude Monet, Bibliographie et catalogue raisonné*, vol. I, La bibliothèque des arts, Genève, 1974, p. 31.
- 12) Ibid., p. 99.
- 13) Claude Monet, *Mon histoire*, recueillie par Thiébault-Sisson, L'ÉCHOPPE, Paris, 1998, pp. 9-10.
- 14) James A. Ganz, Richard Kendall, *The Unknown Monet, pastels and drawings*, Sterling and Francine Clark Art Institute, Williamstown, Massachusetts, 2007, p. 5 sqq. この日記は2012年に出版予定であるとのこと。
- 15) Butler, pp. 98-99.
- 16) Ibid., p. 99.
- 17) Monet, p. 13.
- 18) Ibid., p. 15.

カミーユはこの場で女神となっている。彼女が踏みしめる草花ばかりではなく《風や雲もまた、自然の王国とそれを支配する女神が動き出す幻想を高める重要な役割を担っている》。そしてジャンですら《母親の少し下の方、背後に立ち、落ち着き確固として無関心な表情で観察者と向き合って》母＝女神に従い観察者の目を恐れない³⁹⁾。

そしてバトラーは、

しかし1875年の夏、モネはカミーユとジャンの本当に素晴らしい姿を生み出した。彼は二人を丘の上に立たせた。そのために彼はまだらになった雲のある青空を背景に彼らを見上げることになる。カミーユはこれまでの絵に見たことのないアンサンブルを着ている。透けた白いドレスとそれに合わせたジャケットである。その縁を動きに任せて描き、彼は白い絵の具をたっぷり含んだ絵筆をその表面に素早く走らせた。ドレスの襷はそよ風にはためいて躍動し青と灰色、緑と黄色の影を作る。緑のバラソルは丁度カンバスの天辺に届き彼女の顔に影を与え画面の4分の3ほどのところに見える。太陽は目に見えないが力強く、花の黄色と草の緑とを詰め込んだ丘の斜面に影となったカミーユのもう1つの姿を画面の下縁まで作り出している。彼女の姿、彼女のバラソル、彼女の影が組み合わさってカミーユを強力な縦の存在とし、スカートの脇を風がさらさらと吹き抜ける動きに溢れたイメージを作りあげている。それがまた素敵な夏の1日を描き切っている。彼女は夫を上から見下ろしている。その問いかけるような目は、顔を覆っている風になぶられたヴェールで半分隠れている。多くのモネの絵にあるようにジャンは母親から離れて丘の向こうの斜面に立って、腰から上しか見えない。立ったままポケットに手を入れボーターシャツを着、濃紺のタイをして緑の広い黄色い麦藁帽を被っている。彼の大きな丸い目は真っ直ぐ父親を見ている。これは頻繁にモネが息子に要求する特徴的なポーズである⁴⁰⁾。(傍点筆者)

モネは2人を見上げなければならない。そして見えない太陽が彼女の後光のごとく、その影で《一つの姿を画面の下縁まで作り出して》しまう。そして彼女は《強力な縦の存在》として画面全体を覆っている。その背後でジャンの《大きな丸い目は真っ直ぐ父親を見ている》。その目は極力感情を廃したものとなろう、それとは反対にカミーユの目は《問いかける》。上から《問いかける目》を観察者、父親、夫クロード・モネは思わず画面に描いてしまう。もちろん縦の存在とは支配関係を示し、横の関係は同志を表すのは言うまでもない。

11年後、彼は『日傘の女』を2枚制作する。『右向き』と『左向き』のどちらが先に出来上がったかと詮索するのはモネに関して言う意味はない。2つはおそらく同時に描かれていた。その描く姿は『積み藁』でも『ルーアンの大聖堂』でも同時進行のエピソードになって知られている。ただ『右向き』と『左向き』の違いは様々だが、1つだけ大きな違いがある。『右向き』にはぼんやりとだが目が入れている一方で『左向き』には目は描かれない。その瞬間モネは『散歩』の目をまじまじと見てしまったのだ。その問いかける目を、振り向きざまに見る目を、射尽くす目を、モネは見えてしまう。内心の後悔を、内心の忸怩を、内心の無念さを、まさしく『左向き』はモネの感情とともに穴が開けられてしまうのである。

年前の『散歩』におけるカミーユは完璧だった。モネはそう思ったのだろう。何が完璧だったのだろうか。その仕草か、その姿か、それとも、何であろうか。ここまでカミーユのモデルとしての才能を見るために『ラ・ジャポネーズ』と『カミーユ』を例として見てきたがこの両者に共通しているのが今にも動き出そうとして体をひねっているところをモネは素早く描いた。この「今にも動き出そうとしている」という感覚は印象派の絵画に必要な要素であり、実際、私が初めてモネの絵を見たのが上野の国立西洋美術館に納められた『舟遊び』と邦題のついた『ボートに乗った娘たち』の絵で、これはおそらくマルト、ブランシュ、セザンヌのうちの2人がボートにのんびり乗っているものだろうが、目に入るやいなやボートが揺れている感覚に捕らえられ大げさに言えば船酔いにでもなるのではないかと錯覚した。「今にも動き出そうとしている」という感覚である。ただこれは人物の所為ではなく、水とそれに浮いているボート、水に映る人影といったものが動きを与えている。たとえばまだオルセー美術館ができる前オランジュリー美術館と対になっていたジュ・ド・ポムの印象派美術館にモネの連作『ルーアンの大聖堂』の4枚が掛かっている壁を初めて見た時それが陽炎か何かでゆらゆらしている錯覚に陥った記憶があるが、『船遊び』はそれに似ている。今にも動き出そうとしているのはモネの筆触による。モネの技術の勝利である。しかし、『ラ・ジャポネーズ』や『カミーユ』はモネの技術もあっだろうがそれ以上にその被写体というべきか、モデルの存在そのものの才能、技術がものを言っている。

もう一度『戸外の人物試作』の2作を見て頂きたい。この人物は動いているだろうか。風や陽射しは十分に動いているが、人物は静止しているとしか思えない。モネは痼癪玉を破裂させる。はたしてそのためだろうか。何故彼はこの一対の『試作』を『積み藁』と一緒に並べたか。考え直して『試作』としたからだろうか。疑問は多い。モネの絵を見るといつでも疑問符がそこに出てくる、それは巨匠と言われる芸術家の作品はどれも同じだ。

『積み藁』と一緒になら人物は風景の一部で動く必要はない。『積み藁』が動かないのと同じで『人物』も動かなくて結構だ。モネの結論はそんなところか。穴を開けてしまうほどの問題ではないだろう。では、何故穴を開けたのか。疑問は振出しに戻ってしまう。

もう一度『散歩』を見てみよう。これまで導きの糸として引用させてもらったメアリー・マッシュューズ・ジェドーとルース・バトラーの2人がこの『散歩』を描写する表現は見事である。両者ともこの場を支配しているのはカミーユであることをはっきりと表現する。セザンヌがモネについて語ったとされる伝説化してしまった言葉「目に過ぎない、しかし何という目だ」と言う通り、モネの絵を支配しているのは畢竟モネの目なのである。この目から何ものも逃れられないはずである。しかし、

晩春の理想的な一日、明るくそよ風が吹き、爽やかにすっきりした一日の大気を完全に捕らえたのだ。小さな丘の頂上に態勢を整えたモネ夫人と息子が、もやもやして流れていく雲をちりばめた青い空を背景に立った。二人は画家を見下ろしている（そして延いては鑑賞者を）。画家は丘の裾にイーゼルを立てている。野生の草花が繁茂する丘は自然の再生力を表現し、カミーユがそれを覆っている、彼女はまるで現代のプリマヴェーラであり、彼女のいる場を支配し彼女の白いガウンは鏡のように太陽、植物、空を反映している³⁸⁾。

『草上の昼食』でモネは市民たちの郊外での余暇を等身大で描くことを主題として完成できなかった。『カミーユ』では何を目指したのか。おそらく「等身大」の人物画を描くことで『草上の昼食』の代わりとしたに違いない。当然のごとくカミーユの「肖像画」を描く気はなかった。ある画商は、モネの友人でル・アール時代、少年のモネを風景画の世界に引き入れた恩師でもあるブーダンに、「これは絵画であって、肖像画ではない」と手紙に書いたという。最大級の賞賛であるに違いない。そして随分時が経った1906年ドイツのプレーメン美術館が『カミーユ』を購入し館長のグスタフ・パウリがモデルについて問い合わせたことに答えてモネは「モデルとなってくれたのはまさしくモネ夫人、私の最初の妻です。彼女の肖像画を描こうとしたのではなく当時のパリジェンヌをただ描こうとしたのです。彼女の似姿としては完璧です」と書いた³⁶⁾。そこにいるのは単なる「現代のパリジェンヌ」である。

この項を閉めるのにゾラのコメントを引用する。

最も長く私の足を止めさせた絵はモネ氏の『カミーユ』であると正直に言おう。精力的で生き生きとした作品である。精彩に乏しく空虚な展示室をまわって新しい才能が全く見当たらないことに辟易していたところ、長いドレスを引きずり、まるでそこに穴が空いているかのように壁に身を沈めたこの若い女性が目に飛び込んできた。嘲笑したり肩をすくめたりするのに疲れ切った時、少しでも賞嘆できることがどんなに素晴らしいことか、ご想像頂けるだろうか。

私はモネ氏のことを知らない。未だかつて、彼の一枚の作品を注意深く見たことすらなかったと思う。ところが、私は自分自身が彼の旧友の一人のように思われる。彼の作品は私に力強さと真実の歴史のすべてを語っているからである。

まさしく！ これこそ気質なのだ。これこそ去勢された者の群れの中の男だ³⁷⁾。

カミーユが肩まで上げた右手を振り向きざまにゾラに差し出して挨拶をしたというところだろう。そしてゾラは思わずその手を取ってキスをするつもりになっただろう。モネの筆力に圧倒されよう。

4 『散歩』

40年前の作品について「彼女の似姿としては完璧です」と言い切るモネのイメージの中に『カミーユ』はどれくらい正確さで存在しうるのだろうか。たとえば音楽家が音楽を簡単に記憶できるのと同じように画家は隅から隅まで一部始終を記憶できるのだろうか。それを可能にするのが画家というものだろう。モネの記憶力を信じる。この記憶こそ、彼を地獄へも追いやるし、天国にも遊ばせる。

『戸外の人物試作』に私たちは戻ろう。

モネは余りにも歯がゆくて『左向き』に穴を開けてしまった。それはシュザンヌのモデルとしての拙さから癪癪を起こしてしまったからだ。もしカミーユならもっと上手に自分の言うことを理解し振る舞ってくれたに違いないと悔しさが募ってしまった末の所業だった。11

(4) 『カミーユ 緑衣の女』

こうして私たちは『カミーユ 緑衣の女』に辿り着く。画家とモデルとはありふれた関係であろう。しかしモネは親の援助もままならない貧乏画家で、バジルのようにモデルを雇い貸衣装を借りるなどということはできない、しかも成功間違いなしと周囲から言われている大作はサロンに間に合いそうもないし、そのような緊迫した状況の中で、宙に浮いた「緑のドレス」をバジルから奪い取って思わずカミーユに着せたのが、モネの勝利だった、いや、これがもともとモネに備わっていた勝負勘だったと言える。一方カミーユは『草上の昼食』でモデルをすることの楽しさを知った、そしてバジルやルノワールなどモネの仲間の画家たちとの時間は、トリュフォー通りの家では決して味わうことのできない至福の時であったろう。そして《カミーユ・ドンシユが愛らしい魅力的な女性であったことははっきりしているしモネの仲間内では気に入られていた。彼女は「モネット」であり「モネの鳥」である。テオフィール・ペガン・ビルコックによると彼女は「うっとりさせる」存在、親切心と優雅さを持った女性だった。彼女は演劇的なことに関心があり、着こなしは見事で、カジノへ行き、モネの仲間には食事を作り、アルジャントゥイユに小さな家庭を構えてからは、仲間の画家たちからモデルとして求められもする。》³³⁾ この「演劇的な」カミーユはテオフィール・ペガン・ビルコックの大いに気に入るところであり、それはモネの母が絵画にしろ音楽にしろその才能を高く評価され、人をもてなす術を十分に心得ていたことで伯爵のお気に入りだったことと何か関係があるようにも思われる。そして《テオフィールは自分のサロンを開催する時「芝居」をする習慣があった。ある晩、「クロードとカミーユ・モネはわれわれの劇団を補強してくれた…。カミーユ・モネは素晴らしい役者だった、彼女の夫も同様だが…。彼らは喜劇的な役をやると特に上手だった。》³⁴⁾

この演劇的な所作こそ『カミーユ』のもう一つの成功を導き出した。この絵がサロンに入选し、パリ中の評判になると、フランス人の特質だが、必ずや賛否両論が巻き上がり賞賛と揶揄が飛び交う。

モネの『カミーユ』はジャーナリズムの関心を引きつけた数少ない作品にも選ばれた。当然パリのジャーナリズムの特徴である嘲笑の混じった賞賛と批判の2つを受ける。毎年権威のある新聞『芸術家』は2、3の作品を選び、それらに詩を贈って祝う。この年は『カミーユ』に詩が1つ宛てられた。「パリジェンヌよ、おお女王様——おお高貴なる被造物よ。」『パリの生活』(5月5日)で、フェリックス・Yはこの絵を自分自身のデッサンで描いて次のような詩を付けた。「カミーユ、クリノリンも着けない縦縞のドレスに指を満足げにしゃぶって幸せだ。」デッサンの方は彼女の持ち上げられた手を描き直し、帽子のリボンから手を移動させて彼女の口に親指をおいている³⁵⁾。

この手の位置こそこの絵の勝利であるかも知れない。モネの絵でカミーユは親指などしゃぶってはいない。まさしくフェリックス・Yなる批評家がそこに注目したことがその証となるのだろう。この時代もうすでにマネが描き出したように市民階級の日常生活が普通に描き出されるようになってきた。それゆえドレスを着た女性が満足気に指をしゃぶるなどと言う揶揄が可能になる。

ルへの手紙に出てくる「若いガブリエル」であろう。バトラーは《全パリジャンの目の前にこの絵を置くと想像した時モネは、今や自分の生活に重要な位置を占めるようになった女性の顔を見せてしまう心構えがまだできていなかったと言ってもよいのでは》²⁷⁾と結論づける。

1866年のサロンにこの大作を提出しようとしてモネは考えていた。次のサロンでモネが勝利するだろうという噂まで流れた。そんな時、バジルと2人でサンジェルマン・デ・プレのフェルスタンペール通りに借りていたアトリエにクールベが来た。バジルはこのことを彼の弟マルクに手紙で知らせている、「ところで面白いことがあります。1つはサロンのために作品を描いていますがそれをクールベ先生が褒めて下さったのです。先生はモネの絵を見に僕たちのところに来たのです。先生はモネの絵に魅せられました。たくさんの絵描きたちがこの絵を見に来たものです。誰もがこの絵を褒めるのです。まだ完成していないのに（もちろん僕の絵のことを言っているのではないですよ）。この絵はサロンで大評判になるでしょう。」（1865年12月日曜日）²⁸⁾《何年も後にモネはこの訪問について批評家のフェリックス・フェネオンに述べている。クールベの評について彼も語っているが、その中で最も重要なものは次の通りだ。「これは間に合わないね。僕だって出来ないさ。」クールベは正しかった。この作品は完成することにはなかった。》²⁹⁾しかしマネが『水浴』を『草上の昼食』と改題することになったのはモネの評判があったからかどうかはわからない。

ドラクロワが死ぬ2年前まで制作していたスタジオとその庭を見渡すフェルスタンペール通り2階のスタジオは契約問題で2人とも出なければならなかった。2人は別々に部屋を借りることにしたが、それに関してバジルの父は手紙で息子に苦言を呈している。「おまえがモネと別れると決心したことは残念である。彼は熱心に仕事をする。おまえの持ち前の怠惰さはその熱心さを煩わしく感じたに違いない。私はおまえがどれだけの朝を一人で過ごすのかと思うと恐ろしい。日がな一日おまえは何もせず極楽とんぼで過ごし、おまえのサロン用の作品は一向に進捗しないのだ。」（1865年12月28日）³⁰⁾

モネはルカードル叔母さんの友人で画家のアマン・ゴーチエに新しいアトリエを探してもらってモンマルトルのはずれにあるピガール通りに移った。クールベの言があったからか、小さい部屋だったからか、大作は諦めた。しかし10分も歩かないでカミュ・ドンシユの住むトリュフォー通りがある。これがモンマルトルに来た理由だったのかも知れない。

ところでバジルのサロン用に制作した絵について彼は母親への手紙で述べている。「本当にひどく難しいのはこの女性だ。僕が借りた緑のサテンのドレスと彼女のブロンドの髪の問題だ。どうも上手く対処できない。クールベは褒めてくれたのだけれど、それはやり始めの頃だったから。」（1866年1月15日以降の火曜日）³¹⁾

この貸衣装の緑のドレスが物語を構成する。バジルが彼の「ブロンド」と格闘するのを諦めるやこのドレスはピガール通りに移動する。モネは全く等身大の肖像画を描いたことがなかった。暗くて寒い2月の数週間が残されているだけだったので彼の主題選択はもう限界であった。単身像を描くという考えは魅力的なものだった、とくにこのモデルが若い芸術家の寒い仕事場に彼女の物腰や美しさの華やきばかりではなく、彼女の暖かさを、そしておそらく——私にはわからないが——愛をももたらしてくれたのだから³²⁾。

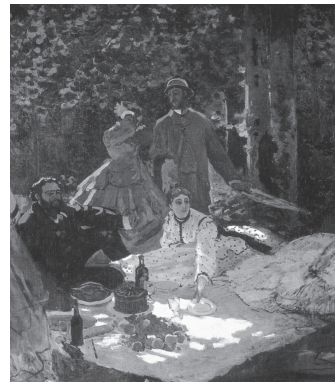
1865年の早春モネはシャイに移り場所探しを始めた。5月に彼はバジルに手紙を書いている。「本当に君がいてくれたらと思う。僕の人物たちにふさわしい僕の選んだ場所について君の考えを聞きたい。」彼が選んだのは巨大なブナの木がそびえ立つ場所だった、そして大きくて広いピクニック・シートを周りに5人の若い女性、6人の紳士、それに加えて木の背後に隠れて半分見えている召使いの人物配置を決めるためにスケッチを描き始めた。モネはその前にすでに肖像（家族や友人たち）を描いていたが、情景内に配置すべきモデルたちと一緒に作業計画を立てたのは初めてだった。もちろん彼は決して12人の男女を集めて森の中をステージに見立てポーズを取らせるような計画を立てたわけではなかった。誰もそんなことはしない。彼は個々人のモデルと作業をすることになる。デッサンを描き、彼らを準備したとおりのポーズや位置に配置し、その大きな構図は、実際、おそらくスタジオで作業しなければならなかっただろう²⁵⁾。



『草上の昼食』（習作）



『草上の昼食』切り取られた2つの部分 左



『草上の昼食』切り取られた2つの部分 右

この大作は実際には完成せず、モネは分断してそれぞれを売ってしまおうと考えていたようだが、結局は家主の地下室に放っておかれ後に回収してその2つの部分を枠に入れて終生ジヴェルニーのアトリエに保管した。また全体の構図を描いたエチュードがモスクワのプーシュキン美術館に残っている。完成作品がどのようなのかそれで想像ができる。分断された2つは現在オルセー美術館で見ることができる。分断されたとはいえ巨大である（高さは4m以上、幅はモスクワのものから想像するとそれ以上だったろう）。等身大で描こうとした意図がはっきりする。では、モデルは一体誰だったのか。男性はほとんどバジルである、中にはクールベがいるに違いないとも言われている。女性は何？《カミーユの名前がやっとこの絵に入り込んできたのはバジルの甥の発見であった。1947年彼の家のメイドがたまたま長いこと忘れられていた箱を目にし中を見てスケッチ、プリント、写真があるのがわかった。その中に何枚かのモネのスケッチがあった。その1つが絵の中のドレスを着たカミーユのスケッチだった。》²⁶⁾ただ、5人の女性のうち3人、カミーユがモデルになったとパトラーは言う。何故なら顔が隠されているのがその3人だといっているのである。顔を見せている2人はバジ

地としてまさしくその焦点を合わせようとしている頃だった。新しいデパートの物語である『ボヌール・デ・ダム』でゾラはいかに女性が店に入るとすぐに商品の展示場に行き征服されてしまうのか描いている。(……) ドンシユ家がパリに移住してきたのは、リヨンの服地とパリの新しいファッション産業の関連の結果ではないかと考える人もいる。カミーユは家で様々な知恵を経験的に学びファッション・センスを磨いたのだろう。さらに市民階級の環境で育てられ(……) カミーユは男性の目を楽しませる重要性を教え込まれたのは間違いない。それでは彼女はどのように夫を見つけるのだろうか。

たとえ家でファッション・センスを学んでいなかったとしても、彼女は複雑なモードに堪能になり、この気まぐれな世界を自分のものとしてこの世界に入っていたことだろう。1865年までにパリには主要なデパートが4つあった。左岸のボンマルシェ(1852)はすべての階級をモデルとしたが、1865年にはプランタンが右岸に店を開いた。これはバティニョールに程近い店でそのディスプレイや商品は小市民や中産階級の若い女性を引きつけた。この店がカミーユの場所だったろう。来店自由、つまり何も買わなくても良いという新しい小売り戦略で、彼女は博物館のように行ったり来たり、見たり夢見たり、店を見ることができた。これは贅沢のデモクラシーだった。市民階級の女子に貴族的な装いを切望させた。夜も昼も、店のウィンドウはまさに彼女が完璧にこなす方法を教え込んだ場所である。それに加えてファッション・プレートを載せた雑誌がたくさん出ている。カミーユはこのようなファッション・プレートの世界へモネを導きさえただろう。彼女が着ている服と彼女が取っているポーズのどれもこのようなプレートにあるようなものから着想を得ている²⁴⁾。

彼女の住むトリュフォー通りからキャフェ・ゲルボワまで歩いて5分もかからないところにある。ただしトリュフォー通りからプランタンへ行くにはキャフェ・ゲルボワから遠ざかるのみだが、左岸からバジルと一緒にモネがキャフェ・ゲルボワへ、またバティニョール界隈に赴く時、この2人は最短距離を取らず必ずやプランタンの脇を通って行くことだろう。このあたりでカミーユとクロードは袖すり合うことになる。カミーユは家の中ではおそらくちやほやされる妹と一緒にいることを避けてファッション・センスをパリの町で学ぶためにプランタンへ日参したはずだ。モネの父は貴族のベガン・ビルコック伯爵の目にも「完璧なドレッサー」と映るのだからモネ家はもともとファッション・センスの良い家庭だった。そのようなモネの目に、スリムでおしゃれなカミーユが止まらないわけがない。そしてこの頃のモネはエチエンヌ・カジャの写真を見るまでもなくダンディを気取っていたので女性の目を惹きつけるのに十分だったろう。お膳立てはできあがった。あとはカミーユがいかにモネの絵に登場するかである。

(3) 『草上の昼食』

モネは1863年の歴史的な「落選展」を見ることができた。マネの『水浴』に衝撃を受け、もともとモネの野心はクールベのような大作を制作することだったが、それにマネの主題が加わる。パリの若者が郊外で遊ぶというものだ。

にした活発な議論に参加したかもしれない²¹⁾。

キャフェ・ゲルボワはマネが中心になって当時の新しい芸術について議論を戦わせる若い芸術家のたまり場だった。バジルと2人でおそらく毎日のようにバティニョール界隈を訪れたことだろう。このバティニョール大通りのすぐ近くのトリュフォー通りというところにカミーユ・ドンシュは住んでいた。こうしてクロードはカミーユに出会う準備をする。

(2) カミーユ・ドンシュの物語

カミーユ・レオニー・ドンシュは1847年1月15日リヨン郊外のラ・ギョチエールで生まれる。両親はこの地リヨンで1845年12月31日に結婚している。彼女の父、シャルル＝クロード・ドンシュは1806年イゼール県に生まれ、母レオニー＝フランソワーズ・マネシャルはリオン出身で1829年生まれ、父は母より23歳年上だった。彼女の父はリヨンの主幹産業である織物業で生計を立てる商人だった。そしてドンシュ家はパリへ移る。左岸のソルボンヌ界隈だった。1857年には次女ジュヌヴィエーヴ＝フランソワーズが誕生する。ところで1860年1月の詔勅によって「徴税請負人の壁」が数週間後取り壊され、一夜にしてパリ12区は20区になった。ドンシュ家は新たにパリに編入されたバティニョール街に引越し、トリュフォー通り14番地にアパートマンを借りる。

ところでドンシュ家には多少複雑な家族関係があるようだ。はっきりしたことはわからない。《シャルル・ドンシュは俸給受給者と記載されている。彼は1866年に年金受給者となる、12月14日にリュエイユの元徴税吏のド・プリテリなる人物がジュヌヴィエーヴ・ドンシュとその母のために財産を遺贈したからだ。2人に対してこの人物は強い関心を示していたようだ》²²⁾と、ヴィルデンシュタインのカタログの注にある。別の注では、《パ・ド・カレー出身の元徴税吏、レジオン・ドヌール受勲者、1862年以来男やもめの資産家アントワヌ＝フランソワ・ド・プリテリはリュエイユで1867年5月28日68歳で死亡する。1866年に彼は遺言によってドンシュ家の次女ジュヌヴィエーヴ＝フランソワーズを虚有権者として彼の財産の包括受遺者に指定した、その用益権はドンシュ夫人にあり、他に不動産その他の用益権を夫人は受け取っている。この遺言によってド・プリテリは最初の結婚で設けた2人男子を廃嫡しているが、カミーユ・ドンシュには何ら利害関係がないので彼女は剥奪されるような権利は何もなかった。ジュヌヴィエーヴとドンシュ夫人のための遺言をド・プリテリ氏に書かせた理由に関してあらゆる仮説が可能である。ドンシュ氏はその理由をよく知っていたのでカミーユには結婚の契約がなされたとき12000フランが寄贈されるよう強く望んだ》²³⁾とある。ルース・バトラーはこれによりカミーユと10歳違いのジュヌヴィエーヴとは《half-sister》と推論する。ジュヌヴィエーヴの父はこのド・プリテリということなのだろうか。謎のままである。

さて、ルース・バトラーはカミーユのファッション・センスについて次のように語る。

カミーユの父、シャルル＝クロード・ドンシュはリヨンからの様々な資料では「卸売商」と同定される。彼が家族共々パリにきた時40代後半で働き盛りだった。第二帝政のこの時代パリは、デパートができることで可能になった既製服業界のファッションの中心

尊敬するドラクロアが描くアルジェリアが少年の心を捕らえていたのだろう。彼がアルジェリアを選んだのは幸運だった。1年後にチフスにかかって本国送還になりルカードル叔母さんに7年間の兵役を1年半で済ませる免除金を払ってもらった。《1862年10月マリ＝ジャンヌ・ルカードルはパリにいるアマン・ゴーチエに手紙を書いた、甥の残った5年半の徴兵期間を買い取るつもりだ、と。彼女はこうするのも甥を喜ばせるためではなく、こうしなければ彼女自身が「彼の芸術家としてのキャリアに立ちほだかる」ことになるのではないかと考えることに耐え難かったからだ」と説明した。とはいえ彼女には彼に強力な庇護者が必要であることもわかっていて。「彼の勉強はまだスケッチ程度で、絵を描き上げたところで、まだ上手なものではない。それでも彼自身は自己満足に陥って、しかも彼に上手だね、なんていう馬鹿者をも見つけてしまいかねない。」彼女がモネのキャリアに関わるためにかかった費用は3000フランという法外なものだった。》¹⁹⁾ こうしてモネは二度目のパリへ行くことになるが父親との確執はさらに大きくなったようだ。《今度はまじめに勉強することをよく頭にたたき込め。おまえには著名な先生の言に従ってアトリエで勉強してほしい。もしまたおまえがちゃらんぼらん生活をする気でいたら通告なしで仕送りをカットする。よくわかったな?》と父親がモネに言った、とインタビューで語られる²⁰⁾。

「強力な庇護者」はオーギュスト・トゥールムーシュという著名な肖像画家でレジオン・ドヌールも受勲している、モネとは縁戚によって従兄になる。シャルル・グレルの画塾をモネに推奨したのは彼である。新古典主義の薫陶を受けたグレルの画塾で彼自身も学んだ。この画塾でモネは親友となるフレデリック・バジル、ルノワール、シスレーに出会うのだからトゥールムーシュの功績は大きい。バジルは他の生徒たちと違って、故郷のモンペリエからパリに上京したのは医者になるためであったが、自身の中に画家になる素質を見つけていたのでブルジョワ階級の家族の反対を押し切って絵の勉強に励んでいたのだった。

グレルのアトリエでモネが体験したもっとも重要なことはフレデリック・バジルとの友情だった。息子を医者にすることがバジル家の希望であったがフレデリックは壁の隙間から風が吹き込む広いスタジオの日々が何よりも好きだったのだ。彼は絵を学ぶことに集中し、実際先生から時折ほめられることがうれしかった。彼にとって不愉快だったことは他の学生たちで、その多くが猥雑で下品だと彼は思った。それで彼の父親は、息子がル・アールから来た「モネという名」の学生のことを好まし気に語るのを注目していた。復活祭の頃2人は休暇で一緒にフォンテーヌブローの森に行った。バジルはまた「アトリエから2、3人の仲間」が来たとも言っている。おそらくオーギュスト・ルノワールとイギリス人の画家アルフレッド・シスレーのことだろう。この4人は結局のところ強い絆で結ばれた「独立」組となるが、モネとバジルにとって重要なことはシャルル・グレルのアトリエで2人が出会ったことだった。バジルは彼の母に書いている、「僕は友人のモネと一緒にです。彼はとても風景が上手で、僕にもアドバイスをしてくれ、大変助かっています。」(1863年4月2日)

1864年頃には左岸のお互いに近いところに部屋を借りている。間違いなく一緒に今や新たな芸術のメッカとなったパティニョール街に遠く歩いて通った。そこで彼は必要なものを買い、時にはパティニョール大通りのキャフェ・ゲルボワに滑り込んでこの店を有名

なしていた。父親によると、「彼は混乱の種をまき、先生の言うことを聞かず、宿題もやらない、その代わり、ノートをグロテスクな似顔絵で一杯にする。」ところがテオフィールはオスカルについて全く違う見方をしている、「誠実で、暖かい気性に恵まれ、パーティの人気者になる能力がある」と。オスカルが気まぐれな性向であることを気に入っていた。とはいえ時に極端で脳天気ですらあるが、いつも途方もない空想に溢れているのだった。オスカルはテオフィールの若い従弟で後の義弟となるテオドール・ベガン・ビルコックと仲が良かった。この2歳違いの2人の少年は良き友となり、夏になると、テオフィールが毎年休暇のために選んだ避暑地に2人して何週間も、何ヶ月も一緒に過ごしたものだ¹⁵⁾。

ここでオスカルと呼ばれているのは画家モネのことで彼は家族からそう呼ばれていた。彼は後年パリに行き作品にサインを入れるようになってから「クロード」を使うようになった。《今後僕の名前はクロード・モネです。さよなら、オスカル、クロードよ、永遠なれ!》と、やはりベガン・ビルコックの日記に書かれているようだ。

1858年頃、モネ家における事態が急変する、というのは、オスカルの母と叔父のジャックが亡くなったのだ。1857年にルイーヌ・モネが亡くなった後、アドルフは息子達を連れてルカードル家に住んだ。そしてジャック・ルカードルが亡くなりアドルフが商会の社長になった。未亡人となった彼の姉マリ＝ジャンヌ・ルカードルは子供がいなかったもので、オスカルの生活における母親の役割を担うことになった。彼女は芸術好きで自身でも絵を描こうとしたこともあったので、この仕事をかなり意図的に引き受けた。彼女は多くの時間を、彼女の金銭を、彼女の精力を彼女の甥に注ぎ込むことになった¹⁶⁾。

このマリ＝ジャンヌがモネのルカードル叔母さんである。おそらくこの叔母さんと生前の母が謹厳実直な父から気まぐれな芸術家気質のオスカルを護ってくれたのだろう。

オスカル少年はバカロレアの資格を取る気もなく画家になるためにパリへ出ようとする。ティエボー＝シソンのインタビューを読むと20歳になると兵役が待っているのもそれまではオスカル少年のわがままを許す気で父親はいたようだ。オスカル少年といえはすでにカリカチュアで大金を蓄えていたので何とかなるだろうと思っていたのだろう。だから《「一銭もやらんぞ!」——「そんなのいらねえや!」》¹⁷⁾とやり合うこともできた。この最初のパリ滞在でアカデミー・シュイスに通いビサロと友達になる。もう少し滞在が長かったらセザンヌにも出会っていただろう。そして兵役である。フランスの徴兵は籤引きで決まる。モネは籤運悪く当たってしまい、いわゆる《chass d'Af》アフリカ騎兵部隊に志願してアルジェリアに行く。

僕は2年間アルジェリアに行った、本当に魅力的なところだった。新しいものが常に見られたから暇な時はいつもそれを描こうと思った。あなたには想像がつかないでしょう、ここで僕がどれくらい学んだか、どんなにか僕の見方が得られたか。初めのうちはわからなかった。ここで僕が受けた光と色の印象は後になってからやっと見分けが付くようになった。僕の探求の芽はここにあった¹⁸⁾。

の顔や姿をデフォルメして描いたものだ。

こんな遊びに僕はすぐ上手になってしまった。15歳の時僕は風刺画家としてル・アーヴル中の有名人になってしまった。僕の名声はたいしたものだったからあちこちから人々が殺到して風刺似顔絵を描いてくれませんかと遜って頼みに来たものだ。注文が多くて、それにやさしい母がくれたお小遣いは少なかったから、その二つを解決する大胆な方法を見つけた、もちろん家族には恥さらしと非難された。僕の描く肖像画にお金を払ってもらったのだ。どのような顔つきかで10フランか20フランに値段をつけた。これが大成功だった。一月でお客は倍増。注文を遅延無くこなして20フランの統一価格にすることも出来た。もし続けていたら今頃僕は百万長者だろう¹³⁾。

このインタビューは、1900年11月ジヴェルニーの庭を描いた作品の最初の個展でデュラン＝リュエル画廊の会場に現れたモネを捕まえたジャーナリスト、ティエボー＝シソンによってなされた。ロンドンでデュラン＝リュエルに出会うまでのことが語られている。おそらくそれ以降モネは名士になって誰でも知っているということなのだろう。ただ、モネの家族について余りよく知られていない。彼にはレオンという兄がいた。この兄は父親同様勤勉で父親の跡を継いだようだ。しかしクロードの方は「父を絶望に陥れ」た。父親とは相性が悪かったようだ。父親の腹違いの姉がル・アーヴルで船を持っているほどの雑貨（食品）商を営んでいるジャック・ルカードルと結婚しており、それを頼ってル・アーヴルに来たのだった。

ところで、テオフィール・ベガン・ビルコック伯爵というフランス政府高官の貴族が私的な日記をつけていた。それにはル・アーヴル時代のモネや家族の記述がふんだんにある。この未刊行資料は2007年ジェームズ・A・ガンツとリチャード・ケンドールの企画で、クラーク・アート・インスティテュートで開催された『知られざるモネ——パステル画とスケッチ』¹⁴⁾のカタログに記載されている。おそらくこの2人の発見であろう。以下の引用はルース・パトラーがこの日記を読んで報告してくれたものの一部である。

1853年、裕福な貴族であり大臣であった30歳のベガン・ビルコックは12歳のオスカル [=クロード] と他のモネ家の人々と夏の休暇中にル・アーヴルで出会った。彼はモネ家の人々が十分に魅力を備えていると思ったので、彼の日記に、家族の誰をも描いている。画家の母であるルイズ・モネに彼は完全に魅了された。彼女は美人で常に笑みを絶やさなかった。彼は彼女のスケッチや水彩画を褒め、この才能をさらに凌駕するのは歌を歌いピアノを弾く音楽の才能だった。彼は彼女のことを完璧なホステスと見なし、彼女がル・アーヴルにおける上流階級に属する最良の人々を彼女の開くサロンに招待するそのもてなし方を描いている。また彼は彼女のことを素晴らしい「家庭の母」とも呼んでいる。クロード＝アドルフ・モネは働き者であったが彼についてベガン・ビルコックが特に驚いたことは彼が完璧なドレッサーであるということだった。「商談では非情であるが正直で公平」な人物と信じていた。アドルフが長男を気に入っていたことはこの賓客にも明らかで、「品行方正な少年」と彼は評しており、父親と同様良く鍛錬された勤勉な子供だった。反対にモネ氏は彼の次男を現代人に最悪なものをもたらしそうな「アメリカの野蛮人」と見

生活を支配することになる偏狭で嫉妬深い女性「アリス・オシュデ」によってモネはそれらを破棄するように厳命された¹²⁾。

残念ながらそれゆえ、母親の手紙ばかりではなく、カミーユとモネの交わした手紙も残されていない。現代の恋人同士なら頻繁に電話を掛け合うか、さらに携帯メールを出し合うだろう。カミーユとモネが出会った頃なら手紙のやり取りこそ親密さの度合いを高める良い方法だった。おそらく頻繁に交わされたであろう、それらの手紙が破棄されたのである。二人の出会いは傍証で想像するだけとなる。そうやってルース・パトラーは『巨匠の陰に隠れて』で私たちにカミーユ・ドンシュのことを語ってくれた。



『カミーユ 緑衣の女』

3 クロードとカミーユの物語

ここでは若いモネがパリに来てカミーユ・ドンシュと会うチャンスがどのようなものであったか両者のパリまでの足取りを追ってみよう。そしてパリ中の話題をさらった『カミーユ 緑衣の女』にいかに辿り着くのか見てみよう。

(1) クロード・モネの物語

まずは、モネ研究では必ず引用されるほど有名な割に日本語に訳されることのないティエボー＝シソンの『私の来歴』と題されたモネへのインタビューを引用してみよう。

僕はパリ生まれのパリジャン。1840年にパリで生まれた。時は善良な王様ルイ・フィリップが統治し、芸術に対する軽蔑を表明した商売の時代だった。とはいっても僕は青春をル・アーヴルで過ごした。1845年に父がここに居を構えたのはもう少し利潤を追求するためだった。で、僕の青春はとりとめのものだった。僕は生まれつき規則に縛られない性格だった。どんなに小さい頃でも僕を規則に縛り付けようなんて出来っこないことだった。僕の知識はほんの少しだが、そのわずかばかりの知識を学んだのは家だった。学校は僕には常に牢獄のようだった。こんなところに4時間だっていられたものじゃあない、だって太陽が僕を呼んでいるのだよ、海はきれいだし、大気の中を、崖淵を走ってごらん、水辺でびちゃびちゃやってごらん、とても気持ちがいいのだから。

14か15まで僕は父を絶望に陥れていた、ちゃらんぽらんな生活をしていたからだ、でもとても健全なものだった。そうこうしている間にもどうにかこうにか四則計算を怪しげな正字法とともに教わった。僕の勉強はここまで。でもそれほど苦痛だったわけはなかった、というのは、僕には勉強と一緒に気晴らしがあったから。教科書の余白を飾りで充たしノートの青い紙には素晴らしく幻想的な装飾をつけた。そこに最も非礼な方法で先生方

モネが何と言おうと彼にはこの作品が真に美しいものであると再認識した。今ではローゼンバーグはこの絵に300000フランの値を付けていた⁸⁾。

『ラ・ジャポネーズ』はお金のために描かれた「糞」であったとはいえ、カミーユとの楽しい共同制作だった。ここで描かれているポーズはこの絵の全体から考えると見事に決まったものだ。バトラーが言う通りこれはカミーユの才能によるものだろう。彼女の身のこなしは『試作』におけるシュザンヌの比ではない。シュザンヌはそこに立つだけしか出来ないが、カミーユはモネの注文をその最も相応しい形で答えている。それは絵を見ると一目瞭然である。彼女のモデルとしての素晴らしさは、画家が捕らえることが出来る一種の動きを形にしてみせることが出来ることだろう。それゆえに今にも彼女は絵の中で動き出そうとしている。

しかし、モネはこれを「糞」と呼ぶことで私たちの知るこの時代のモネの作品、そう、あの輝かしきアルジャントゥイユの作品群と余りにもかけ離れていることに誰もが訝しさを覚える。そこにカミーユとモネとの間に何か心理的な断絶があるのではないかと考えてしまう批評家が多いのだが、バトラーの取る見解に筆者は賛意を表する。

でも私が思うに、カミーユは夫のためにモデルになることが大変好きであった。絵を描くことが人生における第一の仕事であったこの人物もまた自分の妻の才能を大いに喜んでいたりしたことも確かなことだ。彼らが一緒に仕事をすることは楽しみをわかち合っている印だと私は考える。カミーユは喜んで衣装を選び、ポーズや立ち位置とか、夫から指示された役割を演じる方法とかを協議したことだろう。彼らは良いチームだったのだ。『ラ・ジャポネーズ』は、2人の窮乏生活を夫が改善しようと取り組み、それを助けようと彼女も努力した重要な時だったのだ。この絵はウィットと笑いに満ちて、微笑んでいるカミーユの最高に輝く姿を私たちにを見せてくれる⁹⁾。

カミーユとモネの楽しい共同制作である。この『ラ・ジャポネーズ』で《何が何でも成功したかったので、あきらかにモネは最初の大成功を思い浮かべた。素早く着想され電光石火のスピードで描かれた例の『カミーユ』である。これもまた大きなアトリエ制作の作品で、231cmの『緑衣』とまったく同じサイズである。》¹⁰⁾ この『カミーユ』と言い『緑衣』と言っている作品は10年前1866年4月のサロンに入選してパリ中にカミーユの名を知らしめたモネ最初の大成功、『カミーユ 緑衣の女』のことである。まだ2人が出会って1年はたっていないかった。カミーユとモネがどのようにして出会ったのか私たちにはわからない。ヴィルデンシュタインのカタログではカミーユのことを《新しい恋人で、19歳、幼い頃両親とともにリヨンからパリに來た》¹¹⁾と素気ない。その理由はカミーユが死んだ時の記述にそっと付け加えられる。

カミーユの母が葬儀に参列したかどうかかわからない。彼女はまだ50歳で、パリに住んでいた。彼女は娘の病気のことを知らなかった、また、心配していなかった、などということがあり得るのだろうか。彼女が書いた手紙は、カミーユが生前書いたり受け取ったりした手紙や彼女の写っている写真と同じ運命を辿った。この先モネと生活を共にし、彼の

けて布地で縫い合わされている。モネ夫婦はサン＝ドニ大通りに面したスタジオを借りて制作した。彼らは畳を床に敷き彼らが持っていた日本の団扇をスタジオの灰青色の壁に貼り付け、さらに2、3本床に放り投げた。カミーユはポーズを次から次へと試してみたいに違いない。結局顔を夫の方に向けながら体を横にすべきであると2人は合意した。そこでモネは手を伸ばしてサムライの顔が中央に来るように着物の下部を前の方に引っ張り、厚くなった着物の裾の部分大きな円を描くように配置し、それによってこの裾は画面のほぼ全体の横幅を占めることになった。彼はカミーユに右手を高く上げてくれと頼んだ。そしてその手に赤白青の扇子を持たせた。これは前にルノワールが描いた扇子である。最後に彼らの驚くべき決定はカミーユの黒髪を金髪の髪に埋めてしまうことだった。2人ともそのばかばかしさに大笑いしたに違いない。グロテスクで黒髪のサムライはその練り粉のような白い腕で刀と鞘に手をかけている。これは三色旗の扇子を持ったカミーユの挙げられた腕と照応している。扇子の中央の白い部分がとても明るく描かれているので彼女の頬、赤い唇、金髪を輝かせている。右側に、カミーユが恥ずかしそうに頭を傾げているのと丁度同じ高さに団扇があり、これは他のものから離れピンク色の赤が塗られ、他のもののおとなしい青色、灰色、緑色と対照的である。この団扇はカミーユの体と対称的に傾けられ、そこに日本女性の肩と顔が見られる。美しい日本髪 of 芸者である。彼女はこの妙なフランス人のライバルを驚いて見つめているように見える⁷⁾。

この絵について私たちは以上のように描写することは出来ない。絵を見るだけで私たち日本人はどのように反応をして良いのかわからなくなってしまう。バトラーが言うようにモネとカミーユの哄笑が聞こえてきそう。おそらくその通りなのだろう。モネは決して日本人を揶揄しているわけではない。彼の浮世絵に対する、延いては日本文化に対する畏敬の念は彼のあらゆる絵から読み取ることができるのだから。そうではなく、ジャポニズムを売り物にする似而非知識人への挑戦であろう。それを元手に彼は窮乏生活から脱する手段を見つけたに違いない。展覧会では売れなかったが、前回の展覧会でモネの『印象・日出』を800フランで買っていたエルネスト・オシュデと手を組んで、ホテル・ドルーオ内に設置された国家が援助しているオークション・ハウスに出し2020フランで売ってしまったのである。アルジャントゥイユの家の年間家賃が1200フランである。オシュデとの友情はこのあたりから始まったのだろうか。とはいえこの絵に対するモネの態度ははっきりしている。

何年も時が経過した1918年2人の優秀な画商、ジョルジュ・ベレームとルネ・ギャンベルはジヴェルニーのモネ家を訪れた。彼らの商売敵であるポール・ローゼンバーグが当時は『扇を持った日本女性』で通っていたこの絵を150000フランで購入したことをモネに知らせた。彼らはこの話をモネが知っているかどうか興味津々だった。モネが喜ぶだろうと期待していた。ところが彼は下品な言葉でこの話を切って捨てた。「へえ、糞でも拾ったか！」この話は彼がこの絵を描いたのはただ金を作るため、これは芸術家として彼が信じてやろうとしていることでは決して無かったことを示している。それにまた彼は、これは彼の最初の妻の肖像だとも話した。彼女は黒髪だったが、その日、「私は彼女に金髪の髪をかぶせた」。そこでギャンベルはローゼンバーグのところに行ってその絵を見た。



『ラ・ジャポネーズ』

『散歩』に関しては上述のように当時の窮乏生活から逃れるために作品を何であれ売らなければならなかった。つまり彼は現実の絵を基に記憶しているわけではない。白いドレスを着て緑色の裏地を張った白い日傘を差したシュザンヌがセーヌ川に浮かぶオルティー島河岸の丘に立つと、それだけでモネはアルジャントゥイユのカミーユを思い出さざるを得なかったのだろう。

『散歩』は彼の好む余り人手の入っていないアルジャントゥイユの川辺の丘にカミーユと息子のジャンを立たせたものである。無人のオルティー島の河岸段丘もほぼ同じような環境だったろう。サイズは『試作』(131×88 cm)よりも一回り小さい。ジェドー氏は『『散歩』を大作だと記憶しがちだが、実際の大きさはかなり慎ましいものである(100×81 cm)。この作品が(少なくとも私の記憶によると)大きいと思わせることが作品の持つ高い質と力強いイ

ンパクトを立証している》⁴⁾と言っている。ただし、この作品は発表時にほとんど評判にはならなかった。2回目の展示会、いわゆる「第2回印象派展」がデュラン＝リュエルの画廊で開催された時出展された。ワシントン・ナショナル・ギャラリーのカatalogでは《この油彩画は、1876年4月に開催された第2回印象派展に画家が出展した18点の作品のうちの1点である。『散歩道』[ママ]と題して展示されたこの作品は、当時はどちらかといえばほとんど注目を浴びることはなかったが、それでもわずかに寄せられた批評は好意的なものであった。たとえば印象派の画家たちの熱烈な支持者であったジョルジュ・リヴィエールは、この作品を選び出して賞賛をおくっている。「丘の上に立った若い女性と少年が、木いちごと高い草に囲まれながらあたりをみまわしている。ちょうどそのとき風に押されて雲が動き、彼らの背後に太陽が姿をあらわす。この油彩画はまれに見る、しかも極めて正確な効果を作り出しているのだ。》と書かれている⁵⁾。ジョルジュ・リヴィエールという人物はCatalogの通り印象派を支持した作家である。第3回の展示会では『印象派』という雑誌まで発行している。ルノワールの友人であり「第3回印象派展」に出展されたルノワールの大作『ムーラン・ド・ラ・ギャレットの舞踏会』中、右側でパイプをくゆらす登場人物でもある。それゆえ仲間のひいき目であったかも知れない⁶⁾。

Catalogで言う通り実際にはほとんど評判にはならなかった。というのは第2回展覧会ではモネの『ラ・ジャポネーズ』が圧倒的な評判をとってしまったからだ。カミーユがモデルで、金髪の髪を振り、歌舞伎役者(サムライ?)の刺繍のある日本人にはちょいとどぎつい打ち掛けのようなものを羽織り、青白赤(!)の扇子を手に背景には日本の団扇が壁に十数枚かけられた作品である。世に言うジャポニスムに追従した、その勝利である。

ある友人がモネにおとぎ話のような赤い日本のキモノを貸してくれたのだ。複雑な刺繍が付いている。袖や背中の上部に蔦や葉が金と緑で刺繍されている。そして刀をさやから抜こうと派手で大げさな仕草をしているサムライの姿が打ち掛けの広がった腰から裾にか

クワでこの『積み藁』を見て衝撃を受け、抽象画への道を見出したことはつとに有名である。

さて「人物画というよりも大気の研究と見なすに至った」というのが、おそらくこの作品が『戸外の人物試作』と題された理由であろう。英語で『戸外の人物研究（左向き）』—— Study of a Figure Outdoors (Facing Left) —— と訳されているが、フランス語の題は *Essai de figure en plein air femme à l'ombre tournée vers la gauche* である。『散歩』のような現実的な主題を持っているものではなく、あくまでも *essai* であり、誰かのための肖像画を描いたのではなく、「大気の中」に置かれた人物を描いたものであり、「人物」が「積み藁」に代わっても良いということだ。積み藁はもともと大気の中に置かれているのであってわざわざ「試作」とはしないのではないか。当然である。しかし人物を大気に置くとは何であろうか。1人だけ人物が置かれるというのは何らかの具体的な環境の中にである。普通そこを「大気」とは言わない。モネは人物を「風景の一部としたい」と、テオドル・デュレに書き送った。もちろん広いキャンヴァスの中に小さくぼつんと1人の人物を置けば風景の一部だろう。しかしほぼ画面全体を1人の人物が占めているのにそれを風景の一部としたいというのは当時としてはやはり画期的なことではなかったか。それゆえそれは試作であり、研究でもある。《同時代の逸話が信すべきものであるとすれば、アリスはこのような方法に利点を見出せず、モネが専門のモデルを雇って裸体から描くのに関心を示したとき、「もしモデルがこの家の敷居をまたぐのなら、私は出てゆきます」ときっぱり宣言して、この思い付きを拒否したという。幸運なことに、彼女と4人の娘たちは、ほぼいつも誰かが着衣の女性モデルになることができ、夏のあいだ彼女たちは、ほとんどの時間を戸外——とりわけ河——で過ごした。》³⁾ (アリスとはアリス・オシュデ夫人、1892年モネの第二の妻になる人物、4人の娘たちはアリスの連れ子である。——筆者注)

この「研究」はおそらく音楽における抽象的なエチュード (*étude=study*)、もちろん絵画用語の「習作」でもあり得るわけだが、ドビュッシーの練習曲にもなぞらえる。あくまでも人物が大気の中で風に吹かれ、光の陰影が作る効果を描いたものということになる。もちろんモネは美術用語としてではなく音楽用語としての *étude* という言葉を思いつかなかっただろう。もしそうすれば私たちは当然のごとく抽象画のカンディンスキーへの一歩としての『積み藁』とともにこの一対の「研究」が1891年5月の個展に「積み藁」と併置され、抽象化された題を持つにいたる理由がはっきりしただろう。用いられた言葉は「試作」だった。

もちろんモネは初め人物画を描こうと意図していたわけだから、描いているとどうしようもなく頭の中でカミューがイメージされたに違いない。だから、できあがると癪癪を起こしてキャンヴァスに穴を開けてしまうほど不満を感じた。彼の頭の中にある『日傘の女』と比べて何が違ったのであろうか。

2 『ラ・ジャポネーズ』

11年前の作品を記憶するということ自体大変に難しいものと私たち普通の人間は考えてしまう。しかも『散歩』はその翌年、モネの絵を気に入っていたルーマニア人ジョルジュ・ド・ペリオという医師に売られてしまった。このときモネは厳しい窮乏生活を強いられたいので売らざるを得なかったのである。モネは気に入った自作を売らずに取っておくのだが、

ものように繰り返しただけとも言えるかも知れない。86年の『日傘の女』を制作する動機は義理の息子であるジャン＝ピエール・オシュデの証言があり、メアリー・マシューズ・ジェドーは以下のように書いている、

ジャン＝ピエール・オシュデによれば、そして姉のジェルメーン・オシュデ＝サルルーも追認しているが、(ジェルメーン、オシュデ夫人、ミシェルと一緒に) シュザンヌがオルティー島河岸の丘に立っているのをモネがじっと観察しているときに彼女を描こうと思いついた。モネは4人を粗描しているが彼に強い印象を与えたのはシュザンヌのみだった。「しかしきみは、まさしくアルジャントゥイユのカミーユそのものだ。そうだ、明日またあそこに行って、きみにポーズを取ってもらおう」とモネはシュザンヌに言った¹⁾。

「アルジャントゥイユのカミーユそのものだ」というのは、『散歩』の『日傘の女』である。ところがシュザンヌは積極的な性格ではなく、モネの言う指示をこなすだけで、もちろんそれだけでも大変だったろうが、ましてや自分の意志で動くことは出来なかったのだろう。モネは描きながら「アルジャントゥイユのカミーユ」が頭の中に去来していたのだから不満には違いない。こともあろうに出来あがった作品、それも『散歩』とよく似た『左向き』に、癩癩を起こして穴を開けてしまった。

もちろんシュザンヌはカミーユではなかった、そのことをすぐにモネは苦々しく理解した。その結果不満の余り完成された作品の一つに穴を穿ったのである。癩癩玉を破裂させて楽になった彼は後にキャンヴァスを補修しこの一對の作品に対する見解を修正した。人物画というよりも大気の研究と見なすに至った。彼は生涯この一對の絵を所有した。それで1891年のデュラン＝リュエルが開催した個展でそれらを展示した。そして老齢に達した時人物画を展示するために奔走し一回限りとしてこれらの絵をアトリエで誇らしく展示した。ヴィルデンシュタインは片方の絵にダメージを加えたという話について疑義を挟んでいるが、キャンヴァスを注意深く調べると『戸外の人物研究(左向き)』には草むらの部分に横長の裂け目があり、上から絵の具を塗ることでその部分を隠していることが明らかになった²⁾。

ポール・デュラン＝リュエルは印象派の画家たちを支えた画商である。普仏戦争時にモネは妻のカミーユと息子のジャンとともにロンドンに避難した。モネはそこでバルビゾン派の風景画家でサロンの審査員にもなったことのある尊敬するシャルル・ドービニーに会い彼からこの画商を紹介された。この画商がモネの絵を見て最初に口にした言葉が「買い」だったという。この画商は父親から画廊を相続し保守的な父親とは違って新しい作風の画家たちを援助するという芸術的な勘を持った画商だった。おそらく彼がいなかったら印象派がこの世紀末に世界を征服することはなかっただろうと言われるほどである。この「1891年のデュラン＝リュエルが開催した個展」とは5月にモネが初めての連作となる『積み藁』15点を出展した個展である。『積み藁』は大成功だった。彼は押しも押されもせぬフランスの大画家となったのである。抽象画の創始者と見なされるカンディンスキーが後の1895年にモス

カミーユ

——若きクロード・モネを支えた女性——

丸山正義*

1 『日傘の女』

昨年の初夏、ワシントン・ナショナル・ギャラリー展が六本木の国立新美術館で開催された。放射能の降り注ぐ日本を忌避して来日公演公開の中止が相次ぐなか、何事もなかったように予定通り展覧会は開かれ、その勇氣に感謝し喜んで六本木へ行った。というのは、『散歩 日傘の女』と題されたいわゆる『日傘の女』と呼ばれる3つのうち1つを所蔵しているのがワシントン・ナショナル・ギャラリーであり、それが出展されると前宣伝されていたからだ。『日傘の女』と題された他のものはパリのオルセー美術館にあり、これは『戸外の人物試作 日傘の女 左向き』とそれと対になる『右向き』である。この2つはありがたいことに実物を何度か見たことがあったが、『散歩』の方は実物を見たことがなかったので楽しみだったのである。



『散歩 日傘の女』



『戸外の人物試作 日傘の女
(右向き)』



『戸外の人物試作 日傘の女
(左向き)』

『散歩』と題された『日傘の女』は1875年の制作で、『戸外の人物試作』と題された2作は1886年の制作で11年の懸隔がある。ところで私たちがモネについて何かを言おうとすると最初に浮かぶのは『睡蓮』であることは間違いない。この作品は連作で大量に制作されている。連作とはいわゆるシリーズもので、これもモネの特徴を言う時にまず思い浮かぶものである。連作は同じ対象物が時間の経過とともに光の効果で変化するのを描きたいというモネの執念にも近い考えから出て来たものである。と同時にモネは同じ主題を繰り返して描くことに倦まなかった。おそらく『日傘の女』は連作ものではないのだから、同じ主題をいつ

ヘーゲルが、無神論を手にするまさにその瞬間に、それを禁じる点に、ヘーゲル哲学が後に無神論となった原因があると指摘している。Bernard Bourgeois, *Hegel les actes de l'esprit*, Vrin, 2001, pp. 203-218 を参照。

- 3) このような立場は、両者共に、ハイデガーの道具的全体性の思考の影響を受けていると思われる。
- 4) レヴィナスは、世界、および他の事物への「欲求 (besoin)」と区別して、人間的他者を「絶対的に〈他〉なるもの」と定義し、この他者への志向を「欲望 (désir)」と名づける。また、レヴィナスの表記は必ずしも厳密ではないが、通常は、人間的他者以外の他なるものを「l'autre」と表記し、絶対的に他なるものとしての他者を「l'Autre」、ないし「autrui」としている。
- 5) 愛をめぐる問題に関しては、コジェーヴもまた、それが承認の欲望であると認めている。だが、コジェーヴによれば、ヘーゲルは言外に愛を非難している。なぜなら、愛は一方では「私的な」性格を持ち、他方では、生命を危険に晒すのではないがゆえに「厳粛なものが欠けている」ためである。危険を冒すことを前提としていない以上、愛による承認（他者の愛への欲望）は行動を前提としていない。その限りにおいて、愛から承認されるものは、真には人間的なものではないとされる (K513)。レヴィナスは、この問題に関しても、コジェーヴの立場を前提としつつ、みずからの「エロスの現象学」を練り上げていったものと考えられる。
- 6) むろん、レヴィナスのこの主張が、事実に関わる性質のものであるとするなら、それは端的にあやまりである。レヴィナス自身、殺人が「ありふれた出来事 (la banalité du meurtre)」であることは、世紀の戦争の証人として一番痛感していることであろう。しかしだからこそ、現実にはかき消され続けている他者からの呼びかけを聴取しなければならないとするのがレヴィナスの倫理学である。
- 7) ラフェエル・ルルーシュは、「レヴィナスは常に、有限な全体性 (Totalité finie) が重要であることを前提としていたのであり、彼の意に反して、忠実にコジェーヴの立場に立っている」と述べている。Raphaël Lelouche, *Difficile Lévinas*, L'éclat, 2006, p. 106.
- 8) レヴィナスのユダヤ思想における、神と人間との非対称的な関係が、他者関係に重ねられていると考えられる。だが本稿ではその宗教的背景には立ち入らない。
- 9) 『全体性と無限』第三部「意志と死」(L258-263) を参照。死をめぐる議論においてはヘーゲル（コジェーヴのヘーゲル解釈）だけでなく、ハイデガーへの批判も含意されている。
- 10) レヴィナスがコジェーヴの第二版の注に目を通していたかは確認できない。
- 11) Jacques Derrida, *Spectres de Marx*, Galilée, Paris, 1993, p. 123.
- 12) *ibid.*, p. 125.
- 13) レヴィナスは、「未来」に重ねていた他者性を、のちに「無起源的な過去」から解釈するようになる。
- 14) Lévinas, *De Dieu qui vient à l'idée*, Paris, Vrin, 1982, p. 113.
- 15) *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*, Paris, livre de poche (Martinus Nijhoff), 1974, p. 196.

おわりに

レヴィナスは、『存在するとは別の仕方を』を経て、さらに『観念に到来する神について』（1982）のなかで、「欲望をそそらないもの、好ましからざるものに対する欲望」¹⁴⁾を主体の主体性として語るようになる。他者との関係はもはや、欲望の関係として描かれない。「無限なもの」によって生じた「欲望」は、それを充足させようような目的＝終末に向かってはいかない。「欲望されるもの」の善さ、望ましさは、「所有」＝「否定性」へと向かうことがもはや許されず、そのベクトルとは別の方向へと逸らされてしまうような仕方、つまり「脱所有」の形を呈さなければならない。

「好ましからざるもの」との関係は、「神の死」後も「生き延びる」¹⁵⁾とレヴィナスは述べている。コジェーヴとレヴィナスは共に、各々の仕方で、「神の死」＝「無神論」の後にも生き延びる人間の人間性を、「欲望」＝「所有」＝「否定性」とは別の仕方で問いつけたと言えるのではないだろうか。

レヴィナスは、コジェーヴが主張する「否定性」から出発しながら、その結果として現れる国家・歴史（＝全体性）を拒否し、それらを超越する可能性を探し求めた。「無限なもの」＝「他者」というテーゼを掲げて、レヴィナスは、『全体性と無限』の序文において、コジェーヴ的ヘーゲルとの決別と、独自の思考の出発点を宣言する。

しかしその後、第二版の注をめぐるデリダによる新たな注釈を軸にして、コジェーヴの思考の営みと、レヴィナスのそれとを改めて見直してみるならば、共にヘーゲルから出発し、「否定性」とは別の仕方で生きる、ポスト歴史の人間のあり方を問いつづける二人のポスト・ヘーゲリアンの姿が見えてくる。両者に一貫していたのは、「所有」をめぐる問いにほかならない。

とすれば、レヴィナスに対するアンチ・ヘーゲリアンという評価は、もはや自明のものではない。レヴィナスが、コジェーヴを経由してどのようにヘーゲルを理解し、またそのヘーゲル解釈を乗り越えようとしていたのかを明らかにすることが、『全体性と無限』の成り立ちを理解する上で重要である。その際、レヴィナスのヘーゲル理解がどこまでコジェーヴの解釈に負うものであるのかを画定することも問われるはずである。レヴィナスの思想におけるコジェーヴとの内的対話の痕跡を跡づけることが、引き続き今後の課題となる。

* 文中の引用箇所は、レヴィナスについては *Totalité et L'infini*, livre de poche (Original edition: Martinus Nijhoff)、コジェーヴについては *Introduction à la lecture de Hegel*, Gallimard, 1947 に拠る。なお以下の邦訳を参照した。

『全体性と無限』(上)(下) 熊野純彦 訳、岩波文庫、2005 年。

『ヘーゲル読解入門―精神現象学を読む』上妻 精、今野 雅方 訳、国文社、1987 年。

注

- 1) 無神論的自我をめぐるレヴィナスにおけるコジェーヴの影響については、拙稿「レヴィナスにおける自由の概念について―コジェーヴとの対照を手がかりに―」(倫理学年報第 59 集、東京、2010 年 3 月)を参照のこと。
- 2) コジェーヴの無神論的解釈自体が妥当であるかどうかは問題であるだろう。ブルジョワは、ヘーゲルの語彙のなかに出てくる「無神論」という語の頻度の少なさから、コジェーヴの解釈に疑問を呈している。とはいえ、

から切り離す」というコジェーヴの意図を解き明かすと考えからである。デリダによれば、「ねばならない」は、未来のための「使命」や「義務」を表している。しかしそれは、何らかの特殊で個別的な内容に対する義務ではない。それは、形式としての「ねばならない」＝「掟」であり、その「内容」がいかなるものであろうと、人間が引き受けなければならない義務である。このような「形式」へのまなざしは、内容に対する「無関心」とも取れるけれども、それはむしろ「内容に対する無差別」¹¹⁾なのであり、「出来事そのものや未来そのものに開かれていること」を指し示す。すなわち、あらゆる内容に対する「無関心」とは、「これからやってくるもの」＝「未来一般」に対する「関心」のことであり、あらゆる内容への、あらゆる出来事への関心にほかならない。

未来への関心のうちに、歴史の終末に生きる人間は、生き「ねばならない」。人間は、こうして、これまでの歴史のなかで展開されてきた闘争や労働とは異なる新しい否定形式を引き受け、自己の人間性を形成することになる。それが、デリダによって、「他なる人間」、「他なるものとしての人間」と呼ばれるところのポスト歴史の人間のありようである。デリダもあらためて確認するように、コジェーヴのいう「歴史の終末」という意味での「歴史」とは、「始原」＝「目的論的に解釈される歴史」(コジェーヴ自身が、このように歴史を考えていたわけではない)のことであり、闘争と労働という二つの否定的行為によって形成される歴史である。その従来歴史に対して、「これからやってくるもの」としての「歴史性」を、デリダは、「メシアニズムなきメシア的なもの」¹²⁾と名づける。

いくつかの留保が必要なものの¹³⁾、コジェーヴの『ヘーゲル読解入門』、レヴィナスの『全体性と無限』から数十年の時を経てなされた、コジェーヴについてのデリダの指摘を通じて、再び、コジェーヴとレヴィナスの問題意識が交差することになる。レヴィナスもまた、『全体性と無限』のなかですでに、「これからやってくるもの」＝「未来」の他性を「他者」の他性に重ね、他者の到来を迎え入れ、その責任を負うことが〈私〉の自己意識の成立条件であると述べていた。さらに、後期の主著『存在するとは別の仕方』(1974)の主張までを射程に入れるなら、「内容」と「形式」の構図は、レヴィナスの「〈語られたこと〉なき〈語ること〉」としての主体の構造にさらに近づく。レヴィナスは、『全体性と無限』において「語り」として論じていたものを後に取り上げ直し、概念内容としての「語られたこと (le dit)」に対し、他者への応答としての「語ること (le dire)」を、主体の意味に籠めるようになるからである。

「〈語られたこと〉なき〈語ること〉」と定義される主体は、「他者への責任」を表現する「場所」と考えられる。〈私〉とは、自己の「内容」＝〈語られたこと〉を絶えず語り直し、他者への応答を更新し続ける主体でなければならない。その限りにおいて〈私〉とは、「他者のため」の「場所」であり、逆説的に、みずからにとっての「非一場所」とも見做される。「非一場所」としての〈私〉とは、他者への「責任」を証言する可能性なのである。デリダの解釈を介してではあるものの、コジェーヴが「所有」＝「否定性」の後にたどり着いた「形式」(＝義務)の意味を、レヴィナスの他者への「責任」、「応答」の思考にたどり着ける可能性が、ここに見いだされることになる。

3. 否定性とは別の仕方—レヴィナスとコジェーヴの交叉—

ところが、コジェーヴはその後、『ヘーゲル読解入門』第二版（1968）の注に長い補足を与えることになる。彼は、歴史の終末は、未来のことではなく、すでに現実のものであると考えるに至るからである。動物性に戻った人間のモデルが一つにはアメリカにあるのだが、その一方でコジェーヴは、「歴史の終末」においてもなお、人間が動物に帰ることなく、なお人間として生き続けているありようを、日本文化の形式化された価値観にもとづく「スノビズム」（K436）に見いだしたのだった。アメリカ文化、日本文化をめぐるコジェーヴの解釈の妥当性については、ここでは立ち入らない。注目したいのは次の記述である。

「自然、あるいは諸存在との調和にある動物」は、人間的なものを何ももたない、生ける存在者である。人間的でありつづけるためには、「所与を否定する行動や誤謬」が消滅するとしても、人間は「対象に対立した主観」であり続けなければならない。これはつまり、ポスト歴史の人間は、以後、自己にとっての所与をすべて十全な仕方ですりながら、「形式」をその「内容」から切り離し続けなければならないという意味となる。だが、それはもはや、内容を行動において変一貌させるためではなく、純粋な「形式」としての自己自身を任意の「内容」として捉えられた自己自身、および他者に対立させるためであるという意味である。（K435-436）¹⁰⁾

問題は、コジェーヴが評価した「形式化」の意味である。形式のうちに生きる人間とは、一体いかなるものであるのか。

歴史とは、人間の行動そのものであった。にも関わらず、歴史の終末後も、人間は人間として生き続ける。とするならば、人間の本質である「否定性」は何らかの方法で保持されていると考えなければならない。つまり、「所与を否定する行動や誤謬」が消滅するにせよ、人間は、「対象に対立した主観」でありつづけなければならない。それでは、闘争や労働としての「否定性」とは異なる「否定性」とはいかなるものか。

コジェーヴによれば、概念的把握の否定性をはたらかせながら、やがて完全な自己意識を実現し、「歴史の終末」に至った人間は、いまや、「自己にとっての所与を全て十全な仕方でする」ことができる。人間はそこで、「形式」をその「内容」から切り離し続けなければならない。それは、「内容を行動において変化させるため」ではない。完全な知を実現し、もはや「純粋な「形式」」として機能する自己自身を、任意の「内容」として捉えられた自己自身や他者に対立させるためである。「否定の否定」後にありうる「否定」とは、いまや、否定の力としての概念的把握によって十全な仕方ですたされた「内容」の「否定」として考えられるのである。

コジェーヴは、このテーゼをこれ以上に展開しているわけではない。だが、この注が後に、デリダによって取り上げられることになる。『マルクスの亡霊たち』（1993）のなかで、デリダは、コジェーヴの意図を独自の仕方です解釈している。その内容を見ておく。

デリダは、コジェーヴが、「ポスト歴史の人間が、人間であり続けるためには、…ねばならない（doit）」と記している点に注目する。この「ねばならない」の表現が、「形式を内容

レヴィナスは、人間の本質を、ヘーゲルからコジェーヴへの流れに沿って、「欲望」＝「所有」＝「否定性」と理解している⁷⁾。また、そのはたらきが他の人間へと向けられる時、コジェーヴと共に、その欲望を単なる他者の無化への欲望ではなく、「他者の欲望への欲望」と考える。あるいは、自己と他者とが非対称的な関係にあり⁸⁾、他者への欲望を実現するためには他者の所有は挫折する運命にあるとする点でも、コジェーヴの議論を踏襲している。レヴィナスはさらに、コジェーヴに呼応するように、主体はみずからの死を受け入れる者として自己の死への意識を有し、死を越えてなお、存在のうちにみずからを維持する威力⁹⁾を持ちうることも述べるのである。

もちろん、その超越の可能性こそ、レヴィナスが最終的に拒否するものであった。それは、具体的には国家や諸制度、歴史を指し、結局、「有意味ではあるけれども非人称的な世界を死を超えて保証する」(L263) ことになるからである。レヴィナスはこのような方向性を拒否するのではあるが、しかしそれは、死の意識を持つ現存在が超越する、たしかに一つの可能性であると言えるだろう。レヴィナスは、超越の可能性を、「多産性の次元」(エロスの経験)と「政治的なものの次元」(L267) とに区別する。彼自身は、先に見たように、前者の立場を採用するのだが、後者の立場とは、レヴィナスが取らない「別のチャンス」(L263) であり、逆に言えば、コジェーヴがしたがった、また、少なくともレヴィナスの目にはヘーゲルやハイデガーがしたがったと映る「チャンス」であったのである。

両者を分かちつものは、「言説」の概念の違いにある。レヴィナスが探究するのは、「ことばを語ることができる能力」としての「語り」である。それに対し、コジェーヴの「言説」とは労働、概念化に結びつくものであり、承認もまた、そのような「言説」の延長にある他者関係である。レヴィナスにとってそれは、なお「全体性」の思考のうちに内包されるものでしかない。それゆえ、コジェーヴの「殺人の禁止」もまた、自らの議論とは次元を異にするものである。コジェーヴの承認論の場合、すでに〈私〉と〈他者〉とは、「闘争の意識」という観念論のうちにあるからである。

承認の闘争においては、自己意識の起源は見届けられていない。闘争の意識はすでに、時間に介在され、概念であるからであり、概念とは、物の殺害(暴力・所有)であったからである。それに対してレヴィナスが問題とするのは、概念化のはたらきとしての意識の起源である。相手を主人と認識し、相手を奴隷と認識する以前に、私は他者に出会っている。他者との「最初のできごと」＝「出会い」とは、相互承認し合う「言説」の関係ではなく、むしろ、その「言説」を開始するための「語ることのできる能力」が他者から私に授けられる契機なのである。レヴィナスは、コジェーヴの人間学に多くを負いながらも、「所有」＝「労働」＝「言説」としてではない、すなわち「否定の否定」とは異なる人間の超越の可能性を、他者から与えられて生起する「語り」という行為のうちに見いだすのである。

「無神論」が超越のための出発点である、と再三記すレヴィナスの意図はそれゆえ、コジェーヴの提示した「人間の歴史の完成」＝「終末」がもたらしたものを問いただすことにあったと考えられる。『全体性と無限』の序文とは、コジェーヴと共有するその地点(歴史の終末)から人間は脱しなければならないという、コジェーヴに対するレヴィナスの批判的回答を提示するものであったのではないかと同時にそこには、「所有への異議」を唱える思考としての、レヴィナス哲学の出発点があったと思われるのである。

者による審問、道徳的正当化を含むものなのである。

次に愛をめぐる議論を見ることにしよう。『全体性と無限』において、他者の所有不可能性に端的に触れる経験は、女性との性愛の場面である。レヴィナスにおいて、性愛は、具體的な次元において他なるものを他なるものとして求め、「他者性を維持する」ことを本来欲望するものである。これが、他者経験の原型として考えられている。私と愛する他者との関係は、承認論におけるような「私の意志と闘う意志」(L295)でもなければ、「私の意志に従属する意志」(L295)でもない。私を駆り立てるものは他者という「対象」ではない。それは他者が感覚する感覚を同時に感覚することへの欲望である。しかしそれゆえに、愛とは悲劇である。なぜなら、私の感覚の構造に、あらかじめ「自己に反して」、愛する者の、自分のうちに占有することの根源的不可能性が刻まれているからである。

エロスの欲望は、あくまで自らと異なるものを愛するからこそ触発されるものである。愛するとき私は、他者と、ただひたすら直接的で「純粋なコミュニケーション」を結ぶことを欲する。愛する者に触れ、「愛撫」するとき、両者の間には、肌の肌理とその厚みが広がるばかりである。だが、そこであらわになる「他性」とは、私にとって「曖昧さ」そのものなのではないか。官能が、「どのような概念のうちにも流れこむことのない体験」(L286)であるというのは、いかなる概念化をも拒否して結ばれる他者の身体が、「剥き出しにされたある法外な現存の裸出性」として「超物質性」(L291)を私に向けていると考えられるからである。愛する者へと手を差し伸べる「愛撫」の際限のなさ、獲得されたかに感じられながら、なお私の指先を逃れていく他者への「不断に増大していく飢え」を象徴している。

「愛撫」とは、享受によって満たされる「飢え」とは異なり、決して満たされることのない「飢え」である。レヴィナスは、他者の他性を、未来の他性に重ねる。愛撫において、自らのうちに把握することのできない他者は、私の手から「絶えず逃れて未来へ向かう」。しかし、その未来は決して手に届くことのない未来ではなく、存在しているのに「いまだ存在していないかのように」挑発しながら、私の指先をかすめていくような、「けっして十分に未来ではない未来」である。しかしそうであるだけに、私の「飢え」はさらにいや増し、私は愛撫による焦燥感に駆られることになる。

「所有ほど〈エロス〉とかけはなれたものはない」(L298)とレヴィナスは言う。エロスの欲望は、あくまで自らと異なるものを愛するからこそ触発されるものであり、エロスの裸形によって、「語りえないもの」が語られる。すなわち、他者からの「否」＝「不可能性」のメッセージである。この呼びかけが、まず初めに私に「触れる」ものである。この感性的体験によって私は、意味付与しうる主体として生起し、そののちに、他者の「裸形」＝「顔」にそれ「として」意味を与え、認識し、他者のメッセージの内容を理解し、記述することが可能になるのである。この意味付与、認識、理解、記述の次元は、コジェーヴの「言説」のそれである。「女性的なもの」との「エロスの経験」における所有(＝否定)の不可能性を根源的モデルとしながら、レヴィナスは、コジェーヴの「言説」の次元を生起させる「語り」の構造を解き明かそうとするのである。

これまでの考察から、レヴィナスの議論のうちに、コジェーヴの思考の枠組みがすみずみにまで張り巡らされているのがわかるだろう。と同時に、コジェーヴを批判的に継承するレヴィナス独自の問題意識も明らかになる。

定性をコジェーヴが「殺害」であると見做すのと同様、レヴィナスもまた、「概念化」＝「存在論」（西洋哲学的思考そのもの）を「他の同への還元」としての「暴力」であると指摘するのである。

この所有の欲求の運動は、「他の人間的存在者」＝「他者」にも適用されうる⁴⁾。だが、レヴィナスの場合、それは承認闘争とはならない。レヴィナスにおいては、2つのケースが、他者の他性の所有（＝否定）への「欲望」の究極の形として想定されている。一方では、殺人の場面であり、他方では、愛の関係⁵⁾（エロスの経験）である。だが、レヴィナスによれば、所有への「欲望」から発したはずの行為は、最終的には私の意志と矛盾するものとなり、憎悪からの所有の欲望も愛における所有の欲望も、同じく座礁する。ただし、愛において〈私〉は、その挫折を経て、言語能力そのものとしての「語り」が生起する経験を得ることになる。つまり、「愛」にこそ、コジェーヴにおける「否定性」＝「言説」とは別の超越の可能性、本来の平和を導く「語り」の力が見いだされるというのである。そこで、殺意と愛をめぐるレヴィナスの議論をそれぞれ見ていくことにしよう。

まず、殺人の場面である。ここに、相手を憎悪する者がいる。その者は、自分が受けたのと同じ、あるいはそれ以上の苦しみを、憎悪の対象である他者に与えようとするだろう。そこで憎悪する側が欲するものは何だろうか。相手が、その苦痛から逃れることができずに、ほとんど物と化した存在となることである。望まれているのは、「純粋な受動性」（L266）である。けれども憎悪する者は同時に、相手がその苦しみを明晰に知覚し認識し、あるいは反省し後悔し、許しを乞い求めることをも期待しているのではないか。この場合、求められているものとは、「際だって能動的な存在」（L266）である。つまり、「際立って能動的な存在」である他者が、「純粋な受動性」（L266）として苦しむことが憎悪する者の狙いではないのか。そのかぎりでは、憎悪から相手を苦しめることとは、「最上級の主体のうちに他者をとどめること」（L266）、他者を最大限、主体性のうちに維持することを意味することになるだろう。憎悪はそれゆえ「論理的な悖理」（L266）を孕んでいるとレヴィナスは指摘する。

この憎悪の分析が、そのまま殺人の不可能性に敷衍される。私が他者を殺したいと欲するのは、それが、私の権能を越えるものであるがゆえである。他者が相対的に所有できるものであるとすれば、私はそもそもそのような欲望を抱くことはない。けれども、そのような欲望の末に果たされる殺人は、単なる無化であって、他者を所有することにも支配することにも成功しない。殺すことで、他者をその他性（他者の自存性）において支配し、所有することを目指すならば、その思考はあらかじめ破綻している。殺害された他者とはもはや他者ではなく、所有され支配されたかに見える他者はすでに他者ではありえないからである。

他者を殺すことは、他者を他者でないものにする、物化することである。殺したいと欲する動機に、無限なものである〈他〉の所有への欲望が存するのであれば、その殺人の達成は、同時にその挫折でもある。レヴィナスは、これを「私には他者を殺すことができないという倫理的な不可能性」（L217）と呼ぶ⁶⁾。レヴィナスによれば、私に相対する他者の「顔」は、「あなたは殺してはならない」（L217）というメッセージそのものである。殺人の不可能性とはすなわち、世界のうちのあらゆる〈他〉なるものを所有してきた〈同〉＝〈私〉が初めて経験する根源的な挫折であり、〈私〉はそこで「〈同〉の権力の失墜」として、その自己意識を刻まれる。レヴィナスにおける自己意識はしたがって、その成立要件に、他

死の危険に身を晒し、承認を得ようと欲望を抱く人間は、承認を受けるために、死に直面しながらも死を回避することが課題となっている。コジェーヴの承認闘争にあっても、自己意識の確立のために、「あなたは殺してはならない」というメッセージが発せられている。あとで見るように、レヴィナスは、〈同〉と〈他〉の非対称性から他者所有が不可能であると述べるけれども、コジェーヴもまた、非対称的な主と奴の関係から尊厳を求める死の闘争が開始し、最終的には当初の目的のために挫折しなければならないと説く。とすれば、「歴史の終末」はたしかに戦争を消滅させ、闘争のない平和をもたらすと言えるだろう。

だが、ここであらためて、『全体性と無限』の序文の一節を振り返ってみよう。レヴィナスは、「戦争によって発見される客観的な歴史のうちでは、平和が戦争の終わり、あるいは歴史の終末として生起することはない」と述べていた。それでは、「客観的な歴史」とは異なる仕方では平和を導くことはいかにして可能か。レヴィナスは、コジェーヴに抗して、主体と他者との関係をどのように論じているのか。レヴィナスの場合を見てみよう。

レヴィナスは、「否定性」を、〈同〉による「所有」＝エゴイズムの運動であると批判する。〈私〉はこのエゴイズムに発しながらも、他者からの呼びかけによって道徳的に正当化されなければならない。とはいえさしあたり、レヴィナスもまた、「否定性」としての人間理解から出発し、独我論的〈同〉を前提として他者論を展開している。

レヴィナスによれば、人間は、自然的世界に身を浸し、その糧をひたすら享受する存在者である。が、やがて物にはたらきかけ、手元に置き、所有の「欲求」を抱くようになる。「始原的なもの」である「自然」のうちにある「物」を手に取り、統御し支配し、自由に処分する「欲求」をはたらかせながら、人間は「自然」を「(人間にとっての)世界」へと変容する。事物の所有の運動、自然から世界への変容が、レヴィナスによって、「〈他〉の〈同〉への還元」と呼ばれるものであり、エゴイズムとしての〈私〉の本質である。

レヴィナスにあっても、労働による把持の可能性が、そのまま概念の了解可能性に重ねられている³⁾。労働は、物を直接的な享受からきりはなし、それを住み処のうちに配置して、持ち物として意味を付与する。労働とはそれゆえ、「獲得という内部化する現実活動」(L170)である。他方、物の存在を問うということもまた、物の自存性を統御し宙吊りにし言説によって把握すること、すなわち思考のうちに所有することではないか。物が現前し、その存在について問うとき、存在論は、存在者の形・固体を限定し、それをそのもの「として」把持することによって、世界を描き出す。物を対象としてきりはなし、その輪郭を描きとり、本来形のないものに形を与えることは、それを固体にし、操作し、把持することにはほかならないのではないか。

レヴィナスはたしかに、コジェーヴの「労働」＝「所有」＝「言説」の立場を共有していると言えるだろう。レヴィナスもまた、人間の行為による変容とは、物の本来のありように正面から向かい合って行われるものではなく、「斜めから」(L172) 質料を傷つける「行為」＝「暴力」であると考えからである。本来、自体存在のままである質料としての物は、純粹な「裸形」(L71)であり、概念によって固体化されその形をはかれうるものではない。しかしそれでもなお、そのはかりがたさが変容されてしまうのであるとすれば、それは私が、物が質料としてむける抵抗を、所有の運動によって乗り越えてしまうからである。物の質料の抵抗は、すでに「克服された抵抗」(L172)として労働に提示されているにすぎない。否

の概念とともに、自由な対自存在として還帰する。この還帰によって奴隷は、主人と本質的に平等となるまでに至る。自己意識はこのような過程を経て、主人と奴隷との関係という特殊態から、両者の等質な普遍態へと高まる。

他者との承認闘争を生き延びた人間の存在様式とはそれではいかなるものか。コジェーヴにとって他者との承認とは、主人と奴隷との総合をもたらすものであり、彼はそこに、普遍的で等質な国家の公民の実現をみた。だがそれは同時に、「本来の人間」の「消滅」を意味している。ことは、「歴史の終末」概念に関わる。

コジェーヴによれば、人間が国家の公民として現れるのは、「血塗られた戦争と革命の消滅」(K435)の時である。否定の欲望を本質とする有限な人間の闘争の歴史がそこで終わりを迎えるからである。完全な自己意識を実現し、自己を把握するに至った人間は、もはや「本来の人間」ではない。「本来の人間」とは、「所与を否定する行動」を本質とする存在者であり、「一般には対象に対立した主観」(K435)であった。しかし、承認闘争を潜り抜け、等質な国家の公民となった人間にはもはや、世界を自らに適合させるように労働し、概念を把握し、はたらきかける必要はない。他人たちと相互に心から承認しあうことで、「もはや闘争せず、可能な限り労働しないですむ」(K435)。

けれども勿論、「歴史の終末」、「本来の人間の消滅」が世界の終わりを意味するわけではない。「自然的世界は永遠にあるがままに存続する」し、人類が絶滅するわけでもない。それでは、「歴史の終末」後の人間はいかに存在するのか。

コジェーヴは、新たな人間を「自然や所与の存在と調和した動物」と定義する。なぜなら、「歴史の終末」＝「ポスト歴史」における人間はもはや、「世界や自己の言説による認識」をはたらかせることのない動物であるからである。言説が消滅するのならば、それは「本来の人間の決定的無化」を意味するだろう。労働し、創造する人間の行為は、「鳥が巣を作り、蜘蛛が蜘蛛の巣を張るようなもの」(K436)となり、その「言説」は、「蜂の「言語活動」と似たようなもの」(K436)になる。我々人間は、所与の世界に対立することなく調和し、満足することになるだろう。「言説」を人間の「労働」であり、「所与の否定」であり、概念的把握であり、「殺害」であると捉えたコジェーヴは、いまや、自己意識の把握を完全なものとし、歴史を完成させた人間に到来する未来を、世界と調和した動物性への還帰として描くのである。

2. レヴィナスにおける他者論—殺人の不可能性とエロスの現象学—

コジェーヴにあって、殺しあう戦争こそが、人間の歴史的な自由を保証する。だが注意すべきは、「殺人」＝戦争ではなく、「死を賭けた闘争」が、結果として「殺人の禁止」、「殺人の不可能性」を導く点である。コジェーヴは、尊厳を求める死の闘争において自己の生命を危険に晒さなければならぬと述べつつも、承認が成就するためにその人間は生きなければならないと考える。主人は、「生き残っていなければならない。だが、そのような人間は他者に承認される限りで人間的に生きるにすぎない。したがって、その敵もまた、死を免れねばならない」(K571)。闘いは死に至る前に終わらなければならない、そう述べてコジェーヴは、「殺人の禁止」を主張している。

きている。だが、「犬」という意味が、「犬」という語のなかに移行するとき、つまり、その語が感覚的な実在とは異なった抽象概念となると、意味は死んでしまう。「犬」という概念は、犬についての私の概念であり、したがってこの概念は生きている犬以外のものであり、生きている犬に外的に関係するものである。或る存在者の意味が、それを指し示す語（抽象概念）に移行するや否や、その意味は消滅する。ヘーゲルにあって、欲望がなければ概念的把握は存在しないが、そのようにしてなされた「どんな概念的把握も殺害に等しい」（K372）。概念とはすなわち、自体存在である物の「殺害」なのである。

それでは、以上のような弁証法において展開する人間の意識から、いかにして自己意識が生起するのか。コジェーヴにあって、自己意識が生起するためには、他者との出会いが必要となる。しかし、他者のいる社会を想定するだけでは十分ではない。その社会のうちに、「二つの本質的に異なった人間的な振る舞い」、「不等な」（K15）関係が含まれていなければならない。

コジェーヴの主人と奴隷の弁証法を見渡しておく。それによれば、自然的世界のうちで、人間こそが初めて、あるいは唯一、「尊厳＝承認」を求めて最初の血の闘争を繰り広げる者として現れる。ここでいわれる承認への欲望とは、ある自然的存在者にむかう欲望ではない。それは、生死を賭けた闘争の中で、自己を他者の欲望の対象とさせようとする欲望であり「他者の欲望に向かう自己の欲望」（K371）である。コジェーヴによれば、みずからの死を賭けた承認とは、自己を、世界／事物の所有者として認めさせるだけではなく、自己の人間的価値を承認させることにもある。それゆえ重要なのは、実は他者を実際に殺そうとする意志ではなく、自己をそのような死の危険に晒そうとする意志である。

主人の人間性は、危険を冒すことを受け入れることによって客観的に実在している。だが主人の意識は、自立的意識として自分だけで存在する意識であるにもかかわらず、奴隷の意識を介して承認されている。主人は、死の危険を冒すことを拒否した者を殺さず、奴隷として生かし、支配の下において物を介して奉仕・労働させる。

死を受け入れることが人間性であるとするれば、主人がたしかに本質的であり、奴隷が非本質的である。だが主人が、奴隷によって用意された物を消費し享受するだけであるのに対し、奴隷は、強制された労働に従事することによって、やがて自然を支配する者となりうる。そもそも奴隷が主人の奴隷となったのは、自己保存の本能によって自然の法則に服したためであった。しかし、奴隷がみずからの労働によって自然の支配者となると、同時に当の主人からも解放されることになる。労働を通じ、自然的世界を技術の世界に変貌させることによって奴隷は、絶対的な主人として君臨するに至るのである。

とすれば、人間の歴史とはむしろ、労働する奴隷のあり方に属していることになるだろう。死への恐怖が歴史の進歩の条件となる場合、歴史の進歩を担うのは奴隷の労働にほかならないからである。奴隷ははじめから自立的であるのではなく、主人に対して隷属的であって、潜在的に人間的であるにすぎない。けれども生き延びたことで奴隷は、主人を畏怖し、主人のための奉仕労働を経て、自己の人間性を発展させようとする。

それでは、人間性を発展させるものとは何か。言説である。奴隷は、死の不安から、言説を含む労働という活動を行い、そのことによって所与の世界を変容させるのだが、その際、言説による思惟へと自己を高める。この時、自由という抽象概念が練り上げられ、奴隷はこ

はない。このヴィジョンにより、むしろ全体性を踏み越えた存在が、無限なものとの関係することになるのである。終末論の最初の「ヴィジョン」によって、終末論の可能性そのものの、言い換えるなら、全体性との断絶、コンテキストなく意味することの可能性が開かれている。…平和に関して言うなら、可能なものは終末論以外に存在しない…。戦争によって発見される客観的な歴史のうちでは、平和が戦争の終わり、あるいは歴史の終末として生起することはない。(L7)

「歴史の終末」の概念に対して、「終末論」的思考こそが、全体性の思考を越えて真の平和を導くことができると述べられている。ここでの「終末論」とは、「信仰に従属するもの」(L7)でもなく、「目的論的な体系」(L7)を導入するものでもない。「全体性に対してつねに外部的な一箇の余剰との関係」(L7)をめぐる思考であり、「ことばを語ることができる能力」によって平和を導く思考である。「歴史の終末」を導く戦争に抗して、絶対的に外部であるものとの関係を結ぶ思考が「終末論」として定義されている。

レヴィナスが、みずからの提示する終末論が目指すものは、「歴史の終末」に到来する平和ではないと述べる時、そこには明らかにコジェーヴへの批判が含意されている。

本稿ではそこで、これまで十分に検討されてこなかった、レヴィナスに対するコジェーヴの影響関係を考えてみることにしたい。むろん、両者の関係を体系的に分析することは本稿においては不可能であり、ここでは、あくまでその予備的考察として、自己と他者との関係をめぐるコジェーヴ、レヴィナスの立場を確認することを目標とする。それにより、レヴィナスがコジェーヴを通して、ポスト・ヘーゲルの思考をいかなる点において引き受けようとしていたのかが見えてくるはずである²⁾。

1. コジェーヴにおける他者論—主と奴の弁証法—

まず、コジェーヴにおいて自己と他者との関係がどのように語られているのかを見ておくことにしよう。それがもっとも端的に表れるのは、そのヘーゲル論としてよく知られる「主と奴の弁証法」であり、承認論である。

コジェーヴによれば、人間の本質を「否定性」と捉え、この否定性が、所与のもののあるがままの姿から引き剥がそうとする欲望であり、かつ、所与を否定しつつ保つ行動であることを明らかにしたのは、ほかならぬヘーゲルである。さらにこの否定性を、「所有」=「労働」=「言説」という図式として描いた点において、ヘーゲルは哲学史上において比類なき存在と評される。「労働」とは、人間の欲望が所与の物を変容させる「行動のあらわれ」=「否定するはたらき」であり、事物は、その労働のなかで他性を否定されながらも「保存」=「所有」され、その結果、「作品」となって世界のうちに現存在する。この一連の経過こそ、ヘーゲルがみいだした弁証法である。

とりわけコジェーヴは、「このテーブル」が現存在する、と「語ること」がすなわち、労働の結果を語ることでもあるという点に注目する。存在者の意味が経験的に現存在するもののなかに受肉されている限り、この意味は、経験的に現存在するものと同じように生きている。例えば、「犬」という意味が感覚的な存在のなかに受肉されている限り、この意味は生

レヴィナスにおけるポスト・ヘーゲルの思考

—— コジェーヴとの対照を手がかりに ——

木元 麻里*

はじめに

エマニュエル・レヴィナスは、中期の作品である『全体性と無限』(1961)のなかで、ヘーゲル、ハイデガーを頂点とする西欧哲学的思考の枠組みを、認識の自己同一的なはたらきのうちに世界を了解する「全体性の思考」であると定義し、エゴイズムとして厳しく批判している。彼は、この「全体性」を越えでるものを「無限なもの」、ないし「絶対的に〈他〉なるもの」と定義し、人間的他者との出会いにその可能性を見る。

「全体性」(〈同〉)対「無限」(〈他〉)という対立構図から、レヴィナスはこれまで、反ヘーゲルの立場に立つ思想家とみなされてきた。しかし注意すべきは、「内部性とエコノミー」と題される『全体性と無限』の長大な第二部において、〈同〉としての人間の存在様態が、多分に肯定的に展開されている点である。人間は自然的世界に浸り、自然の糧を享受し、やがて労働・所有の行為を開始し、それらを反復し、表象し、歴史的世界を構成していく。人間の内部性がこのような過程を経て完全に確立する姿を、レヴィナスは「無神論」的自我と名づける。

人間を発生論的に記述し、無神論的自我と定義する議論の進め方は、しかし、われわれに或るポスト・ヘーゲリアンを想起させる。アレクサンドル・コジェーヴである。そのひところ、「有限な自由」たる人間の発生とその展開を、ヘーゲル精神現象学の無神論的解釈によって明らかにしたのではなかったか¹⁾。

とはいえコジェーヴからの影響を、レヴィナス自身の記述によってはかることはできない。レヴィナスは、コジェーヴに明示的に言及しないからである。だが1933年から1939年にかけてパリ高等研究院で行われた、ヘーゲルの『精神現象学』に関するコジェーヴの講義に、ラカン、バタイユ、アロン、カイヨワ、メルロ＝ポンティらに混じって、レヴィナスの姿があったことが証言されている。とすれば、フランスのヘーゲル受容を決定的にしたと言われるコジェーヴは、レヴィナスのヘーゲル理解に、ひいては彼の思想形成に少なからず影響を与えたのではないか。

じじつ、『全体性と無限』の序文のなかで、レヴィナスが、コジェーヴの概念である「歴史の終末」に言及していることに注目したい。関連する箇所の一部を引いておく。

…平和は、このようにことばを語ることができる能力として生起する。終末論的なヴィジョンによって、戦争と帝国ということばが語られることのない全体性が切断される。そのヴィジョンが目ざしているのは、全体性として理解された存在の内部での歴史の終末で

うだけです」²³⁾ というハントケのことばを額面通りに受け取ることにはできないものの、「美しく表現したい」という願望が、少なくとも『帰郷』以降の作品に込められた真意であることは間違いない。つまり、「人間の空間」を「美しく書く」ために、ハントケはそれを可能にしてくれる「書くべき空間」を求めて、己の「文学的故郷」であるヨーロッパに帰郷するのである。つまり、ネガティヴな文学世界から脱却してポジティヴなそれへと旅立つこの「帰郷」の物語は、作家自身にとっては新たな文学世界へ向かってどうしても越えなければならない「通過儀式的体験」²⁴⁾ としての出発点を意味していたのである。

注

『ゆるやかな帰郷』からの引用は、その直後に頁数を示した。

使用テキスト：Langsame Heimkehr, suhrkamp taschenbuch, 1979

- 1) André Müller: im Gespräch mit Peter Handke, Bibliothek der Provinz, 1993, S. 98 f
- 2) Peter Handke: Aber ich lebe nur von den Zwischenräumen. Ein Gespräch, geführt von Herbert Gamper, Ammann Verlag, 1987, S. 95
- 3) ibid.: S. 153
- 4) André Müller: S. 67
- 5) Peter Handke: Aber ich lebe nur von den Zwischenräumen, S. 82
- 6) ibid.: S. 82
- 7) ibid.: S. 82
- 8) Dorothee Fuß: Bedürfnis nach Heil. Zu den ästhetischen Projekten von Peter Handke und Botho Strauß, Aisthesis Verlag, 2001, S. 14
- 9) Peter Handke: Die Lehre der Sainte-Victoire, suhrkamp taschenbuch, 1984, S. 29
- 10) 拙論参照：ペーター・ハントケの劇作——話劇と『カスパー』にみる詩的フォルムへの可能性——、秋田大学教育学部研究紀要 人文科学・社会科学第37集、1987年
- 11) Peter Handke: Aber ich lebe nur von den Zwischenräumen, S. 81
- 12) ibid.: S. 80
- 13) ibid.: S. 81
- 14) ibid.: S. 81
- 15) ibid.: S. 184
- 16) ibid.: S. 184f.
- 17) ibid.: 178ff.
- 18) 拙論参照：ペーター・ハントケの作品における「言語表現」と「言語喪失」との関係についての考察——“Wunschloses Unglück”の言語表現を手掛かりにして——、秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学、第59集、2004年
- 19) “Peter Handke im Gespräch mit Thomas Deichmann”. In: Noch einmal für Jugoslawien: Peter Handke, herausgegeben von Thomas Deichmann, suhrkamp taschenbuch, 1999, S. 189
- 20) Theodor W. Adorno: “Prismen. Kulturkritik und Gesellschaft”, 1955
- 21) Peter Handke: Aber ich lebe nur von den Zwischenräumen, S. 183
- 22) ibid.: S. 114
- 23) André Müller: S. 92f.
- 24) Peter Handke: Aber ich lebe nur von den Zwischenräumen, S. 182

ハントケは、そうした「ナチの歴史」および「ナチ的なもの」に明示的な文学表現を付与することはしないが、その文学の原点にはその災いとの対立が確固とした前提として潜在する。そのことをハントケは、『帰郷』においてきわめて暗示的に表現したのである。

こうしてハントケ文学の前提を見てくると、なぜハントケが『帰郷』以後の作品で繰り返して「和解」を問題にするのかが分かってくる。それは、ハントケが災厄の歴史の一端を担ったドイツ人の実父およびドイツ、さらには歴史的罪をドイツに押しつけている故国オーストリアと個人的に和解することのみならず、より歴史的かつ政治的な意味で災いとの対立の歴史を乗り越えなければ、自身の文学が目指すポジティブな文学世界へと歩を進めることはできないことを知っていたからである。「アウシュヴィッツ以後、詩を書くことは野蛮である」²⁰⁾というアドルノのことばは、永遠に重い認識である。だからこそハントケ文学の底流には、それが初期の言語批判的な否定的基調の作品であれ、また『帰郷』以降の文学的理想を追求する肯定的基調の作品であれ、つねにアウシュヴィッツの時代への記憶が流れているのである。逆にそれなくしては、「詩」を書くことはまさに野蛮なことであり、不可能な行為なのである。

ハントケ文学のこうした歴史性を目の当たりにすれば、先に引用した「わたしは善良でありたい」(S. 147)というきわめて倫理的な響きを持つ表現は、実は「わたし」個人だけに向けられたものではなく、ハントケの時代およびその時代を生きる人間、さらには人間そのものに普遍的に向けられた倫理的な要請であると理解できる。すでに引用した通り、主人公ゾルガーは「世界を透かして現わすために、しっかりとした輪郭を持った、しかしまったく透明な主人公です」とハントケが言うように、われわれ読者はゾルガーの感覚と思考の枠を通して世界を見、主人公とその認識を共有する。ゾルガーが自らに突きつけた要請は、即ち読者であるわたしたちにも突きつけられたものと理解しなければならないのである。(そうした歴史性を考慮すれば、『帰郷』の最も重要な概念である“*Heil*”はこれまで一貫して「至福」とだけ訳してきたが、同時に災厄の歴史からの「救済」や「癒し」をも含意していると理解すべきであるのは当然である。)

最後に、作家ハントケにとっての「法則」、そしてその「法則」がもたらす「至福」とは何かをもう一度考えてみたい。ゾルガーが語るように、「至福」が平和の時代を己自身として生きることであることを思えば、ハントケ自身にとって「至福」とは、過ぎ去ってしまう美しい瞬間を永遠の存在として捕捉するための言語を持つことであり、「法則」とはことばを発しない「空間(=自然)」に刻みこまれたことばであり、それを発見することであると理解できる。さらに、事物を通して生み出した文学的言語によって、作家は自らが思い描く美しい世界を他者(=読者)と共有し、それが時空を超えて永遠に存在し続けることを目指す。なぜなら、「空間(=自然)」を叙述することの意味は、「自然(そのもの)」の空間ではなく、それを超えて、あるいはそれにつながるものとしての、言わばわたしにとっては人間的で神々しい空間である人間の空間²¹⁾を描くことであり、人間そのものを表現することにあるからだ。まさに、これが肯定的な文学世界を探求するハントケの「至福」なのである。

「わたしには、まったくテーマはありません」²²⁾、あるいは「わたしの本は、自分にとって純粋に読む楽しみにすぎません。自分の本を読むと、(中略)これは美しく書けていると思

ゾルガー（＝ハントケ）が指摘する「世紀」は、もちろん災厄の歴史、つまりナチの歴史とは無縁ではない。否、ハントケ文学の出発点はむしろ、個人史的にも社会史的にもナチの時代にあると理解すべきである。『帰郷』における「和解」は、まさに消し去ることのできない災厄の歴史があるからこそその願望なのである。そして、災厄の歴史は『帰郷』が書かれている時点でもまだ終わっていない。『帰郷』は、まさにその災厄の歴史にピリオドを打ち、新たな平和の歴史を始めるための、きわめて理念的かつ哲学的な作品なのである。

歴史は、わたしがしたように誰かが為す術もなくただ罵っていればよい災いの連続だけではなく、実はずっとまえから（もちろんわたしも含めて）誰でもまえに進めることができ、そして平和をもたらすことができる形式である、ということをわたしは学んだ。これまで（もちろん、ときとして他者の身になって考えることはありながらも）部外者だったわたしが、この歴史の形の一部であり、そのうえこの店のなかの人々と外の通りを通り過ぎて行く人々と共に、新たな魂を吹き込まれて歴史に関与しているということ、わたしはたった今体験した。これを以て、わたしが否応なく己の顔に独裁者と専制者の表情を見出さざるをえなかったこの世紀の夜は、わたしにとっては終わりを迎えた。わたしの歴史（いやそこのみんな、われわれの歴史）は、この瞬間がそうであるように明るくなるだろう。歴史はこれまでまだ始まりさえもしていなかったのに違いない。罪の意識を持つ者として誰とも、そして他の罪の意識を持つ者とさえ共になることなく、わたしたちは平和の歴史で躍動することができなかった。そして、わたしたちの無定形は繰り返し新たな罪を作り出してきた。たった今はじめて、わたしは陽の光のなかでわたしの世紀が他の世紀に開かれているのを見、今を生きることに同意した。そのうえわたしは、同時代人であるきみたちの同時代人であり、この世の者たちの中の一人であることに喜びを感じるようになった。わたし個人ではなく、人間そのものの不滅性という高揚感が、わたしを（すべての希望を越えて）運んで行った。わたしは、この瞬間こそわたしの法則であるはずだ、とそれを書き留めながら確信した。わたしは自分の未来に責任があると宣言し、永遠の理性を切望し、もはや決して独りではいたくないと思った。しかあれかし。(S. 177f.)

以上のように、ゾルガー（＝ハントケ）が希求する「法則」とは、自らが生きる時代を他者と共に平和の歴史へと構築するために必要な「和解の形式」を意味している。ドイツをはじめとしたヨーロッパが生きてきた時代は、未だナチの歴史から解放されていない対立の時代だった。つまり、ハントケの文学の出発点にある「ナチの歴史」は、ナチ固有の残虐な歴史的事象を超えて、その後の時代のあらゆる意味における「ナチ的なもの（Nazitum）」を象徴するものと捉えるべきなのである。そのことについて、ハントケ自身は次のように語っている。

（『ゆるやかな帰郷』の）主人公は地質学者で、彼は今世紀の夜、つまりナチ的なもの（Nazitum）から脱却して、新たな歴史へ旅立つことを願っています¹⁹⁾。

ました。しかし、そのとき神のことではなく、文化のことが思い浮かびました。わたしには文化がありません。自分が何かを欲して呼びかけることができない限り、わたしには文化がないのです。(中略) わたしはおまえのことを必要としている！ それで、わたしの呼びかけなのです。(S. 146f.)

では、なぜゾルガー（＝ハントケ）はそもそも世界（＝他者）との「和解」を自らの課題と信じ、その実現を求めているのだろうか。それはとりもなおさず、彼が生きてきた時代が根本的に「調和」や「安寧」を欠いていたからであり、そんな世界と与しない生き方を選択してきたからである。ハントケ文学の形式に関する観点から言えば、すでに述べた通り、『帰郷』以前の作品は調和を欠いた世界の実像を否定的に表現していると言える。つまり、生き方としても表現形式のあり方としても、ゾルガー（＝ハントケ）は対立を基調としたネガティブな時代を終わらせ、調和に基づいたポジティブな文学世界を構築しようとしているのである。

このように見てくると、ゾルガー（＝ハントケ）の「調和（＝和解）」への願望は個人史的な領域を超えて、より歴史的な次元にこそあるということに気づかされる。初期の作品も含め、とかくハントケの作品は時代や社会に背を向けた非・政治的なものであるという批判があるが、実はハントケの文学は潜在的に歴史的であり政治的な出発点を持っている。それは、ニューヨークのコーヒーショップでのゾルガーの意識からも諒解できる。少し長いが、以下にその条を引用する。

子供がひとり店に入ってきて、店にない何かを買おうとした。ゾルガーはその子がため息をつくのを聞いた。その瞬間、誰かがレジの後ろで小切手を切りながら大きな声で話をし、その日の日付を言った。そのとき（すべての物音は消え去り、ただラジオの音楽だけが静かに流れ続けていた。コーヒーメーカーの蒸気は、まるでその日付のなかを通り抜けて行くように動いていた）コーヒーショップの時は、みな息をひそめる中、より確かな効力を持つようになり（ゾルガーは瞬きの瞬間、巨大な姿が川面のうえに立ちのぼるのを見た）、ぬくもりをもたらす光の波と共に店の空間を照らしだした。／その光景の目撃者は、『世紀』と『平和の時代』という二つのことばしか思いつかず、まるで無声映画のように日めくりカレンダーが一枚ずつ落ちるのを見た。だが『時の女神』は、それと知らずにブリキの灰皿やシュガーケースと一緒に（中略）、ホールいっぱいにきらめいているコーヒーショップをその日の日付から取り去ることをせず、逆に、その空間が（よそよそしくなる代わりに、ますます居心地がよくなりながら）人間の可能性を助け続ける世紀の発明や発見、あるいは音や絵や形のすべてを自らの内に包み込むようになるまで、その空間を過ぎ去った日々と結びつけた。／そこにいる者はみな、一つの呼吸に捕えられた。光は物質になり、現在は歴史になった。ゾルガーは最初苦痛にみちた痙攣と共に（この瞬間にはもちろん言語はなかった）、その後は落ち着きかつ客観的に、そこで見たものを、それが再び消え去るまえに確定的なものにするために書き留めた。(S. 176f.)

普遍的な法則がないのなら、少しずつ自分個人の法則を考えだそう。自分が従わなければならない法則を。今日のうちにも、その法則の最初の文を見つけよう。》(S. 169)

「法則」は明らかに他者との関わり、あるいは世界への参加という肯定的な意識と結びついている。それは、隣人宅から家に帰り、主人公が一人ベッドの中で、多分長く没交渉だった自らの子を思うことで、己の再生を願う気持の延長である。

そのうえ彼は、あえて自分の子のことを考えた。それは何年ものあいだ不可能なことだった。はじめて試みたときは、すぐに頭が石のようになってしまったものだった。(中略)しかし、この自分自身への共感^{共感}は正しいものだった。なぜなら、ある確信への希望が感じられるようになったからだ。その確信とは、彼に単なる不意の瞬間以上に長く最愛の子のことを思う形式を与えてくれるように思えるものだった。《再会したら、あの子のことを賛美しよう。》／感謝の気持ちを以て、彼は掛布に身を包んだ。彼を現実のものにしたのは、子供と女たちだった。夢の中で、アフロディーテが海から立ちのぼり、彼の横に身を横たえた。一晩中、二人は静かに並んで横たわったままでいた。目には目が、口には口が重なりあっていた。(S. 152)

『帰郷』以前の作品の主人公たちが、自己の感覚や意識にきわめてネガティブな形象を見出しているのに反して、ここに示されているゾルガーのそれは、この上なく肯定的な表象として現われている。プロッホにしろ、コイシュニクにしろ、彼らは何とか自己の実在性を確認するためだけに、言わば精神分裂症的な自己執着に明け暮れ、肯定的に他者と関わる余裕はない。自己の感覚や意識への執着は彼らのそれと同質でも、ゾルガーにはより積極的に世界(＝他者)に関与しようという肯定的な意志が存在する。その意味でゾルガーは、ようやく物語の最後で淡いブルーの上着と黄色の靴を着用して、ゆるくしめたネクタイを揺らしながら確固とした目的意識を持って、パリのオペラ広場を横切るコイシュニクが放つ束の間のポジティブな形象を、より確実かつ継続的なものにしていけると言える。

こうした肯定的な意味での世界への参入と他者との関与への意志、ならびにそれを持続させることこそが、肯定的な瞬間として啓示される「法則」なのである。

そしてこの「法則」は、まずはゾルガー(＝ハントケ)個人の問題に関わるものとして現われる。それは、これまで他者と対立的な関係しか持ちえなかった彼が、自ら世界との「和解」を求め、他者と共に「幸福」を追求する意志を実現するためのものである。「和解」への意志を、ゾルガーは隣人に以下のように告白する。

わたしはアウトサイダーでいたくありません。わたしには自分が群衆の真ん中で歩くのが見え、公正でいると確信できます。そのうえ、わたしの死を望んだ人々についても親しみのこもった夢を見、しばしば持続的な和解への力さえ感じます。わたしが調和や^{シンテーズ}統合や明朗さを望むのは不遜でしょうか？ 完全無欠や完璧は、わたしの強迫観念でしょうか？ わたしはより善くある、いいえわたし自身であることが自分の義務だと感じます。わたしは善良でありたいのです。(中略)わたしは今日、救済のことを想起し

ない状態は、ハントケにとっては「死」そのものである。つまり、作家の「死」とは自らの言語を喪失した状態を意味している。ゾルガーを突然襲った「空間禁止」は、作者ハントケにとってはまさにこの「言語喪失」と同義なのである。「書くこと」の困難さを説明する文脈で、ハントケ自身はそのことを以下のように説明している。

書き始めはいつも——そう、本当にそうなのですが、書き始めるときはいつも、自分には書く権利なんてないという感覚に襲われます——それは奇妙な感覚で、統一的なものを主張すること、つまり自分にとってそれがまさに書くということである、という意味において書く権利など自分にはないという、とても醒めた感覚です。(中略)／それは『ゆるやかな帰郷』のなかで空間禁止として語られていること、つまり、もはや何ものも有効ではない、何ものも叙述可能ではないということです。どのような空間も、もはや叙述できない、叙述可能になる空間がもはやまったくないという状態です。(中略)／それは多分、言語喪失に対する不安なのです¹⁷⁾。

ここに、『帰郷』の主題が持つ二義性、つまり物語そのものの主題の地平と作家ハントケ個人にとっての表現形式の地平とが、物語のなかで互いに重なり合っているという意味での二義性が、明瞭にその姿を現わしていると言える。(ちなみに、この「言語喪失」のモチーフはすでに、72年に発表された『満ち足りた不幸(“Wunschloses Unglück”)]の中に登場している。母の死を受けて、その母について書きたいと思う語り手は、墓地の裏手にある森の木々の現前性を目の当たりにして語るべきことばを喪失する危機に襲われる¹⁸⁾。『帰郷』において「敷居」や「空間禁止」との関連で暗示される「言語喪失」が、『満ち足りた不幸』のその発展形であることは間違いない。

では、ゾルガーにとって生きることは、そしてハントケにとって書くとは一体何を意味するのか。次に考えるべきは、そのことである。

Das Gesetz: 「生きること (=書くこと)」の法則

『帰郷』の第三章には、「法則(Das Gesetz)」というタイトルが与えられている。主人公ゾルガーにとっての生きることの意味、そして作者ハントケにとっての書くことの意味を探るには、この「法則」の意味を明らかにする必要がある。

この「法則」ということばは、ゾルガーがニューヨークに向かう夜間飛行の中で、長いこと疎遠であった兄弟姉妹のことを次のように思うところで現われる。

彼は《自分の人々》のことを思い、間もなく彼らに会おうと計画を立てた。彼は、もはや決して遅すぎることのないようにと願った。(学校時代の友人だった)スキー・インストラクターの死によって、ゾルガーは自分の出自である家族のことをそれぞれ再び実感できるようになっていた。(中略)／飛行機の飛行音が変わった。(過去を思う)機内の雰囲気は旅行者から消え去った。彼は無言のまま話し続けた(まるでそれを書いているかのように、一つひとつ考えながらことばを置いた)。《それで? わたしにも有効な

に言えば、叙述可能な空間を失うことは、世界を失うことを意味する。そうした喪失の状態を、ゾルガーは「空間禁止 (Raumverbot)」と呼ぶ。

『帰郷』はそうした意味でまさに自らの「空間」を獲得する意志を肯定的に語る作品であるが、第二章のタイトルとその中間部だけにこの否定的な概念が登場する。それは、主人公がバスから降りてきた見知らぬ女性に声をかけ、拒絶されたときに突然彼を襲う。

しかしそのとき、ゾルガーはその女性に二三步近づきながら、「金なら持っているさ」と思った。すると大地は、あたかも彼がすでに転倒したかのように、自分の足下で明瞭に感じられた。(中略) 転落は突然だった。空虚はまったく予期していなかった。そのときの思いは、「誰も自分がどこにいるのかを知らない」という代わりに、「自分にはもはや誰もいない。みんなには、それぞれ誰かがいるのに」というものだった。(S. 137)

この喪失感を、ゾルガーは以下のように「空間禁止」という概念で説明する。

彼は立ち止まったまま、計画していた論文はもはや完成することはできないだろうと感じた。多分彼は論文を書くことはできるだろうが、「もはや誰にも聞いてもらうことなどないだろう」。「カオスではない!」、が唯一彼が言うことができることだった。それから、あたかも言語を喪失した説教壇のように、歪んだかと思うと消え去ってしまった空間から、彼は音を立てて外にとびだした。／「空間禁止!」(S. 138)

突然突きつけられた「空間喪失」の感覚が、ゾルガーを「帰郷」へと駆り立てる。その顛末を、彼は隣人に以下のように語る。

「今日、わたしから一挙に力が消え失せてしまい、大地の形態に対する自分の特別な感覚を失ってしまいました。一瞬にして、わたしの空間はどれも命名不能となり、命名する価値もなくなってしまいました。」それから、彼は声を高めて言うことができた。「わたしの言うことを聞いてください。わたしは破滅したくない。あの大きな喪失の瞬間、わたしは反射的に故郷に帰ることを考えました。それはある国への帰郷でも、ある特定の地域への帰郷でもなく、生家にもどることです。しかし同時に、わたしはこれからもずっと異境にとどまり、自分にとって近すぎない何人かの人々に囲まれていたいと思いました。」(S. 146)

主人公ゾルガーが自らに生きる力を与えてくれる新たな「空間」を求めて「帰郷」を決断するように、作者ハントケは「書くこと」を可能にしてくれる新たな「空間」を探求するために「帰郷する」のである。だが、それは文字通りの帰郷、つまり個人史的な概念としての故郷への帰還ではなく、一個の人間ならびに一人の創作者としての「わたし」が生きるべき「空間」としての「故郷」への帰還を意味している。(作家ハントケにとっては、坂口安吾が言うところの「文学のふるさと」への帰還と同義であると言ってもよいのかもしれない)

作家であるハントケにとって、生きるとは即ち書くことを意味している。書くことができ

ことで、ゾルガーは自らが何であることを確認するのである。

ゾルガーは熱狂的にはなく、次第に自分自身を自分自身の姿として感じることで、それくらい切実に大地の姿を把握することで、それが単なる気紛れや雰囲気によって陥ってしまいそうな大きな無定形 (Formlosigkeit) に対して一線を描くことによって、実際にこれまで自分の魂を救済してきた。(S. 16)

換言すれば、ゾルガー即ちハントケは、自然 (= 事物) を包摂する空間を叙述することによって、自らの内的な経験や感覚を言語化し、それを己のみならず他者 (= 読者) にとっても具象化するのである。その意味で、ハントケが叙述する自然 (= 空間) は自らの感覚と意識を映し出す鏡であると同時に、それを越えなければ他者へと到達することの出来ない「敷居 (Schwelle)」を意味している。「居間に入るとき、彼はまた世界の営みの中にいるという《敷居》を体験した」(S. 141)、そして「何と美しい敷居か！」(S. 142) というときの「敷居」は、文字通りの意味を超えて、己と他者を結ぶために越えるべき障壁としての「空間」のメタファーとなる。このように自己と他者を媒介する「空間 (= 自然・事物)」のイメージは、『帰郷』において再三再四現われる中核的な概念である。ハントケ自身は、「敷居」としての「空間」を以下のように説明している。

わたしが、みんなが言うように無意識のうちに自分の頂点へと急ぎすぎるとき、そのようにちょっと立ち止まることが、たとえ物的なものでなくても、普通なら煩わしいかもしれない敷居を作ってくれるのです。つまり、ただ立ち止まるだけ、あるいは速度をゆるめるだけで、敷居ができるのです¹⁵⁾。

「空間 (= 自然)」を言語的に捉える困難を越えてこそ、主人公ゾルガーは自己の実在を確認し、また作者ハントケは自らの中に生起する感覚と意識を言語化することによって、それを外界へと「中継する (übertragen)」可能性を獲得するのである。

それ (自然) が自分の経験を叙述可能にしてくれるのです。またそれは、経験を外界へと中継するのを助けてくれます——《中継する》は正しいことばだと思います——。つまり、口をきかない諸々の感覚を具象化によって力強い言語にするのを助けてくれます。(中略) / ええ、それによって再び感覚が発見されます。もしわたしが感覚をただ書き並べたとしたら、何も存在しないでしょう。事物なくしては、感覚は言語になりえないのです。——しかし、感覚がなければ、何も始まりません。感覚がすでに始まりなのです。問題は、感覚が自らを躍動させてくれる始まりと出会わなければならないということだけです¹⁶⁾。

自然の空間は地質学者であるゾルガーにとっては研究の対象だが、彼はそのために川の蛇行や地形などを詳細に観察し、叙述するのではない。彼にとってそれは、世界そして他者と交通するための言語を獲得するため、つまり生きるために必要不可欠なものなのである。逆

る。

だが同時に「至福」を求める物語は、作者自身が如何にして肯定的な語りを実現するかという、自らの新たな創作形式への試みの場でもあり、後の『サント・ヴィクトワールの教え』の中での、セザンヌの『腕を組む男』を前にして、「わたしが誰かを称賛し賛美できるような解放」⁹⁾に満ちたポジティブな表現形式への第一歩でもある。芸術表現にとっては形式こそ内容であり、内容は形式そのものであるというロシア・フォルマリズムの芸術観に立つハントケにとって¹⁰⁾、ポジティブな主題はポジティブな形式によってこそ叙述可能なのである。そしてポジティブな内容は、読者に「主人公の体験や眼差しや耳、それにその思考に自らを投影することができるように」するために、世界を肯定的に示す。それと同時に、ポジティブな形式を実現することこそが、作者自身にとっては「至福」を意味するのである。

こうした二重の意味において、主人公ゾルガーは作者とともに「至福」を求めて「故郷」へと「帰還」しようとするのである。

「空間禁止」

主人公ゾルガーと共に作者ハントケが追求する「至福」とは、誤解を恐れずきわめて簡潔に言い切るとすれば、すでに上で指摘した通り、「それがわたしだ！」という意識と生き方を獲得することであり、その意識に立脚しつつ他者と己のいずれをも肯定しようとする自己を発見することを意味している。

そのような「自己の発見」へのプロセスを詳細に叙述しているのが、『帰郷』の物語なのである。言わば本当の自分に至るまでの物語は、一見発展小説(Entwicklungsroman)の形式を踏襲しているようであるが、ハントケ自身が正当にそれを否定している通り、主人公ゾルガーは物語のなかで成長したり、「根本的に変化したり」、あるいは「別の人生を歩み」¹¹⁾始めたりするわけではない。つまり、ゾルガーが長い内的叙述を通して示すのは、自らが客観的世界と対峙あるいは交流することで発展する物語ではなく、世界を主観的に体験することによって、すでに自らの内に存在していた「自己」を発見する物語なのである。その意味において、『帰郷』は「発見小説(Entdeckungsroman)、しかも形而上学的な発見小説」¹²⁾であると言える。作者ハントケがゾルガーに求めているのは、表現主義のランダウアーが言う「成りゆく人間(werdende Menschen)」のように「おまえ自身になれ(Werde was du bist)」¹³⁾ということではなく、あくまでも「おまえ自身を発見せよ(Entdecke was du bist)」¹⁴⁾なのである。

200 ページに及ぶゾルガーの体験談は、あくまでも主観的な知覚と、それによって誘発される意識の一方的な吐露に終始している。ゾルガーが体験する世界は、とりわけ自然の事物や人間を取り囲む「空間(Raum)」である。後の『サント・ヴィクトワールの教え』においてより明瞭に理論化される絵画表現的な「自然や事物を包摂する空間」の叙述は、『帰郷』にとって新たな表現形式の試みだけではなく、物語の主題そのものをも意味している。画家がそこにある自然や事物や人間を描くことで、自らの内的意識を捉えて表現するように、ゾルガーは地質学者としての仕事の領域を超えて、自らの内に生起する感覚を自然(=空間)の事物を言語化することによって実体化しようとする。つまり、事物がある空間を叙述する

身が構築してきた合理的な近代文明による自らの疎外と闘ってきたと言える。70年代半ばまでのハントケの文学も、アドルノの思想がそうであったように、そうした近代への否定的批判精神に貫かれている。その意味では、その時期までのハントケ文学は、まさに近代文学の最後のステージの端に位置していたと考えてよいだろう。それは言い換えれば、ハントケの文学が、1966年の「47年グループ」の会合における文壇デビューの当時、まだ自身が鋭い批判の矛先を向けていた所謂政治社会派的文学と、表現形式の違いこそあれ同じ近代文学の系譜に位置していたということを意味している。

しかし、ハントケは1979年の『帰郷』によって、否定的な近代批判の領域から脱却し、新たな創造的かつ自律的な文学世界を構築しようとしたのである。その意味において、「内面世界への逃避」や「新たな主観主義」、あるいは「ネオ・ロマン主義」などと定義づけられることもある『帰郷』以降の作品を、「近代後の文学」⁸⁾に属するものとする考え方には一定の妥当性がある。

ゾルガーは、現実世界で自己を喪失してしまったという思いに襲われるコイシュニクの感覚や、自己をネガティブな形象としてしか実感することができないプロッホの意識を克服して、「それがわたしだ!」(“Das bin ich!”)(S. 203)と云うようなポジティブな状態を獲得しようと決意したと言える。この自己の発見とも言える状態こそ、「至福(Heil)」であり「救済(Erlösung)」(S. 147)を意味しているのである。換言すれば、それは自由の代償として近代の人間に運命づけられた孤独や疎外の状態を克服することである。とは言え、克服するとは、人間がそうした状態にいることを否定したり無視したりすることではない。それは、あくまでも孤独で疎外された人間であるという認識を持ちつつ、つまり自らの出自である近代を許容しつつ、さらにそれを呪う代わりに、他者と己のいずれをも肯定しようような生き方をすることを意味している。

物語の底流を成すこの肯定的な姿勢は、東海岸へ出発する前夜、隣家の夫妻を訪問したゾルガーがきわめてポジティブな感覚に満たされ、他者との新しい世界に受容されることを心から願うところに端的に表れている。

そうすると一台の車がゾルガーの横に止まり、そこから隣人の声が両者に共通の言語で響いてくるのが聞こえた:「ヘイ、お隣さん」。(中略)すでに心から何かを待ち望んでいたため、彼にはその車が《文字》のように見え、自らの頭蓋骨が《期待のアーチ型》のように思えた。一人では家に行き着けなかっただろうと想像しながら、彼は自分の手をその男の肘にかけた。かつて一人の人間が、誰かにこれほどの質感を以て存在したことがあっただろうか。——《神のような他者。》／ゾルガーは隣人の後についてその家に入った。あたかも今それが特別な場所であるかのように、彼は控えの間に長いこと佇んだ。居間に入るとき、彼はまた世界の営みの中にいるという《敷居》を体験した。／彼は夫人と子供に向かって何回も「わたしです」と言った。(中略)この家には、あるべき生活を謙虚に営む一つの家族が暮らしていた。そして彼は、事物が美しく、人間たちが無垢であるこの家に属していた。(S. 140f.)

「至福」への欲求

ゾルガーはすでに、自分と親しくなった何人かの人間より長く生き、もはや思慕も感じなかった。しかし、しばしば無私の生存欲を感じ、ときおり動物のようになって臉を圧迫する至福への欲求を感じた。(S. 9)

他の作品同様、『帰郷』の冒頭のフレーズは十分な明瞭さと同時に、不可解な謎によって、読者を否応なく物語世界のまっただ中に引き込む。明瞭なのは、これから語られる物語が「至福」を求めるものであることであり、謎なのは、「無私」と「生存欲」といった一見矛盾しあう概念が親和的な概念として措定されていることである。同じことは、「思慕」の否定が「至福への欲求」と並列されていることにも言える。こうした矛盾は、これまでの作品と同様にハントケが描く人間の感覚や意識の根源を成すものであり、主人公の知覚および意識構造が精神分裂症的であるという指摘の根拠もそこにある。

しかし、こうした矛盾する感覚と意識を基調とする物語は、作家自身が「それ（『帰郷』）はまさに心理的な物語ではありません⁵⁾」と言うように、統合を失調した人間の心理そのものを精神分析的に描くことを意図しているのではなく、「しっかりとした輪郭を持った、しかしまったく透明な主人公」を通して「世界を透かして現わすため⁶⁾」の物語なのである。つまり、ほとんど性格づけが成されていない主人公の感覚と意識の連続だけから成立しているように見える、一見心理的かつ抽象的な物語は、実は以下のように世界の「構造」を表出させる作者の意図に貫かれている。

主人公がひとつのキャラクターになることと、そこに心理学が入り込むことを如何に回避するかも、わたしの大きな問題でした。わたしはゾルガーによって人間を包摂する大きな構造（中略）を創作しようとしたのです。しようとしたということではなく、それはむしろわたしの本能なのですが、誰もが主人公の体験や眼差しや耳、それにその思考に自らを投影することができるようにしたかったのです⁷⁾。

世界を投影する主人公という意味では、『帰郷』のゾルガーは『ゴールキーパーの不安』のブロッホや『真の感覚の時間』のコイシュニクと同じ役割を担っている。しかし決定的に違うのは、すでに上でも触れたが、ゾルガーがブロッホやコイシュニクがしたように、世界の秩序の自明性を、自らの感覚と意識の歪みを通して混乱させ、懐疑することに主眼をおくことはしないところにある。ゾルガーはむしろ、ブロッホやコイシュニクが暴いた混沌とした事物とことばの関係、つまり日常の言語世界とその虚偽性に苦悩する人間を如何に修復することができるかという可能性を追求する。自らの主人公が暴いてきた世界の虚偽性や、近代の繁栄の中での個人としての人間の疎外を前にして、ハントケは如何にしたらそこでポジティブに生きることが可能かを探求する物語を創作しようとしているように見える。

その意味において、ハントケの文学が広い意味での近代文明批判を出発点としていることは疑いようがない。人間の精神を謳歌し、自立的市民の価値を称揚しようとした近代文学の古典主義や、自己の自由と実現を求めたロマン主義以降、近代人は多かれ少なかれ、自分自

な文学的境地であることは間違いない。それは、そのタイトルが暗示しているように、本来の場所、言わば自らの文学の「故郷」への帰還を意味している。しかし、「故郷」とはいったい何処にあるのか。ハントケは何処を目指して、どのように帰郷しようというのか。こうした問いかけに自ら答えるかのように、作者自身の分身である主人公ゾルガーは帰郷の物語をあくまでもゆっくりと語る。

語り手ゾルガーの内省的な物語、それは目の当たりにする空間（＝自然）を自らの感覚と意識との連合のなかで言語化する（叙述する）ことによって生み出す物語であるが、その物語で語られる「帰郷」には、二つの異なる次元が絡み合っている。一つは劇的な要素がほとんどない物語のゆるやかなストーリーに明示される「帰郷」、つまり地質学者である主人公ゾルガーが客人として滞在しているアメリカ北西部のアラスカから、西海岸の都市（サンフランシスコ）と東海岸の都市（ニューヨーク）を経由して、そこから所謂「故郷」であるヨーロッパへと出発するという意味での文字通りの「帰郷」である。この「帰郷」に含意されるのは、ヨーロッパが（善し悪しは別として）作家ハントケとその語り手にとっては回避できない文学の淵源であるという事実の認識である。それはつまり、直接的に物語るべき対象ではないにしても、オーストリアとドイツを含むヨーロッパ（の歴史、社会そして人間）こそが自らの文学的現実の逃れようのない出発点であり、ハントケ文学のリアリティの土台であることを意味している。ハントケの以下のことは、それを十分に示唆している。

そもそも『ゆるやかな帰郷』は、この構想が頭に浮かび始めた頃は、『オーストリアの奥深くへ』というタイトルになるはずでした。わたしは、眼差しが様々な宗教や国家や風景の原形に回帰して、この国の最深部に到達するような大部の話を書くつもりでした。しかし、個別の事象をつなぎ合わせてそうした奥深いオーストリアを想像したり、あるいは自由に夢想したりすることはまったくできませんでした³⁾。

表現対象としてのヨーロッパへの回帰という文学の内容と関わる意味とは別に、自分はどうのように、何のために、そして何について語るべきなのかという文学の形式、つまり書くという行為そのものの意味を根源的に問い直すことが、「帰郷」に含意されたもう一つの意味である。

それは、75年の『真の感覚の時間』までのほとんどの作品に見られる「憎悪」の感覚を基調とするネガティブな文学世界に対する決別を意図していると言ってもよい。その挑発的かつ否定的な文学的態度を以て、読者と文壇のいずれに対してもあえてネガティブな作家像を植えつけようとしたかにみえるハントケは、『帰郷』によって明確にネガティブな文学世界を克服する意志を表現しようとしたのである。

わたしは、ネガティブなものに飽き飽きしているということだけは言えます。（中略）もちろん、日々わたしはたくさんの人間を軽蔑しています。しかし、それを表現することばの持ち合わせはありません⁴⁾。

ペーター・ハントケは何処に向かって帰郷するのか？

—— ハントケ文学の転換点としての『ゆるやかな帰郷』に関する考察 ——

服 部 裕*

“Publikumsbeschimpfung”（『観客罵倒』）や “Ich bin ein Bewohner des Elfenbeinturms”（『わたしは象牙の塔の住人』）などのタイトルが象徴する通り、その挑発的な文学表現のおかげで、ある種ポップアートの「スター作家」¹⁾として位置づけられていたペーター・ハントケは、1979年の“Langsame Heimkehr”（『ゆるやかな帰郷』）によって、その後の文学スタイルを決定づけることになる新たな方向に大きな一歩を踏み出す。

それまでの作品が、例えば“Kaspar”（『カスパー』）や“Die Angst des Tormanns beim Elfmeter”（『ゴールキーパーの不安』）などの主人公のように、日常の言語使用への癒しがたい違和感によって既成の社会秩序や言語使用の自明性を懷疑し破壊する、言わば否定的表現を通して言語批判的なテーマを展開しているのに比べて、『ゆるやかな帰郷』（以下『帰郷』）の主人公ゾルガーは、様々な困難を感じながらも終始自らの世界を構築しようという肯定的な意志を明瞭に意識化している。作家自身は、この新しいコンセプトを以下の通りに説明している。

わたしにとって、（これまでのように）実証的なもの、つまり事物を青少年期の願望と共に捕捉するだけでは十分でないのです。また、『ゴールキーパーの不安』で単に市街電車のことを叙述したり、新聞を読む人や映画に行く人、つまりあちこちをほっつき歩いたり、あるいはあれこれと道に迷う人の午後のひと時を言わば歴史家のように表現することには、もはや意味がないのです。そうした表現への情熱はもうありません。その代わりに、それはこれまでのものより掴みづらいものなのですが、新たな情熱が生じました。それは—— どう言ったらよいのでしょうか——（長い間）、それは、そうあなたもすでに気づいたように、空間について語ることに価値を見いだす情熱なのです。空間は、それ自体について語らせることを簡単には許しません。つまり、人を心地よくし、しかもそれなしには己を越えて行くことができないような空間には、それについて語ることが可能になる瞬間がきわめてわずかしかなのです²⁾。

つまり、『ゴールキーパーの不安』の主人公ブロッホのように現実世界を異化することによってそれをネガティブに叙述するのではなく、物語るのがきわめて困難な「空間」、それも人間を「心地よくする」空間をポジティブに語ることが、ハントケが向かおうとした新たな

山本陽子

- A : 1 (論文)「柳瀬正夢「五月の朝と朝飯前の私」の制作動機 ―モダンボーイとカミソリー」『明星大学研究紀要』[人文学部・日本文化学科] 第19号 pp.69-78 明星大学日野校 3.31
- 2 (論文)「神を見ることと描くこと―石清水八幡宮の事例を中心に―」伊藤聡編『中世文学と隣接諸学』3「中世神話と神祇・神道世界」pp.133-152 竹林舎 4.1
- 3 (論文)「「大人げないもの」が発達するとき―相似形としての絵巻とマンガ―」『美術フォーラム21』第24号〈特集〉「漫画とマンガ、そして芸術」pp.23-28 11.30
- B : 1 (学会発表)「祟る御衣木と造仏事業―なぜ神木で仏像を彫ったのか―」於東アジア恠異学会第70回定例研究会(特別企画「中世美術と恠異」)於京都大学東京オフィス 1.22
- 2 (学会発表)「武者表現の源流―合戦絵巻を中心に―」於民族藝術学会第69回東京研究例会(於お茶の水女子大学) 10.15
- 3 (報告)共同研究報告「明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究とWEB公開、教育実践への応用」「2 明星大学本『徒然草』の挿絵について」『明星大学研究紀要』[人文学部・日本文化学科] 第19号 pp.169-174 明星大学日野校
- 4 (報告)明星大学平成22年度特別研究費(共同研究助成費)研究成果報告書『明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究とWEB公開、教育実践への応用』(明星大学平成22年度特別研究費(共同研究助成費)代表研究者 山本陽子)「明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究とWEB公開、教育実践への応用」について」pp.5-6、「明星大学本『ふんしやう』絵巻の挿絵について」pp.24-26、「明星大学本『新曲』の挿絵について」pp.27-30、「明星大学本『徒然草』の挿絵について」pp.36-44
- 5 (学会活動)日本宗教文化史学会学会誌『宗教文化史研究』編集委員
- C : 1 (公開講座)「華嚴縁起絵巻を読み解く―お坊さんが作ったラブストーリー―」於八王子学園都市大学いちょう塾公開講座 5.14
- 2 (講演)「『平家物語』等の絵画表現について」於絵入り本国際集会 2011.8 8.26
- 3 (公開講座)「平家物語の絵画について」於明星大学全学共通教育公開講座「平家物語の虚実」 10.22
- 4 (展示解説)「明星大学所蔵絵入り和本・絵巻展示」於絵入り本国際集会 2011.8 8.26
- 5 (展示解説)「明星大学所蔵絵入り和本・絵巻展示」於説話文学会9月例会 10.1
- D (教育活動)
- 1 『徒然草』の文章を読んで挿絵を描き、明星大学本『徒然草』の挿絵と比較する授業(於造形芸術学部)6~7月

以上

- C : 1 (講演)「世界から見た日本の宗教」、明星大学人文学部日本文学学科公開講演、12.3
- 2 (セミナー)「漢文(『小右記』講読会)」、ロンドン大学アジアアフリカ学院(SOAS)の教員などを対象に漢文購読を指導、2011.5.5から2012.3.10まで全23回
- D : 1 明星大学特別研究期間制度によりロンドン大学アジアアフリカ学院(SOAS)にて在外研究、2011.4.9-7.4、8.10-2011.3.15
- 2 (学術調査)ベルギー・オランダ・ドイツ・ギリシャ・イタリア・フランス・スペインの宗教史跡調査、2011.12.16-2012.1.17
- 3 (学術調査)エジプトの宗教史跡調査、1.27-31
- 4 (学術調査)ロンドンおよび南イングランドの宗教史跡(ワークショップ参加者に案内)2.26-28
- 5 (学術調査)イスラエルの宗教史跡調査、3.8-12
- 6 (学術調査)ニューヨークの博物館調査、3.15-17
- 7 (学術調査)メキシコの宗教史跡調査、3.18-25
- 8 (学術調査)京都・祇園祭、7.16-17、7.26
- 9 (学術調査)国立公文書館『左経記』調査、7.20
- 10 (学術調査)神宮文庫『左経記』調査、9.8-9
- 11 (学術調査)近江地方の磐座祭祀遺跡と神像調査、11.15-18
- 12 (学生引率)「宗教文化研究会」「平安時代史研究会」「印刷出版文化研究会」合同見学会、神奈川県立博物館「総持寺」展、4.22
- 13 (学生引率)「宗教文化研究会」「平安時代史研究会」「印刷出版文化研究会」合同見学会、世田谷美術館「白洲正子」展・印刷博物館「空海」展、4.23
- 14 (学生引率)「宗教文化研究会」「平安時代史研究会」「印刷出版文化研究会」合同見学会、東京国立博物館「ブッダ」展、6.5
- 15 (学生引率)「宗教文化研究会」「平安時代史研究会」「印刷出版文化研究会」合同見学会、東京国立博物館「ブッダ」展、6.5
- 16 (学生引率)「日本文化研究」の授業、東京国立博物館「空海」展、7.22
- 17 (学生引率)「宗教文化研究会」「平安時代史研究会」「印刷出版文化研究会」合同合宿、明星学苑八ヶ岳山荘、8.15-18
- 18 (学生引率)「日本文化研究」の授業、京都・奈良、8.28-9.2
- 19 (学生引率)「宗教文化研究会」「平安時代史研究会」「印刷出版文化研究会」合同見学会、鎌倉(円覚寺・建長寺・鶴岡八幡宮・鎌倉国宝館)・金沢文庫、11.3
- 20 あかりの会(大田区)講師
- 21 小右記講読会で『小右記』長和二年条を『御堂関白記』などと比較しながら読む
- 22 明星大学三橋研究室で『麗気記』後半諸巻の註釈(出版準備)作業を進める
- 23 玉葉講読会(於聖心女子大学)で『玉葉』養和元年閏二月条の読解・註釈を担当

2 ゼミ報告

今年度も、3年ゼミは『古今集』秋上部を選び、『両度聞書』・『栄雅抄』・『顕註密勘』等の古注釈、近現代の注釈、類歌・影響歌等の調査を通して、和歌読解力向上に努めた。毎回二首ずつ進むので、ゼミ生は年間七〜八回当たることになる。年度末に四〇〇〇字以上のレポートを作成させる。

丸山正義

- A : 1 「ブルーストの音楽——『音楽家ブルースト』再読」、明星大学研究紀要【人文学部・日本文化学科】第19号、2011. 3. 25. pp. 33-43.

三橋 正

- A : 1 (単著)「柱と神道—自然崇拝から国家宗教へ—」、『悠久』、pp. 58-70 (13頁)、3. 31
- 2 (単著)「二〇一一年 出エジプト記」、『明星大学紀要—人文学部日本文化学科—』19号、pp. 129-161 (33頁)、3. 31
- B : 1 (企画・総合司会・発表) ワークショップ「神仏習合再考—日本における諸宗教の統合— (Combinatory Practices in Japan: Rethinking Religious Syncretism)」(英語)、CSJR (所長 Lucia Dolce 教授) と共同で企画した日欧研究者によるシンポジウム、第一日目の基調報告“The Formation of Shinto as a Combinatory Religious System”、第二日目の総合司会、第三・四日目のエキスカージョンを企画、於ロンドン大学アジアアフリカ研究学院 (SOAS)、2. 23-24
- 2 (企画・総合司会・発表) パネル「平安前期の神祇と仏教」、日本思想史学会 2011 年度大会、趣旨説明・司会および「触穢規定の成立と密教経典」を発表、於学習院大学、10. 30
- 3 (コメンテーター) パネル「災害と神道 (古代)」、神道宗教学会学術大会、於國學院大學、12 : 4
- 4 (学術発表)「古記録の書写と活用—古記録文化を理解するために—」、共同研究「日記の総合的研究」、於国際日本文化研究センター、12. 18
- 5 (研究活動)『小右記』註釈と平安時代データベースの作成」、文科省科学研究費 (基盤研究 C)、研究代表者
- 6 (研究活動)「日記の総合的研究」、国際日本文化研究センター、共同研究員
- 7 (学会活動) 小右記講読会代表
- 8 (学会活動) 日本仏教総合研究学会評議委員
- 9 (学会活動) 戒律文化研究会委員
- 10 (学会活動) 平安・寺院史研究会運営委員
- 11 (学会活動) 日本宗教史懇話会サマーセミナー呼びかけ人
- 12 (学会活動) 神道宗教学会「神道宗教学会賞」選考委員・監事

大橋敦（立正大学文学部非常勤講師）

「明治期における書き下し文の役割」

新田一郎（東京大学法学部教授）

「明治前期の裁判資料：民事判決原本データベースの紹介」

3) 第四回幕末明治研究会

12月3日（土）於明星大学27号館1001室

発表タイトル

丹羽みさと（国文学研究資料館機関研究員）

「幕末の魯文について一狐と吉原 を中心に一」

塩谷菊美（平塚商業高校定時制教員）

「『歎異抄』による親鸞像の形成」

3 学内特別研究費に基づく日本文学科所蔵目録作成（勝又基準教授主導、青山英正准教授・柴田雅生教授と共同作業）

現在、作成中。平成23年度内完成を目指す。

4 評論・論説（連載）

1) 「保田與重郎と近代・日本・古典3 書くことへの欲望あるいは剽窃の精神 初期の文章をめぐって(2)」(『表現者』34 平成23年1月) 132～137頁

2) 「保田與重郎と近代・日本・古典4 書くことへの欲望あるいは剽窃の精神 初期の文章をめぐって(3)」(『表現者』35 平成23年3月) 96～101頁

3) 「保田與重郎と近代・日本・古典5 小説『やぼん・まるち』と破局の問題」(『表現者』36 平成23年5月) 168～173頁

4) 「破局・古典・復興 精神の危機を乗り越えるために」(『表現者』37 平成23年7月) 138～144頁

5) 「保田與重郎と近代・日本・古典6 古典への道 迂回路としての朝鮮①」(『表現者』38 平成23年9月) 116～121頁

6) 「保田與重郎と近代・日本・古典7 古典への道 迂回路としての朝鮮②」(『表現者』39 平成23年11月) 130～135頁

D: 1 学術調査

科研による島原市立図書館松平文庫・祐徳稲荷神社中川文庫の文献調査を平成23年8月17日～20日にかけて行った。参加者は、前田の他、研究協力者（岡崎真紀子・静岡大学人文学部准教授、内田滢子・お茶の水女子大学・研究員、松本麻子・青山学院大学・非常勤講師、渡瀬淳子・早稲田大学・非常勤講師、松本大・大阪大学大学院博士課程）。祐徳稲荷中川文庫では、佐賀大学名誉教授井上敏幸先生のも多大なるご助力を得た。

その他、科研の研究会を、明星大学前田研究室を会場として、2月20日、6月5日、7月23日、10月22日の計四回催した。3月の研究会は震災のため中止のやむなきに至った。内容は、科研のデータベース報告、花鳥余情講読、研究発表等である。参加者は全員研究協力者である。

- 2 編著：前田雅之編『中世文学と隣接諸学5 中世の学芸と古典注釈』（竹林舎 平成23年9月 629頁）

3 論文

- 1) 「僧侶の恋歌（2）勅撰集編（中）一八代集（『後拾遺集』～『詞花集』）所収歌の表現分析」（『明星大学研究紀要—人文学部—日本文化学科』19号 平成23年3月 1～18頁）
- 2) 「和歌が生み出す〈公共圏〉—室町期武家の和歌詠作から—」（阿部泰郎・錦仁編『聖なる声』三弥井書店 平成23年5月 57～92頁）
- 3) 「『花鳥余情』—兼良の源氏学—リアリティーを担保する可視的存在—」（『中世文学と隣接諸学5 中世の学芸と古典注釈』竹林舎 平成23年9月 496～527頁）
- 4) 「唐物としての黄山谷」（河添房江・皆川雅樹編『アジア遊学 唐物と東アジア』勉誠出版 平成23年11月 114～132頁）

B：1 学会シンポジウム企画・運営

説話文学会149回例会「説話と室町文化」（平成23年10月1日、於明星大学）講師 恋田知子（国文学研究資料館・機関研究員）「浄土宗談義と説話・物語草子」、松本麻子（青山学院大学・非常勤講師）「連歌から俳諧へ」、堀川貴司（慶應義塾大学斯道文庫）「禅林の抄物と説話」、司会進行、前田雅之（明星大学）

2 雑誌編集

日本文学協会刊行雑誌『日本文学』編集長就任（平成23年12月から。二年任期）

3 社会的活動

司法予備試験考査委員（法務省大臣官房人事課）就任（平成23年10月から。一年任期）

C：1 講演

「『平家物語』は古典ではない」（明星大学全学共通教育委員会主催講演会 平成23年10月29日）

2 幕末明治研究会主催（上原麻有子准教授・青山英正准教授と共催）

1) 第二回幕末明治研究会

1月22日（土）於明星大学日野校27号館1001教室

発表タイトル

神林尚子（東京大学大学院博士課程）

「仮名垣魯文校『神稻黄金笠松』をめぐる——書肆・平林庄五郎の著作活動のあとさき」

鈴木俊幸（中央大学文学部教授）

「地方予約出版の蜜月一信濃出版会社の五年間—」

2) 第三回幕末明治研究会

6月18日（土）於明星大学27号館1001教室

発表タイトル

- 10 講演：「宇佐八幡の神託と清経の死」、大槻能楽堂自主公演～能の魅力を探るシリーズ～平家物語を観る「戦のあわれ！」を語る（13）、大槻能楽堂、4.23.
- 11 講演：「能〈天鼓〉について」、第8回喜多流大牟田能、大牟田文化会大館ホール、5.8.
- 12 講座：朝日カルチャーセンター新宿校1月期公開講座「当代梅若玄祥の語る～梅若六郎家の藝と現代能楽界」（梅若玄祥氏と対談）、朝日カルチャーセンター新宿校、1.27.
- 13 講座：朝日カルチャーセンター新宿校1月期公開講座「対談で偲ぶ没後10年～六世中村歌右衛門の芸とこころ」（中村梅玉氏・中村魁春氏と鼎談）、朝日カルチャーセンター新宿校、2.28.
- 14 講座：朝日カルチャーセンター新宿校1月期講座「能をどう見るか～梅若六郎家と能楽近現代史～初世實から当代玄祥」、朝日カルチャーセンター新宿校、2.17、3.3、4.21.
- 15 講座：朝日カルチャーセンター新宿校4月期講座「能をどう見るか・獨り捨てられて老女が～能〈姨捨〉の研究と鑑賞」、朝日カルチャーセンター新宿校、6.16、30、7.7.
- 16 講座：朝日カルチャーセンター新宿校7月期講座「能をどう見るか・あら名残惜しの面影～能〈融〉の研究と鑑賞～」、7.28、8.4、18.
- 17 講座：朝日カルチャーセンター新宿校10月期講座「能をどう見るか・越天樂の唱歌の聲～能〈梅枝〉の研究と鑑賞～」、朝日カルチャーセンター新宿校、11.17、12.8、15.

- D：1 平成23年度日本文化特論Cにて学生を能楽鑑賞（鍬仙会青山能における狂言〈二人大名〉と能〈鶴〉）に誘導。7.30.
- 2 日本文化学科学生研究会「源氏物語研究会」の研究指導を通年に亘って勤める。

服部 裕

- A：1 論文：個人主義の意味 ― 近代民主主義の価値観の理解のために ― 、明星大学研究紀要、人文学部・日本文化学科 第19号、264（15）-247（32）、2011年3月
- D：1 学科学生との自主研究会である「映画研究会」を16回開催し、映画鑑賞会と討論会を14回実施した。今年度はあえてテーマ設定をせず、内外の優れた作品を鑑賞した。2011.4.～2011.12.
- 2 星友祭（大学祭）において「映画研究会」主催の映画上映会と討論会を開催した。作品は原発問題を風刺的に描いた『東京原発』（山川元監督、2002年）を取り上げ、原発政策及びそれに関係する社会状況に関して討論した。2011.10.29.

前田雅之

- A：1 単著：『古典的思考』（笠間書院 平成23年6月 395頁）

- 23 年 5 月号、演劇出版社、4.5.
- 24 随筆：「藝能百花撰・第 1 回～うけら焚く香」、『孤峰』平成 23 年 6 月号、江戸千家茶道会、6.10.
- 25 随筆：「藝能百花撰・第 2 回～仙翁の花扇」、『孤峰』平成 23 年 7 月号、江戸千家茶道会、7.10.
- 26 随筆：「藝能百花撰・第 3 回～あるかなきかにうつる朝顔」、『孤峰』平成 23 年 8 月号、江戸千家茶道会、8.10.
- 27 随筆：「藝能百花撰・第 4 回～薄の武蔵野」、『孤峰』平成 23 年 9 月号、江戸千家茶道会、9.10.
- 28 随筆：「藝能百花撰・第 5 回～吹上に立てる白菊」、『孤峰』平成 23 年 10 月号、江戸千家茶道会、10.10.
- 29 随筆：「藝能百花撰・第 6 回～神の御前に散るは紅葉葉」、『孤峰』平成 23 年 11 月号、江戸千家茶道会、11.10.
- 30 随筆：「藝能百花撰・第 7 回～八千代の玉椿」、『孤峰』平成 23 年 12 月号、江戸千家茶道会、12.10.
- 31 個人ウェブサイト「村上湛・古典演劇評論」において評論・研究・随想を通年に互り随時公開。

- C：1 文部科学省・平成 23 年度（第 62 回）芸術選奨推薦委員（演劇部門）
- 2 文化庁・平成 23 年度（第 66 回）文化庁芸術祭執行委員会審査委員（関東・演劇部門）
- 3 文化庁・平成 22、23 年度文化庁国際芸術交流支援事業芸術団体人材育成支援事業協力者会議委員（舞踊分野）
- 4 独立行政法人日本芸術文化振興会・平成 23 年度芸術文化振興基金運営委員会伝統芸能大衆芸能専門委員会専門委員
- 5 明星大学人文学部教務委員長
- 6 国立能楽堂の委嘱により国立能楽堂委嘱作品・新作能〈影媛〉（初演）の能本補綴を担当する（7.29、30. 国立能楽堂特別企画公演において上演。原作：馬場あき子、演出：梅若玄祥、出演：大槻文蔵・塩津哲生・山本東次郎・梅若玄祥ほか）
- 7 セルリアンタワー能楽堂の委嘱により、同能楽堂開場十周年記念特別企画公演「月下氷身～世阿弥〈融〉のヴァリエーション」の制作実務を務める。（袴能〈融 曲水之舞〉シテ：香川靖嗣、8.24. 袴能〈融 遊曲之舞〉シテ：塩津哲生、8.26. 袴能〈融 酌之舞〉シテ：野村四郎、8.26. 〈地歌「融」による新作ダンス「水銀の月」〉勅使川原三郎、歌・三弦：富田清邦、箏：二宮貴久輔、8.24、26、28.
- 8 大槻能楽堂の委嘱により能〈千手 重衣之舞〉の演出・再構成を担当する（9.24. 「大槻能楽堂自主公演～平家物語を観る～『戦のあわれ！』を語る（18）」において上演。シテ：塩津哲生・大槻文蔵）
- 9 「第 25 回富田清邦地歌箏曲演奏会」の制作助言を務める。（11.19. 紀尾井小ホールにおいて公演）

- 楽書林、2.1.
- 4 評論：「能の骨格と真実と～5月の能・狂言」、『能楽タイムズ』7月号、能楽書林、7.1.
- 5 評論：「ふたつの〈井筒〉～9月の能・狂言」、『能楽タイムズ』11月号、能楽書林、11.1.
- 6 評論：「初めの老いぞ戀しき～観世清和の〈關寺小町〉」、『能楽タイムズ』8月号、能楽書林、8.1.
- 7 評論：「最近の文蔵さんの舞台～〈定家〉を中心に」、『第17回大槻文蔵の會パンフレット』、10.1.
- 8 聞書：「富田清邦・藝を語る～〈冬の曲〉〈荒れ鼠〉〈宇治巡り〉」、『第25回富田清邦地歌箏曲演奏会パンフレット』、11.21.
- 9 解説：「文体の魅力と構成の力～新作能〈影媛〉補綴のことば」、『国立能楽堂特別企画公演・新作能〈影媛〉パンフレット』、7.29.
- 10 解説：「〈千手 重衣之舞〉について」、『大槻能楽堂自主公演パンフレット』、9.24.
- 11 解説：「本日の演目について～舞囃子〈養老 水波之傳〉、狂言〈井杭〉、能〈鸚鵡小町〉」、『第9回塩津哲生の会パンフレット』、10.1.
- 12 解説：「本日の演目について～舞囃子〈龍田 移神楽〉、能〈弱法師〉」、『第4回煌の会パンフレット』、11.5.
- 13 解説：「能〈大蛇〉、狂言〈茶壺〉、能〈邯鄲 置鼓・働〉」、『国立能楽堂』329号、pp.20-22、独立行政法人国立能楽堂、1.5.
- 14 解説：「狂言〈惣八〉、能〈竹雪〉」、『国立能楽堂』330号、pp.12-13、独立行政法人国立能楽堂、2.2.
- 15 解説：「狂言〈金津〉、能〈小鍛冶 黒頭別習〉」、『国立能楽堂』331号、pp.21-22、独立行政法人国立能楽堂、3.2.
- 16 解説：「狂言〈八句連歌〉、能〈高野物狂〉（元禄本による）」、『国立能楽堂』332号、pp.4-5、独立行政法人国立能楽堂、4.6.
- 17 解説：「狂言〈禁野〉、能〈杜若 袖神楽・素囃子〉」、『国立能楽堂』333号、pp.4-5、独立行政法人国立能楽堂、5.11.
- 18 解説：「狂言〈子盗人〉、能〈熊坂 長床几・青野ヶ原道行〉」、『国立能楽堂』334号、pp.8-9、独立行政法人国立能楽堂、6.1.
- 19 解説：「能〈寝覚〉、〈彭祖〉」、『国立能楽堂』337号、p.18、22、独立行政法人国立能楽堂、9.7.
- 20 解説：「狂言〈痿痺〉、能〈阿漕〉」、『国立能楽堂』338号、pp.10-11、独立行政法人国立能楽堂、10.5.
- 21 解説：「山田流箏曲〈小督の曲〉、狂言〈月見座頭〉、能〈松虫〉」、『国立能楽堂』339号、pp.4-6、独立行政法人国立能楽堂、11.2.
- 22 解説：「仕舞〈芭蕉キリ〉、狂言〈米市〉、能〈山姥 雪月花〉」、『国立能楽堂』340号、pp.17-18、独立行政法人国立能楽堂、12.7.
- 23 随筆：「家で楽しむ歌舞伎・私のこの1冊～折口信夫『かぶき讃』」、『演劇界』平成

- (代表 大高洋司) 共同研究員
- 3 国文学研究資料館 客員准教授
- 4 明星大学平成 23 年度特別研究費（共同研究助成費）「日本文化学科蔵日本古典籍のデータベース化に関する研究」研究分担者
- 5 （学会活動）日本近世文学会ホームページ委員

- C : 1 （講演）「高山彦九郎の旅——孝子良民をたずねて」、於九合行政センターふれあいホール（群馬県太田市）、6. 11
- 2 （口頭発表）「日本における代表的孝子の形成」（日本近世文学会、高麗大学、10. 1）

古田島洋介

- A : 1 共著：『漢文訓読入門』（共著者：湯城吉信）、147 ps.、明治書院、6. 25.
- B : 1 国際日本文化研究センター研究部客員教授、4. 1. ～
- 2 責任編集＋巻頭言：東アジア比較文化国際会議日本支部「東アジア比較文化研究」第 10 号、6. 1.
- 3 論文評者：「比較文学研究」第 96 号所載の趙怡「〈同化〉か〈異化〉か——中・日・英（仏）詩の相互翻訳と漢詩訓読」を論評、東大比較文学会「比較文学研究」合評会、10. 1.
- 4 研究発表：「英和辞典に見る漢文訓読の痕跡」、大東文化大学大学院外国語学研究所日本言語文化学専攻〔主催〕第 3 回「東西文化の融合」国際シンポジウム、大東文化会館ホール、11. 6.
- C : 1 論説：「日本語と英語の擦れ違い——駅の掲示で言葉について考える」、明星大学人文学部日本文化学科 HOME PAGE「ことばと文化のミニ講座」vol. 55、5. 17.（掲載開始）
- 2 出張講義：「英和辞典と漢文訓読——なぜ関係詞を〈ところの〉と訳すのか——」、都立練馬高等学校〈大学模擬講義〉、12. 12.
- D : 1 武術指導：学生による自主研究会「日中武道比較研究会」の顧問として、日本少林寺同盟会会長：川口賢氏を二回にわたって招聘し、少林連環拳 17 式を指導、また日野校星友祭における女子護身術の実演を指導、7. 12., 10. 23., 12. 6.

田村良平（筆名：村上滙）

- A : 1 研究：「能〈戀重荷〉の再構成・再演出について」、『明星大学研究紀要 人文学部・日本文化学科』19 号、pp. 19-29、明星大学人文学部日本文化学科、3. 31.
- 2 報告：「新演出〈千手 重衣之舞〉制作報告」、『能楽タイムズ』12 月号、能楽書林、12. 1.
- 3 評論：「喜多流〈檜垣〉ふたたび～12 月の能・狂言」、『能楽タイムズ』2 月号、能

- D : 1 (公開講座企画・司会) 講演者: オギュスタン・ベルク氏 (フランス国立社会科学高等研究院教授)、演題: 『風土と縁起』、7.9.
- 2 (教育活動) フランス人ゲストスピーカーによる特別授業企画、「比較文化基礎演習」、イザベル・ジロドゥー氏 (日仏会館研究員・法学者) テーマ: 「フランスと日本の法律」、12.13.
- 3 (教育活動) 翻訳研究会、『不思議の国のアリス』英語から日本語への抄訳指導、成果を『蝦蟇』に掲載、3.
- 4 (教育活動) 哲学研究会、星友祭パネル展示による井上円了についての発表を指導、「おばけと遊ぼう哲学堂」(井上円了研究)、10.

内海 敦子

- A : 1 「タラウド語使用地域の言語使用と言語意識—インドネシア国、北スラウェシ州における民族語使用実態—」明星大学研究紀要【人文学部・日本文化学科】第19号 3.31.
- B : 1 研究会発表: 「バンティック語の所有」インドネシア諸語の記述的研究 2011年度第一回研究会 アジア・アフリカ言語文化研究所 4.11.
- 2 研究会発表: 'Deixis and Spatial Reference in Bantik' International Workshop on Deixis and Spatial Expressions in Indonesia 国立民族博物館 7.22.
- 3 研究会発表: 「タラウド語の結果相・継続相を表す接頭辞 UA- が付加した動詞について」インドネシア諸言語の記述的研究 2011年度第二回研究会 アジア・アフリカ言語文化研究所 10.22.
- 4 学会発表: 「タラウド語における結果・継続アスペクトを表す接頭辞 UA- の分析—継続アスペクトとの相違—」日本言語学会第143回大会 大阪大学豊中キャンパス 11.26.
- D : 1 インドネシア国北スラウェシ州の少数民族言語調査 (バンティック語、タラウド語、トンサワン語調査): 8.1~8.18.
- 2 宮古島言語調査 (琉球語宮古島方言): 9.3~9.8.

勝又 基

- A : 1 (論文) 「藤井懶斎年譜稿 (四) — 元禄元年から元禄十年まで」, 「明星大学研究紀要 人文学部・日本文化学科」第19号、pp.41-53、明星大学日野校、3.31
- 2 (論文) 「偽キリシタン兄弟事件の流転 — 近世孝子説話の問題として」, 「金沢大学国語国文」36、pp.48-58、金沢大学国語国文学会、3.22
- B : 1 科研費補助金 (若手研究 (B)) 『『本朝孝子伝』研究 — 「孝」から見た近世前期文学の再検討』 (課題番号 207200063) 研究代表者
- 2 文学研究資料館研究プロジェクト「近世後期小説の様式的把握のための基礎研究

- Cheung Ching-yuen, John Krummel, 書評編集者：Curtis Riggsby.
- 4 (学会発表) «Traduction et lecture—de la domination de la philosophie allemande au progrès de la *tetsugaku* dans l'académisme du Japon moderne», 研究グループによるパネル *Traduction, tradition et modernité en Asie de l'Est* (研究協力者：Yeong-Houn Yi, Natalia Teplova) XXIVe Congrès de l'Association canadienne de traductologie, 科学研究費補助金・基盤研究Cの活動, University of New Brunswick / St. Thomas University (フレデリクトン、カナダ), 6. 3.
 - 5 (学会発表) “The Reception of Western Philosophy by Academia in Modern Japan and the Question of Translation”, *Japanese Philosophy As An Academic Discipline*, 香港中文大學哲学科, 12. 11.
 - 6 (研究会発表) 「後期西田哲学から考える一作られ作る身体としての顔」、現象学フェミニズム研究会、立教大学 (河野哲也研究室)、1. 8.
 - 7 (研究会発表) 「西田幾多郎の身体論に基づく一つの考察—作り作られる身体としての顔—」、科学研究費補助金・基盤研究B「日本近代哲学の特質と意義、およびその発信の可能性をめぐって」研究会会合、京都大学文学部、7. 24.
 - 8 (コメンテーター) 尹大善 (江原大) 「韓国におけるフランス哲学研究とその意味」のコメント、韓日人文科学国際シンポジウム『東アジアにおける西洋哲学受容の問題・韓日人文科学の対話の深化を求めて』、江原大学校・科研費共同研究B「日本近代哲学の特質と意義、およびその発信の可能性をめぐって」、研究分担者、江原大学校哲学科 (春川市、韓国)、5. 21.
 - 9 (コメンテーター) 新平湯杉林の七賢七夕清談「物から事へと故との問題」、オギュスタン・ベルク主催、参加者：中村良夫、木岡伸夫、フレデリック・ジラル、江口久美、イザベル・ジロドゥー、奥飛騨 薬師のゆ 本陣、7. 7.
 - 10 (コメンテーター) 京都フォーラム座談会「日本語で哲学する意味」、提題者：長谷川三千子「日本語の哲学へ」、参加者：金泰昌 (主催者)、田中久文、竹内整一、日本女子大学人間社会学部、8. 31.
 - 11 (ワークショップ・オーガナイザー・司会) 「フェミニスト現象学における身体論の展望—現象学的身体論の拡張として—」、提題者：齋藤瞳、宮原優、谷口純子、日本現象学会第33回研究大会、立命館大学 (衣笠キャンパス)、11. 5.
- C : 1 (講演) «La question philosophique sous l'angle de la traduction—la clairvoyance de Nishida Kitarô», Conférence *Esthétique et philosophie de la traduction*, organisée par Équipe de formation des critiques des traductions, Institut d'études de traduction et de rhétorique de l'Université Korea 高麗大学校 (ソウル), 5. 14.
- 2 (講演) «La philosophie de la traduction et la genèse de la philosophie japonaise: une lecture de Ladmiral», Conférence Internationale *Traduction et Philosophie: pour la philosophie de la traduction*, Université Hankuk des études étrangères 韓國外國語大學校 (ソウル), 5. 14.

- 4 (学術調査) 科学研究費補助金(若手研究(B))「幕末国学者の出版と文学活動—城戸千楯(京都書林恵比須屋市右衛門)の研究」(課題番号 23720120)における資料調査、於香川大学附属図書館・京都市歴史資料館・京都大学附属図書館、12.20.~12.22.

上原麻有子

- A : 1 (論文)「西田幾多郎の身体論に基づく一つの考察—作り作られる身体としての顔—」『明星大学研究紀要』[人文学部・日本文化学科] 第19号、明星大学日野校、pp.113-127, 3.31.
- 2 (論文) «Interpréter et traduire: l'invention d'une langue de la philosophie dans le Japon moderne», *La traduction: philosophie et tradition*, Christian Berner & Tatiana Milliaressi (éds.), Villeneuve d'Ascq, Presses Universitaires du Septentrion (フランス), pp.299-310, 11.
- 3 (論文) "The Concept of 'Self' in Philosophy of Nishida Kitarō", *Writing and Identity: Individual Claims, Group Perceptions, and Socio-Cultural Constructions of the Self in Asian Literature from Antiquity to Modernity*. Ulrike Middendorf, ed. Gossenberg: Ostasien Verlag (ドイツ), 12.
- 4 (書評・英語) Frédéric Girard, *Vocabulaire du bouddhisme japonais, Tome I- Tome II* [Hautes Études Orientales-Extrême-Orient no.45, Genève: Librairie DROZ, 2008, xiii + 1658pp.], *Japanese Journal of Religious Studies*, Volume 38-Number I-2011, Nanzan Institute for Religion & Culture, pp.228-230, Spring.
- 5 (書評・日本語) Erin McARTHUR, *Ethics Embodied-Rethinking Selfhood through Continental, Japanese, and Feminist Philosophies*, [Lexington Books, 2010, 134 p.], 『女性空間』28 日仏女性資料センター(日仏女性研究学会)、pp.106-108、6.
- 6 (翻訳・報告)「グランゼコール受験準備科在籍女生徒にもリセの寮の門戸開放を!」『女性情報ファイル』No.105、日仏女性資料センター(日仏女性研究学会)、pp.12-13、2.
- 7 (翻訳・報告)「立ち上がるフェミニストたち 2011年7月エヴリィの集会」『女性情報ファイル』No.107、日仏女性資料センター(日仏女性研究学会)、p.12、9.
- 8 (翻訳・報告)「マドモワゼル、余計な区分」反対キャンペーン」『女性情報ファイル』No.108、日仏女性資料センター(日仏女性研究学会)、p.9、12.
- B : 1 科学研究費補助金・基盤研究B(22320005)代表者: 京都大学 藤田正勝教授、研究課題「日本近代哲学の特質と意義、およびその発信の可能性をめぐって」、研究分担者(研究分担課題: 哲学と翻訳の問題)
- 2 科学研究費補助金・基盤研究C(23520040)、研究課題「近代日本哲学の紹介書出版に向けた日仏共同研究」、研究代表者
- 3 国際哲学雑誌創刊企画・編集長、*The Journal of Japanese Philosophy*, Published by State University of New York Press, 共同企画者・編集者: Lam Wing-keung,

研究成果及び活動一覧（2011. 1. 1～12. 31）〔五十音順〕

- A：著書、論文、書評など
 B：学会での口頭発表その他の活動
 C：講演、論説など
 D：学術的調査

青山英正

- A：1 （論文）「宮沢賢治「注文の多い料理店」論——獵師・犬・団子への着目」、『明星大学研究紀要 人文学部日本文化学科』第19号、明星大学人文学部日本文化学科、pp.101-112、3.31.
 2 （論文）「反転する〈健闘〉——太宰治「このごろ」論」、山内祥史〔編〕『太宰治研究』第19輯、和泉書院、pp.196-206、6.19.
 3 （論文）「近世韻文としての新体詩——『新体詩抄』と『新体詩歌』をめぐって」、『日本文学』第60巻10号、日本文学協会、pp.40-51、10.10.
- B：1 科学研究費補助金（若手研究（B））「幕末国学者の出版と文学活動——城戸千楯（京都書林恵比須屋市右衛門）の研究」（課題番号23720120）研究代表者
 2 （学会活動）日本文学協会委員
 3 （共同研究）国文学研究資料館国際連携研究プロジェクト「オランダ国ライデンを中心とするシーボルト関係日本書籍資料の調査研究」（研究代表者：鈴木淳）、共同研究員
 4 （研究活動）第2回幕末明治研究会（共同発起人：前田雅之・上原麻有子）（発表者：鈴木俊幸・神林尚子）、主催・司会、1.22.
 5 （口頭発表）「蘆庵文庫蔵『宗順日記』安永6年12月——翻刻と注釈」、近世和歌研究会、於国文学研究資料館、2.18.
 6 （研究活動）第3回幕末明治研究会（共同発起人：前田雅之・上原麻有子）（発表者：新田一郎・大橋敦）、主催、6.18.
 7 （研究活動）第4回幕末明治研究会（共同発起人：前田雅之・上原麻有子）（発表者：塩谷菊美・丹羽みさと）、主催、12.3.
 8 （口頭発表）「蘆庵文庫蔵『宗順日記』安永7年閏7月——翻刻と注釈」、近世和歌研究会、於国文学研究資料館、12.16.
- D：1 （学術調査）国文学研究資料館国際連携研究プロジェクト「オランダ国ライデンを中心とするシーボルト関係日本書籍資料の調査研究」（研究代表者：鈴木淳）における資料調査、於ライデン大学図書館、2.22.～3.2.
 2 （学術調査）科学研究費補助金（若手研究（B））「幕末国学者の出版と文学活動——城戸千楯（京都書林恵比須屋市右衛門）の研究」（課題番号23720120）における資料調査、於カリフォルニア大学バークレー校図書館、8.29.～9.3.
 3 （教育活動）「近現代文学研究会」における学園祭展示、明星大学日野校学園祭（星友祭）、10.28.～10.30.

CONTENTS

KOTAJIMA Yosuke	The <i>Kaeriten</i> Marks to Three- or Four-Character Phrases Appendix: On the <i>Kundoku</i> Reading of the <i>Analects of Confucius</i> , Book 17, no. 20 (or 21).....	3
MAEDA Masayuki	Monks' Koiuta, The Japanese Traditional Lyrics on Love, in Chokusenshuuu, Vol. 3.....	15
KATSUMATA Motoi	Notes of a chronological record of FUJII Ransai (5) — From 1698 to 1709	41
AOYAMA Hidemasa	38 Letters to ITO Satsusatsu by KIDO Chitate: Reprint and Notes.....	57
MITSUHASHI Tadashi	Appointment of Empress in Heian Period; An Experimental Compilation of Heian Noble's Diary	99
UEHARA Mayuko	Document pour la recherche sur la philosophie de la traduction — le discours de la traduction chez les philosophes japonais —	159
TAMURA Ryohei	Restructuring and redirecting, the Noh performance SENJU-KINUGHINU-NO-MAI	171
YAMAMOTO Yoko	The Catchlight of Utagawa Kuniyoshi's Ukiyoe prints	179
HATTORI Hiroshi	Wohin kehrt Peter Handke mit seiner Literatur? Eine Studie über "Langsame Heimkehr" als Wendepunkt der Literatur P. Handkes	296(15)
KIMOTO Mari	Le post-hégélianisme chez Lévinas et Kojève	282(29)
MARUYAMA Masayoshi	Camille Doncieux, muse du jeune Claude Monet	270(41)
UTSUMI Astuko	The System of Tense and Aspect in the Talaud language: Focusing on the Functions of the Prefix <i>UA-</i>	250(61)
MIMURA Tatsuyuki	Accents in Sandnes Norwegian: theory of phonological description of accent and its application	234(77)

目 次

第二十回記念号に寄せて……………	古田島洋介	1
三字句・四字句への返り点		
——〈附説〉『論語』陽貨「三年之愛」文の訓読について—— ……	古田島洋介	3
僧侶の恋歌（3） 勅撰集編（下・1）題詠のもたらしたもの（一）		
—— 顕密僧と野僧（歌僧）の詠作から —— ……………	前田 雅之	15
藤井懶斎年譜稿（五） —— 元禄十一から宝永六年まで……………	勝 又 基	41
伊東颯々宛城戸千楯書簡三十八通 —— 翻刻と解題 —— ……………	青山 英正	57
摂関期の立后関係記事		
—— 『小右記』を中心とする古記録部類作成へ向けて —— ………	三 橋 正	99
翻訳哲学研究のための資料 —— 日本の哲学者による翻訳論 —— ……	上原麻有子	159
能〈千手 重衣之舞〉の演出・再構成……………	田村 良平	171
歌川国芳における瞳の白点表現		
—— 『東西海陸紀行』摂取以前を考える —— ……………	山本 陽子	179
第1回～第19回 目次 ……………		195
ペーター・ハントケは何処に向かって帰郷するのか？		
—— ハントケ文学の転換点としての		
『ゆるやかな帰郷』に関する考察 —— ……………	服 部 裕	296(15)
レヴィナスにおけるポスト・ヘーゲルの思考		
—— コジェーヴとの対照を手がかりに —— ……………	木元 麻里	282(29)
カミーユ —— 若きクロード・モネを支えた女性 —— ……………	丸山 正義	270(41)
タラウド語のアスペクト体系と結果相・		
継続相を表す接頭辞 UA- が付加した動詞 ……………	内海 敦子	250(61)
ノルウェー語 Sandnes（サンネス）方言のアクセント		
—— アクセント抽出の理論と実践 —— ……………	三村 竜之	234(77)
研究成果及び活動一覧（平成23年1月～12月）		
